市原市加茂遺跡D地点

2002

旭　硝　子　株　式　会　社
財団法人　市原市文化財センター

市原市加茂遺跡D地点

2002

旭　硝　子　株　式　会　社
財団法人　市原市文化財センター

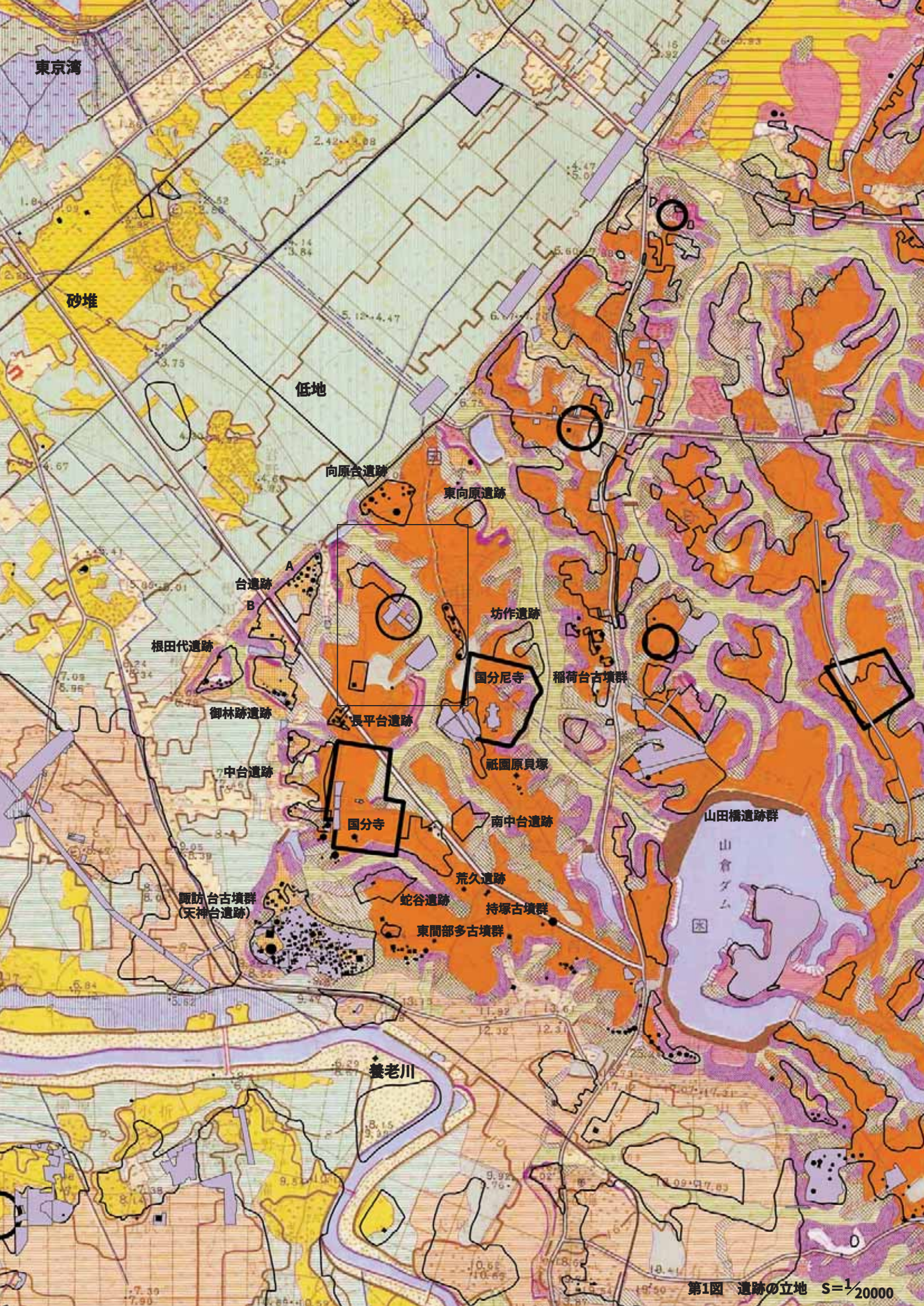
須恵器模倣精製土師器　　甑(左:14号(参考) 右:210号) 甕(左:407号 右:34号)
高杯(左から52・210・4号、他は加茂A110号(参考))

208号貯蔵穴

201号遺物出土状況

405号遺物出土状況

211号炭化材・遺物検出状況



第1図　遺跡の立地　S＝1/20000

序　　文

房総半島の中央にあり、東京湾を西に望む市原市は、遠く文字の記録のおよばない時代から、生活環境の豊かな場所でした。そのあかしに、千葉県下でも有数の貝塚遺跡である西広貝塚・山倉貝塚・祇園原貝塚、古代上総国の中心であったことをあらわす国分寺・国分尼寺などに代表される遺跡が多数確認されているなど、市内には先人たちの生活の痕跡が豊富に認められます。

千葉県は、首都圏に接することから人口の増加が著しく、宅地開発や道路網の整備が進められていますが、それに伴う発掘調査の数も少なくありません。文化財の宝庫である当市においても、このような開発行為とそれに伴う調査が増加しており、今日ほど地域開発と埋蔵文化財保護との調和が強く求められている時はないと言えます。

本書は加茂遺跡Ｄ地点の調査成果を収録したものです。今回の調査では、谷水田として利用されたと思われる谷をのぞむ良好な立地に、弥生時代と古墳時代の集落の広がりが確認されました。また、縄文時代のはじめに使われたやじりのような石器や、古代の道路なども発見されており、興味深い歴史的資料を得ることができました。

このたび刊行されるこれらの資料が、長く保存されること、そして、研究者の資料としてだけではなく、博物館・図書館などの社会教育施設を通して、広く私たち市民の文化財保護思想の育成に役立ち、生涯学習の一助としてご利用いただけることを祈念しております。

最後になりましたが、今回の発掘調査にあたり、ご指導とご協力を賜りました、株式会社旭硝子、周辺にお住まいの方々、国分寺台西小学校、千葉県教育委員会、市原市教育委員会をはじめとする関係者のみなさまに対し、深く感謝申し上げます。

2002年９月

財団法人　市原市文化財センター
理 事 長　　鵜　澤　綱　夫

例　　言

1．本書は、千葉県市原市西国分寺台２丁目７番地17号他に所在する加茂遺跡Ｄ地点の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査から報告書作成に至る業務は、旭硝子株式会社の委託を受け、千葉県教育委員会および市原市教育委員会の指導のもとに、財団法人市原市文化財センターが実施した。

3．発掘調査および整理作業は以下のとおり実施した。

確認調査	担当	小橋健司	調査期間	平成11年７月６日～平成11年７月26日
			調査面積	7220.96㎡のうち722㎡
本調査	担当	同上	調査期間	平成12年４月17日～平成13年２月16日
			調査面積	7220.96㎡
整理作業	担当	同上	整理期間	平成13年２月19日～平成14年９月20日

4．本書の執筆・編集は小橋健司が担当した。石器について宇井義典氏（印旛郡市文化財センター）、中世遺物について櫻井敦史、自然遺物について加納哲哉氏（国学院大学）・黒住耐二氏（千葉県立中央博物館）・鶴岡英一、石材について辻本崇夫氏・五十嵐俊雄氏・石岡智武氏（パリノ・サーヴェイ株式会社）、テフラについて上本進二氏（神奈川県災害史研究所）にご教示、ご協力いただいた。厚くお礼申し上げます。上本氏には原稿を賜り、それを第２章第7節として掲載した。また、遺構検出炭化材の樹種同定を株式会社パレオ・ラボに委託し、その結果を同第8節に掲載した。

5．本報告の遺物観察表は添付のＣＤ－ＲＯＭに収録されている。ＣＤ－ＲＯＭからの閲覧・出力ができる環境にない方は市原市文化財センターまでご相談下さい（連絡先は巻末抄録にあります）。

6．本書に収録した出土遺物および調査記録は、すべて市原市埋蔵文化財調査センター（千葉県市原市能満1489）で収蔵・保管している。

7．調査の管理コードは「セ297」である。

8．発掘調査および出土品整理の参加者は下記のとおりである（五十音順）。

確認調査　石井勇　石井紀子　小沼栄子　加藤澄子　金沢弘子　川原教子　早乙女洋子
篠崎あさ子　相馬たま　高浦絹子　高浦静子　高山きみえ　高山智恵子　高山久子
田熊とも江　立石美代子　田中登志江　松本喜美江　松本松代　宮原洋子　森山ひろみ
山本カネ　横山俊男　横山利恵子　（小田部班）

本調査　安藤富美枝　飯島智加子　石井美津子　井上祥子　大森恵美子　蔭山みつ子
川嶋きみ江　栗林ミネ　越村アサ子　斉藤光子　白井みち子　杉田芳江　鈴木時郎
鈴木友則　高木敏子　田中一子　田中時江　中田きく江　中田美輪子　花見久子
森範子　矢代幸子　山下ヤエ子　山本光江　（小勝山班）
佐藤淳　重田圭子　田所究　（アルバイト）

整理作業　大塚和美　大西譲子　勝野真砂子　佐藤淳　佐藤仁美　福田八生　松永寿子　松本松代
松本美佐子　向山貞代　（整理作業員）
池内順子　林久美子　半澤敏子　宮澤直美　山崎朋子　山中敦子　（トレーサー）

凡　　例

1．遺構実測図は1/40・1/60・1/80を基本とした。
2．遺構実測図中の、カマド（粘土）・炉・焼土・炭化物・柱痕・硬化面等は下記のスクリーントーン、セクションポイント・遺物出土地点はドットで示した（土器●、須恵器・陶器■、その他★）。また、竪穴住居跡内の床面硬化部分はT字形の一点破線で囲んで範囲を示した。
3．遺構実測図中の方位は国土座標の軸に基づくものである。磁北はこれより西に6°30′である。図版上が北であるが、方位記号を付したものはその限りでない。本文中の竪穴住居跡の主軸方位は座標北を基準に、柱穴・炉跡・掘形の長軸を勘案して、何度振れるかを示している。
4．遺物実測図は実寸（小型の遺物・鉄製品等）・1/2（土製品等）・1/4（土器・支脚）、拓影図は1/3を基本とした。実測図1/4・拓影図1/3の他は図中のスケールに注記した。
5．遺物観察表における寸法のうち、推定復元値については数字の後に？を付け、欠損部の現存値は（○○）のように括弧でくくり示した。「遺存」は、実測図に表れない水平方向の遺存状態を大まかな百分率で表現したものである。よって、例えば上・下半がまったく遺存していなくても、残り部分が一周している場合は100としている。また、本文・遺物観察表中では「甕形土器」と記すところを「甕」というように「形土器」を省略している。
6．色調は、土層注記・遺物観察表とも『新版　標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄）によって記した。10YR○/○の場合、10YRを略し、○/○とした。
7．遺構平面図および土層断面図中の「粘土」は、カマド構築土であるところの、砂を混ぜた粘土を省略して表記したものであり、粘土の単純層を意味しない。
8．本書では発掘調査時の遺構番号を基本的にそのまま利用し、欠番もそのままにしてある。1～100番台がD1区、200番台がD2区南側3分の2の範囲、300番台がD2区北側3分の1の範囲、400番台がD3区の遺構である。
9．貝の記載は、吉良哲明『原色日本貝類図鑑　増補改訂版』保育社1985によった。
10．第1図には、国土地理院発行の1/25000土地条件図「姉崎」、第2図には、1/500国分寺台土地区画整理事業現況図を用いた。

スクリーントーン例

遺構

遺物

本 文 目 次

序文

例言

凡例

第１章　はじめに …… 1

　第１節　調査に至る経緯 …… 1

　第２節　調査方法 …… 1

　第３節　遺跡周辺の地理的環境と歴史的環境 …… 2

第２章　検出された遺構と遺物 …… 6

　第１節　遺構外出土・混入遺物 …… 6

　第２節　縄文時代 …… 14

　第３節　弥生時代 …… 18

　第４節　古墳時代 …… 36

　第５節　掘立柱建物跡・奈良・平安時代・中世 …… 164

　第６節　407号遺構検出貝層 …… 186

　第７節　加茂遺跡 D 地点におけるテフラの分析結果（上本進二　神奈川県災害史研究所） … 188

　第８節　竪穴住居跡検出炭化材の樹種同定（植田弥生　パレオ・ラボ） …… 192

第３章　まとめ …… 199

抄録

挿 図 目 次

第１図　遺跡の立地（Ｓ＝１/20000） …… 巻頭

第２図　調査区の周辺（Ｓ＝１/3000） …… 3

第３図　調査区全体図 …… 7

第４図　遺構外出土石器・地山土層・グリッド配置 … 9

第５図　遺構外出土・混入縄文土器１/２ …… 10

第６図　遺構外出土・混入縄文土器２/２ …… 11

第７図　遺構外出土・混入弥生土器 …… 12

第８図　遺構外出土・混入遺物 …… 13

第９図　60号・247号遺構および出土遺物 …… 15

第10図　417号・418号・419号遺構および出土遺物 …… 16

第11図　402号・412号遺構　焼土・遺物検出状況および出土遺物１/２ …… 17

第12図　402号遺構出土遺物２/２ …… 18

第13図　211号遺構 …… 19

第14図　211号遺構　焼土・炭化材・遺物検出状況 …… 20

第15図　211号遺構 遺物検出状況および出土遺物1/3 … 21

第16図　211号遺構 遺物検出状況および出土遺物2/3 … 22

第17図　211号遺構出土遺物３/３ …… 23

第18図　206号遺構　焼土・炭化材・遺物出土状況 …… 25

第19図　206号遺構出土遺物 …… 26

第20図　408号遺構 …… 28

第21図　408号遺構　焼土・炭化材・遺物検出状況および出土遺物１/２ …… 29

第22図　408号遺構出土遺物２/２ …… 30

第23図　17号・55号・56号遺構および出土遺物 …… 31

第24図　47号遺構　焼土・炭化材・遺物検出状況および出土遺物１/２ …… 32

第25図　47号遺構出土遺物２/２ …… 33

第26図　20号遺構および出土遺物 …… 34

第27図　57号遺構および出土遺物 …… 35

第28図　４号遺構 …… 38

第29図　４号遺構　カマド・貯蔵穴・遺物検出状況 … 39

第30図　４号遺構　焼土・遺物検出状況および出土遺物１/３ …… 40

第31図　４号遺構出土遺物２/３ …… 41

第32図　４号遺構出土遺物３/３ …… 42

第33図　９号遺構および出土遺物 …… 44

第34図　６号遺構 …… 45

第35図　６号遺構　焼土・遺物検出状況および出土遺物１/４ …… 46

第36図　６号遺構出土遺物２/４ …… 47

第37図　６号遺構出土遺物３/４ …… 48

第38図　６号遺構出土遺物４/４ …… 49

第39図　22号遺構 …… 50

第40図　13号遺構 …… 51

第41図　13号遺構上層硬化面・遺物検出状況

および出土遺物１/４…… 52
第42図 13号遺構上層硬化面　遺物出土状況
および出土遺物２/４…… 53
第43図 13号遺構上層硬化面出土遺物３/４…… 54
第44図 13号遺構上層硬化面出土遺物４/４…… 55
第45図 13号遺構　下層遺物出土状況および
出土遺物１/４…… 56
第46図 13号遺構　下層遺物出土状況および
出土遺物２/４…… 57
第47図 13号遺構下層出土遺物３/４…… 58
第48図 13号遺構下層出土遺物４/４…… 59
第49図 14号遺構 …… 60
第50図 14号遺構　焼土・遺物検出状況 …… 62
第51図 14号遺構　遺物出土状況および
出土遺物１/３…… 63
第52図 14号遺構出土遺物２/３…… 64
第53図 14号遺構出土遺物３/３…… 65
第54図 202号遺構…… 66
第55図 202号遺構　カマド・遺物検出状況および
出土遺物１/５…… 68
第56図 202号遺構下層遺構および遺物出土状況…… 69
第57図 202号遺構出土遺物２/５ …… 70
第58図 202号遺構出土遺物３/５ …… 71
第59図 202号遺構出土遺物４/５ …… 72
第60図 202号遺構出土遺物５/５ …… 73
第61図 210号遺構　焼土・遺物検出状況…… 75
第62図 210号遺構 カマド周辺および出土遺物１/３… 76
第63図 210号遺構出土遺物２/３ …… 77
第64図 210号遺構出土遺物３/３ …… 78
第65図 401号遺構　焼土・遺物検出状況…… 79
第66図 401号遺構　遺物検出状況…… 80
第67図 401号遺構出土遺物…… 81
第68図 51号遺構　焼土・遺物検出状況 …… 83
第69図 51号遺構 遺物出土状況および出土遺物1/3 … 84
第70図 51号遺構出土遺物２/３…… 85
第71図 51号遺構出土遺物３/３…… 86
第72図 301号遺構・カマド周辺…… 87
第73図 301号遺構　焼土・遺物検出状況および
出土遺物 …… 88
第74図 52号遺構　焼土・遺物検出状況および
出土遺物 …… 90
第75図 34号遺構および出土遺物１/３…… 91
第76図 34号遺構　焼土・遺物検出状況および
出土遺物２/３…… 92
第77図 34号遺構出土遺物３/３…… 93
第78図 44号遺構 …… 94
第79図 44号遺構　焼土・遺物検出状況および
出土遺物１/３…… 95
第80図 44号遺構出土遺物２/３…… 96
第81図 44号遺構出土遺物３/３…… 97
第82図 407号遺構　遺物出土状況…… 98
第83図 407号遺構 カマド周辺および出土遺物１/５… 99
第84図 407号遺構　貝層・焼土・遺物（土製品等）
検出状況 …… 101
第85図 407号遺構　土器（杯・高杯・壺・赤彩甕）
検出状況 …… 102
第86図 407号遺構　土器（甕・甑）検出状況…… 103
第87図 407号遺構　カマド付近遺物出土状況および
出土遺物２/５…… 104
第88図 407号遺構出土遺物３/５ …… 105
第89図 407号遺構出土遺物４/５…… 106
第90図 407号遺構出土遺物５/５…… 107
第91図 200号遺構 …… 108
第92図 200号遺構　カマド周辺および遺物出土状況 109
第93図 200号遺構出土遺物 …… 110
第94図 208号遺構 …… 112
第95図 208号遺構　カマド・貯蔵穴 …… 113
第96図 208号遺構　焼土・遺物検出状況および
出土遺物１/２ …… 114
第97図 208号遺構出土遺物２/２…… 115
第98図 203号遺構　焼土・遺物検出状況および
出土遺物…… 116
第99図 46号遺構…… 117
第100図 46号遺構　カマド周辺検出状況…… 118
第101図 46号遺構 遺物出土状況および出土遺物1/2… 119
第102図 46号遺構出土遺物２/２ …… 120
第103図 411号・415号遺構　検出状況および出土遺物 121
第104図 209号遺構 …… 123
第105図 209号遺構　カマド周辺 …… 124
第106図 209号遺構　遺物出土状況 …… 125
第107図 209号遺構　焼土・炭化材・遺物検出状況
および出土遺物１/３ …… 126
第108図 209号遺構出土遺物２/３…… 127
第109図 209号遺構出土遺物３/３…… 128
第110図 406号遺構 …… 129
第111図 406号遺構　カマド周辺および出土遺物 …… 130
第112図 404号遺構および出土遺物 …… 132
第113図 404号遺構　カマド周辺 …… 133
第114図 204号遺構 …… 135
第115図 204号遺構 カマド周辺および出土遺物１/3… 136
第116図 204号遺構　焼土・遺物検出状況および
出土遺物２/３ …… 137
第117図 204号遺構出土遺物３/３…… 138
第118図 27号遺構…… 139
第119図 27号遺構　焼土・遺物検出状況および
出土遺物１/２ …… 140
第120図 27号遺構出土遺物２/２ …… 141
第121図 32号遺構　焼土・遺物出土状況および
出土遺物…… 142
第122図 405号遺構 …… 144
第123図 405号遺構　焼土・遺物検出状況 …… 145
第124図 405号遺構　カマド周辺遺物出土状況および
出土遺物１/２ …… 146
第125図 405号遺構出土遺物２/２…… 147
第126図 207号遺構　焼土・遺物出土状況 …… 149
第127図 207号遺構　カマド周辺遺物出土状況 …… 150
第128図 207号遺構出土遺物１/２…… 151
第129図 207号遺構出土遺物２/２…… 152
第130図 403号遺構　カマド周辺遺物出土状況 …… 153
第131図 403号遺構出土遺物 …… 154
第132図 21号遺構および出土遺物…… 155
第133図 201号遺構 …… 156
第134図 201号遺構およびカマド周辺 …… 157
第135図 201号遺構床面下層および遺物・焼土・
炭化物検出状況…… 158
第136図 201号遺構　遺物出土状況 …… 159
第137図 201号遺構出土遺物１/２…… 160
第138図 201号遺構出土遺物２/２…… 161
第139図 35号・58号遺構および出土遺物…… 162
第140図 48号遺構および焼土・遺物検出状況…… 163

第141図 48号遺構出土遺物 …… 164
第142図 213号・242号遺構および出土遺物 …… 166
第143図 241号遺構および出土遺物…… 167
第144図 303号・305号・306号・307号遺構および出土遺物 …… 169
第145図 304号遺構…… 170
第146図 53号・54号・59号遺構 …… 172
第147図 53号・54号遺構 …… 173
第148図 59号遺構および53号・54号・59号出土遺物 … 174
第149図 61号・64号・65号遺構および出土遺物 …… 176
第150図 205号遺構および出土遺物１/２ …… 178
第151図 205号遺構 遺物出土状況および出土遺物2/2… 179
第152図 11号・12号・41号・50号遺構および41号・50号出土遺物 …… 181
第153図 11号・12号遺構および出土遺物 …… 182
第154図 302号遺構および周辺遺構…… 184
第155図 302号遺構および周辺遺構出土遺物…… 185
第156図 407号遺構貝層　殻高・殻長度数分布…… 187

表 目 次

第１表　検出遺構一覧 …… 5
第２表　407号検出貝層　貝種組成…… 186
第３表　テフラ分析結果１/２…… 189
第４表　テフラ分析結果２/２…… 191
第５表　竪穴住居跡出土炭化材樹種一覧 …… 195
第６表　竪穴住居跡出土炭化材の樹種および時期の比較 …… 197

図版目次

図版１　遺跡の周辺（1961年）
図版２　Ｄ１区西側／東側
図版３　Ｄ１区から南東を望む(右上のビルは市役所)／11・12号道路跡
図版４　４・６・９・13・22号遺構／53・54・59号周辺
図版５　Ｄ２区南側／Ｄ２区南側
図版６　213号周辺／Ｄ２区北側
図版７　Ｄ２区北側／Ｄ３区
図版８　404号周辺/408号周辺
図版９　60・247・417・418・419・402・412号遺構
図版10　211・206・207号遺構
図版11　408・409・410・17・55・47号遺構
図版12　47・20・57号遺構
図版13　４号遺構
図版14　４・６・９号遺構
図版15　９・13号遺構・Ｄ１区調査風景
図版16　14・202号遺構
図版17　202・210号遺構
図版18　401・51号遺構
図版19　301・52・34号遺構
図版20　34・44号遺構
図版21　44・407号遺構
図版22　407・200号遺構
図版23　200・201・208号遺構
図版24　208・203・56・46号遺構
図版25　46・411・415・209号遺構
図版26　209・406号遺構
図版27　404・204号遺構
図版28　204・27号遺構
図版29　32・405号遺構
図版30　405・207号遺構
図版31　207・403号遺構
図版32　403・21・201号遺構
図版33　48・213・241号遺構
図版34　303・304・305・306・307・53・54号遺構
図版35　59・61・205号遺構
図版36　205・41・11・12号遺構
図版37　11・12・302・３・５・308号遺構
図版38　211・206・408号遺構出土遺物
図版39　47・20・４号遺構出土遺物
図版40　４・９・６号遺構出土遺物
図版41　６・13号遺構出土遺物
図版42　13・14号遺構出土遺物
図版43　14・202号遺構出土遺物
図版44　210号遺構出土遺物
図版45　210・401・51号遺構出土遺物
図版46　51・52・301・34・44号遺構出土遺物
図版47　44・407号遺構出土遺物
図版48　407号遺構出土遺物
図版49　407・200・208・46号遺構出土遺物
図版50　46・411・209号遺構出土遺物
図版51　209・406・404号遺構出土遺物
図版52　204・27・405号遺構出土遺物
図版53　405・207号遺構出土遺物
図版54　207・21・403号遺構出土遺物
図版55　201・48・64・205号遺構出土遺物
図版56　遺構外出土・混入縄文土器
図版57　遺構外出土・混入弥生土器／60・418・419号遺構出土遺物
図版58　402・412号遺構出土遺物
図版59　211号遺構出土遺物
図版60　206・408号遺構出土遺物
図版61　408・57号遺構出土遺物
図版62　４号遺構出土遺物
図版63　４・６号遺構出土遺物
図版64　６号遺構出土遺物
図版65　６・13号遺構出土遺物
図版66　13号遺構出土遺物
図版67　13号遺構出土遺物
図版68　14・202号遺構出土遺物
図版69　202号遺構出土遺物
図版70　202・210号遺構出土遺物
図版71　210・47・56・55・40号遺構出土遺物
図版72　401・51号遺構出土遺物

図版73　51・301・52号遺構出土遺物
図版74　34・44号遺構出土遺物
図版75　44・407号遺構出土遺物
図版76　407号遺構出土遺物
図版77　407・200号遺構出土遺物
図版78　208・203号遺構出土遺物
図版79　46号遺構出土遺物
図版80　411・415・209号遺構出土遺物
図版81　209・406・404・32号遺構出土遺物
図版82　204・27号遺構出土遺物
図版83　27・207号遺構出土遺物
図版84　405・403号遺構出土遺物
図版85　21・201・35・58号遺構出土遺物
図版86　201・48号遺構出土遺物
図版87　22・213・241・53・54・59・64・41・
　　11・12号遺構出土遺物
図版88　11・12・205・302号遺構出土遺物
図版89　土玉
図版90　土製品
図版91　支脚
図版92　支脚・211号遺構出土遺物
図版93　支脚
図版94　石製品
図版95　14号遺構出土紡錘車／滑石製品
図版96　202号遺構出土紡錘車／
　　遺構外出土・混入瓦・須恵器
図版97　炭化種子・銭貨・大型砥石・石製品
図版98　軽石製砥石・砥石
図版99　鉄製品・鉄滓
図版100　加茂遺跡Ｄ地点の竪穴住居跡出土炭化材樹種
図版101　加茂遺跡Ｄ地点の竪穴住居跡出土炭化材樹種
図版102　加茂遺跡Ｄ地点の竪穴住居跡出土炭化材樹種
図版103　加茂遺跡Ｄ地点の竪穴住居跡出土炭化材樹種
図版104　加茂遺跡Ｄ地点の竪穴住居跡出土炭化材樹種
図版105　加茂遺跡Ｄ地点の竪穴住居跡出土炭化材樹種
　　・407号遺構検出貝類

第1章　は　じ　め　に

第１節　調査に至る経緯

今回の発掘調査は、旭硝子株式会社による宅地開発に先行して実施されたものである。国分寺台地区はすでに土地区画整理事業に伴って発掘調査が行われているが、今回の範囲は、当時、社宅として利用されていたために、あらためて調査対象となったものである。

まず、宅地開発の工事に先立ち、旭硝子株式会社から事業地域内における埋蔵文化財の有無およびその取り扱いについての照会が、千葉県教育委員会教育長および市原市教育委員会教育長宛に提出された。これを受けて、千葉県教育庁文化課と市原市教育委員会ふるさと文化課との三者により慎重に協議を重ねた結果、遺構の有無を確認するための確認調査を実施することとなった。

確認調査は、財団法人市原市文化財センターが実施することになり、旭硝子株式会社との間に、平成11年７月１日委託契約が締結され、7220.96㎡の10%、722㎡を範囲として平成11年７月６日から同26日にわたって実施された（第４図)。確認調査の結果、検出された遺構・遺物の取り扱いについて千葉県教育庁文化課の回答を受け、本調査を実施することとなったため、旭硝子株式会社との間に、平成12年３月１日に委託契約がふたたび締結され、Ｄ１区（4442.96㎡）を対象に、平成12年４月17日から調査を開始した。途中、契約変更が行われ、残るＤ２・Ｄ３区も含め、継続して調査することとなり、平成13年２月16日にかけて、全面を対象とした本調査を行った。これらの整理作業および報告書刊行は平成12年度・平成13年度・平成14年度に実施した。

第２節　調査方法

確認調査　第４図下段のとおり、現況区画を基準にトレンチを設定して行った。ソフトローム上面近くまでの表土掘削はバックホーによって行い、そこから調査補助員により人力で遺構検出を行った。確認調査の結果は、すでに『市原市文化財センター年報　平成11年度』（小橋2002）として概要を報告している。

なお、確認調査において一部誤認があり、『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報　－平成11年度－』（千葉県教育庁生涯学習部文化課2001）などの記載と齟齬が生じたので、ここで訂正しておきたい。それは、旧石器時代に属する可能性があると見ていたソフトローム中の礫片・土器片についてである。確認調査中に、第４図中●印のトレンチにおいて、ソフトローム中にごく少量の土器片を伴って礫片の集中が見られたことから、トレンチを拡張するかたちで調査を行った。ところが、本調査後に整理作業に入って、遺物洗浄を進めると、土器片は調査区に少なからず見られた加曽利Ｅ式のものと確認できたのである。

調査時点では、ソフトローム中からの検出ということで、土器片・礫片ともに縄文時代草創期、あるいは旧石器時代にさかのぼるものと見ていたが、土器型式からするとそれはあり得ない。また、礫片についてもＤ２区の包含層に多く見られた焼割礫と同類と考えられる。これらからすると、包含層の遺物がソフトロームに圧し込まれたと考えるのが妥当と思われる。

Ｄ１区北部は特に覆土・地山ともに硬く締まっているところが多かったので、大型重機（社宅造成時か）の重みによって遺物の垂直移動が起こった可能性が充分に考えられる。つまり、遺物は縄文中

期のものだが、現代の撹乱作用によって地山へと圧し込まれたものと思われるのである。よって、今回調査区に旧石器時代遺物集中としたものは存在しなかった、と訂正する。

本調査　確認調査の結果を受けて、事業範囲を全面的に調査することとなった。調査区は、最も広い北側の区画をＤ１区、その南隣の細長い区画をＤ２区、Ｄ２区の北東にある小区画をＤ３区と呼称し、全体に対して、20m四方ごとのグリッドを設定した（グリッド名は第４図下段のとおり）。表土掘削は同じくバックホーで行った。遺構検出面は立川ローム層最上層、いわゆるソフトローム上面で、おおむね標高22m前後であった（第４図中段）。

住宅地に所在するために排土場所が別に確保できなかったので、調査範囲内でスイッチバックを行った。Ｄ１区→Ｄ２区南部３分の１→Ｄ２区北部３分の２→Ｄ３区の順に表土掘削を行い、調査を実施した。このため着手順と遺構番号はほぼ対応している。

遺構の調査は、竪穴住居跡については、十文字に土層観察用ベルトを掘り残して、また、ピット・溝跡等は半裁、あるいは適宜ベルトを残し、基本的に、それぞれ堆積状況を記録してから行った。遺構の実測図は、基準杭から拡張したメッシュによる１/20の図を基本とし、平板による１/40で補完した。また、写真による記録は随時行った。遺物の取り上げは、必要に応じて、平面図に出土状況・位置を記録して行った。

第３節　遺跡周辺の地理的環境と歴史的環境

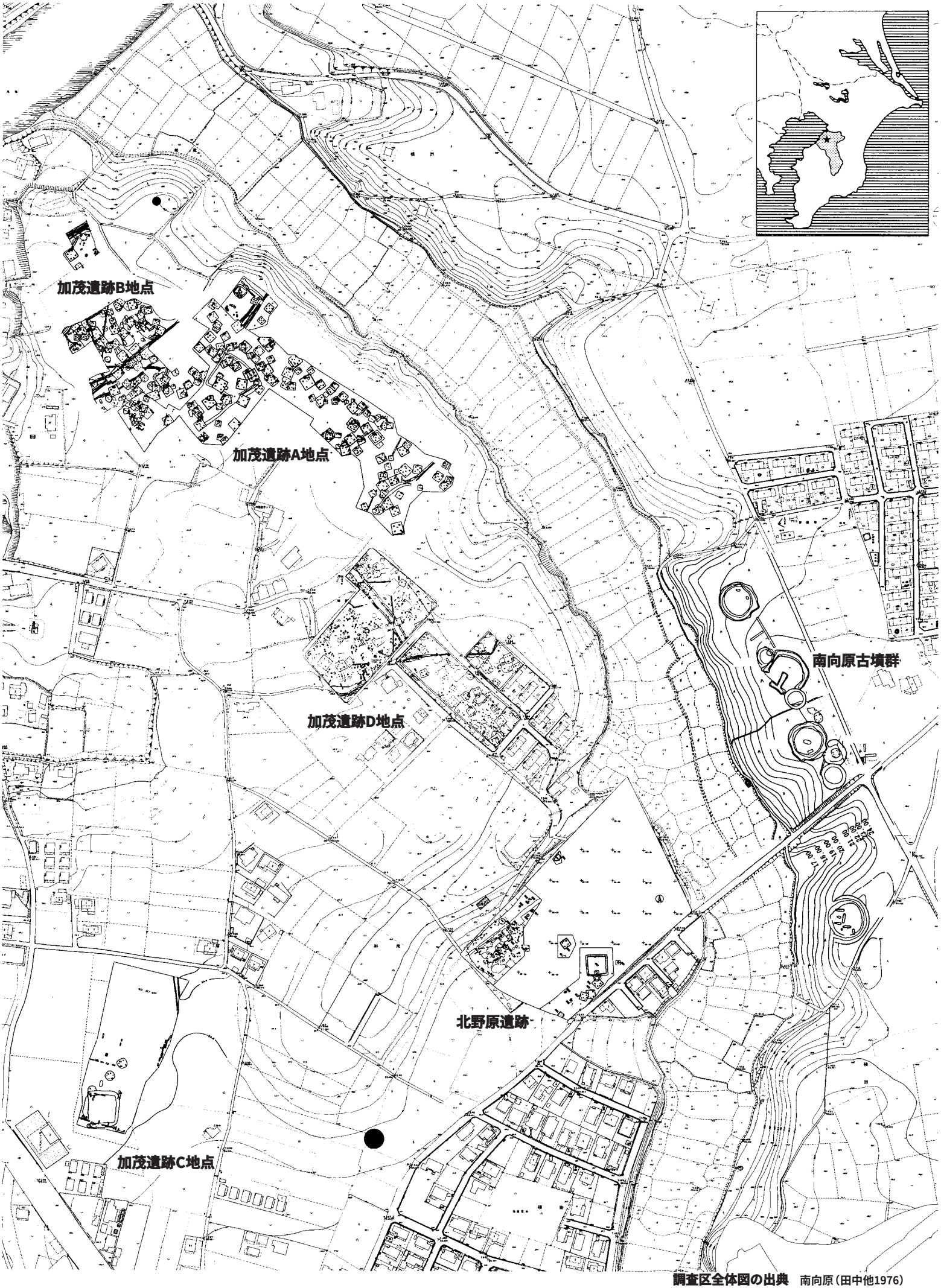
地理的環境　遺跡が位置するのは、現在、「国分寺台」と呼ばれる樹枝状の開析を受けた洪積台地上である。1970年代から行われた土地区画整理事業により、かなりの改変を被っているので、現地には本来の微地形がほとんど残っていない。造成前の航空写真と地形図（図版１・第１・２図）には東側の開析谷をのぞむ立地が見て取れるが、現在、谷部は埋め立てられ、住宅・小学校などが建てられている。

遺跡の東側の幅約80mの開析谷は、沖積地に向かって北西に抜けており、遺跡の位置する台地上とは７m程の比高を持つ。谷は造成前まで水田として利用されており、当地の水田農耕展開期の景観を示唆していて興味深い。

南側には浅い支谷が東に降りていき、遺跡と北野原遺跡とを隔てている。今回の調査区は、以前に調査されたＡ・Ｂ地点もあわせると、垂直方向でいえば、台地の平坦面から傾斜変換部にかかる位置、平面的には等高線に沿うかたちで、谷を臨んだ弥生・古墳時代の集落が広がっていたと想定できる。開析谷の谷水田としての利用が強く示唆される立地である。

歴史的環境　この地区は上総国分寺・尼寺のあることで著名であるが、今回の調査では、道路跡・竪穴住居跡・掘立柱建物跡のうち一部の遺構が古代に属すると考えられるだけで、主体的なものではなかった。また、縄文時代の遺構も限られた検出にとどまっている。そのため、ここでは調査結果で中心的と思われる弥生・古墳時代の遺構に関して、周辺の調査例を概観してみたい（第１・２図）。

加茂遺跡Ａ・Ｂ地点　Ｄ地点に隣接するのはＡ地点で、その西北にＢ地点が連なる。概報によると、Ａ地点は、約10000㎡の調査範囲において、弥生中期竪穴住居跡１棟・古墳後期竪穴住居跡137棟・地下式壙３基などが検出されている（平野・谷島1976）。Ｂ地点は、約6500㎡の範囲で、弥生時代（後



調査区全体図の出典　南向原（田中他1976）
加茂C（対馬他1976）　北野原（小川・蜂屋2000）

第２図　調査区の周辺（Ｓ＝１／3,000）

期主体とされる）竪穴住居跡20棟・古墳後・終末期竪穴住居跡64棟・地下式壙13基などが検出されている（谷島1977）。それぞれ、現在、整理作業が進行中である。A地点110号遺構からは良好な土師器・須恵器のセットが出土しており、いわゆる模倣杯盛行以前の鬼高式古相の重要な資料になると見られる（田中清美の教示による。巻頭図版にその一部がある）。

C地点は西方約300mと離れており、遺構の内容も古墳時代初頭の墳墓と、他とは異なる。遺跡名は加茂となっているものの、西側にある、近い時期の墓域の検出された長平台遺跡（古墳群）（半田・白井1982）と関連させて考えた方が良いと思われる（田中2000）。

北野原遺跡　1999年に調査された遺跡で、縄文時代後期の柄鏡形竪穴住居跡１棟・古墳後期竪穴住居跡５棟・地下式の埋葬施設を伴う平安時代の方形周溝墓１基などが検出された（小川・蜂屋2000）。現況では加茂遺跡と至近であるが、東へ抜ける支谷をはさんでいるためか、それぞれ主体とする内容が異なる。今回、Ｄ１区で検出された60号縄文後期埋設土器とＤ２区の平安時代の205号方形周溝墓は北野原遺跡と内容的に近似するが、どちらも少数例であるし、北野原遺跡の竪穴住居跡も南側斜面に分布が偏り、加茂遺跡との連続性は強くないといえる。

台遺跡（第１図）　加茂遺跡の占地する台地との間に北へと抜ける支谷を挟んで、西側の台地上に位置する、遺構の密度が非常に高い遺跡である。北側のA地点は、1976年度の調査で、多数の竪穴住居跡（弥生後期60棟・古墳前期11棟・古墳後期９棟・不明14棟）のほかに中世地下式壙13基などが検出され（半田1977）、1977年度調査で、竪穴住居跡多数（弥生後期以降とされる）・弥生中期宮ノ台式期の方形周溝墓13基・中世地下式壙30基以上が検出されている（半田1978）。

1975年度調査のB地点（道路南側）では、弥生時代（宮ノ台式・久ヶ原式期）と古墳時代（五領式・鬼高式期）の100棟近くの竪穴住居跡が検出されたという（半田・米田1976）。その中には、鬼高式古相の良好な資料である47号遺構も含まれる（木對1993）。続く1976年度には、竪穴住居跡84棟・方形周溝墓３基・溝７条・地下式壙４基が検出されている（半田1977）。現在、整理作業が進行中で、B地点の報告書が来年度に刊行される予定である。

今回の加茂遺跡の調査では、後述のとおり古墳時代中期後半の遺構が比較的まとまって確認されている。台遺跡には、公表されたごく一部の資料によってではあるが、近い時期の遺構が存在することが周知されているので（半田1977・木對1993）、加茂遺跡A・B地点ともども比較検討すれば、国分寺台地区の古墳中・後期土器の地域性が明確になると思われる。台遺跡の報告内容が注目される。

南向原古墳群　当遺跡の東側には、幅約80mの谷をはさんで南向原古墳群・遺跡が存在する。８基以上の円墳で構成される古墳群で、1975年度の調査により、古墳中期末から造営が開始されることが明らかにされている（田中1976・田中2000）。報文によれば、造営主体の集落は不明であり、今回の調査区との関わりも、間に広い谷をはさむことから積極的に想定しにくい。時期的に重複するところがあるものの、別集落が造営主体となった古墳と思われる。

なお、墳丘下層からは、弥生後期久ヶ原式古相の竪穴住居跡３棟・方形周溝墓２基が検出されており、同時期の遺構の存在する東側の谷沿いに位置する坊作遺跡（整理作業の結果42棟の竪穴住居が確認されている：小出ほか2002）との関連が考えられている。さらに谷を奥に進めば、祇園原貝塚上層

（中期宮ノ台式期23・後期１・弥生末７・古墳前期３棟検出：忍澤ほか1999）があるので、どの遺構が同時存在かは明確にしがたいものの、開析谷の両側に弥生中期以降の集落が占地していた様子が分かる。なお、祇園原遺跡では調査区南側に、宮ノ台式期竪穴住居が多数重複する部分があり、ほかの谷沿いの調査地とは異なる様相を示している。

以上、近隣の遺跡を概観すると、弥生時代については、同じ開析谷に面する加茂遺跡Ａ・Ｂ地点、南向原遺跡、祇園原貝塚における遺構群の消長と一連で捉えると理解しやすいことが分かる。また、谷の開口部北側の向原台遺跡（第１図）は、整理作業の結果、環濠集落ではないという結論に至ったが（高橋2002）、この遺跡も立地の示唆するところが大きい。

古墳時代中期は、現在、国分寺台地区では一部の古墳を除いては詳細が明らかでないが、一般的に近隣地域では中期前半和泉式期は台地上の分布自体が希薄になると見られているので、今回の調査結果は、中期後半に再び台地上に分布が広がった様子を反映しているものと思われる。ただ、台地上に広がりはするものの、国分寺台地区の様相は、沖積平野を望む地点に遺構数の重心があることを示すと思われる。

今回調査地の密度は、Ａ・Ｂ地点や台遺跡などと比べると低いうえ、古墳後期前半に空白が認められるので、その点も国分寺台地区内の他遺跡の成果を合わせて考察しなければならない。また、集落遺跡と古墳群がいかに対応するのかという問題が残されているので、今後、過去の調査区の詳細が明らかになり次第、順次検討を進めなければならないと思われる。

遺構番号	種別	カマド	時期	特徴・出土遺物など
60	埋設土器？		縄文後期	
247	土坑		縄文時代	
306	円形土坑		縄文時代？	
307	円形土坑		縄文時代？	
417	円形屋外炉		縄文中期？	
418	円形土坑		縄文中期	
419	円形屋外炉		縄文中期	
412	隅円形竪穴住居		弥生中期	402号に切られる
402	隅円形竪穴住居		弥生中期	
211	隅円形竪穴住居		弥生中期	
206	隅円形竪穴住居		弥生中期	207・208号に切られる
408	隅丸形竪穴住居		弥生中期	磨製石斧２点
17	隅円形竪穴住居		弥生中期～後期	
35	隅円形竪穴住居		弥生中期～後期	
55	隅円形竪穴住居		弥生中期～後期	
47	隅円形竪穴住居		弥生後期前半	輪積み甕・壺？
20	隅円形竪穴住居		弥生後期後半	
57	方形竪穴住居		古墳前期	タタキ成形甕
4	方形竪穴住居	東	古墳中期後半	大型
9	方形竪穴住居	？	古墳中期後半	
13	方形竪穴住居	東	古墳中期後半	
14	方形竪穴住居	東	古墳中期後半	
15	土坑		古墳後期？	
22	掘立柱建物		古墳中期～後期	総柱式　６・９号に伴うか
34	方形竪穴住居		古墳中期後半	
44	長方形竪穴住居	東	古墳中期後半	
51	方形竪穴住居	？	古墳中期後半	ほぼ完形の鬲が出土
52	方形竪穴住居	？	古墳中期後半	
200	方形竪穴住居	南	古墳中期後半	建て替えあり
202	長方形竪穴建物	東	古墳中期後半	鉄製品･鉄滓　建て替えあり
203	方形竪穴住居	？	古墳中期後半	
208	方形竪穴住居	南	古墳中期後半	
210	方形竪穴住居	東	古墳中期後半	
301	方形竪穴住居	東	古墳中期後半	建て替えあり
401	方形竪穴住居	東	古墳中期後半	
407	方形竪穴住居	東	古墳中期後半	遺物多量　貝層検出
6	方形竪穴住居	北	古墳後期	
21	方形竪穴住居	北	古墳後期	遺存不良
27	方形竪穴住居	北	古墳後期	
32	方形竪穴住居	北	古墳後期	
40	溝		古墳後期？	
46	方形竪穴住居	北	古墳後期	

遺構番号	種別	カマド	時期	特徴・出土遺物など
56	方形竪穴住居	？	古墳中期～後期	
58	方形竪穴住居	？	？	
204	方形竪穴住居	北	古墳後期	建て替えあり
207	方形竪穴住居	北	古墳後期	
209	方形竪穴住居	北	古墳後期	
403	方形竪穴住居	北	古墳後期	柱が中央に１つだけ
404	方形竪穴住居	北	古墳後期	
405	張り出し付き方形竪穴建物	北	古墳後期後半	杯類の集中出土あり
406	方形竪穴住居	北	古墳後期	
411	方形竪穴住居	？	古墳後期	
415	方形竪穴住居	？	古墳	
201	方形竪穴住居	北	古墳終末期	遺物多・良好
48	方形竪穴住居	東	奈良	高台付杯　建て替えあり
11	道路西側溝		古代	
12	道路東側溝		古代	
41	溝		中世？	区画溝か
53	掘立柱建物		古墳～古代	
54	掘立柱建物		古墳～古代	
59	掘立柱建物		古墳～古代	
61	掘立柱建物		古墳～古代	２間四方
205	方形周溝墓		平安	須恵器甕と土師器甕による合口蔵骨器　地下式の改葬
213	掘立柱建物		古墳～古代？	４間四方
241	掘立柱建物		古墳～古代	
242	掘立柱建物		古墳～古代？	
302	道路		古代	瓦・中世陶器出土
303	掘立柱建物		古墳～古代	２間・３間
304	掘立柱建物		古墳～古代	３間・４間
305	掘立柱建物		古墳～古代	１間・３間
2	長方形土坑		中近世	
3	長方形土坑		中近世	
5	長方形土坑		中近世	
64	土坑		中世？	カワラケ出土
65	掘立柱建物		古代～中世？	
308	長方形工坑		中近世	302号内
310	方形土坑			302号に平行
311	長方形土坑		中近世	302号に平行
312	長方形工坑		中近世	302号に平行
414	長方形土坑		古代～中世？	302号に平行
50	土坑		近世	寛永通寶

第１表　検出遺構一覧

第２章　検出された遺構と遺物

第１節　遺構外出土・混入遺物

調査区内では、地表から遺構検出面まで大体60㎝ほどの堆積があり、最上面が表土撹乱層、以下、ソフトローム上面まで漸移的に黒ずんだ遺物包含層が認められた（第50図他）。今回の調査での主要な遺構は古墳時代に属するものであるが、この遺物包含層から、縄文時代中期土器片・時期不明焼礫などの遺物が、量的には多くないものの出土している。

尖頭器（第４図）　有舌尖頭器（１：珪質頁岩、6.39ｇ）がＤ２区の包含層中、尖頭器（２：デイサイト、13.31ｇ）が405号古墳後期竪穴住居跡覆土中から出土した。前者も、周辺に剥片等の関係する遺物を伴わない単独での検出である。

現在整理作業中の、市北西部にある不入斗遺跡群・片又木遺跡第３次調査区においても小型の有舌尖頭器が包含層中から出土している（北見一弘の教示による）。最新の集成によると、他に市内では35遺跡で出土が確認されている（田村・島立・落合・永塚2001）。

縄文土器（第５・６図）　Ｄ１区西半を除く調査区東寄りにおいて散漫な出土が見られた。加曽利Ｅ式が量的に主体をなし、称名寺式・堀之内式・田戸上層式などがそこに混じるかたちである。加曽利Ｅ式はＥⅣ式など新相を示すものが主体である。

図示しなかったが、赤変し、被熱のあったと思われる礫・礫片が似た範囲に確認されている。これらも縄文中期のものかもしれない。縄文時代に属すると考えられる遺構は、後述のとおりいくつか検出されているが、古墳中期鬼高式期の竪穴住居跡を除いて、他の時代も含め全般的に遺構の遺存が悪い様子（第132図21号あるいは第153図11号・12号など）を考えると、存在していたとしても遺存しなかっただけである可能性が高い。縄文時代の土器・礫・遺構とも、地形でいえば、谷側に多く、台地平坦面側に少ない。

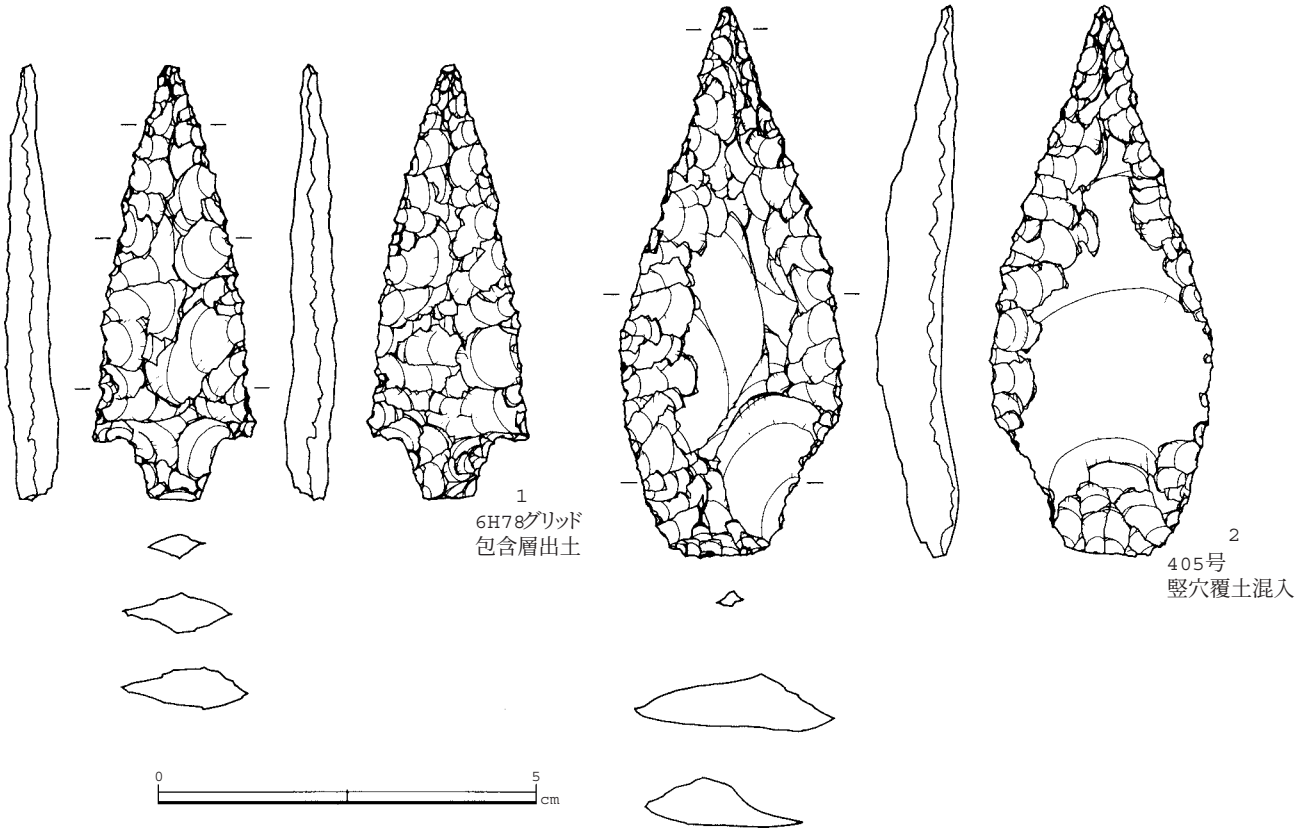
弥生土器（第７図）　Ｄ２・Ｄ３区の包含層、なかでも弥生中期竪穴住居跡近辺からの出土が多い。200号古墳中期竪穴住居跡などの覆土には破片が多く混じっていたので、あるいは、207号のように弥生中期の遺構を破壊して構築された、後出の遺構があるのかもしれない。

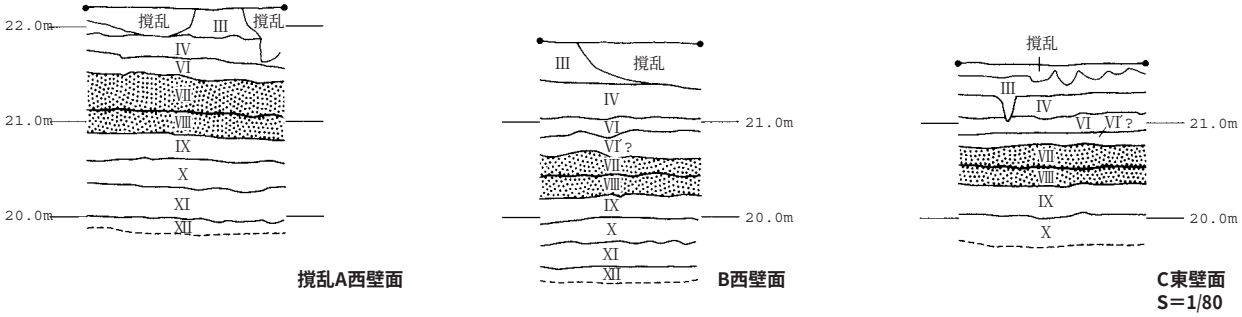
図に挙げたものはすべて宮ノ台式の範疇に入ると思われる。器種には甕・壺・鉢が見られる。甕にはハケメ・横位羽状文のものが多い。一部ではあるが、口縁端部の調整に工具刺突の施されるものもある。壺には単節縄文による横帯・結紐文の施されるものが多く、他に櫛状工具による文様・舌状文などが見られる。全体的に、遺構から出土したものより若干古相を示すものが多いように感じられる。混入品ではあるが、207号に須和田式の壺片が出土しているので、当該期の遺構が付近に存在した可能性も考えられる。

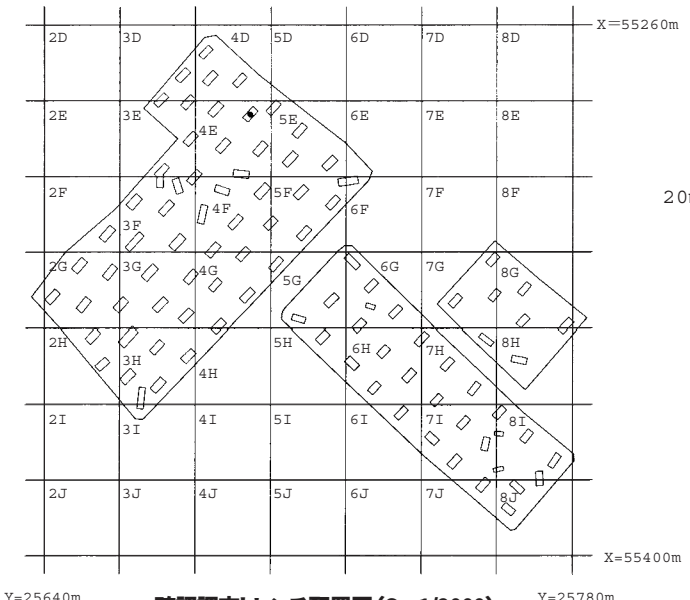
南側の谷をはさんだ北野原遺跡では弥生土器がまったく出土していないので、加茂遺跡側にあるとおもわれる弥生中期の集落の限界は今回のＤ２区にあると考えられる。

D1区
D2区
D3区
搅乱
搅乱A
搅乱B
搅乱C
下層調査部
0
10
20
m
S=1／400　数字は遺構番号、菱形はカマドの向きを示す

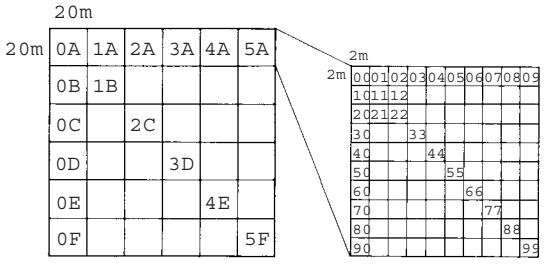
第３図　調査区全体図







確認調査トレンチ配置図(S=1/2000)

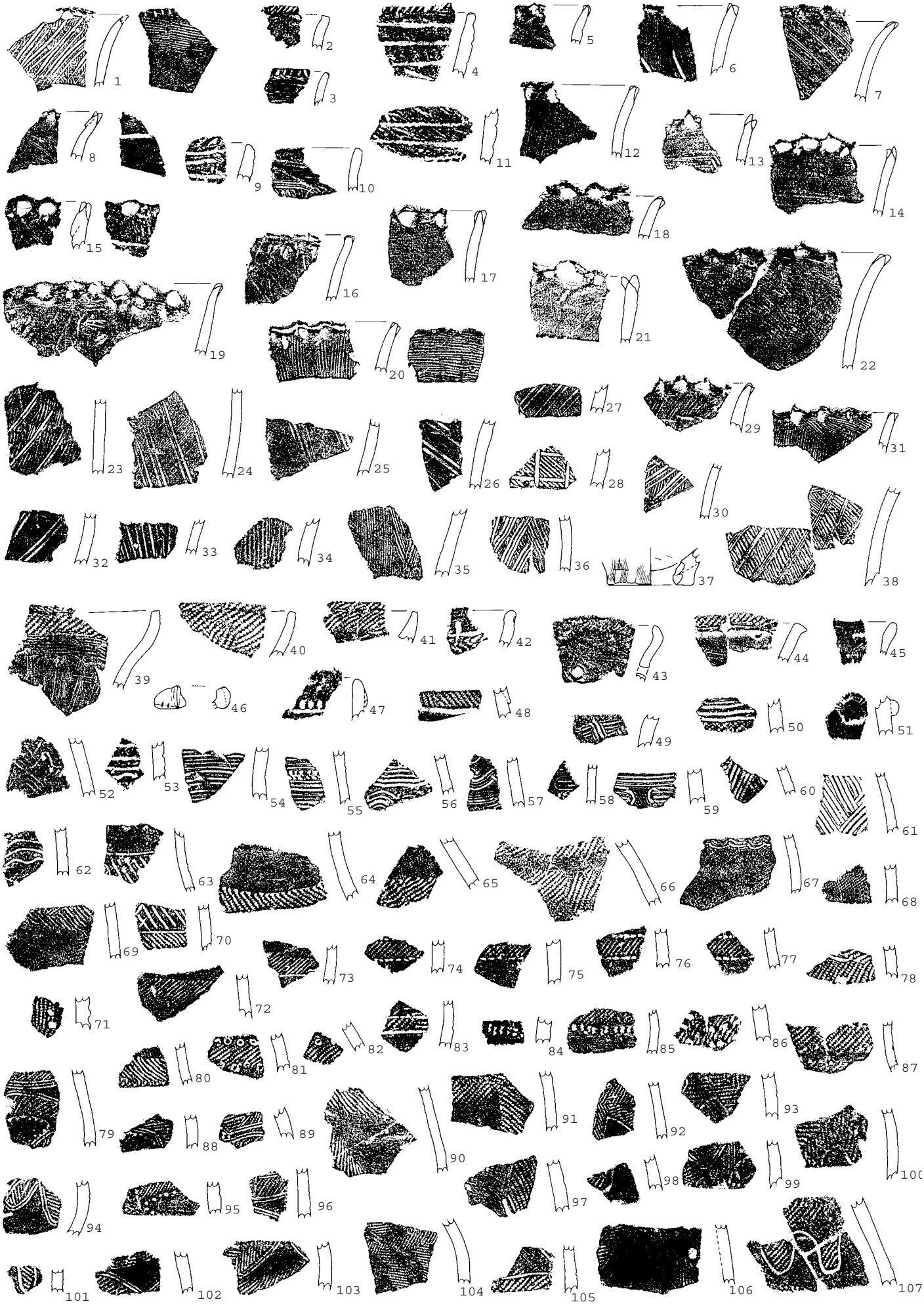


グリッド名

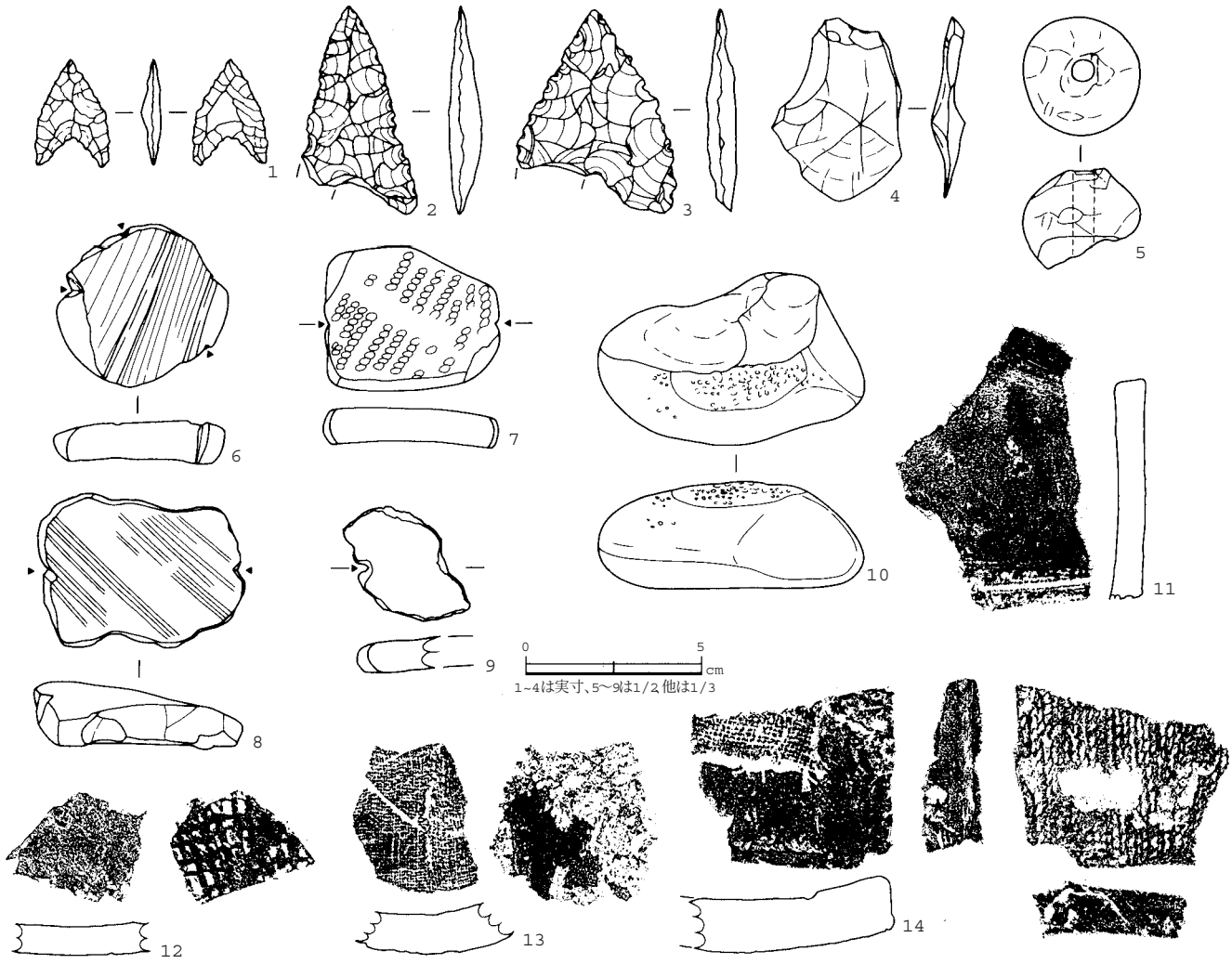
第４図　遺構外出土石器・地山土層・グリッド配置

第５図　遺構外出土・混入縄文土器１/２

第６図　遺構外出土・混入縄文土器２／２



第７図　遺構外出土・混入弥生土器



第８図　遺構外出土・混入遺物

その他（第８図）　石器・土製品・瓦を図示した。１～３は縄文時代の石鏃で、４は不明剥片、10は焼礫転用の敲石である。１が玉髄、２・３が黒曜石、４がチャート、10が珪石（石英）製である。

５は土玉の破片で、竪穴住居跡覆土からの散逸品と思われる。

６～９は土器片錘で、12～14が瓦である。瓦の出土は遺跡全体でも少なく、遺構に伴うものは、11・12号・302号の道路跡から出土した少量の破片しかない。

11は、一方の端面に沈線を持ち、反対側が透孔状に仕上げられる全体像が不明の土製品である。胎土は中世以前のものとは雰囲気が違うようで、近世以降の焼き物の祠である可能性も考えられる。

第２節　縄文時代

縄文時代の遺構は、埋設土器と思われる土器（60号）、土坑（247・306・307・418号）、炉（417・419号）の７遺構がある。いずれも、他の時期の遺構と比べれば、規模・遺存・出土遺物の点で貧弱である。ただ、包含層検出の土器片の散布状況からすると、確認された以上の遺構が存在していたものと思われる。概報によると、隣接するＡ・Ｂ両地点でも縄文時代の遺構は数少ない。

60号埋設土器（第９図）

規模（m）：長軸1.12／短軸1.08　**時期**：縄文時代後期

Ｄ１区の西端付近で検出された埋設土器と考えられる遺構である。土器は、称名寺式の様相を残す堀之内式古相の深鉢で、半分ほどが出土した。掘形の深さは20㎝ほどである。周辺を精査したが関係する柱穴等は検出できなかった。いわゆる埋甕とすれば、１基だけ単独で存在するというのは、集落内にある遺構としては不自然である。竪穴住居などの大部分が削平され、そのうちの一部がたまたま遺存したものと考えられよう。

247号土坑（第９図下）

規模（m）：長軸0.89／短軸0.62　**時期**：縄文時代

隅丸の長方形の平面形で、底面に直径20㎝のへそピット状の浅いくぼみを持つ。201号竪穴住居跡の調査で床面を掘り下げた際に検出された。遺物はまったく出土していない。201号に上部を破壊されているので、本来はさらに深いはずである。間隔をおいて並ぶわけでもなく、性格は不明である。

417号土坑（第10図左）

規模（m）：長軸1.3／短軸0.94／深さ0.21　**時期**：縄文時代

Ｄ３区北側で検出された長円形の土坑である。底面に焼土と地山の焼けた痕跡が認められたので、炉のような機能を持っていた可能性が高い。精査したが、柱穴・竪穴掘形は検出できなかった。均一に削平を受けたとすると、柱穴より深い炉というのは考えにくいので、別種の遺構と思われる。

418号土坑（第10図左上）

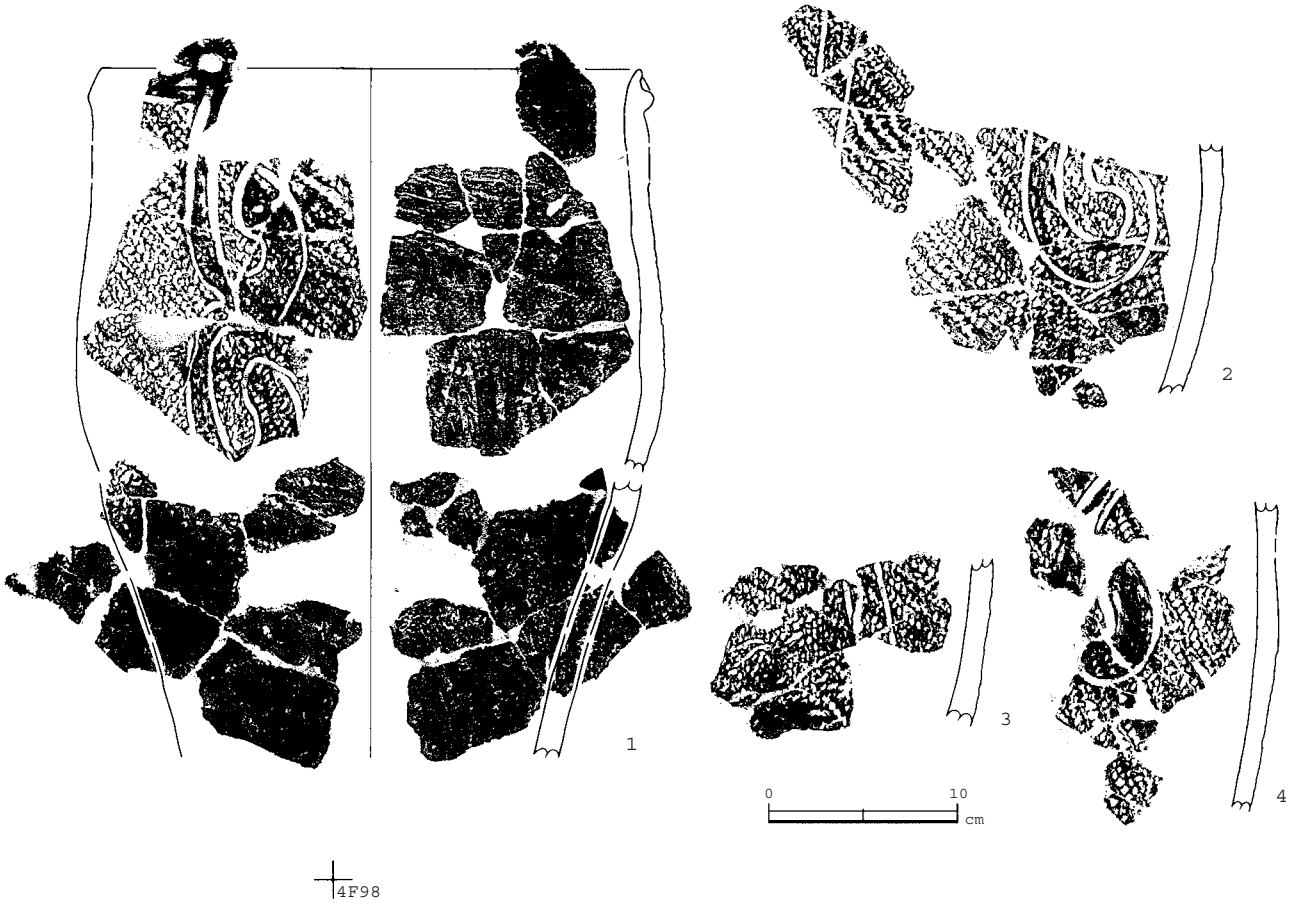
規模（m）：長軸0.87／短軸0.84／深さ0.64　**時期**：縄文時代中期後葉

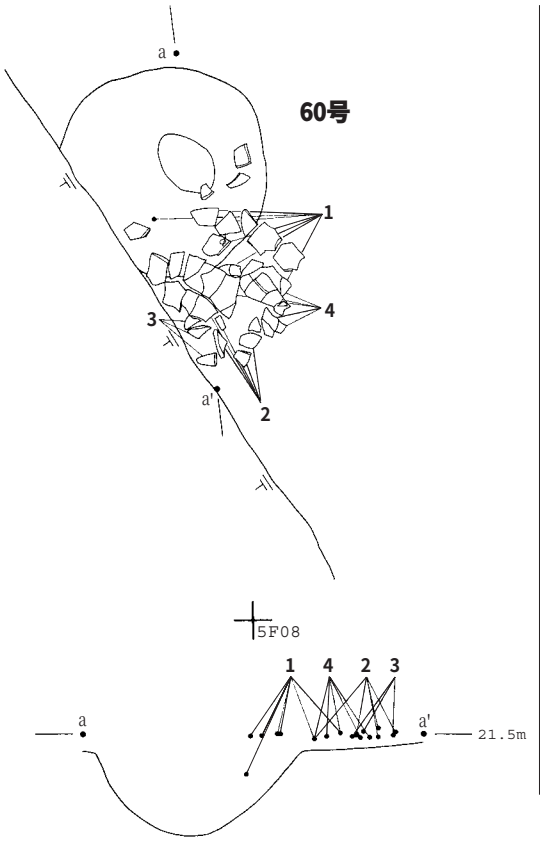
Ｄ３区北側に検出された円形の土坑である。掘形は深く、少量の土器片と土器片錘が出土した。柱穴にしては組み合うものがない上に、規模が大きいので単独の土坑と考えられる。土器（１～６）は縄文時代中期後葉のものであろう。覆土は、上面がソフトロームに近かったが、掘り下げるほどに黒みが強くなった。性格は不明である。

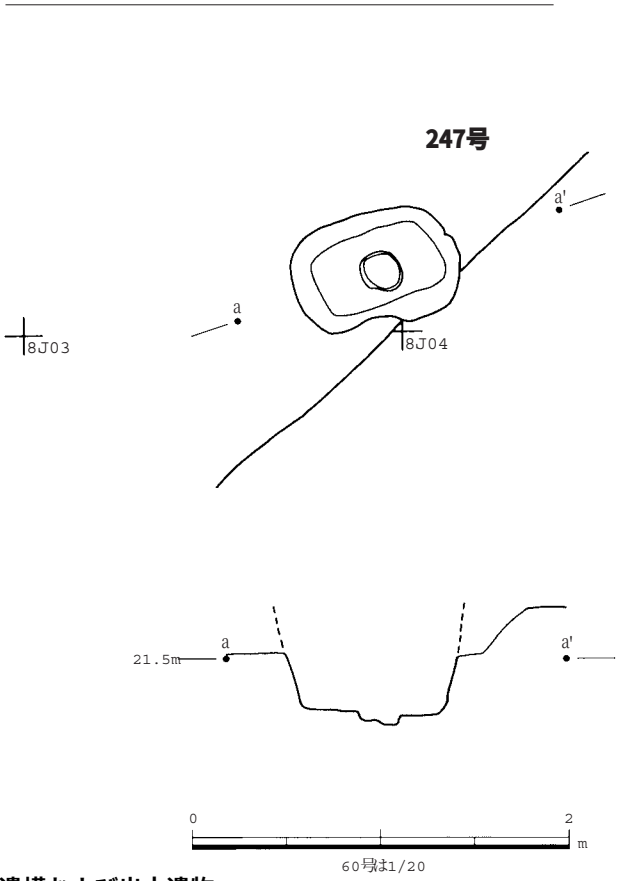
419号土坑（第10図右上）

規模（m）：長軸1.68／短軸1.0／深さ0.52　**時期**：縄文時代中期

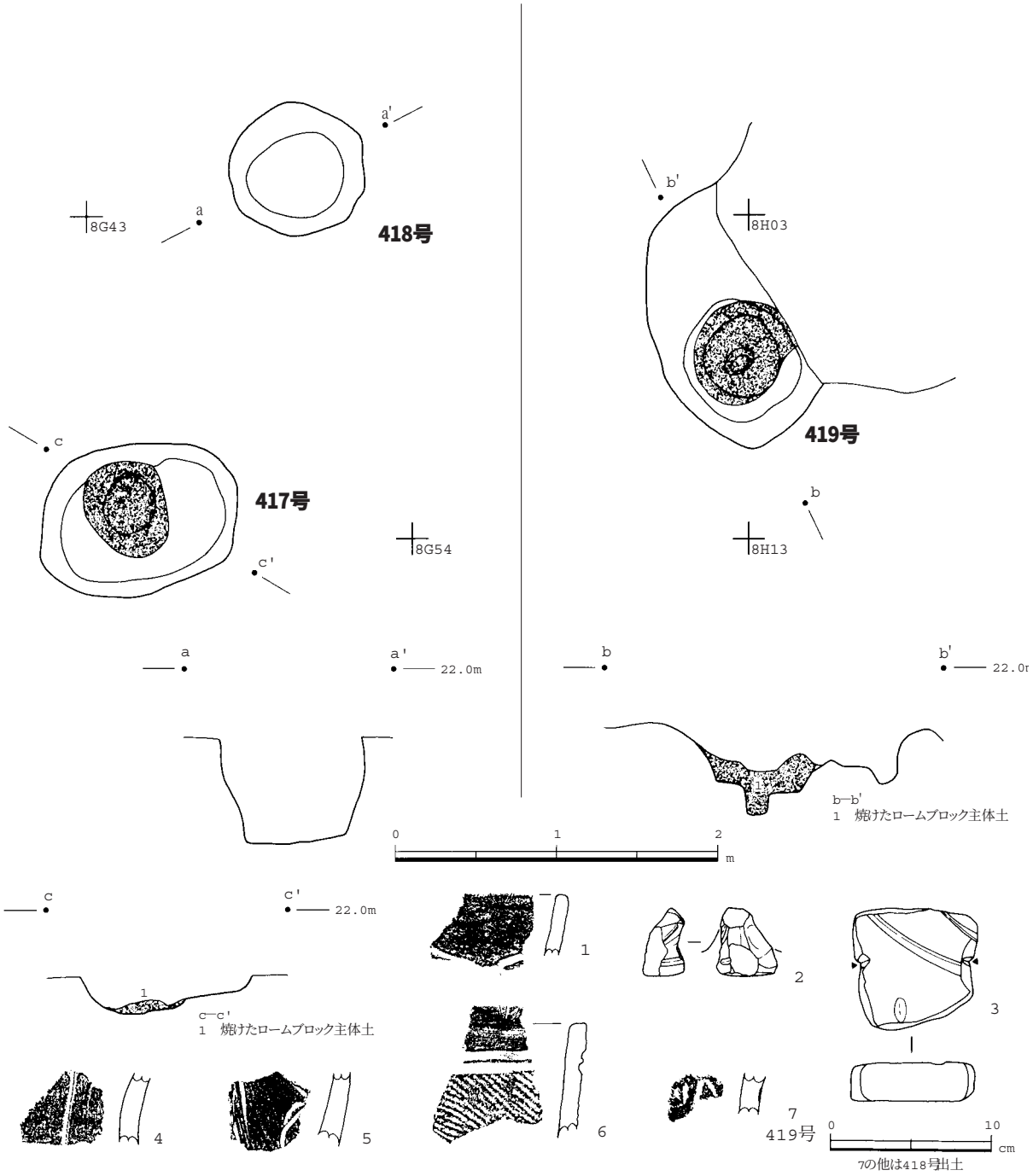
Ｄ３区の408号竪穴の西側にある長円形の炉状の土坑である。東側を撹乱されている。417号と同じく底面に炉のような跡を持つ。遺物は少量の縄文土器が出土した。







第９図　60号・247号遺構および出土遺物



第10図　417号・418号・419号遺構および出土遺物

306号土坑（第144図）

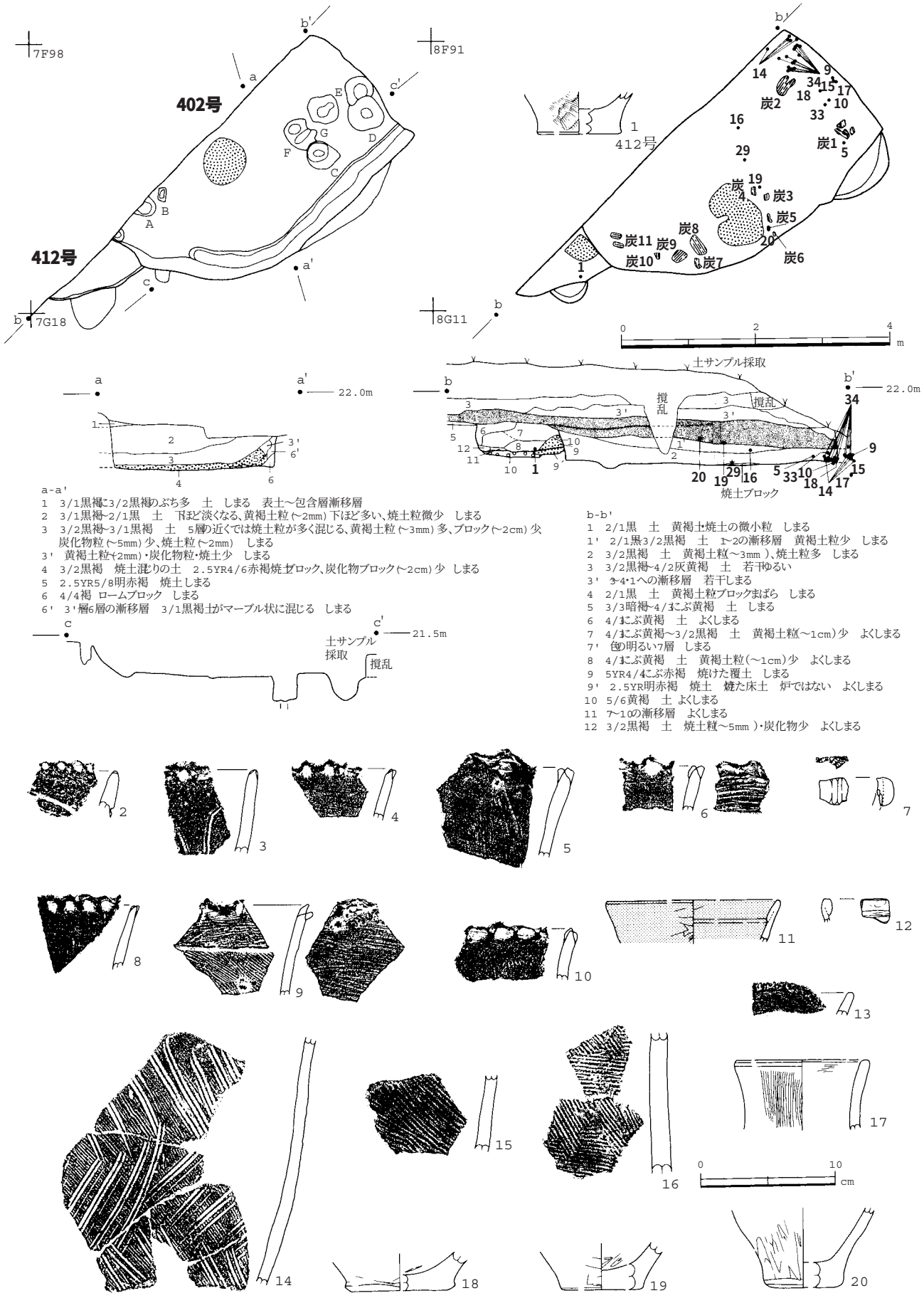
規模（m）：長軸1.56／短軸1.28／深さ0.21　**時期**：縄文時代？

Ｄ２区北寄りに位置する土坑である。覆土は漸移的で、307号のものと同様である。底面はハードロームまでは達していない。Ｄ３区に縄文中期の遺構が分布し、Ｄ１・Ｄ２区でも包含層から中期土器が検出されていることから、縄文時代のものと考えられる。

307号土坑（第144図）

規模（m）：長軸1.56／短軸1.41／深さ0.44　**時期**：縄文時代？

306号に隣接する。覆土は全体が漸移的ではっきり黒いという感じではない。遺物は全く出土しなかった。時期の確定は難しいが、縄文時代に属する遺構であろう。



a-a'
1 3/1黒褐～3/2黒褐のぶち多　土　しまる　表土～包含層漸移層
2 3/1黒褐～2/1黒　土　下ほど淡くなる、黄褐土粒（～2mm）下ほど多い、焼土粒微少　しまる
3 3/2黒褐～3/1黒褐　土　5層の近くでは焼土粒が多く混じる、黄褐土粒（～3mm）多、ブロック（～2cm）少
炭化物粒（～5mm）少、焼土粒（～2mm）　しまる
3' 黄褐土粒（～2mm）・炭化物粒・焼土少　しまる
4 3/2黒褐　焼土混じりの土　2.5YR4/6赤褐焼土ブロック、炭化物ブロック（～2cm）少　しまる
5 2.5YR5/8明赤褐　焼土しまる
6 4/4褐 ロームブロック　しまる
6' 3'層6層の漸移層　3/1黒褐土がマーブル状に混じる　しまる

b-b'
1 2/1黒　土　黄褐土焼土の微小粒　しまる
1' 2/1黒3/2黒褐　土　1～2の漸移層　黄褐土粒少　しまる
2 3/2黒褐　土　黄褐土粒（～3mm）、焼土粒多　しまる
3 3/2黒褐～4/2灰黄褐　土　若干ゆるい
3' 3～4・1への漸移層　若干しまる
4 2/1黒　土　黄褐土粒ブロックまばら　しまる
5 3/3暗褐～4/3にぶ黄褐　土　しまる
6 4/3にぶ黄褐　土　よくしまる
7 4/3にぶ黄褐～3/2黒褐　土　黄褐土粒（～1cm）少　よくしまる
7' 色調明るい7層　しまる
8 4/3にぶ黄褐　土　黄褐土粒（～1cm）少　よくしまる
9 5YR4/4にぶ赤褐　焼けた覆土　しまる
9' 2.5YR明赤褐　焼土　焼た床土　炉ではない　よくしまる
10 5/6黄褐　土 よくしまる
11 7～10の漸移層　よくしまる
12 3/2黒褐　土　焼土粒（～5mm）・炭化物少　よくしまる

第11図　402号・412号遺構　焼土・遺物検出状況および出土遺物1／2

第３節　弥生時代

本期の遺構はＤ２・Ｄ３区を中心に検出された。すべて竪穴住居跡で、宮ノ台式期が８棟（17？・35？・55？・206・211・402・408・412号）、久ヶ原式期が２棟（20・47号）、鴨居上ノ台式期が１棟（57号）である。遺構の数と同じく、他遺構覆土混入品として出土するのも宮ノ台式が最も多かった。

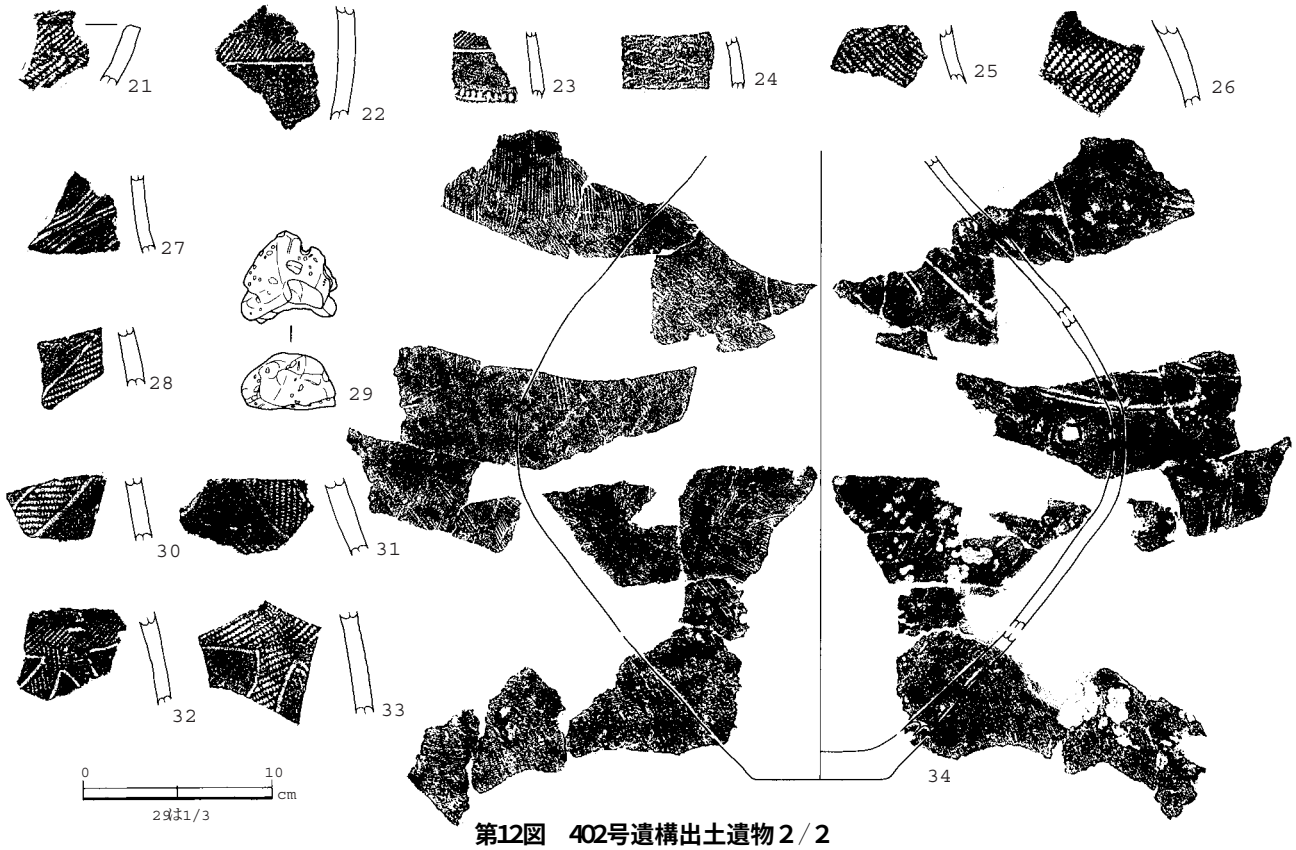
なお、遺物の出土が皆無である遺構の帰属を判断するために、本期以降の各竪穴の覆土に含まれるテフラを上本進二氏に同定していただいている。結果は、当初目標とした時期の判定には資料の少なさから困難があるものの、いわゆる「二次堆積層」の堆積期間の長さが示された興味深いものとなっている（本章第７節）。

402号竪穴住居跡（第11・12図）

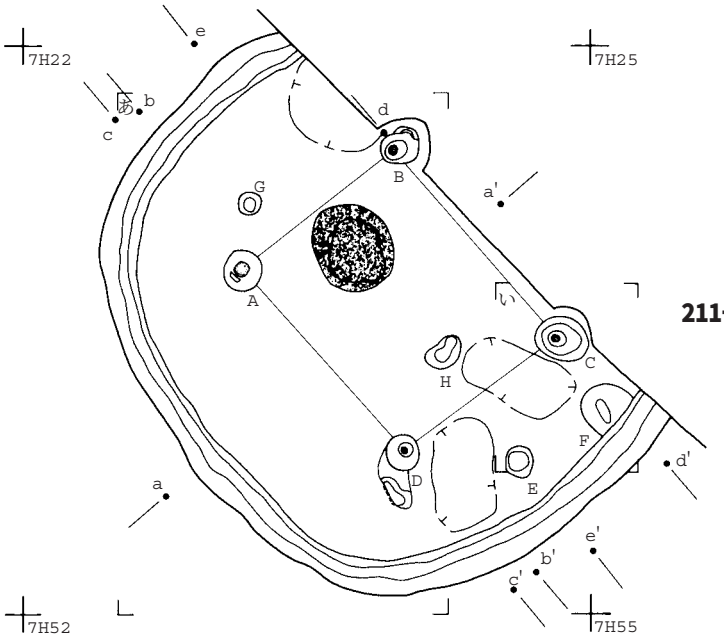
規模（m）：不明　**主軸方位**：316°　**貯蔵穴**：円形／東南隅　**時期**：弥生時代中期後半

Ｄ３区の北端に位置し、大半が調査区外に出ている俵形の竪穴住居跡である。同じく大半が調査区外にある412号を切って構築されている。床面には穴がいくつか検出されているが、Ｃ（深さ39㎝）が出入り口ピットと想定できるほかは、柱穴などに確定できるものはなかった。床面調査時に検出されたのはＡ・Ｂ・Ｄ・Ｅ（深さ７・14・32・20㎝）で、Ｄ・Ｅは貯蔵穴の可能性がある。また、床面下で検出されたＦ・Ｇ（標高20.719m・20.619m）は、一方のＦが建て替え以前の出入り口ピットと思われる。床面壁際にはごく浅い溝が巡る。

床面上には、壁際を中心に焼土が少なからず堆積しており、炭化した木材が出土した。廃絶時に火を受けたのは明らかである。ただ、柱穴が確認できないため、上屋が建ったままなのか、解体後なのかは不明である。これらの炭化材は、樹種同定の結果、クヌギ節（炭１・３・７・９・11）・イヌガ



第12図　402号遺構出土遺物２／２



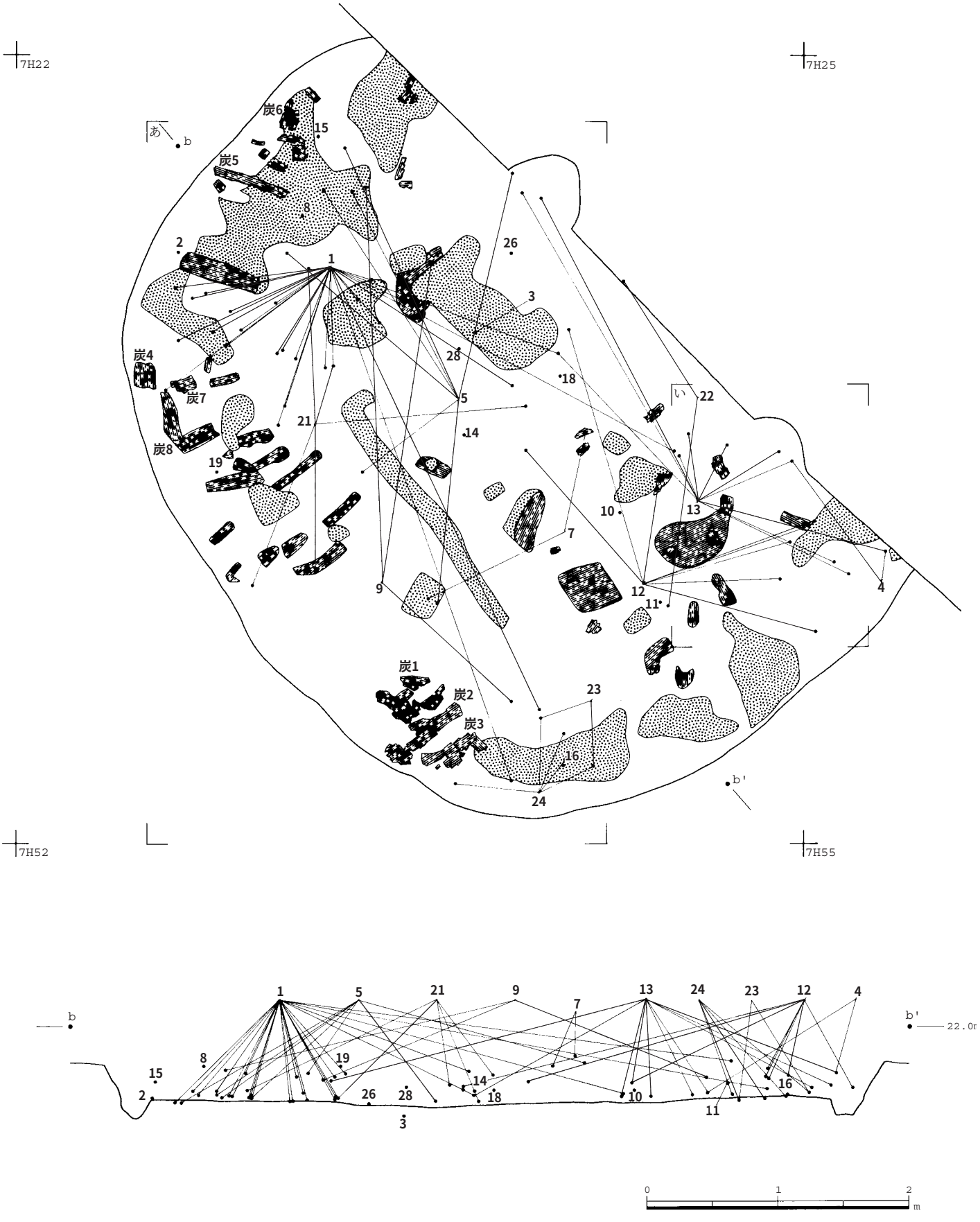
a-a' b-b'
1 3/1黒褐~2/1黒 土 炭化物ブロックまれ、黄褐土粒(~2mm)、焼土粒(~1mm)混じる しまる
1' 3/2黒褐 土 1層2層の漸移層、黄褐土粒(~2mm)、焼土微粒まんべんなく混じる、炭化物粒(~5mm)少 しまる
1'' 炭化物ブロック(~2cm)多 焼土多 若干ゆるい
2 3/1黒褐~3/2黒褐 土 焼土・黄褐土粒(~5mm)少、炭化物粒(~5mm)混じる、焼土微粒まんべんなく混じる しまる
3 4/3にぶ黄褐~4/2灰黄褐 土 しまる
4 3/2黒褐 土 若干しまる
5 4/6褐 土 3/1黒褐~3/2黒褐土が混じる しまる
5' 3/2黒褐 土 1層5層の漸移層、5YR4/6赤褐焼土多 若干ゆるい
6 3/1黒褐~3/2黒褐 焼土混じりの土 5YR4/6赤褐焼土多 しまる
6' 焼土のない6層
7 3/2黒褐に4/3にぶ黄褐混じる 土 しまる
8 炭化物ブロック
9 焼土主体土
10 炭化物主体土

c-c'
1 3/2黒褐 土 炭化物焼土・黄褐土粒多 若干しまる
竪穴覆土の落ち込み
1' 炭化物ブロック多の1層竪穴覆土の落ち込み
2 3/2黒褐~4/3にぶ黄褐 土 ゆるい
3 4/3にぶ黄褐~3/2黒褐 土 ゆるい

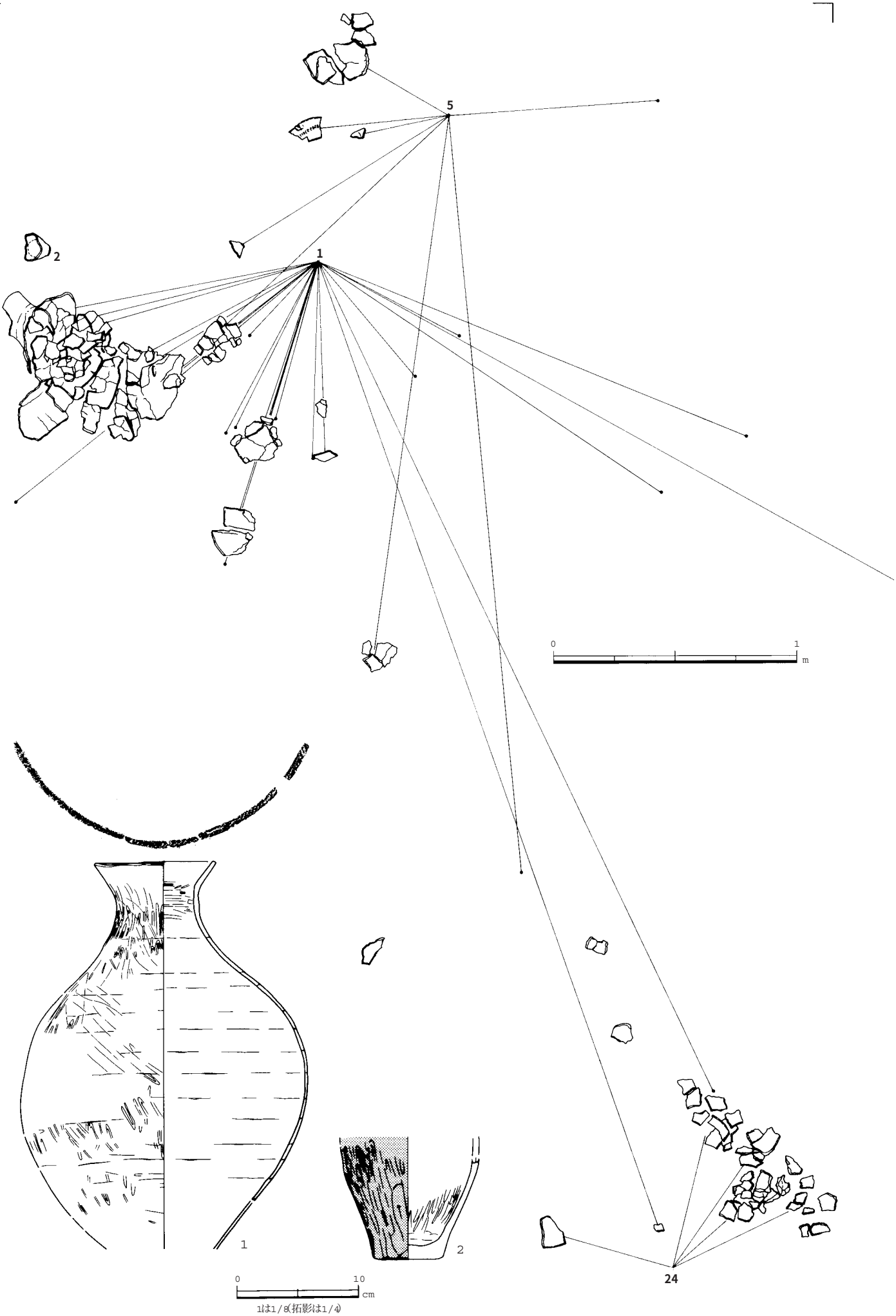
d-d'
1 3/2黒褐~4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック多、焼土粒・炭化物粒微少 しまる
2 3/1黒褐~2/1黒 土 黄褐土粒(~5mm)多、炭化物・焼土粒(~2mm)多 ゆるい
3 3/2黒褐 土 ゆるい
4 3/1黒褐~3/2黒褐 土 焼土粒・炭化物粒・黄褐土ブロック(~1cm)多 若干しまる
5 2.5YR赤褐 焼土主体土 炭化物粒多 若干しまる
6 3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~2cm)多 若干しまる

0 2 4 m

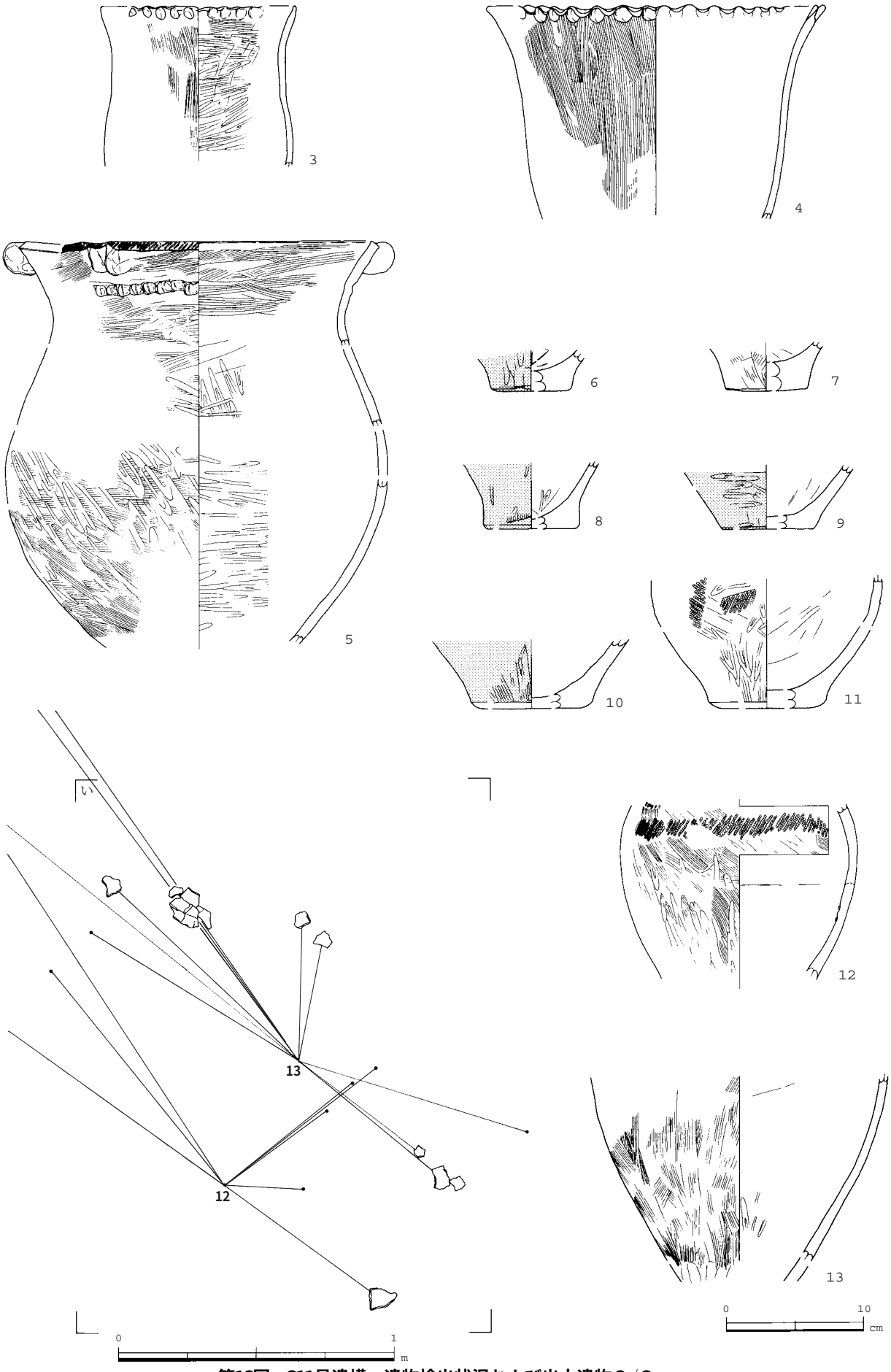
第13図 211号遺構



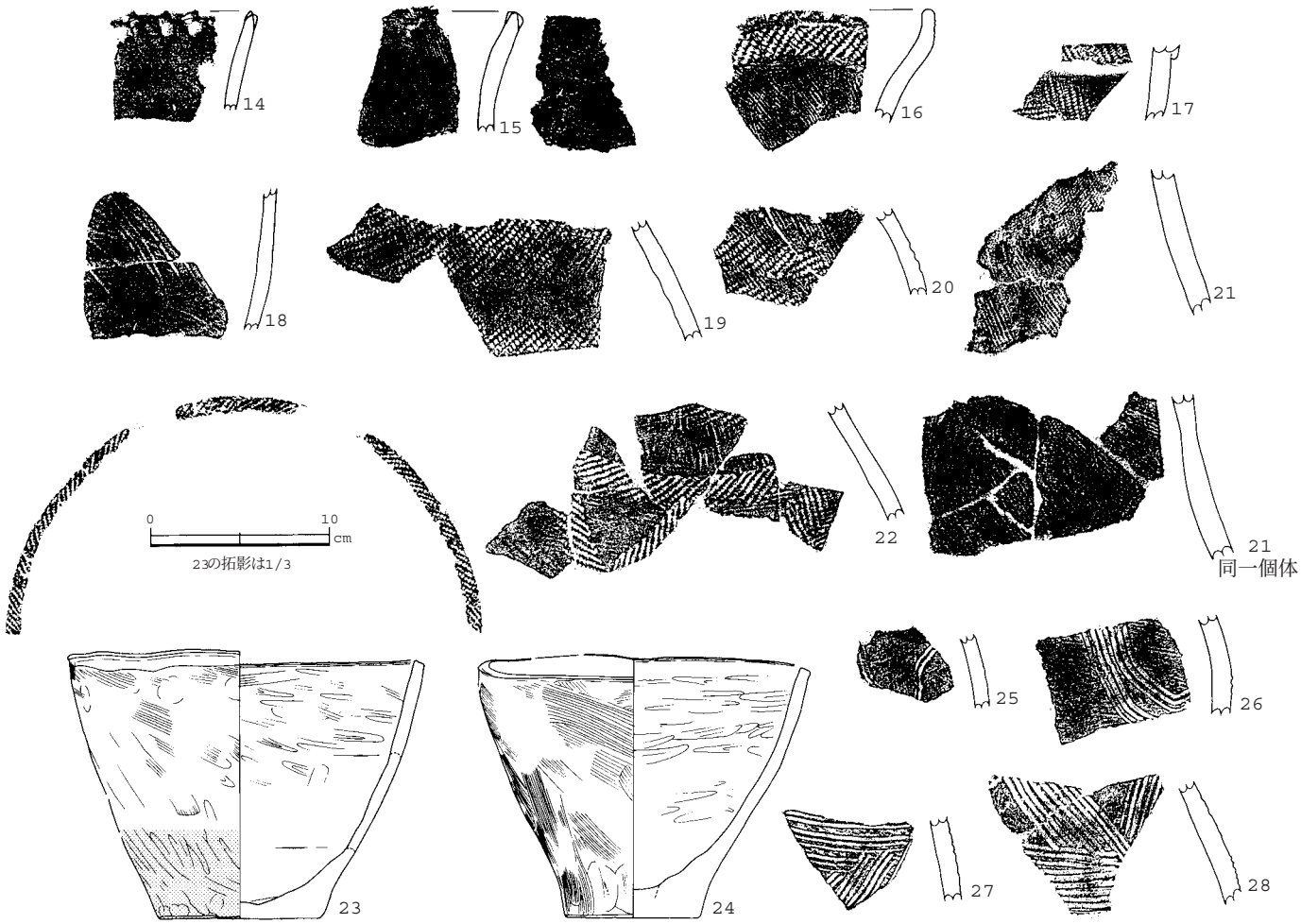
第14図　211号遺構　焼土・炭化材・遺物検出状況



第15図　211号遺構　遺物検出状況および出土遺物１／３



第16図　211号遺構　遺物検出状況および出土遺物２/３



第17図　211号遺構出土遺物３／３

ヤ（炭４～６・８・）・ケヤキ（炭２・10）であることが確認できた。

遺物は、弥生土器の小片が少なからず出土した。壺には櫛描文が皆無で、甕も口縁端部に刺突を施すものが１点（２）混じるだけである。横位羽状文を施された甕（14）も存在するが、当地域では必ずしも古相を意味しない。以上からすると、本遺構は宮ノ台式でも後半に属すると思われる。

412号竪穴住居跡（第11図）

規模（m）：不明　**主軸方位**：不明　**貯蔵穴**：不明　**時期**：弥生時代中期

ほとんどが調査区外にある竪穴住居で、402号に切られる。床面には柱穴などが全く検出されなかった。焼土が壁際に検出されており、402号と同様、廃絶時に火を受けたものと考えられる。断面の観察からは、床面構築土自体が赤変していることも認められている。

遺物はごく少量の弥生土器が出土しているが、時期を確定するには及ばない。本遺構は、切り合い関係から、弥生時代中期宮ノ台式期に属すると思われる。

211号竪穴住居跡（第13～17図）

規模（m）：6.1×5.6？　**柱間**：A－B2.04　B－C2.62　C－D2.00　D－A2.57　**主軸方位**：319°

貯蔵穴：円形／東南隅　**時期**：弥生時代中期後半

Ｄ２区中ほどに位置し、東４分の１が調査区外に出る俵形の竪穴住居である。Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄが主柱穴で、Ｅ（深さ20㎝）が出入り口ピット、Ｆ（深さ27㎝）が貯蔵穴である。Ｇ・Ｈ（深さ６・15㎝）は用途不明である。竪穴は深さ30㎝ほどが遺存している程度で、後代にかなり削平されたようである。炉は柱間の北寄りに検出された。

床面からは覆土下層にかけて多量の焼土・炭化物が検出されている。特に炭化物は上屋において垂木状に用いられていた材がそのまま焼け落ちたような状況を示す部分もあり、竪穴廃絶時に解体を行わずに上屋を焼却処分した可能性が示唆され、注目される。柱穴は、覆土の様子からは、抜き取りが行われたようには見受けられない。また、柱穴への掘り込みが見られないので、これも、焼土の検出状況ともども廃絶時に上屋がそのままに近い状態で残されていたという想定を支持するように思われる。炭化材は、クヌギ節（炭２・４～７・南側柱穴覆土出土炭化物）・オニグルミ（炭１・３・８）と確認された。

遺物は、床面上に大型の壺（１）・小型の壺（２）・広口壺（５）などが出土した。大型の壺は、出入り口西側からＡと北壁の間にかけて直線的に破片が検出された。底部付近が入り口側に、口縁部・体部上方が奥の壁際にあった。この土器は、上屋の倒壊により奥の方へ割れ散ったとみられる出土状況と、完全に近く復元できたという事実から、廃絶時の焼却処分に先だって床面に置かれていたものと考えられる。この竪穴の廃絶の過程には、土器の遺棄→焼却処分というプロセスが想定できる。

遺物はすべて弥生土器である。大型の壺（２）は装飾性が極めて乏しく、体部が縦のヘラミガキで仕上げられ、素口縁の端部に単節縄文が施されるだけである。広口壺（５）も、口縁部に装飾が見られるものの、疎らなヘラミガキの下にハケメが全体に残っており、装飾に乏しい。壺の下半をそのまま用いたような鉢（23・24）も同様であり、特徴的なセットである。これらは宮ノ台式後半に属すると思われる。

206号竪穴住居跡（第18・19図）

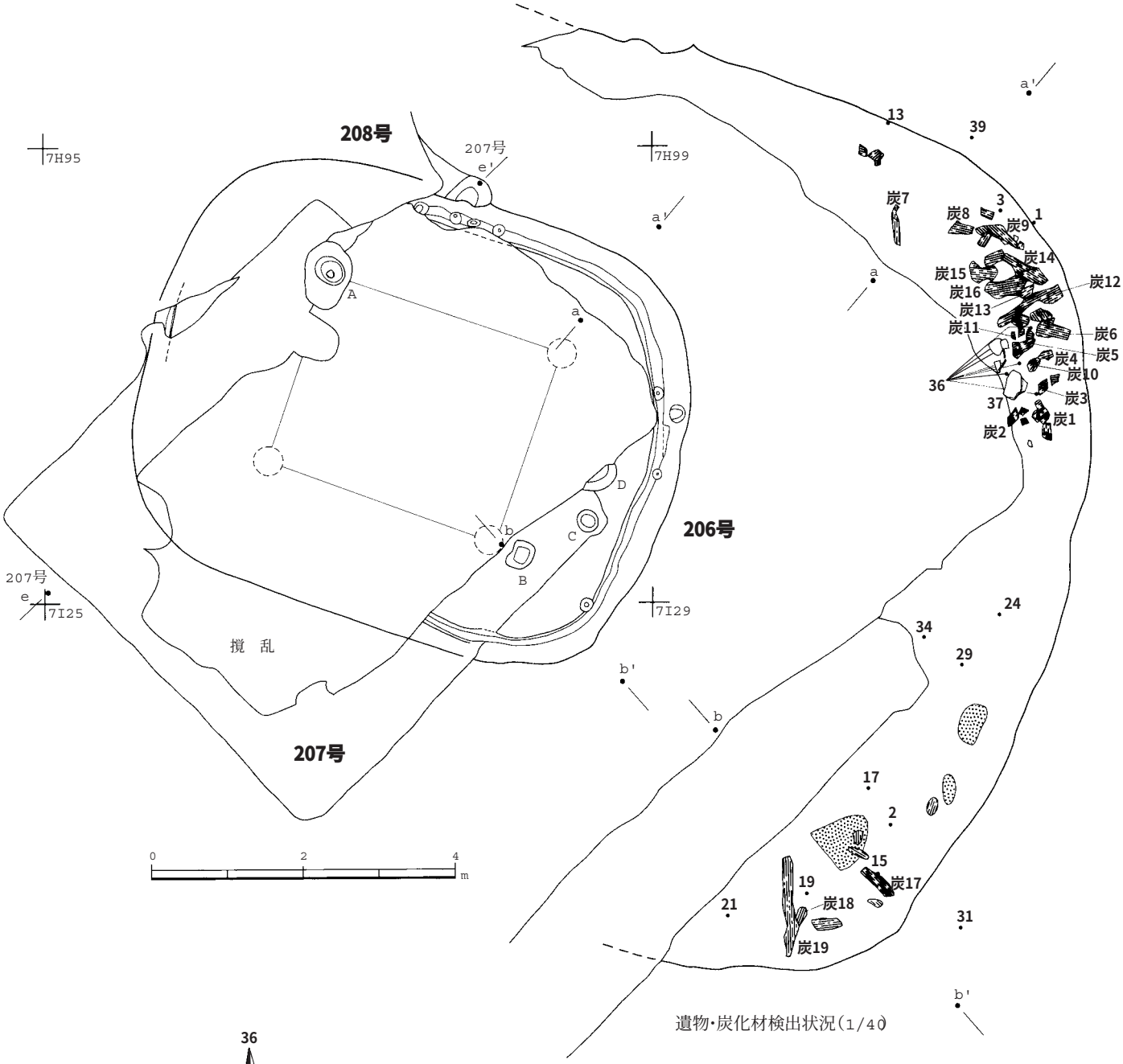
規模（m）：7.2×5.8　**主軸方位**：289°　**貯蔵穴**：不明　**時期**：弥生時代中期後半

Ｄ２区の中ほどに位置し、かなりの部分を撹乱される俵形の竪穴住居跡である。付近の包含層などから検出された弥生土器はここがその供給元かもしれない。

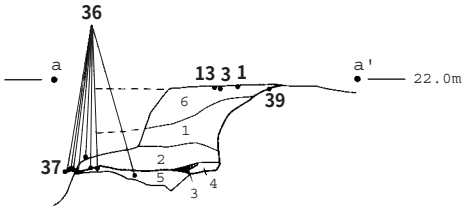
床面の壁沿いには周溝が巡る。柱穴は、207号古墳後期竪穴住居跡の貯蔵穴と考えられるくぼみの下層から、北側のＡだけが確認できた。ほかに、Ｂ・Ｃ・Ｄ（深さ10・20・16㎝）が検出されたが、そのうちＤは出入り口ピットの可能性がある。

竪穴覆土には炭化物が大量に混じっており、東隅に炭化した建材の集中部が認められた。また、焼土も少なからず検出されている。炭化材が多いことから、過程は不明確ながらも、上屋構造が残っているうちに火を受けた可能性が考えられる。炭化材の樹種は、炭３のイヌエンジュを除き、すべてクヌギ節であることが確認されている。

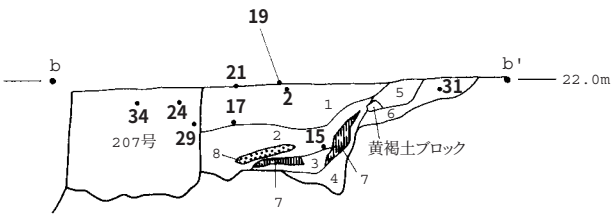
出土した遺物はすべて弥生土器で、甕・壺の破片がほとんどである。一部の壺破片（24・29・34・35）に、微砂が多量に混じる特徴的な胎土を持つ、遺存不良のものが認められた。実見して比較しなければ分からないが、下末吉台地の土器の特徴に類似するようである（安藤1991ａ：註48）。床面直上からは、甕上半（36）・甕下半（37）が出土している。本遺構は宮ノ台式後半に属すると思われる。



遺物･炭化材検出状況(1/40)



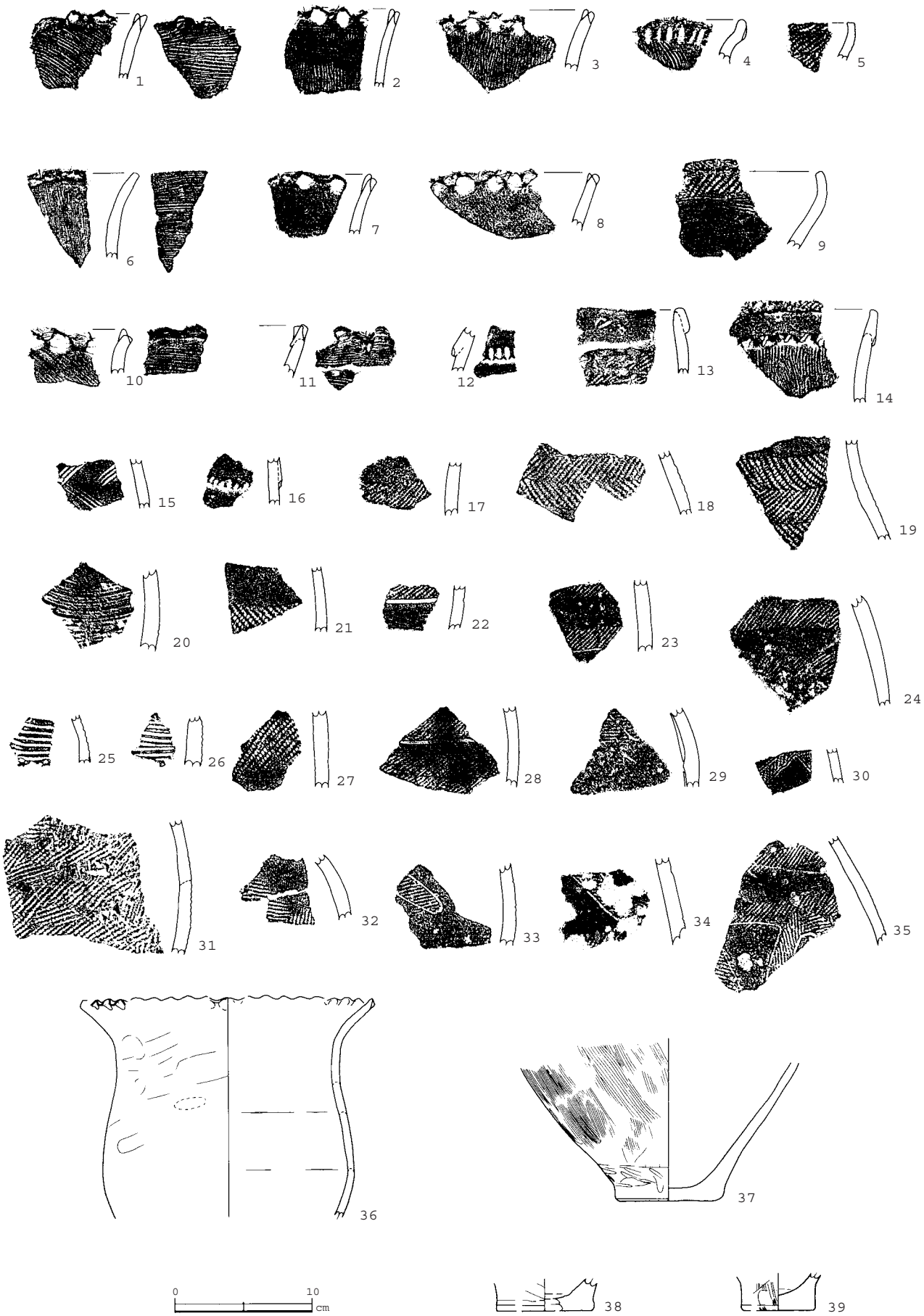
a-a'
1 3/2黒褐 土 黄褐土粒(φ2mm、まれに1cm)多壁に近いほど地山と漸移的 しまる
2 3/1黒褐 土 黄褐土粒(φ2mm)、まれにブロック(～2cm)、焼土粒(～1mm、壁寄りになるほど多い)少 しまる
3 炭化物
4 4/2灰黄褐～3/2黒褐 土 黄褐土粒炭化物粒(～2mm)少 ゆるい 覆土～床面漸移層
5 4/2灰黄褐～3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(～5cm)多まれに炭化物 しまる
6 3/1黒褐に3/2黒褐混じる 土 黄褐土粒･焼土粒(～2mm)混じる しまる



b-b'
1 3/2黒褐 土 黄褐土粒(φ5mm)少、炭化物粒 若干しまる
2 3/1黒褐 土 黄褐土粒(φ3mm)、炭化物粒(～5mm)、焼土粒 若干しまる
3 3/1黒褐～2/1黒 土 黄褐土粒(φ3mm)少 若干ゆるい
4 4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック(～1cm)がまんべんなく混じる 若干ゆるい
5 3/2黒褐～2/1黒 土 しまる 覆土～地山漸移層
6 3/2黒褐～4/2灰黄褐 土 しまる 覆土～地山漸移層
7 焼土ブロック主体層 若干しまる
8 炭化物多含層 若干ゆるい

0 2 m

第18図 206号遺構 焼土・炭化材・遺物出土状況



第19図　206号遺構出土遺物

408号竪穴住居跡（第20～22図）

規模（m）：9.92×7.76　**柱間**：A－B3.84　B－C3.76　C－D3.45　D－A3.67　**主軸方位**：343°

貯蔵穴：円形／東隅　**時期**：弥生時代中期後半

Ｄ３区の東側に位置する大型の俵形竪穴住居である。長軸はほぼ10mに達する。北東部を407号により大きく削られ、他もところどころに撹乱を受ける。Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄが主柱穴、Ｈ・Ｉが出入り口ピット、Ｊ・Ｋが貯蔵穴と思われる。Ｆ・Ｇは用途が不明で、Ｅは竪穴構築以前にあった大木の根の痕跡と見られる。Ｄ３区全体が旧地形では谷に下り始める傾斜変換点にあるため、後世に浸食・削平を受けやすかったようで、本遺構の覆土は最も厚いところで20㎝程度である。

覆土には炭化物ブロックが多く含まれ、床面近くのレベルでは建材起源と思われる炭化物主体の土が面的に広がる。また、焼土もその間に少なからず混じっている。

炭化材は、特に竪穴北半のものについては、並ぶように検出されており、上屋が残ったままの廃絶過程が示唆され興味深い。ただ、柱穴の覆土には平面・断面ともに柱痕跡がなく、掘形に不明確ながら抜き取りの跡が見られるので、柱が抜き取られたうえで、ある程度埋められたようにも思われ、廃絶時には上屋が解体されていた可能性も考えられる。

遺物は、出入り口ピット近辺を中心に床面から弥生土器・石器が出土した。土器は、壺口縁（１）・壺体部（14）・小型甕（15）・甕（16）などで、小型磨製石斧（扁平片刃・柱状片刃）２点も近辺から検出されている。扁平片刃（44）は菫青石ホルンフェルス製、柱状片刃（45）は砂岩製である。26の甕口縁片は注口が付けられており、指頭押圧の装飾がそこだけ抜かされている。大型の壺片（43）は、炉に接して出土していることから、炉の一部として用いられていた可能性が考えられるものである。甕（16）は口縁部と体部の境界に段を持ち、そこに刻み目が施されており、久ヶ原式の甕に近似しているので、本遺構は、弥生中期後半でも終わりに近い時期の所産と思われる。

炭化材は樹種同定の結果、ケヤキ（炭１・３・７・９・10～13・15～17・20～23）・クヌギ節（２・４・５・９～11・14）・クスノキ科（18・19）・樹皮（６）と確認された。

17号竪穴住居跡（第23図上）

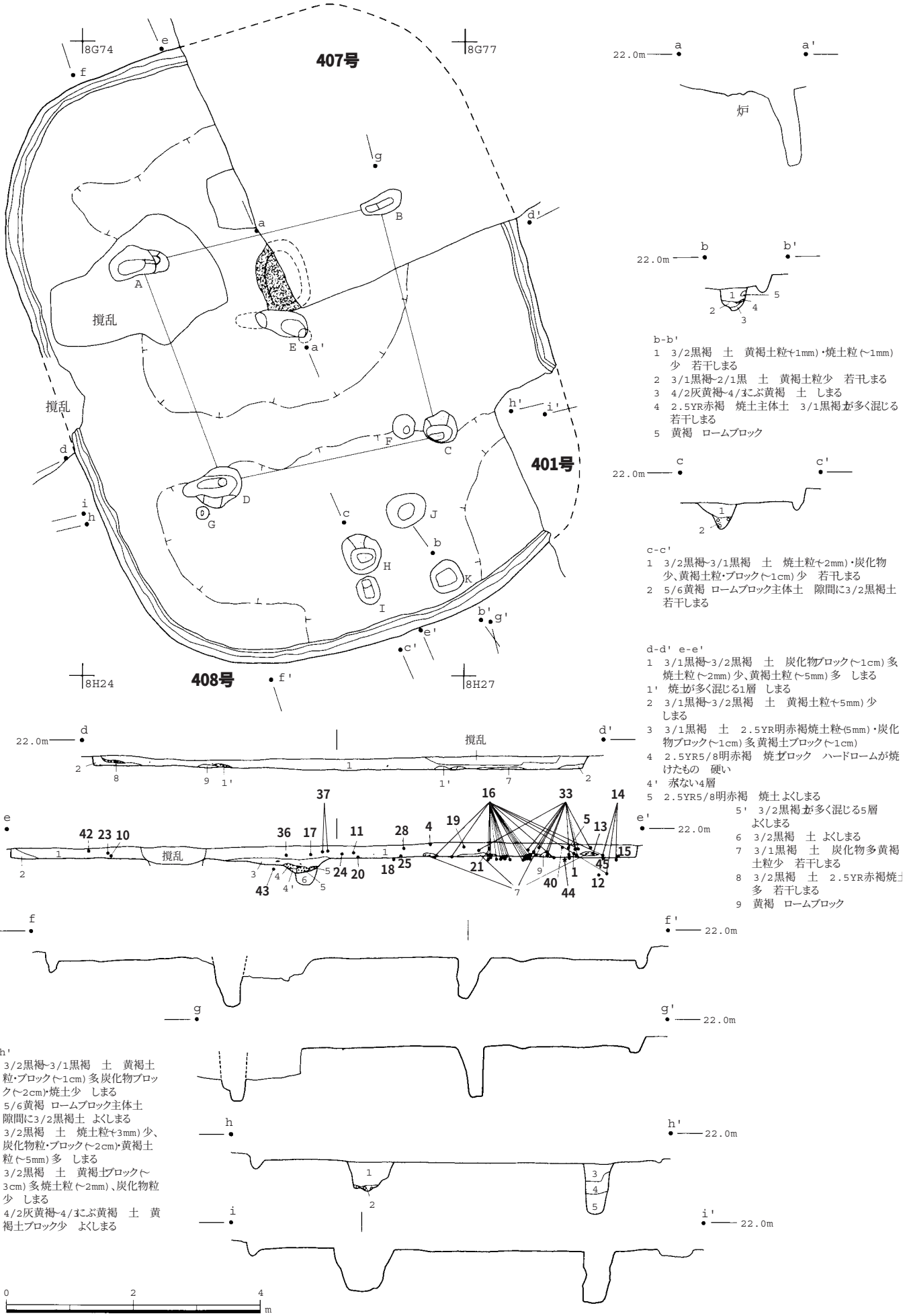
規模（m）：3.4四方？　**主軸方位**：329°？　**貯蔵穴**：円～方形／南東辺　**時期**：弥生時代中期？

大半が調査区外にある隅円方形あるいは俵形の竪穴住居である。主柱穴は不明だが、Ｂが出入り口ピット、Ｃが貯蔵穴と考えられる。掘り込みがしっかりしており、遺構検出面から80㎝以上の深さを持つ。竪穴床面にはＢ周辺を除き周溝が巡る。

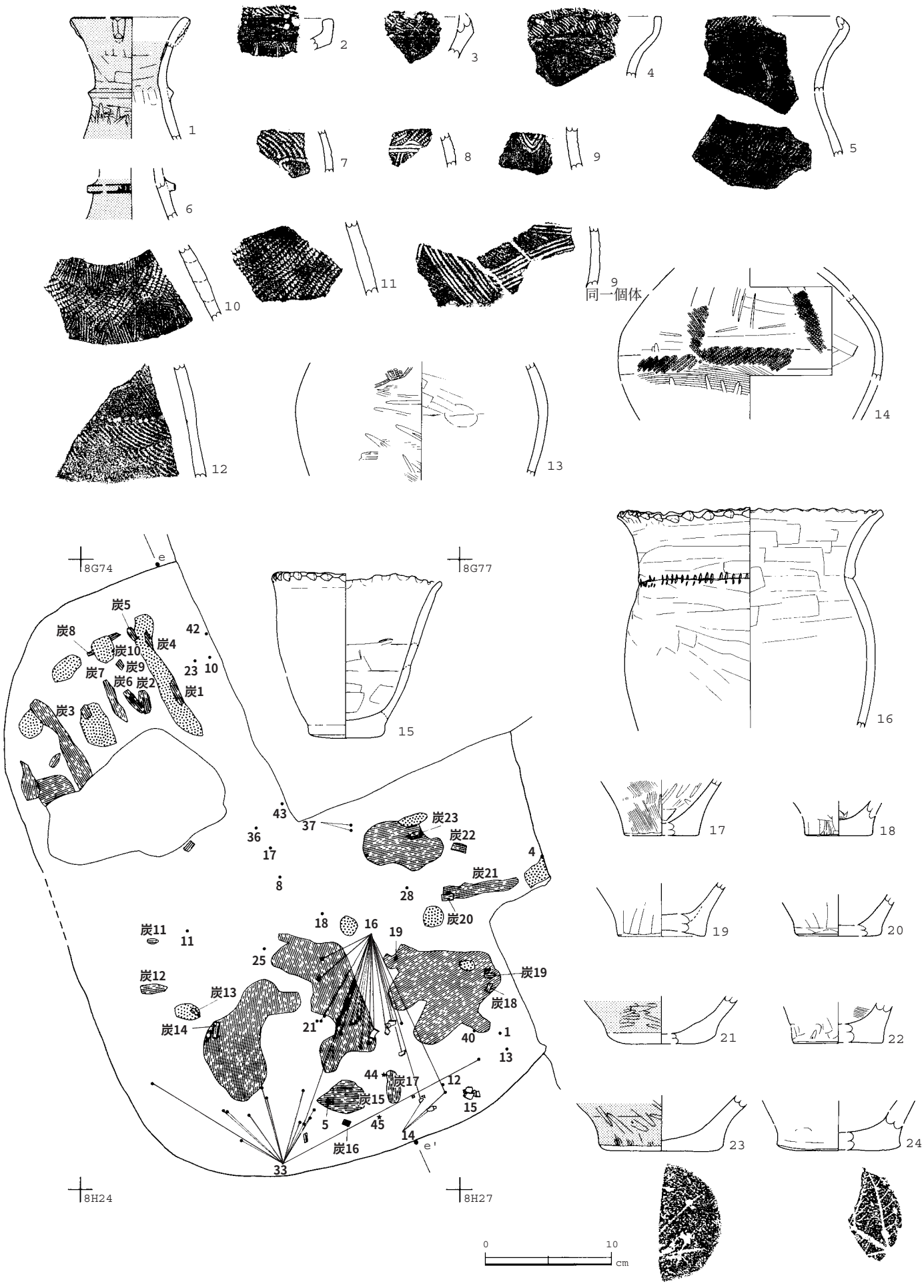
覆土は、下半分が黄褐土ブロックを多く含む層で、埋め戻しが強く示唆される。この土の起源は近傍にある未知の遺構であろうか。なお、焼土・炭化物が全体的に少なかったので、焼却処分を伴ったようには見えない。

遺物は、調査区にかかった面積が狭いため、弥生土器と見られる実測不能の破片が少量出土しただけであった。

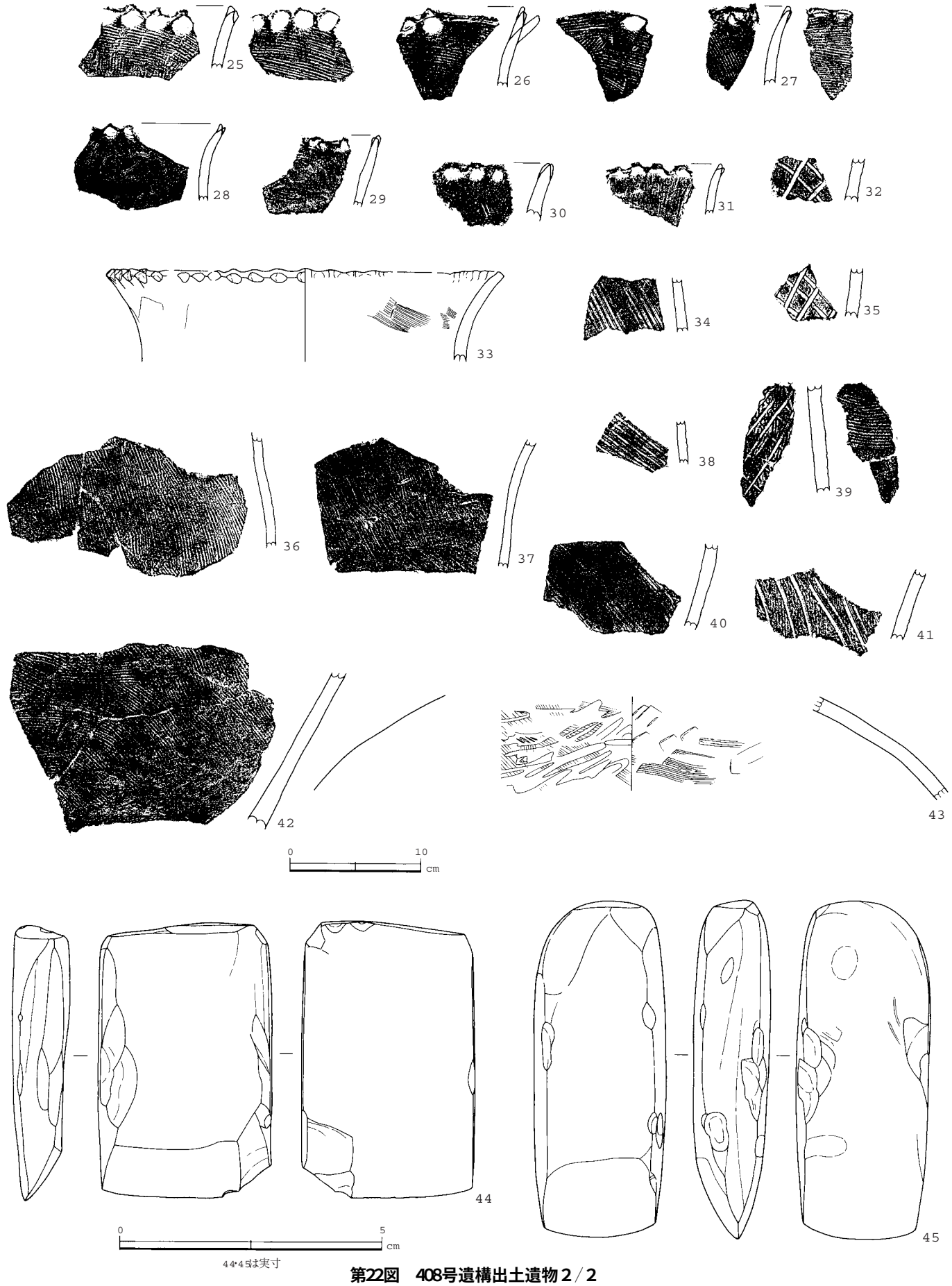
遺物からは確定できないが、竪穴の形状・主軸方位から弥生中期の所産である可能性が考えられる。覆土中のテフラの様相は、堆積下層の埋め戻し土中に弥生時代前半のものの見られたことが特筆されるが、遺構の時期を確定するには至らなかった。


407号
401号
408号
8G74
8G77
8H24
8H27
撹乱
炉
a
a'
b
b'
c
c'
d
d'
e
e'
f
f'
g
g'
h
h'
i
i'
22.0m
b-b'
1 3/2黒褐 土 黄褐土粒(~1mm)・焼土粒(~1mm) 少 若干しまる
2 3/1黒褐~2/1黒 土 黄褐土粒少 若干しまる
3 4/2灰黄褐~4/3にぶ黄褐 土 しまる
4 2.5YR赤褐 焼土主体土 3/1黒褐土が多く混じる 若干しまる
5 黄褐 ロームブロック
c-c'
1 3/2黒褐~3/1黒褐 土 焼土粒(~2mm)・炭化物少、黄褐土粒・ブロック(~1cm) 少 若干しまる
2 5/6黄褐 ロームブロック主体土 隙間に3/2黒褐土 若干しまる
d-d' e-e'
1 3/1黒褐~3/2黒褐 土 炭化物ブロック(~1cm) 多 焼土粒(~2mm) 少、黄褐土粒(~5mm) 多 しまる
1' 焼土が多く混じる1層 しまる
2 3/1黒褐~3/2黒褐 土 黄褐土粒(~5mm) 少 しまる
3 3/1黒褐 土 2.5YR明赤褐焼土粒(5mm)・炭化物ブロック(~1cm) 多 黄褐土ブロック(~1cm)
4 2.5YR5/8明赤褐 焼土ブロック ハードロームが焼けたもの 硬い
4' 赤い4層
5 2.5YR5/8明赤褐 焼土 よくしまる
5' 3/2黒褐土が多く混じる5層 よくしまる
6 3/2黒褐 土 よくしまる
7 3/1黒褐 土 炭化物多 黄褐土粒少 若干しまる
8 3/2黒褐 土 2.5YR赤褐焼土多 若干しまる
9 黄褐 ロームブロック
h-h'
1 3/2黒褐~3/1黒褐 土 黄褐土粒・ブロック(~1cm) 多 炭化物ブロック(~2cm)・焼土少 しまる
2 5/6黄褐 ロームブロック主体土 隙間に3/2黒褐土 よくしまる
3 3/2黒褐 土 焼土粒(~3mm) 少、炭化物粒・ブロック(~2cm)・黄褐土粒(~5mm) 多 しまる
4 3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~3cm) 多 焼土粒(~2mm)、炭化物粒少 しまる
5 4/2灰黄褐~4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック少 よくしまる
0 2 4 m

第20図　408号遺構

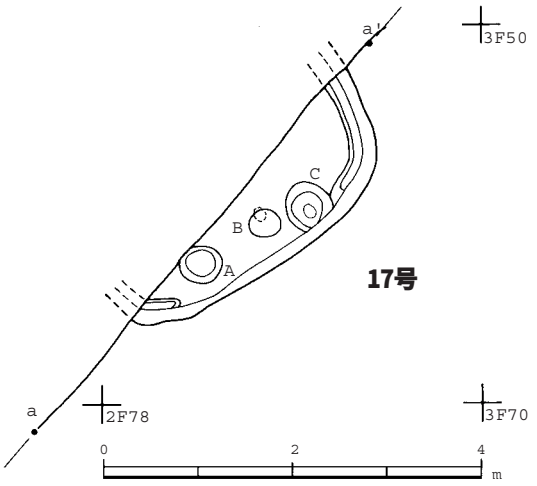


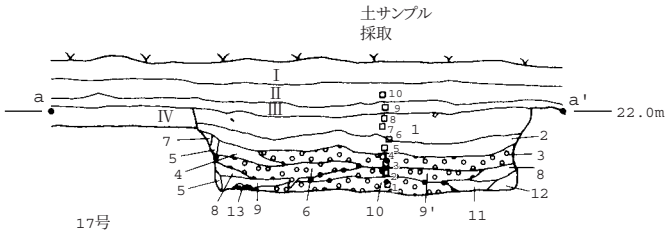
第21図　408号遺構　焼土・炭化材・遺物検出状況および出土遺物１/２



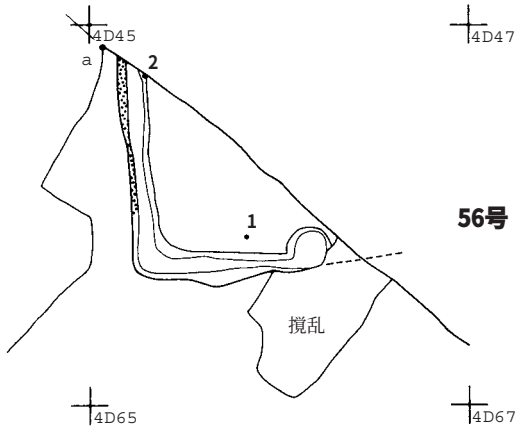
44・45は実寸

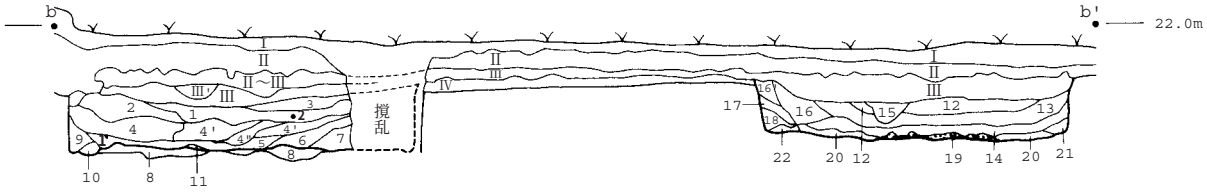
第22図　408号遺構出土遺物２／２



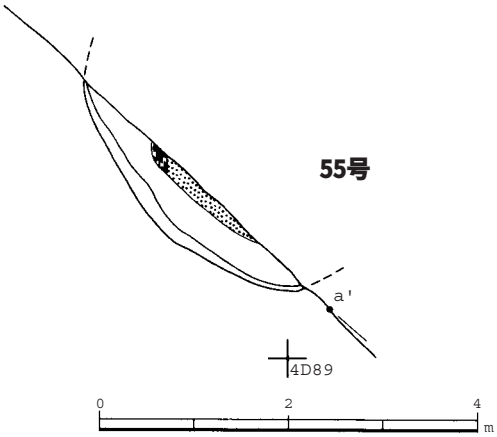


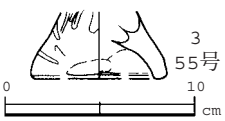
17号
a-a'
1 3/1黒褐~4/2灰黄褐のぶち 土 黄褐土粒(~1mm)・褐焼土状粒混じる しまる
2 3/1黒褐~4/2灰黄褐のぶち 土 黄褐土粒(~2mm)・黄褐土ブロック(~1.5cm)少しまる
3 3/1黒褐~3/2黒褐~4/2灰黄褐のぶち 土 黄褐土粒(~5mm)、黄褐土ブロック(~5cm)少 しまる
4 2/1黒~3/2黒褐のぶち少 土 黄褐土粒ほとんどなし
5 3/2黒褐~褐ぶち少 土 炭化物粒少
6 3/3暗褐~黒褐ぶち 土 黄褐土ブロック(~1cm)多
7 4/4褐 土しまる 地山~覆土漸移層
8 3/1黒褐 土 黄褐土粒(~3mm)
9 2/1黒 土 黄褐土粒(~3mm)少 若干しまる
9' 黄褐土粒ブロックの多い9層 若干しまる
10 3/1黒褐 土 黄褐土粒ブロック(~4cm)多 しまる
11 3/1黒褐 土 黄褐土粒ブロック(~1cm)少 しまる
12 2/1黒 土 黄褐土粒少ブロック(~5cm) しまる
13 ハードロームブロック 硬い



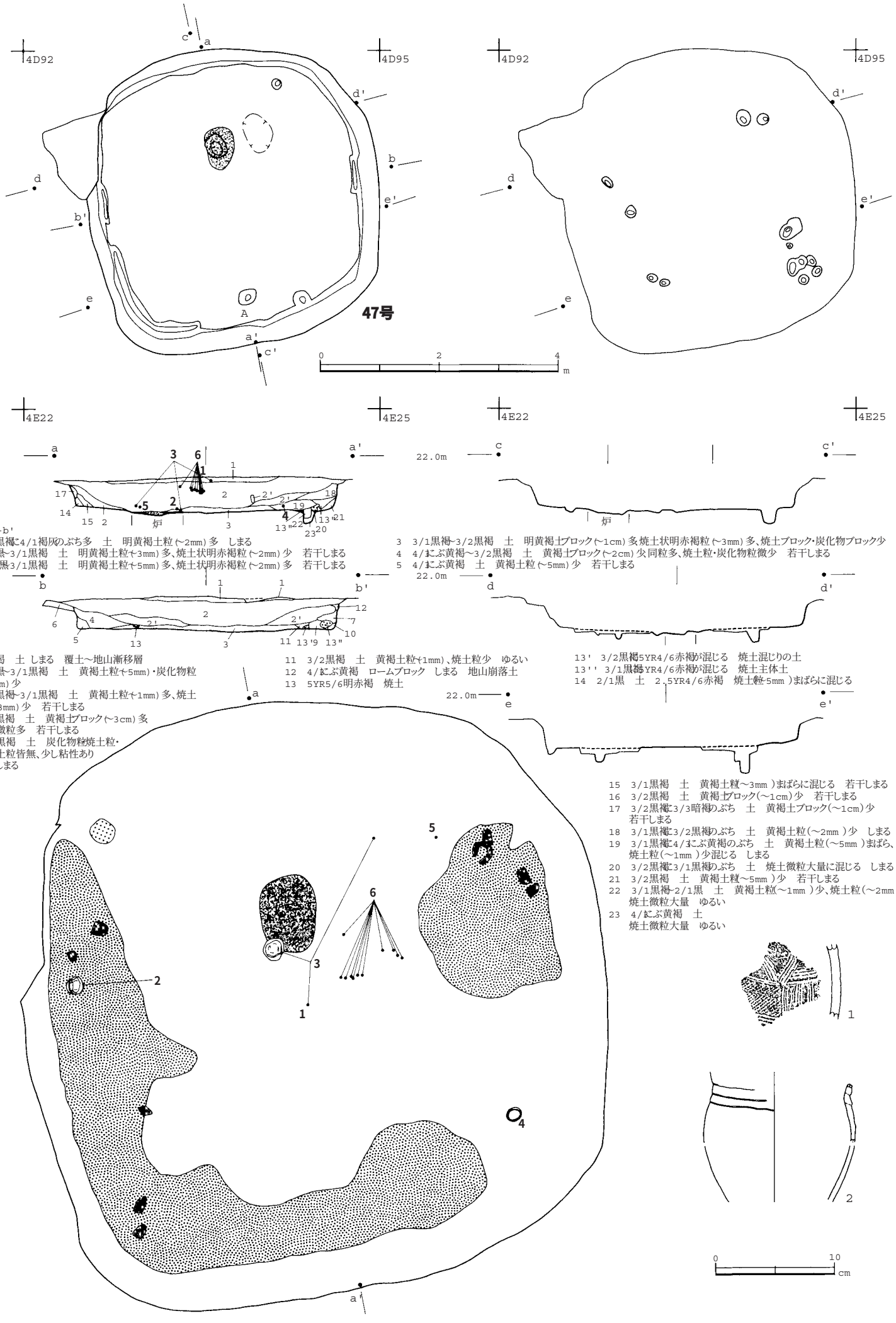


b-b'
1 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)、炭化物粒(~5mm)・焼土粒(~2mm)少 若干しまる
2 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)まれに3cm、炭化物粒(~5mm)、焼土粒(~2mm)少 若干しまる
3 3/1黒褐~3/2黒褐 土 黄褐土粒(~3mm)多、炭化物粒(~3mm)まれ、焼土粒(~2mm)少 若干しまる
4 3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~3cm)多炭化物ブロック(~1cm)多焼土粒(~2mm)少 若干しまる
4' 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(~3cm)多炭化物ブロック(~1cm)多焼土粒(~2mm)少 若干しまる
4'' 黄褐土ブロック大きく炭化物少ない4層
5 3/2黒褐~3/1黒褐 土 黄褐土粒(~5mm)多・ブロック少、炭化物ブロック(~1cm)・焼土粒(~2mm)少 若干しまる
6 2/1黒 土 黄褐土ブロック(~1cm)・炭化物ブロック(~1cm)多焼土粒(~2mm)混じる 若干しまる
7 3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)多炭化物ブロック(~2cm)少焼土粒(~2mm)混じる 若干しまる
8 4/6褐 土 焼土状粒(~2mm)少 硬い 床面構築土
9 2/1黒 土 黄褐土粒(~3mm)少、炭化物粒(~5mm)まれ、焼土粒(~2mm)混じる 若干ゆるい
10 2/1黒~3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(~2mm)多、炭化物粒(~5mm)少、焼土粒混じる 若干しまる
11 4/4褐 土 5層~8層の漸移層 若干しまる
12 3/2黒褐に3/1黒褐が混じる 土 黄褐土粒(~3mm) しまる 以下の層は、造成のため硬化している
13 3/1黒褐~2/1黒 土 黄褐土ブロック(~1cm)多炭化物粒(~2mm)少、焼土粒(~1mm)少 しまる
14 3/3暗褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)多 しまる
15 3/1黒褐 土 黄褐土粒(~5mm) しまる
16 3/2黒褐~3/1黒褐 土 黄褐土粒(~3mm)多、焼土粒(~1mm)少 しまる
16' 4/3ぶ黄褐 土 黄褐土粒・焼土粒少 しまる
17 3/3暗褐 土 黄褐土粒(~2mm)少 しまる
18 3/2黒褐~3/3暗褐 土 黄褐土粒(~5mm)多 しまる
19 3/2黒褐に5YR4/6赤褐が混じる 焼土主体土
ロームブロックが焼けた感じ しまる
20 3/1黒褐~2/1黒 土 黄褐土ブロック
~1cm)、焼土ブロックまれ しまる
21 2/1黒 土 黄褐土粒(~5mm)少
しまる
22 4/4褐 土 しまる





第23図 17号・55号・56号遺構および出土遺物



a-a' b-b'
1 3/2黒褐~4/1褐灰のぶち多　土　明黄褐土粒(~2mm)多　しまる
2 2/1黒~3/1黒褐　土　明黄褐土粒(~3mm)多、焼土状明赤褐粒(~2mm)少　若干しまる
2' 2/1黒3/1黒褐　土　明黄褐土粒(~5mm)多、焼土状明赤褐粒(~2mm)多　若干しまる
3 3/1黒褐~3/2黒褐　土　明黄褐土ブロック(~1cm)多焼土状明赤褐粒(~3mm)多、焼土ブロック・炭化物ブロック少
4 4/3にぶ黄褐~3/2黒褐　土　黄褐土ブロック(~2cm)少同粒多、焼土粒・炭化物粒微少　若干しまる
5 4/3にぶ黄褐　土　黄褐土粒(~5mm)少　若干しまる
6 4/4褐　土　しまる　覆土~地山漸移層
7 2/1黒~3/1黒褐　土　黄褐土粒(~5mm)・炭化物粒(~1mm)少
8 3/2黒褐~3/1黒褐　土　黄褐土粒(~1mm)多、焼土粒(~3mm)少　若干しまる
9 3/2黒褐　土　黄褐土ブロック(~3cm)多　焼土微粒多　若干しまる
10 3/1黒褐　土　炭化物粒焼土粒・黄褐土粒皆無、少し粘性あり　若干しまる
11 3/2黒褐　土　黄褐土粒(~1mm)、焼土粒少　ゆるい
12 4/3にぶ黄褐　ロームブロック　しまる　地山崩落土
13 5YR5/6明赤褐　焼土
13' 3/2黒褐~5YR4/6赤褐が混じる　焼土混じりの土
13'' 3/1黒褐~5YR4/6赤褐が混じる　焼土主体土
14 2/1黒　土　2.5YR4/6赤褐　焼土粒(~5mm)まばらに混じる
15 3/1黒褐　土　黄褐土粒(~3mm)まばらに混じる　若干しまる
16 3/2黒褐　土　黄褐土ブロック(~1cm)少　若干しまる
17 3/2黒褐~3/3暗褐のぶち　土　黄褐土ブロック(~1cm)少　若干しまる
18 3/1黒褐~3/2黒褐のぶち　土　黄褐土粒(~2mm)少　しまる
19 3/1黒褐~4/3にぶ黄褐のぶち　土　黄褐土粒(~5mm)まばら、焼土粒(~1mm)少混じる　しまる
20 3/2黒褐~3/1黒褐のぶち　土　焼土微粒大量に混じる　しまる
21 3/2黒褐　土　黄褐土粒(~5mm)少　若干しまる
22 3/1黒褐~2/1黒　土　黄褐土粒(~1mm)少、焼土粒(~2mm)・焼土微粒大量　ゆるい
23 4/3にぶ黄褐　土　焼土微粒大量　ゆるい

第24図　47号遺構　焼土・炭化材・遺物検出状況および出土遺物1/2

55号竪穴住居跡（第23図下）

規模（m）：不明　**主軸方位**：不明　**貯蔵穴**：不明　**時期**：弥生時代中期？

調査区東端に位置する、円形が予想される竪穴住居で、ほとんどの部分が調査区外にある。掘り込みはしっかりとしており、遺構検出面から50㎝前後の深さがある。床面直上には焼土・炭化物が堆積し、焼失あるいは廃絶時の焼却処分が示唆される。

遺物は弥生土器が少量得られただけである。３は脚台部である。時期の確定はしがたいが、今回の調査で中期の竪穴住居が比較的多く見られたので、弥生中期宮ノ台式期に属すると考えたい。

47号竪穴住居跡（第24・25図）

規模（m）：5.0×4.9　**主軸方位**：352°　**貯蔵穴**：なし　**時期**：弥生時代後期前半

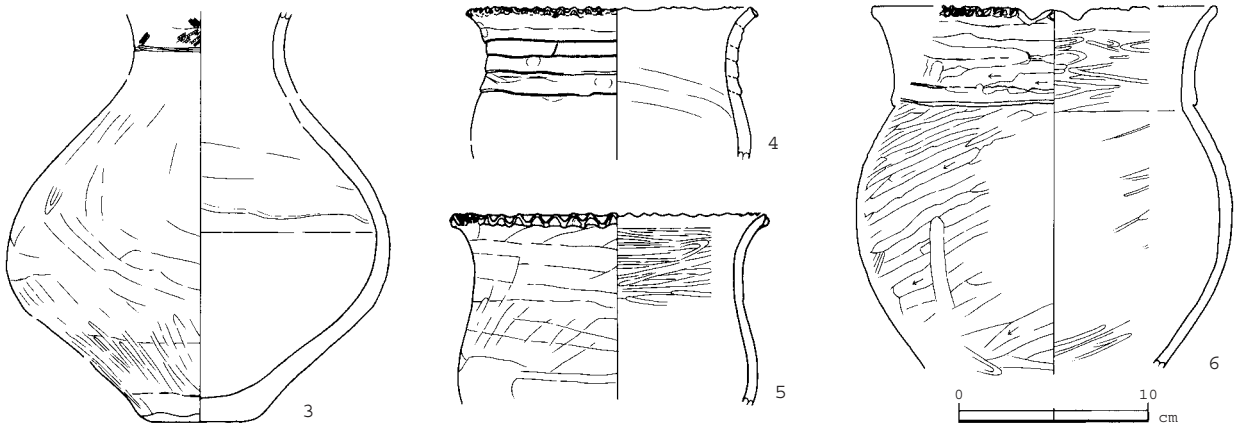
調査区の北東部にある隅円方形竪穴住居である。一部、撹乱を受けるが、遺存状態は良好である。床面は、壁際に溝が巡り、楕円形の地床炉と、出入口ピットＡが検出されている。炉の脇には硬化部が見られた。主柱穴は、床面土を掘り下げて精査した後も、明確なものは検出できなかった（第24図右上）。上屋に関する遺構が、穴として残らないような構造であったとも考えられる。

覆土は、上層の厚い黒色土が床面に向かい漸移的に濃くなっていくのが特徴的で、この層の堆積過程が自然によるものであったことを示していると考えられる。最下層は平面でいうとドーナツ状に、断面でいうと浅い摺り鉢状に、焼土・炭化物・完形の土器が堆積しており、竪穴廃絶時にこれらが一気に埋積し、その後、上の黒色土層が漸移的に溜まっていったことを示唆している。本遺構の廃絶が人為的に行われたことが想定できる。

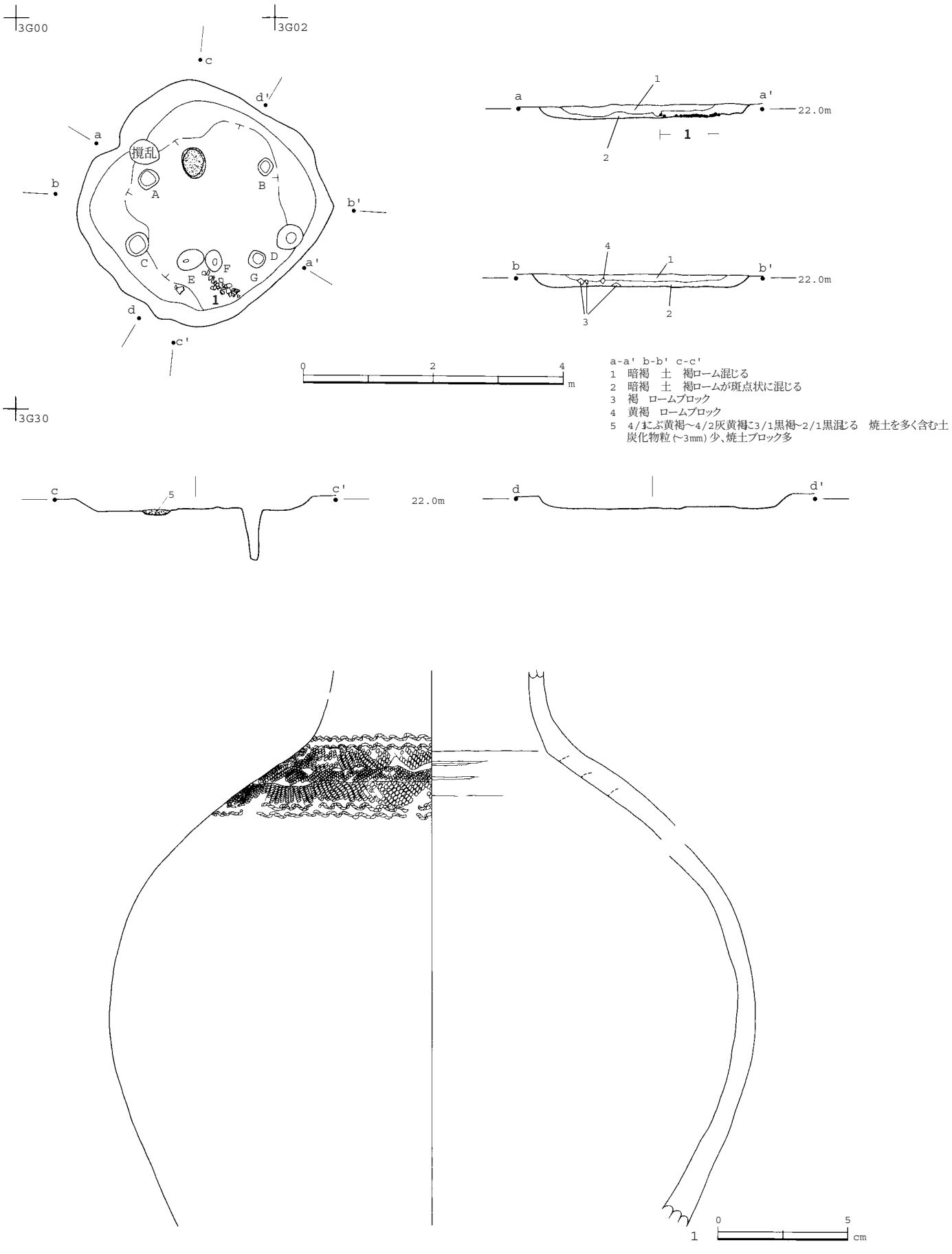
遺物はすべて弥生後期久ヶ原式の土器である。床面直上から、焼土に埋没するかたちで甕・壺が検出された。甕（４）・甕（５）は伏せられた状態で検出されており、下半を揃って欠失しているのが特徴的である。壺（３）は炉の脇で正置された状態で検出された。

いずれの土器も上半・下半が遺存しないのは、一次埋没土の堆積にかかった時間とその深さが関係しているのかもしれない。

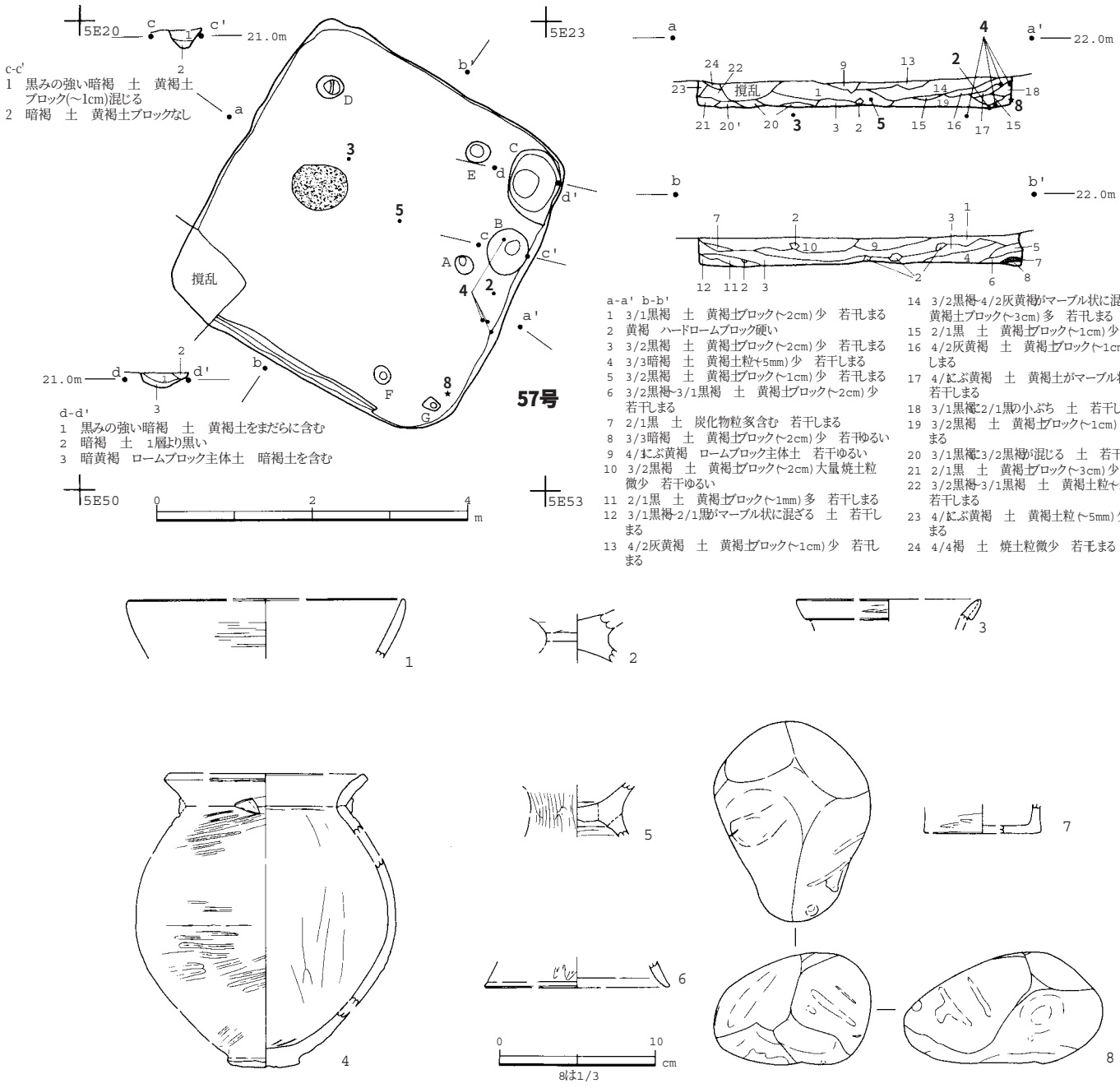
屈曲の弱いくびれ部の甕（４～６）と沈線文による区画を持つ壺（３）の存在から、本遺構は弥生後期前半久ヶ原式期のものであると思われる。



第25図　47号遺構出土遺物２／２



第26図　20号遺構および出土遺物



第27図　57号遺構および出土遺物

20号竪穴住居跡（第26図）

規模（m）：長軸3.5／短軸3.4　**主軸方位**：３°　**貯蔵穴**：円形／南隅？　**時期**：弥生後期後半

後代に強く削平を受けた竪穴住居跡である。遺存状態は悪く、壁高は最大で22㎝しかない。竪穴掘形は緩やかに立ち上がるように検出されている。床面には、壁近くを除き硬化が認められる。主柱穴は不明で、プランの確定ができなかったが、炉の位置から、ＥかＦが出入口ピットであると思われる。なお、上記の主軸方位はＥが出入り口ピットと仮定した場合のものである。

覆土は、暗褐土が主体の漸移的なもので、埋め戻し等は確認できなかった。

遺物は、Ｅと南壁の間の床面から、Ｚ字状結節文（無節Ｒ）を上下に伴う単節縄文帯の施された壺（１）が検出された。この土器の特徴から、本遺構は弥生後期後半の所産だと思われる。

なお、隣接する古墳時代竪穴住居跡21号の検出状態を見ると、縄文時代と同じく弥生時代の遺構の中にも、掘り込みが浅かったがために削平され、遺存できなかったものが近辺にあると予想される。

57号竪穴住居跡（第27図）

規模（m）：4.1×4.2　**主軸方位**：299°　**貯蔵穴**：円形？　**時期**：弥生時代終末期

調査区東端近くで検出された、西コーナーが撹乱を受ける方形竪穴住居跡である。床面にはっきりと硬化した部分はなかった。中央北西寄りに地床炉があり、反対側に出入り口ピットAがある。南西の壁際には一部周構が見られる。Aの脇にあるBが貯蔵穴と思われる。C・D・E・F・Gはそれぞれ床面から、18・26・20・18・18㎝の深さである。柱穴は床面構築土を掘り下げた後も検出できなかった。穴として残らないような構造の上屋だったと考えておきたい。

覆土は漸移的な黒褐土層にまばらに黄褐土ブロックが混じるものである。

遺物は弥生終末期の土器片がごく少量と石が出土した。土器には、破片ではあるが、タタキ成形の施される「く」の字状口縁の甕（４）が含まれていた。補強のためか、口縁屈曲部外面の一部に粘土紐を追加しており、輪積痕甕の手法の混入例として興味深い。胎土は赤っぽく在地のものと思われる。タタキ成形甕の類例は、国分寺台地区では、蛇谷遺跡（須田・新田他1977）・神門３・４・５号墳（田中1991ａ・ｂ）・中台遺跡・南中台遺跡・天神台遺跡で知られている（菊池1990）。

竪穴の形状と、タタキ成形甕の存在、無文化の傾向から弥生終末期の遺構と考えられる。

第４節　古墳時代

今回の調査区において主体を占める時期である。時期の明確なもののほとんどが中期後半と後期・終末期の竪穴住居跡である。前者が16棟（４・９・13・14・34・44・51・52・200・202・203・208・210・301・401・407号）、後者が14棟（６・21・27・32・46・201・204・207・403・404・405・406・411・415号）で、詳細不明のものが２棟（56・58号）である。出土遺物の様相から、後期前半、須恵器ＭＴ15式並行期前後に属する遺構が見られないことが分かった。

鬼高式期の時期的な特徴か、遺構の掘り込みは深いものが多く、遺物も他の時期に比べて多量に出土する傾向があった。他の時代と一様に浸食・削平を受けているとすれば、機能時の竪穴の深さはかなりのものと推察される。また、覆土の下層に焼土・炭化物の検出されることも一般的であった。

13号の１例だけではあるが、覆土上層にロームブロックを投入して形成されたと考えられる硬化面が存在し、その面からも竪穴内に近い規模の遺物が検出されるという事例が確認された。

カマドは中期後半期から存在し、中期後半のものは東（北東辺）・南向き、かつ隅寄りに、後期以降は北辺中央に構築されるという、はっきりした傾向が認められた。遺物が最も古相を示すと思われる４・14・401号はいずれも東に構築されているが、上総地域では一般的に最初期のカマドは南側に構築されると言われているので、200・208号の方が先行する可能性もある。

須恵器は、405号内の土器集中でまとまってＴＫ43式の杯が出土したのを除けば、51号床面で検出された鼈１個体（ＴＫ208～ＴＫ23式）がほぼ完形で見られたぐらいで、他は土師器が主体のところに破片が少し混じる程度の出土量である。

滑石製品がまとまって出土したのは13号だけであるが、いくつかの遺構から散発的に出土が見られるので、調査時に見逃した可能性も考えられる。

４号方形竪穴住居跡（第28～32図）

規模（m）：7.6四方　**柱間**：Ａ－Ｂ3.88　Ｂ－Ｃ3.76　Ｃ－Ｄ3.84　Ｄ－Ａ3.76　**主軸方位**：38°

貯蔵穴：長方形　長軸1.18・短軸0.9／東隅　**時期**：古墳時代中期後半

大型の方形竪穴住居である。東隅に長方形の貯蔵穴Ｊ、北東辺の東寄りにカマドがある。床面はまんべんなく硬化しており、壁際には深さ数㎝の周溝がほぼ全周する。主柱穴はＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄで、それぞれに柱抜き取りのためと思われる内側からの掘り込みがある。各柱穴覆土断面に柱痕が見られなかったことと、Ｃ覆土上位から完形の小型鉢が出土したことからすると、竪穴廃絶時に柱の抜き取りが行われたものと思われる。Ｅは出入り口ピットと考えられる。ほかに、南柱穴の脇に間仕切りかと思われる浅い溝Ｉが検出された。これの軸はカマドの中心に近いところで揃うので、カマド設置に竪穴の仕切が影響を与えた、あるいはその逆の可能性がある。

カマドは竪穴の北東辺の東寄りにあり、遺存はそれほど良くない。カマド材の粘質土が黒色土にかぶさるかたちで検出されたので、竪穴廃絶時にはカマドが崩れていたように見受けられる。なお、支脚は検出できなかった。また、床面近くのレベルで土師器が多く検出されているが、カマド近辺と貯蔵穴に集中することが認められた。

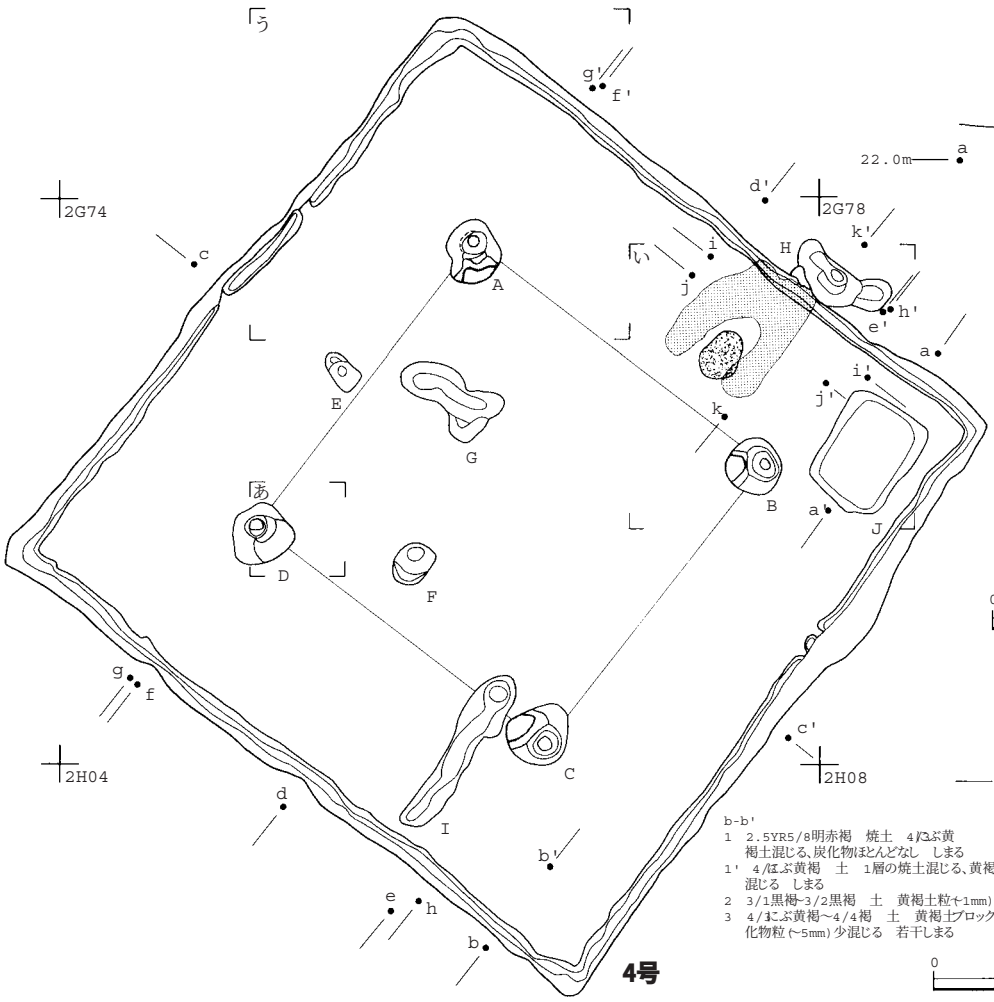
覆土は、竪穴中央のもっとも薄いところで15㎝の厚みを持つ下層が、検出面まで厚く堆積した上層に比べてかなり色が淡く、また、ロームブロックを含むことが認められた。このことから、埋め戻しが行われた可能性が考えられる。

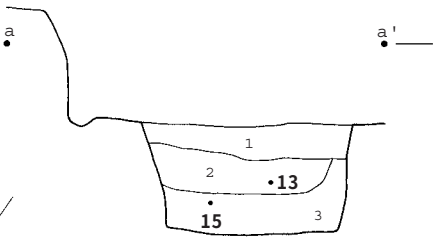
これらの状況からすると、竪穴の廃絶時に、柱の抜き取りにとともに、カマドの廃絶など儀礼活動が行われたものと思われる。支脚が検出されないのは意図的な行為の結果であろう。焼土は検出されたのが最下層とは言えないものの、レンズ状に初期の堆積に沿って見られるので、一連の過程の最後に焼却処分が行われたことを示すと考えられる。

遺物は土師器がほとんどで、他に須恵器・土玉（35・36）・砂岩製砥石（33）がある。土師器には、床面に口縁を接し、カマドと北隅の間に倒立して検出された完形の甕（３）をはじめ、貯蔵穴内出土の、脚部に３方の方形透かしを持つ須恵器模倣の高杯（13)、定型化以前の低脚高杯（18）など、鬼高式古相の特徴を持つものが多い。これらの土器から、本遺構は古墳中期後半に属すると思われる。

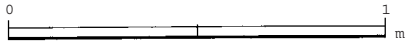
貯蔵穴出土の須恵器模倣精製土師器の高杯（13）は、一見、有蓋高杯を模したものに思われるが、変形を被っているので、どの須恵器型式と対応するかは確定できない。加茂遺跡Ａ地点110号遺構出土の須恵器模倣精製高杯（赤彩はなく緻密なヘラミガキで仕上げられる。脚部の透孔は同じく３方向）は、４方透孔の須恵器無蓋高杯（ＴＫ208式）・鬼高式古相の丸底杯部の高杯・須恵器杯模倣杯部の高杯（赤彩）を伴っており、須恵器模倣といっても忠実にすべての形状を写しているわけではないことが確認されている（田中清美・木對和紀の教示による。巻頭図版参照）ので、模倣土師器の形態的特徴を須恵器にそのまま求めて時期比定するのは有効でないと思われる。この土器もまた、３方透孔などの形状によって対応する須恵器型式を考えるよりは、布留系大型高杯（１）など他の土器との共伴関係を優先すべきだと思われる。

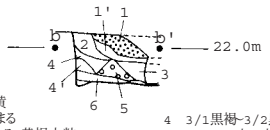
なお、この土器の小片が東側にある６号の覆土中・床面構築土中から検出され、接合できたので、接合関係からも、本遺構が６号に先行することが明らかである。



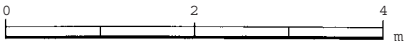


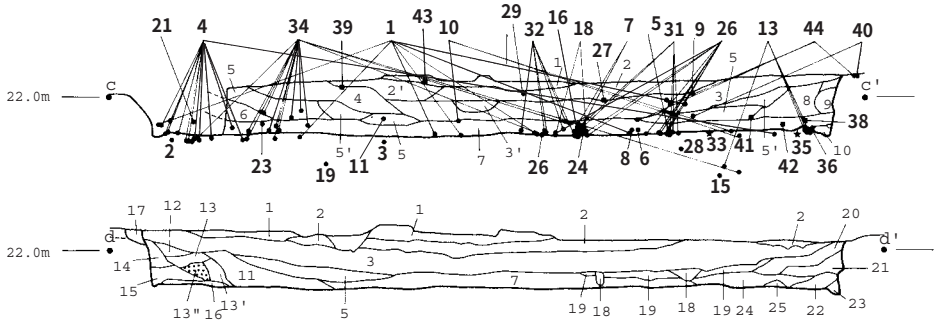
a-a'
1 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(~3cm)、焼土粒・炭化物粒(~3mm)多 しまる
2 3/2黒褐 土 黄褐土粒(~5mm)多、ブロック(~5cm)少 炭化物ブロック(~5cm)少 焼土粒(~5mm)少 しまる
3 3/2黒褐~4/3にぶ黄褐 土 黄褐土粒(~5mm)、黄褐土ブロック(~5cm)少 焼土粒(~3mm)少、炭化物粒微少 しまる





b-b'
1 2.5YR5/8明赤褐 焼土 4/3にぶ黄褐土混じる、炭化物ほとんどなし しまる
1' 4/3にぶ黄褐 土 1層の焼土混じる、黄褐土粒(~5mm)混じる しまる
2 3/1黒褐~3/2黒褐 土 黄褐土粒(~1mm)混じる しまる
3 4/3にぶ黄褐~4/4褐 土 黄褐土ブロック(~2cm)多 炭化物粒(~5mm)少混じる 若干しまる
4 3/1黒褐~3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)少 若干しまる
4' 4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック(~3cm)少
5 5/6黄褐 ロームブロック主体土 しまる
6 4/2灰黄褐 土 黄褐土混じる 若干ゆるい



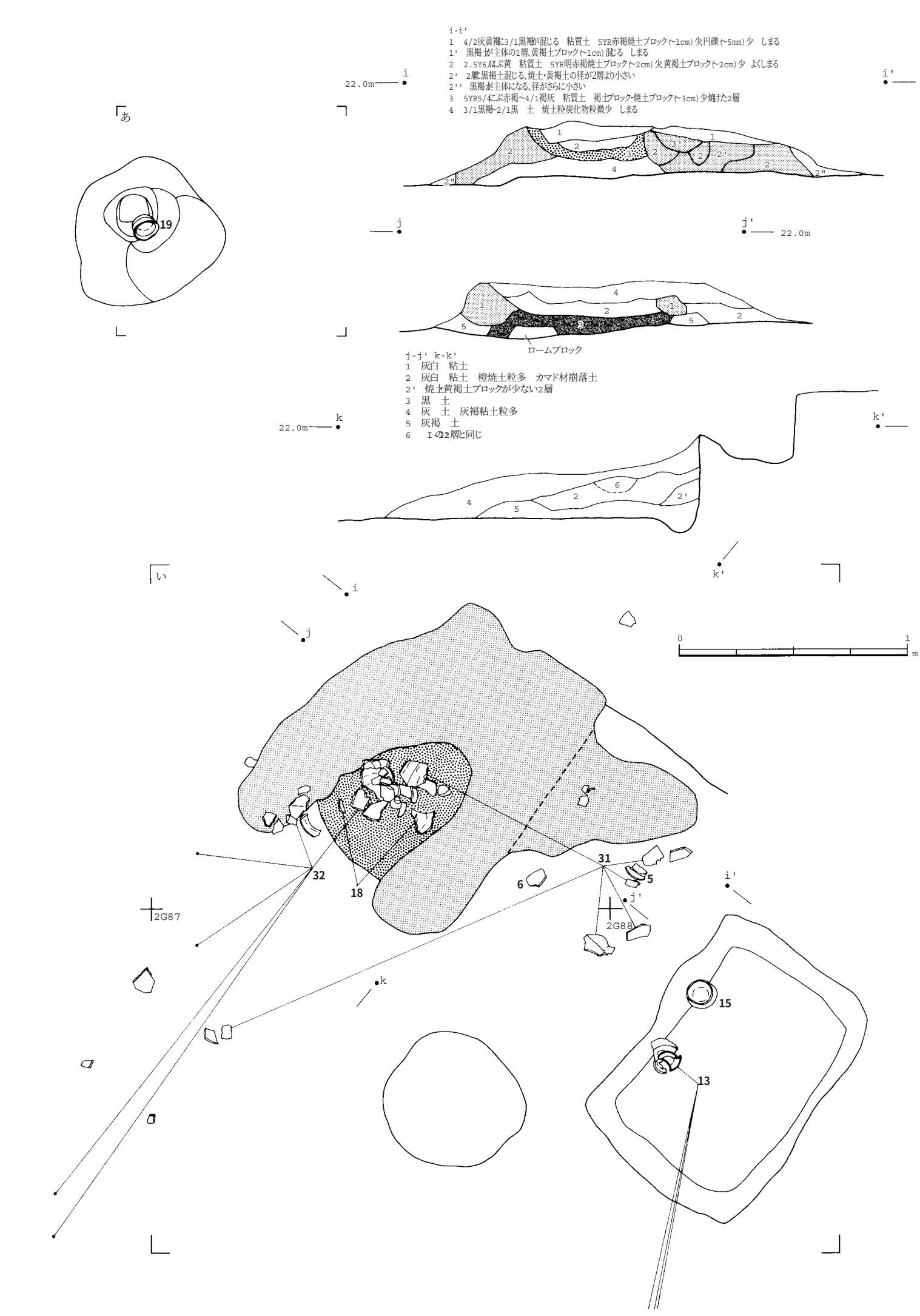


c-c' d-d'
1 4/2灰黄褐~3/2黒褐 土 焼土状粒(~2mm)、黄褐土粒(~3mm)混じる 若干しまる
2 3/1黒褐~3/2黒褐のぶち 土 黄褐土粒(~2mm)少 若干しまる
2' 3/2黒褐黒のぶち 土 黄褐土粒(~2mm)少 若干しまる
3 3/1黒褐~3/2黒褐~4/2灰黄褐のぶち多 土 焼土状粒微少、黄褐土粒(~3mm)混じる 若干ゆるい
3' 3層炭化物粒が入る
4 3/1黒褐~3/2黒褐のぶちが少 土 焼土粒・炭化物粒まじる 若干しまる
5 3/1黒褐~3/2黒褐のぶちが多 土 黄褐土粒(~3mm、まれに1cm)、炭化物粒・焼土状粒微少 若干しまる
5' 3/2黒褐~3/1黒褐 土 黄褐土粒(~5mm)混じる、焼土粒(~2mm)少
5'' 3/1黒褐~3/2黒褐のぶちが入る 土 黄褐土粒(~5mm)、焼土粒(~2mm)少混じる
6 3/1黒褐~3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)・炭化物粒・焼土粒混じる 若干しまる
7 4/2灰黄褐~4/6褐 土 黄褐土ブロック(~2cm)混じる、炭化物粒・焼土粒微少 床面構築土が混ざった感じ
8 3/2黒褐~4/2灰黄褐 土 黄褐土粒(~5mm)多、炭化物粒・焼土粒(~1mm)混じる 若干しまる
9 4/6褐~3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~5cm)混じる
10 3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~4cm)混じる かなりゆるい
11 3/2黒褐 土 黄褐土粒(~5mm)多、焼土微粒少 しまる
12 3/1黒褐~3/3暗褐 土 黄褐土粒(~5mm)少 若干しまる
13 3/2黒褐~4/2灰黄褐 土 焼土粒(~2mm)・黄褐土粒(~2mm)・炭化物微粒混じる 若干しまる
13' 13層13''層漸移層
13'' 2.5YR5/8明赤褐 焼土主体土
14 4/3にぶ黄褐~3/2黒褐 土 黄褐土粒混じる しまる
15 3/1黒褐~3/2黒褐のぶち 土 黄褐土粒(~5mm)・焼土が混じる しまる
16 3/3暗褐 土 黄褐土ブロック(大)焼土混じる よくしまる
17 3/1黒褐~3/2黒褐 土 地山~覆土漸移層 IV層?
18 2/1黒~4/2灰黄褐のぶち 土 黄褐土粒(~3mm)・ブロック混じる 若干ゆるい
19 3/1黒褐~3/2黒褐のぶち 土 黄褐土粒(~3mm)多、焼土粒(~2mm)少 若干しまる
20 3/2黒褐~3/1黒褐のぶち 土 黄褐土粒(~3mm)少
21 4/2灰黄褐~4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック(~2cm)少
22 3/1黒褐~3/1黒褐のぶち 土 若干しまる
23 4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック混じる 若干ゆるい
24 3/2黒褐~3/1黒褐のぶち 土 黄褐土粒(~3mm)少、炭化物粒少、焼土・炭化物粒少混じる
25 2/1黒 土 焼土粒(~3mm)少、若干粘性あり

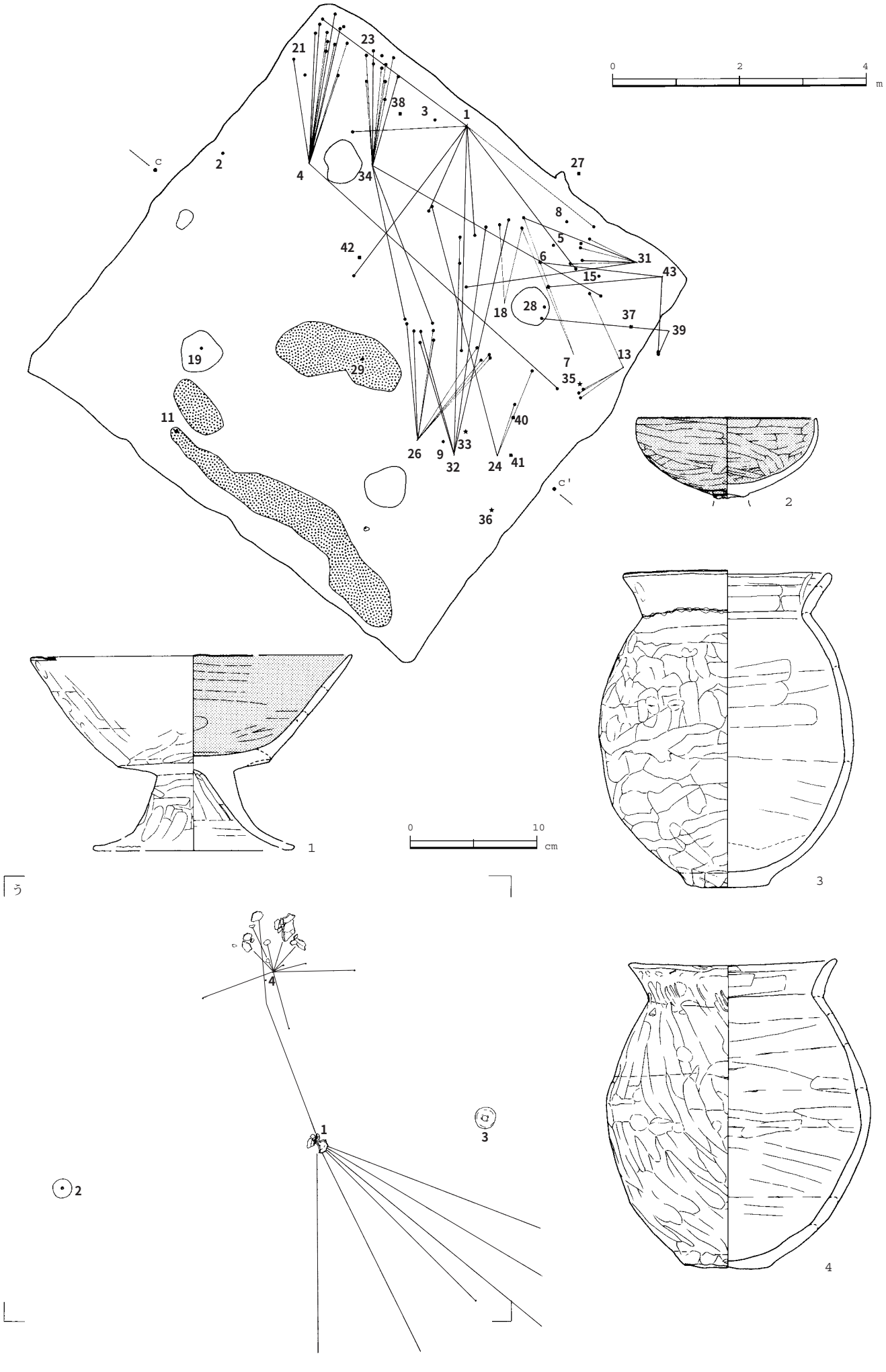
e-e'
1 2/1黒 土 5YR赤褐焼土多く含む、黄褐土粒(~3mm)多、炭化物粒(~3mm)少 若干しまる
2 3/2黒褐 土 5YR赤褐焼土少し含む、黄褐土ブロック(~1cm)まじる 若干ゆるい
3 3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)多 若干ゆるい
4 4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック(~5cm)多 ゆるい
4' 若干黒い4層
5 3/3暗褐 土 黄褐土ブロック(~10cm)多 ゆるい
5' 若干黒い5層
6 2/1黒~3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(~3cm)・焼土ブロック(~1cm)混じる 若干しまる
7 3/2黒褐~4/3にぶ黄褐 土 黄褐土多く混じる 若干しまる
8 4/4褐 土 黄褐土ブロック(~10cm) 若干しまる

f-f'
1 3/3暗褐 土 黄褐土粒焼土粒・炭化物粒(~3mm)多 ゆるい
2 3/1黒褐~3/2黒褐 土 黄褐土粒焼土粒・炭化物粒(~3mm)多 若干しまる
3 5YR4/6赤褐 焼土主体土
4 3/1黒褐~3/2黒褐 土 黄褐土混じる 若干ゆるい
5 3/2黒褐 土 黄褐土粒(~3mm)混じる 若干ゆるい
5' 黄褐土ブロックが多い5層 ゆるい
6 4/4褐 土 黄褐土多く含む 若干ゆるい
7 2/1黒 土 黄褐土粒焼土粒・炭化物粒(~5mm)混じる
8 4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)多 焼土微少 若干ゆるい
9 3/2黒褐~3/2黒褐 土 ゆるい
10 4/3にぶ黄褐~3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(大)混る ゆるい

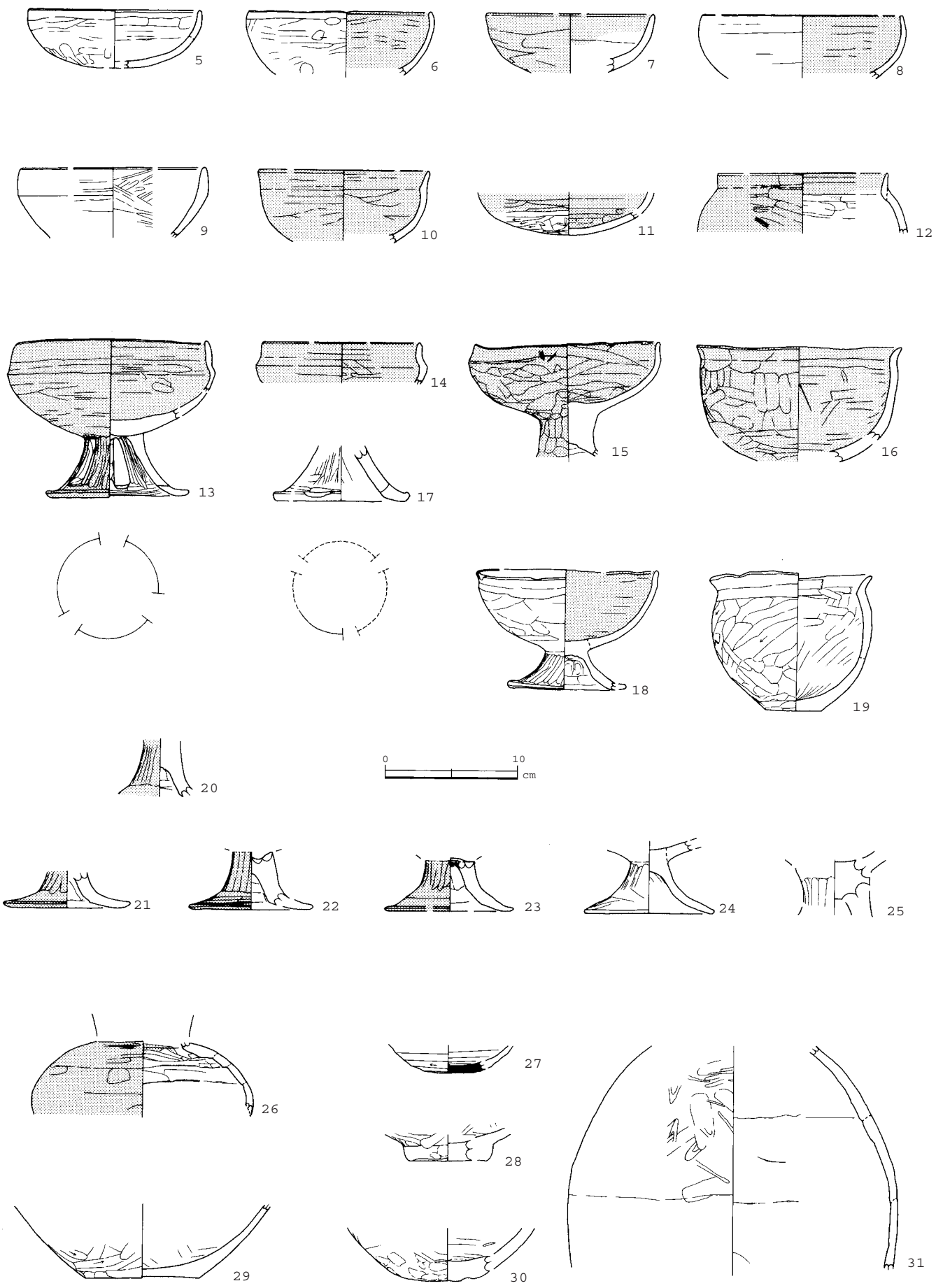
第28図　4号遺構



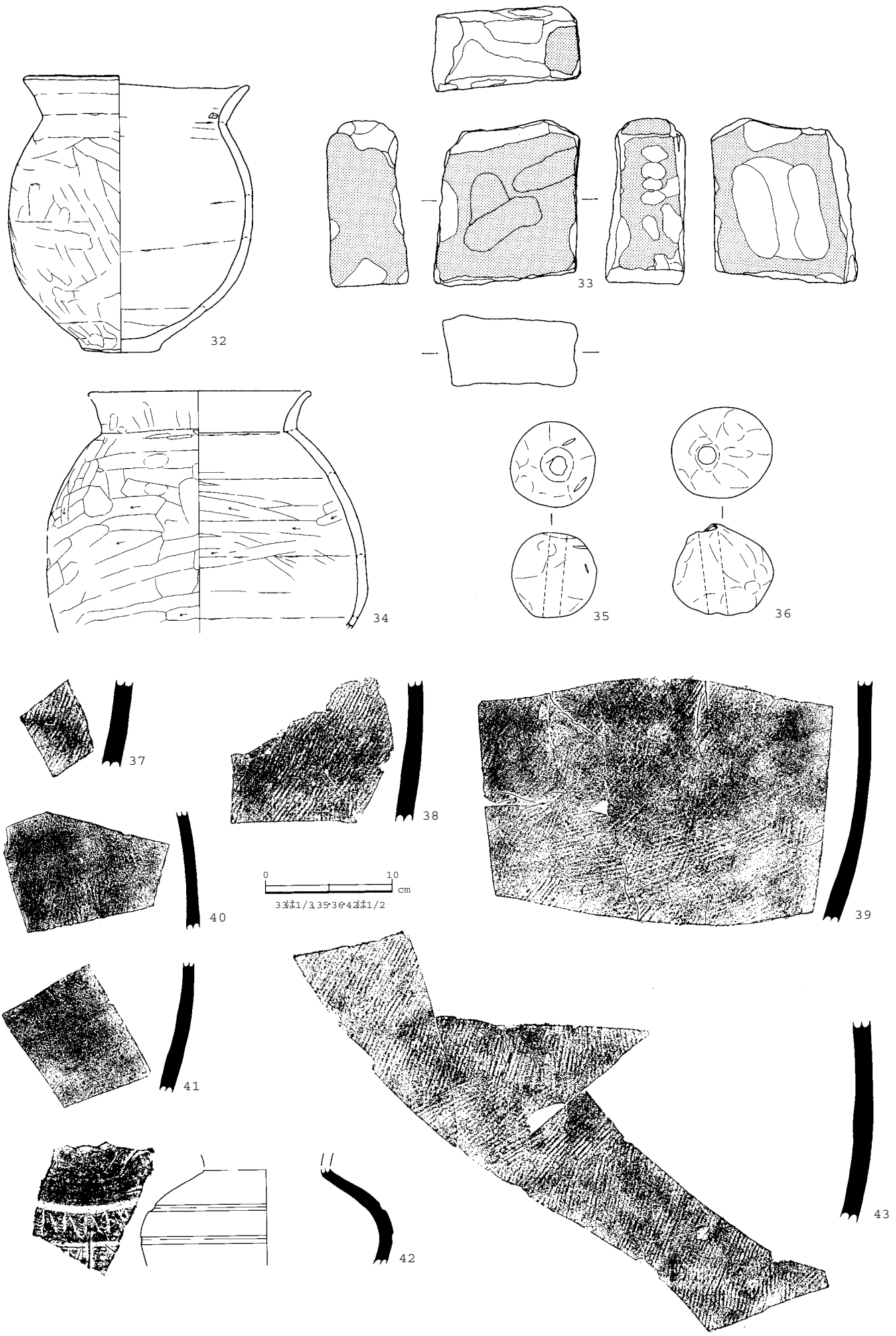
第29図　4号遺構　カマド・貯蔵穴・遺物検出状況



第30図　４号遺構　焼土・遺物検出状況および出土遺物１／３



第31図　４号遺構出土遺物２／３



第32図　４号遺構出土遺物３／３

９号方形竪穴住居跡（第33図）

規模(m)：5.0×5.2？　**柱間**：Ａ－Ｂ2.80　Ｂ－Ｃ2.60　Ｃ－Ｄ2.80　Ｄ－Ａ2.76　**主軸方位**：320°

貯蔵穴：不明　**時期**：古墳時代中期後半

６号に大半が重なるかたちで切られる方形竪穴住居跡である。主柱穴は６号の床面構築土を掘り下げた面で確認できたＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄである。床面のレベルは21.8mと、６号より10㎝ほど上にあり、本遺構だけが付近のものよりも一段高く（浅く）なっている。

一部残った西側覆土の上層からは、鬼高式古相と思われる土師器杯２個体（１・２）が検出された。切り合い関係と遺物の様相は矛盾しない。他に床面上から土玉（４）が出土している。なお、後述するが、６号内に本遺構の遺物が多く混入していると考えられる。

覆土は、焼土が下層から検出されており、土玉の存在ともども他の同時期の竪穴住居跡と似た廃絶の過程を示唆している。

遺物と切り合い関係から、本遺構は古墳中期後半に属すると思われる。

６号方形竪穴住居（第34～38図）

規模(m)：5.9～6.2四方　**柱間**：Ａ－Ｂ3.08　Ｂ－Ｃ3.12　Ｃ－Ｄ3.08　Ｄ－Ａ3.20　**主軸方位**：334°

貯蔵穴：なし　**時期**：古墳時代後期

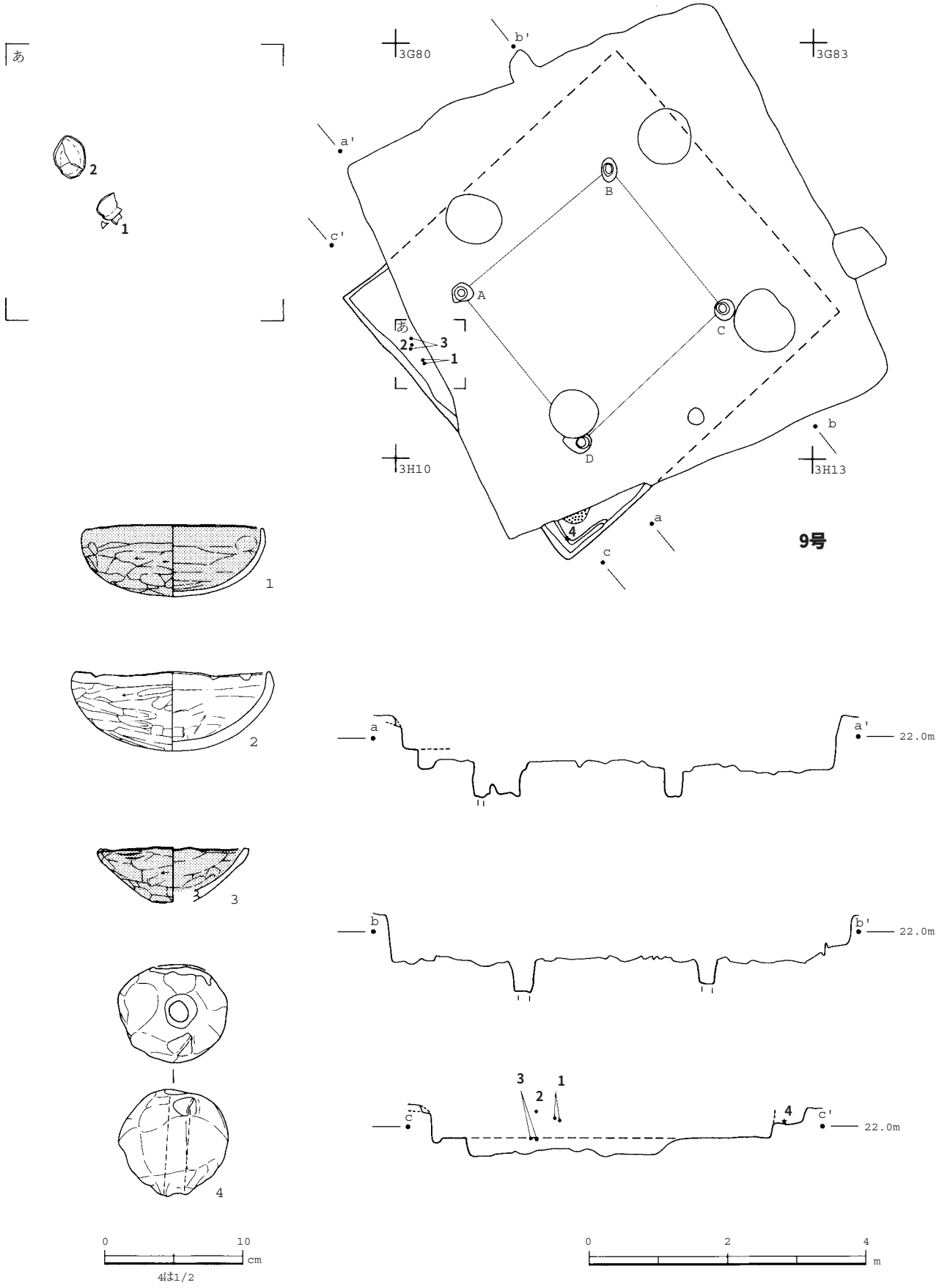
13号の西に隣接し、９号を切って構築されている。貯蔵穴は伴わず、カマドが北辺中央にある。主柱穴はＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄで、Ｅが出入り口ピットである。それぞれ明確な掘り込みは認められないが、黄褐土ブロックを大量に含む覆土の様子から、抜き取りが行われたと考えられる。

覆土で特徴的なのは最下層で、床面直上に径の大きい黄褐土ブロックが大量に堆積している。これは明らかに埋め戻しの層であるが、その起源は不明である。この層の上面は若干締まっており、埋め戻しとそれ以上の覆土の堆積時期に時間差があるとも考えられる。また、この埋め戻し土の上で焼土・炭化物がロの字状に広がっているのが検出されている。これらから、この遺構の廃絶プロセスは、上屋解体→柱抜き取り→竪穴埋め戻し→建材焼却の順序が想定できる。

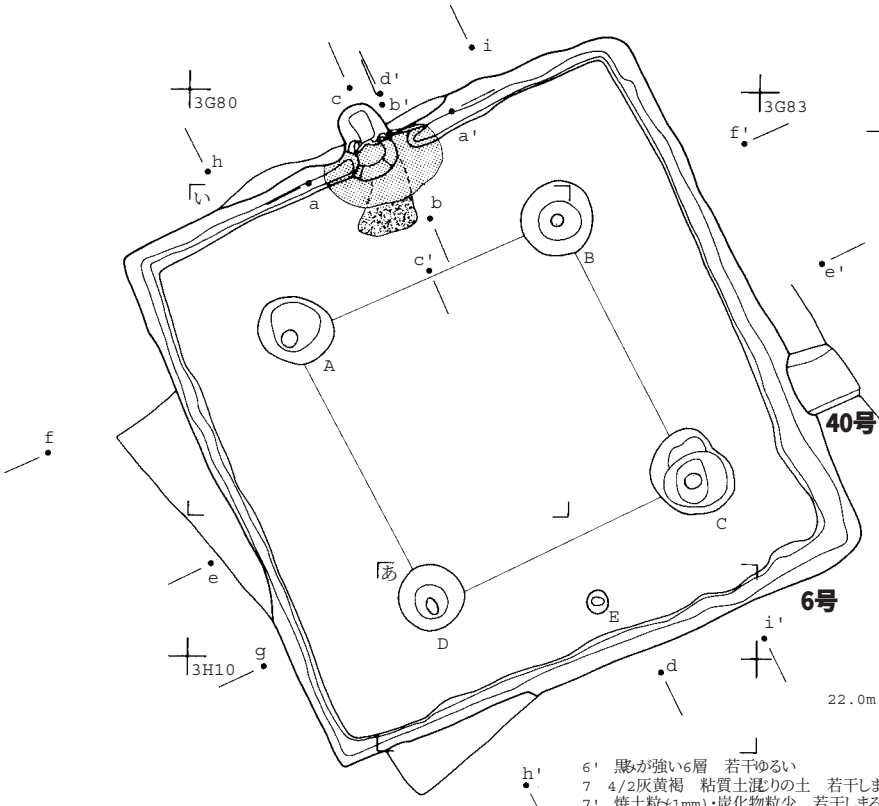
カマドは煙道の短いタイプである。若干掘りくぼめられた燃焼部は底面がよく焼けている。粘質土層が明瞭ではあるが、使用状態そのままのようには見えない。支脚はカマドの西側の床面から出土している。カマドの廃絶処理は上のプロセスでいう解体の際に行われたと思われる。

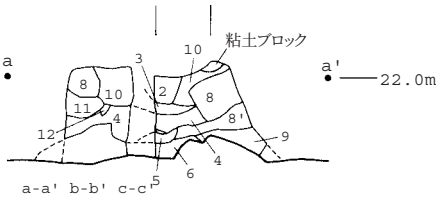
遺物は、土師器を中心とし、少量の須恵器・土玉（36～38）・焼成粘土片（47～49）・砥石（52・54いずれも流紋岩製）・鉄製刀子（50）・鉄鏃（51）・梅あるいは桃の種（53）が見られた。種・土玉は廃絶処理に伴う儀礼活動に関する遺物であろうか。焼成粘土片は胎土が土器のものと似ており、手慰みで粘土片を焼成したようにも見える。ちなみに47の下面には明瞭に親指と思われる指紋が残されている。

土師器には、鬼高式の古相を示す、高杯（11～15）・須恵器模倣精製土師器の高杯（３・４・５）なども見られるが、主体は後期に属するものであるので、本遺構は、カマドの構築位置を勘案すると、古墳後期の所産と思われる。覆土中、しかも床面近くに見られた古相を示す土器は、上記の埋め戻しに際して混入したものと考えるのが妥当であろう。これらの土器の供給源は、切り合い関係にある９号、隣接する13号にあると考えられる。

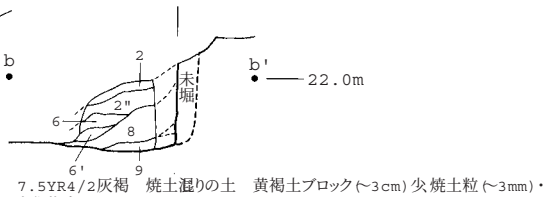


第33図　９号遺構および出土遺物

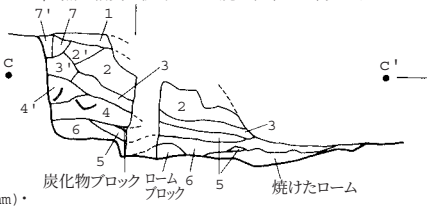




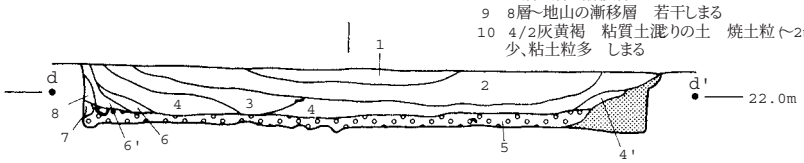
a-a' b-b' c-c'
1 4/2灰黄褐 粘質土混じりの土 焼土粒(～2mm)少、若干粘性あり よくしまる
2 2.5Y6/4にぶ黄 粘質土主体土 淡黄土粒(～3mm)・焼土ブロック(～3cm)多
2' 2層から7層への漸移層
2'' 5YR3/1黒褐 土 焼土粒(～1mm)多、淡黄粘質土粒(～2mm)多 しまる



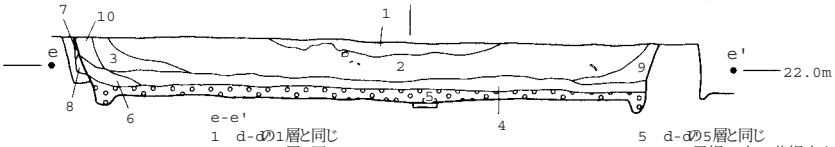
3 7.5YR4/2灰褐 焼土混じりの土 黄褐土ブロック(～3cm)少焼土粒(～3mm)・炭化物多 ゆるい
4 3/1黒褐 土 黄褐土粒(～3mm)少、炭化物多混じる ゆるい
4' 若干淡、焼土も多い4層
5 5YR5/4にぶ赤褐 焼土を多く含む土 焼土ブロック多、若干粘性あり ゆるい
6 2/1黒 粘質土混じりの土 焼土粒(～5mm)少 ゆるい



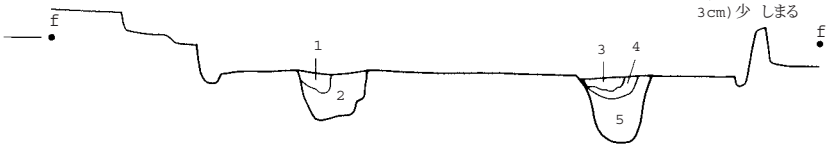
6' 黒みが強い6層 若干ゆるい
7 4/2灰黄褐 粘質土混じりの土 若干しまる
7' 焼土粒(～1mm)・炭化物粒少 若干しまる
8 2.5Y6/4にぶ黄 粘質土主体土 焼土粒(～2mm)・黄褐土粒(～2mm)多、粘性あり よくしまる
8' 8層-9層の漸移層
9 8層～地山の漸移層 若干しまる
10 4/2灰黄褐 粘質土混じりの土 焼土粒(～2mm)少、粘土粒多 しまる
11 3/1黒褐 粘土のぶちが入る土 若干しまる
12 5YR4/3にぶ赤褐 焼土主体土ブロック ゆるい



d-d'
1 2/1黒に3/2黒褐のぶち 土 黄褐土粒(～3mm)、焼土粒・炭化物粒微少 しまる
2 3/1黒褐に3/2黒褐のぶち 土 黄褐土粒(～5mm)、焼土粒・炭化物粒(～3mm)多 しまる
3 2層～4層の漸移層
4 3/1黒褐に3/2黒褐がマーブル状に混じる 土 黄褐土粒(～5mm)多、黄褐土ブロック(～3cm)少焼土粒(～5mm)
4' 4層からカマド粘質土への漸移層、黄褐土ブロック(～3cm)少炭化物粒(～3mm)、焼土粒微少
5 3/1黒褐 土 黄褐土粒ブロック(～10cm)多炭化物ブロック(～1cm)少焼土粒微少、土器片多 よくしまる
6 2/1黒 土 黄褐土粒ブロック(～2cm) しまる
6' 黄褐土が少ない6層 しまる
7 黄褐土ブロック(～8cm)主体間に土器片
8 2/1黒～3/2黒褐 土 黄褐土(～5mm)混じる 若干ゆるい

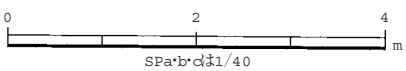


e-e'
1 d-d'の1層と同じ
2 d-d'の2層と同じ
3 3/1黒褐に3/2黒褐のぶち 土 黄褐土ブロック(～4cm)多焼土粒(～3mm)少、炭化物粒微少 しまる
4 d-d'の4層と同じ
5 d-d'の5層と同じ
6 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(～5cm)少焼土ブロック(～3cm)少 しまる
7 3/2黒褐 土 若干ゆるい
8 3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(～5cm)少焼土粒(～3cm)少 しまる
9 3/2黒褐～4/2灰黄褐 土 黄褐土粒(～1mm)少 焼土粒・炭化物粒少 しまる
10 3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(～3cm)少 しまる



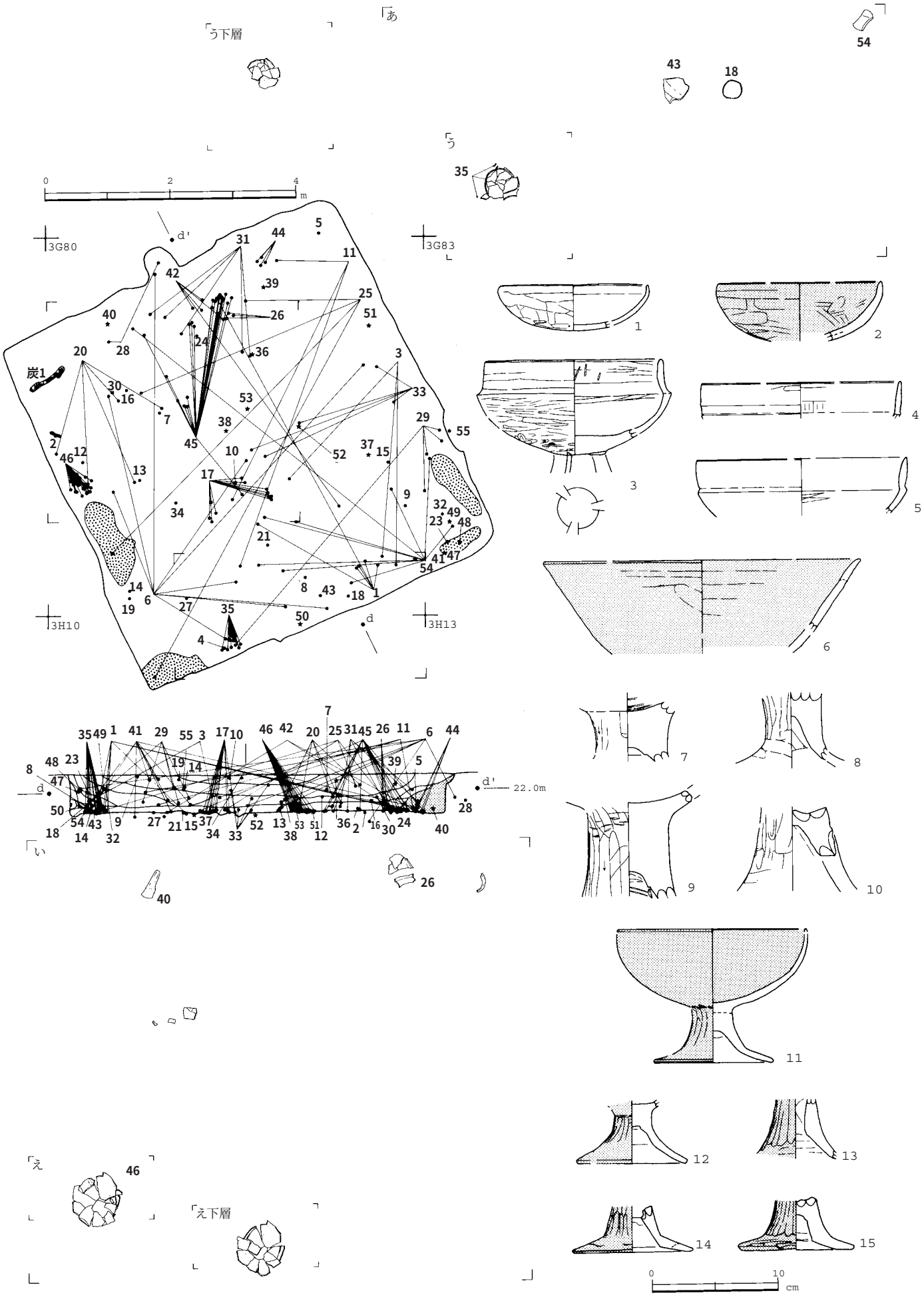
f-f'
1 3/1黒褐～2/1黒 土 黄褐土ブロック(～3cm)混じる、焼土粒・炭化物粒微少 若干ゆるい
2 4/3にぶ黄褐 ハードロームブロック主体土 暗褐土混じる よくしまる 明瞭な埋め戻し跡
3 3/1黒褐 土 黄褐土粒(～5mm)多 若干ゆるい
4 5/6黄褐 ハードロームブロック(～10cm)主体土 3/1黒褐～3/2黒褐土混じる しまる 明瞭な埋め戻し跡
5 4/4褐 ハードロームブロック(～15cm)主体土 しまる 明瞭な埋め戻し跡

g-g'
1 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(～10cm)多 若干しまる
2 3/1黒褐～3/2黒褐 ハードロームブロック(～10cm)主体土 しまる 明瞭な埋め戻し跡
3 3/1黒褐～3/2黒褐 土 黄褐土粒ブロック(～2cm)・カマド粘質土粒少 若干しまる

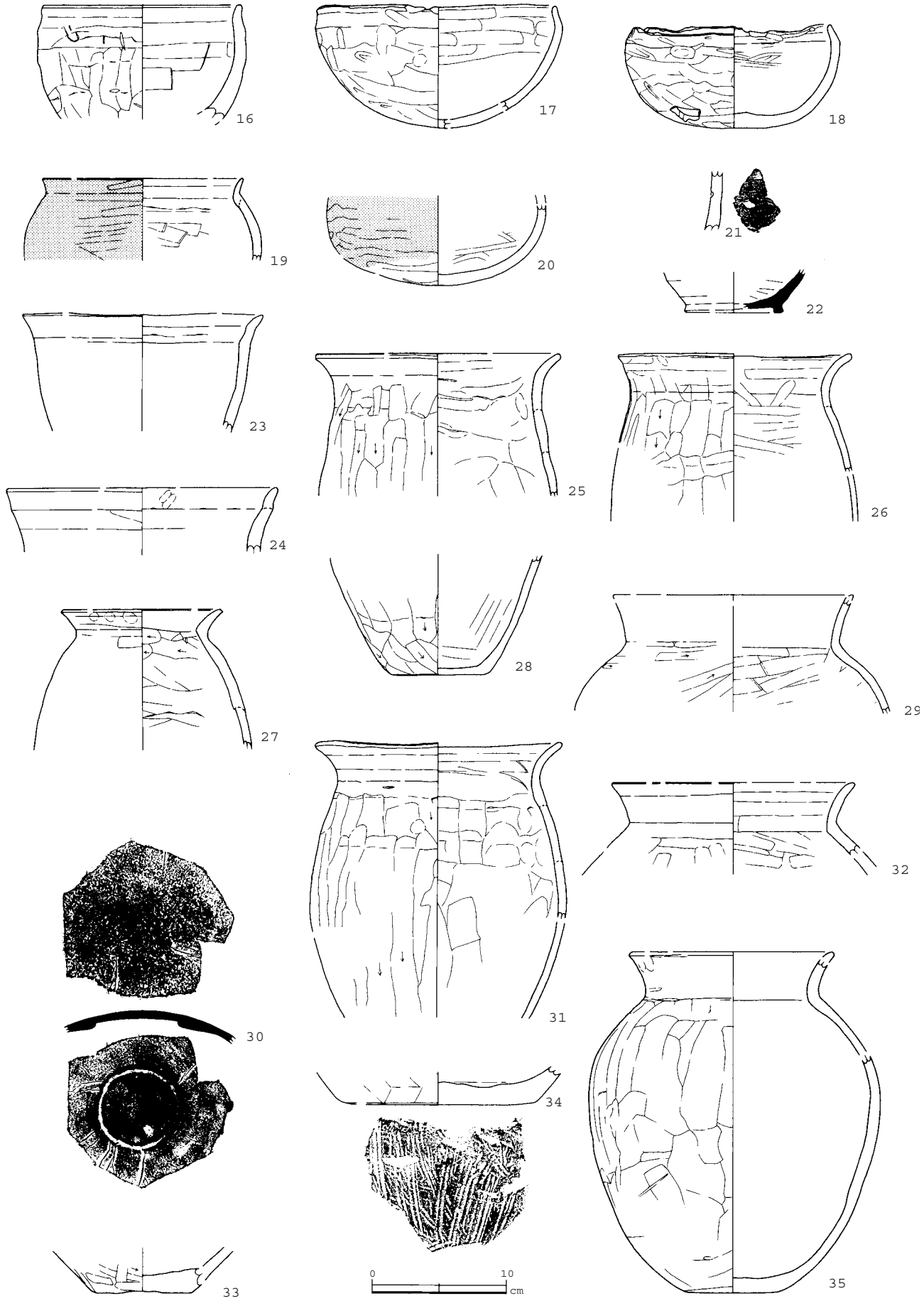


SPa・b・cは1/40

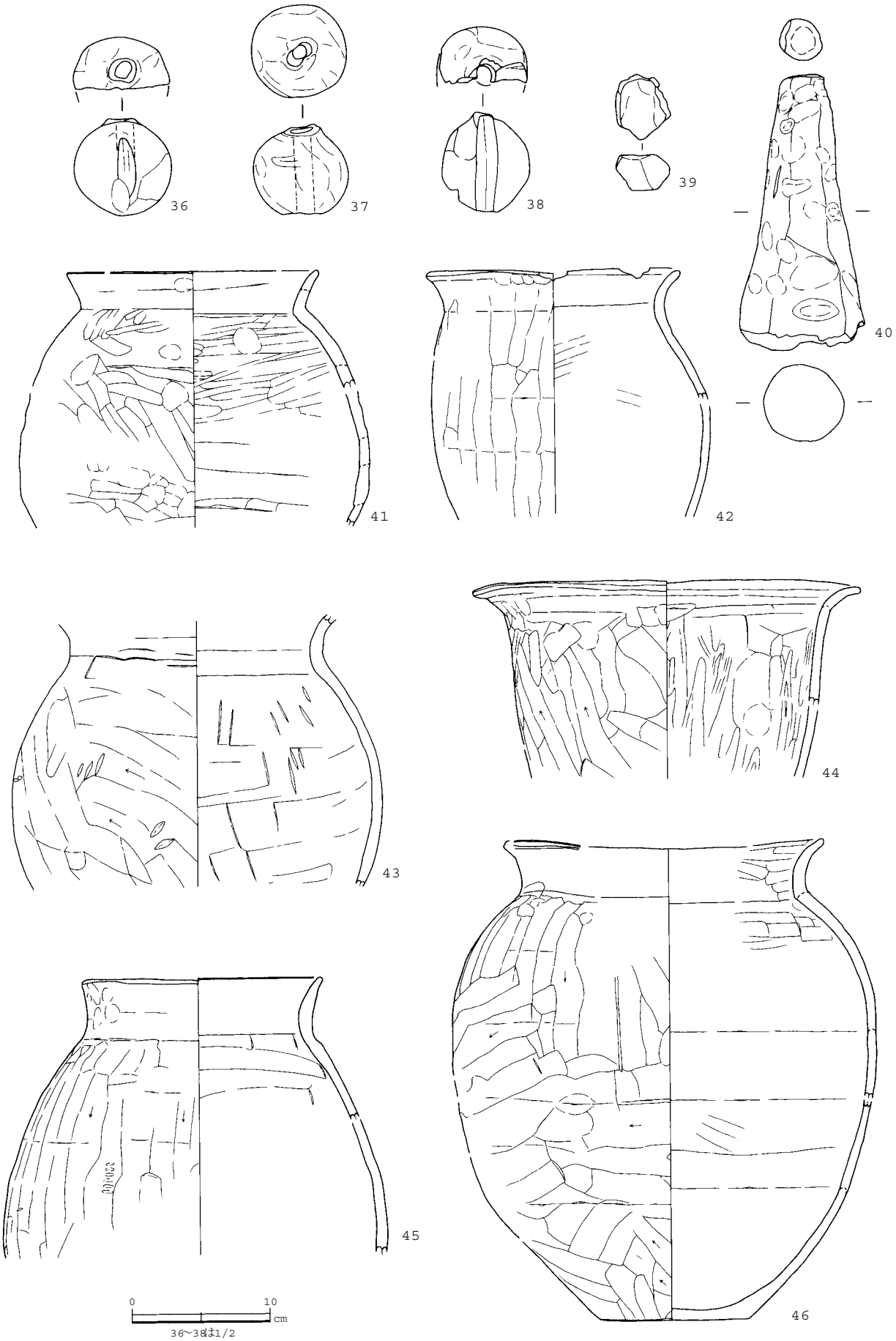
第34図　6号遺構



第35図　６号遺構　焼土・遺物検出状況および出土遺物１／４



第36図　6号遺構出土遺物2／4



第37図　6号遺構出土遺物3／4

40号溝（第34図）

規模（m）：幅0.64～0.7　**時期**：古墳後期以降

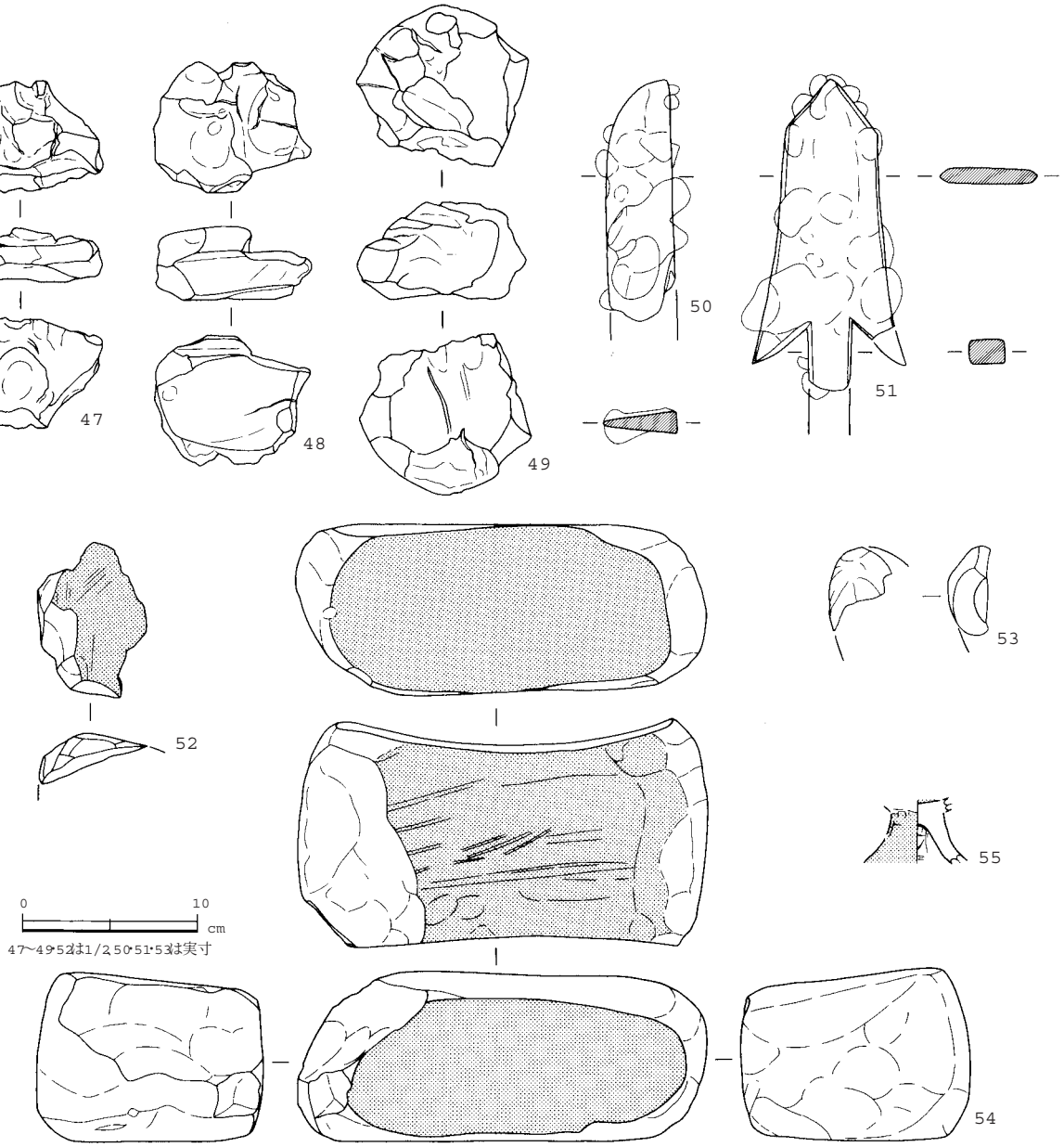
６・９・13号を切って東西方向にのびる。遺物は、土師器片（55）が少量検出されたが、時期を決定できるほどのものではなかった。古墳後期以降に属する。

22号掘立柱建物（第39図）

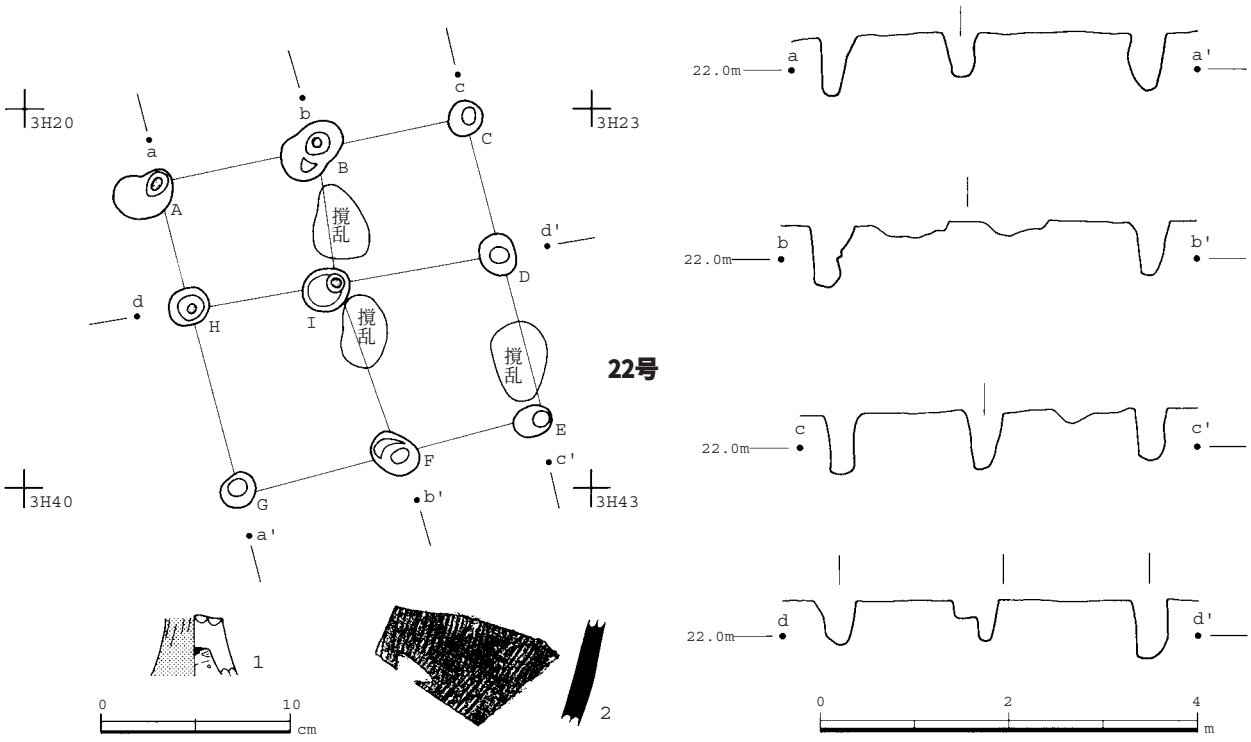
規模(m)：２×２間　**主軸方位**：345°　**柱間**：A－C3.36　C－E3.30　E－G3.30　G－A3.34

時期：古墳時代中～後期

６・９・13号竪穴の南西に検出された総柱の掘立柱建物である。各柱穴は、直径40㎝・深さ60㎝前後である。建物主軸が６号に近いので、これに付属する倉庫のような施設だった可能性がある。柱穴の覆土からは小片の土師器が出土したのみで、帰属時期は確定できない。



第38図　６号遺構出土遺物４／４



第39図　22号遺構

13号方形竪穴住居跡（第40～48図）

規模（m）：一辺4.88　**柱間**：A－B2.28　B－C2.48　C－D2.32　D－A2.48　**主軸方位**：49°

貯蔵穴：円形／東隅　**時期**：古墳時代中期後半

６・９号に隣接して位置し、カマドを北東辺の南寄りに持つ平行四辺形気味の竪穴住居である。床面は壁際に周溝が巡り、柱の内側の空間を中心に硬化している。カマドの煙道はごく小さい。

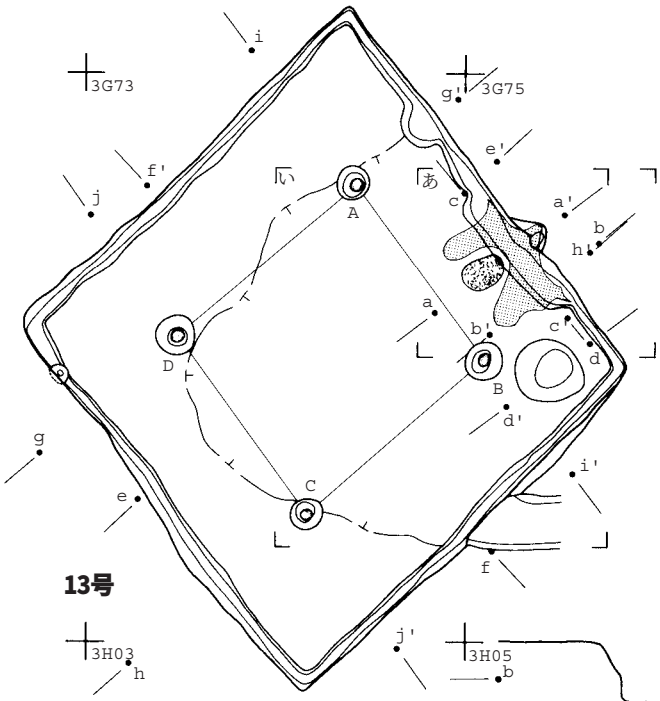
構築時期は、６・９号と切り合わず、それを避けたようなプランを持つので９号の後、遺物の様相から６号の前であると考えられる。各辺の長さが揃っていることからすると、竪穴掘削前の地割りを辺の長さだけで決定し、角度の調整をおろそかにしたという経緯が想像できる。本遺構は、直角でなくても問題のない上屋構造であったという可能性を示唆しており、興味深い事例である。

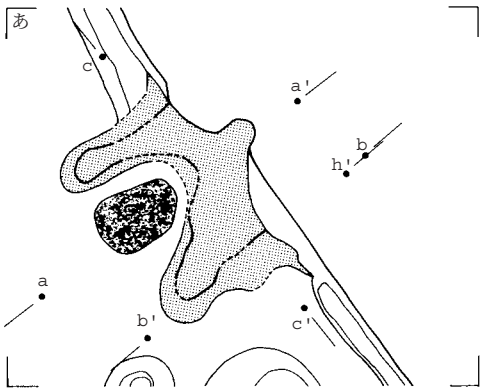
主柱穴はA・B・C・Dで、抜き取りのための掘り込みは見られない。しかし、覆土は柱の立ち腐れではないことを示しているように見受けられる。Eが貯蔵穴である。

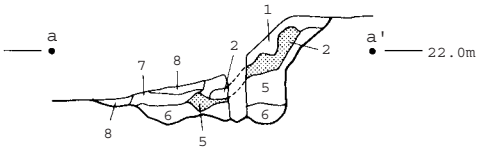
覆土の上層には、ロームブロックを主体とした土による硬化面があり、その上に乗るかたちで遺物が大量に出土した（図版15）。遺物は土師器が主体で、一部に須恵器甕片が混じる程度であった。竪穴廃絶後に窪地が利用された可能性があるということで、別遺構と考えても良いが、竪穴内に遺物の出土範囲が収まるので、ここではとりあえず13号内の上層硬化面として扱っている。

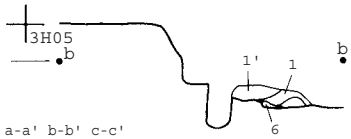
硬化面上の遺物は、床面近くの遺物と幾分か時期差を示すようにも見えるが、須恵器模倣精製土師器高杯片（12・15・16・19）、横方向のヘラケズリの施される筒状口縁の甕（32）、ヘラミガキの施される球形胴の甕（33）など鬼高式古相を示すことに変わりはない。なお、平行タタキの須恵器甕片（35～39・42）は内面がナデ消されている。

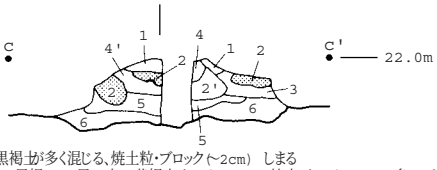
カマドは遺存状態がそれほど良くない。煙道は竪穴掘形に少し傾斜として掘り込まれた程度で、ほとんど外に延びないものである。また、支脚は検出されなかった。



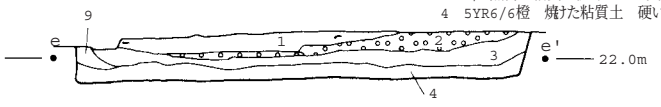




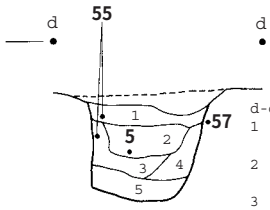




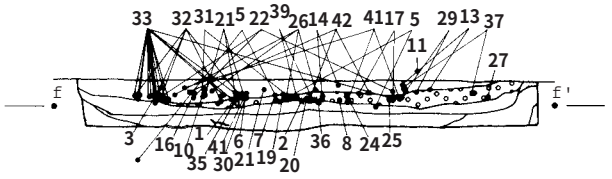
a-a' b-b' c-c'
1 3/2黒褐～5/1にぶ黄褐が混じる 粘質土混じりの土 黄褐土粒(～5mm)・焼土微粒混じる しまる
1' 焼けた粘質土ブロック(～2cm)の多く混じる1層
2 2.5Y浅黄 粘質土主体土 黄褐土粒(～5mm)混じる しまる
2' 焼土粒(～5mm)・黄褐土ブロック(～2cm)少 しまる
3 3/2黒褐 粘質土混じりの土 黄褐土ブロック(～1cm)多 しまる
4 5YR6/6橙 焼けた粘質土 硬い
4' 黒褐土が多く混じる、焼土粒・ブロック(～2cm) しまる
5 3/1黒褐～2/1黒 土 黄褐土ブロック(～2cm)、焼土ブロック(～1cm)多 しまる
6 黄褐～3/1黒褐が混じる 土 黄褐土ブロック(～10cm)多3/1黒褐土が混じる しまる カマド～床面地山漸移層
7 3/2黒褐 土 焼土粒(～3mm)、炭化物粒微少
8 7.5YR6/4にぶ橙 粘質土主体土 焼土ブロック(～1cm)多炭化物粒混じる

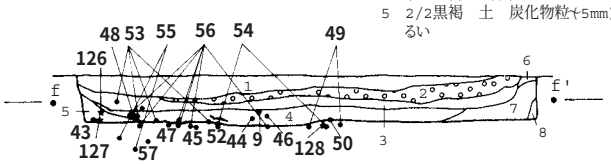


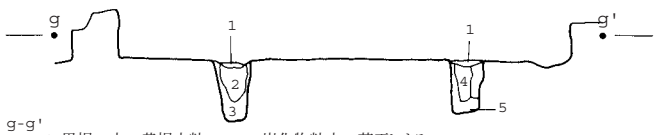
e-e' f-f'
1 灰褐 土 黄褐土粒・ブロック・橙焼土粒混じる
2 褐 土 黄褐土ブロック(大)大量混じる 硬い 上面から遺物が大量に出土
3 黒褐 土 黄褐土粒混じる
4 暗褐 土
5 灰褐 土 黄褐土ブロック混じる壁崩落土
6 暗褐 土
7 黒褐 土 黄褐土粒混じる
8 暗褐 土
9 黒褐 土 黄褐土粒混じる



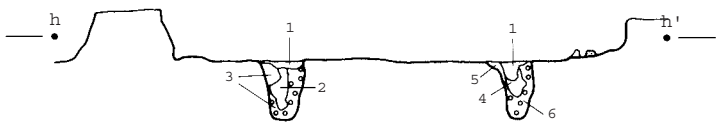
d-d'
1 3/1黒褐～3/2黒褐のぶち 土 黄褐土粒(～5mm)・焼土粒(～5mm)混じる
2 3/1黒褐～3/2黒褐のぶち 土 黄褐土粒(～3mm)少 若干ゆるい
3 3/2黒褐 土 黄褐土粒混じる 若干ゆるい
4 3/2黒褐 土 黄褐土粒(～5mm)少・炭化物粒(～5mm)少 若干ゆるい
5 2/2黒褐 土 炭化物粒(～5mm)少 若干ゆるい





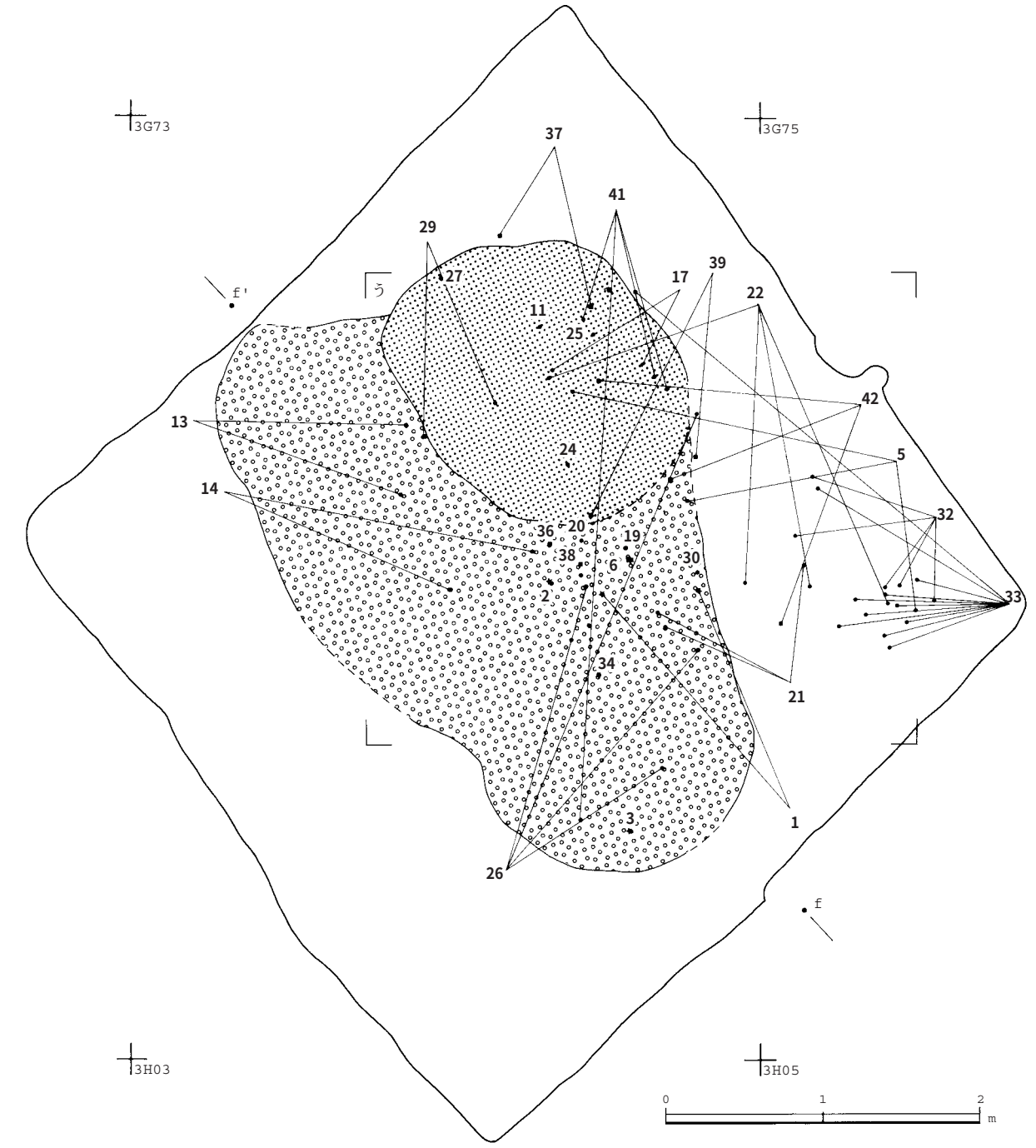


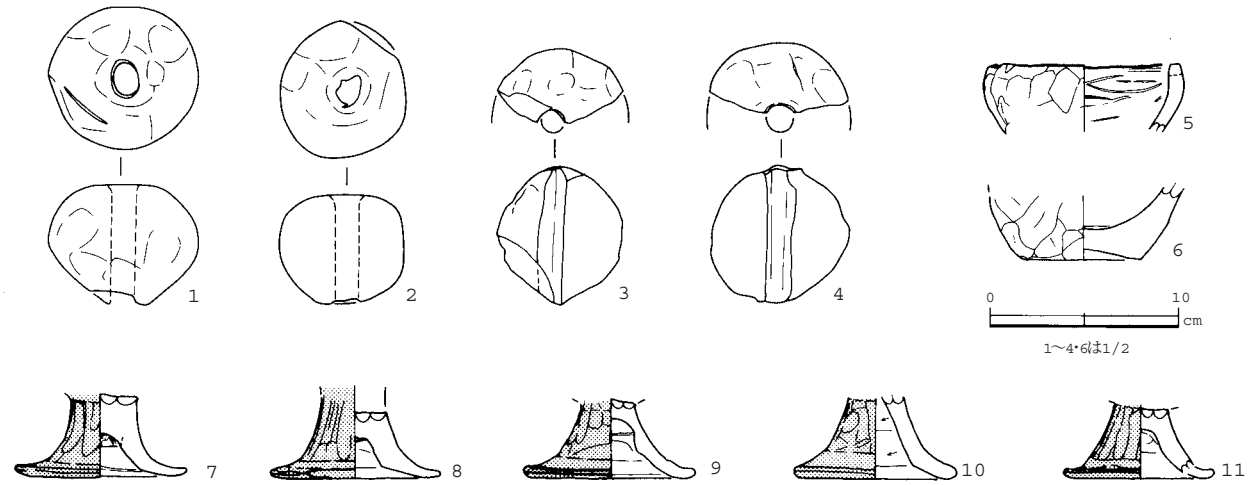
g-g'
1 3/1黒褐 土 黄褐土粒(～5mm)・炭化物粒少 若干しまる
2 3/3暗褐 土 黄褐土ブロック(～5cm)混じる 若干ゆるい
3 3/3暗褐 土 2層より黄褐土ブロックの割合が高い 若干ゆるい
4 4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック(～3cm)混じる、焼土微粒多 若干ゆるい
5 4/6褐 土 地山に近い 硬い 覆土～地山漸移層



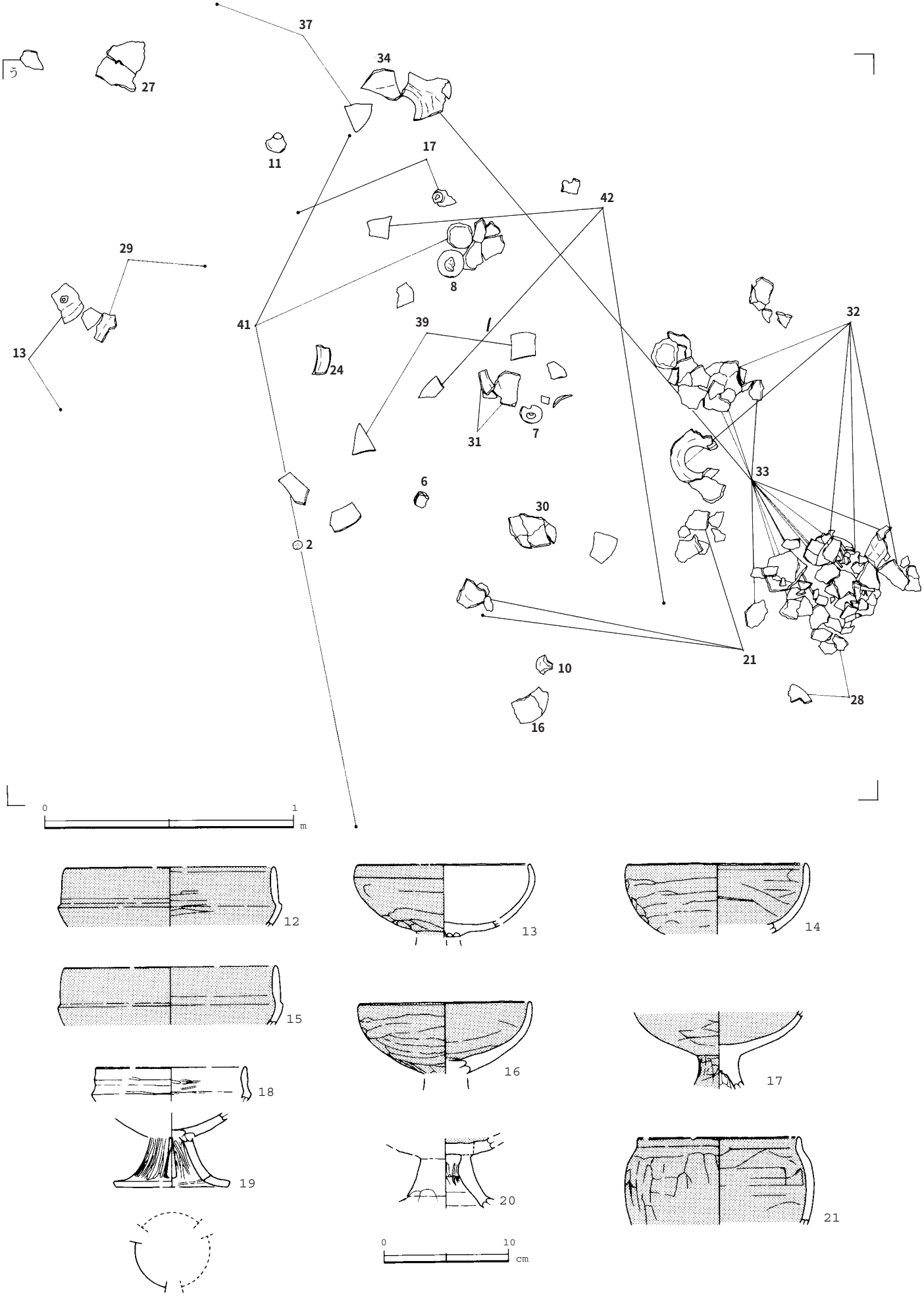
h-h'
1 3/1黒褐 土 黄褐土粒(～5mm)・炭化物粒少 若干しまる
2 4/4褐 土 黄褐土ブロック(～3cm)少 若干しまる
3 5/6黄褐 土 黄褐土ブロック(～5cm)多 若干しまる
4 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック多 ゆるい
5 1～地山の漸移層
6 4/4褐 土 黄褐土ブロック(～5cm)多 若干しまる

第40図　13号遺構

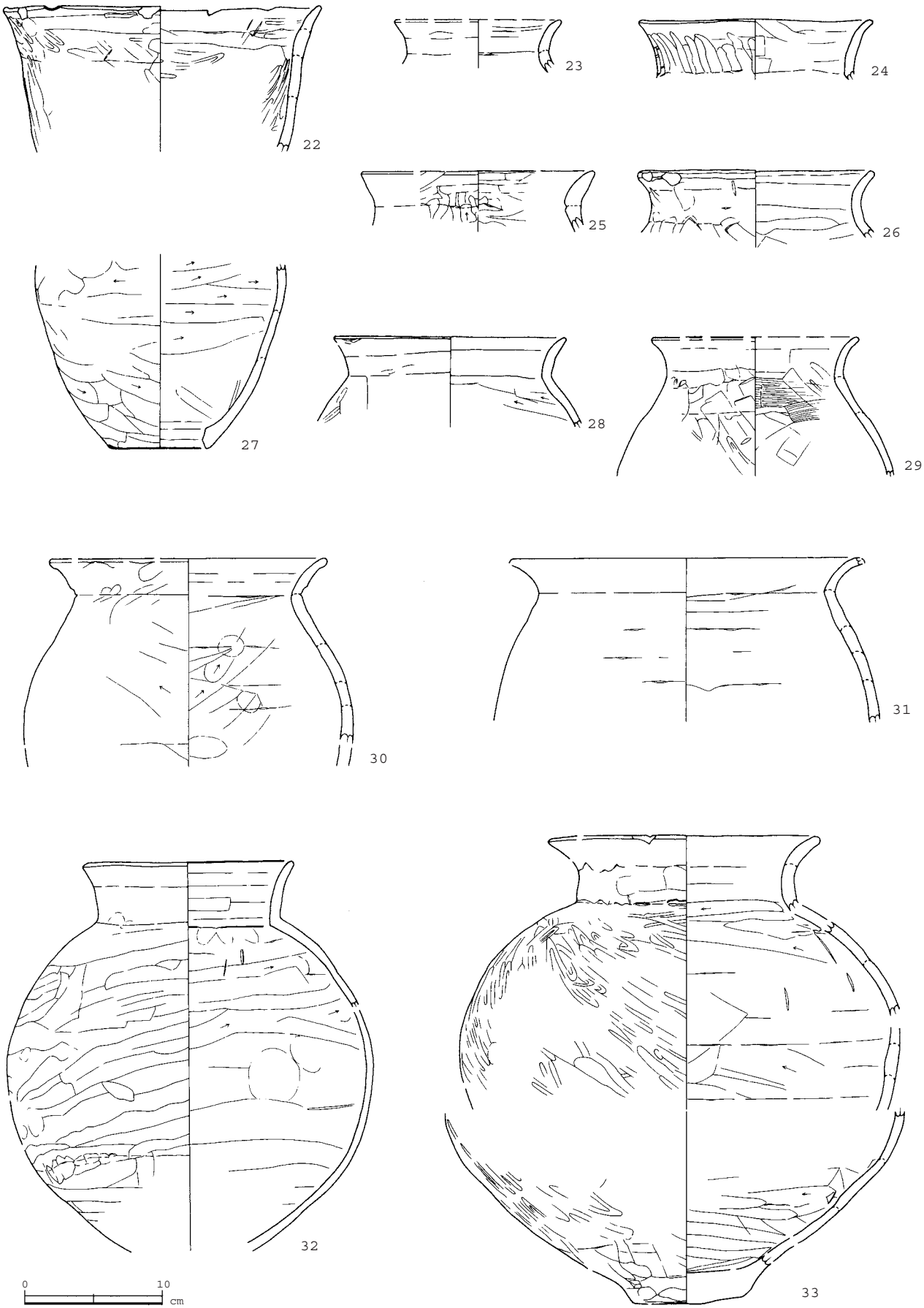




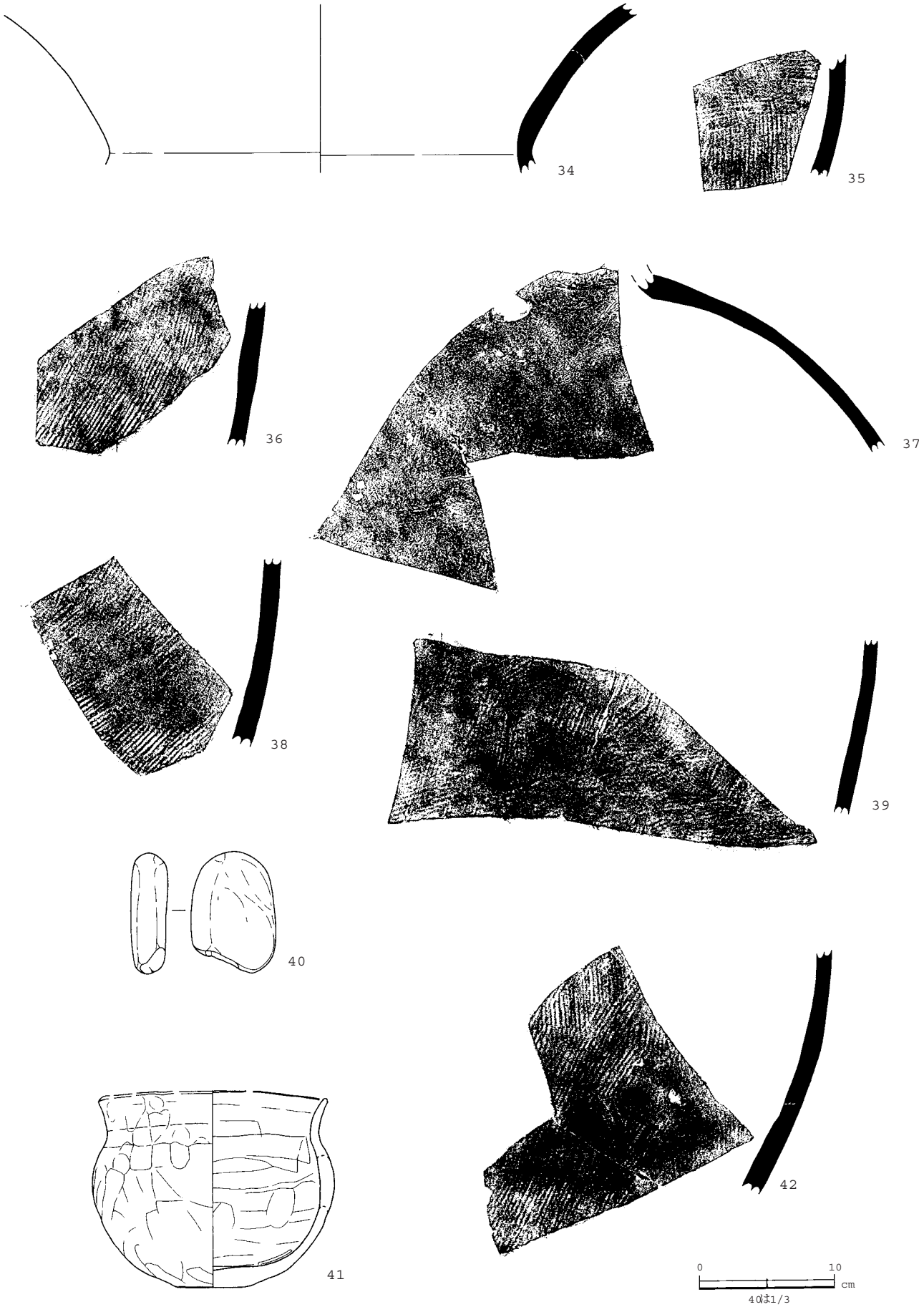
第41図　13号遺構上層硬化面・遺物検出状況および出土遺物１／４



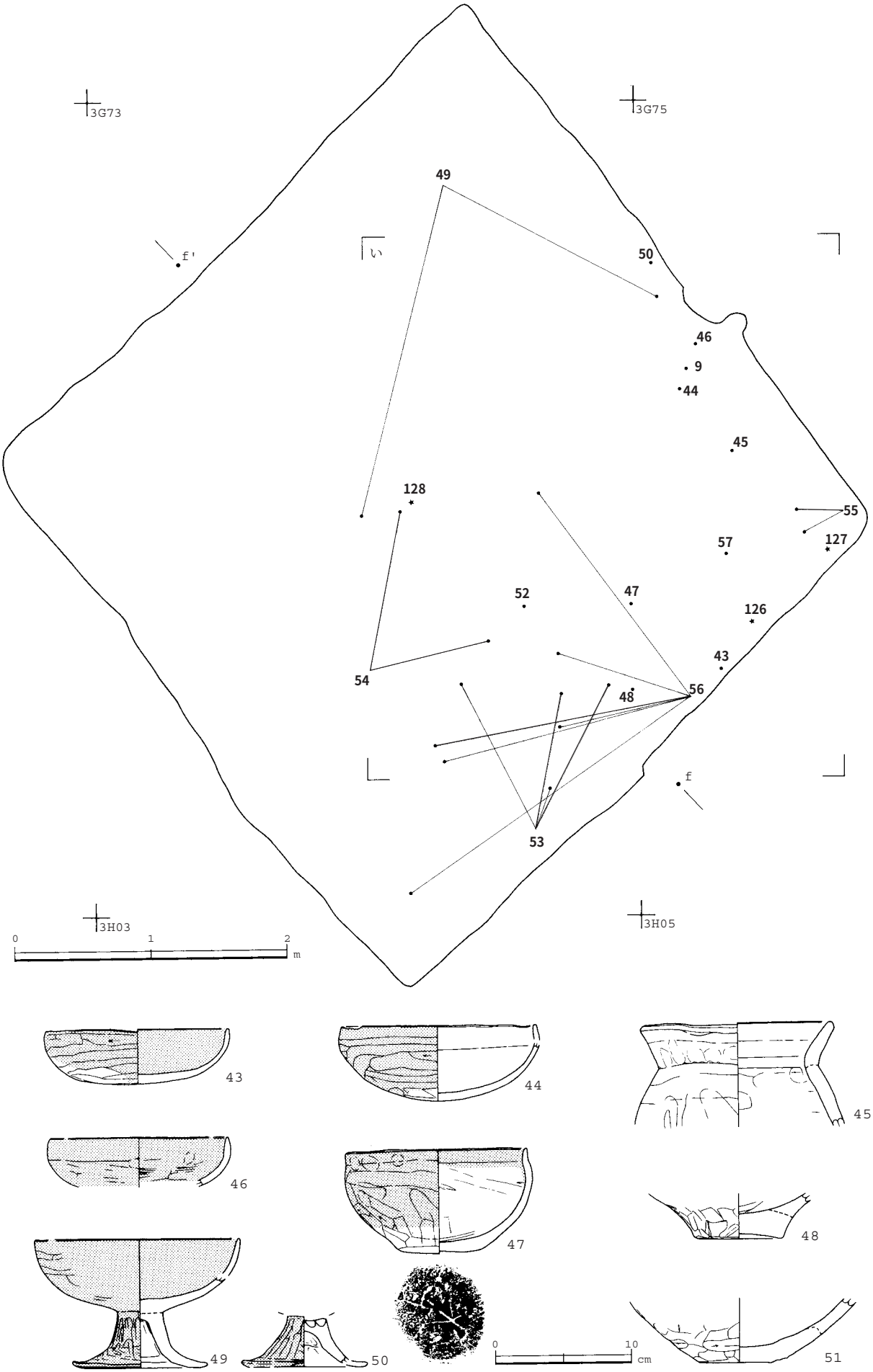
第42図　13号遺構上層硬化面　遺物出土状況および出土遺物２／４



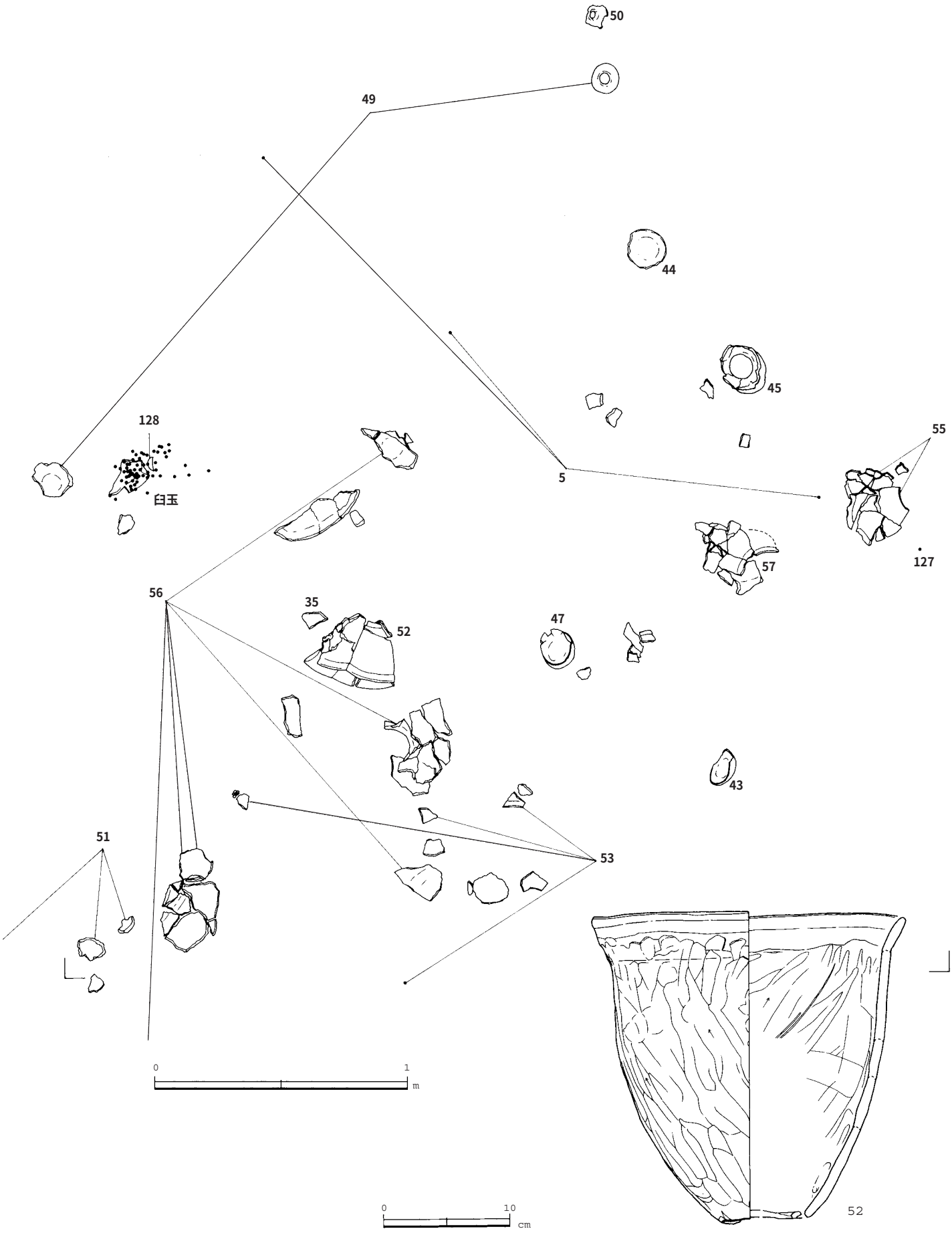
第43図　13号遺構上層硬化面出土遺物３／４



第44図　13号遺構上層硬化面出土遺物４／４



第45図　13号遺構　下層遺物出土状況および出土遺物１／４



第46図　13号遺構　下層遺物出土状況および出土遺物２／４

上層硬化面以下から床面の遺物は、土師器がほとんどで、土玉（126・127）、ひとまとまりの滑石製模造品（臼玉・勾玉形）が混ざるという構成であった。勾玉形（128）と臼玉（58～125）は、平面図のとおり密集して検出されたので、ネックレス状につながれていた可能性が考えられる。

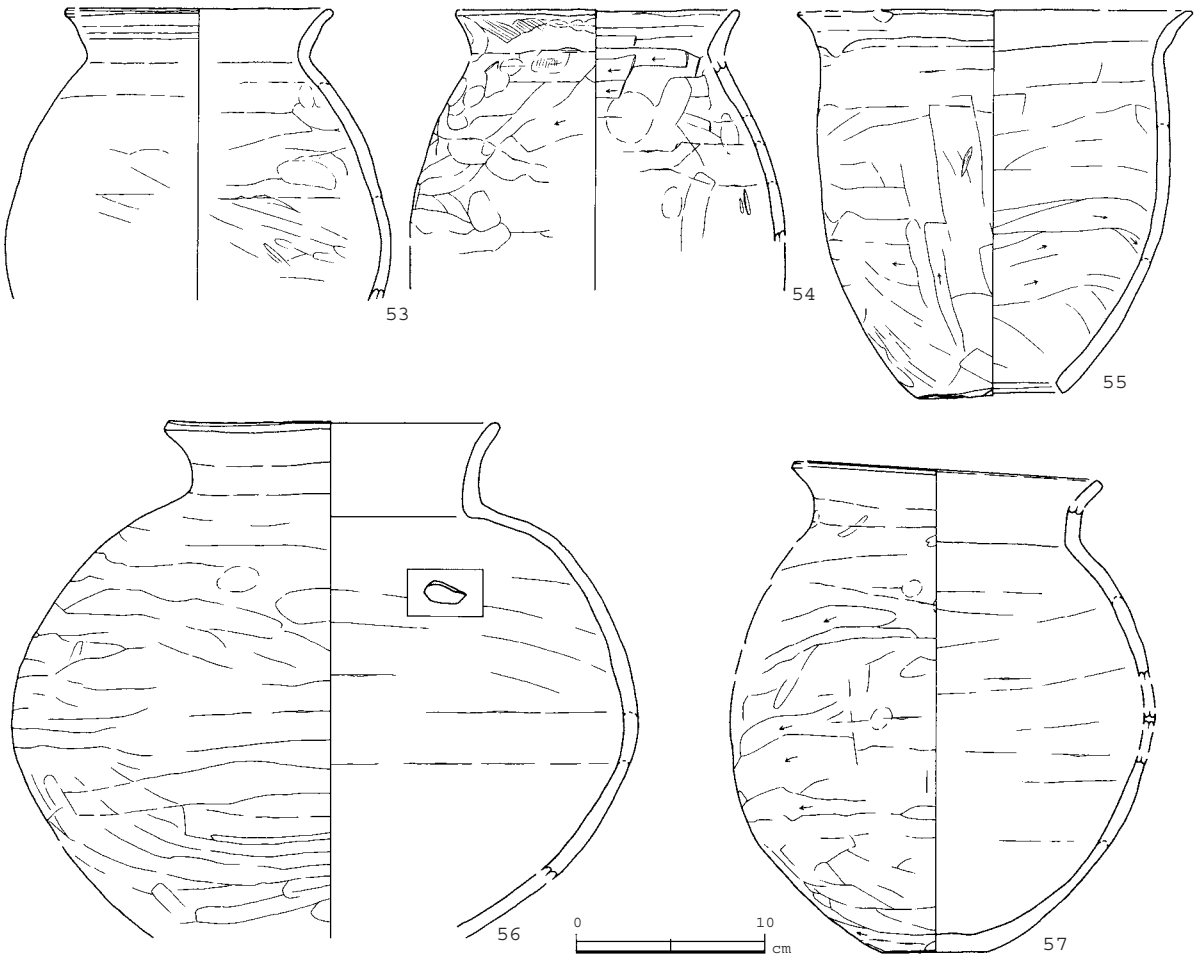
土師器には、底部付近をのぞいて赤彩する杯（43）、鉢（47）、横方向のヘラケズリの施される甕（53・54・56・57）などがあり、鬼高式の古相を示す。甕（56）には、肩部に焼成後の穿孔が認められる。

床面から出土した遺物は、遺存状態の良いものが多く、また、滑石製品がまとまって見られたことから、意図的に遺棄されたものである可能性が高い。竪穴・柱穴覆土からは、焼土の堆積・埋め戻しなどの痕跡が認められなかったので、廃絶過程の詳細は明らかでないが、これらの遺物の検出状況からすると、何らかの儀礼活動が行われたものと思われる。

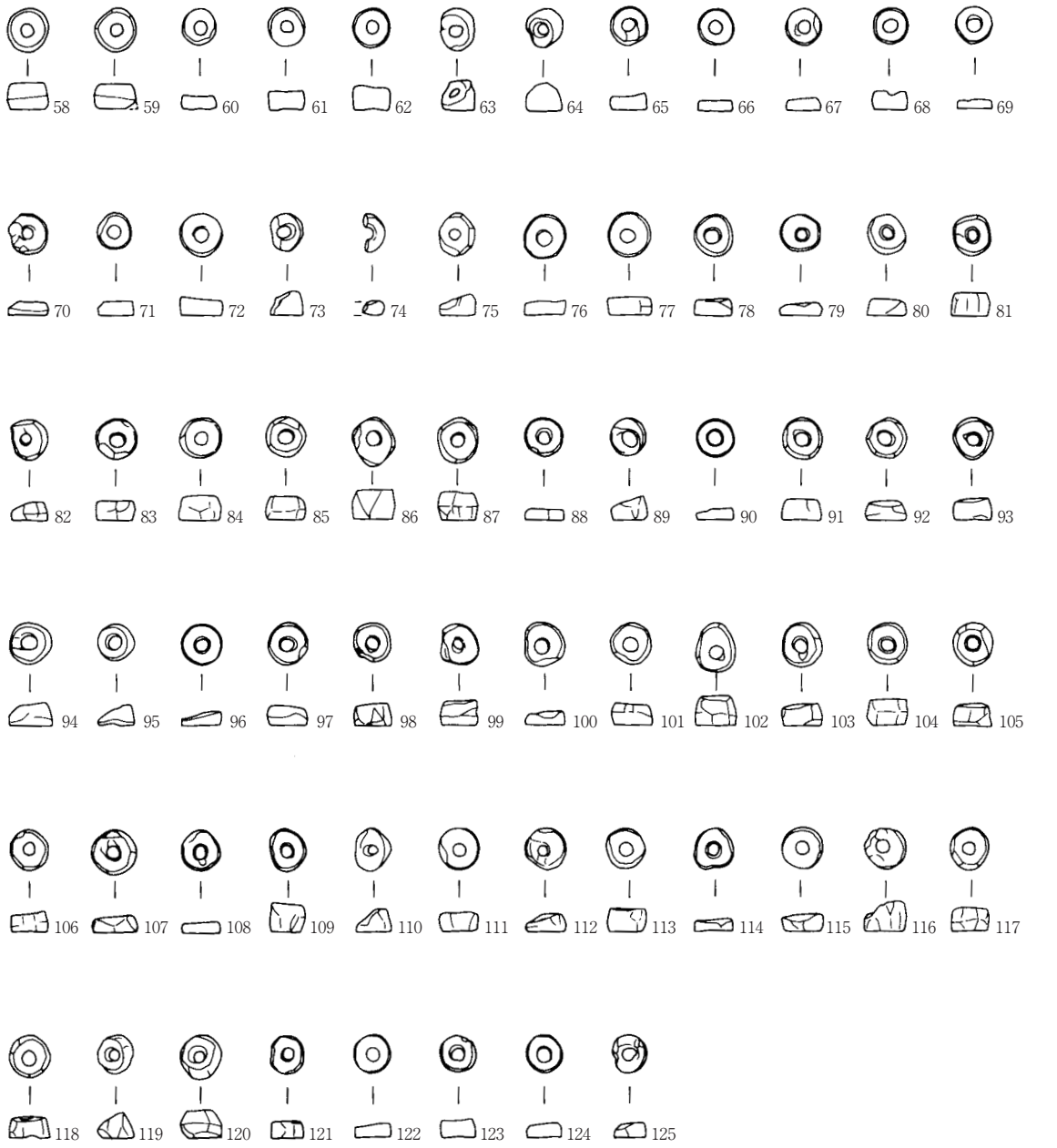
床面からの出土遺物は、堆積状況から、上層硬化面のものと時間差を示すと予想されるが、両者にそれほど隔たりはないように見受けられる。竪穴機能時は古墳中期後半、上層硬化面も直後の中期後半におさまる時期と考えられる。

上層硬化面の性格については、埋没竪穴の窪地を利用した、単なるゴミ捨て場であることも考えられるが、ロームブロックをわざわざ投入していることからすると、何らかの儀礼活動の場であった可能性も否定できない。

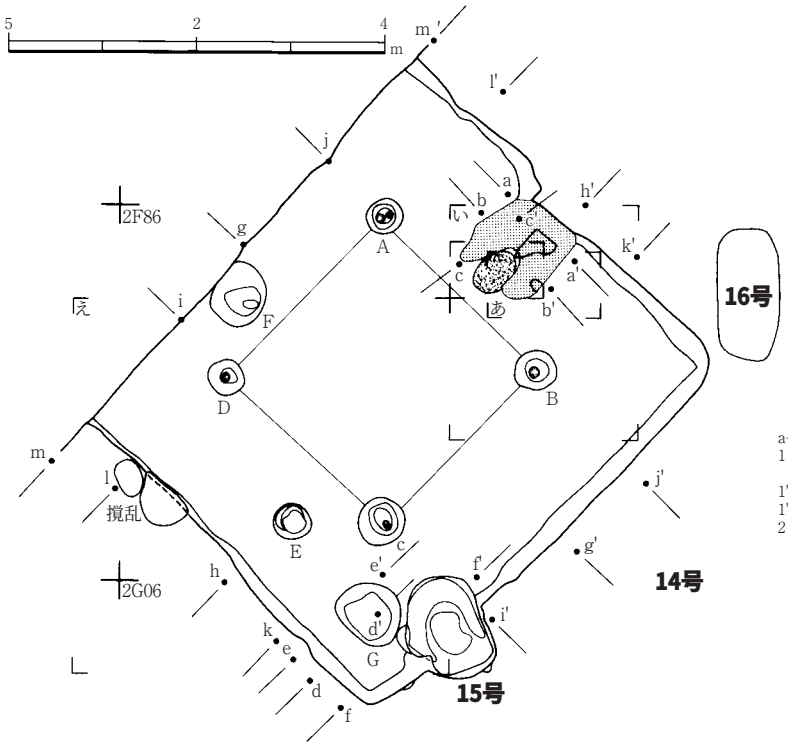
加茂遺跡Ａ・Ｂ地点においても数例確認されているというので（浅利幸一の教示）、それらの詳細が明らかになり次第、比較・検討を試みたい。



第47図　13号遺構下層出土遺物３／４



第48図　13号遺構下層出土遺物４／４



a-a' b-b' c-c'
1 2.5Y7/4浅黄に4/1褐灰混じる 粘質土主体土 黄褐土粒(～5mm)微少 しまる
1' 褐灰土が主体の1層 若干しまる
1" 1層に3層ブロックが混じる
2 3/1黒褐 土
2' 焼土粒(～5mm)の多い2層 しまる
3 7.5YR6/8橙 焼けた粘質土 しまる 焼けた1層、元の内壁か
4 4/3にぶ黄褐 ロームブロック しまる
4' 1'層～4層の漸移層 若干しまる

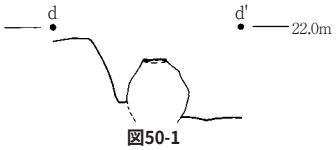


図50-1

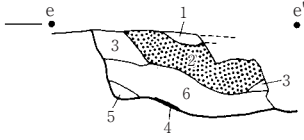
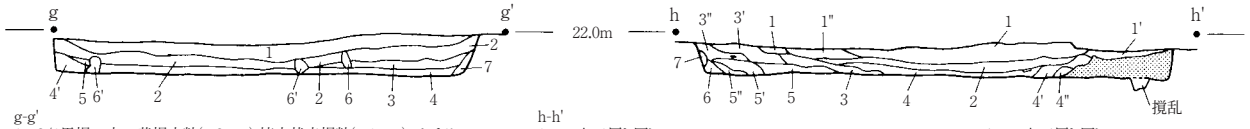


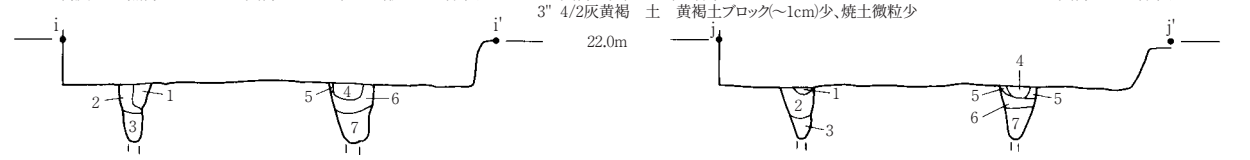
図53-21

e-e'
1 h-h'の1層と同じ しまる
2 2.5YR4/6赤褐 焼土 しまる
3 h-h'の3"層と同じ しまる
4 炭化物ブロック しまる
5 黒ずんだB-B'の6層 しまる
6 h-h'の6層と同じ しまる



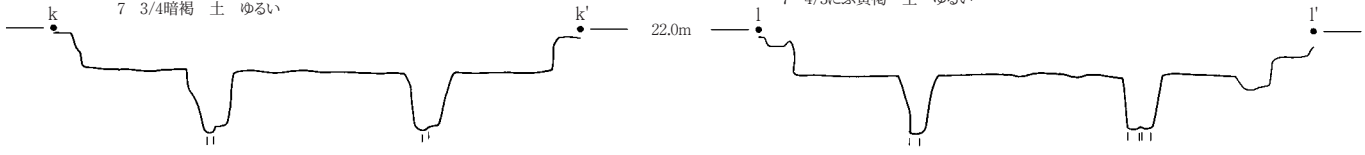
g-g'
1 3/1黒褐 土 黄褐土粒(～2mm)・焼土状赤褐粒(～1mm) しまる
2 3/2黒褐 土 黄褐土粒(～5mm)・焼土状赤褐粒(～3mm)多 しまる
3 3/2黒褐に4/1褐灰のぶち 土 2層～4層の漸移層 しまる
4 4/2灰黄褐 土 若干しまる
4' 焼土状微小粒を多く含む4層
5 3/1黒褐殻～3/2黒褐 土 ゆるい
6 4/1褐灰～4/2灰黄褐 ロームブロック主体土 焼土粒(～3mm)多 しまる
6' 3/1黒褐～黄褐 黄褐土混じりの土 ゆるい
7 4/1褐灰に3/2黒褐のぶち 土 黄褐土ブロック(～5cm)混じる 若干ゆるい

h-h'
1 g-g'の1層と同じ
1' 1層から5/2灰黄褐粘質土(カマド構築材)への漸移層 黄褐土粒(～3mm)・焼土粒(～3mm) 若干しまる
1" 1層のうち黄褐土粒(～5mm)多・炭化物粒少混じる部分 しまる
2 g-g'の2層と同じ
3 3/1黒褐に2/1黒が混じる 土 黄褐土粒(～3mm)・炭化物粒少・焼土状微粒多 若干しまる
3' 4/2灰黄褐 土 粘質土ブロック(～1cm)少、焼土微粒多 黄褐土粒(～1mm) 若干しまる
3" 4/2灰黄褐 土 黄褐土ブロック(～1cm)少、焼土微粒少
4 g-g'の4層と同じ
4' 黄褐土粒(～3mm)・焼土粒(～2mm)混じる4層 若干ゆるい
4" 黒みが強い、黄褐土粒(～3mm)少し混じる4層 若干ゆるい
5 3/2黒褐 土 焼土微粒少 若干しまる
5' 3/2黒褐 土 黄褐土粒・ブロック(～1.5cm)・焼土ブロック(～1cm)少 若干ゆるい
5" 焼土粒のない5'層
6 3/3暗褐に4/2灰黄褐が混じる 土 黄褐土混じる ゆるい
7 4/3にぶ黄褐 土 若干ゆるい 壁～覆土漸移層



i-i'
1 2/1黒 土 上部はしまっている 若干ゆるい
2 4/6褐 土 黄褐土ブロック(～5cm)多 しまる 埋め戻し
3 4/6褐 土 ゆるい
4 2/3黒褐 土 黄褐土ブロック(～4cm) しまる
5 ロームブロック
6 3/4暗褐 土 黄褐土ブロック(～5cm)多 若干ゆるい 埋め戻し
7 3/4暗褐 土 ゆるい

j-j'
1 2/3黒褐 土 しまる
2 3/4暗褐 土 黄褐土ブロック(～3cm)多 若干ゆるい
3 3/4暗褐 土 ゆるい
4 2/2黒褐～2/3黒褐 土 黄褐土粒少混じる しまる
5 5/6黄褐～5/8黄褐 ロームブロック
6 4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック(～3cm)混じる 若干ゆるい
7 4/3にぶ黄褐 土 ゆるい



第49図 14号遺構

14号方形竪穴住居跡（第49～53図）

規模（m）：5.2四方　**柱間**：A－B2.32　B－C2.28　C－D2.32　D－A2.36　**主軸方位**：44°

貯蔵穴：円形／南隅　**時期**：古墳時代中期後半

D1区北辺にかかる方形竪穴住居である。15号土坑に切られる。カマドは北東辺の中央にあり、貯蔵穴Gはカマドと反対側にある。Eが出入り口ピットであろう。近隣の例からすると、竪穴の形状と貯蔵穴の配置から、鬼高式期でも和泉式に近い段階のものと考えられる。主柱穴はA・B・C・Dである。それぞれの覆土断面からは柱の立ち腐れの様子は認められなかった。柱抜き取りの掘り込みも見られない。覆土下層には、大量の焼土がロの字状に内側に傾斜し、堆積していた。床面との間に黒褐土のゆるい層をはさむため廃絶後すぐに生じたものとは確定できないものの、廃絶時の焼却処分が示唆される。遺存の良い遺物がこの焼土層より下でまとまって検出されていることも、その根拠になるだろう。

カマドは、向かって右側の袖材だけが若干遺存している程度で、それほど遺存状態が良くなかった。竪穴覆土にある大量の焼土の存在を勘案すれば、廃絶作業の一環としてカマドが壊されたとも考えられる。支脚（23）はカマド内から検出された。カマド近辺にも土器が集中しているが、南隅の貯蔵穴付近にももう一つのまとまりが認められた。

遺物は土師器が主体で、他に滑石製紡錘車（２）が出土した。紡錘車は、全面に、回転方向に展開する波状文が刻まれており、端部の一部に赤色顔料の付着が認められた。土師器には、平底を持つ鉢あるいは杯（６）、小型の赤彩甕または壺（８）、底部の突出した甕（１・15・24）などが含まれ、調査区内のカマドを持つ竪穴住居として最古相を示す。大型の甑（９）は、把手を持たないもののプロポーションがＴＫ216式の須恵器甑に似ており、それをモデルにした可能性が考えられる古手のものと思われ（坂口1991）、他の須恵器模倣精製土師器との関係が興味深い資料である。

本遺構は古墳中期後半に属すると思われる。

15号土坑（第49図）

規模（m）：長軸1.16／短軸0.86／深さ0.80　**時期**：古墳時代以降

14号掘り下げ時に確認された遺構である。当初、覆土が黒色でゆるいことから、撹乱と誤認したため、堆積状況の断面は記録できなかった。断面形は逆位の凸字状である。14号床面に直立する土師器甕（21）の脇を掘り込まれている。時期は、遺物が14号出土の土師器破片と同様のものしかなかったため、確定はできないが、切り合いからそれ以降の時期が与えられるにすぎない。

202号竪穴建物跡（第54～60図）

規模（m）：7.2×6.0？

柱間：A－B3.23　B－C4.02　C－D3.28　D－A4.00

（A－O1.52　O－B1.72　C－P2.67　P－D0.82　D－N1.52　N－A2.49）

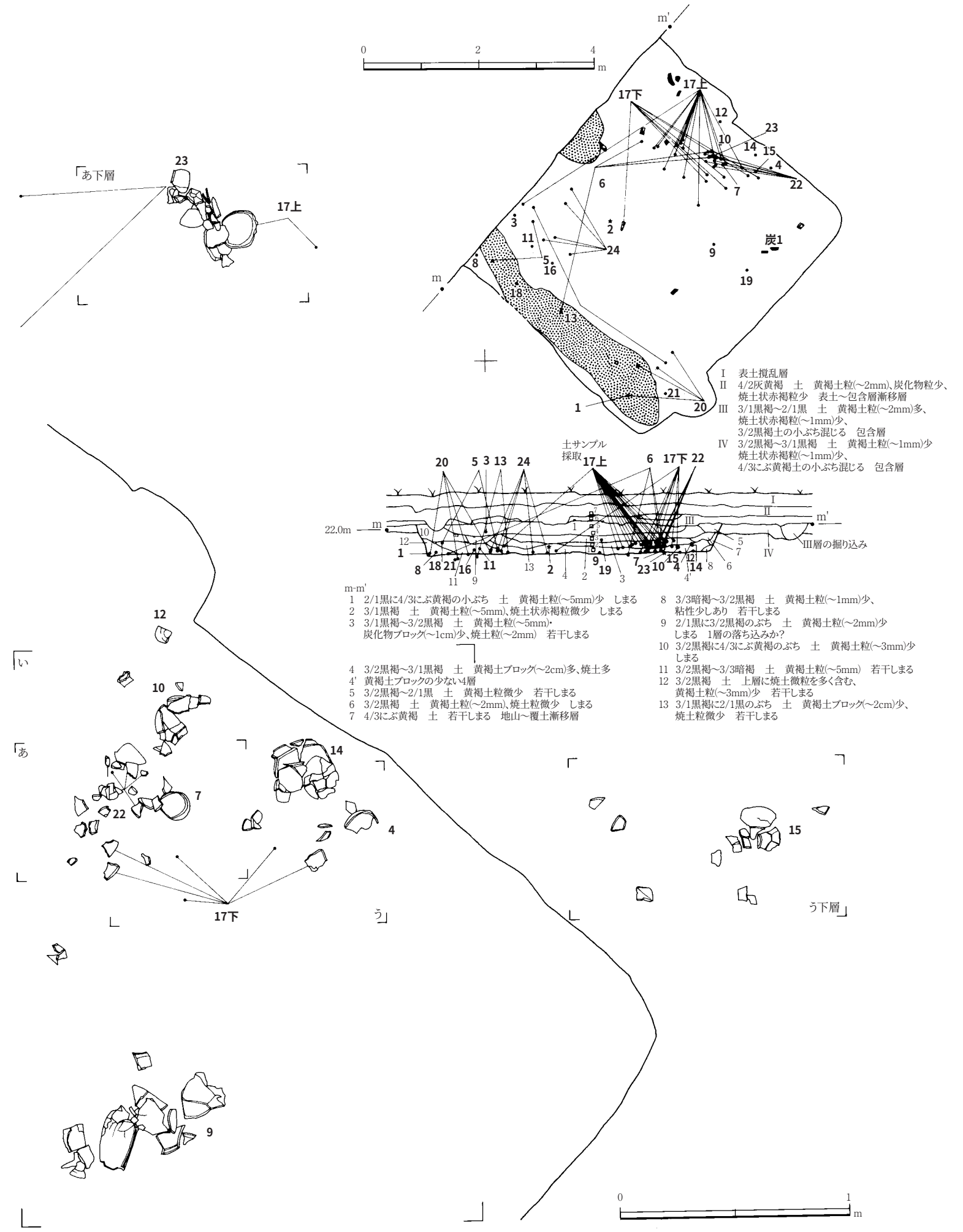
G－H3.03　H－I2.90　I－J2.81　J－G3.08

主軸方位：55°／床下150°／60°

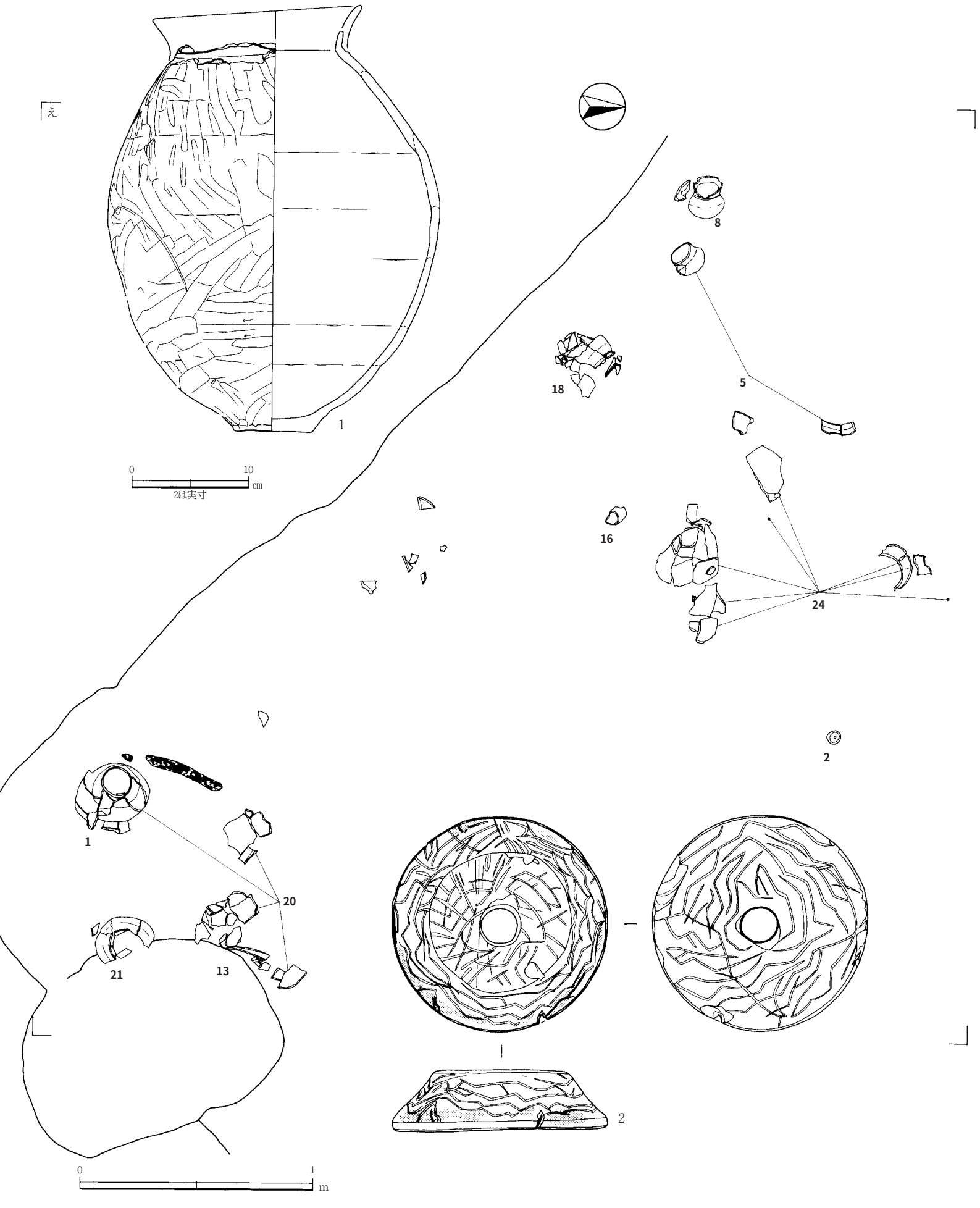
貯蔵穴：正方形／東隅、方～円形／床下東隅（中）、方～円形／床下東隅（古）

時期：古墳時代中期後半

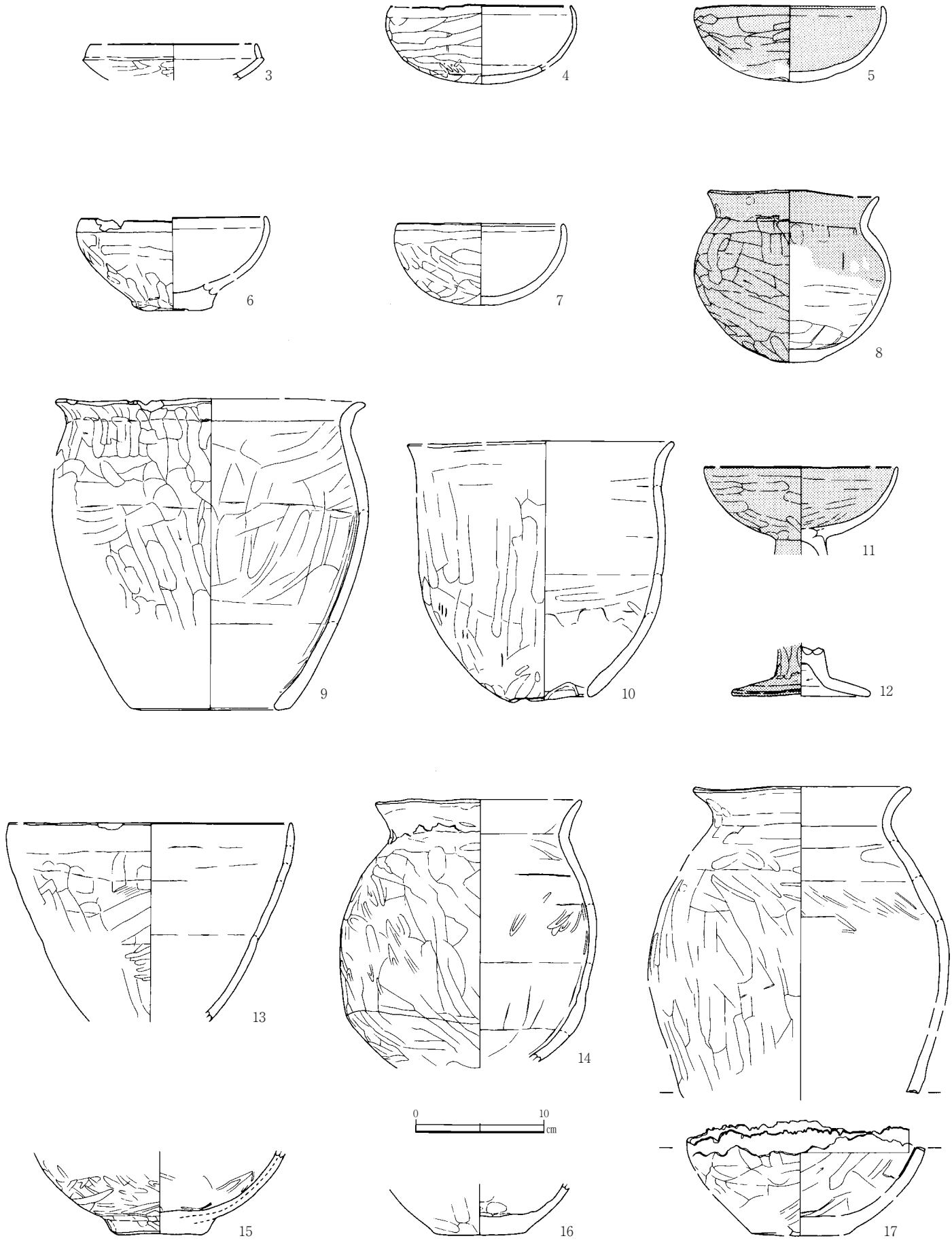
調査区南端に位置する長方形竪穴建物である。東辺南寄りにカマドを持ち、その脇に貯蔵穴が伴う。



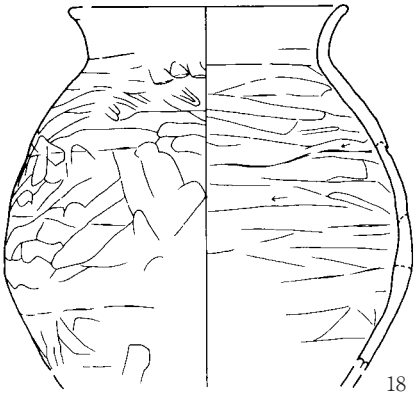
第50図　14号遺構　焼土・遺物検出状況

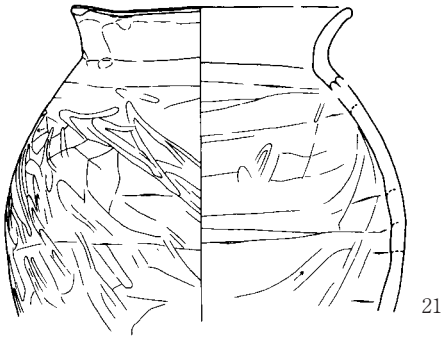


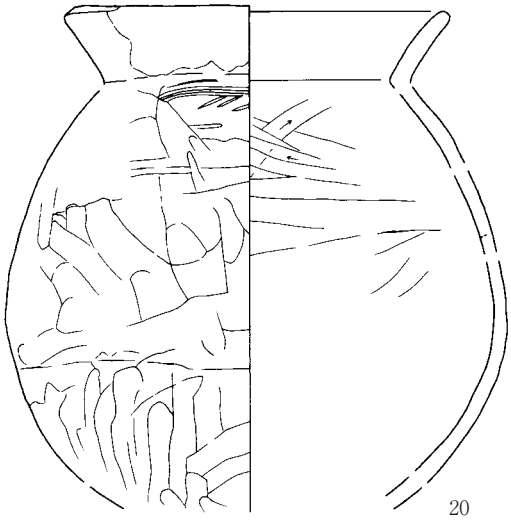
第51図　14号遺構　遺物出土状況および出土遺物１／３

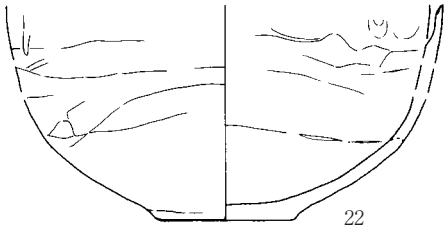


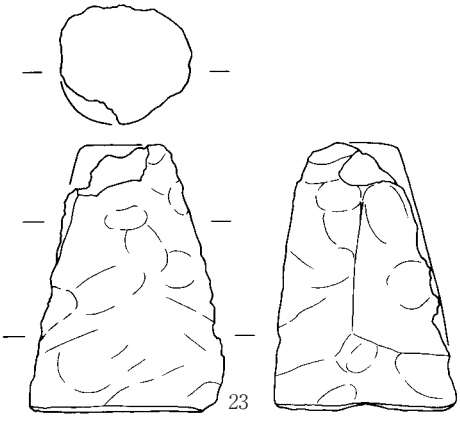
第52図　14号遺構出土遺物２／３

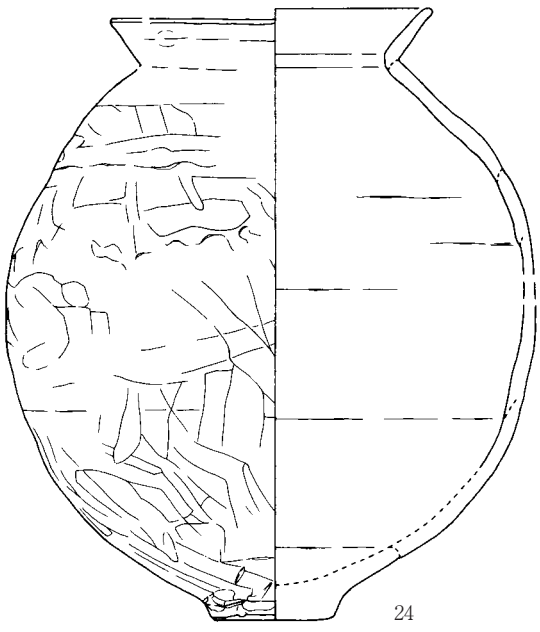


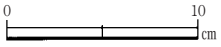




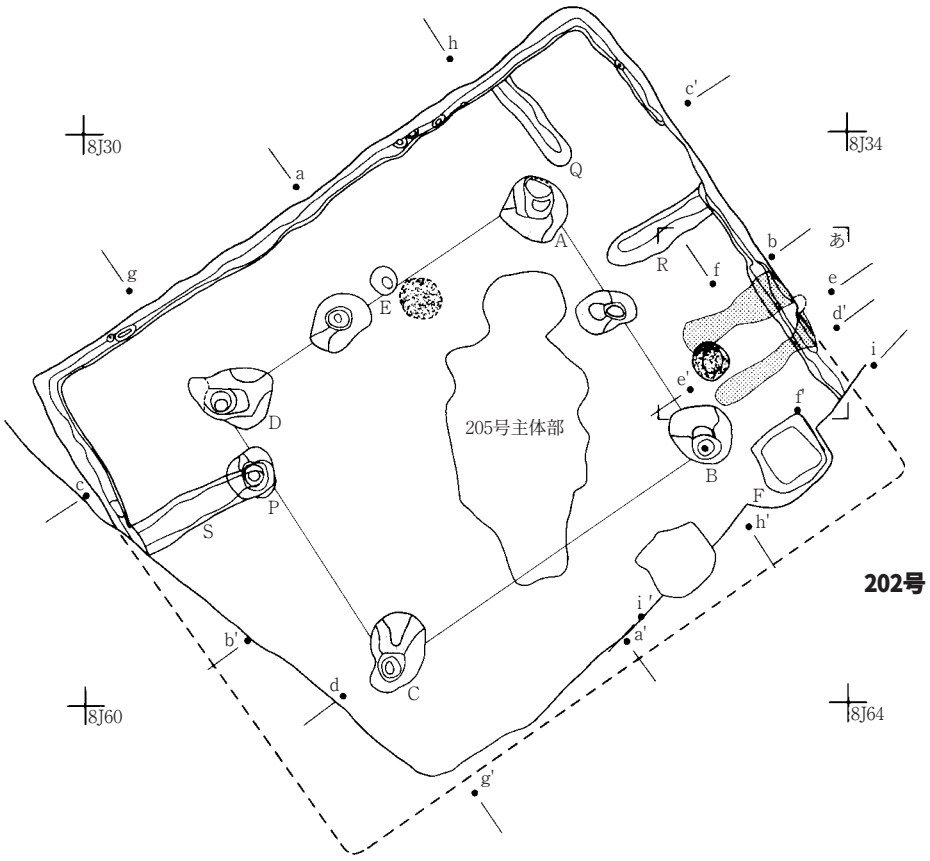


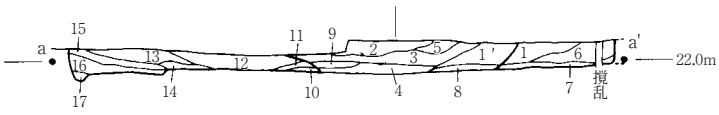


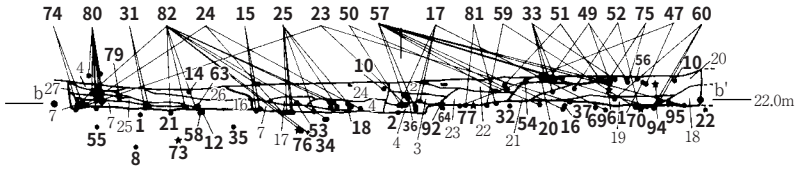


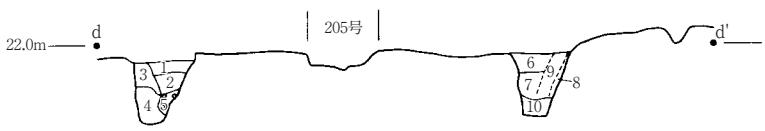


第53図　14号遺構出土遺物３／３





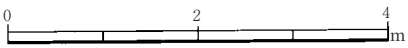




a-a' b-b'
1 暗褐 土 斑点状に黒褐土が混じる、ローム粒状テフラ混じる
1' 1層より黄褐土粒(～5mm)が多い、焼土粒(～3mm)少
2 暗褐 土 黄褐土粒混じる、斑点状に褐土
3 黒褐 土 黄褐土粒・橙焼土粒混じる
4 黒褐 土
5 褐 土 黄褐土ブロック混じる
6 暗褐 土 橙焼土粒混じる
7 暗褐 土
8 黒褐 土
9 黒褐 土 黄褐土粒混じる
10 黒褐 土
11 暗褐 土 黄褐土粒・ブロック混じる
12 褐 ソフトローム主体土 黄褐土ブロック混じる
13 暗褐 土 黄褐土ブロック混じる
14 暗褐 土 黄褐土ブロック混じる
15 黒褐 土 黄褐土粒混じる
16 暗褐 土 黄褐土粒混じる
17 黒褐 土 黄褐土ブロック混じる
18 暗褐 土 黄褐土粒少
19 黒褐 土 黄褐土粒少
20 暗褐 土 黄褐土ブロック・ローム粒状テフラ混じる
21 暗褐 土 ローム粒状テフラ混じる
22 褐 土 黄褐土粒多
23 暗褐 土 斑点状に褐土が混じる、黄褐土粒混じる
24 暗褐 土 斑点状に褐土が混じる
25 黒 土 一部に山砂混じる
26 暗褐 土 黄褐土粒・ブロック混じる
27 暗褐 土 橙焼土粒・黄褐土粒少

c-c'
1 3/1黒褐～3/2黒褐 土 黄褐土粒(～5mm)少 若干しまる
1' 3/1黒褐～2/1黒 土 若干黒い1層 若干ゆるい
2 2/1黒 土 まばらに3/2黒褐土が混じる 若干しまる
3 5/4にぶ黄褐 土 5/6黄褐土ブロック(～5cm)まれ 若干しまる
3' 若干黒い3層 若干ゆるい
4 3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(～5cm)多 ゆるい
5 3/1黒褐～3/2黒褐 土 黄褐土粒(～5mm)多
6 2/1黒 土 黄褐土ブロック(～1cm)少
7 5/6黄褐 ロームブロック(～5cm)主体土 隙間に3/1黒褐土

d-d'
1 3/1黒褐 土 黄褐土粒(～5mm)少 若干ゆるい
2 2/1黒 土 黄褐土ブロック(～1cm)多 若干しまる
3 4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック(～1cm)多 若干ゆるい
4 3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(～2cm)多 ゆるい
5 5/6黄褐 ロームブロック主体土 若干しまる
6 3/1黒褐に4/1褐灰のぶち多 土 黄褐土ブロック(～1cm)少、
焼土状粒微少 若干しまる
7 3/1黒褐～2/1黒 土 若干ゆるい
8 4/2灰黄褐 土 4層～地山漸移層 ゆるい
9 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(～2cm)まれ 若干ゆるい 柱痕状に黒ずむ部分
10 3/2黒褐 ロームブロック(～3cm)主体土 ゆるい



第54図　202号遺構

床面には間仕切りと思われる溝Q・R・S（深さ10・15・８㎝）があり、壁際には周溝が巡る。主柱穴はA・B・C・Dと見られるが、柱筋に柱穴状の穴N・O・Pが位置することから、４本柱の上屋構造ではなかった可能性も考えられる。

覆土の遺存は、北野原遺跡との間を画する谷に面する立地と、205号に切られることもあって、それほど良くなかった。当初、205号の存在が確認できなかった分、堆積状況の把握が遅れたため、一部帰属の判断が難しい遺物が出てしまった。元々の覆土も層理が判然としない堆積で、埋め戻し・焼却処分などは確定できなかった。ただ、D・E付近の床面直上の土はロームブロックが混じる締まったものであったので、鉄器製作に関係する可能性があるものの、埋め戻しが行なわれたのかもしれない。

カマドは、袖部分の下方が残り、その間に天井部分が崩落したと思われる焼けた粘質土が堆積していた。支脚はカマド内の燃焼部縁に立った状態で検出されている。その上層にほぼ完全に復元できた甕形土器が出土したことから、竪穴廃絶時には、カマドが使用時に近いかたちで遺存しており、甕が支脚の上に据えられていた可能性がある。ただ、貯蔵穴F上層・中層から検出された土器・土玉の存在を勘案すれば、火災のような突発的な事態ではなく、廃絶に伴ってカマドがそのようにととのえられたと見た方が理解しやすいと思われる。

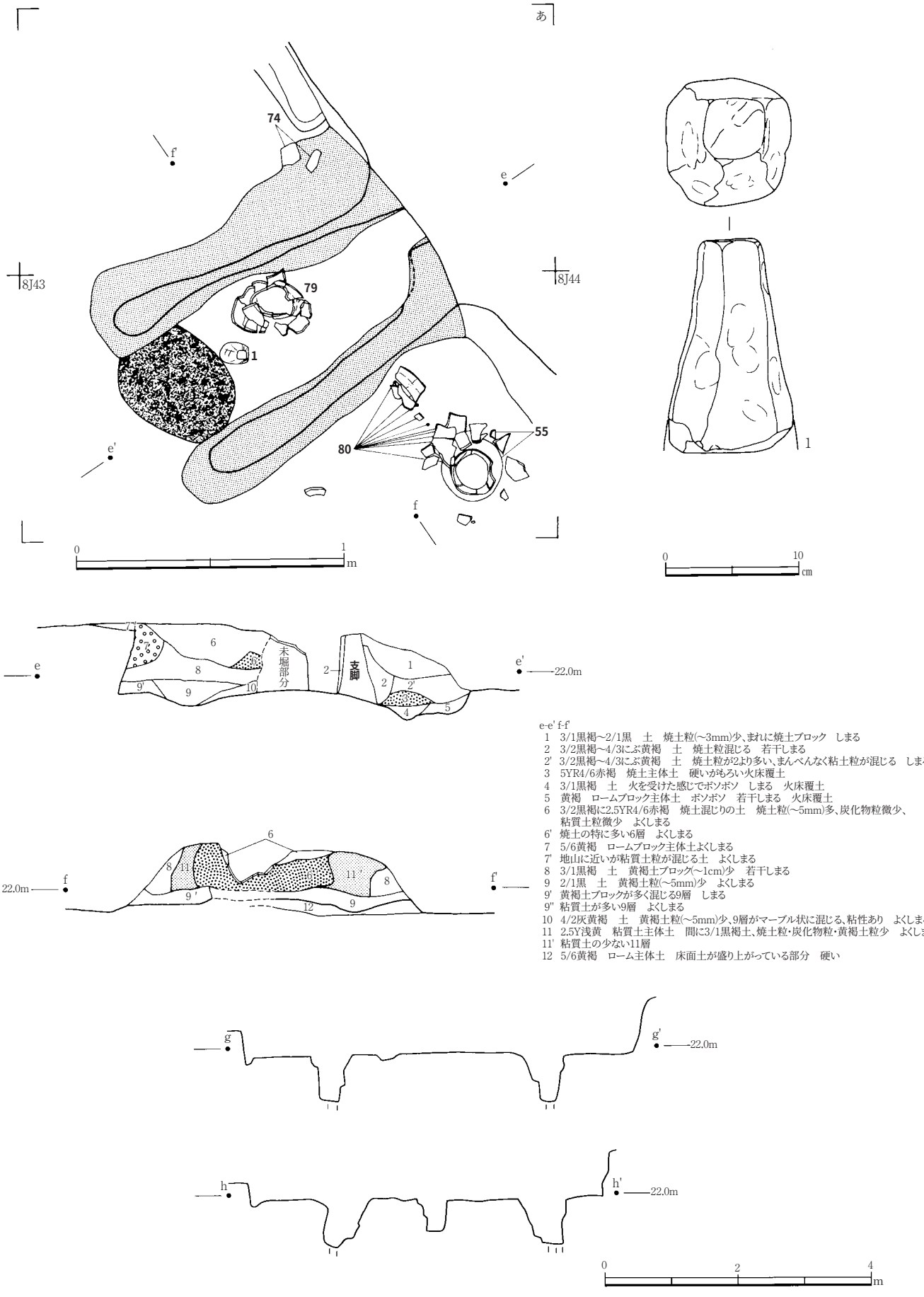
床面以上に伴う遺物は、土師器がほとんどで、磨面のある軽石（83）・鉄製品（90～95）・鉄滓（84～88）・土玉（68～73）・ミニチュア土器（76・77）・焼成粘土片（78）・紡錘車（89：205号覆土中検出）が加わる。須恵器片は、いずれも覆土下層の一括取り上げ遺物に見出されたものである。TK208～TK23式に属するものであろうか。

鉄滓と器種不明の鉄製品（91・93・94）の出土は、鉄器製作（小鍛冶）を示唆しているが、調査時にそれと認識して覆土の篩いなどを行えなかったため、鍛造剥片など微細な遺物は未検出である。また、鉄床石・羽口も出土していない。床面で検出されたE脇の被熱部の存在、想定される長方形という竪穴の形状（１：1.2）は、千葉市鎌取遺跡での若干遡る和泉式期後半の例（5.1×6.1m）と近似しており（上守・出口ほか1993）、鉄器製作に関係した現象と思われる。同遺跡報告書に触れられているとおり、市内では、草刈遺跡C区・K区・潤井戸西山遺跡（鈴木1986）で、近い時期の鉄器製作に関係する遺構・遺物が確認されている。これらの散見される鉄器製作址は、以後の集落遺跡において一般的な構成物へとなっていく過程を示しているのであろう。

土師器は、杯にごく浅いもの（３・７・11）、口縁の屈曲するもの（２・６）があること、須恵器模倣精製の高杯（43・46～48）の存在、と鬼高式古相を示す。

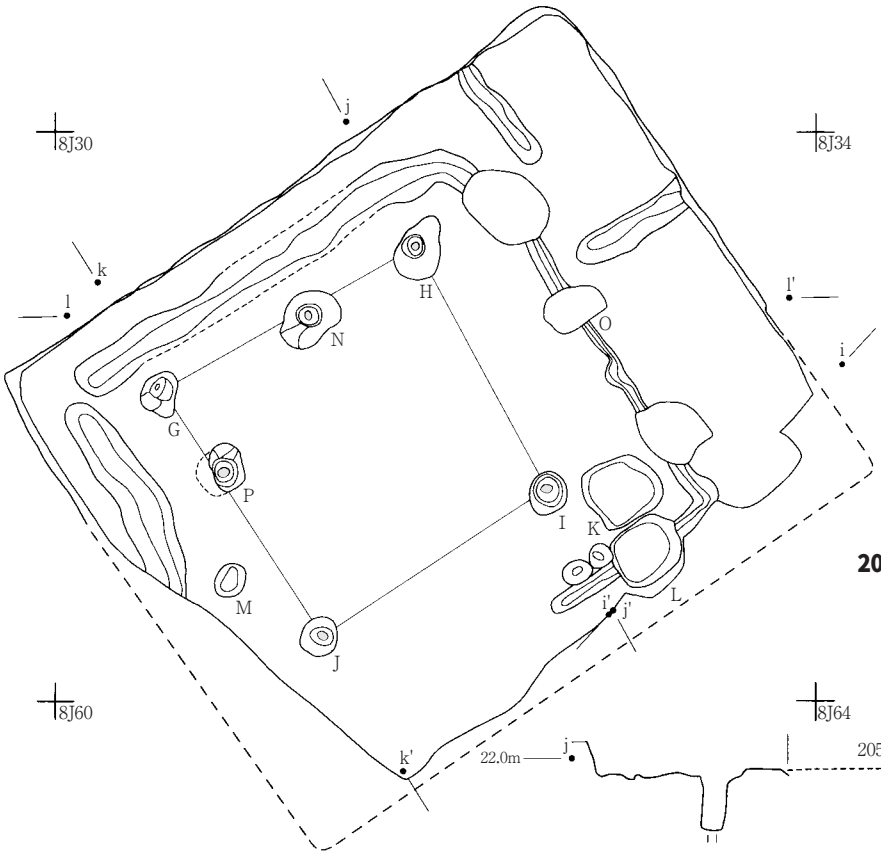
柱穴は、OについてはA・B・C・Dが検出された時点で確認されていたが、F・G・H・I・J・K・L・M・N・P・Q・Rは床面構築土を掘り下げてはじめて確認できたものである。床面下には、一回り小さい周溝があり、廃絶時のプランの前に竪穴の拡張が行われたことが分かった。この最小のプランに伴うのは柱穴G・H・I・J、貯蔵穴K（深さ40㎝）と考えられる。また、この組み合わせからはずれる貯蔵穴Lは、プランが最小と最大の間の時期のものと仮定できる。この間の時期に、竪穴の拡張に伴って、柱穴はA・B・C・Dに移行したと思われる。床面土が垂直的に二つに分かれ、その下方に貯蔵穴Lがあることもそれを支持する。以上から、拡張は２段階行われ、少なくとも最後の段階には鉄器製作が行われたと推察される。それぞれの段階にカマドが伴ったかは不明である。

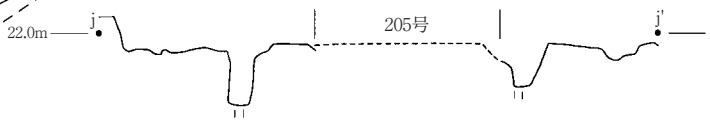
各床面の時期は、出土する土器に大きな違いが認められないので、古墳中期後半におさまるものと考えられる。

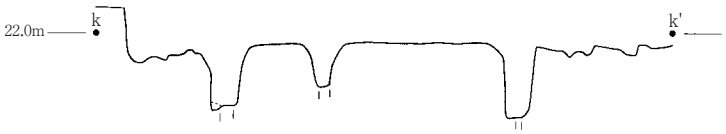


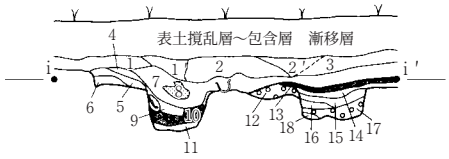
e-e' f-f'
1 3/1黒褐～2/1黒　土　焼土粒(～3mm)少、まれに焼土ブロック　しまる
2 3/2黒褐～4/3にぶ黄褐　土　焼土粒混じる　若干しまる
2' 3/2黒褐～4/3にぶ黄褐　土　焼土粒が2より多い、まんべんなく粘土粒が混じる　しまる
3 5YR4/6赤褐　焼土主体土　硬いがもろい火床覆土
4 3/1黒褐　土　火を受けた感じでボソボソ　しまる　火床覆土
5 黄褐　ロームブロック主体土　ボソボソ　若干しまる　火床覆土
6 3/2黒褐に2.5YR4/6赤褐　焼土混じりの土　焼土粒(～5mm)多、炭化物粒微少、粘質土粒微少　よくしまる
6' 焼土の特に多い6層　よくしまる
7 5/6黄褐　ロームブロック主体土よくしまる
7' 地山に近いが粘質土粒が混じる土　よくしまる
8 3/1黒褐　土　黄褐土ブロック(～1cm)少　若干しまる
9 2/1黒　土　黄褐土粒(～5mm)少　よくしまる
9' 黄褐土ブロックが多く混じる9層　しまる
9" 粘質土が多い9層　よくしまる
10 4/2灰黄褐　土　黄褐土粒(～5mm)少、9層がマーブル状に混じる、粘性あり　よくしまる
11 2.5Y浅黄　粘質土主体土　間に3/1黒褐土、焼土粒・炭化物粒・黄褐土粒少　よくしまる
11' 粘質土の少ない11層
12 5/6黄褐　ローム主体土　床面土が盛り上がっている部分　硬い

第55図　202号遺構　カマド・遺物検出状況および出土遺物１／５

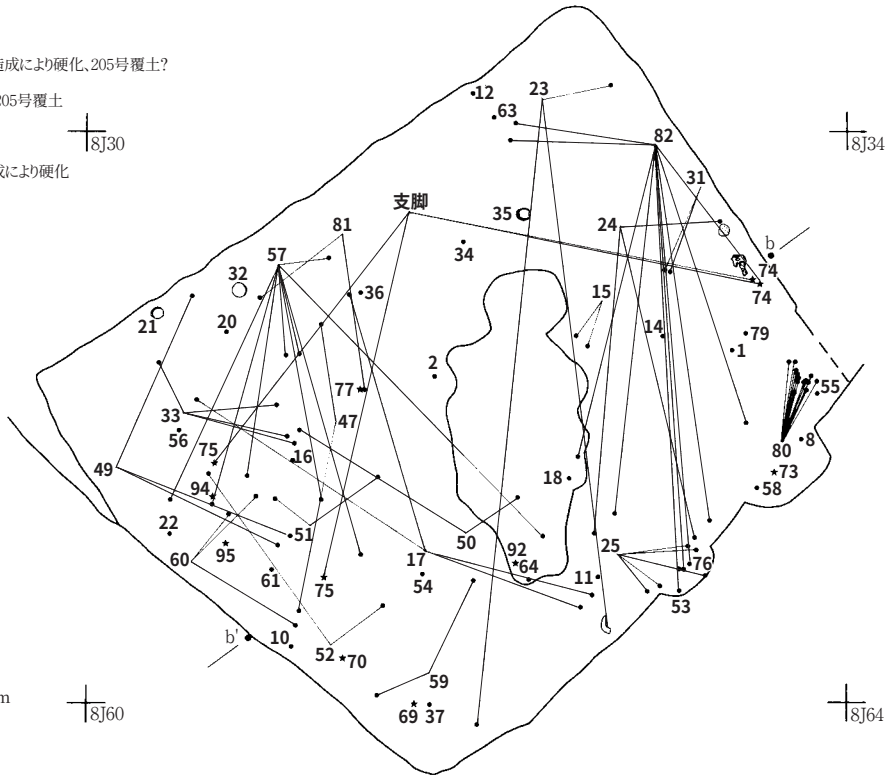




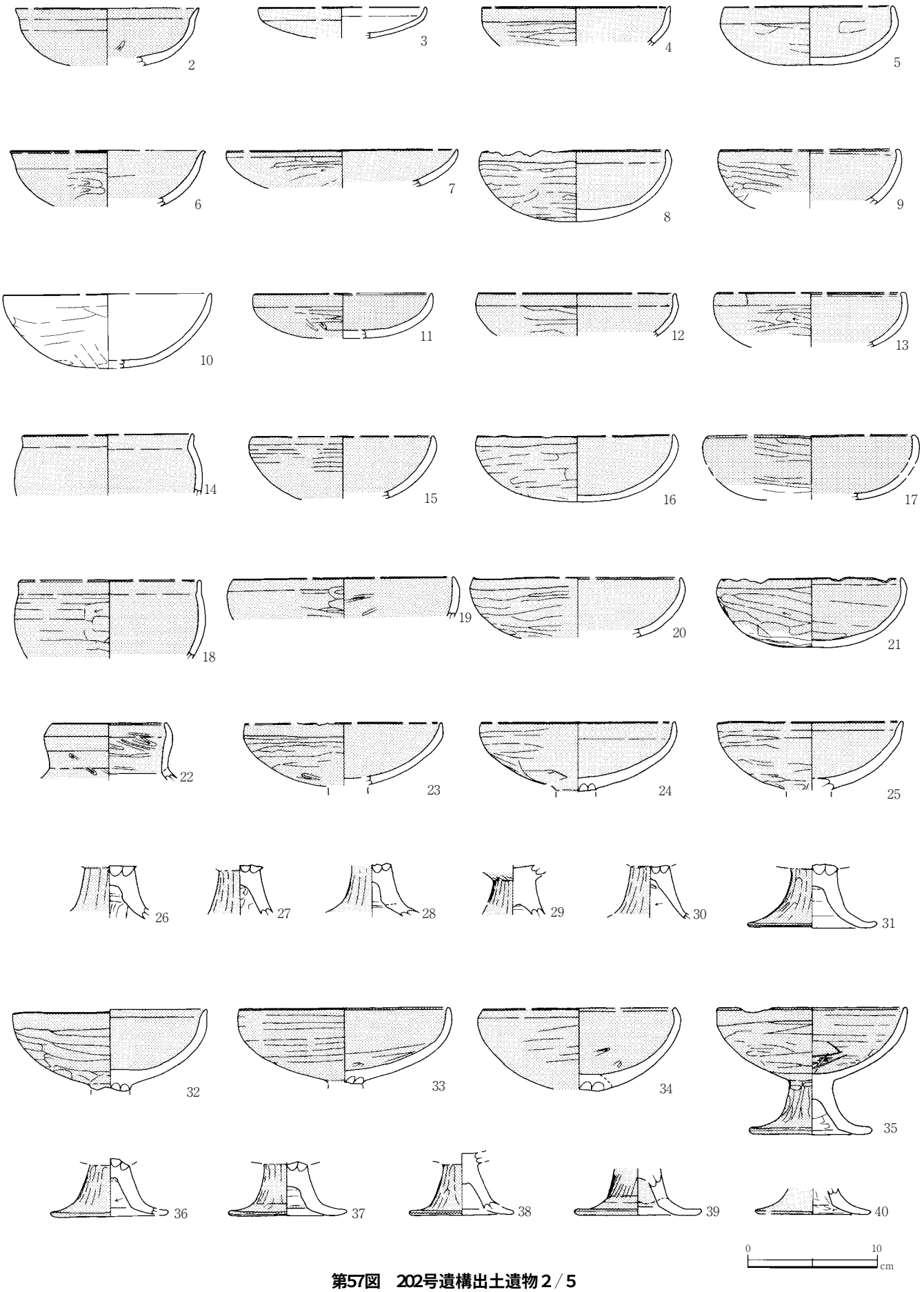




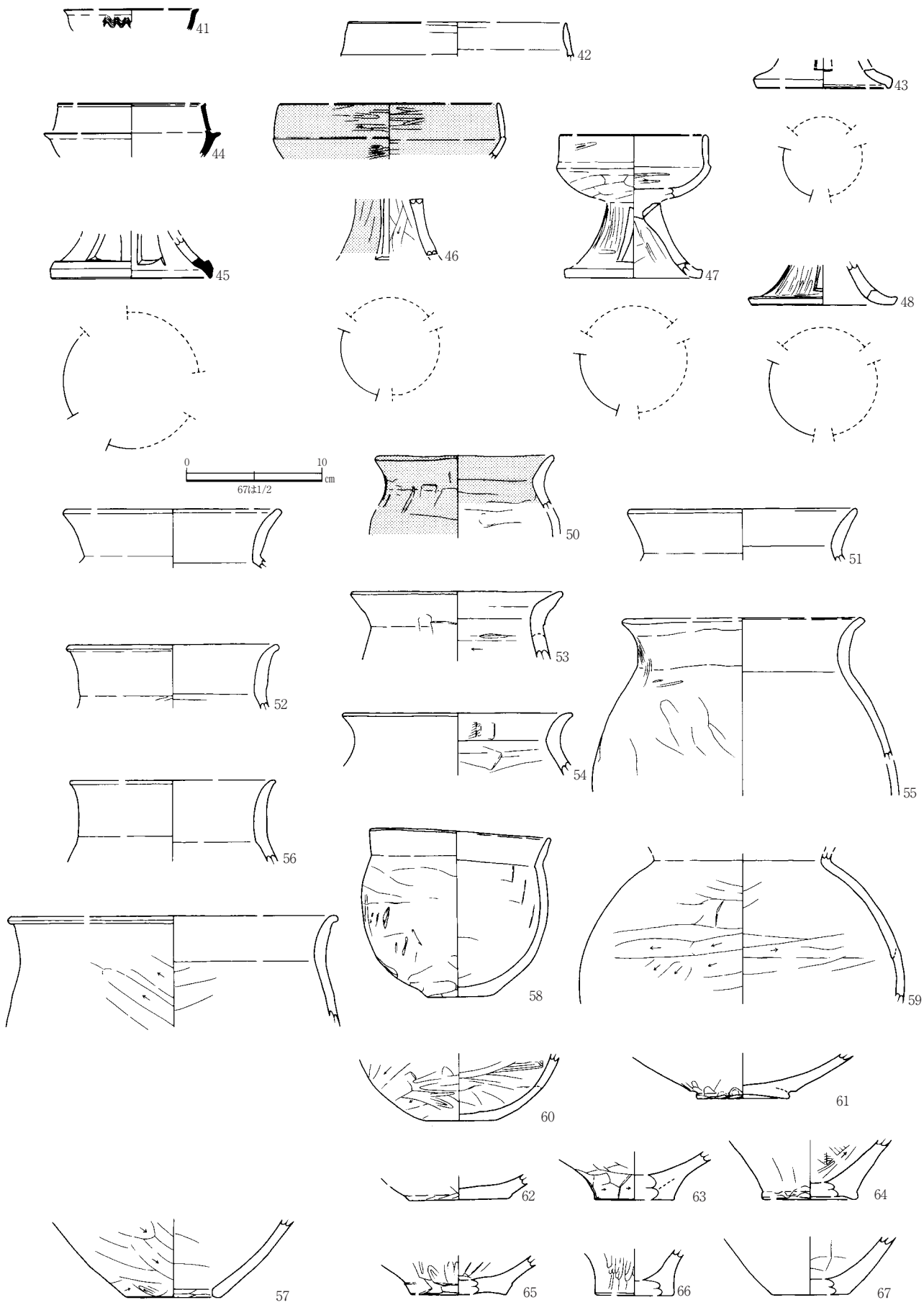
i-i'
1 3/2黒褐　土　黄褐土粒(～5mm)多、焼土粒(～3mm)多　硬い　造成により硬化、205号覆土?
1' 黄褐土粒の少ない1層　硬い　造成により硬化、205号覆土
2 3/2黒褐　土　黄褐土ブロック(～5cm)多　硬い　造成により硬化、205号覆土
2' 2層～3層の漸移層　硬い　造成により硬化、205号覆土
3 3/1黒褐　土　黄褐土ブロック(～2cm)多　硬い　造成により硬化
4 黄褐　ロームブロック(～5cm)主体土　硬い　造成により硬化
5 3/2黒褐～4/2灰黄褐　土　黄褐土ブロック(～1cm)少　硬い　造成により硬化
6 3/1黒褐　土　黄褐土粒(～5mm)少　硬い　造成により硬化
7 3/1黒褐～3/2黒褐　土　焼土粒(～3mm)少、粘質土粒少、
黄褐土ブロック(～2cm)多　硬い　造成により硬化
8 2.5Y浅黄　粘質土ブロック主体土　造成により硬化
9 3/2黒褐　ロームブロック(～3cm)主体土　若干しまる
10 1.7/1黒　土　黄褐土ブロック(～2cm)少、焼土粒(～5mm)少、
若干粘性あり　若干しまる
11 3/1黒褐～3/2黒褐　土　黄褐土ブロック(～2cm)少　しまる
12 黄褐　ロームブロック主体土　3/1黒褐土多く混じる　硬い
13 3/1黒褐～2/1黒　土　炭化物多　よくしまる
14 3/1黒褐～4/2灰黄褐がマーブル状に混ざる　土
黄褐土ブロック(～1cm)多　硬い
15 3/1黒褐　土　黄褐土ブロック(～1cm)多　よくしまる
16 4/2灰黄褐　土　黄褐土ブロック(～1cm)多　よくしまる
17 黄褐　ロームブロック主体土　隙間に3/1黒褐土　よくしまる
18 3/1黒褐　土　黄褐土ブロック多　よくしまる



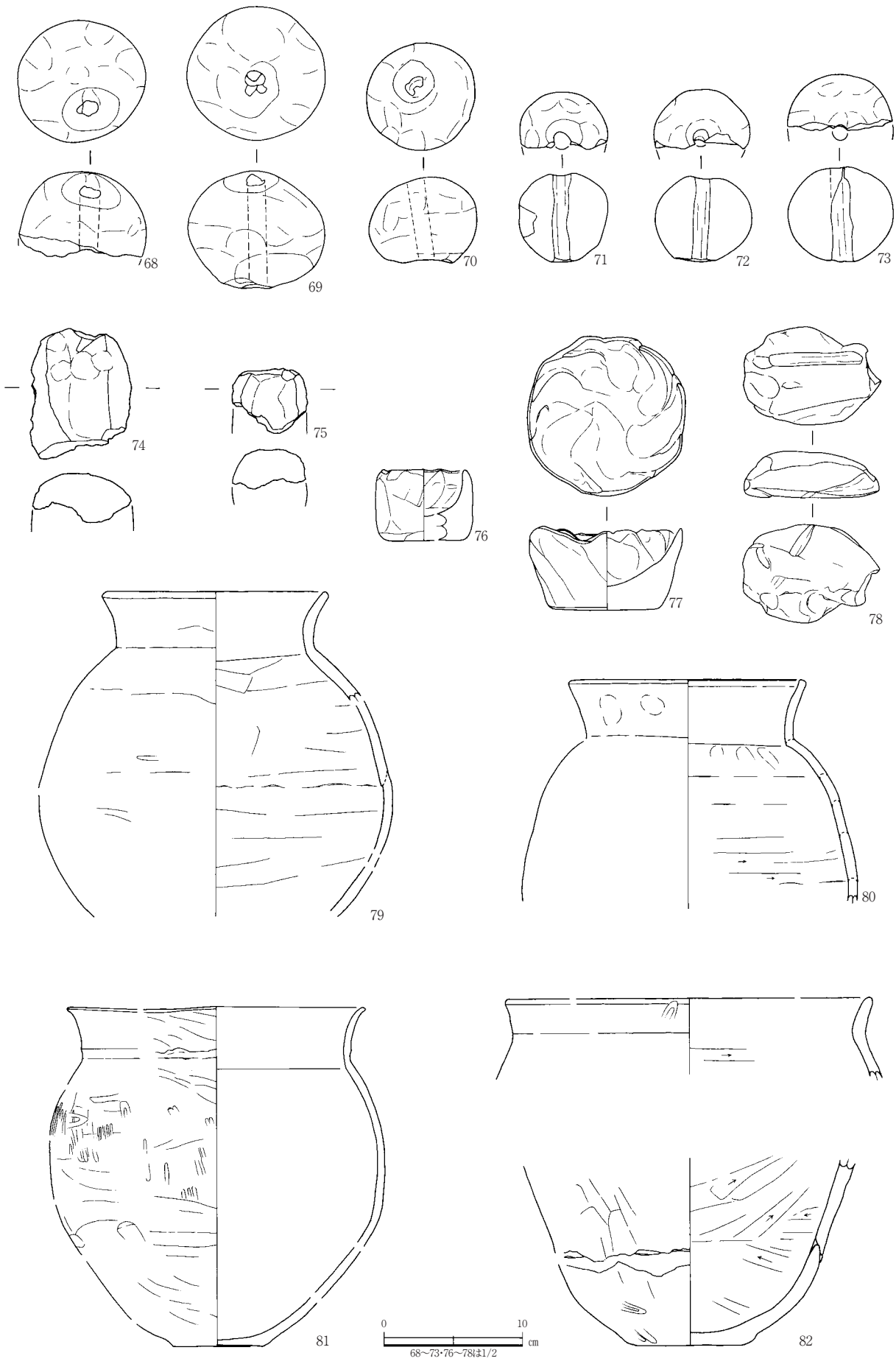
第56図　202号遺構下層遺構および遺物出土状況



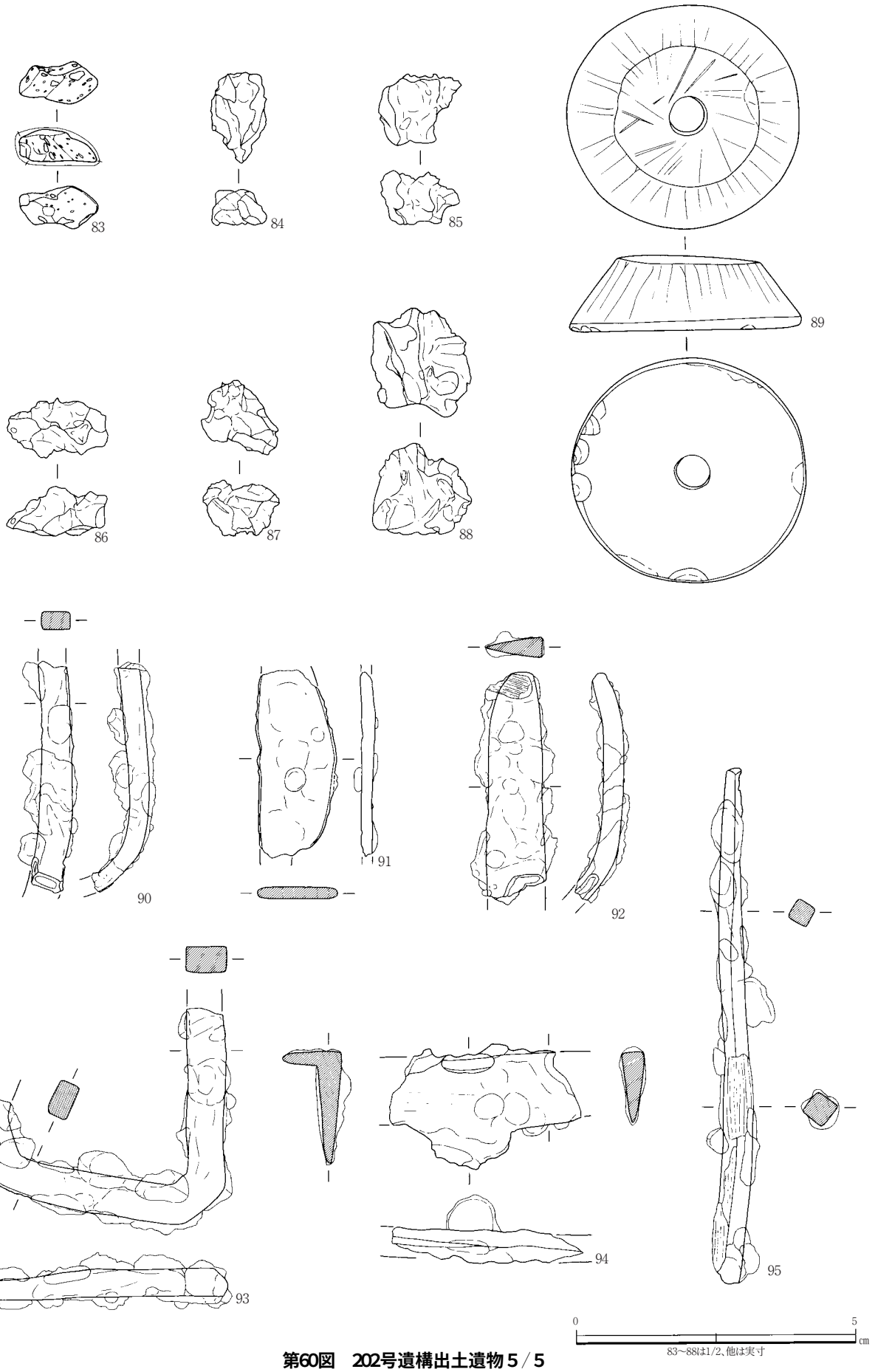
第57図　202号遺構出土遺物２／５



第58図　202号遺構出土遺物３／５



第59図　202号遺構出土遺物 4／5



第60図　202号遺構出土遺物５／５

210号竪穴住居跡（第61～64図）

規模（m）:4.7×4.6～4.9　**柱間**:A－B2.29　B－C2.48　C－D2.40　D－A2.35　**主軸方位**:52°

貯蔵穴：円形／東隅　**時期**：古墳時代中期後半

D２区のほぼ中央に位置する方形竪穴住居である。東辺の若干南寄りにカマドが構築され、その脇に貯蔵穴Fが伴う。主柱穴はA・B・C・Dで、深さ30㎝のEが出入り口ピットである。深さ10㎝のGは不明である。B・C・Dには抜き取りのためと思われる掘り込みがある。Dは柱穴の壁面に、抜き取りに対応するようなかたちで、オーバーハングする窪みを持つので、抜き取りが行われた可能性がかなり高い。床面の壁際には周溝がある。また、床面構築土を掘削する時に、深さ10㎝ほどの間仕切りと思われる溝が検出された。

覆土は、下層の一部に廃絶後短期間で堆積したと思われる黄褐土の多い層が見られ、その近辺に炭化物・焼土がまとまって見られた。焼土は平面で見ると、西隅を中心にL字形に堆積している。なお、このような焼土の堆積状況は、他の竪穴でも見られ、カマドの相対的に反対側に焼土が堆積するという規則性を持つようである。これはカマドと出入り口の位置に関係して生じる現象なのかもしれない。

カマドは、ほとんど煙道が延びないタイプで、支脚と袖部分の一部が遺存していた。断面の観察によると、袖部分の上方と天井部は崩落したようである。支脚がそのまま残されているので、竪穴廃絶にともなって壊されたかどうかは確定できない。ただ、貯蔵穴に埋め戻しのような覆土・堆積状況が見られるので、カマドも同時に、ふさわしいようにととのえられた可能性が考えられる。

遺物は、土師器を中心に、少量の須恵器（30・33）、土玉（36～41）・砥石（42・43）・支脚片（44）が出土した。土師器には、須恵器模倣精製の高杯（25～27）、低脚だが大ぶりの高杯（23・24）、鉢（31）、壺（28）、赤彩甕（壺）（29・32）などが見られ、鬼高式古相を示す。これらは、草刈六之台遺跡草刈３号墳周溝上層出土土器（白井ほか1994）に近似した内容と見受けられる。甑（50）は須恵器模倣精製高杯と同様の胎土を持ち、ヘラミガキで仕上げられる異質なもので、これもまた須恵器模倣の器種と考えられる。これらの遺物から、本遺構は古墳時代中期後半に属すると思われる。

401号竪穴住居跡（第65～67図）

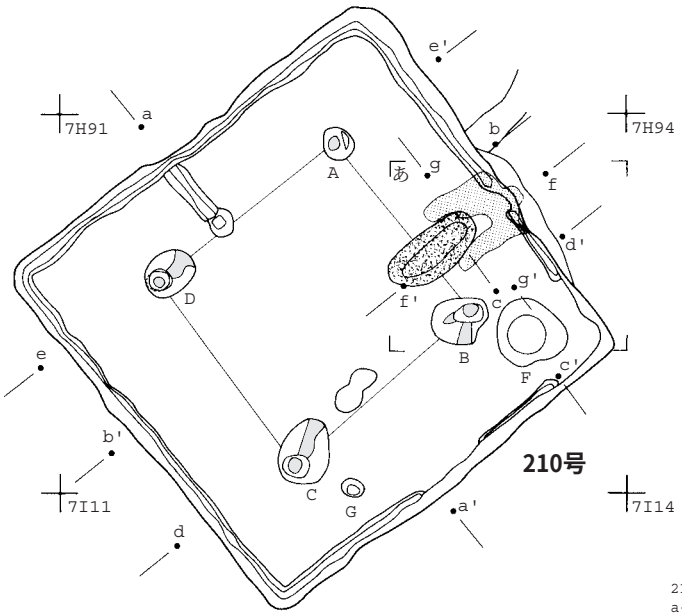
規模（m）：5.88×5.88？　**柱間**：A－B3.34　A－C3.16　**主軸方位**：64°

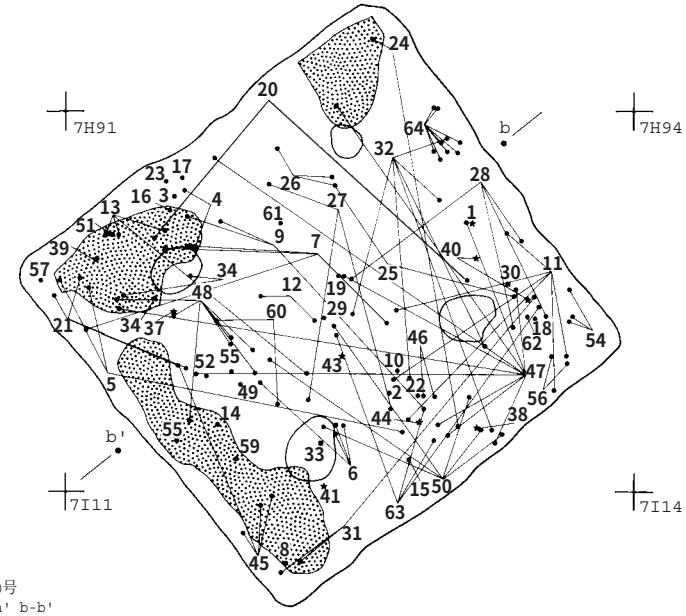
貯蔵穴：不明　**時期**：古墳時代中期後半

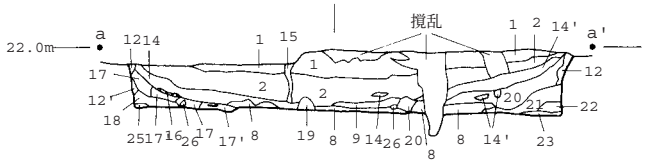
調査区最東端に位置する方形竪穴住居である。カマドは東辺南寄りに構築される。床面からは、A・B・Cの主柱穴と、出入り口ピットD、炉状の窪みEが検出された。また、壁際に周溝がほぼ一周する。カマドの大半と東柱穴、そして、おそらく貯蔵穴は竪穴の南側３分の１にあり調査区外にある。元々の遺存していた掘り込みも浅いが、確認調査のトレンチ掘削時に遺構の中心部分を床面まで掘削してしまったため、覆土の遺存状況は良くない。

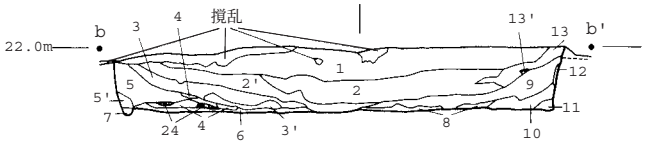
カマドは袖部分の一部が遺存しており、支脚が火床から倒れた状態で検出された。おそらく煙道のほとんど延びないタイプと思われる。カマドの中心部分は撹乱されており、支脚もえぐられている。なお、カマドの近辺から完形に近く復元できた土器などが検出されたことからすれば、支脚も加えて、廃絶時にそのようにととのえられたと考えることも可能である。

支脚には、烏帽子形（14）と棒形（22）の２つがあり、同時に用いられていたようである。前者は

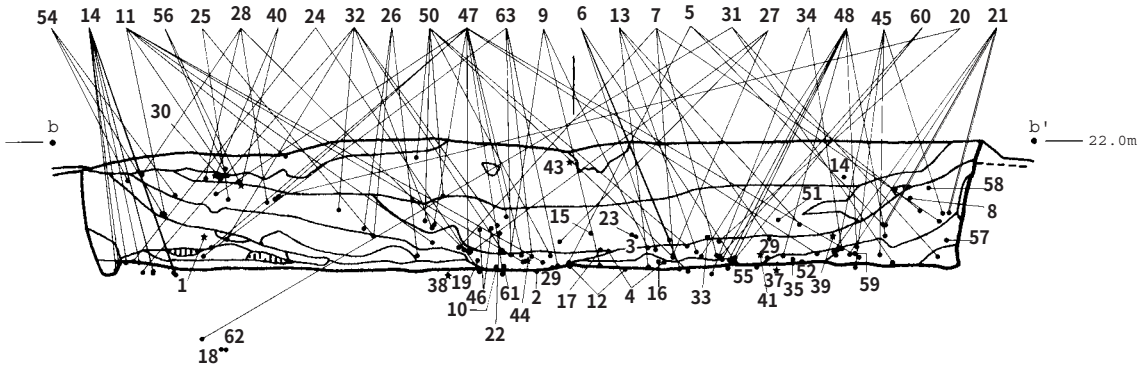


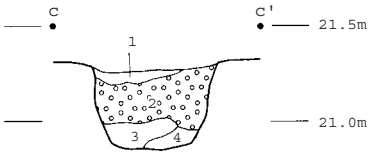


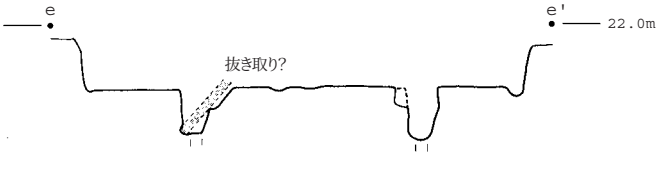




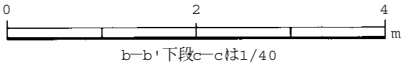
210号
a-a' b-b'
1 3/1黒褐~2/1黒に4/2灰黄褐の小ぶち少　土　黄褐土粒(~3mm)・焼土状粒 テフラ?~3mm)多
2 3/1黒褐~2/1黒　土　黄褐土粒(~5mm)、焼土状粒　微少
2' 3/1黒褐4/2灰黄褐~4/3にぶ黄褐の小ぶち多　土　下の3層が撹拌されたように見える
3 4/3にぶ黄褐~4/4褐　ロームブロック(~1cm)主体土
3' ロームブロック(~3cm)主体の3層
4 3/2黒褐　土　2.5Y浅黄粘質土粒多炭化物粒少
5 3/2黒褐　土　黄褐土ブロック(~1cm)・2.5Y浅黄粘質土少　しまる
5' 若干淡い5層
6 3/1黒褐　土　焼土粒黄褐土粒・炭化物粒混じる　若干しまる
7 3/1黒褐~3/2黒褐　土　黄褐土粒少ブロック多　若干ゆるい
8 3/2黒褐~3/3暗褐　土　焼土粒黄褐土粒・炭化物粒少　しまる
9 3/1黒褐~3/2黒褐　土　黄褐土粒(~1mm)多、焼土・炭化物粒少　しまる
10 2/1黒　土　黄褐土粒(~3mm)・焼土粒少　しまる
11 2/1黒　土　若干しまる
12 3/2黒褐~4/2灰黄褐　土　しまる　覆土~地山漸移層
12' 黄褐土ブロックが混じる12層　若干ゆるい
13 3/1黒褐に5YR4/8赤褐が混じる　焼土混じりの土　しまる
13' 特に焼土の濃い13層　よくしまる
14 3/1黒褐に4/2灰黄褐の小ぶち少　土　黄褐土粒(~5mm)多、焼土微粒・炭化物粒少　若干しまる
14' 2層~20層の漸移層、4/2灰黄褐の小ぶちが多くはいる14層
15 4/2灰黄褐土が墳砂状に通っているところ
16 3/1黒褐2.5YR赤褐　焼土ブロックが多く混じる土　若干ゆるい
17 3/2黒褐~4/2灰黄褐　土　黄褐土粒(~2mm)多、まれにブロック、焼土粒・粘質土粒多、炭化物少　若干しまる
17' 粘質土焼土の多い17層　若干ゆるい
18 3/1黒褐~3/2黒褐　土　黄褐土粒(~2mm)少、底近くに焼土が混じる　若干しまる
19 3/1黒褐~3/2黒褐　土　2.5Y浅黄粘質土粒多しまる
20 3/2黒褐~4/3にぶ黄褐　土　黄褐土粒(~5mm)多、焼土粒・炭化物粒少　しまる
21 3/1黒褐　土　黄褐土粒(~5mm)少、焼土粒・炭化物粒微少　若干ゆるい
22 3/1黒褐~2/1黒　土　焼土粒粘質土・黄褐土粒少　若干ゆるい
23 3/2黒褐~4/2灰黄褐　土　黄褐土ブロック(~1cm)多　しまる　覆土~床面漸移層
24 炭化物ブロック主体土
25 4/3にぶ黄褐~4/4褐　ロームブロック主体土
26 黄褐　ロームブロック





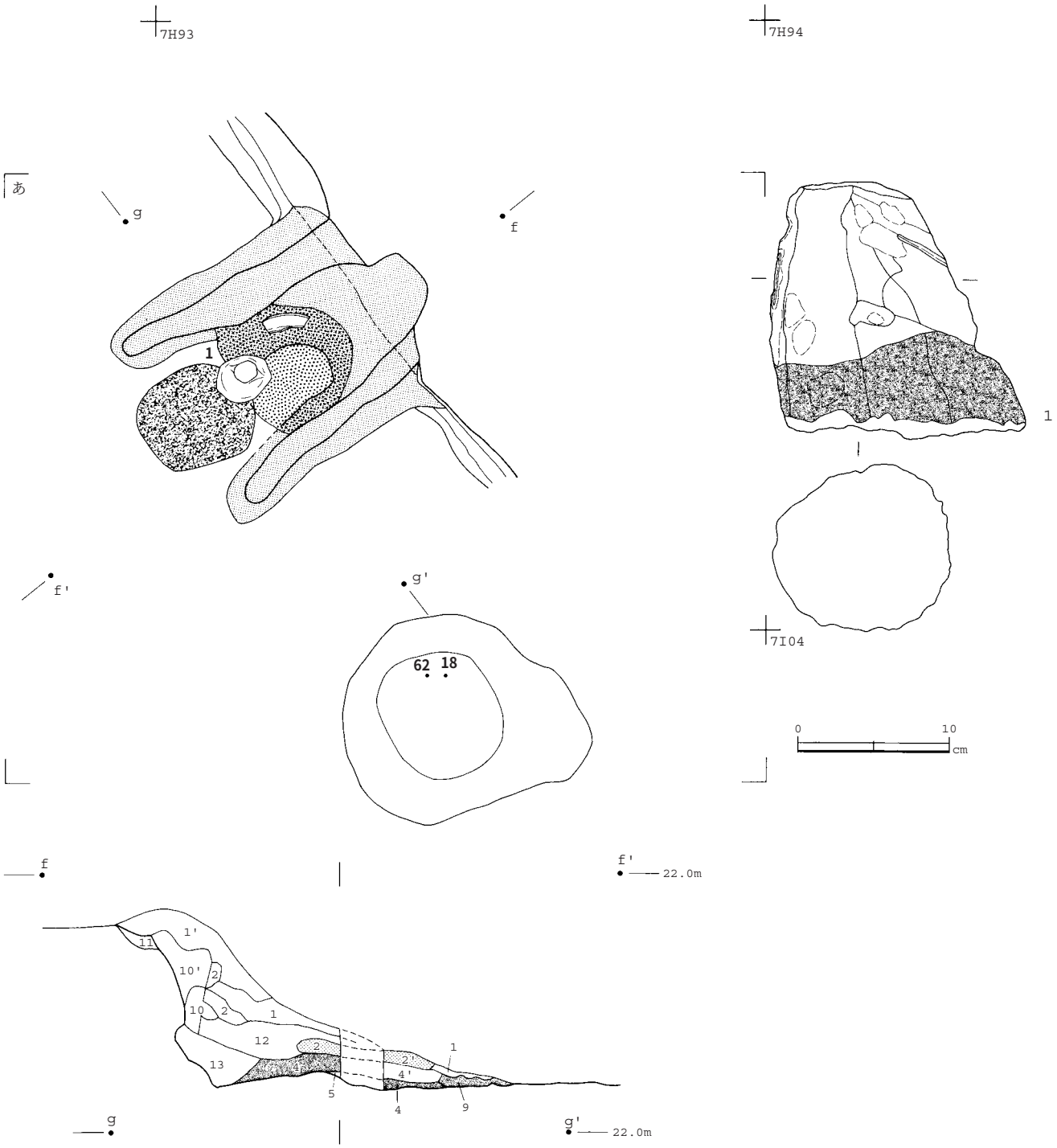


c-c'
1 3/2黒褐　土　黄褐土ブロック(~2cm)多2.5Y浅黄粘質土粒(~5mm)、焼土粒(~5mm)、炭化物粒　(~5mm)少　若干しまる
2 3/2黒褐　土　黄褐土ブロック(~5cm)多2.5Y浅黄粘質土粒(~5mm)少、炭化物粒・焼土粒微少　ゆるい
3 2/1黒　土　黄褐土粒(~2mm)・焼土粒(~2mm)少、粘性あり　若干ゆるい
4 3/2黒褐　土　黄褐土ブロック(~5cm)、粘質土微粒少、粘性あり　若干ゆるい



b—b'下段c—cは1/40

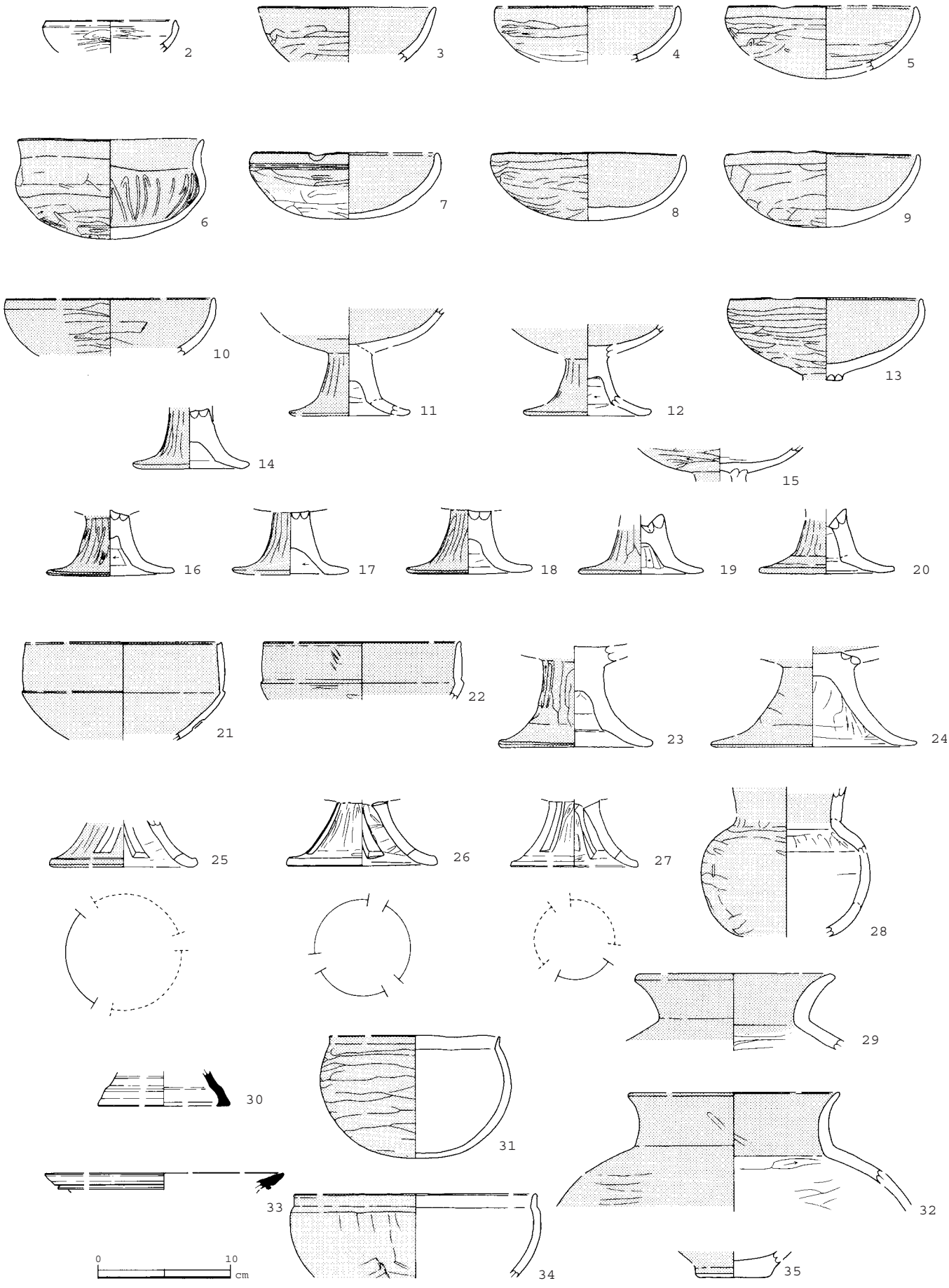
第61図　210号遺構　焼土・遺物検出状況



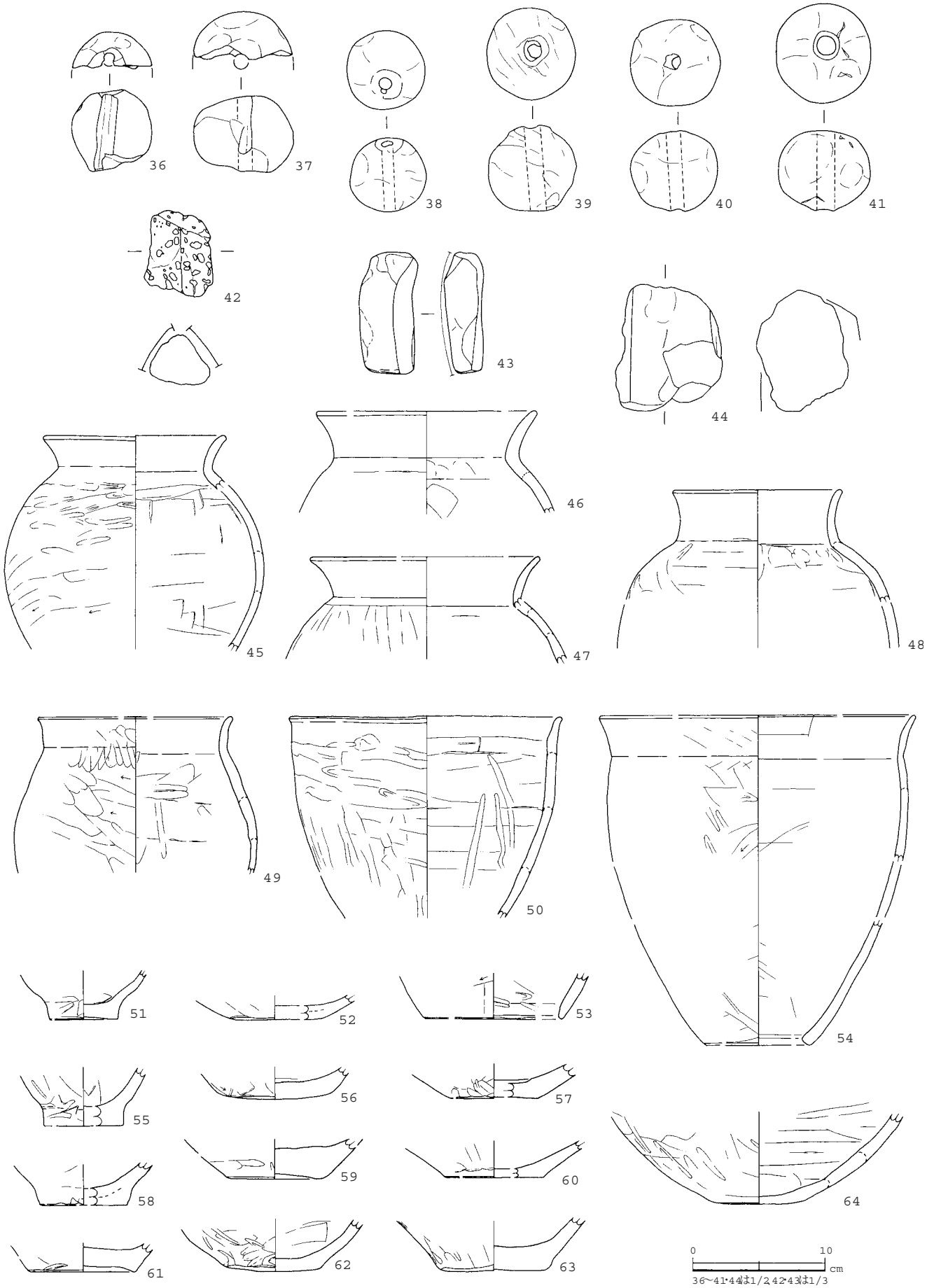
f-f' g-g'
1 3/1黒褐~3/2黒褐 土 粘質土粒(~5mm)・焼土ブロック(~1cm)多
炭化物ブロック(~2cm)少 若干しまる
1' 粘質土ブロック多の1層 硬い
2 2.5Y浅黄 粘質土主体土 2.5YR赤褐焼土粒多 硬
2' 黒褐土焼土粒多の2層
3 2.5Y浅黄 粘質土主体土 硬い
4 2/1黒 土 黄褐土粒(~5mm)、焼土粒(~5mm)多、炭化物粒(微少)多 若干ゆるい
4' 粘質土多の4層 しまる
5 3/2黒褐~4/3にぶ黄褐 土 粘質土粒・焼土粒少 しまる
3層カマド材の下にあるので構築時のままか?
6 3/2黒褐 土 焼土ブロック(~1cm)多粘質土ブロック(~1cm)少 若干しまる
7 4/4褐~5/6黄褐 ロームブロック主体土 硬い カマド~床面漸移層
8 2.5YR赤褐 焼土主体土 間に3/2黒褐土混じる 若干しまる
9 2/1黒~1.7/1黒 土 焼土粒(5mm)、炭化物多 若干ゆるい
10 5YR赤褐 焼土主体土 しまる
10' 3/1黒褐3/2黒褐土粘質土粒が多く混じる10層
11 4/3にぶ黄褐~4/4褐 土 若干しまる 縄文包含層
12 3/2黒褐 土 焼土ブロック(~1cm)・黄褐土粒(~5mm)多 若干しまる
13 3/2黒褐~4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック少 若干しまる

0
1
m

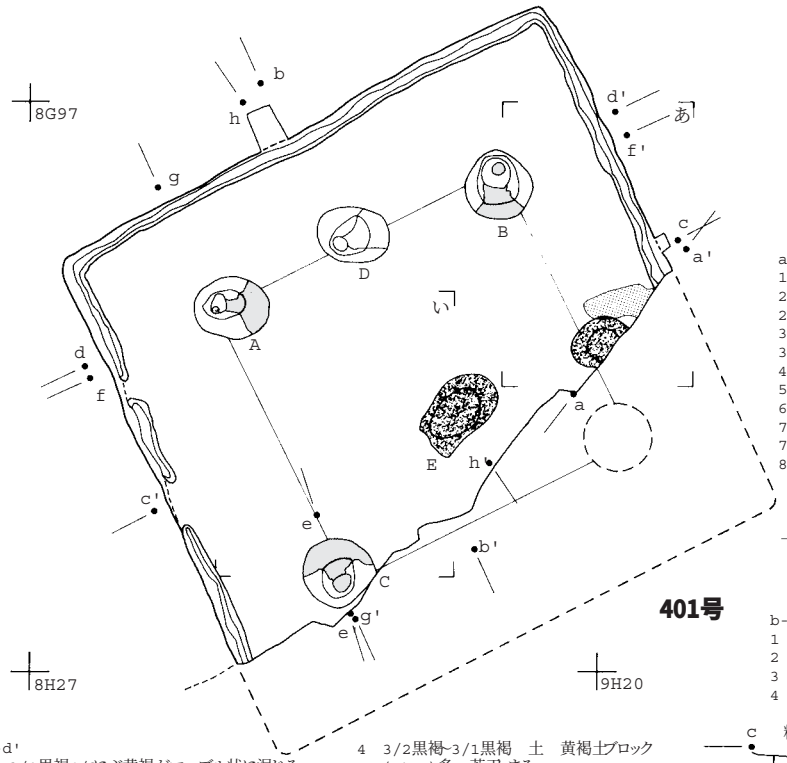
第62図　210号遺構　カマド周辺および出土遺物１／３

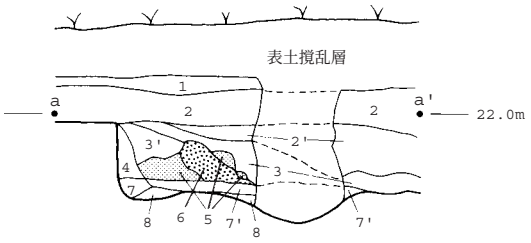


第63図　210号遺構出土遺物２／３

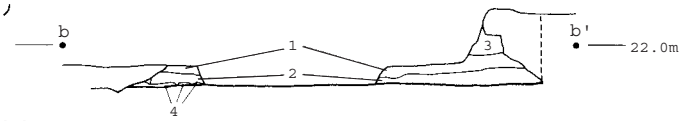


第64図　210号遺構出土遺物３／３

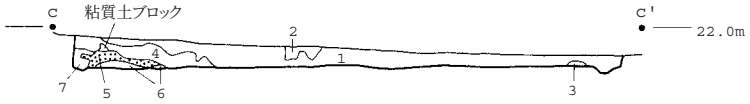




a-a'
1 4/2灰黄褐~3/2黒褐 土 焼土粒(~3mm)・黄褐土粒少 硬い 表土～包含層、造成により硬化
2 2/1黒~3/1黒褐 土 焼土ブロック(~1cm)・黄褐土粒(~2mm)少 硬い 包含層、造成により硬化
2' 4/3にぶ黄褐土がマーブル状に混じる2層 硬い 造成により硬化
3 4/3にぶ黄褐に3/1黒褐の小ぶち 土 黄褐土粒(~3mm)少、焼土粒微少 硬い 造成により硬化
3' 2.5Y浅黄粘質土が多く混じる3層 硬い 造成により硬化
4 5/4にぶ黄褐 土 粘質土・焼土混じる 若干しまる
5 2.5Y浅黄 粘質土主体土 しまる カマド材
6 4/2灰黄褐に2.5YR5/8明赤褐が混じる 焼土混じりの土 しまる
7 2/1黒 土 黄褐土ブロック(~2cm)少 若干ゆるい
7' 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)少 焼土ブロック(~1cm)多 しまる
8 5/6黄褐 ロームブロック主体土 よくしまる 床面構築土

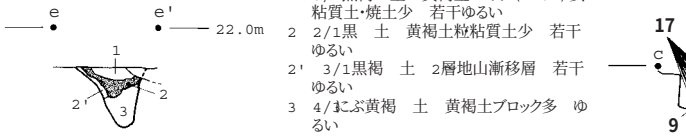


b-b'
1 3/2黒褐~3/1黒褐に4/3にぶ黄褐のぶちが多くはいる 土 黄褐土ブロック(~1cm)少 しまる
2 3/2黒褐~4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)多焼土粒(~2mm)少 しまる
3 3/1黒褐 土 しまる
4 黄褐 ロームブロック主体土 しまる 覆土～地山漸移層

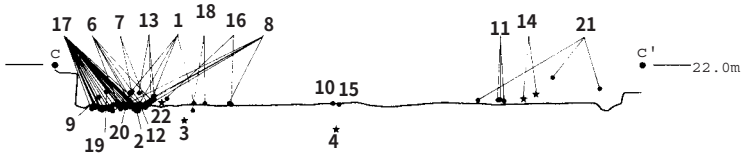


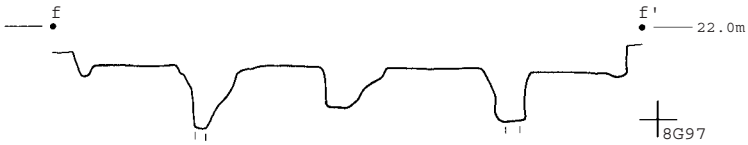
d-d'
1 3/1黒褐4/3にぶ黄褐がマーブル状に混じる土 若干ゆるい
2 2/1黒~1.7/1黒 土 黄褐土粒炭化物少 ゆるい
3 4/4褐 土 黄褐土ブロック(~3cm)多 ゆるい
4 3/2黒褐~3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)多 若干しまる
5 4/3にぶ黄褐 土 黄褐土粒・ブロック(~2cm)多、炭化物少 若干しまる
6 2/1黒 土 黄褐土粒焼土粒少 ゆるい
7 4/6褐 土 ゆるい

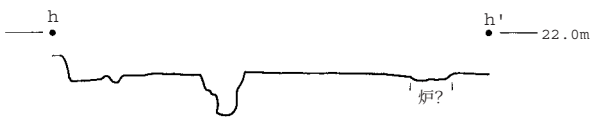
c-c'
1 3/2黒褐に3/1黒褐のぶち 土 黄褐土・焼土粒・粘質土粒・炭化物粒多 しまる
2 3/1黒褐~2/1黒 土 若干ゆるい 撹乱?
3 ロームブロック しまる
4 3/2黒褐~4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)多焼土粒(~3mm)・粘質土ブロック少 しまる
5 4/2灰黄褐 土 2.5YR赤褐焼土ブロック(~1cm)・粘質土多 しまる
6 4/3にぶ黄褐～4/4褐 土 しまる 床面構築土
7 3/1黒褐~2/1黒 土 焼土粒少 しまる

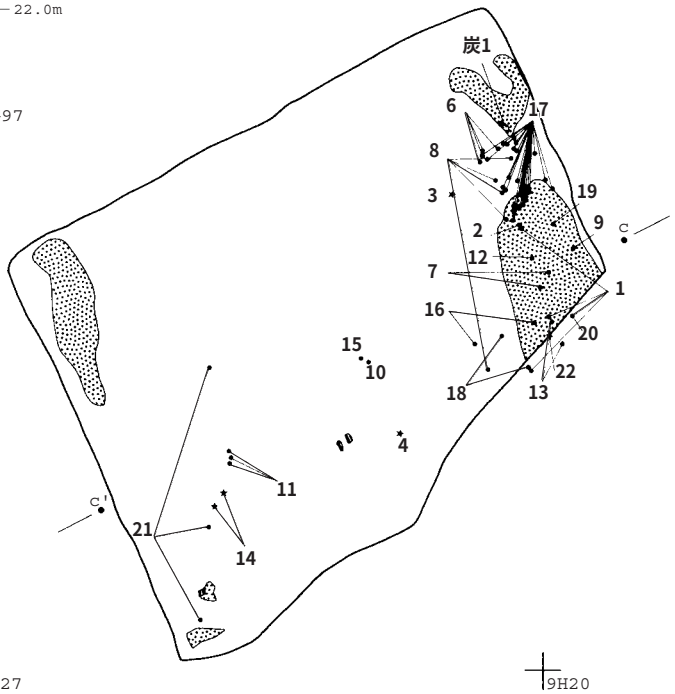


e-e'
1 3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)多 粘質土・焼土少 若干ゆるい
2 2/1黒 土 黄褐土粒粘質土少 若干ゆるい
2' 3/1黒褐 土 2層地山漸移層 若干ゆるい
3 4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック多 ゆるい



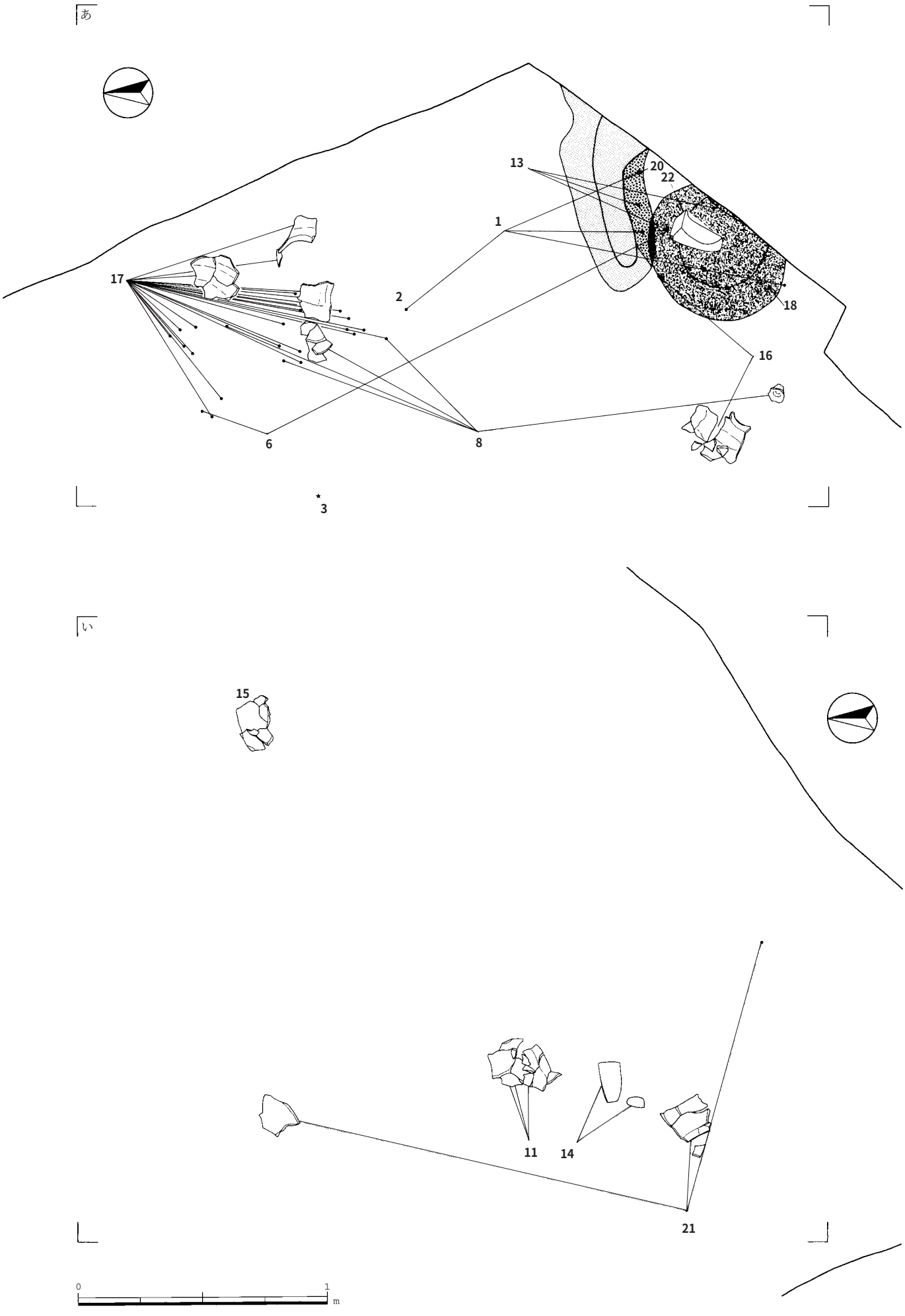




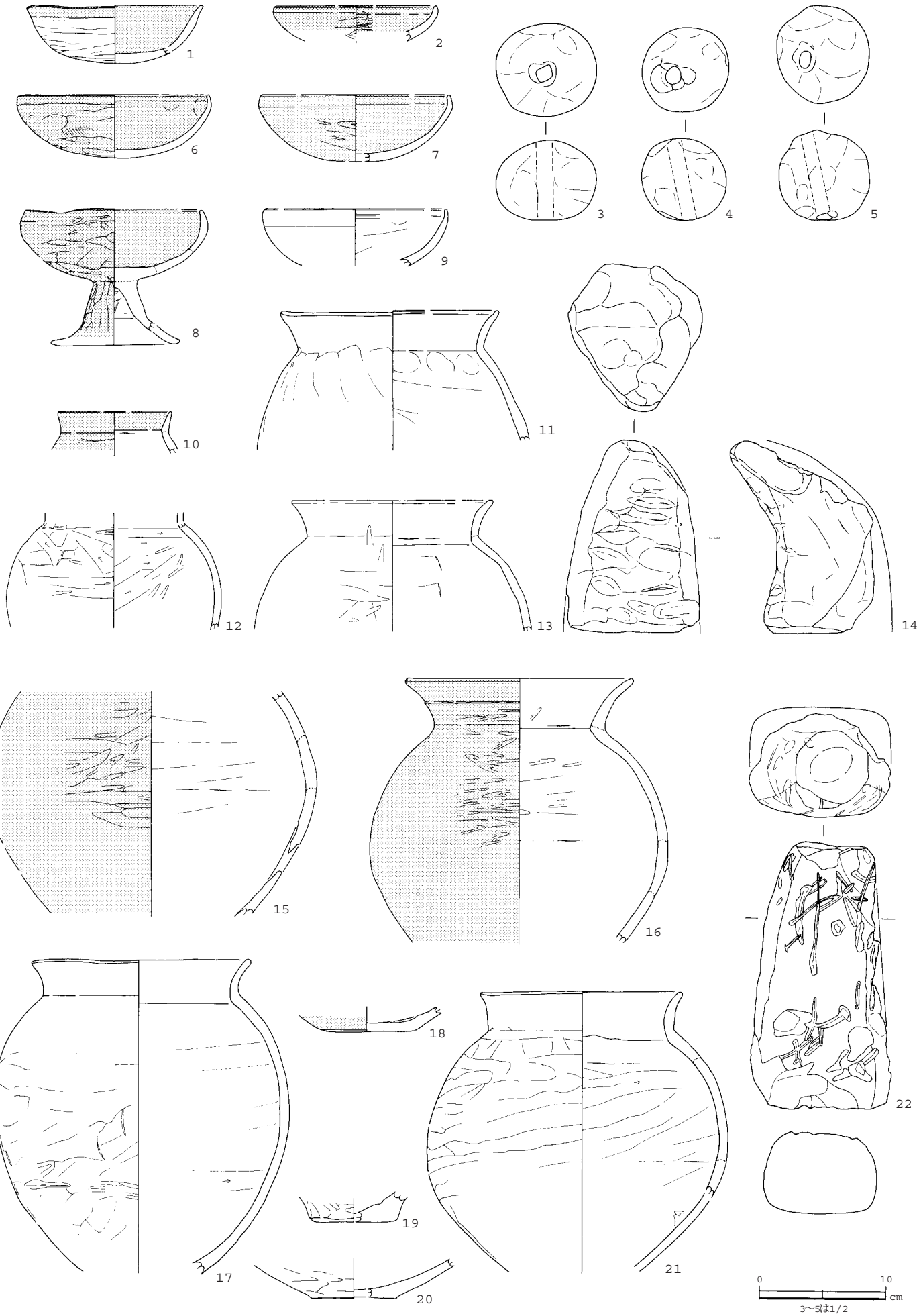


0 2 4 m
a-a'は1/40

第65図　401号遺構　焼土・遺物検出状況



第66図　401号遺構　遺物検出状況



第67図　401号遺構出土遺物

カマドから離れて検出された。またカマドから少し離れた位置の床面に、地床炉状の被熱部が見られたので、照明などのために予備的に炉も併用していた可能性も考えられる。烏帽子形の支脚は、カマド導入以降は見られなくなるものと考えられるので、本遺構からの出土は、初源期の様相を示しており興味深い資料であると言える。

覆土は、床面直上から下層にかけて、壁際を中心に焼土が堆積していたことが特徴的で、廃絶時の焼却処分が示唆される。柱穴の覆土には、焼土がかたまっては見られなかったが、炭化物を多く含むと思われる黒色土層が一様に見られ、また、抜き取りのための掘り込みがそれぞれに認められるので、柱の抜き取りが竪穴廃絶の過程で行われたと思われる。遺物も主に床面近くから検出されていることから、焼却処分を伴う廃絶行為の過程で儀礼活動が行われ、それらの一環でカマドもととのえられたと考えられる。なお、炭化材（炭１）はアカガシ亜属と確認されている。

遺物はカマドの近辺などから出土した。上述のとおり、覆土の遺存状態が良くなかったので、量は同時期の他の竪穴に比べて多くはない。土師器がほとんどで、ほかに土玉が３個出土している（３～５）。土玉のうち４はＤの覆土中から検出されている。土師器には、口縁の屈曲する杯（１）、若干脚部の膨らむ低脚高杯（８）、筒状の口縁の甕（21）、須恵器模倣の可能性がある赤彩甕（壺）（16）があり、鬼高式の古相を示す。

カマドの位置と、遺物の形状から、古墳時代中期後半に属すると思われる。

51号竪穴住居跡（第68～71図）

規模(m):4.36×4.36？　**柱間**：Ａ－Ｂ2.12　**主軸方位**：９°　**貯蔵穴**:不明　**時期**:古墳時代中期後半

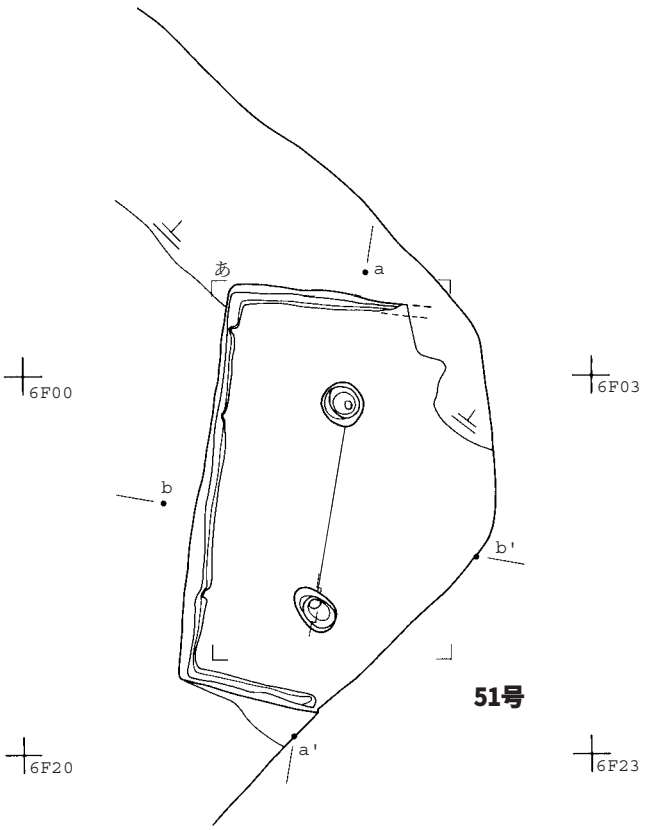
Ｄ１区東端にあり、東半が調査区外にある方形竪穴住居である。現代の造成工事により、上部を調査区外に向かって強く削平されている。調査範囲では、カマド・貯蔵穴が見あたらなかったが、近隣において、カマドを伴う古相の竪穴住居は、南あるいは東側に設置される例が多いことからすると、調査区外に両者がある可能性が高い。床面には壁際に周溝がある。

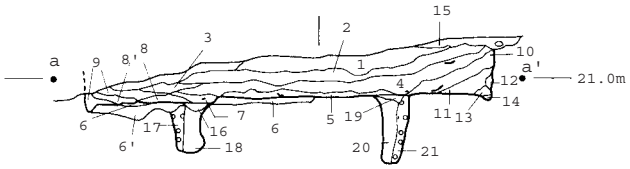
覆土は、下層に焼土の集中する部分といくつかの炭化材があり、廃絶時の焼却処分が示唆される。柱穴の覆土は、柱痕跡が認められるので、焼却処分が行われたとしても、柱の抜き取りは行われず、切り取られたか、放置されたと考えられる。

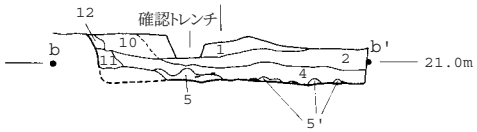
遺物は、床面に近いレベルから、大量の土器片・土玉（29～35）が散乱した状態で出土した。他に、滑石製臼玉（27）・壁土状土製品（28）が見られた。垂直方向では、ほとんどの遺物が、レンズ状のいわゆる一次埋没土中に見られた。半分程の面積しか調査できなかったため、遺物も完形にまで復元できたものはないが、本来は遺物の量、完形個体もさらに存在したと思われる。

土師器は須恵器模倣精製の高杯（８）、鉢（７）、赤彩甕（壺）（12）、横方向のヘラケズリが施される甕（15・17・18・22）など、鬼高式古相を示す。須恵器はすべて瓩である。口縁部を一部欠失するだけのほぼ完形品（１）が床面直上で検出されている。これはＴＫ208式～ＴＫ23式期のものと思われる。他には、小片ながら、端部が丸く、さらに古相を示すと思われる口縁片（９）、櫛描波状文の施された体部片（10）、覆土表層の一括取り上げ遺物で、本遺構に帰属する可能性のある、非常にシャープなつくりの口縁片（11）が存在する。

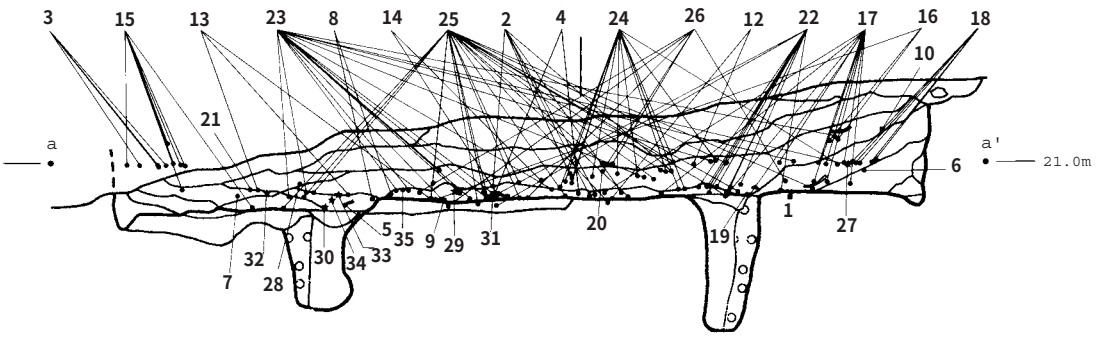
本遺構は、土師器の器種構成と床面直上から得られたハソウから、古墳時代中期後半に属すると思われる。



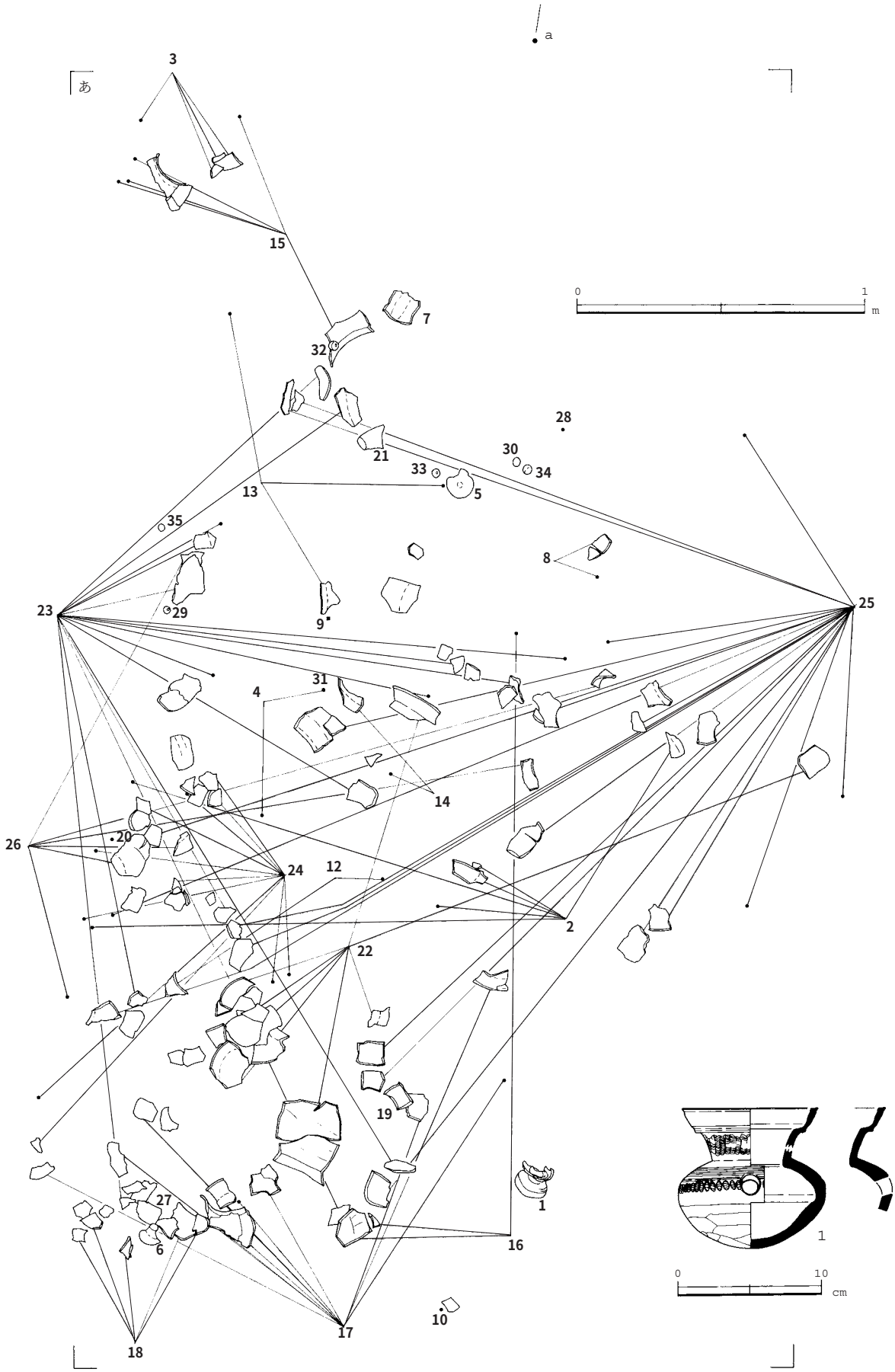




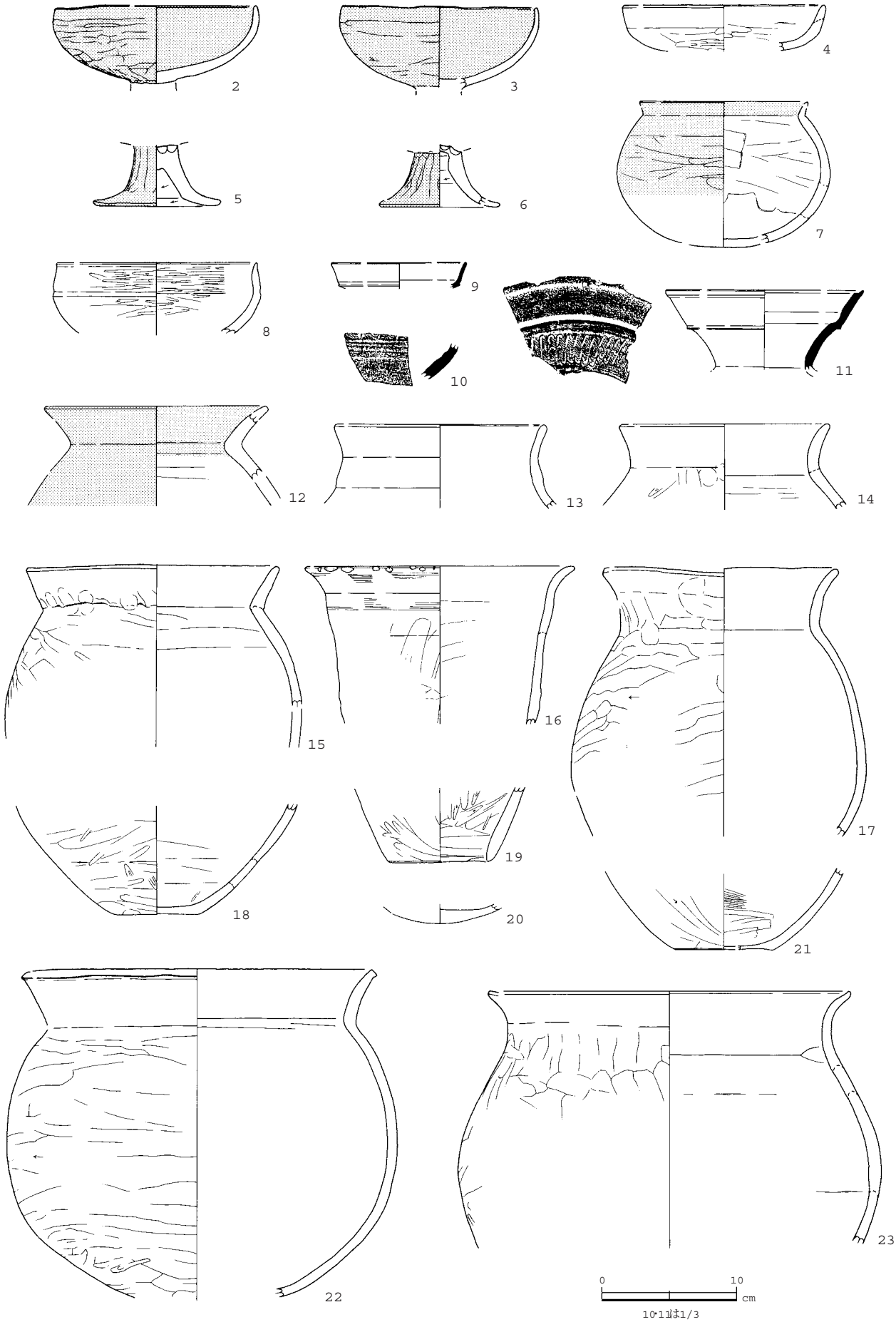
a-a' b-b'
1 3/1黒褐　土　黄褐土粒(~3mm)多　硬い　現代の造成によって覆土上方が硬化している
2 3/2黒褐　土　黄褐土粒(~5mm)大量　硬い
3 3/1黒褐　土　黄褐土粒(~5mm)多　硬い
4 3/1黒褐~2/1黒　土　黄褐土粒(~5mm)、焼土少　硬い
5 3/2黒褐~3/3暗褐がマーブル状に混ざる　焼土混じりの土　5YR4/6赤褐焼土多　黄褐土ブロック(~1cm)まれに(~2cm)　硬い
5' 焼土が少ない5層
6 4/4褐~5/6黄褐と4/2灰黄褐が混じる　ロームブロックが多く混じる土　炭化物粒混じる　床面構築土
6' ロームブロックのさらに多い6層
7 3/1黒褐　土　焼土粒多黄褐土ブロック(~1cm)混じる　しまる
8 4/3にぶい黄褐にマーブル状に3/1黒褐が混じる　土　黄褐土粒・ブロック(~3cm)　硬い
8' ブロックの小さい8層
9 4/2灰黄褐~3/2黒褐がマーブル状に混ざる　黄褐土粒が多く混じる土　黄褐土粒(~5mm)多　硬い
10 3/1黒褐~3/2黒褐　土　黄褐土粒(~5mm)多、焼土粒少　若干ゆるい
11 4/2灰黄褐~3/2黒褐　土　黄褐土粒(~5mm)少　若干ゆるい
12 4/4褐と4/2灰黄褐が混じる　ロームブロック主体土　若干ゆるい
13 3/1黒褐~2/1黒　土　黄褐土粒(~5mm)　若干ゆるい
14 3/1黒褐~3/2黒褐　土
15 4/3にぶい黄褐　土　しまる　覆土～地山漸移層
16 3/2黒褐　土　黄褐土粒(~5mm)多、焼土粒(~3mm)混じる　しまる
17 4/4褐~4/6　ロームブロック主体土　しまる
18 3/2黒褐　土　黄褐土ブロック(~2cm)多　ゆるい
19 7.5YR3/1黒褐　焼土混じりの土　黄褐土粒(~5mm)多
20 7.5YR3/2黒褐　土　黄褐土多かなりゆるい
21 黄褐~4/4褐　ロームブロック主体土　ゆるい



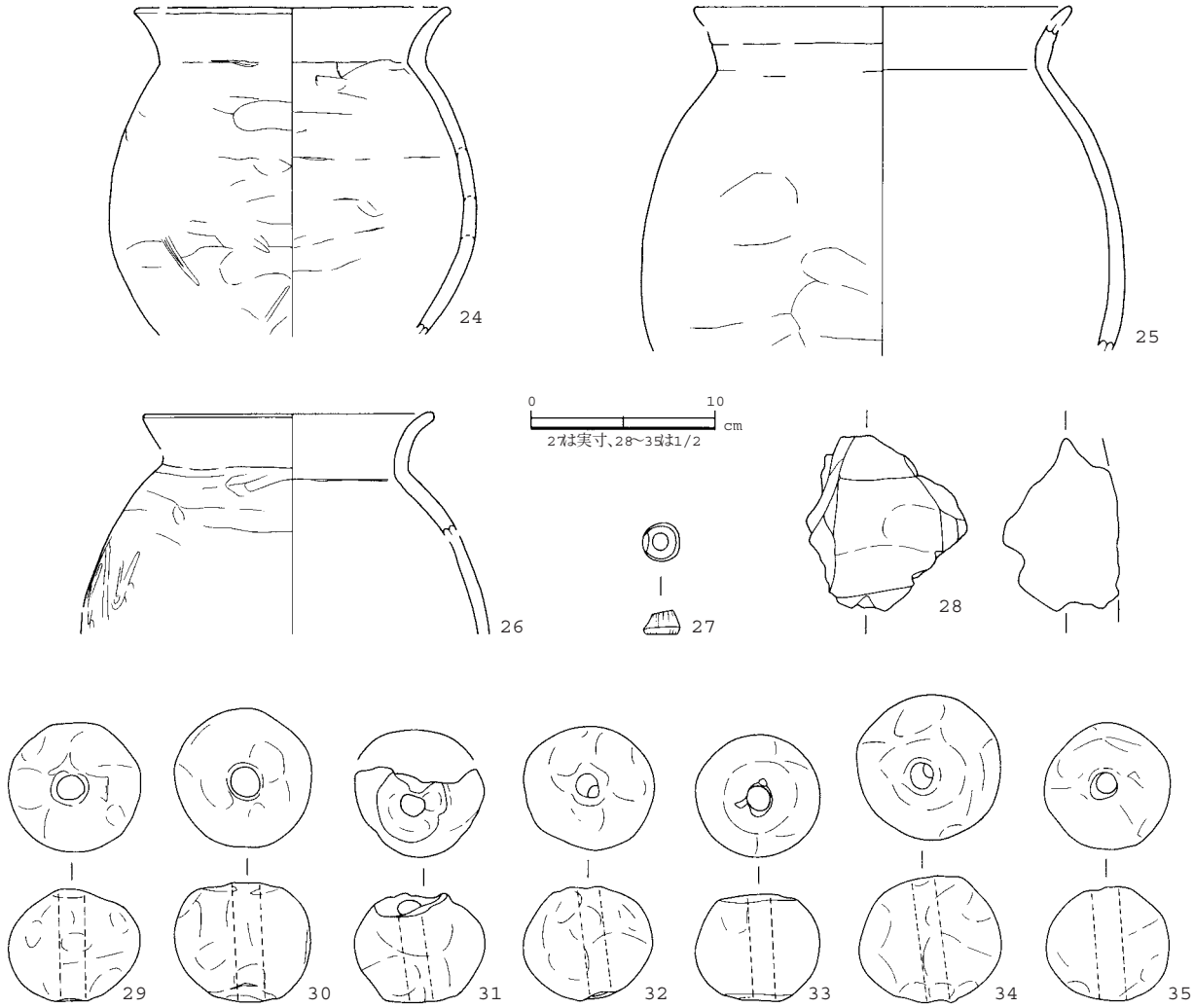
第68図　51号遺構　焼土・遺物検出状況



第69図　51号遺構　遺物出土状況および出土遺物１／３



第70図　51号遺構出土遺物２／３



第71図　51号遺構出土遺物３／３

301号竪穴住居跡（第72・73図）

規模（m）：4.6四方

柱間：Ｅ－Ｂ2.29　Ｅ－Ｆ2.48

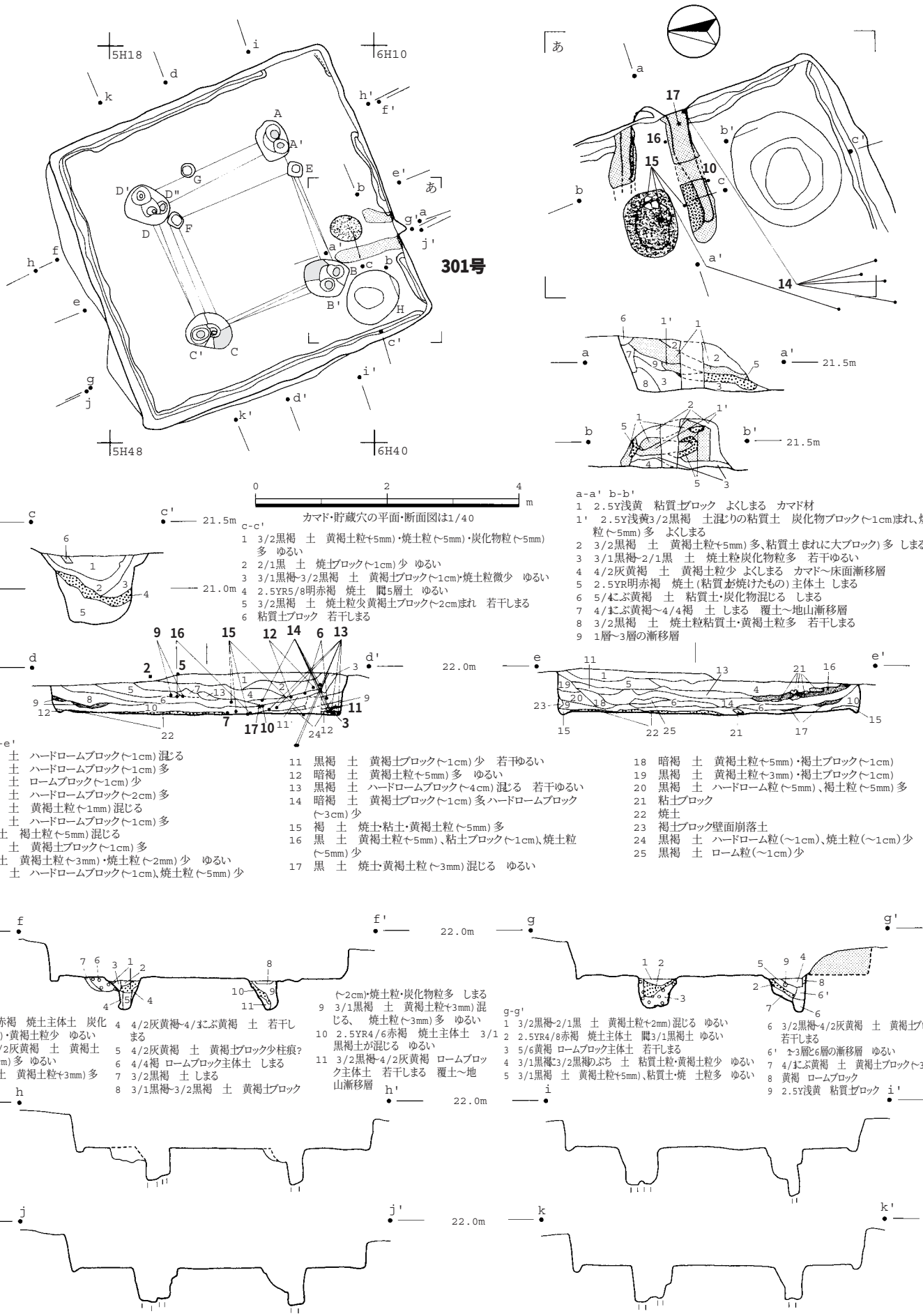
Ａ′－Ｂ2.08　Ｂ－Ｃ2.08　Ｃ－Ｄ′2.07　Ｄ′′－Ａ′2.01

Ａ－Ｂ2.27　Ｂ－Ｃ′2.26　Ｃ′－Ｄ′2.27　Ｄ′－Ａ2.23

Ａ′－Ｂ′2.23　Ｂ′－Ｃ′2.07　Ｃ′－Ｄ2.0　Ｄ－Ａ′2.15

主軸方位：68°　**貯蔵穴**：東南隅／円形　**時期**：古墳時代後期

Ｄ２区北寄りに位置するカマドの伴う方形竪穴住居である。カマドは東辺南寄りに、煙道がほとんど無いタイプのものが構築され、その脇に貯蔵穴Ｈがある。Ｇ（深さ９㎝）が出入り口ピットと思われる。主柱穴は、ア（Ｅ－Ｂ－？－Ｆ）・イ（Ａ′－Ｂ－Ｃ－Ｄ′）・ウ（Ａ－Ｂ－Ｃ′－Ｄ′）・エ（Ａ′－Ｂ′－Ｃ′－Ｄ）の４つの組み合わせを想定した。アが最初の組み合わせで、その後竪穴の拡大と柱間の変更が行われ、イ・ウ・エと変遷したと考えられる。Ｅ・Ｆ（底面標高20.827m・20.855m）は床面構築土を掘削した際に検出されたが、そのプランに適合するような掘形痕跡は認められなかった。Ｅ・Ｆに伴う竪穴の床面レベルの方が検出床面より若干高く、拡張の際に掘り下げられた可能性がある。なお、床面構築土は特に、局地的に硬化した様子は見られなかった。



カマド・貯蔵穴の平面・断面図は1/40

c-c'
1 3/2黒褐 土 黄褐土粒(～5mm)・焼土粒(～5mm)・炭化物粒(～5mm)多 ゆるい
2 2/1黒 土 焼土ブロック(～1cm)少 ゆるい
3 3/1黒褐～3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(～1cm)・焼土粒微少 ゆるい
4 2.5YR5/8明赤褐 焼土 層5層土 ゆるい
5 3/2黒褐 土 焼土粒少黄褐土ブロック(～2cmまれ 若干しまる
6 粘質土ブロック 若干しまる

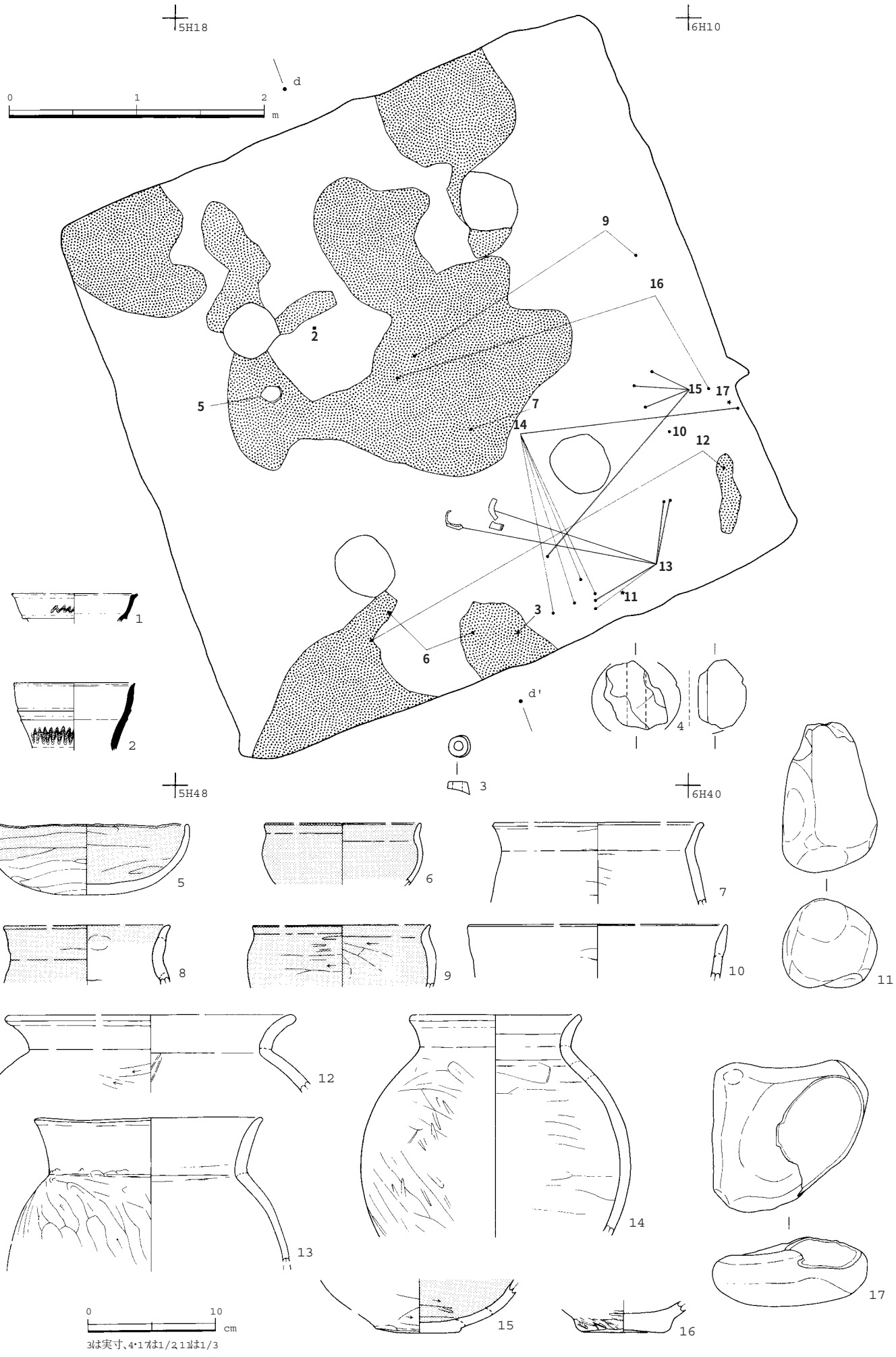
a-a' b-b'
1 2.5Y浅黄 粘質土ブロック よくしまる カマド材
1' 2.5Y浅黄3/2黒褐 土混じりの粘質土 炭化物ブロック(～1cm)まれ、焼土粒(～5mm)多 よくしまる
2 3/2黒褐 土 黄褐土粒(～5mm)多、粘質土まれに大ブロック)多 しまる
3 3/1黒褐～2/1黒 土 焼土粒炭化物粒多 若干ゆるい
4 4/2灰黄褐 土 黄褐土粒少 よくしまる カマド～床面漸移層
5 2.5YR明赤褐 焼土(粘質土が焼けたもの)主体土 しまる
6 5/4にぶ黄褐 土 粘質土・炭化物混じる しまる
7 4/3にぶ黄褐～4/4褐 土 しまる 覆土～地山漸移層
8 3/2黒褐 土 焼土粒粘質土・黄褐土粒多 若干しまる
9 1層～3層の漸移層

d-d' e-e'
1 黒褐 土 ハードロームブロック(～1cm)混じる
2 暗褐 土 ハードロームブロック(～1cm)多
3 黒褐 土 ロームブロック(～1cm)少
4 暗褐 土 ハードロームブロック(～2cm)多
5 黒褐 土 黄褐土粒(～1mm)混じる
6 黒褐 土 ハードロームブロック(～1cm)多
7 褐 土 褐土粒(～5mm)混じる
8 暗褐 土 黄褐土ブロック(～1cm)多
9 黒 土 黄褐土粒(～3mm)・焼土粒(～2mm)少 ゆるい
10 暗褐 土 ハードロームブロック(～1cm)、焼土粒(～5mm)少
11 黒褐 土 黄褐土ブロック(～1cm)少 若干ゆるい
12 暗褐 土 黄褐土粒(～5mm)多 ゆるい
13 黒褐 土 ハードロームブロック(～4cm)混じる 若干ゆるい
14 暗褐 土 黄褐土ブロック(～1cm)多ハードロームブロック(～3cm)少
15 褐 土 焼土・粘土・黄褐土粒(～5mm)多
16 黒 土 黄褐土粒(～5mm)、粘土ブロック(～1cm)、焼土粒(～5mm)少
17 黒 土 焼土・黄褐土粒(～3mm)混じる ゆるい
18 暗褐 土 黄褐土粒(～5mm)・褐土ブロック(～1cm)
19 黒褐 土 黄褐土粒(～3mm)・褐土ブロック(～1cm)
20 黒褐 土 ハードローム粒(～5mm)、褐土粒(～5mm)多
21 粘土ブロック
22 焼土
23 褐土ブロック壁面崩落土
24 黒褐 土 ハードローム粒(～1cm)、焼土粒(～1cm)少
25 黒褐 土 ローム粒(～1cm)少

f-f'
1 2.5YR4/6赤褐 焼土主体土 炭化物粒(～5mm)・黄褐土粒少 ゆるい
2 3/2黒褐～4/2灰黄褐 土 黄褐土ブロック(～3cm)多 ゆるい
3 3/1黒褐 土 黄褐土粒(～3mm)多 若干ゆるい
4 4/2灰黄褐～4/3にぶ黄褐 土 若干しまる
5 4/2灰黄褐 土 黄褐土ブロック少柱痕?
6 4/4褐 ロームブロック主体土 しまる
7 3/2黒褐 土 しまる
8 3/1黒褐～3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(～2cm)・焼土粒・炭化物粒多 しまる
9 3/1黒褐 土 黄褐土粒(～3mm)混じる、 焼土粒(～3mm)多 ゆるい
10 2.5YR4/6赤褐 焼土主体土 3/1黒褐土が混じる ゆるい
11 3/2黒褐～4/2灰黄褐 ロームブロック主体土 若干しまる 覆土～地山漸移層

g-g'
1 3/2黒褐～2/1黒 土 黄褐土粒(～2mm)混じる ゆるい
2 2.5YR4/8赤褐 焼土主体土 層3/1黒褐土 ゆるい
3 5/6黄褐 ロームブロック主体土 若干しまる
4 3/1黒褐～3/2黒褐のぶち 土 粘質土粒・黄褐土粒少 ゆるい
5 3/1黒褐 土 黄褐土粒(～5mm)、粘質土・焼 土粒多 ゆるい
6 3/2黒褐～4/2灰黄褐 土 黄褐土ブロック(～3cm)多 若干しまる
6' 1～3層と6層の漸移層 ゆるい
7 4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック(～3cm)少 しまる
8 黄褐 ロームブロック
9 2.5Y浅黄 粘質土ブロック

第72図　301号遺構・カマド周辺



第73図　301号遺構　焼土・遺物検出状況および出土遺物

カマドは、竪穴覆土の観察用ベルトの脇を先んじて掘り下げてしまったため、向かって左側の袖部分を掘りすぎてしまい一部が記録できなかった。遺存状態は比較的良好で、断面図のように、内側に崩れた様子が看取できる。袖の間に落ち込んだのは崩れた天井部であろう。遺物は、内部から土器（15）と褐鉄鉱状の塊（17）が出土したが、支脚は見られなかった。

覆土は床面直上に焼土が広く検出され、廃絶時に火を受けたことが明白である。また、柱穴覆土には焼土が落ち込んで堆積しているので、これらからすると、竪穴廃絶時に柱の抜き取りが行われ、その後に焼却処分が行われたことが強く示唆される。貯蔵穴も、ある程度埋まってはいたものの、その上に時期を隔てず焼土が流れ込んだ様子が看取できるので、この竪穴住居の廃絶過程は、カマドの処分・道具の持ち出し・上屋の解体（柱抜き取り）→焼却処分というプロセスが想定できる。

廃絶時の遺物は、土師器がほとんどで、他に土玉片（４）・滑石製臼玉（３）・敲石（11）が出土した。須恵器は、瑕口縁片（１）が貯蔵穴内（一括取り上げ）から出土したほか、最上層から直口壺口縁片（２）が得られた。後者は本遺構の時期よりも古相を示すと思われる。土師器は、鉢（６）の存在、甕（14）の形状が鬼高式古相を示す。床面下の遺物は、ごく少量の土器片が得られた程度である。

本遺構は、土器の様相と竪穴の形状から、古墳時代中期後半に属すると考えられる。

52号竪穴住居跡（第74図）

規模（m）：6.0？～　**主軸方位**：334°／64°　**貯蔵穴**：不明　**時期**：古墳時代中期後半

大半が調査区外にある方形竪穴住居である。北西角がひとつ調査区にかかるだけで、規模も１辺６m以上としか言えない。覆土は、床面直上と下層に多量の焼土と炭化物起源と思われる黒色土層が認められ、一部に炭化材と黄褐土ブロックが混じる。廃絶時に焼却処分が行われたことは確実である。また、焼土・黒色土層より上に黄褐土ブロックを多量に含む層が乗っているので、埋め戻しがその後に行われた可能性が高い。その後は、自然な漸移的堆積が進行したように見受けられる。

カマドは、他遺構で見られた焼土の分布の規則性からすると、東か南にあるものと思われる。

遺物は、すべて土師器で、須恵器模倣精製高杯（２）、赤彩甕（壺）（５・６）、横方向のヘラケズリで仕上げられる甕（10）がある。高杯は、現状の遺存状態からすると、竪穴全体が調査できれば完形に復元できたものと思われる。

これらの土師器の様相から、本遺構は古墳中期後半に属すると考えられる。

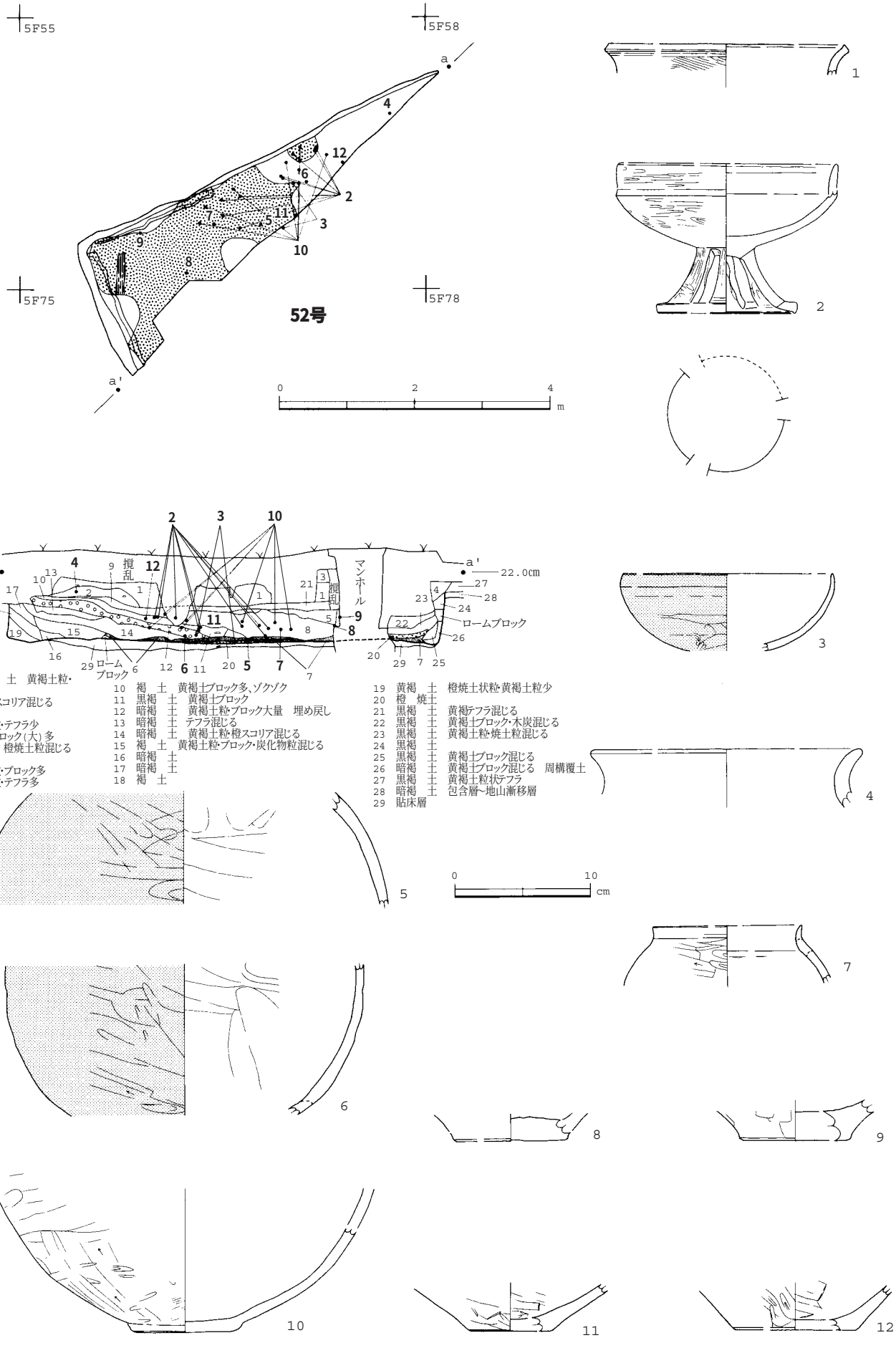
34号遺構（第75～77図）

規模（m）：4.5×5.1？　**主軸方位**：343°　**貯蔵穴**：不明　**時期**：古墳時代中期後半

11・41号溝に切られる方形竪穴住居である。覆土が浅く、遺存が良くなかった。柱穴の組み合わせが不明で、炉・カマドも検出されておらず異質な竪穴建物遺構である。念のため、近辺を精査したが、竪穴外の柱穴も検出できなかった。そのようなものがあったとしても、竪穴覆土の遺存か状態からすると、削平されたのかもしれない。いずれにしろ、今回の調査区で見られた竪穴式の建物とは異なる構造の遺構と考えられる。

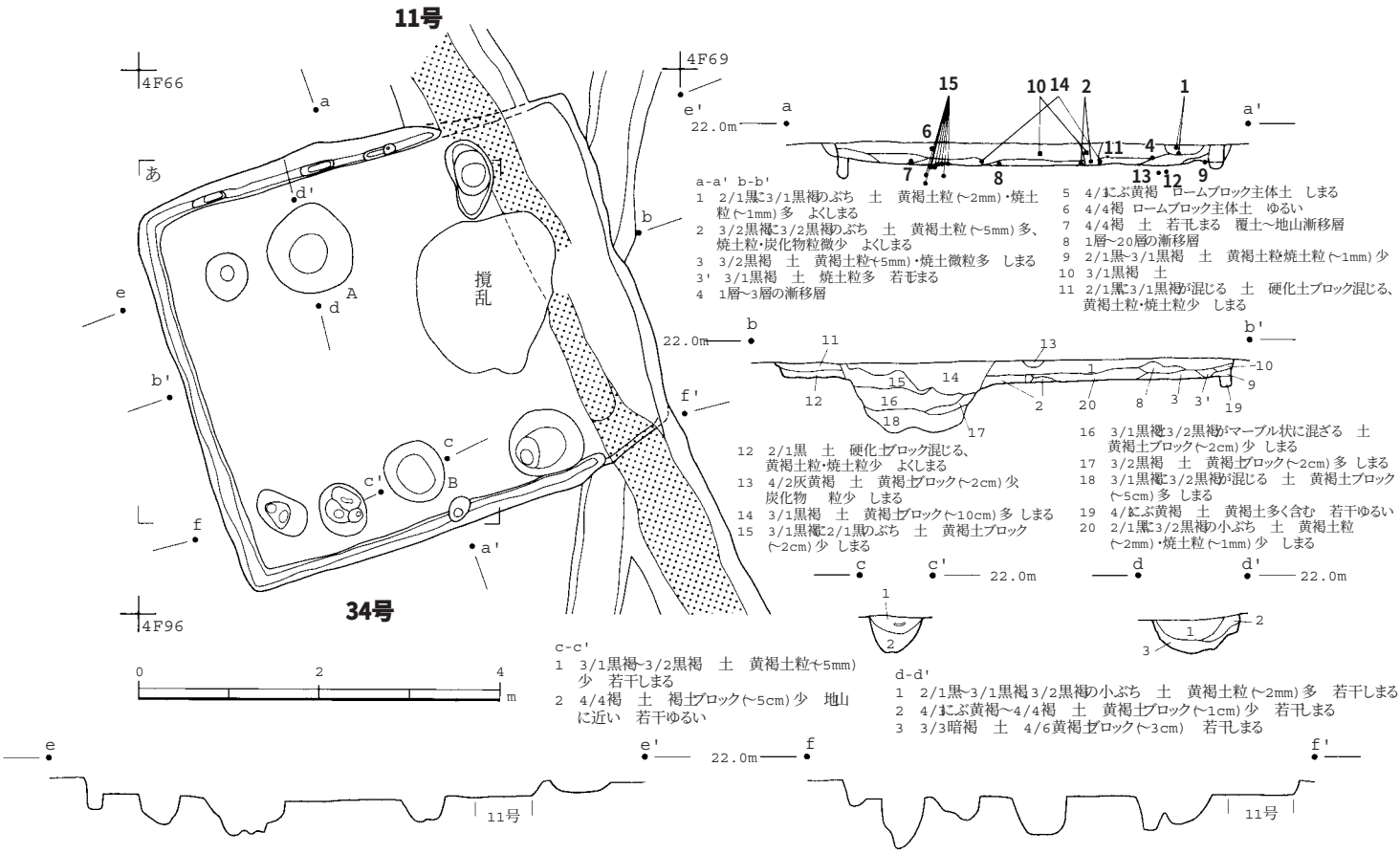
覆土は、床面直上ではないが、竪穴南西隅を中心に焼土層がＬ字状に分布していた。

遺物は土師器がほとんどで、他に須恵器片・ミニチュア土器（５）がある。床面に掘り込まれたＡの上面から甑（15）、Ｂ覆土中から高杯杯部（12）が検出された。ほかに、焼土を掘り下げた床面か

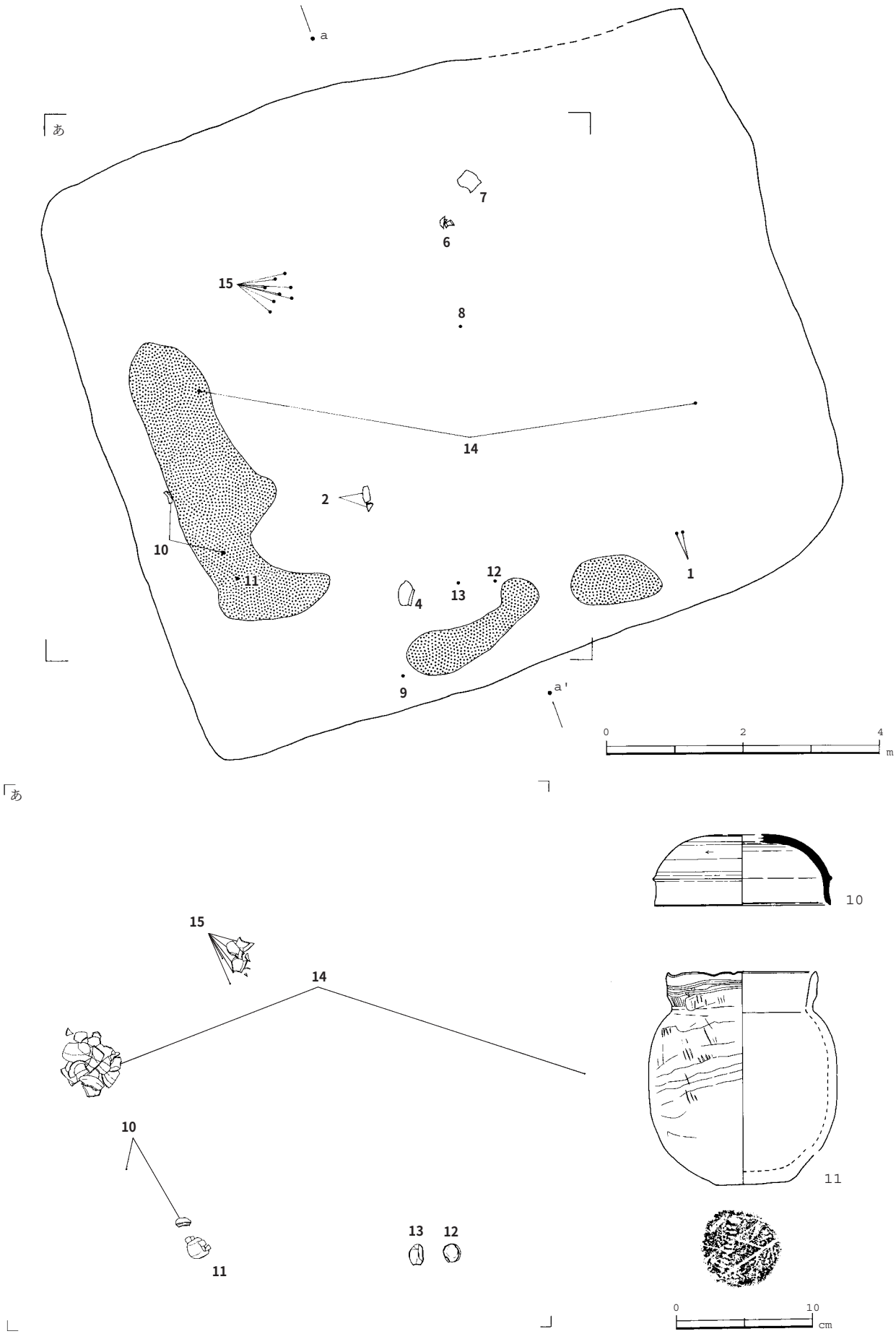


a-a'
1 黒褐に灰褐の小ぶち　土　黄褐土粒・焼土粒テフラ混じる
2 黒褐　土　橙・黄褐スコリア混じる
3 灰褐　土
4 黒褐　土　黄褐土粒・テフラ少
5 暗褐　土　黄褐土ブロック(大)多
6 黒　焼土混じりの土　橙焼土粒混じる
7 黒　土　木炭混じる
8 暗褐　土　黄褐土粒・ブロック多
9 暗褐　土　黄褐土粒・テフラ多
10 褐　土　黄褐土ブロック多、ゾクゾク
11 黒褐　土　黄褐土ブロック
12 暗褐　土　黄褐土粒・ブロック大量　埋め戻し
13 暗褐　土　テフラ混じる
14 暗褐　土　黄褐土粒・橙スコリア混じる
15 褐　土　黄褐土粒・ブロック・炭化物粒混じる
16 暗褐　土
17 暗褐　土
18 褐　土
19 黄褐　土　橙焼土状粒・黄褐土粒少
20 橙　焼土
21 黒褐　土　黄褐テフラ混じる
22 黒褐　土　黄褐土ブロック・木炭混じる
23 黒褐　土　黄褐土粒・焼土粒混じる
24 黒褐　土
25 黒褐　土　黄褐土ブロック混じる
26 暗褐　土　黄褐土ブロック混じる　周構覆土
27 黒褐　土　黄褐土粒状テフラ
28 暗褐　土　包含層～地山漸移層
29 貼床層

第74図　52号遺構　焼土・遺物検出状況および出土遺物



第75図　34号遺構および出土遺物1／3



第76図　34号遺構　焼土・遺物検出状況および出土遺物２／３

ら、精緻な胎土を持ちヘラミガキで仕上げられる須恵器模倣精製の甕（14）、須恵器杯蓋（10）、口縁部に沈線２条が施された直口壺あるいは小型の甕（11）が出土している。

14の口縁外面中程には沈線が巡っており、須恵器甕の形状を模している可能性がある。これは、胎土も須恵器模倣精製の高杯と類似するもので、210号検出の甑と同じく、高杯以外の模倣精製の器種と考えられる。11についても、プロポーションと胎土が異質であり、精製とは言いがたいものの、須恵器模倣土師器の可能性があると思われる。

須恵器杯蓋（10）はＴＫ23式、高杯脚部（３）はＴＫ208式～ＴＫ23式であろう。なお、10の杯蓋は44号のカマドで検出された破片と遺構間接合している。

出土遺物から、本遺構は古墳中期後半に属すると考えられる。

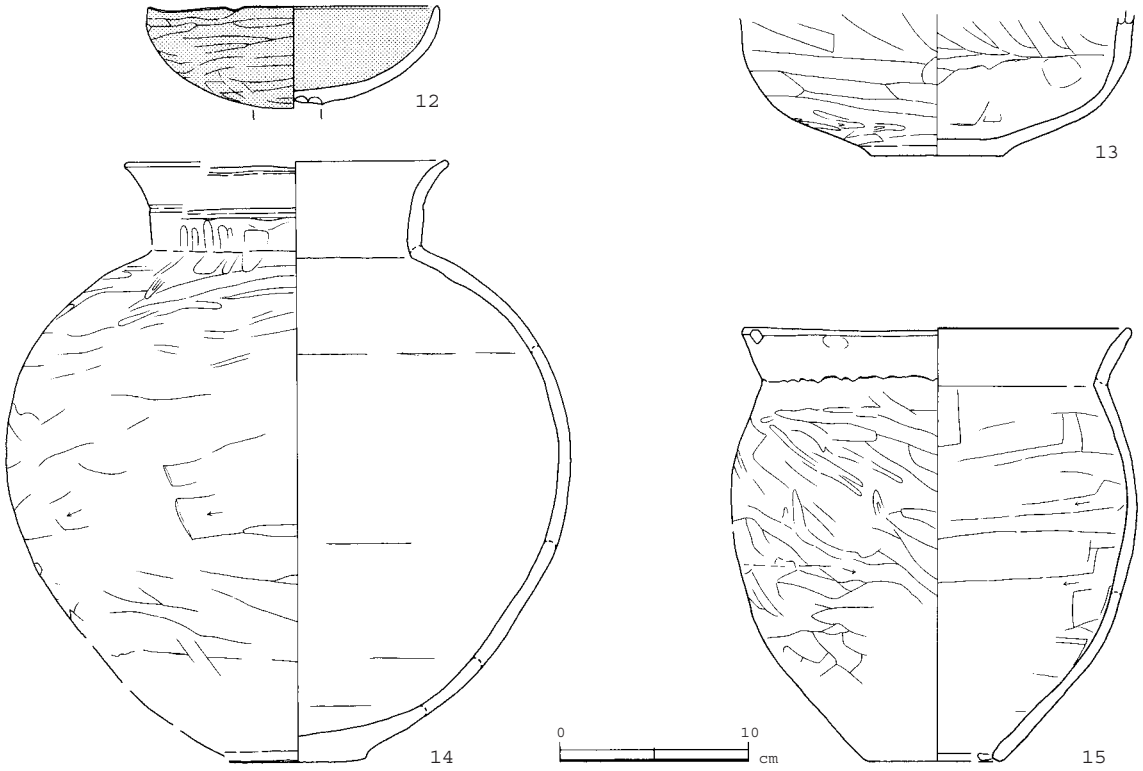
44号竪穴住居跡（第78～81図）

規模（m）：長軸5.8／短軸4.24　**柱間**：Ａ－Ｂ2.06　Ｂ－Ｃ3.22　Ｃ－Ｄ1.98　Ｄ－Ａ3.18

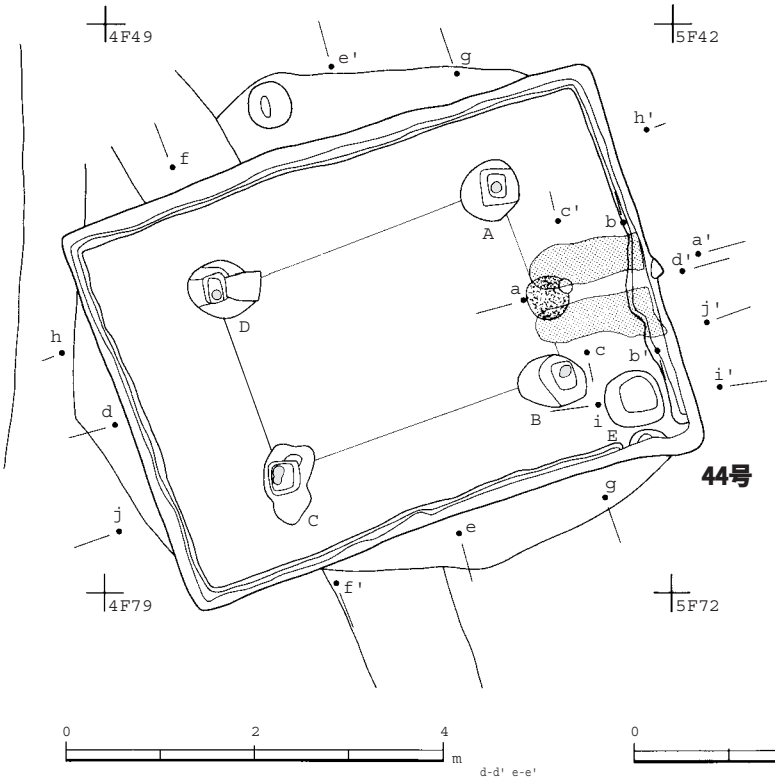
主軸方位：71°　**貯蔵穴**：東隅／円～方形　**時期**：古墳時代中期後半

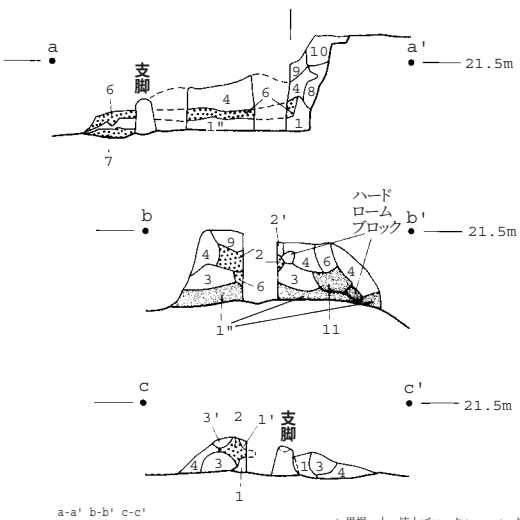
12・41号溝に切られ、確認調査トレンチに撹乱されるが、遺存状態の良い長方形竪穴住居である。覆土中に、焼土が西側に偏って検出された。柱穴の覆土下層が、柱痕跡が見られない上に、黄褐土の大ブロックを主体とするものであったことも考えると、柱抜き取り後に一部埋め戻され、焼却処分されたという廃絶プロセスが想定できる。床面から出土した多量の土器は、この過程に関わるものであろう。なお、柱穴の平面形が方形、竪穴自体も長方形であり、いくぶん異質さを感じる。隣接する34号と軸が揃ううえ、上述の通り遺構間で遺物に接合関係が認められるので、時期的に近接し、先後する関係にあるのかもしれない。

カマドは煙道のほとんど延びないタイプで、東辺の若干南寄りで検出された。袖部分の下層と支脚



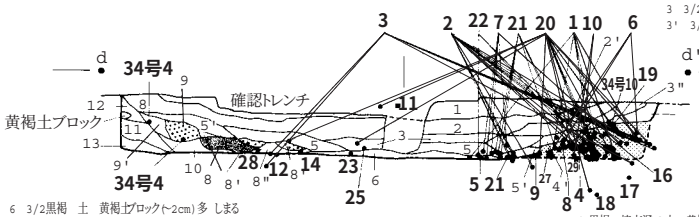
第77図　34号遺構出土遺物３／３



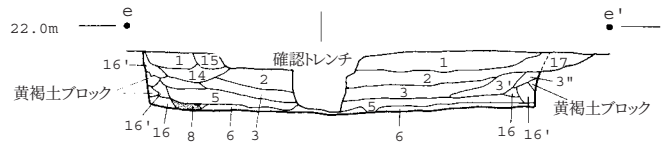


a-a' b-b' c-c'
1 3/2黒褐 土 焼土粒(～1mm)多 若干ゆるい
1' 焼土粒がさらに多い1層
1'' 2/1黒 土 炭化物が多い1層 若干しまる
2 5YR5/6明赤褐 焼土主体土 3/2黒褐土混じる しまる
2' 粘質土が多く混じる2層 若干しまる
3 2.5Y7/4浅黄 粘質土主体土 3/3暗褐土混じる、褐土粒(～2mm)少 しまる
3' 焼土粒多の3層 しまる
4 4/3にぶ黄褐 土 炭化物粒・焼土粒微少、黄褐土粒(～5mm)少、まれに焼土ブロック(～3cm) しまる
5 3/2黒褐 土 焼土ブロック(～3cm)・炭化物多 若干しまる
6 3/1黒褐 土 焼土ブロック(～2cm)多、火を強く受けた様子、ガサガサ
7 4/4褐 土 若干しまる 地山崩落土
8 3/1黒褐～3/2黒褐 土 焼土微粒多 若干しまる
9 3/2黒褐～4/3にぶ黄褐 土 若干しまる 煙道覆土
10 2/1黒に3/2黒褐がマーブル状に混じる 土 黄褐土粒少 若干しまる
11 3/2黒褐～3/3暗褐 土 若干しまる

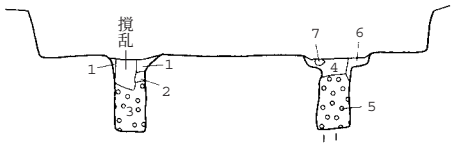
d-d' e-e'
1 3/1黒褐に3/2黒褐のぶち 土 黄褐土粒(～5mm)、焼土状赤褐粒(～2mm)少、炭化物粒微少 しまる
2 2/1黒～3/1黒褐に3/2黒褐のぶち 土 黄褐土粒(～5mm)・焼土状赤褐粒(～1mm)少、炭化物粒微少 若干しまる
2' 2層が硬化したブロック 硬い
3 3/2黒褐に4/2灰黄褐のぶち 土 黄褐土粒(～5mm)・焼土微粒少、炭化物粒混じる
3' 3/2黒褐4/2灰黄褐のぶち 土 黄褐土粒(～5mm)、焼土粒・炭化物粒微少・4/2灰黄褐粘質土ブロック 若干しまる
3'' 3/2黒褐 粘質土混じの土 4/2灰黄褐粘質土多混じる、黄褐土粒(～1mm)多、炭化物粒微少
4 4/2灰黄褐～4/3にぶ黄褐 粘質土主体土 焼土ブロック(～2cm)少炭化物粒混じる
4' 3/2黒褐4/3にぶ黄褐粘土 貫が4層より弱い、炭化物粒微少
5 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(～1cm)少炭化物粒混じる 若干しまる
5' 5層粘質土混じる、焼土ブロック(～1cm)・炭化物粒多カマド燃焼部の土か



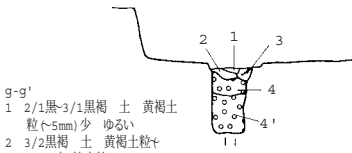
6 3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(～2cm)多 しまる
7 3/2黒褐に3/1黒褐が混じる 土 黄褐土粒(～5mm)多、焼土微粒 若干しまる
8 1.7/1黒2/1黒 土 黄褐土粒
8' 5YR4/6赤褐混りの3/2黒褐 焼土混りの土 若干しまる
8'' 3/2黒褐 土 黄褐土粒1mm)、焼土粒(～1mm) 若干しまる
9 5YR5/8明赤褐～5YR3/2暗赤褐 焼土主体土 しまる
9' 7.5YR3/2黒褐 焼土混の土 黄褐土粒(～5mm) しまる
10 3/1黒褐 土 黄褐土粒(5mm)・焼土微粒・炭化物粒(～2mm)多 しまる
11 3/1黒褐～2/1黒 土 黄褐土粒(～5mm)多、焼土皆無、炭化物粒多 若干しまる
12 2/2黒褐～3/2黒褐 土 黄褐土粒(～3mm)多、焼土粒(～2mm)少 しまる
13 4/にぶ黄褐～3/3暗褐 土 黄褐土ブロック(～1cm)少炭化物粒(～2mm)少 若干ゆるい



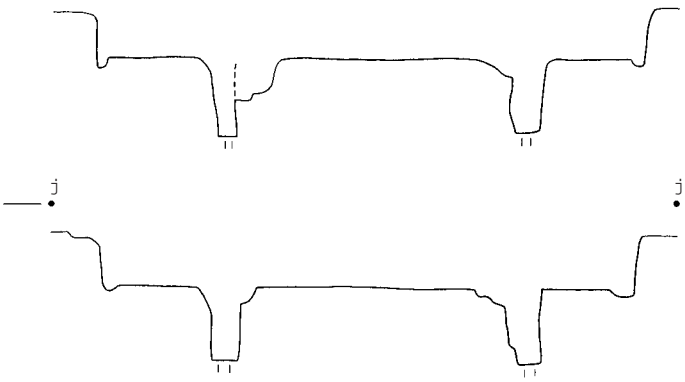
14 3/2黒褐に4/2灰黄褐が混じる 土 黄褐土粒・焼土粒微少 若干しまる
15 4/2灰黄褐 土 黄褐土粒(1mm)少 しまる
16 3/2黒褐～3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(～1cm)少 若干しまる
16' 黄褐土粒が全体に混じる 若干しまる
17 3/2黒褐に4/3にぶ黄褐のぶち 土 若干しまる 覆土～地山漸移層

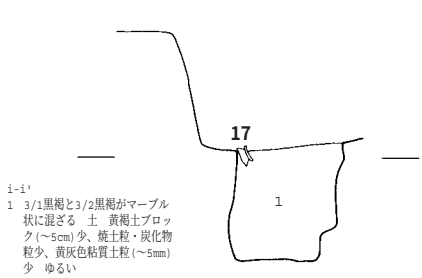


f-f'
1 2/1黒～3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(～1cm)混じる 若干しまる
2 4/にぶ黄褐に3/1黒褐が混じる 土 黄褐土ブロック(～1cm)混じる ゆるい
3 4/にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック(～2cm)多 ゆるい 埋め戻し
4 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(～1cm)多 若干ゆるい
5 3/1黒褐～3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(～3cm)多 ゆるい 埋め戻し
6 4/にぶ黄褐 土 硬い 地山～床土漸移層
7 5/6黄褐 ハードロームブロック 硬い



g-g'
1 2/1黒～3/1黒褐 土 黄褐土粒(～5mm)少 ゆるい
2 3/2黒褐 土 黄褐土粒(～5mm)少、焼土粒(～5mm) ゆるい
3 3/2黒褐 土 黄褐土粒(～3mm)少 若干ゆるい
4 3/3暗褐 土 黄褐土ブロック(～5cm)多 ゆるい
4' 3/3暗褐 土 黄褐土ブロック(～5cm)多 かなりゆるい 埋め戻し
5 3/1黒褐～2/1黒が混じる 土 黄褐土粒(～5mm)、炭化物粒・焼土粒(～2mm) ゆるい
6 3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(～1cm) 若干ゆるい
7 4/にぶ黄褐～4/6褐 ロームブロック主体土 3/2黒褐土混じる 若干しまる
8 3/3暗褐 土 黄褐土ブロック(～5cm)多 ゆるい 埋め戻し



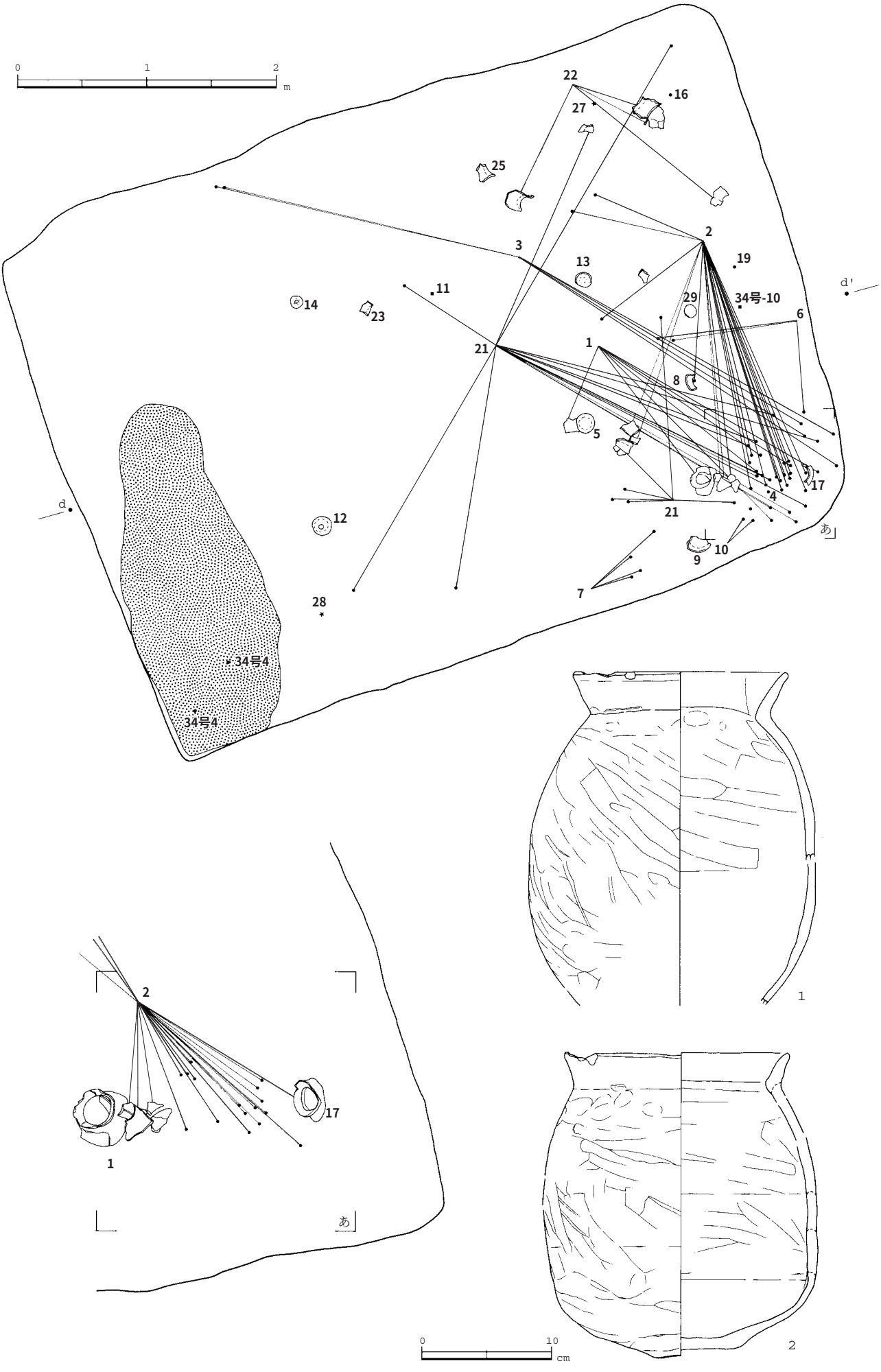


i-i'
1 3/1黒褐と3/2黒褐がマーブル状に混ざる 土 黄褐土ブロック(～5cm)少、焼土粒・炭化物粒少、黄灰色粘質土粒(～5mm)少 ゆるい

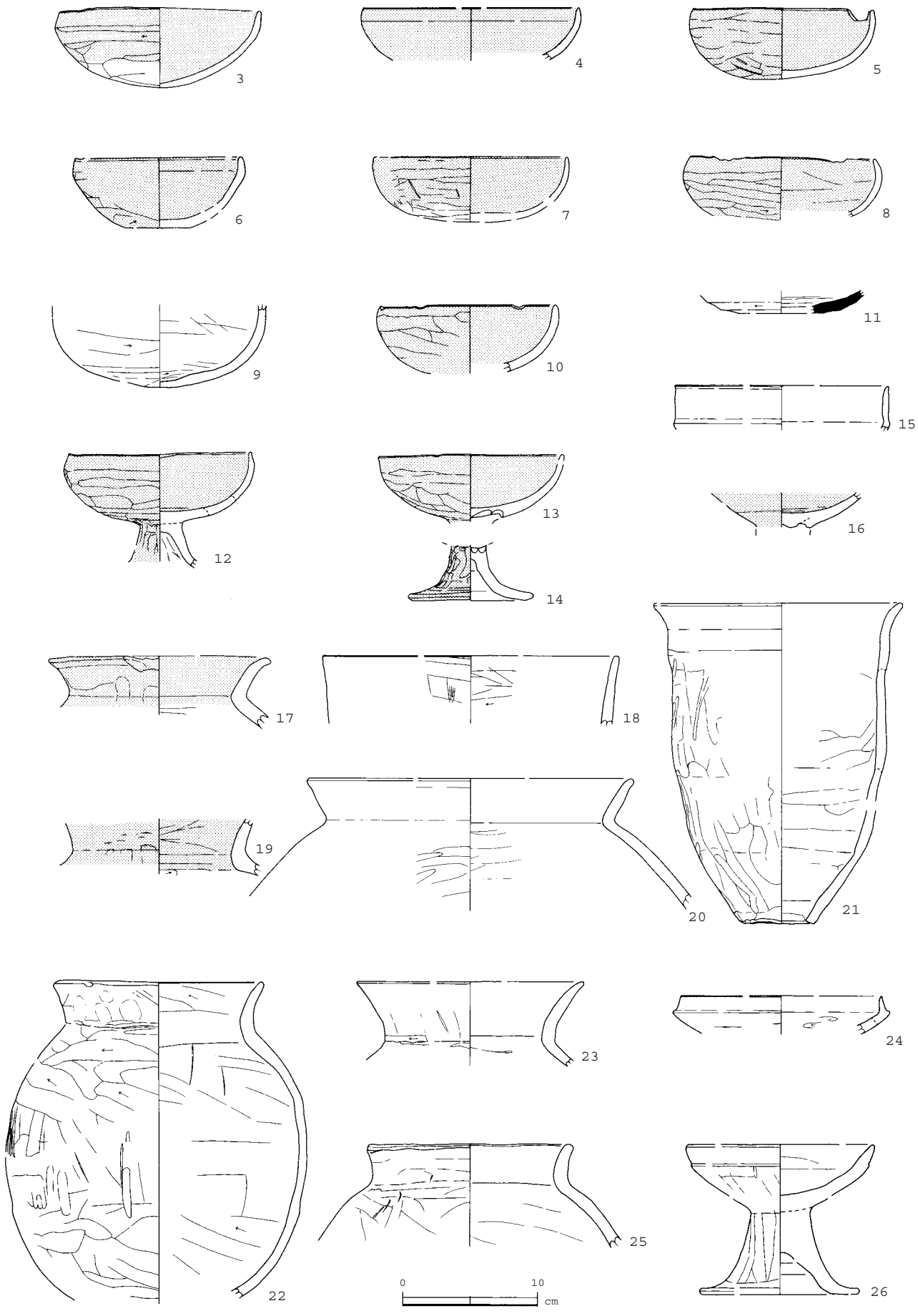
0 2 4 m

カマド・貯蔵穴断面は1/40

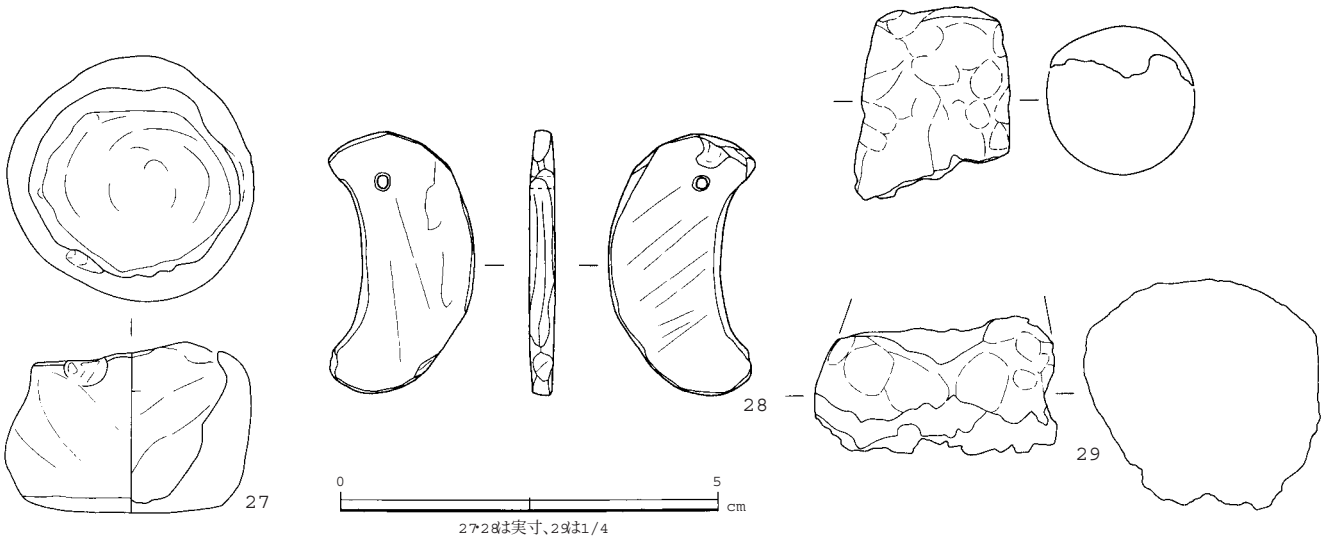
第78図　44号遺構



第79図　44号遺構　焼土・遺物検出状況および出土遺物１／３



第80図　44号遺構出土遺物２／３



第81図　44号遺構出土遺物３／３

（29）がそのまま遺存していたことからすると、廃絶に際し、カマドにはそれほど手をかけなかったのかもしれない。ただ、貯蔵穴覆土に粘質土粒が混じっているので、カマド上部は堆積過程で崩れたのではなく、廃絶時に壊されていたという可能性も捨てきれない。遺物も床面から遺存状態の良いものが少なからず得られている。

遺物は土師器が主体で、他にミニチュア土器（27）・勾玉形石製品（28）が出土した。覆土上層には古墳後期の土器も混入している（24・26）。土師器には、横方向のヘラケズリの甕（２・21）、赤彩甕（壺）（17）が見られ、鬼高式古相を示す。

出土遺物から、本遺構は古墳中期後半に属すると考えられる。

407号竪穴住居跡（第82～90図）

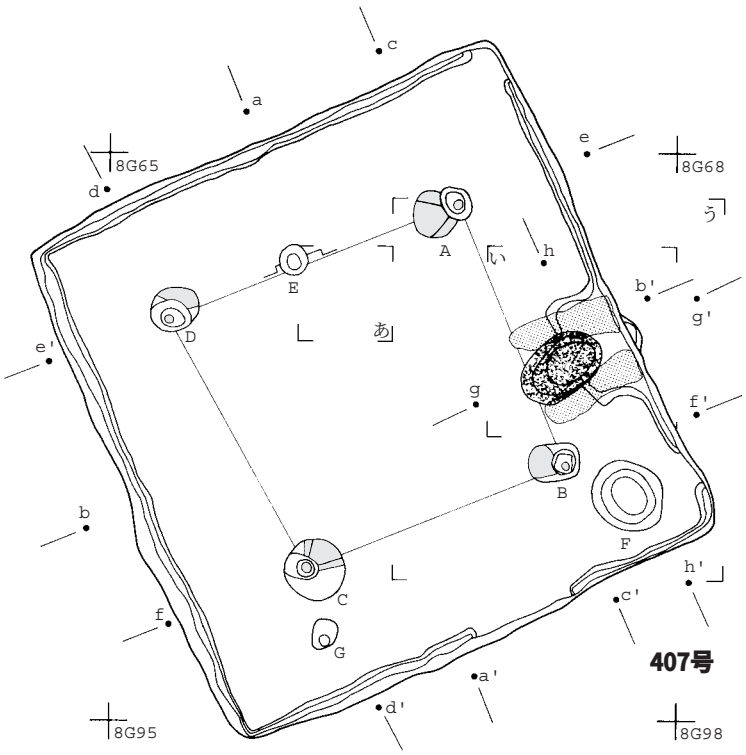
規模（m）：5.8×5.6　**柱間**：A－B2.98　B－C2.94　C－D3.01　D－A3.29　**主軸方位**：65°

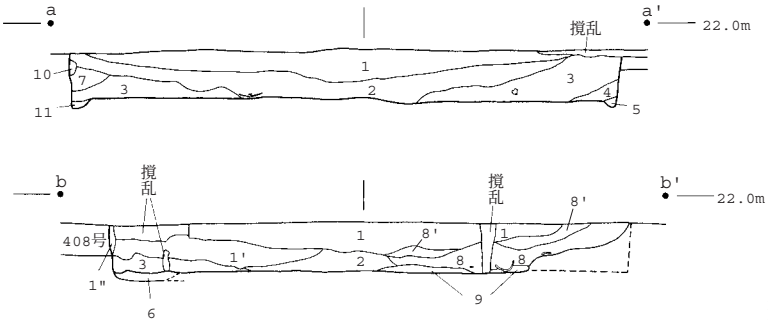
貯蔵穴：円形／東隅　**時期**：古墳時代中期後半

Ｄ３区東端にかろうじて全体が検出された方形竪穴住居である。408号弥生中期竪穴を切って構築されている。東辺の若干南寄りに煙道がほとんど延びないタイプのカマドを持ち、その脇に貯蔵穴がある。カマド近辺からは土器を中心とする大量の遺物が出土した。Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄが主柱穴、Ｅが出入り口ピットと考えられる。

覆土には、焼土がそれほどまとまって見られなかったが、炭化材が床面を中心に少なからず検出された。上層は漸移的な堆積状況が見て取れた。また、竪穴覆土の途中から貝層（第２表参照）が貯蔵穴の上面に達するぐらいまで、土坑覆土状に検出されたが、遺物がかなり密に出土した部分で、そちらの取り上げを優先したため、掘形の確認はできなかった。

これは、機能時の貯蔵穴には木製の蓋が設置されていたと考えられる例が存在するので、あるいは、竪穴廃絶後の凹地に堆積していた貝層の一部が、木製蓋の腐朽にともなう陥没のために一見土坑状の断面形に変化し、深い位置になったそこの貝層だけがたまたま遺存したことを示すとも考えられる。いずれにしろ、この貝層は、期間の長短は不明ながら、ある程度まで埋没した竪穴跡の凹地に食物残滓を廃棄したものであり、竪穴廃絶後のものであることは確かである。

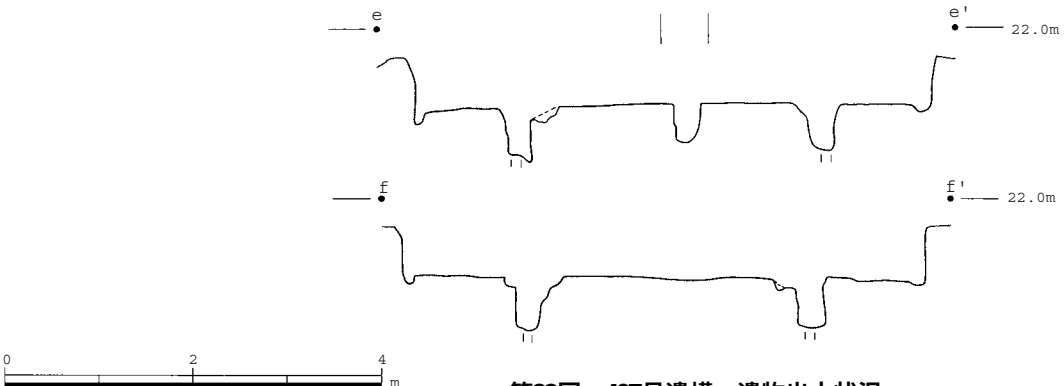




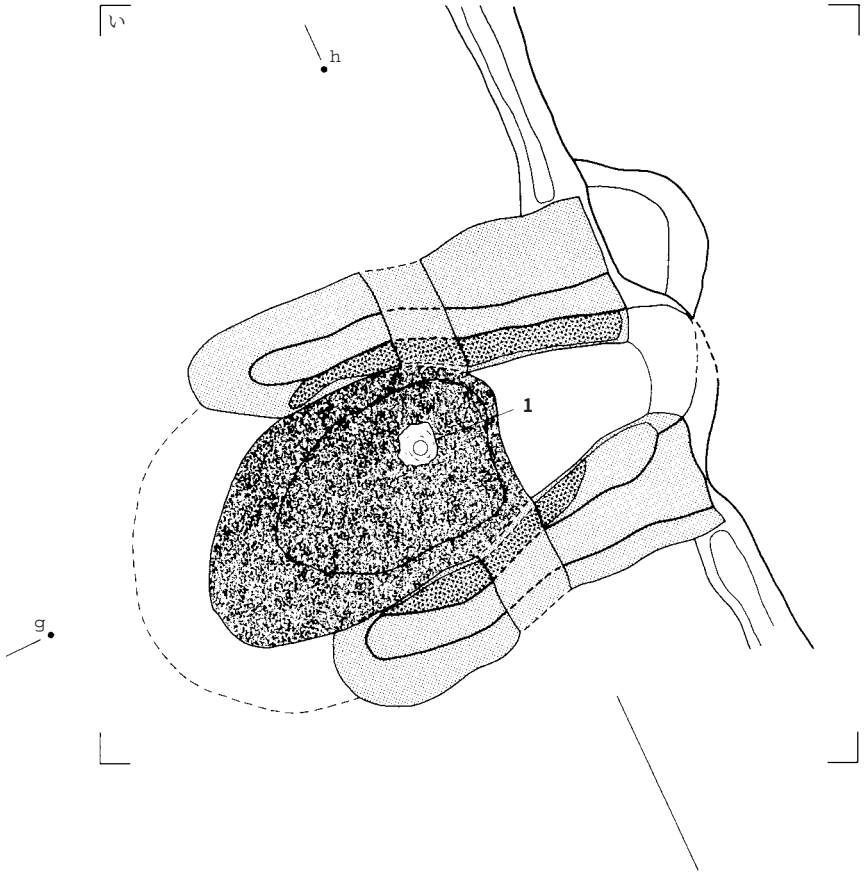
a-a' b-b'
1 2/1黒~3/1黒褐 土 黄褐土粒(~2mm)多、2.5YR赤褐焼土状(~1mm)・炭化物粒少 しまる
1' 3/1黒褐~3/2黒褐 土 黄褐土粒(~5mm)多、焼土粒(~3mm)・炭化物ブロック(~1cm)少 2層より黒い しまる
1'' 408号弥生竪穴覆土~407号1層漸移層 しまる
2 3/2黒褐に3/1黒褐が混じる 土 黄褐土粒(~5mm)多、炭化物粒(~3mm)少 しまる
3 4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)多 炭化物ブロック(~1cm)少 しまる
4 3/1黒褐 土 黄褐土粒ブロック(~3cm)少 炭化物ブロック(~1cm)少 しまる
5 5/6黄褐 ロームブロック主体土 しまる 周溝
6 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(~2cm)多 よくしまる 床面構築土
7 2/1黒~3/1黒褐 土 黄褐土粒(~5mm)少 しまる
8 4/2灰黄褐~4/3にぶ黄褐 土 2.5Y浅黄粘質土粒多焼土粒(~5mm)、黄褐土ブロック(~1cm)混じる、炭化物少 しまる
8' 1層~8層の漸移層 しまる
9 3/1黒褐 土 黄褐土粒ブロック(~1cm)・焼土粒・炭化物少 若干しまる
10 4/3にぶ黄褐 土 黄褐土粒(~5mm)少 しまる
11 4/3にぶ黄褐~3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~2cm)少 若干しまる
周溝?

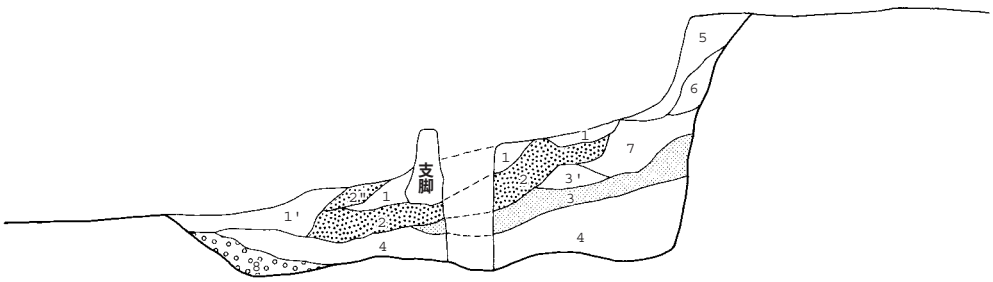
c-c'
1 3/1黒褐~4/3にぶ黄褐 土 炭化物粒ブロック(~1cm)多 焼土粒(~2mm)少 若干しまる
2 5/6黄褐 土 地山と同じ しまる
3 3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)多 焼土ブロック(~1cm)・炭化物粒少 若干しまる
4 3/2黒褐~3/1黒褐 土 ゆるい

d-d'
1 3/2黒褐~3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(~2cm)多 しまる
2 3/1黒褐~3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)多 ゆるい
3 4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック多 若干ゆるい
4 3/2黒褐~3/1黒褐 土 黄褐土粒ブロック(~1cm)・炭化物多 しまる
5 4/4褐~5/6黄褐 土 黄褐土ブロック多、地山に近い しまる
5' 4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック(~3cm)多 床土に近い 若干しまる
6 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm) ゆるい
7 黄褐 ロームブロック

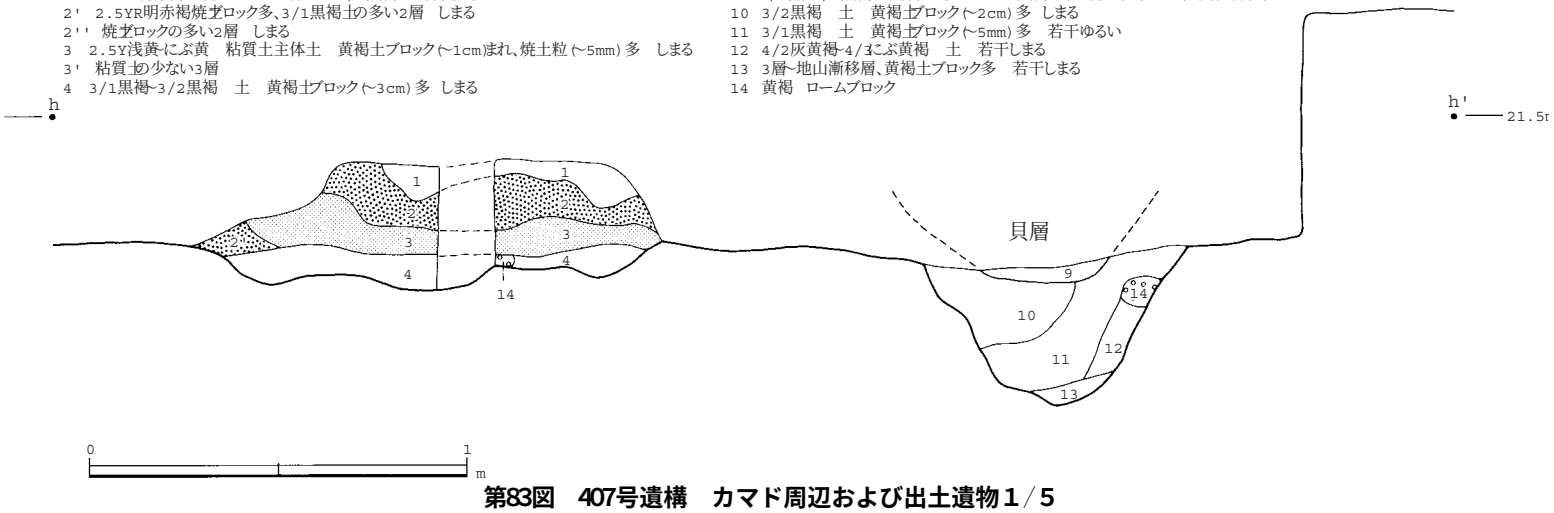


第82図 407号遺構 遺物出土状況





g-g' h-h'
1 4/2灰黄褐に2.5Y浅黄混じる 粘質土が多く混じる土 2.5YR5/8明赤褐焼けた粘質土粒(~5mm)多 しまる
1' 黒ずんだ1層
2 2.5YR明赤褐 焼土ブロック主体土 3/2黒褐土が隙間に混じる しまる
2' 2.5YR明赤褐焼土ブロック多、3/1黒褐土の多い2層 しまる
2'' 焼土ブロックの多い2層 しまる
3 2.5Y浅黄にぶい黄 粘質土主体土 黄褐土ブロック(~1cm)まれ、焼土粒(~5mm)多 しまる
3' 粘質土の少ない3層
4 3/1黒褐~3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~3cm)多 しまる
5 4/2灰黄褐 土 2.5Y浅黄粘質土混じる しまる
6 4/3にぶい黄褐~4/4褐 土 しまる
7 3/1黒褐 土 焼土が混じり赤っぽい しまる
8 黄褐 ロームブロック主体土
9 2/1黒~3/1黒褐 貝片少し混じる土 黄褐土粒・焼土粒(~1mm)・炭化物粒少 しまる
10 3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~2cm)多 しまる
11 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(~5mm)多 若干ゆるい
12 4/2灰黄褐~4/3にぶい黄褐 土 若干しまる
13 3層~地山漸移層、黄褐土ブロック多 若干しまる
14 黄褐 ロームブロック



第83図 407号遺構 カマド周辺および出土遺物1/5

貝層に伴う遺物は、竪穴に帰属するものと区別し、それとして取り上げられなかったので、遺物によって時期を比定するのは難しく、古墳時代中期後半以降としか言えない。

カマドは遺存状態が不良で、袖部分の下部が平らに検出できたにすぎない。その上には焼土を主体とする層が乗っており、そのさらに上部から完形の支脚（１）が出土した。この支脚の出土状況は、使用時の位置としては高く、不自然なので、カマドが崩された後にそのように置かれた可能性も考えられる。また、床面上の別の場所から別個体の支脚が出土しているが、これらは、床面から少なからず検出された炭化材から、廃絶時に建材が焼却処分されたと想定できることを勘案すれば、それに伴ってカマドがそのようにととのえられたことを示す、と見ることもできる。

遺物は、土師器がほとんどで、他にミニチュア土器（２・３）、支脚片（４・５・９）、滑石製臼玉（６・７）、土玉（75・78～84）、貝巣穴痕軟質岩（72～74）、炭化した梅あるいは桃の種（８）、不明焼成粘土片（10）、石（76・77）が出土した。加えて、混入したと思われるチャート剥片（第８図４）がある。土師器には、赤彩甕（壺）（43・46）、壺（44）、底部を除いて赤彩される杯（13）、脚柱部がわずかに膨らむ高杯（38）、筒状の口縁部・横方向のヘラケズリ仕上げの甕、須恵器模倣精製甕（54）など鬼高式の古相を示すものが多い。

床面で検出された炭化材は、アカガシ亜属（炭１～３・５）、ヤマグワ（炭４）と同定された。

出土遺物と竪穴の形状から、本遺構は古墳中期後半に属すると思われる。

200号竪穴住居跡（第91～93図）

規模(m):6.4四方　**柱間**:A－B3.6　B－C3.58　C－D3.52　D－A3.68 **主軸方位**:142°／床下232°

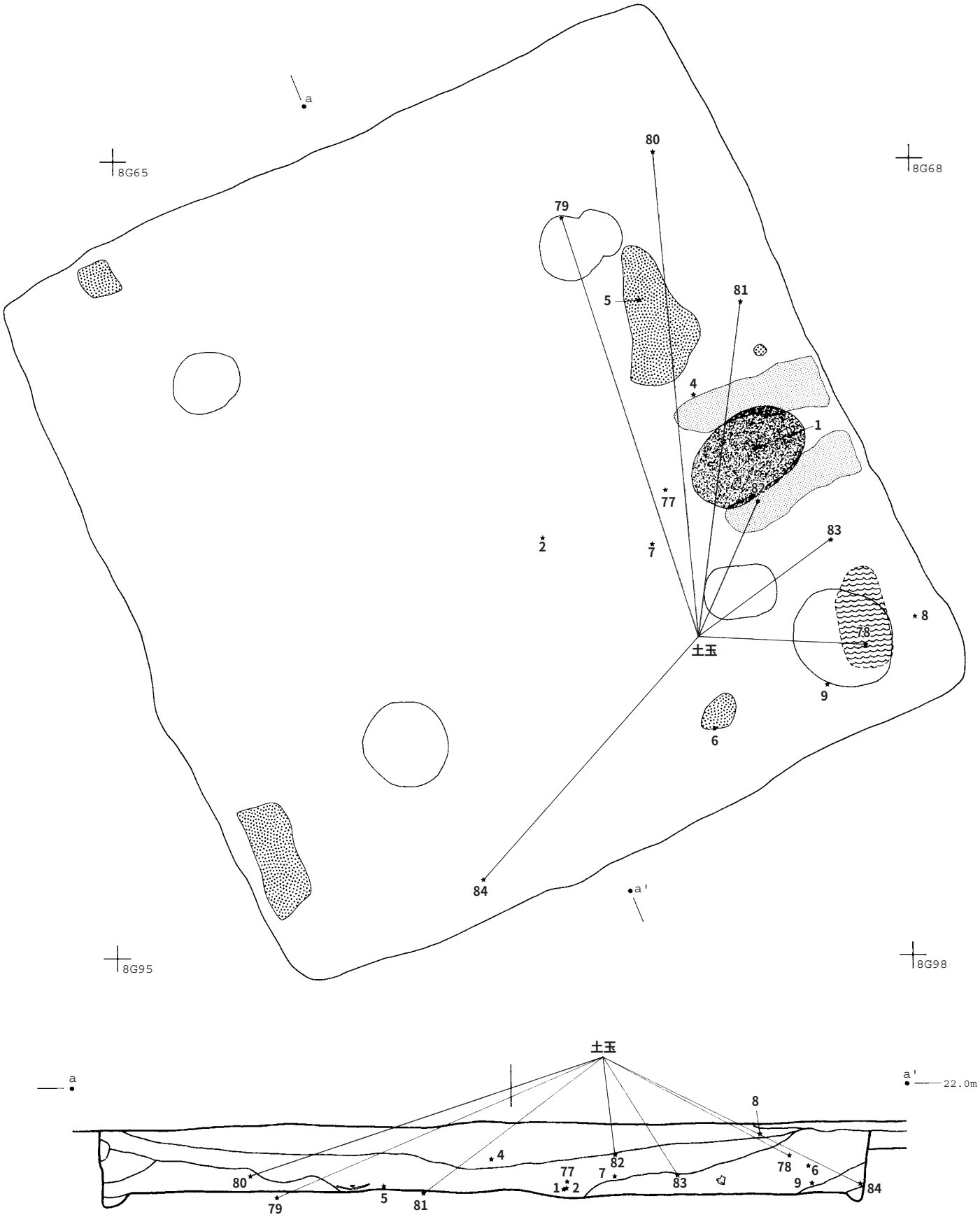
貯蔵穴：有段・方円形／床面南隅　方形／床下東隅　**時期**：古墳時代中期後半

調査区南端にかろうじて全体がかかる方形竪穴住居である。北側に似た軸で構築された201号方形竪穴住居に切られる。南辺西寄りに煙道のほとんど延びないカマドがあり、その脇に貯蔵穴がある。床面は黄褐土ブロックを貼ったもので、カマド付近から反対側にかけての空間が、若干他の部分より硬くなっている。主柱穴はA・B・C・Dで、A・C・Dは抜き取りのための掘り込みが認められた。Bは断面図にあるように柱痕跡が確認できたので、廃絶時には放置されたか、切り取られた可能性がある。なお、床面構築土を掘り下げたところ、炉状のくぼみと貯蔵穴が確認できた。竪穴と柱穴はそのままに建物の構造を変えた痕跡だと考えられる。

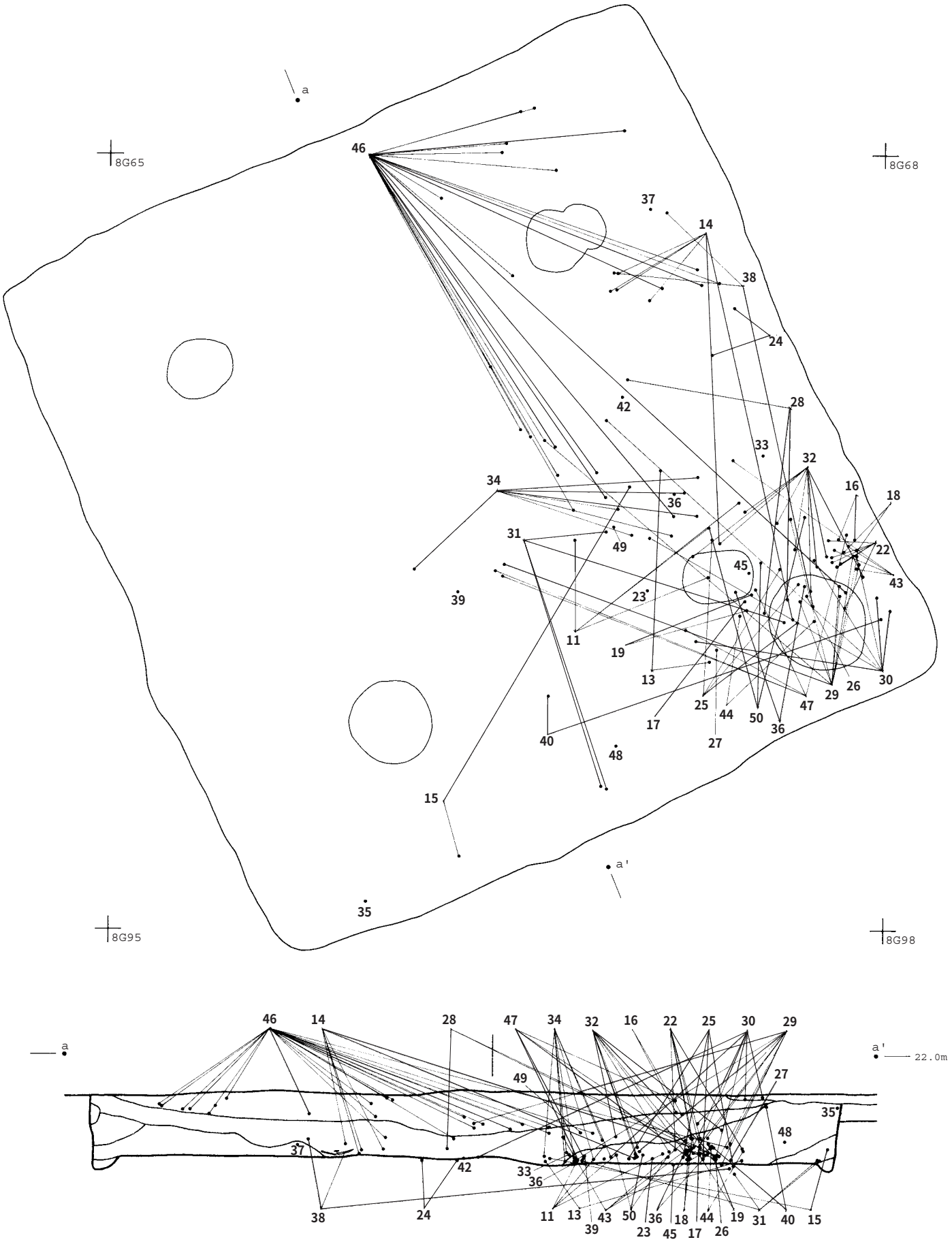
竪穴の覆土は、全体的に層理が不分明なので、漸移的な堆積が想像できるが、床面に近づくと黄褐土の大きいブロックが混じるという様相もあり、柱穴から推定できる廃絶時の処理の一環で竪穴が、何かの掘削土で浅く埋められたことも考えられる。

カマドは、断ち割りの観察によると、袖部の一部が原形をとどめる程度の遺存であった。支脚は使用位置と思われる中央の燃焼部上で検出されたものの、カマド自体は竪穴住居の廃絶に際し、崩されたものと考えられる。

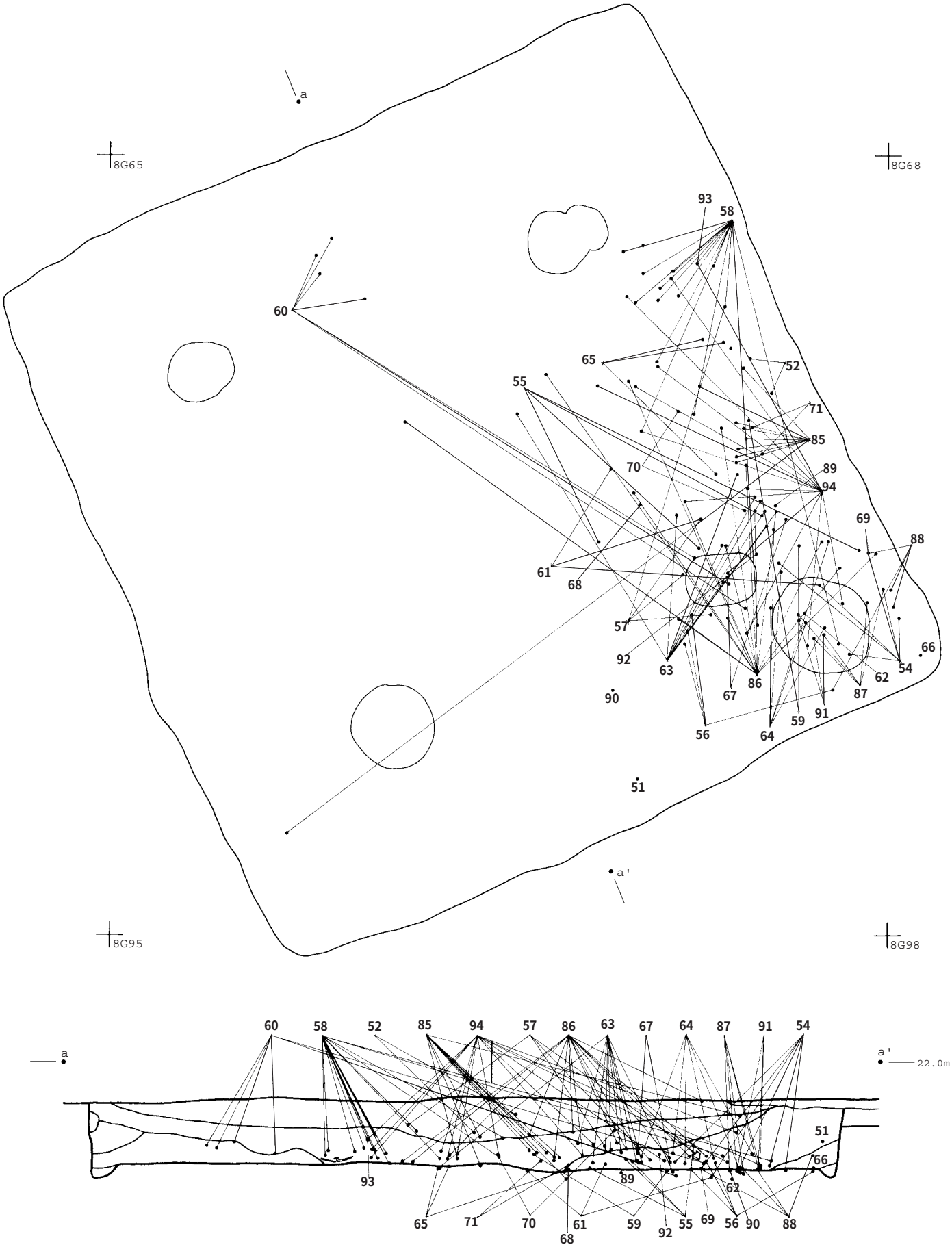
遺物は土師器がほとんどで、ほかに土玉（１～３）、不明焼成粘土片（４）、ミニチュア土器（５）、支脚片（６・10）、鉄製品（９）が出土した。床面直上で検出された遺物は、廃絶時の処理に伴うものであろう。貼床下の貯蔵穴Fからも少量の土器（14）が出土したが、床面上のものとほとんど変わらない時期のもののようである。土師器には、鉢（８・12・14）、須恵器模倣精製高杯（18・20・21）が見られ、鬼高式古相を示す。



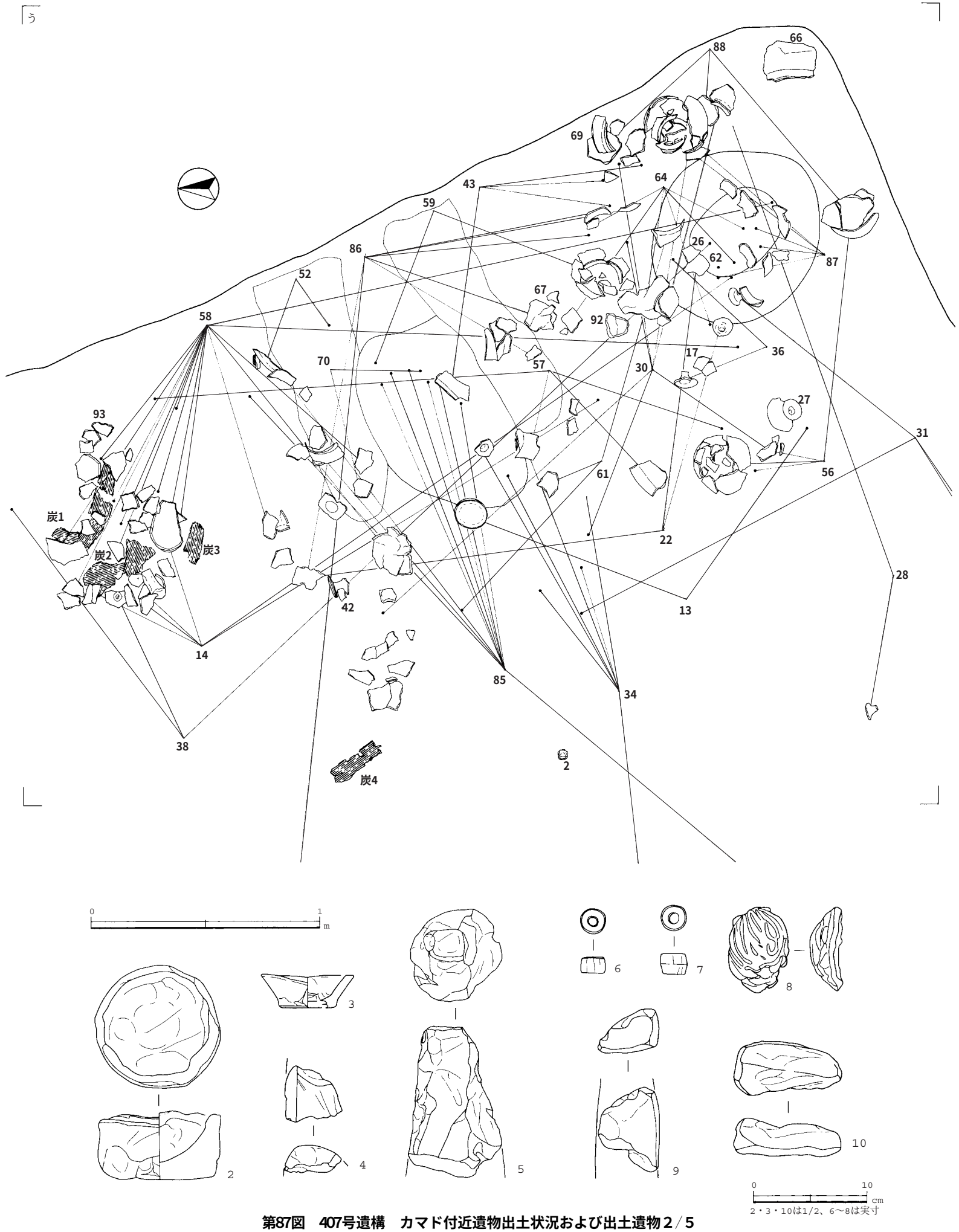
第84図　407号遺構　貝層・焼土・遺物（土製品等）検出状況



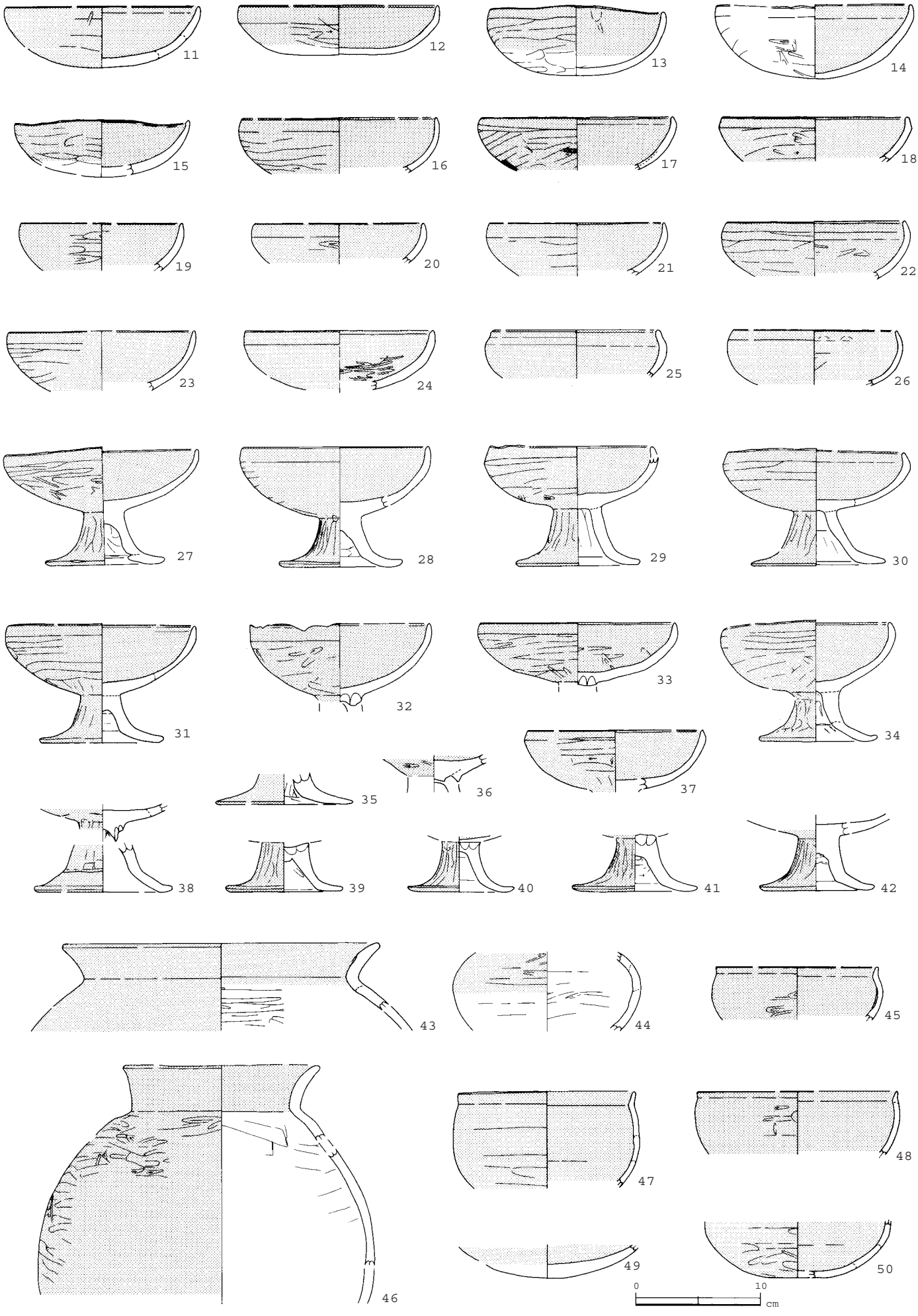
第85図　407号遺構　土器（杯・高杯・壺・赤彩甕）検出状況



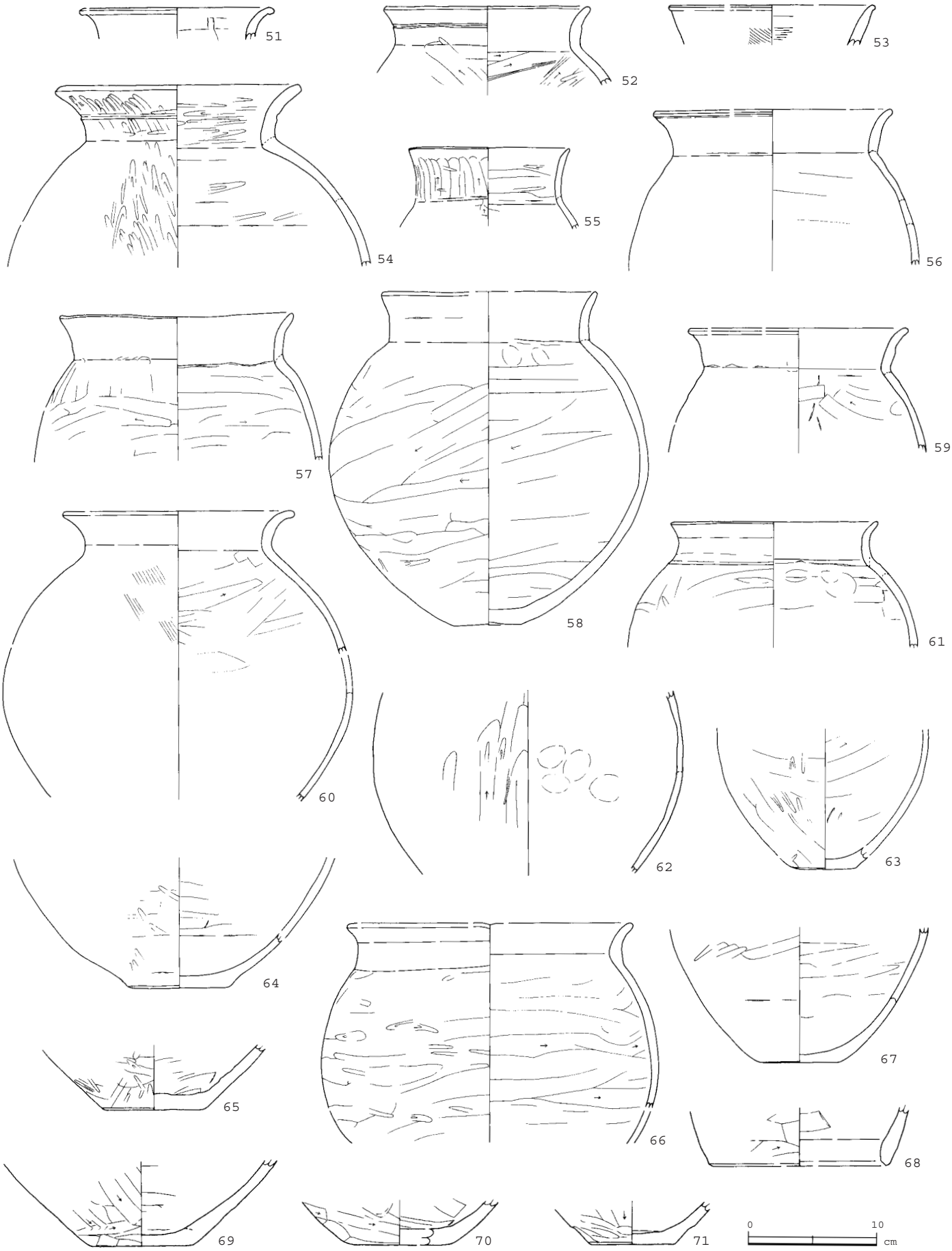
第86図　407号遺構　土器（甕・甑）検出状況



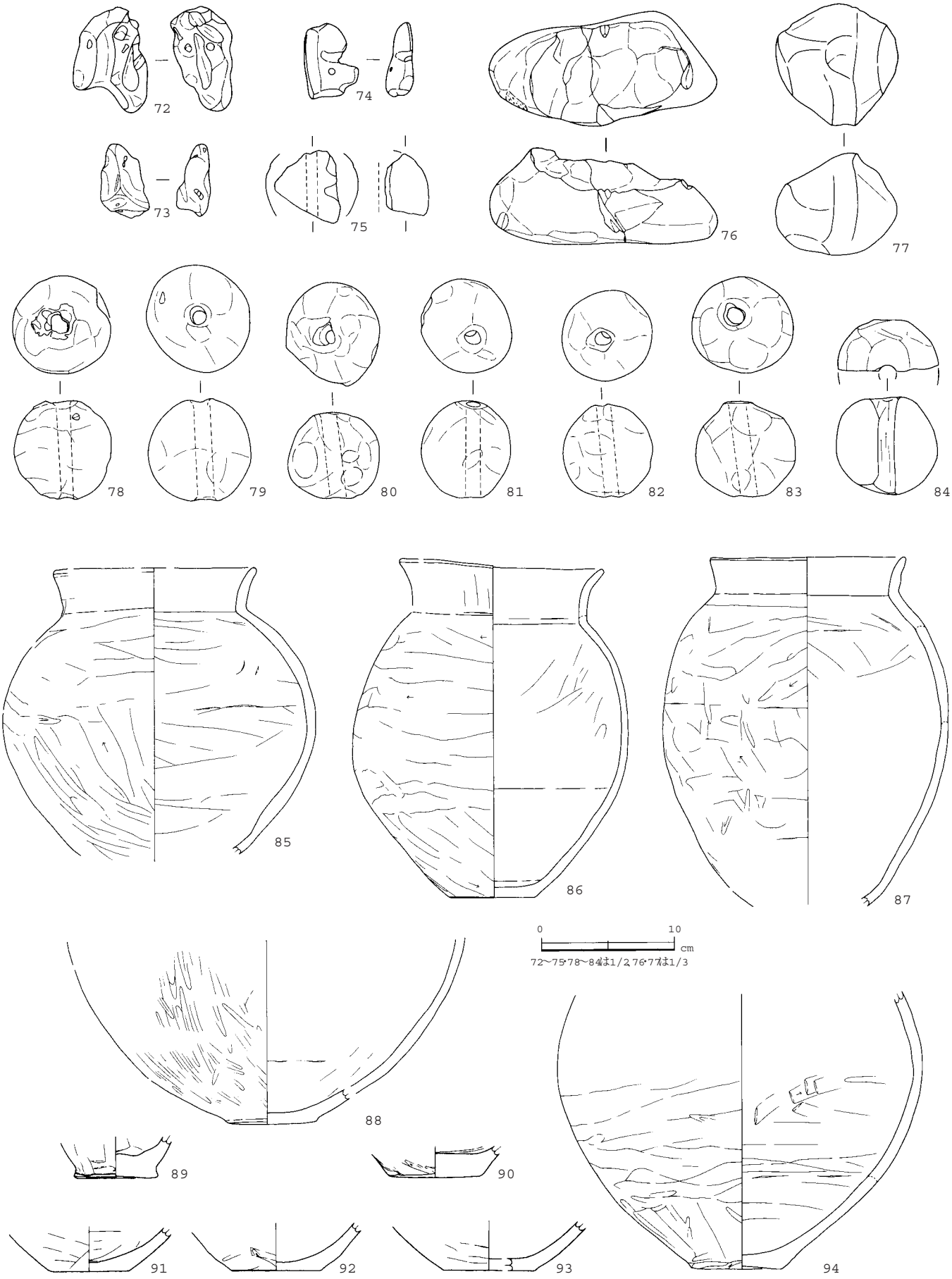
第87図　407号遺構　カマド付近遺物出土状況および出土遺物２／５



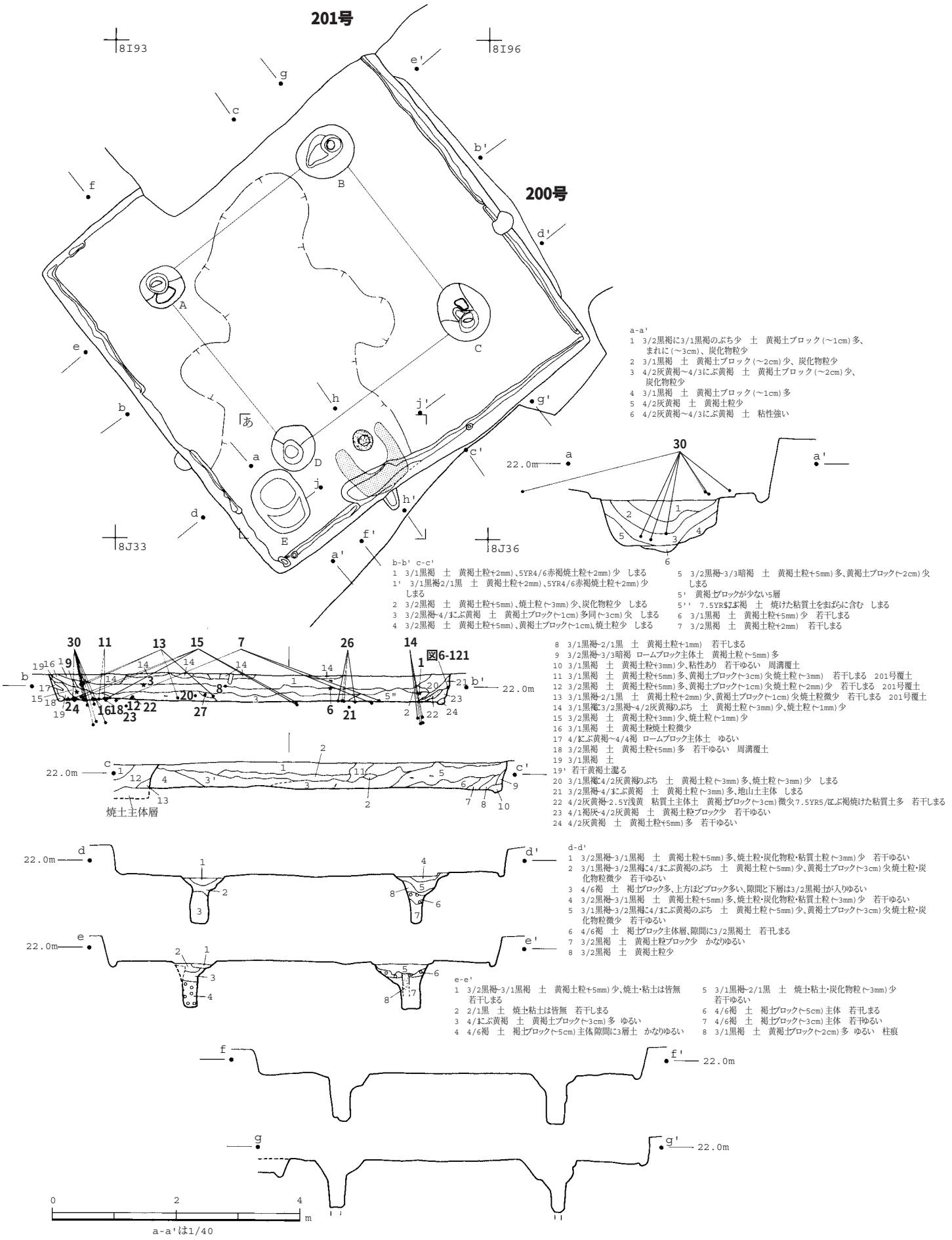
第88図　407号遺構出土遺物３／５



第89図　407号遺構出土遺物４／５



第90図　407号遺構出土遺物５／５



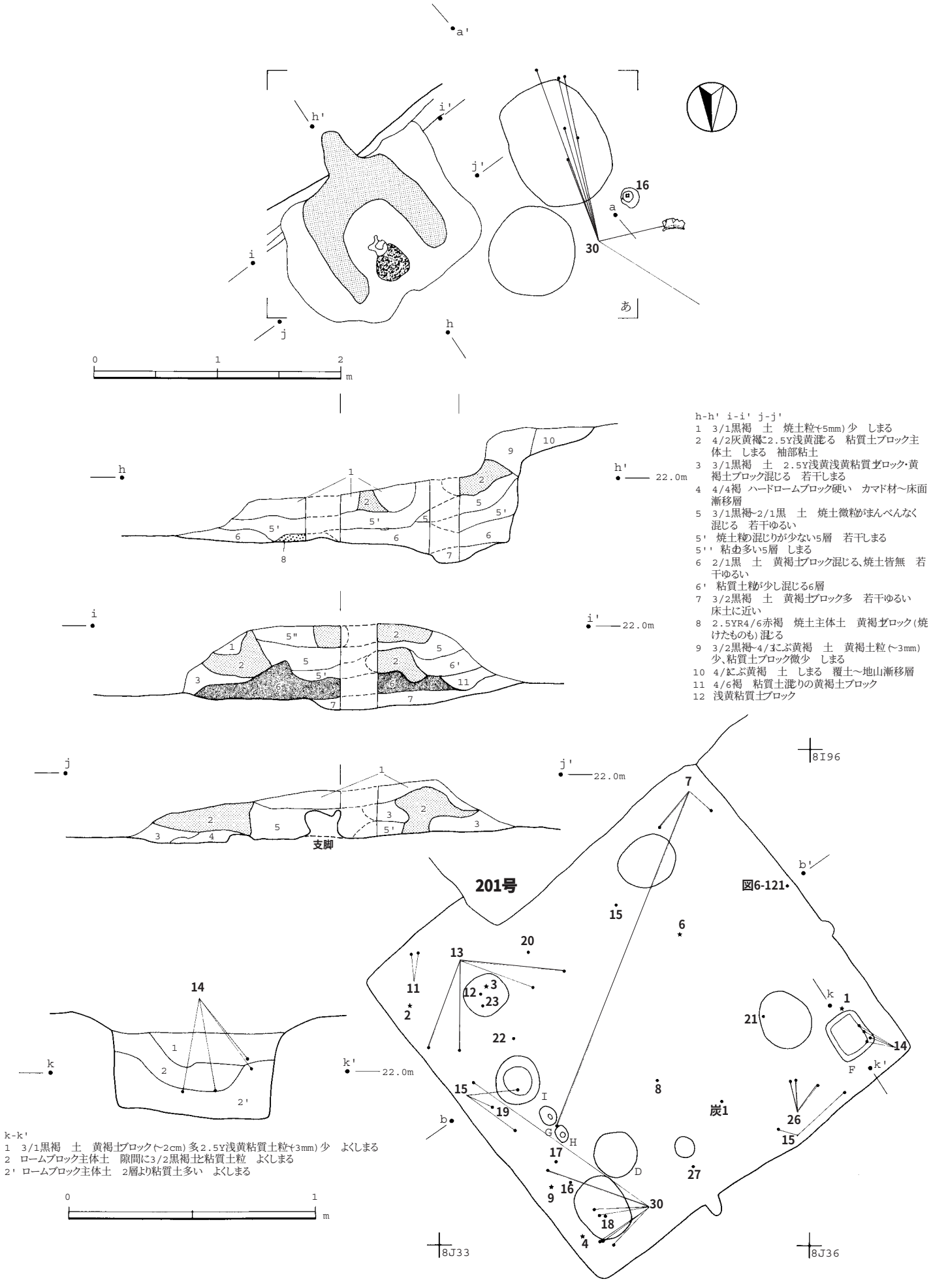
a-a'
1 3/2黒褐に3/1黒褐のぶち少 土 黄褐土ブロック(～1cm)多、まれに(～3cm)、炭化物粒少
2 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(～2cm)少、炭化物粒少
3 4/2灰黄褐～4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック(～2cm)少、炭化物粒少
4 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(～1cm)多
5 4/2灰黄褐 土 黄褐土粒少
6 4/2灰黄褐～4/3にぶ黄褐 土 粘性強い

b-b' c-c'
1 3/1黒褐 土 黄褐土粒ϕ2mm)、5YR4/6赤褐焼土粒ϕ2mm)少 しまる
1' 3/1黒褐-2/1黒 土 黄褐土粒ϕ2mm)、5YR4/6赤褐焼土粒ϕ2mm)少 しまる
2 3/2黒褐 土 黄褐土粒ϕ5mm)、焼土粒(～3mm)少、炭化物粒少 しまる
3 3/2黒褐-4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック(～1cm)多同(～3cm)尖 しまる
4 3/2黒褐 土 黄褐土粒ϕ5mm)、黄褐土ブロック(～1cm)、焼土粒少 しまる
5 3/2黒褐-3/3暗褐 土 黄褐土粒ϕ5mm)多、黄褐土ブロック(～2cm)少 しまる
5' 黄褐土ブロックが少ない5層
5'' 7.5YR5/2灰褐 土 焼けた粘質土をまばらに含む しまる
6 3/1黒褐 土 黄褐土粒ϕ5mm)少 若干しまる
7 3/2黒褐 土 黄褐土粒ϕ2mm) 若干しまる
8 3/1黒褐-2/1黒 土 黄褐土粒ϕ1mm) 若干しまる
9 3/2黒褐-3/3暗褐 ロームブロック主体土 黄褐土粒(～5mm)多
10 3/1黒褐 土 黄褐土粒ϕ3mm)少、粘性あり 若干ゆるい 周溝覆土
11 3/1黒褐 土 黄褐土粒ϕ5mm)多、黄褐土ブロック(～3cm)少焼土粒(～3mm) 若干しまる 201号覆土
12 3/2黒褐 土 黄褐土粒ϕ5mm)多、黄褐土ブロック(～1cm)少焼土粒(～2mm)少 若干しまる 201号覆土
13 3/1黒褐-2/1黒 土 黄褐土粒ϕ2mm)少、黄褐土ブロック(～1cm)少焼土粒微少 若干しまる 201号覆土
14 3/1黒褐-3/2黒褐～4/2灰黄褐のぶち 土 黄褐土粒(～3mm)少、焼土粒(～1mm)少
15 3/2黒褐 土 黄褐土粒ϕ3mm)少、焼土粒(～1mm)少
16 3/1黒褐 土 黄褐土粒焼土粒微少
17 4/3にぶ黄褐～4/4褐 ロームブロック主体土 ゆるい
18 3/2黒褐 土 黄褐土粒ϕ5mm)多 若干ゆるい 周溝覆土
19 3/1黒褐 土
19' 若干黄褐土混る
20 3/1黒褐-4/2灰黄褐のぶち 土 黄褐土粒(～3mm)多、焼土粒(～3mm)少 しまる
21 3/2黒褐-4/3にぶ黄褐 土 黄褐土粒(～3mm)多、地山土主体 しまる
22 4/2灰黄褐-2.5Y浅黄 粘質土主体土 黄褐土ブロック(～3cm)微少7.5YR5/6にぶ褐焼けた粘質土多 若干しまる
23 4/1褐灰-4/2灰黄褐 土 黄褐土粒ブロック少 若干ゆるい
24 4/2灰黄褐 土 黄褐土粒ϕ5mm)多 若干ゆるい

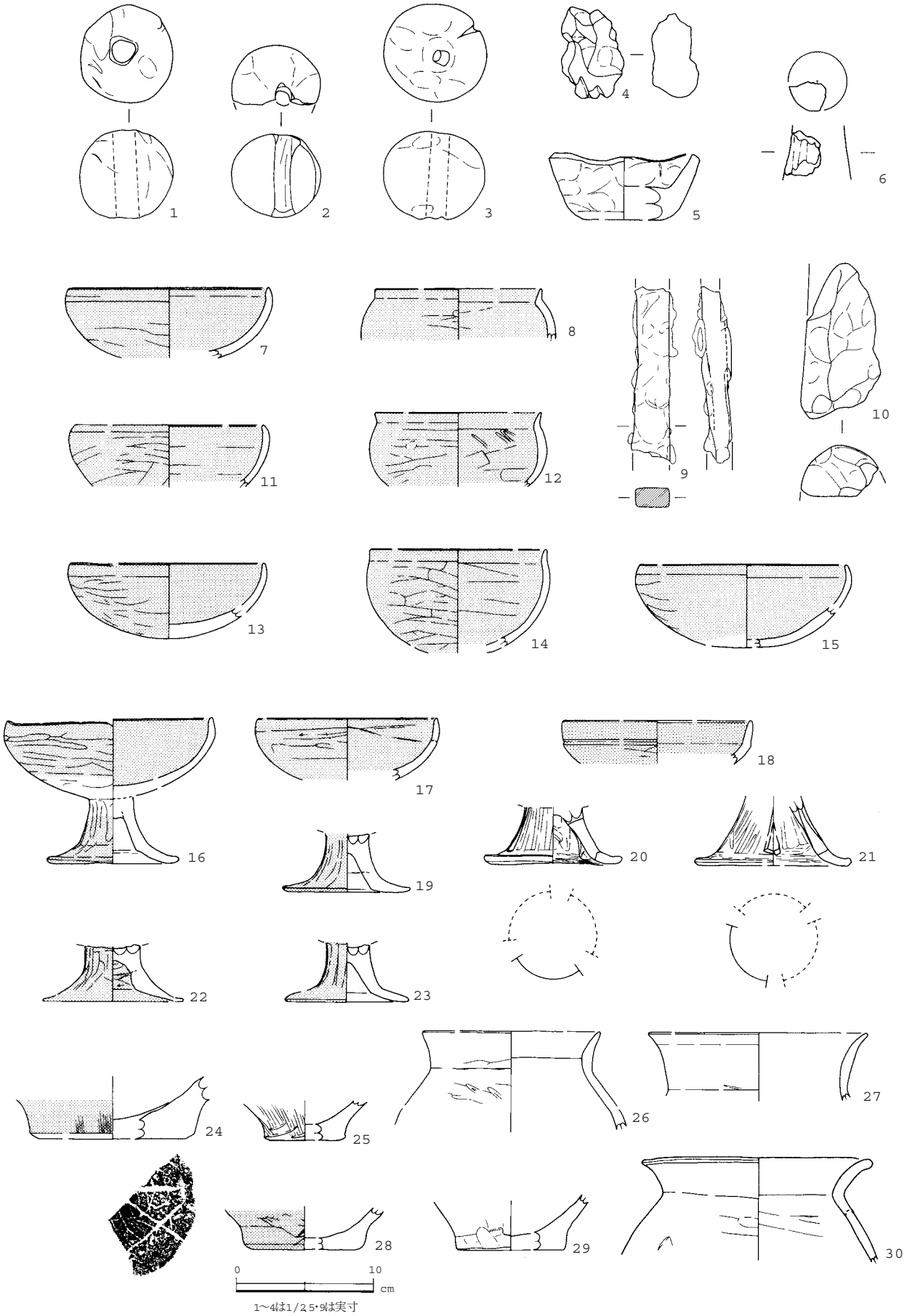
d-d'
1 3/2黒褐-3/1黒褐 土 黄褐土粒ϕ5mm)多、焼土粒・炭化物粒・粘質土粒(～3mm)少 若干ゆるい
2 3/1黒褐-3/2黒褐に4/3にぶ黄褐のぶち 土 黄褐土粒(～5mm)少、黄褐土ブロック(～3cm)少焼土粒・炭化物粒微少 若干ゆるい
3 4/6褐 土 褐土ブロック多、上方ほどブロック多い、隙間と下層は3/2黒褐土が入りゆるい
4 3/2黒褐-3/1黒褐 土 黄褐土粒ϕ5mm)多、焼土粒・炭化物粒・粘質土粒(～3mm)少 若干ゆるい
5 3/1黒褐-3/2黒褐に4/3にぶ黄褐のぶち 土 黄褐土粒(～5mm)少、黄褐土ブロック(～3cm)少焼土粒・炭化物粒微少 若干ゆるい
6 4/6褐 土 褐土ブロック主体層、隙間に3/2黒褐土 若干しまる
7 3/2黒褐 土 黄褐土粒ブロック少 かなりゆるい
8 3/2黒褐 土 黄褐土粒少

e-e'
1 3/2黒褐-3/1黒褐 土 黄褐土粒ϕ5mm)少、焼土・粘土は皆無 若干しまる
2 2/1黒 土 焼土粘土は皆無 若干しまる
3 4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック(～3cm)多 ゆるい
4 4/6褐 土 褐土ブロック(～5cm)主体隙間に3層土 かなりゆるい
5 3/1黒褐-2/1黒 土 焼土粘土・炭化物粒(～3mm)少 若干ゆるい
6 4/6褐 土 褐土ブロック(～5cm)主体 若干しまる
7 4/6褐 土 褐土ブロック(～3cm)主体 若干ゆるい
8 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(～2cm)多 ゆるい 柱痕

第91図　200号遺構



第92図　200号遺構　カマド周辺および遺物出土状況



第93図　200号遺構出土遺物

本遺構は、カマドが南側に設置されている点と、土師器の様相から古墳時代中期後半の所産と思われる。また、建て替え前の床面に炉が設定されていた形跡（長軸78㎝短軸70㎝深さ８㎝）のあること、それにともなうと思われる貯蔵穴が反対側の隅にあることから、古墳時代中期後半のどこか、若干遡る時期に営まれ始めたものと考えられる。

208号竪穴住居跡（第94～97図）

規模（m）：4.8四方　**柱間**：Ａ－Ｂ2.40　Ｂ－Ｃ2.70　Ｃ－Ｄ2.30　Ｄ－Ａ2.76　**主軸方位**：158°
貯蔵穴：円形／南隅　**時期**：古墳時代中期後半

Ｄ２区中ほどに位置し、206・207号と切り合う方形竪穴住居である。南辺西寄りにカマドが築かれ、その脇に貯蔵穴がある。煙道部分は207号に切られるため形状は不明である。床面には東壁際を中心に周溝が巡る。主柱穴はＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄである。

覆土は、床面と下層の一部に焼土・炭化物を多く含む土が広がり、貯蔵穴内にも、ロームブロック中心の層の上に、炭化物を多く含むと思われる黒色土・焼土層が認められる。柱穴はそれぞれ抜き取りのためと思われる掘り込みが伴い、覆土も廃絶時にはある程度の窪みになっていたことを示している。これを竪穴覆土の様子と総合すると、貯蔵穴・柱穴は開口しており、そこに焼土・炭化物が堆積するような過程があった、すなわち、焼却処分が行われたと想定できる。カマドは207号に切られることもあり、それほど遺存状態は良くなかった。

カマドからは、燃焼部上より、伏せられたかたちの高杯下半（３）の上に、支脚（１）が載って出土している。これは、支脚の補助として利用されていた状態のまま残ったようにも見え、あるいは、竪穴廃絶に伴って意図的にそのようにととのえられたとも考えられる。

遺物は、他の竪穴に比べれば少ないものの土師器が主体で、他に土玉16個（15～30）が出土した。土師器には、３方向に長方形透かしをもつ須恵器模倣精製の高杯（２）、下半を意識的に塗り残す赤彩の杯（４）、赤彩甕（壺）（６）が見られ、鬼高式古相を示す。

遺構の時期は、カマドの設置方位、出土土器から古墳中期後半と考えられる。切り合う遺構は、前後とも時期的に離れているようである。

203号竪穴住居跡（第98図）

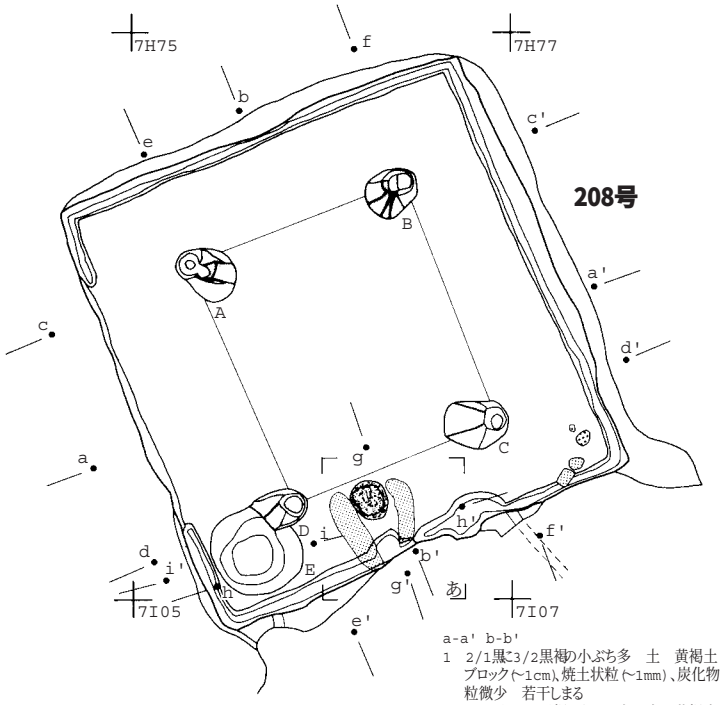
規模（m）：不明　**主軸方位**：75°／345°　**時期**：古墳時代中期後半

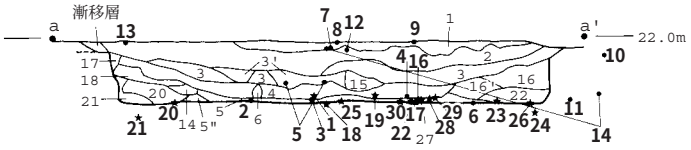
202号竪穴住居の北西に位置し、大半が調査区外に出る方形竪穴住居である。柱穴・カマド・貯蔵穴は検出されなかった。床面直上から下層にかけてレンズ状に焼土が堆積し、そこに炭化物のブロックが混じる様子が見られた。このため、意図の有無は不明だが、廃絶時に上屋などが焼けた可能性が大きい。遺物は土師器片が少量得られたのみである。帰属する時期は、床面に近い、杯（２）・高杯（８）などの土師器の形状から、類例の多い古墳中期後半と思われる。

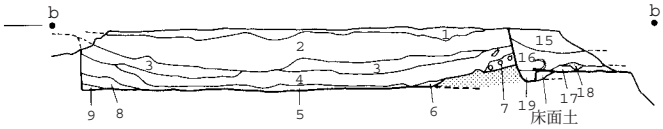
46号竪穴住居跡（第99～102図）

規模(m)：5.2×5.28　**柱間**：Ａ－Ｂ2.40　Ｂ－Ｃ2.48　Ｃ－Ｄ2.32　Ｄ－Ａ2.52　**主軸方位**：324°
貯蔵穴：円形／北東辺中央寄り　**時期**：古墳後期後半

調査区北東部に位置する方形竪穴住居である。12号溝に切られる。また、小型の掘立柱建物65号と

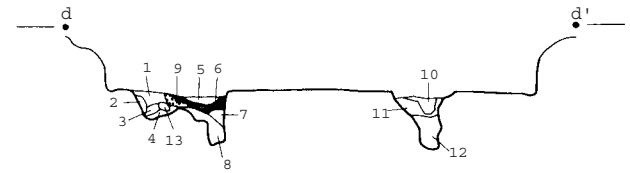




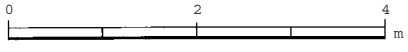


a-a' b-b'
1 2/1黒~3/2黒褐の小ぶち多 土 黄褐土ブロック(~1cm)、焼土状粒(~1mm)、炭化物粒微少 若干しまる
2 2/1黒~3/2黒褐の小ぶち少 土 黄褐土ブロック(~1cm)、焼土状粒(~1mm)、炭化物粒(~2mm)混じる 若干しまる
3 3/1黒褐~4/3にぶ黄褐の小ぶち少 土 黄褐土粒(~2mm)、焼土粒(~1mm)、炭化物粒微少 若干しまる
3' 3/1黒褐~4/2灰黄褐の小ぶちが多くはいる土 黄褐土粒(~5mm)多、焼土粒(~2mm)少 若干しまる
4 3/1黒褐~2/1黒~4/3にぶ黄褐の小ぶち少 土 黄褐土粒(~2mm)、焼土粒・炭化物粒微少 若干しまる
5 3/2黒褐 土 4/6褐土ブロック多、2.5Y浅黄粘質土粒微少 若干しまる
5' 焼土粒が多い5層
6 4/2灰黄褐 土 焼土粒(~3mm)少、2.5Yにぶ黄粘質土ブロック多 若干しまる
7 4/2灰黄褐~2.5Yにぶ黄混じる 粘質土主体土 若干しまる
8 3/1黒褐~4/2灰黄褐の小ぶちが多く混じる土 黄褐土粒微少 若干しまる
9 3/2黒褐 土 黄褐土粒ブロック多、焼土粒などは少ない 若干しまる
10 3/1黒褐~4/2灰黄褐の小ぶち多く混じる土 黄褐土粒(~3mm)少 しまる 207号覆土
11 2/1黒~4/2灰黄褐の小ぶち少 土 黄褐土粒(~5mm)・焼土粒(~3mm)少 若干しまる 207号覆土
12 3/1黒褐 土 黄褐土粒(~3mm)・焼土粒(~3mm)少、焼土粒・ブロック、粘質土粒微少 若干しまる 207号覆土
13 3/2黒褐 2.5Y浅黄粘質土多く混じる土 若干しまる 207号覆土
14 3/1黒褐 土 若干ゆるい 207号覆土
15 3/1黒褐~4/2灰黄褐のぶちが特に多い部分
16 4/4褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)多 若干しまる
16' 4層-16層の漸移層、黒くなる
17 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)少 隅の方は明るくなる 若干ゆるい
18 3/1黒褐~4/2灰黄褐がマーブル状に混じる土 焼土粒(~2mm)が時にブロックとなり散る、黄褐土粒(~5mm)少、炭化物皆無
19 3/2黒褐 土 黄褐土粒(~3mm)、焼土粒微少
20 3/1黒褐~2/1黒 土 黄褐土粒(~5mm)多、まれにブロック、粘性若干あり 若干しまる
21 3/2黒褐~3/1黒褐 土 黄褐土粒・焼土粒・炭化物粒・粘土粒皆無、粘性若干あり
22 3/2黒褐 土 若干ゆるい 覆土~地山漸移層

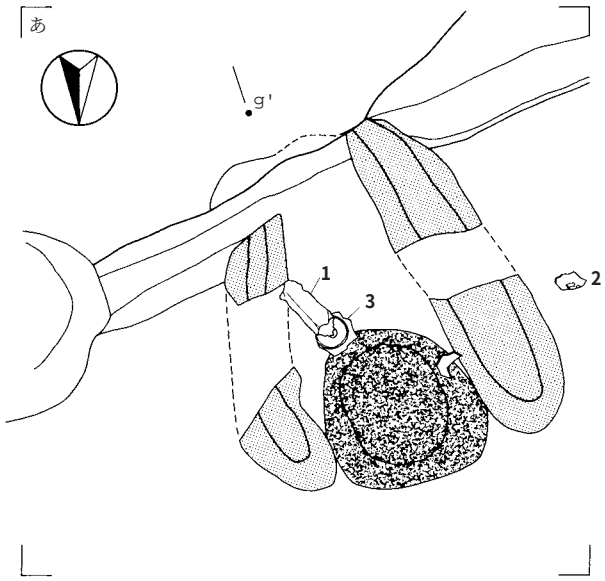
c-c'
1 3/2黒褐~2/1黒のぶち 土 黄褐土ブロック(~1cm)多、炭化物少 ゆるい
2 2/1黒 土 黄褐土粒(~5mm)多、炭化物少 かなりゆるい
3 4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック多 ゆるい
4 3/2黒褐 土 ゆるい
5 2/1黒 土 黄褐土粒(~5mm主、まれに1cm大) 若干ゆるい
6 4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック(~3cm)多 ゆるい

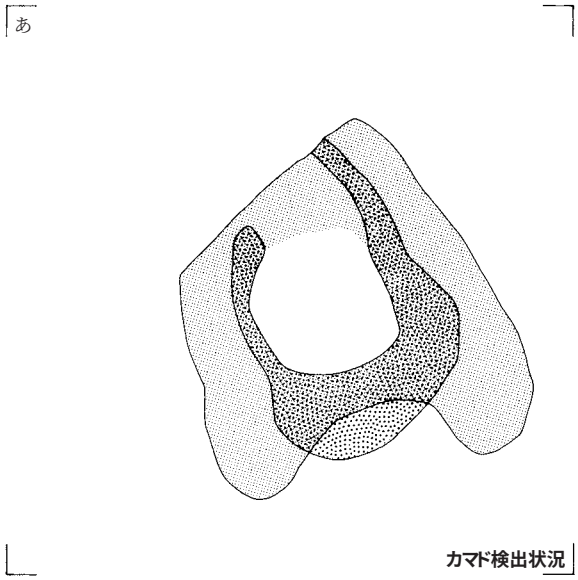


d-d'
1 2/1黒 土 しまる
2 4/2灰黄褐 土 若干ゆるい
3 3/1黒褐~2/1黒 土 黄褐土粒(~5mm)多 若干ゆるい
4 4/4褐~4/6褐 土 若干ゆるい 覆土~地山漸移層
5 4/2灰黄褐~4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック(~5cm)まれ、ブロック多 若干しまる
6 2/1黒 土 炭化物多黄褐土ブロック(~3cm)少 かなりゆるい
7 3/1黒褐~3/2黒褐 土 かなりゆるい
8 4/4褐 土 ゆるい
9 3/1黒褐~3/2黒褐 土 焼土多、炭化物・粘質土ブロック多
10 2/1黒 土 黄褐土粒(~5mm)少、炭化物粒(~5mm)まれ 若干ゆるい
11 3/2黒褐 土 黄褐土粒(~3mm)多 若干ゆるい
12 4/3にぶ黄褐~4/4褐 土 黄褐土ブロック(~3cm) ゆるい
13 黄褐土ブロック

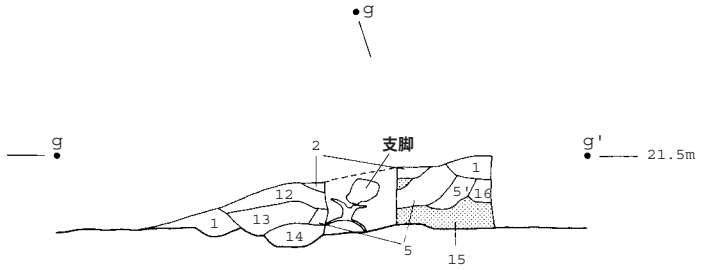


第94図 208号遺構

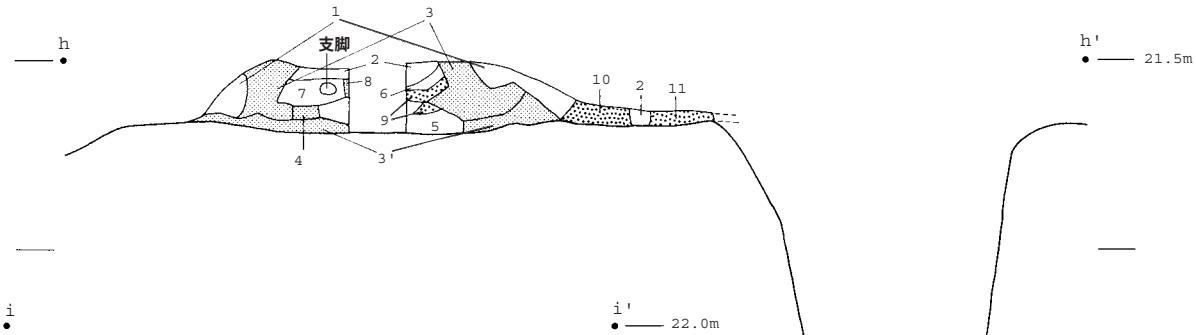


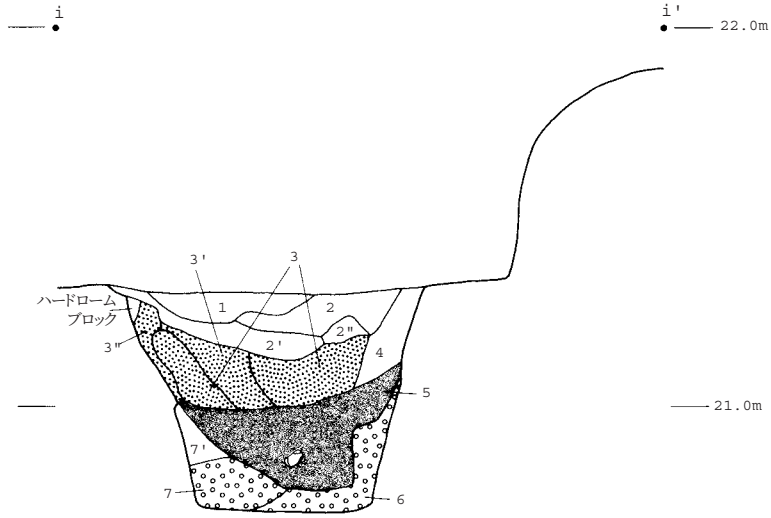


カマド検出状況



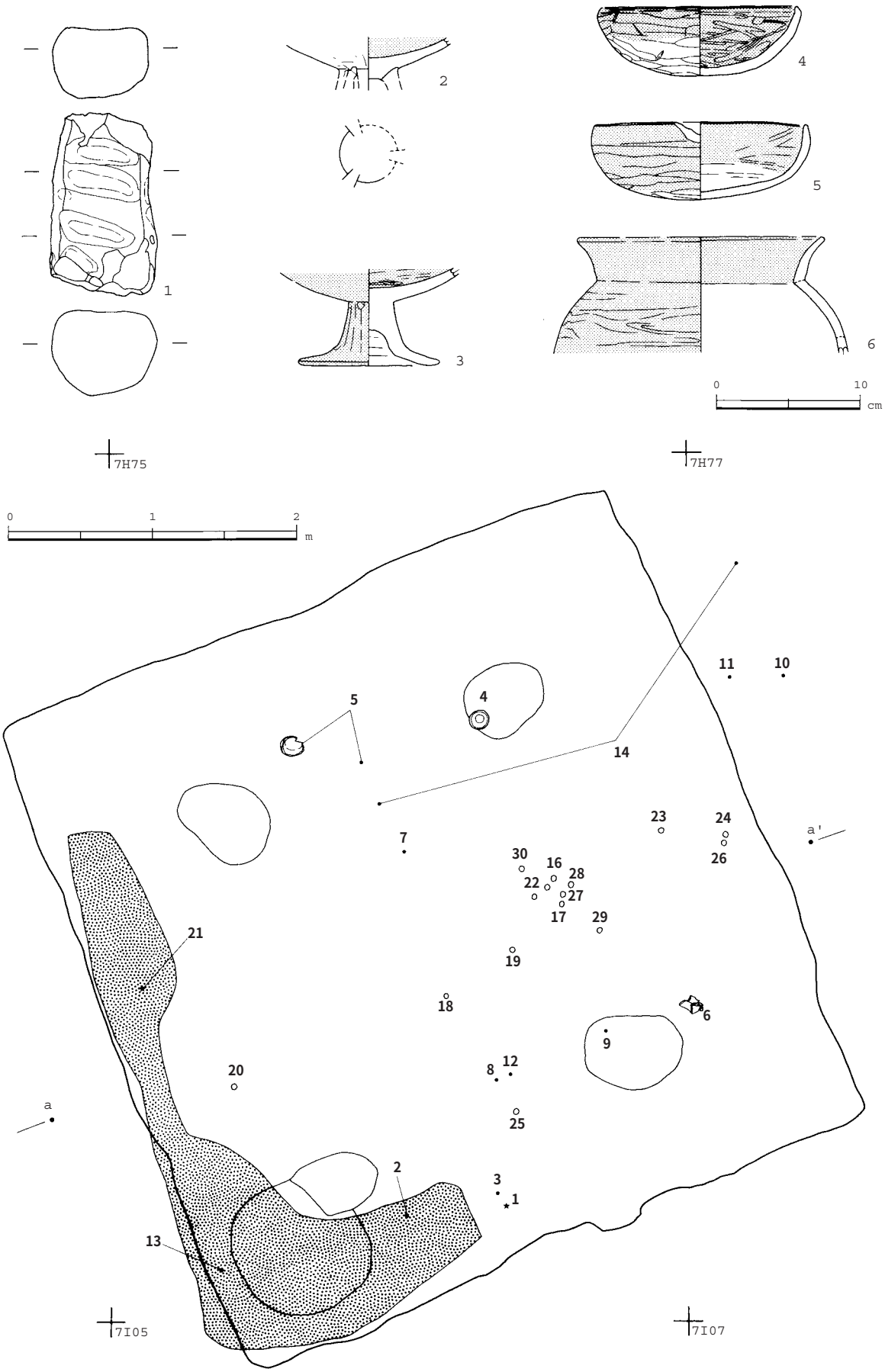
g-g' h-h'
1 2/1黒 土 焼土粒(φ3mm)少 若干しまる
2 3/1黒褐 土 焼土粒(φ3mm)・炭化物粒少 若干しまる
3 4/2灰黄褐~2.5Y浅黄 粘質土主体土 焼土粒炭化物粒少 若干しまる カマド袖部
3' 4/2灰黄褐3/2黒褐 土 粘質土の少ない3層 よくしまる カマド袖部
4 2.5Y浅黄 粘質土主体土 しまる カマド袖部
5 2/1黒~3/2黒褐 土 焼土粒(φ3mm)・炭化物粒少 ゆるい カマド袖部
5' 3/2黒褐 土 2.5Y浅黄粘質土粒が混じる5層 若干ゆるい
6 3/2黒褐 土 焼土粒(φ2mm)少、粘質土少 若干ゆるい
7 3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)少 若干ゆるい
8 2.5Y浅黄 粘質土ブロック 若干ゆるい
9 2.5YR赤褐 焼土ブロック主体土
10 2.5YR赤褐 焼土主体土 3/1黒褐土が多く混じる
11 2.5YR赤褐 焼土
12 3/2黒褐~4/2灰黄褐 土 2.5Y浅黄粘質土ブロック、焼土ブロック多く混じる 若干ゆるい
13 7.5YR4/2灰褐 土 焼土粒多黄褐土粒少 若干ゆるい
14 黄褐 ロームブロック主体土 3/1黒褐土が混じる ゆるい
15 3/1黒褐~4/1こぶ黄褐がマーブル状に混じる 粘質土 よくしまる カマド~床面漸移層
16 3/1黒褐~2/1黒 土 若干ゆるい



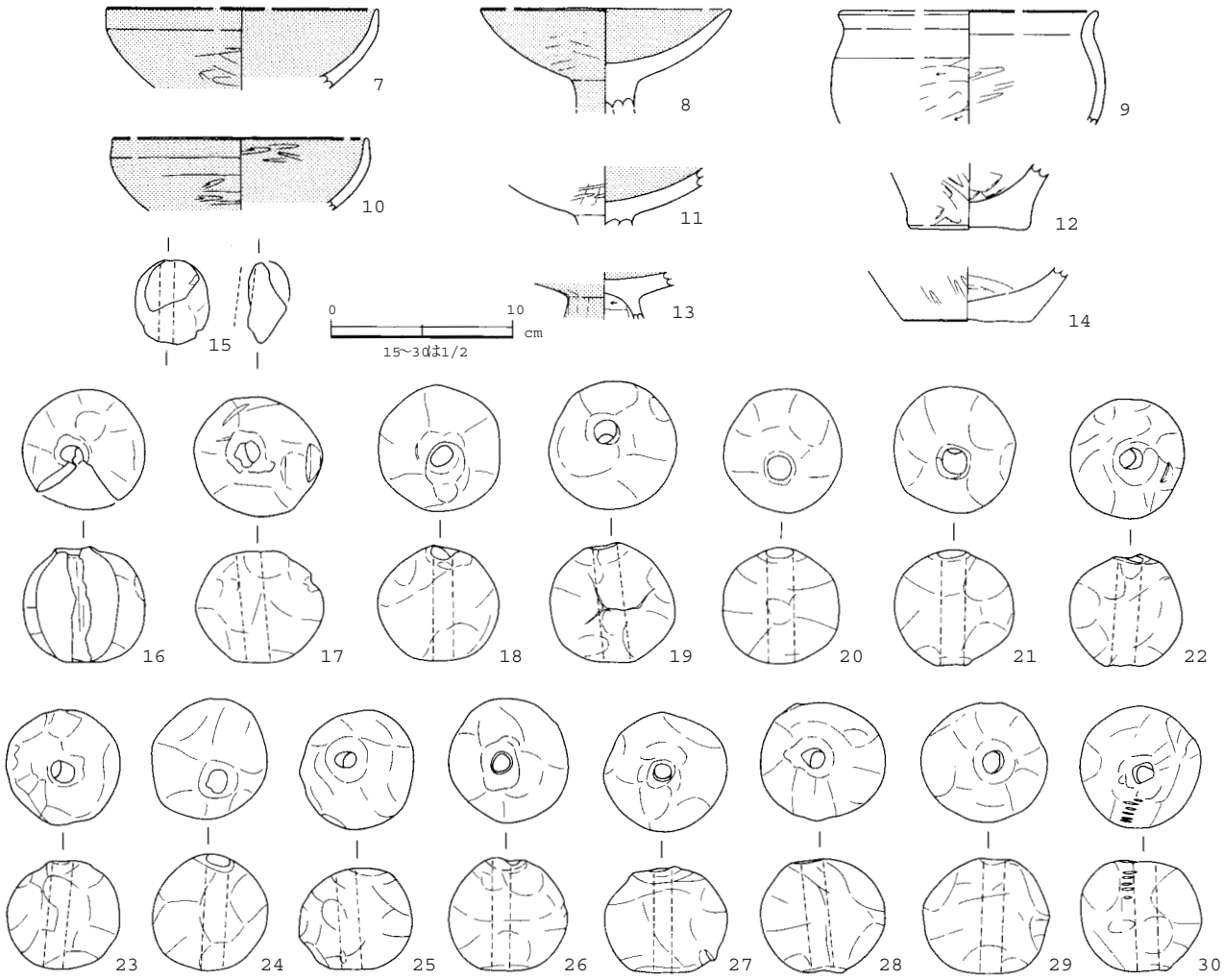


i-i'
1 4/2灰黄褐 土 黄褐土ブロック(~2cm)多 焼土粒微少 若干しまる
2 3/1黒褐~3/2黒褐 土 黄褐土粒(φ5mm)少、焼土粒微少 若干ゆるい
2' 3/1黒褐~2/1黒 土 黄褐土粒(φ5mm)少、焼土粒ブロック(~5mm)多 若干ゆるい
2'' 5YR赤褐焼土を多く含む2層、2層~3層への漸移層 若干しまる
3 2.5YR赤褐 焼土 隙間に3/1黒褐~2/1黒土少し混じる 若干ゆるい
3' 焼土主体土 4/2灰黄褐~4/3こぶ黄褐土の少し混じる3層 ゆるい
3'' 7.5YR4/3褐 焼土混の土 焼土の割合の少ない3層 若干ゆるい
4 3/2黒褐 土 若干ゆるい
5 2/1黒~1.7/1黒 土 黄褐土粒少焼土粒(~5mm)少 ゆるい
6 3/2黒褐 土 黄褐土粒ブロック大量に混じる 若干ゆるい
7 4/2灰黄褐~4/3こぶ黄褐 土 黄褐土ブロック(~5cm)多 若干しまる
7' 7.5YR4/3褐 土 黄褐土ブロックのない7層、粒は多い ゆるい

第95図 208号遺構 カマド・貯蔵穴



第96図　208号遺構　焼土・遺物検出状況および出土遺物１／２



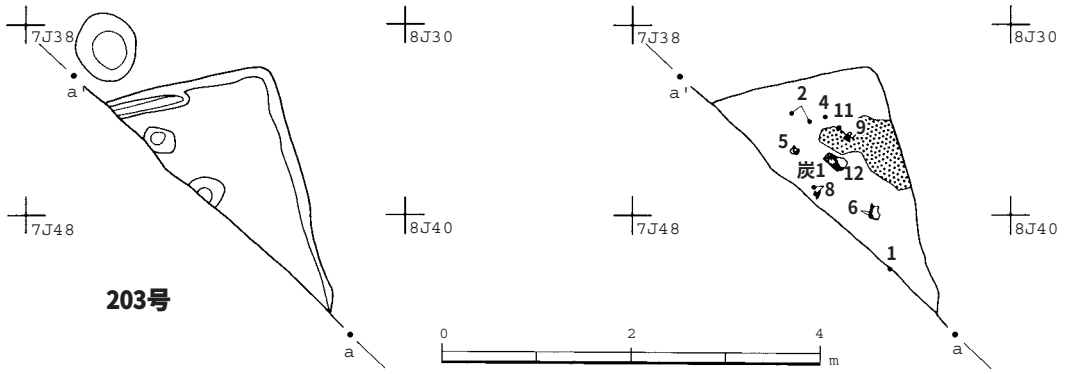
第97図　208号遺構出土遺物２／２

も切り合う。床面壁際には周溝が巡り、長い煙道を持つカマドと貯蔵穴が伴う。カマドの正面に位置するＥが出入り口ピットで、深さは17.7㎝である。貯蔵穴ＦはＢＣの軸線上にあるので、意識してそのように配置されたのであろう。

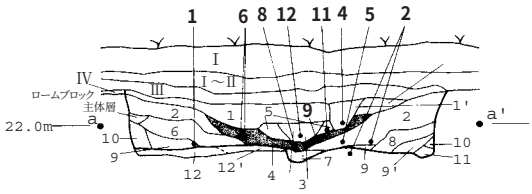
覆土は、下層の南側に焼土がまとまって認められるのが特徴的である。柱穴の覆土は、柱痕跡と思われる黒い層が見られるものがあり、抜き取りが行われたようには見受けられない。床面近くの焼土層と炭化材の存在を積極的に評価すれば、竪穴廃絶時に、抜き取りは行われなくとも、再利用のために根元で切り取られた可能性も考えられる。なお、炭化材（炭１）はシキミと確認されている。

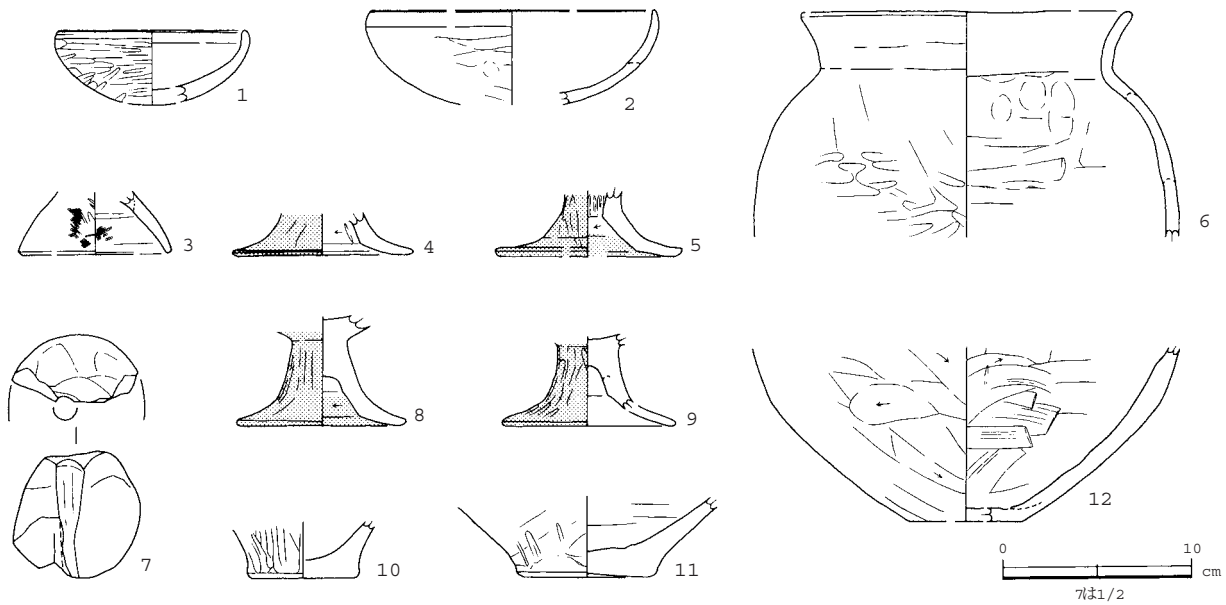
カマドは長い煙道を持つタイプで、裾部分の下部が遺存していた。支脚は向かって左側の袖部脇で検出された。また、カマドの正面にはほぼ完形に復元できた甕（12）が検出されている。

遺物は床面から、土師器・須恵器のほか、軽石製砥石（11）、土器片加工円板（15）が出土した。瓦も検出されたが、12号からの混入品である。第102図のスケール以下の遺物は混入品と考えられるものである。土師器には、須恵器杯身模倣の黒色処理された杯（10）が見られるので、本遺構は古墳後期後半に属すると考えられる。



a-a'
1　3/1黒褐　土　黄褐土粒(~5mm)多、焼土状粒(~1mm)少　しまる
1'　若干黒い1層　しまる
2　4/3にぶい黄褐~3/2黒褐　土　黄褐土ブロック(~1cm、まれに4cm)多焼土粒(~3mm)少、2.5Y浅黄粘質土粒(~5mm)まれ、炭化物粒(~3mm)少
3　3/1黒褐~3/2黒褐　土　黄褐土粒(~5mm)大量、焼土粒(~1mm)、炭化物粒(~1mm)少　若干しまる
4　3/2黒褐　焼土混じりの土　5YR4/3にぶい赤褐焼土粒がまんべんなく混じる、炭化物ブロック(大まれ、焼土ブロック(~2cm)少黄褐土粒(~2mm)少、粘質土ブロック少　若干しまる
5　2/1黒　土　黄褐土粒(~5mm)多、ブロック(~2cm)少焼土粒・炭化物粒少　しまる
6　3/1黒褐　土　黄褐土粒(~5mm)多、ブロック(~2cm)、焼土粒・炭化物粒少　しまる
7　3/1黒褐　土　黄褐土粒(~5mm)多、ブロック(~1cm)　ゆるい　柱穴?
8　3/2黒褐　土　黄褐土ブロック(~1cm)多焼土粒(~5mm)少、2.5Y浅黄粘質土ブロック(~1cm)　若干しまる
9　2/1黒　土　黄褐土ブロック(~1cm)少　しまる
9'　黄褐土粒多
10　3/2黒褐　土　黄褐土粒(~5mm)少　若干ゆるい
11　3/2黒褐 ロームブロック(~3cm)主体土　若干ゆるい　周溝覆土
12　5/6黄褐 ロームブロック主体土　しまる　床面構築土
12'　3/2黒褐土主体12層　若干しまる　床面構築土





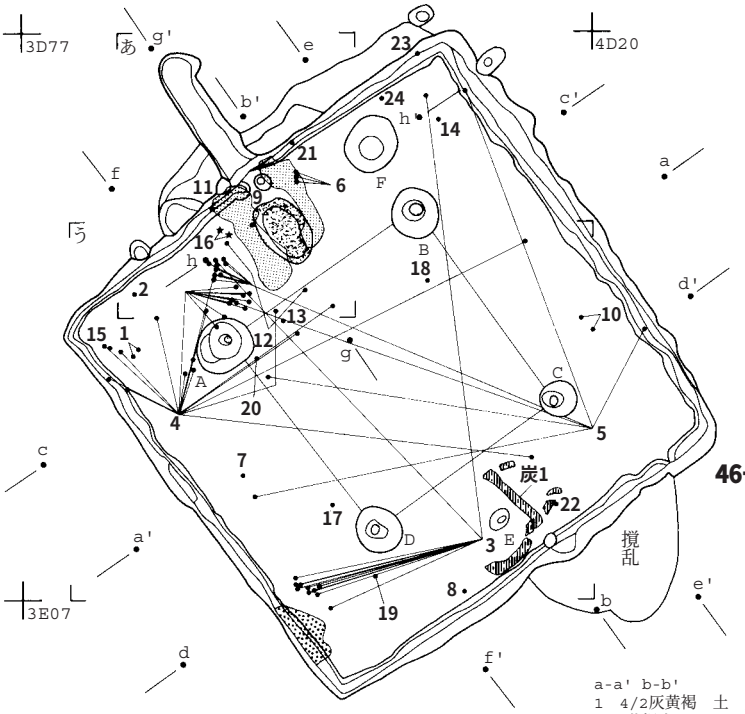
第98図　203号遺構　焼土・遺物検出状況および出土遺物

411号竪穴住居跡（第103図上）

規模（m）：4.8以上　**主軸方位**：47°／317°　**時期**：古墳時代後期後半

Ｄ３区の北西隅に位置し、ほとんどの部分が調査区外にある方形竪穴住居である。中世の道路302号に切られる。カマド・主柱穴などは検出されなかった。覆土の下層と床面に焼土・炭化物が顕著で、廃絶時に火を受けたのは間違いない。

遺物は１片を除き、すべて土師器である。土師器は、内外面を黒色処理された小型器種と縦方向のヘラケズリで仕上げられる甕・甑で構成される。これらはその形状から古墳時代後期後半に位置づけ

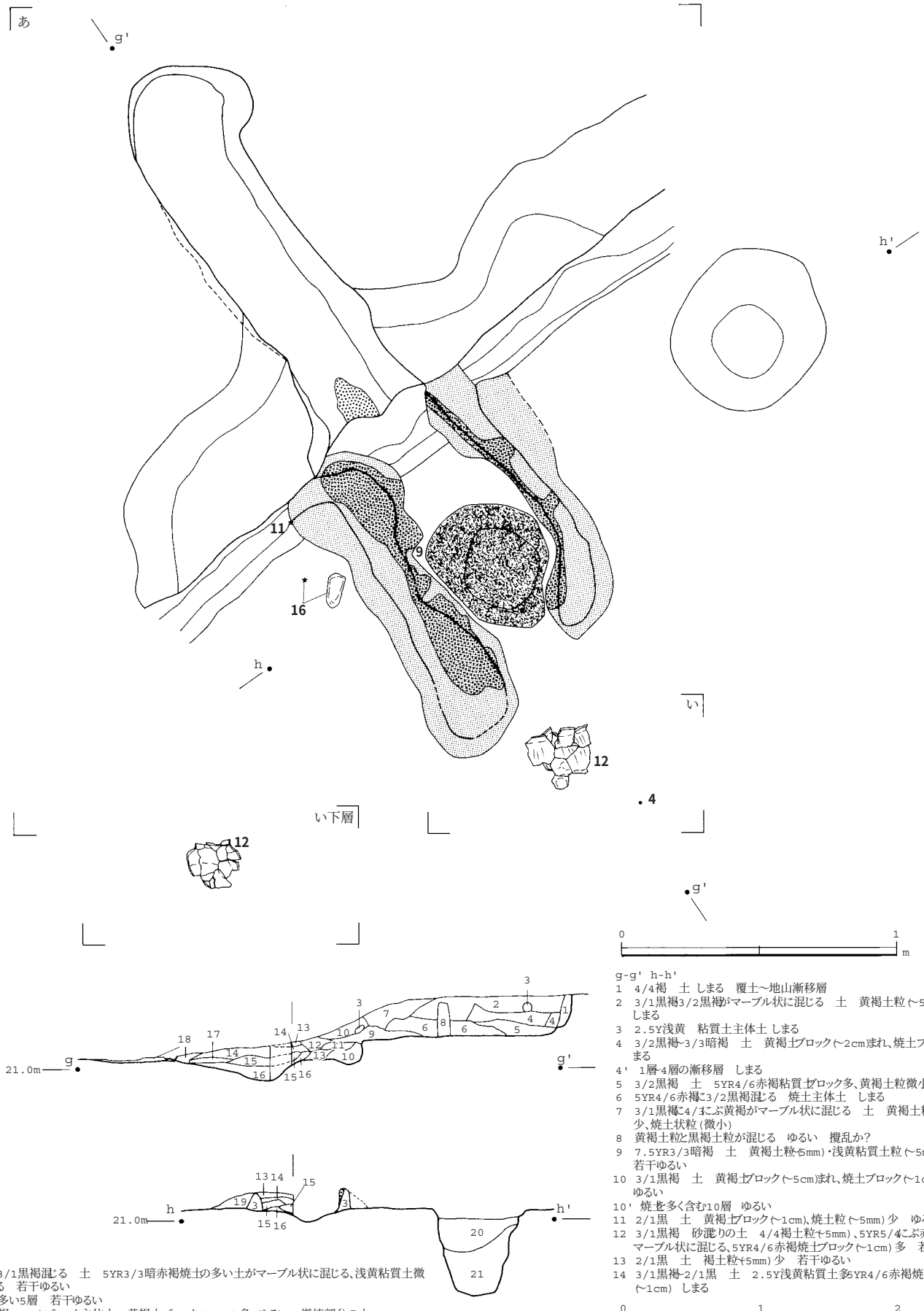


a-a' b-b'
1 4/2灰黄褐 土 黄褐土粒(～3mm) しまる
1' 黄褐土ブロック(～2cm)多の1層 若干しまる
2 3/1黒褐 土 黄褐土粒(～3mm)・焼土状粒・2.5Y浅黄粘質土粒(～3mm) しまる
3 3/1黒褐～2/1黒に4/3にぶ黄褐の小ぶち 土 黄褐土粒(～5mm)・焼土状粒(～5mm) しまる
4 3/2黒褐～4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック(～1cm) しまる
4' 焼土粒(～5mm)、粘質土(微小が目立つ しまる
4'' 黄褐ブロック(～3cm) しまる
5 2.5Y7/4浅黄 粘質土主体土 3/1黒褐が混じる、焼土状粒(～5mm)、黄褐土ブロック(～1cm) 硬い
5' 粘質土主体土 焼土ブロックが5層より大きい、3層に色が近い 硬い
6 3/2黒褐～4/2灰黄褐 土 黄褐土ブロック(～2cm)多 しまる
7 3/2黒褐～4/2灰黄褐 土 黄褐土ブロック(～1cm)少 しまる
8 3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(～2cm)多 しまる
9 3/1黒褐～4/3にぶ黄褐がマーブル状に混ざる 土 しまる 覆土～地山漸移層
10 3/1黒褐 土 黄褐土粒(～2mm) しまる
11 3/1黒褐に4/2灰黄褐が混じる 土 黄褐土粒・焼土粒(～2mm)混じる 若干しまる
11' 3層-11層の漸移層 若干しまる
12 黄褐に3/1黒褐が混じる ロームブロック主体土 黄褐土ブロック(～3cm) ゆるい
13 ロームブロック

c-c'
1 3/1黒褐～3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(～3cm)少 ゆるい
2 3/2黒褐～3/3暗褐 ロームブロック主体土 かなりゆるい 3層に似た土が柱痕状に黒ずむ
3 4/4褐 ロームブロック主体土 黄褐土ブロック(～7cm) 若干しまる
4 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(～5cm) ゆるい 柱痕?
5 4/3にぶ黄褐 ロームブロック主体土 黄褐土ブロック(～5cm) ゆるい
6 3/3暗褐 ロームブロック主体土 黄褐土ブロック(～5cm) ゆるい

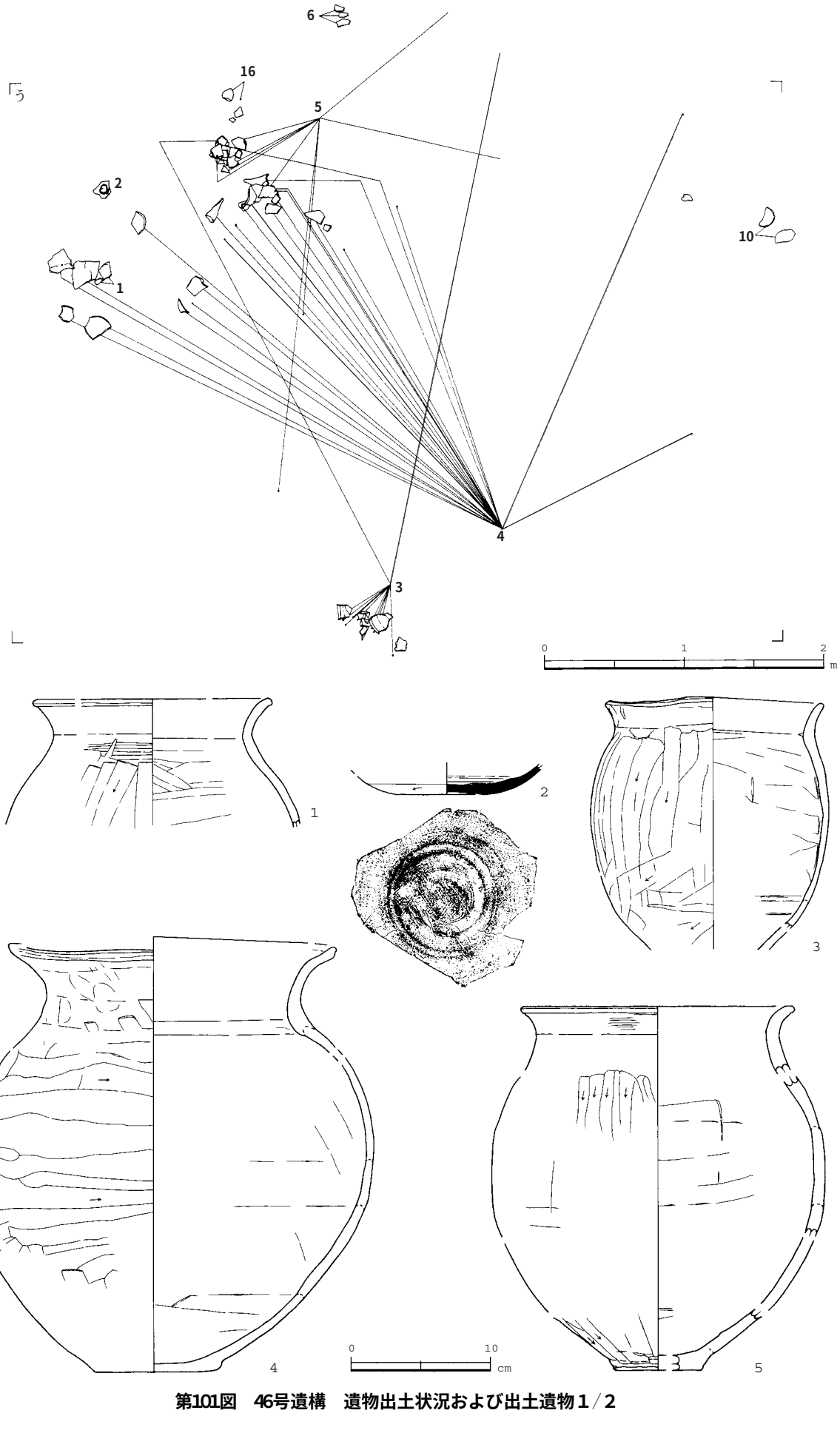
d-d'
1 4/4褐 ロームブロック主体土 若干しまる
2 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(～3cm)少 ゆるい 柱痕
3 3/3暗褐～4/3にぶ黄褐 ロームブロック主体土 黄褐土ブロック(～5cm) ゆるい
4 3/1黒褐～2/1黒 土 黄褐土ブロック(～1cm)少 ゆるい 柱痕か?
5 4/4褐 ロームブロック主体土 黄褐土ブロック(～5cm) しまる
6 4/3にぶ黄褐～3/3暗褐 ロームブロック主体土 黄褐土ブロック(～5cm) ゆるい

第99図 46号遺構

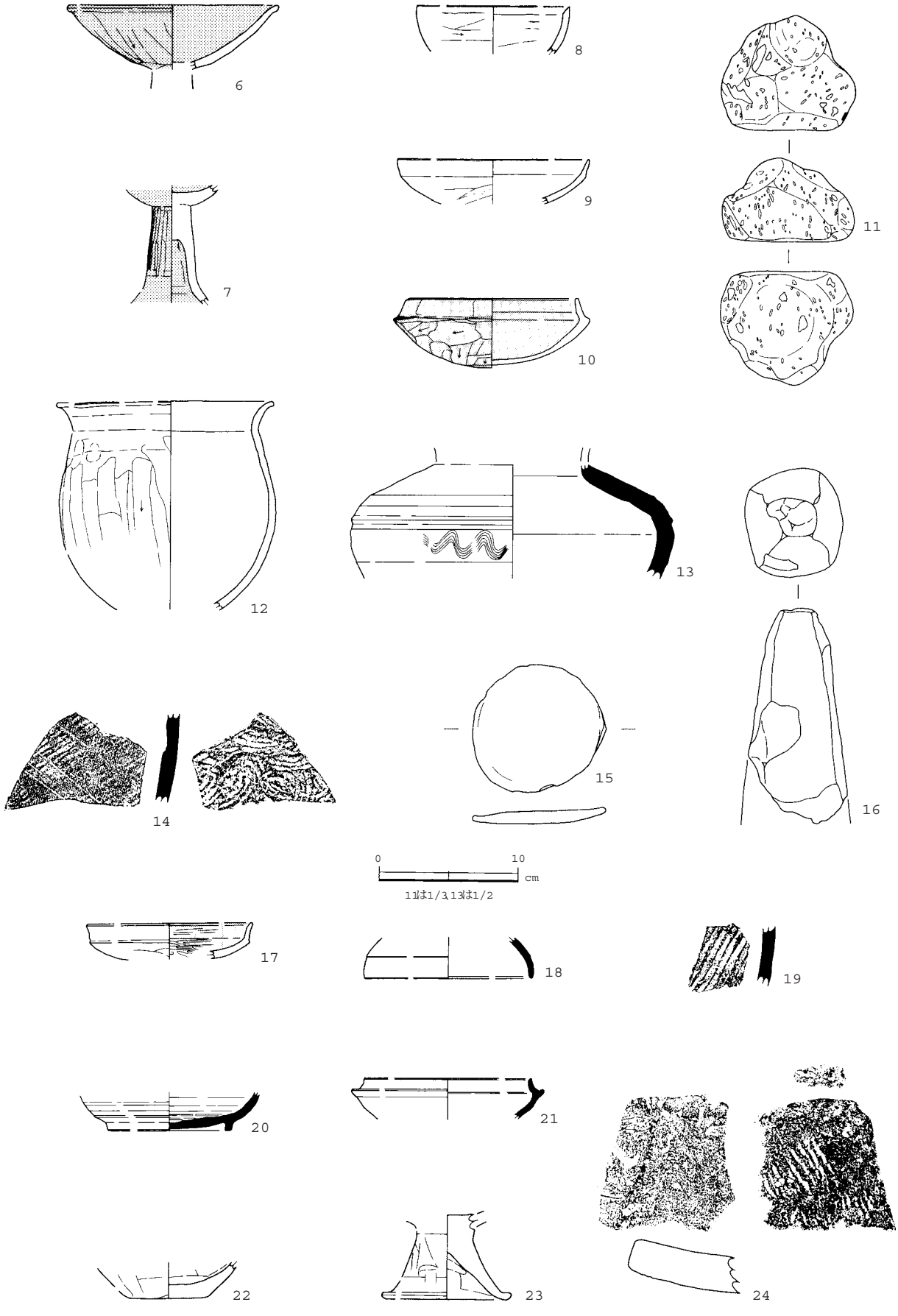


g-g' h-h'
1 4/4褐　土 しまる　覆土～地山漸移層
2 3/1黒褐3/2黒褐がマーブル状に混じる　土　黄褐土粒(～5mm)少 しまる
3 2.5Y浅黄　粘質土主体土 しまる
4 3/2黒褐～3/3暗褐　土　黄褐土ブロック(～2cm)まれ、焼土ブロック しまる
4' 1層-4層の漸移層　しまる
5 3/2黒褐　土　5YR4/6赤褐粘質土ブロック多、黄褐土粒微小　しまる
6 5YR4/6赤褐に3/2黒褐混じる　焼土主体土　しまる
7 3/1黒褐に4/3にぶ黄褐がマーブル状に混じる　土　黄褐土粒(～3mm)少、焼土状粒(微小)
8 黄褐土粒と黒褐土粒が混じる　ゆるい　攪乱か?
9 7.5YR3/3暗褐　土　黄褐土粒(5mm)・浅黄粘質土粒(～5mm)多 若干ゆるい
10 3/1黒褐　土　黄褐土ブロック(～5cm)まれ、焼土ブロック(～1cm)少 ゆるい
10' 焼土を多く含む10層　ゆるい
11 2/1黒　土　黄褐土ブロック(～1cm)、焼土粒(～5mm)少　ゆるい
12 3/1黒褐　砂混じりの土　4/4褐土粒(～5mm)、5YR5/4にぶ赤褐土がマーブル状に混じる、5YR4/6赤褐焼土ブロック(～1cm)多　若干ゆるい
13 2/1黒　土　褐土粒(～5mm)少　若干ゆるい
14 3/1黒褐～2/1黒　土　2.5Y浅黄粘質土多5YR4/6赤褐焼土ブロック(～1cm) しまる
15 黄褐に3/1黒褐混じる　土　5YR3/3暗赤褐焼土の多い土がマーブル状に混じる、浅黄粘質土微粒混じる　若干ゆるい
15' 焼土の多い5層　若干ゆるい
16 3/1黒褐 ロームブロック主体土　黄褐土ブロック(～5cm)多 ゆるい　燃焼部分の土
17 2/1黒～1.7/1黒　土　炭化物多焼土粒(～2mm)・黄褐土粒(～5mm)少　若干ゆるい
18 2/1黒　土　黄褐土粒(～5mm)少　若干ゆるい
19 3/3暗褐　土　褐土ブロック(～1cm)少焼土粒・炭化物粒は皆無　しまる
20 3/1黒褐～2/1黒　土　黄褐土粒(～3mm)少、焼土状粒微少、浅黄粘土粒　若干ゆるい
21 3/1黒褐　土　黄褐土ブロック(～1cm)少粘土ブロック(～1cm)少　若干ゆるい

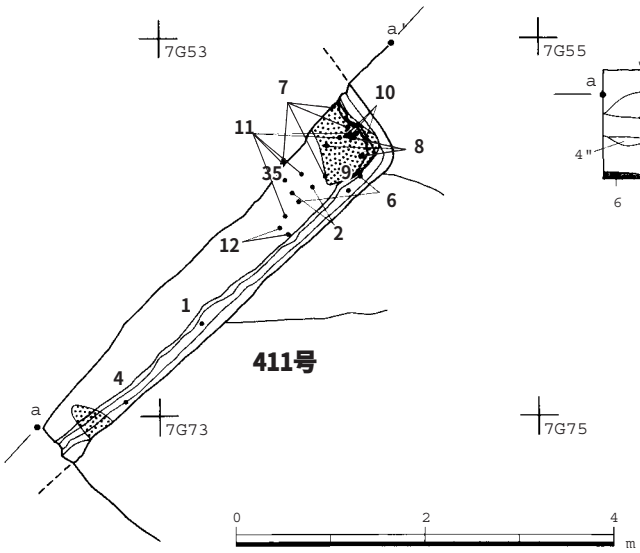
第100図　46号遺構　カマド周辺検出状況



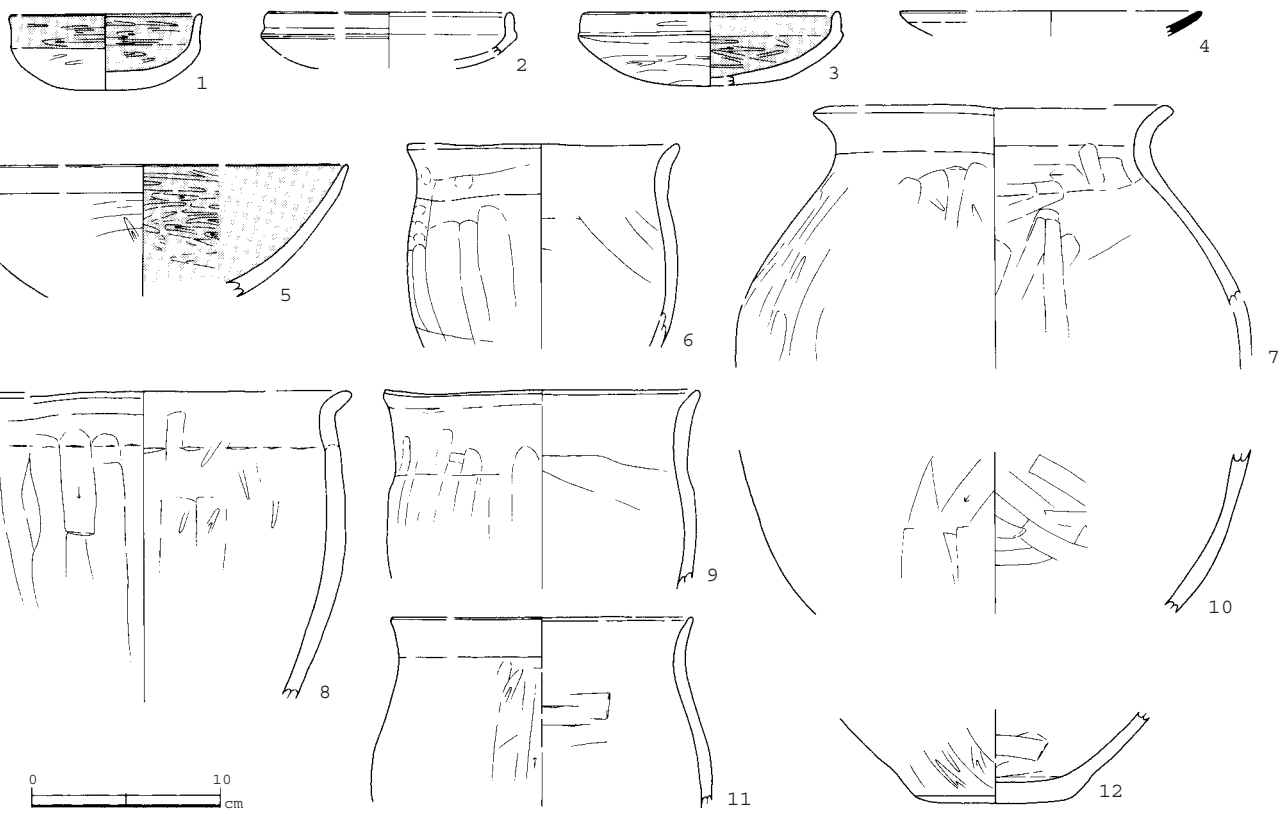
第101図　46号遺構　遺物出土状況および出土遺物１／２

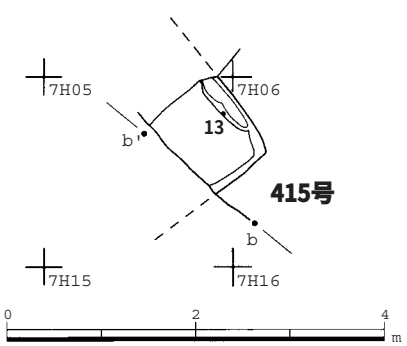


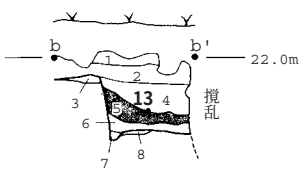
第102図　46号遺構出土遺物２／２



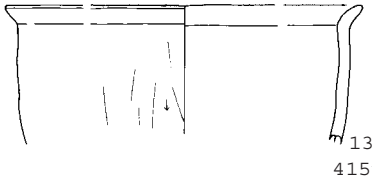
a-a'
1 4/2灰黄褐~3/2黒褐 土 よくしまる
2 2/1黒~3/1黒褐に3/2黒褐の小ぶち多 土 黄褐土ブロック(~1cm) しまる 302号覆土
2' 1層-2層の漸移層 しまる 302号覆土
2'' 2層4層の漸移層 しまる 302号覆土
3 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)混じる、焼土粒少 しまる 302号覆土
4 3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)多 しまる
4' 3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)多、焼土粒ブロック少 しまる
4'' 2/1黒 土 黄褐土ブロック(~2cm)多 しまる
5 2/1黒3/2黒褐4/3にぶ黄褐がマーブル状に混ざる 土 黄褐土ブロック(~5cm)多 しまる
6 2/1黒~1.7/1黒 炭化物多い土 黄褐土ブロック多 若干ゆるい
7 4/3にぶ黄褐 土 3/1黒褐土が多く混じる
8 3/1黒褐~3/2黒褐 土 しまる
9 3/2黒褐 土 しまる
10 4/3にぶ黄褐 土 しまる 包含層~地山漸移層
11 2.5YR明赤褐 焼土ブロック主体土 ゆるい







b-b'
1 3/2黒褐 土 黄褐土粒(~1mm)少 硬い 表土~包含層漸移層
2 3/1黒褐 土 黄褐土粒(~2mm) 硬い 包含層
3 3/2黒褐~4/3にぶ黄褐 土 よくしまる 包含層~地山漸移層
4 3/2黒褐~3/1黒褐 土 黄褐土粒(~3mm)多、ブロック(~2cm)少 焼土状粒微少 よくしまる
5 2/1黒~3/1黒褐 土 黄褐土粒(~3mm)多、ブロック(~2cm)少 炭化物、焼土粒(~3mm) しまる
6 3/1黒褐~3/2黒褐 土 黄褐土粒(~3mm)多、ブロック(~2cm)少 若干しまる
7 3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm) 若干ゆるい 周溝覆土
8 4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック多 若干ゆるい 床面構築土



第103図 411号・415号遺構 検出状況および出土遺物

られる。

415号竪穴住居跡（第103図下）

規模（m）：不明　**主軸方位**：53°／323°　**時期**：古墳時代後期

Ｄ３区西端に検出された、ほとんど全体が調査区外にある方形竪穴住居である。遺物はごく少量の土器が出土しただけで、実測可能個体は土師器甑片（13）のみである。

カマド・柱穴などは検出されなかった。焼土は顕著でなかったが、炭化物が多く含まれると思われる黒い土の堆積が見られるので、廃絶時に火を受けた可能性が考えられる。

遺物からは確定しがたいが、本遺構は古墳後期に属するものと思われる。

209号竪穴住居跡（第104～109図）

規模(m)：5.48×5.6　**柱間**：Ａ－Ｂ3.22　Ｂ－Ｃ3.19　Ｃ－Ｄ3.25　Ｄ－Ａ3.24　**主軸方位**：325°

貯蔵穴：隅円方形／北隅中央寄り　**時期**：古墳時代後期後半

同時期の方形竪穴住居207号の西に位置する。カマドが北辺中央にあり、その脇に貯蔵穴が伴う。床面には周溝がほぼ全周する。主柱穴はＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄで、それぞれに抜き取りのためと思われる掘り込みがある。カマドに正対するＦ・Ｇは出入り口に関係する穴であろう。深さ14㎝のＨは用途不明である。

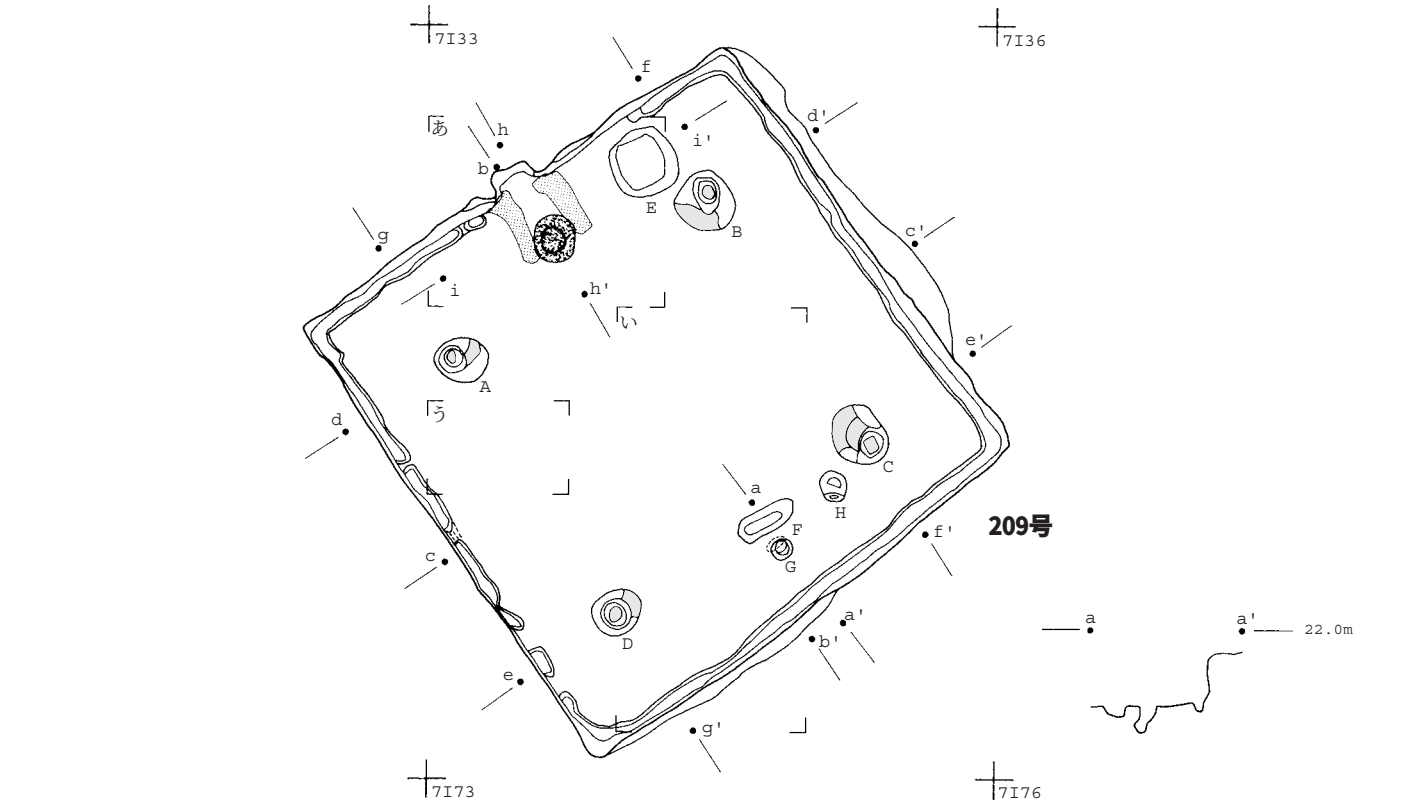
覆土は、壁際を中心に床面から下層にかけて少なからず焼土・炭化物が検出された。それらの上に漸移的な黒褐土層が乗るという堆積で、焼却処分に伴ってある程度までが短期間に埋没し、それから自然に埋積していったという廃絶プロセスが想定できる。柱穴の覆土は、ゆるく黄褐土ブロックを多く含むものであることから埋め戻しの土と考えられ、廃絶時の処置に柱の抜き取りが伴ったことが考えられる。炭化材は、サクラ属（炭１）、イヌガヤ（炭２・３）と同定されている。

カマドはごく短い煙道を持つタイプで、断ち割りの観察によると、袖部分の下半が遺存し、それ以上の部分が崩落している。遺物は、煙道・カマドの内側・両側の外、それぞれに土師器など、多く出土している。また、支脚（41）は向かって左側から検出された。これらの遺物の出土状況からすると、竪穴廃絶時に使用状態にあったとは思えない。廃絶に伴い、そのようにととのえられたと考えるのが自然である。また、一括取り上げ遺物ではあるが、貯蔵穴より球形土製品２個（１・２）と立方体土製品１個（３）が得られており、その覆土がカマド材起源の土を多く含む様子からも、廃絶時は貯蔵穴が開口していたと考えられる。これらから、竪穴自体の廃絶に伴ってカマド近辺において、何らかの儀礼的活動の行われたことが推察される。

以上から、本遺構の廃絶過程には、カマド処置（儀礼活動）・柱抜き取りを含む竪穴廃絶の活動→焼却処分という流れが推察できる。

遺物は土師器が主体で、ほかに須恵器、土玉（36～40・44）、砥石（42・45）、ミニチュア土器（43）、鉄滓（46）が出土した。土師器には、内外面の黒色処理される小型器種が見られる。

本遺構は出土遺物から古墳後期後半に属すると思われる。

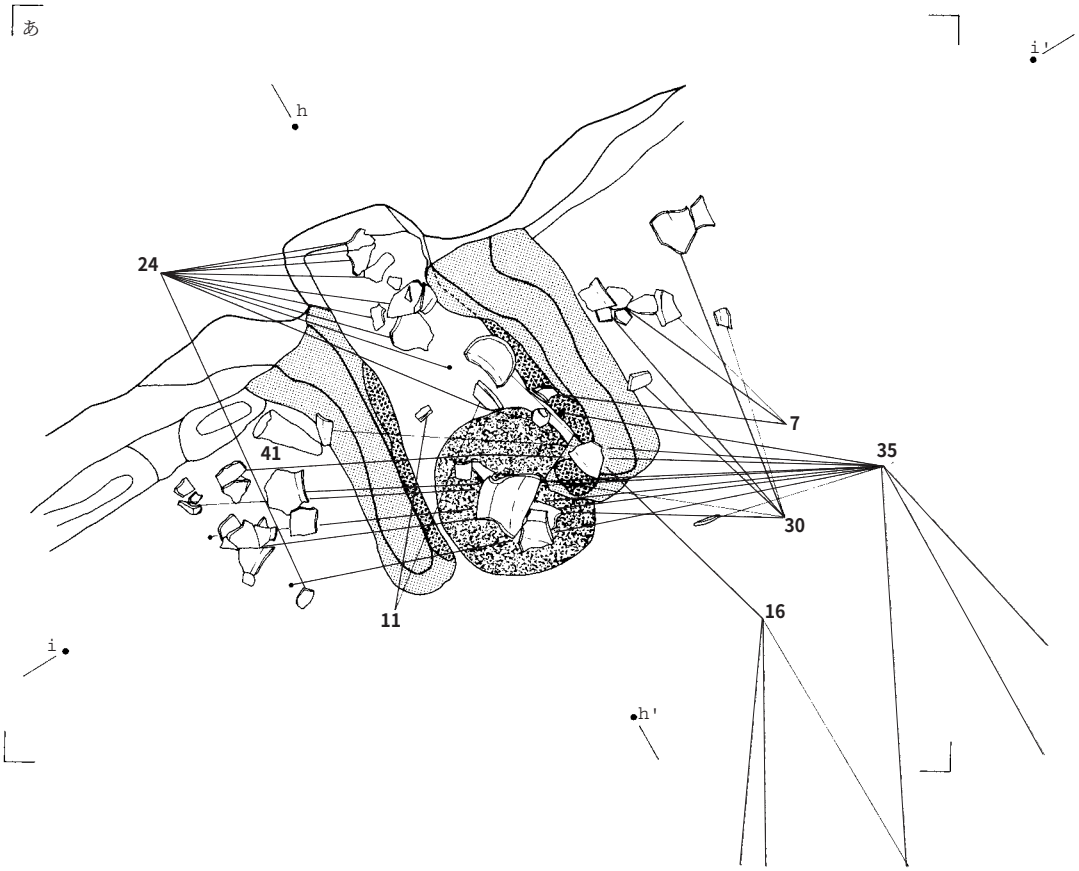


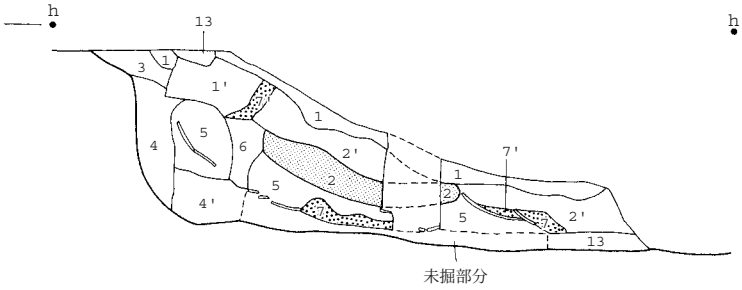
b-b' c-c'
1 3/1黒褐~2/1黒に4/2灰黄褐の小ぶち(~2cm)混じる 土 黄褐土粒(~2mm)多、焼土状粒(~1mm)、炭化物(~2mm)混じる しまる
1' 4/2灰黄褐3/2黒褐の小ぶちが大量に混じる1層 しまる
1'' 3/1黒褐/1黒に4/2灰黄褐~3/2黒褐土の小ぶち少混じる 土 1層~2層漸移層、黄褐土粒(~3mm)多、炭化物粒微少 しまる
1''' 3/1黒褐/2黒褐 土 黄褐土粒(~2mm)多、まれに炭化物 しまる
2 3/1黒褐~3/2黒褐に4/2灰黄褐~3/2黒褐の小ぶちが少 土 黄褐土粒(~3mm)・焼土状粒(~3mm)少 しまる
2' 2層~3層の漸移層、焼土状粒が少なく、小ぶちが多い2層 しまる
3 3/2黒褐 土 炭化物ブロック・焼土ブロック・2.5Y浅黄粘質土ブロック・黄褐土ブロック多 若干しまる
3' 3/2黒褐3/1黒褐 土 炭化物以外のブロックが小さく少ない3層 若干しまる
4 3/2黒褐~4/2灰黄褐 土 黄褐土ブロック(~3cm)多、焼けた粘質土ブロック少、焼土粒・炭化物粒微少 若干しまる
4' 3/1黒褐強い4層
5 3/1黒褐~2/1黒 土 黄褐土粒(~3mm)多、焼土粒・炭化物粒(~2mm)少 しまる
6 2/1黒 土 黄褐土粒(~3mm)多、焼土粒・炭化物粒(~2mm)5層より少ない 若干しまる
7 3/2黒褐~4/2灰黄褐 土 黄褐土粒(~3mm)少 若干しまる
8 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(~2cm)多焼けたハードロームブロック(~2cm)混じる 若干しまる
9 3/2黒褐 土 黄褐土粒(~5mm)混じる 若干しまる
9' 若干粘るい9層
10 4/1にぶ黄褐~3/2黒褐がマーブル状に混じる 土 しまる
11 3/2黒褐に4/1にぶ黄褐混じる 土 黄褐土ブロック多、焼土粒(~3mm)少 しまる
12 3/1黒褐~2/1黒に4/2灰黄褐の小ぶち少 土 黄褐土粒(~5mm)多、まれに粘質土ブロック(~1cm)しまる
13 2/1黒 炭化物主体土 黄褐土粒(~1mm)、焼土粒(~1mm) 若干しまる
13' 少淡い13層
14 4/2灰黄褐~3/2黒褐 土 黄褐土粒(~3mm)多、焼土粒・炭化物皆無 しまる
15 3/2黒褐 土 黄褐土粒(~2mm)少、焼土粒・炭化物皆無 若干しまる
16 3/2黒褐~3/1黒褐 土 黄褐土粒(~2mm)少、焼土粒・炭化物皆無 若干ゆるい
17 3/1黒褐~3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)まれ、焼土粒微少 若干ゆるい
18 黄褐土ブロック
19 炭化物ブロック主体土 若干粘質土混じる
20 ロームブロック主体土

d-d'
1 3/2黒褐~3/3暗褐 土 黄褐土粒(~5mm)多、焼土微粒・炭化物微粒少 若干ゆるい
2 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(~2cm)まれ 若干ゆるい
3 4/1にぶ黄褐~3/3暗褐 土 黄褐土ブロック混じる ゆるい
4 3/1黒褐~3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)多
4' 2層~3層の漸移層、黄褐土ブロック(~2cm)まれ

e-e'
1 3/1黒褐~3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~2cm)多焼土粒・炭化物粒(~2mm)少 ゆるい
2 3/2黒褐~4/1にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)混じる ゆるい
3 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(~2cm)多焼土粒・炭化物粒少 若干ゆるい
4 4/1にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック(~3cm)多 ゆるい

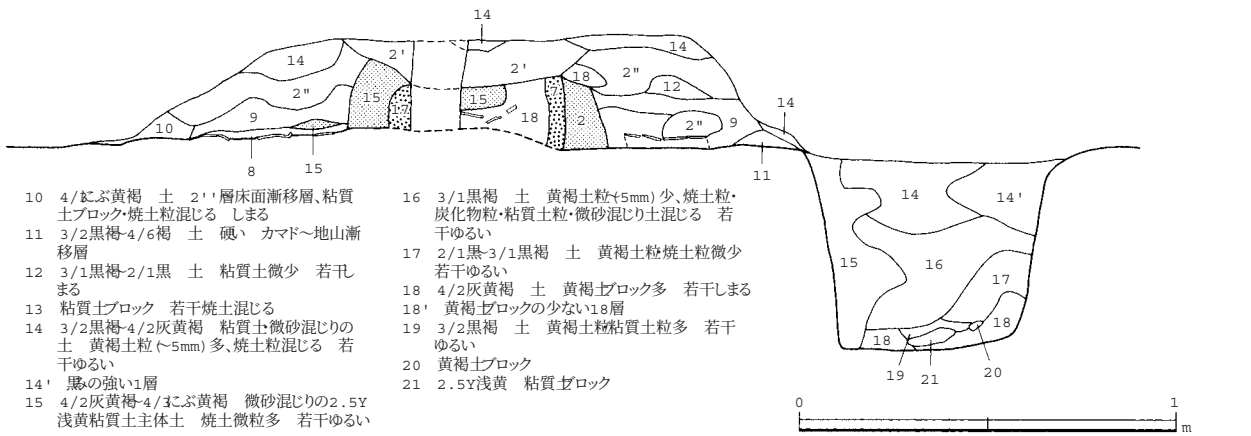
第104図　209号遺構





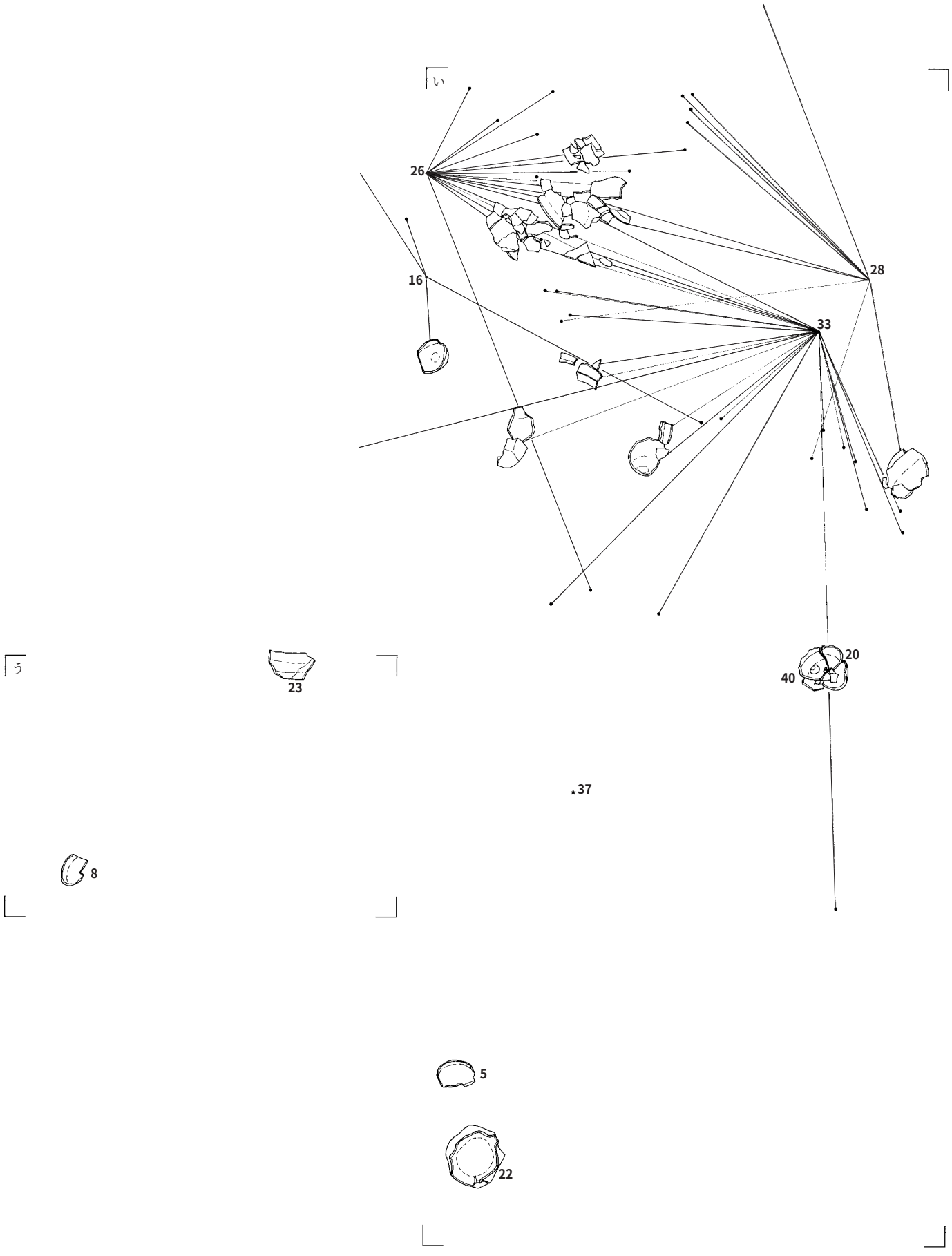
h-h' i-i'

1 3/2黒褐に浅黄混じる 粘質土・微砂混じりの土 焼土少 しまる
1' 3/1黒褐1層2層の漸移層、黒ずんだ2'層 しまる
2 2.5Y浅黄 粘質土主体土 しまる カマド天井崩落・袖部
2' 焼土が多く混じる2層
2'' 黒褐土が多く混じる2層 よくしまる
3 3/2黒褐 土 しまる 覆土～地山漸移層
4 4/4褐 土 しまる 覆土～地山漸移層
4' 黒褐土が多い4層 若干しまる
5 3/1黒褐 土 2.5YR赤褐焼土粒多若干しまる
6 4/3にぶい黄褐 土 浅黄粘質土・焼土ブロック多 若干しまる
7 2.5YR赤褐 焼土 しまる
7' 焼土が弱い7層
8 3/1黒褐～2/1黒 土 焼土粒(～3mm)、粘性あり 若干しまる
9 3/1黒褐～3/2黒褐 土 焼土粒(～5mm)多、粘質土ブロック(～1cm)多 黄褐土ブロック(～2cm)まれ 若干しまる

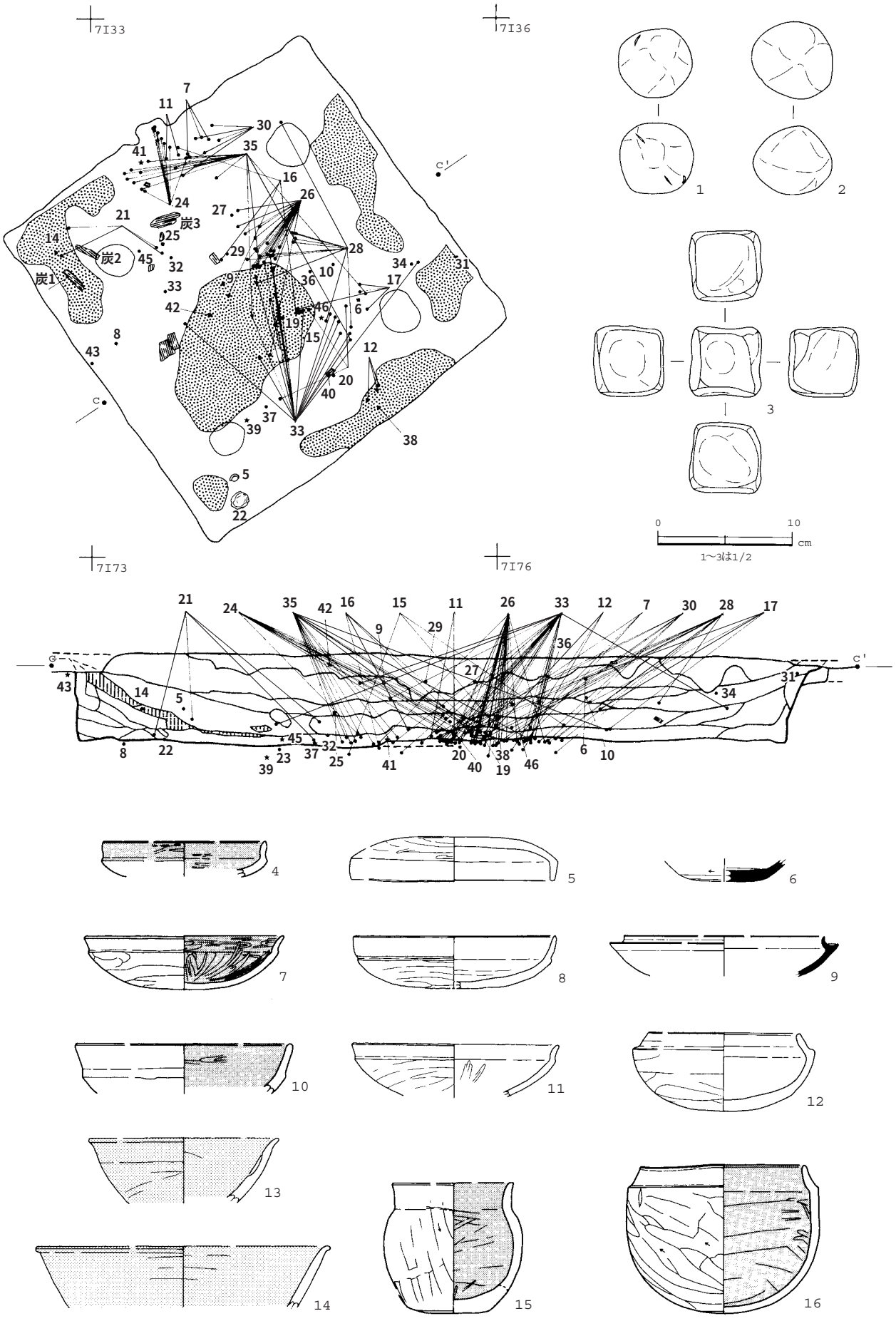


10 4/3にぶい黄褐 土 2''層床面漸移層、粘質土ブロック・焼土粒混じる しまる
11 3/2黒褐～4/6褐 土 硬い カマド～地山漸移層
12 3/1黒褐～2/1黒 土 粘質土微少 若干しまる
13 粘質土ブロック 若干焼土混じる
14 3/2黒褐～4/2灰黄褐 粘質土・微砂混じりの土 黄褐土粒(～5mm)多、焼土粒混じる 若干ゆるい
14' 黒みの強い1層
15 4/2灰黄褐～4/3にぶい黄褐 微砂混じりの2.5Y浅黄粘質土主体土 焼土微粒多 若干ゆるい
16 3/1黒褐 土 黄褐土粒(～5mm)少、焼土粒・炭化物粒・粘質土粒・微砂混じり土混じる 若干ゆるい
17 2/1黒～3/1黒褐 土 黄褐土粒焼土粒微少 若干ゆるい
18 4/2灰黄褐 土 黄褐土ブロック多 若干しまる
18' 黄褐土ブロックの少ない18層
19 3/2黒褐 土 黄褐土粒粘質土粒多 若干ゆるい
20 黄褐土ブロック
21 2.5Y浅黄 粘質土ブロック

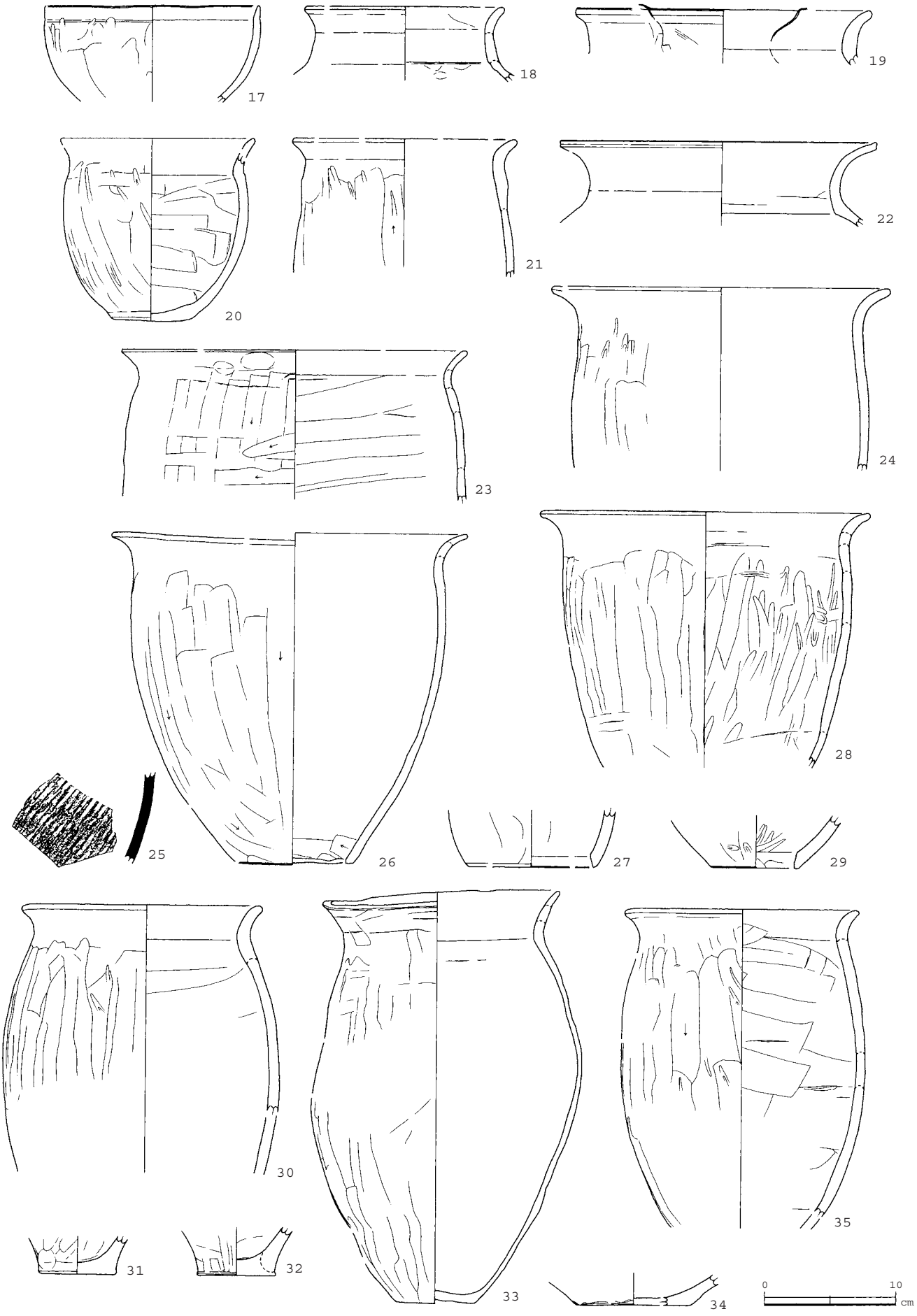
第105図 209号遺構 カマド周辺



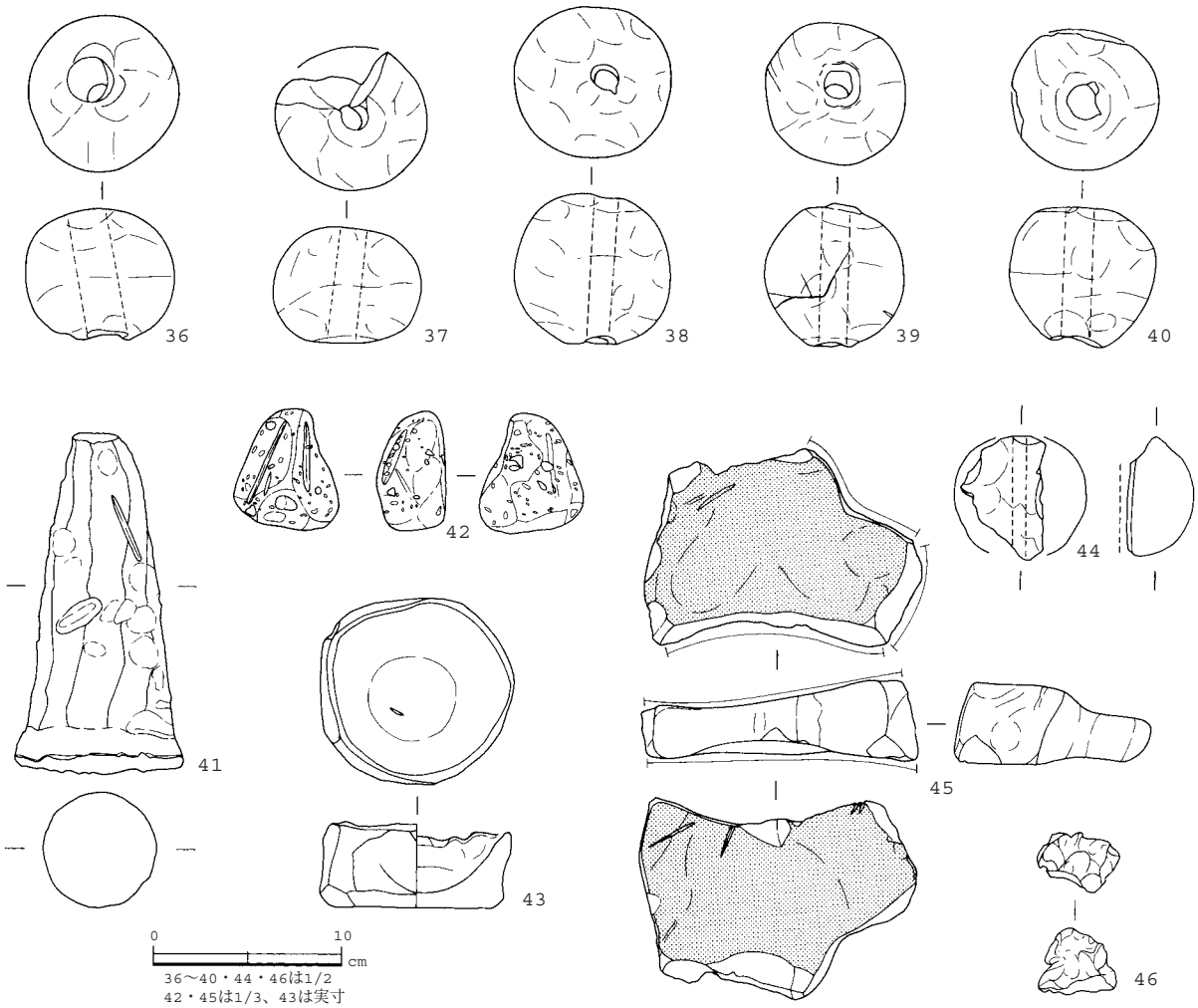
第106図　209号遺構　遺物出土状況



第107図　209号遺構　焼土・炭化材・遺物検出状況および出土遺物１／３



第108図　209号遺構出土遺物２／３



第109図　209号遺構出土遺物３／３

406号竪穴住居跡（第110・111図）

規模（m）：4.88×5.12？

柱間：A－B2.16　B－C1.98　C－D2.09　D－A2.11

A′－B′2.58　B′－C′2.29　C′－D′2.34　D′－A′2.35

A－B″1.92　B″－C1.97

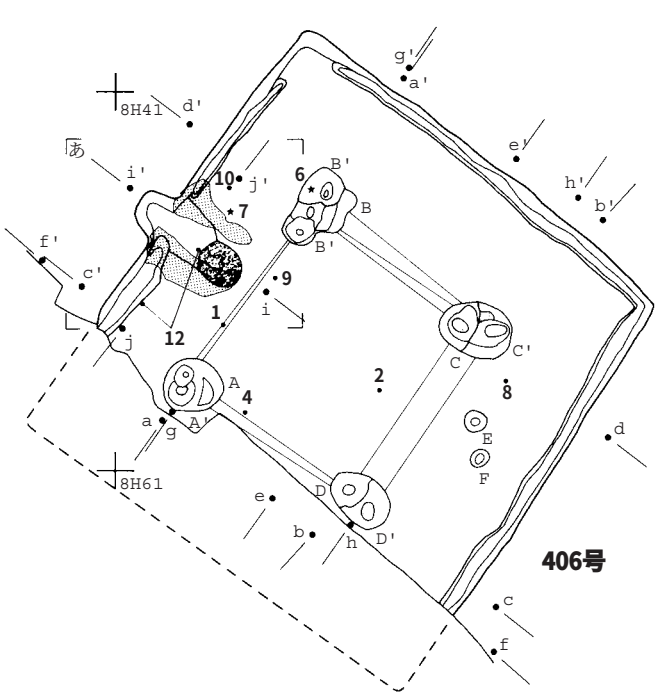
主軸方位：307°　**貯蔵穴**：なし　**時期**：古墳時代後期

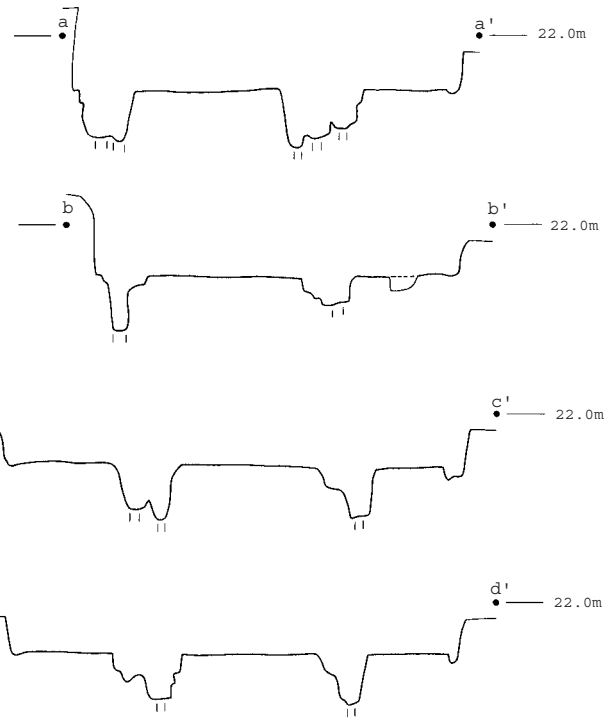
Ｄ３区西端に位置する方形竪穴住居で、西辺が調査区外にある。底面が床と同レベルにあるかたちの短い煙道を持つカマドが北西辺中央に構築される。貯蔵穴は検出されなかった。

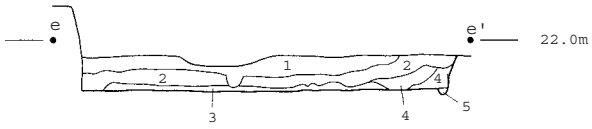
床面からは、A－B－C－D・A－B″－C－D・A′－B′－C′－D′という三つの組み合わせの主柱穴と、出入り口ピットの可能性があるＥ・Ｆ（深さ16・10㎝）、壁際には周溝が検出された。A－B－C－Dの柱間からすると検出時の竪穴のかたちはこれと不釣り合いなので、A′－B′－C’－D′に建て替えられた時点で、竪穴の南東方向への拡張が行われたと考えられる。この見方が正しければ、A－B″－C－Dの組み合わせはこの過渡期に当たると思われる。

覆土は上層に向かって黒くなる漸移的な黒褐色土で、焼土・炭化物は、かたまっては検出されなかった。このことから、積極的に廃絶時に焼却処分が行われたとは言えない。

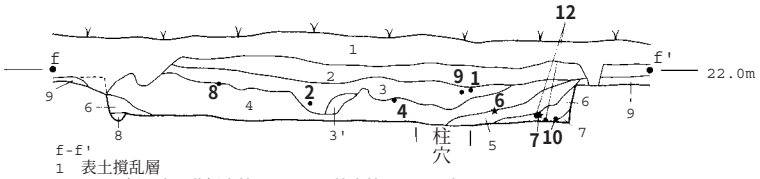
柱穴の覆土には、平面・断面で柱痕跡が見られない上、黄褐土ブロックのゆるい堆積が認められた



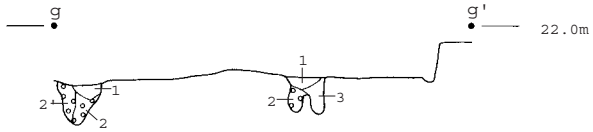




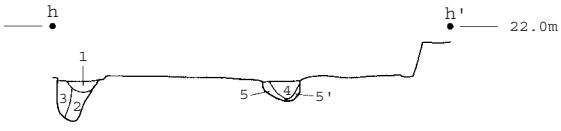
e-e'
1 3/1黒褐に3/2黒褐の小ぶち多　土　黄褐土ブロック(～1cm)少　しまる
2 3/2黒褐　土　黄褐土粒・ブロック(～3cm)大量、焼土粒(～1mm)少　しまる
3 3/2黒褐～3/1黒褐　土　黄褐土ブロック(～1cm)混じる　しまる　覆土～地山漸移層
4 2/1黒　土　黄褐土ブロック(～2cm)少　しまる
4' 3/1黒褐　土　若干淡い4層　しまる
5 4/3にぶ黄褐　土　黄褐土ブロック(～1cm)　若干ゆるい



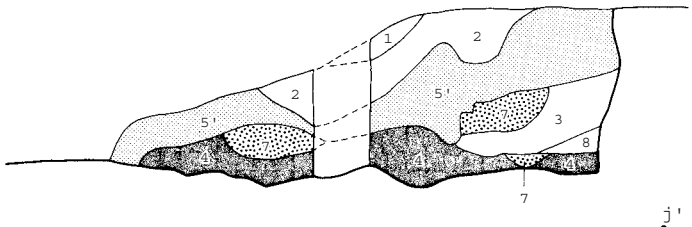
f-f'
1 表土撹乱層
2 3/1黒褐　土　黄褐土粒(～2mm)・焼土粒(～5mm)少　しまる
3 a-a'の1層と同じ
3' 3層～4層の漸移層
4 a-a'の2層と同じ
5 3/2黒褐～4/2灰黄褐　土　2.5Y浅黄粘質土ブロック(～3cm)大量、焼土粒(～1mm)少　しまる
6 3/1黒褐～2/1黒　土　黄褐土ブロック(～2cm)多、焼土粒(～2mm)・炭化物少　しまる
7 3/2黒褐～4/2灰黄褐　土　黄褐土ブロック(～1cm)少　若干しまる
8 3/2黒褐～4/3にぶ黄褐　土　黄褐土粒(～5mm)多　若干ゆるい
9 包含層～ソフトローム漸移層



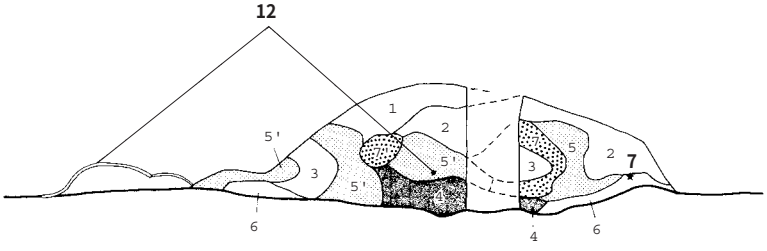
g-g'
1 3/1黒褐　土　黄褐土ブロック(～2cm)多　若干しまる
2 4/4褐　土　黄褐土ブロック(～5cm)多　ゆるい
2' 5/6黄褐　ロームブロック(～10cm)主体土　しまる
3 4/3にぶ黄褐～3/2黒褐　土　黄褐土ブロック(～8cm)少、黄褐土粒(～5mm)多　若干しまる



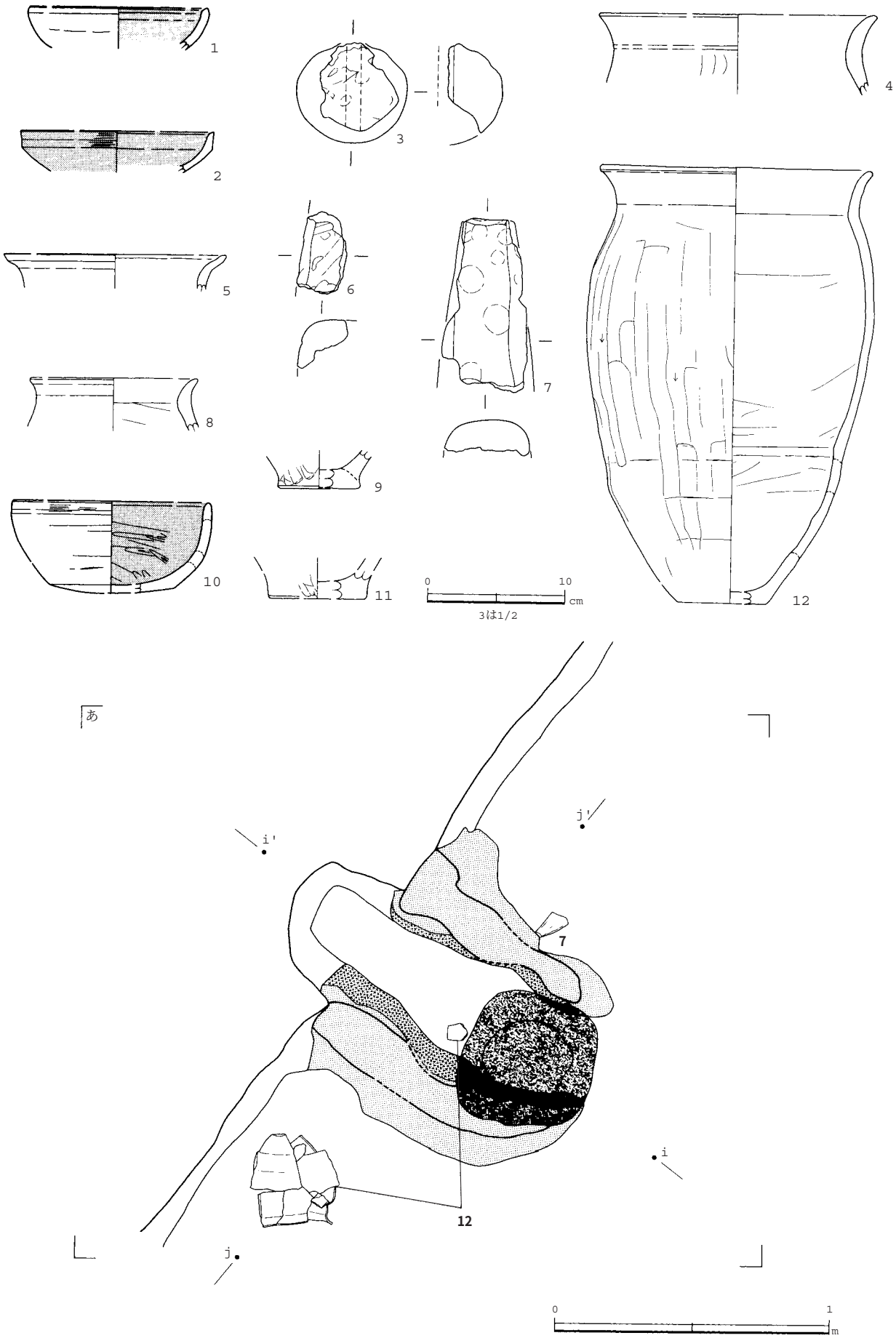
h-h'
1 3/1黒褐～2/1黒　土　黄褐土ブロック(～3cm)・焼土粒(～3mm)少　若干ゆるい
2 3/2黒褐～3/1黒褐　土　黄褐土ブロック(～1cm)多　若干ゆるい
3 4/3にぶ黄褐　土　黄褐土ブロック(～1cm)少　若干ゆるい
4 C-C'の1層と同じ
5 3/2黒褐～4/4褐　土　黄褐土粒・ブロック(～3cm)多　若干ゆるい
5' 黄褐土ブロックの多い2層　若干しまる



i-i' j-j'
1 4/2灰黄褐　土　粘質土ブロック(～2cm)多　しまる
2 3/1黒褐　土　粘質土粒(～5mm)、赤褐焼土ブロック(～1cm)少、黄褐土粒少　しまる
3 3/1黒褐～2/1黒　土　黄褐土粒(～3mm)・粘質土(～3mm)少　ゆるい
4 2/1黒　土　焼土粒(～5mm)・炭化物粒少　若干ゆるい
5 2.5Y浅黄　粘質土　焼けた部分が少しある　しまる
5' 3/1黒褐土が多く混じる5層　しまる
6 5/6黄褐　土よくしまる　床面構築土に近い
7 2.5YR5/8明赤褐　焼けた粘質土　黒褐土少し混じる　しまる
7' 黒褐土が多い7層　しまる
8 2/1黒～1.7/1黒　土　若干ゆるい



第110図　406号遺構



第111図　406号遺構　カマド周辺および出土遺物

ことから、柱抜き取りとその後に埋め戻しが行われた可能性も考えられる。Ｂ′・Ｃ′には抜き取りのための掘り込みと思われる跡があることもこの想定を支持する。ただ、黄褐土のゆるい部分は、柱のなくなった跡に元々の柱穴覆土が崩れたものかもしれないので、柱が立ち腐れたものの痕跡を残さなかっただけという可能性も否定できない。

カマドは、袖部分とその間に落ち込んだ天井部分が検出された。火床から煙道に向かう部分は低くなっており、突き当たりでほぼ垂直に立ち上がる。カマドの向かって左側にはほぼ完形に復元できた甕、そして右側の袖部分からはそこに乗るかたちで支脚が出土した。廃絶に際し、このようにととのえられた可能性が高い。

遺物は、ほとんどが土師器で、他に支脚片（６・７）、土玉片（３）が出土した。床面下からは、混入した縄文時代の石鏃（第８図１）が検出されている。土師器には、黒色処理のされた小型器種と長胴の甕が存在する。

本遺構は、竪穴の形状と遺物から、古墳時代後期に属すると考えられる。

404号竪穴住居跡（第112・113）

規模（m）：4.6四方　**柱間**：Ａ－Ｂ2.32　Ｂ－Ｃ2.44　Ｃ－Ｄ2.40　Ｄ－Ａ2.36　**主軸方位**：332°
貯蔵穴：なし　**時期**：古墳時代後期後半

Ｄ３区の北寄りに位置し、302号・403号と切り合う方形竪穴住居である。竪穴西辺が撹乱される。長い煙道を持つカマドが北辺の中央に構築されている。煙道部分が403号と切り合うが、覆土の色調が漸移的だったため、切り合い関係は確定できなかった。302号道路跡には明らかに切られる。覆土の上位に302号底面が位置するので、竪穴がある程度埋没してから構築されたものと考えられ、両遺構には大きい時間差が存在したものと思われる。

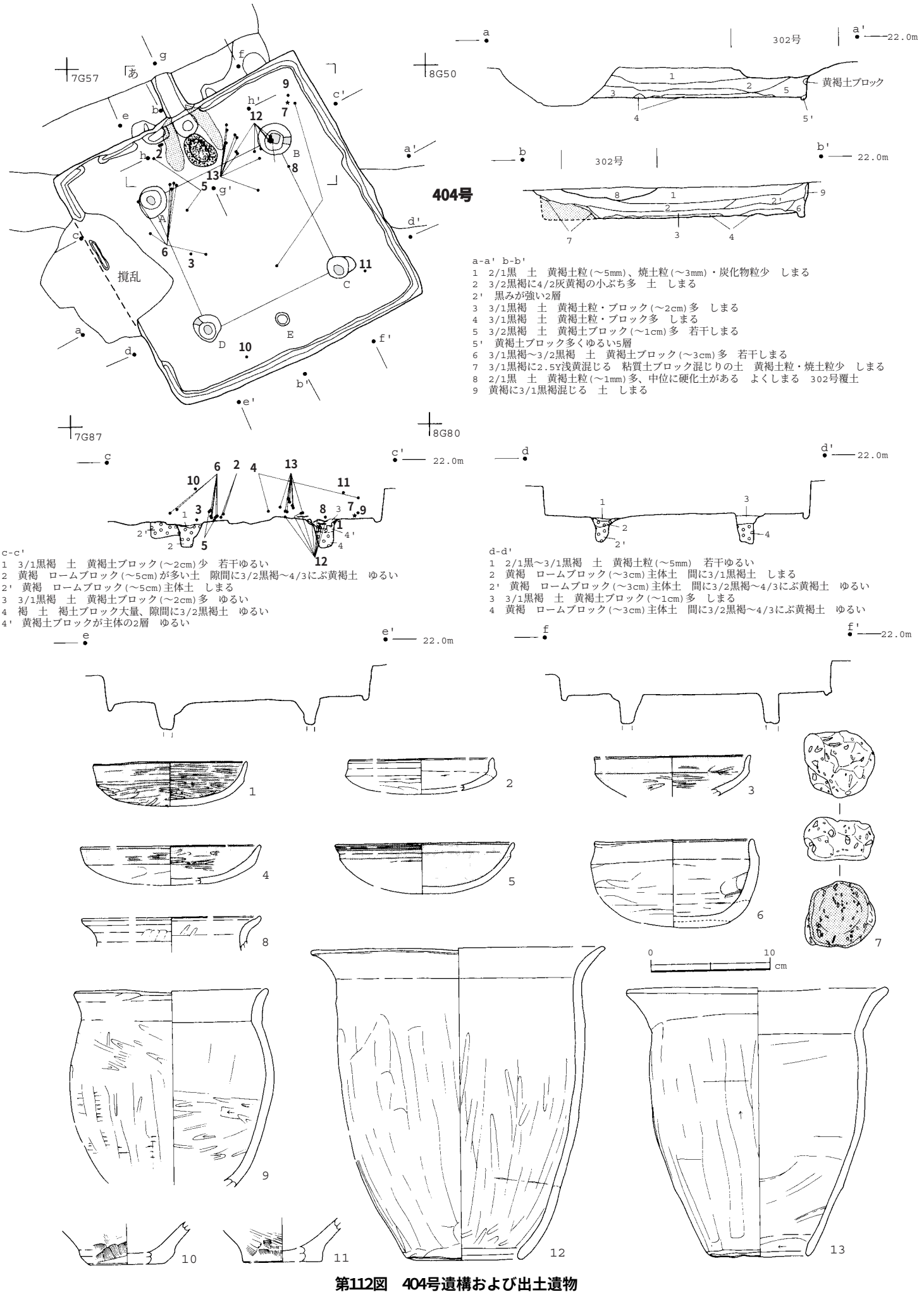
床面には主柱穴Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ、出入り口ピットと考えられるＥ（深さ６㎝）が検出された。

カマドは、両側の袖部分と、その間に天井部分が崩れ落ちたと思われる状況が確認できた。支脚は出土しなかった。カマド直近には遺物がそれほど見られなかったが、北柱穴に落ち込むかたちで１個体の甑（12）とさらにその下に杯（１）、北隅にも１個体の土師器甕（９）が出土し、それぞれがほぼ完形に復元できた。竪穴覆土に焼土が顕著であるわけでもないので、確定はできないが、本遺構の最期には、不時の廃絶というよりはむしろ、意図的な廃絶過程があり、その一環で土器が遺棄されたと考えた方が自然と思われる。

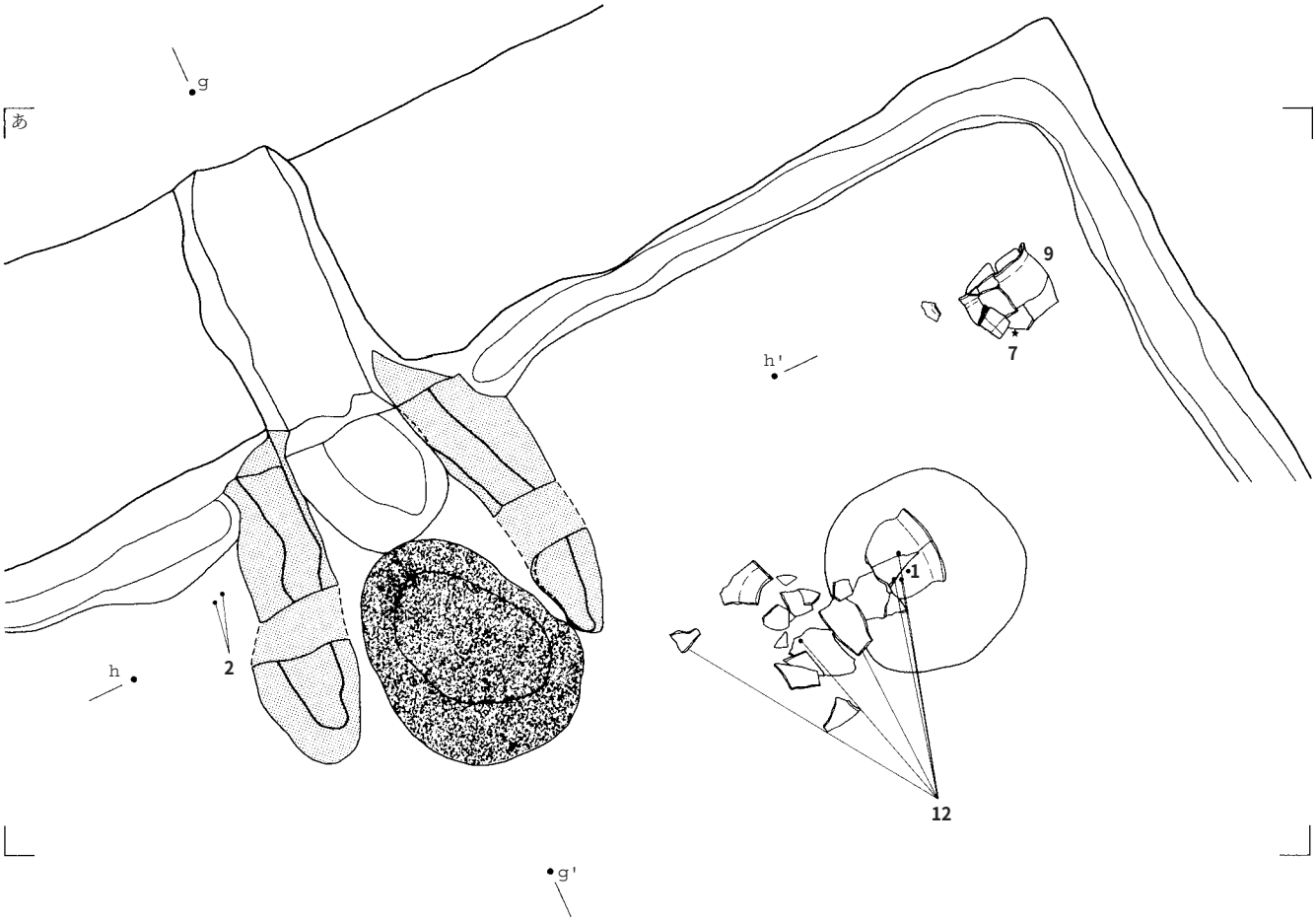
上述の通り、北柱穴には覆土に完形の土器が落ち込んだかたちで検出されている。加えて、各柱穴覆土は平面・断面の観察によると柱の痕跡を持たないので、明確な抜き取りのための掘り込みが検出されていないものの、廃絶時には開口しており、若干埋め戻されたという可能性が考えられる。

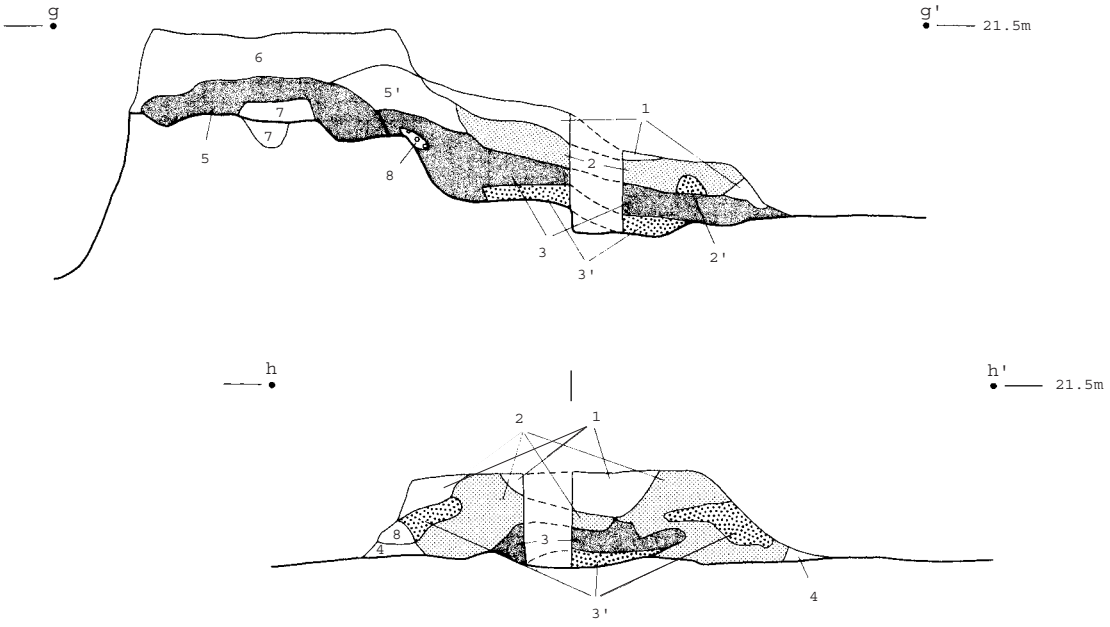
遺物は土師器がほとんどで、他には磨り面を持つ軽石（７）が１点出土しただけである。土師器には、黒色処理の施される小型器種が見られる。

本遺構は、竪穴と遺物の形状から古墳時代後期後半に属すると考えられる。



第112図　404号遺構および出土遺物





g-g' h-h'
1 3/1黒褐～2/1黒 土 黄褐土粒(～5㎜)・焼土粒(～5㎜)多、粘質土粒少 若干しまる
2 2.5Y浅黄 粘質土主体土 黒褐土が混じる、炭化物・焼けた部分あり しまる
2' 焼けた粘質土ブロック しまる
3 2/1黒 灰?混じりの土 焼土粒(～5㎜)多、黄褐土ブロック(～2㎝)少 ゆるい
3' 2.5YR赤褐焼土ブロック(ハードロームが焼けたもの)が多く混じる3層 ゆるい 火床
4 5/6黄褐 土 硬い 床面構築土と同じ
5 2/1黒 土 3/2黒褐土が混じる しまる
5' 3層～5層の漸移層 若干ゆるい
6 3/1黒褐 土 焼土・粘質土・黄褐土(～2㎜)少 しまる
7 黄褐 ロームブロック主体土 3/2黒褐土混じる しまる
8 黄褐 ロームブロック

0 1 m

第113図 404号遺構 カマド周辺

204号竪穴住居跡（第114～117図）

規模（m）：3.9×3.8　**柱間**：A－B1.88　B－C1.58　C－D1.54　D－A1.87

主軸方位：324°　**貯蔵穴**：なし　**時期**：古墳時代後期後半

調査区南部に位置する、方形竪穴住居である。北辺ほぼ中央に煙道の短いカマドが築かれ、反対側に出入り口ピットがある。床面は、壁際に周溝が巡る。主柱穴がA・B・C・D、出入り口ピットがEあるいはF（深さ22・14㎝）と考えられる。貯蔵穴は見あたらない。

覆土は、焼土・炭化物が顕著でなく、下層の壁際に少し見られる程度であった。覆土の中層以上は漸移的な厚い層が認められるので、床面から下層にかけての炭化物を積極的に評価すれば、廃絶段階に焼却処分の伴なった短期間での人為的な埋積があり、その後、緩やかに埋没していったというプロセスを想定することができる。柱穴の覆土には明瞭な人為的な埋積が確認できないうえ、また、抜き取りのための掘り込みも見受けられないので、もし廃絶処理が行われたにしても、柱抜き取りは行われず、放置されたか根元で切断されたことも考えることができる。

カマドは、粘質土が広がった感じで検出され、元の形状が分かりにくい遺存状態であった。袖部分の下方一部が遺存しており、そこに天井部・内壁と見られる焼土が混じるという状況である。カマドのひしゃげた様子が想定できる。遺物は、燃焼部上方と煙道から、ほぼ完全に復元できた甕（3）と甑（4）が出土している。これらは、使用時の遺物として見ることも可能だが、支脚が検出されなかったこととから推察すると、カマドの廃絶に際してそのようにととのえたものと思われる。以上の所見から、この竪穴住居は廃絶の過程で、カマドへの処置と焼却処分が行われたものと思われる。

遺物は、土師器が主体で、他に須恵器片、鉄滓（26）、混入品の磨製石器（石斧？）（25）が出土している。土師器は、黒色処理の施される小型器種と長胴の甕が見られた。

本遺構は、遺物と遺構の形状から古墳後期後半に属すると思われる。

27号竪穴住居跡（第118～120図）

規模（m）：5.8×6.1　**柱間**：A－C3.12　B－C3.16　**主軸方位**：325°

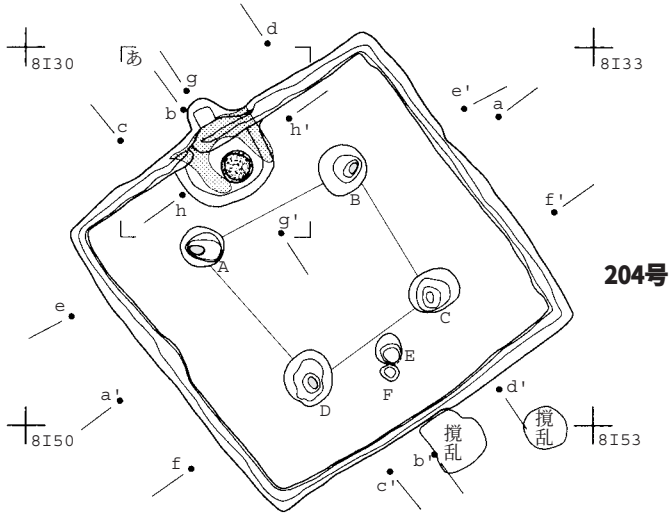
貯蔵穴：不明　**時期**：古墳時代後期

北東側を大きく撹乱された方形竪穴住居である。主柱穴は４本のうちA・B・Cの３本が遺存する。柱穴には、それぞれに抜き取りのためと思われる掘り込みを伴なうが、覆土に柱痕が認められるものもあるので、抜き取りと確定はできない。竪穴の覆土も、炭化物が多い黒色層と焼土層が中位に見られるので、廃絶作業に伴って焼却処分が行われたとは言い切れない。ただ、南東部の床面近くにL字形に焼土が堆積していることを積極的に評価することで、覆土中位の焼土・黒色層までが焼却処分にともなう一連の土層であると考えることもできる。

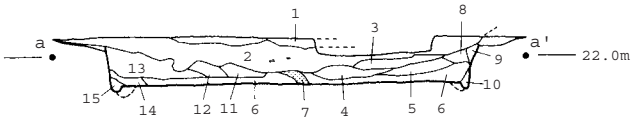
カマドは大半が壊されているが、袖の広がりの一部が北辺西寄りに遺存する。床面には、壁際に周溝が巡り、東西方向の間仕切りと考えられる溝も検出された。また、柱に囲まれた空間を中心に若干硬化した床面が見られた。

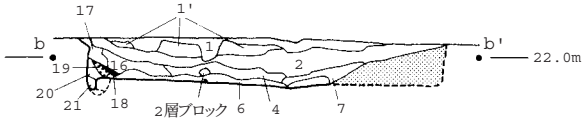
遺物は、竪穴の規模が大きいからか前後の時期の土器が多く混入していたが、床面近くで出土したのは、黒色処理の施された模倣杯（10）・鉢（26）などである。他には、鉄製品（38・39）、支脚片（40）が出土している。土師器甕（35）の外面の破線部内には吹きこぼれ状の炭化物が付着していた。

本遺構は、遺物から古墳後期に属すると考えられる。

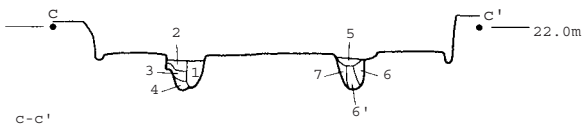


204号

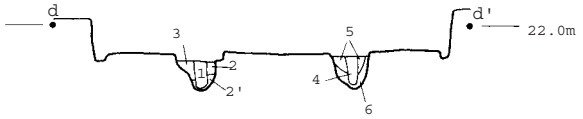


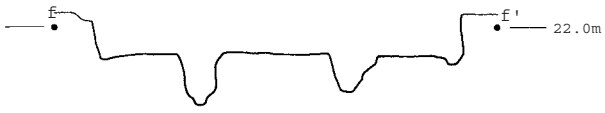


a-a' b-b'
1 3/1黒褐~4/2灰黄褐のぶち 土 しまる
1' 1層2層の漸移層、あまりぶちが入らない1層
2 3/1黒褐 土 黄褐土粒(~3mm)、焼土状粒(~2mm)、炭化物粒微少 しまる
3 3/1黒褐~3/2黒褐 土 黄褐土粒(~5mm)、焼土状粒(~1mm)少 若干しまる
4 3/2黒褐~4/3にぶい黄褐 土 黄褐土粒(~5mm)少、焼土状粒(~1mm)少 しまる
5 3/1黒褐~3/2黒褐の小ぶち 土 黄褐土粒(~3mm)多、焼土状粒(~1mm)少、炭化物粒微少 しまる
6 2/1黒~3/1黒褐 土 黄褐土粒(~3mm)・焼土粒(~2mm)少、炭化物粒(~3mm)少 若干ゆるい
7 2.5Y浅黄 粘質土主体土 層2/1黒土が混じる 若干しまる
8 3/1黒褐 土 黄褐土粒(~3mm)、焼土粒(~2mm)少 しまる
9 3/2黒褐~4/3にぶい黄褐 土 マーブル状に混じる 若干ゆるい
10 3/2黒褐~4/2灰黄褐 土 黄褐土粒(~5mm)、ブロック混じる ゆるい
11 2/1黒 土 黄褐土ブロック(~1cm)少、焼土粒・炭化物粒微少 しまる
12 3/2黒褐 土 黄褐土粒(~3mm)、粘質土少、焼土粒(~2mm)少 若干しまる
13 3/2黒褐~3/3暗褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)多、焼土粒(~3mm)少 若干しまる
14 3/1黒褐 土 黄褐土粒(~3mm) 若干しまる
15 3/2黒褐 土 黄褐土ブロック多 ゆるい
16 4/3にぶい黄褐に3/1黒褐が混じる 土 黄褐土粒(~5mm)少、焼土粒・炭化物粒微少 しまる
17 2/1黒~3/1黒褐 土 黄褐土粒(~5mm)少 しまる
18 1.7/1黒3/2黒褐が混じる 炭化物主体土 ゆるい
19 2/1黒に5YR赤褐が混じる 焼土が多く混じる土 若干ゆるい
20 2/1黒~3/1黒褐 土 黄褐土粒(~3mm)少 若干ゆるい
21 3/2黒褐~2/1黒 土 黄褐土粒多く混じる ゆるい

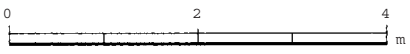


c-c'
1 3/1黒褐~3/2黒褐 土 黄褐土粒(~3mm) ゆるい
2 4/6褐 土 黄褐土ブロック(3cm以上) 硬い
3 4/6褐 土 黄褐土ブロック(1~3cm) 若干ゆるい
4 5/6黄褐 土 ゆるい
5 3/2黒褐 土 黄褐土粒(~2mm) 若干しまる
6 3/1黒褐 土 ゆるい
6' 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック混じる 若干ゆるい
7 4/6褐 土 黄褐土ブロック多 若干しまる

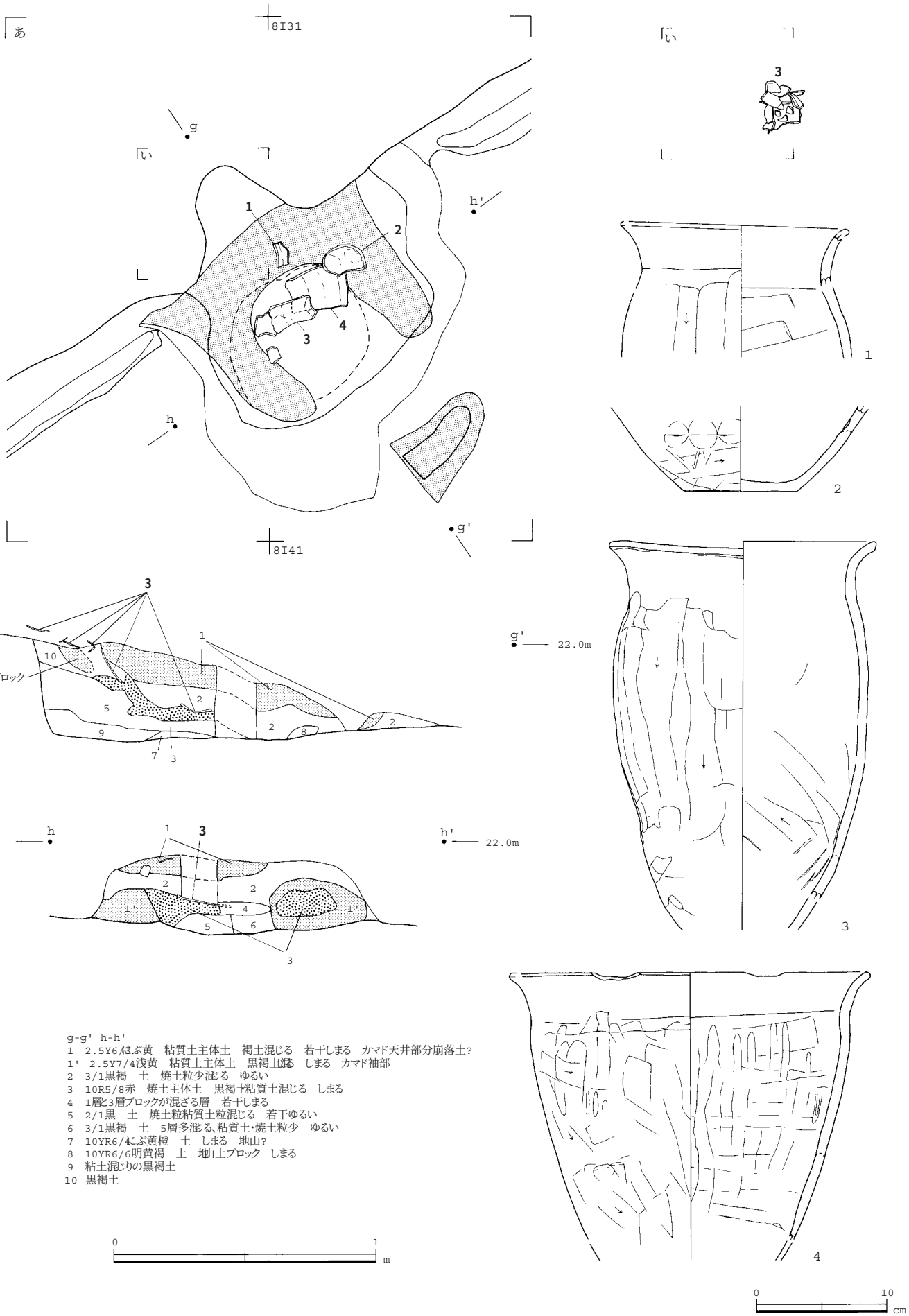




d-d'
1 5/2灰黄褐 粘土が多く混じる土 ゆるい
2 4/3にぶい黄褐 土 若干しまる
2' 4/3にぶい黄褐 土 黄褐土ブロック(1~2cm) ゆるい
3 4/6褐 土 黄褐土ブロック多 硬い
4 3/1黒褐~3/2黒褐 土 黄褐土粒(1~2mm)少 ゆるい
5 4/3にぶい黄褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)混じる 若干しまる
6 3/2黒褐 土 黄褐土ブロック少 ゆるい

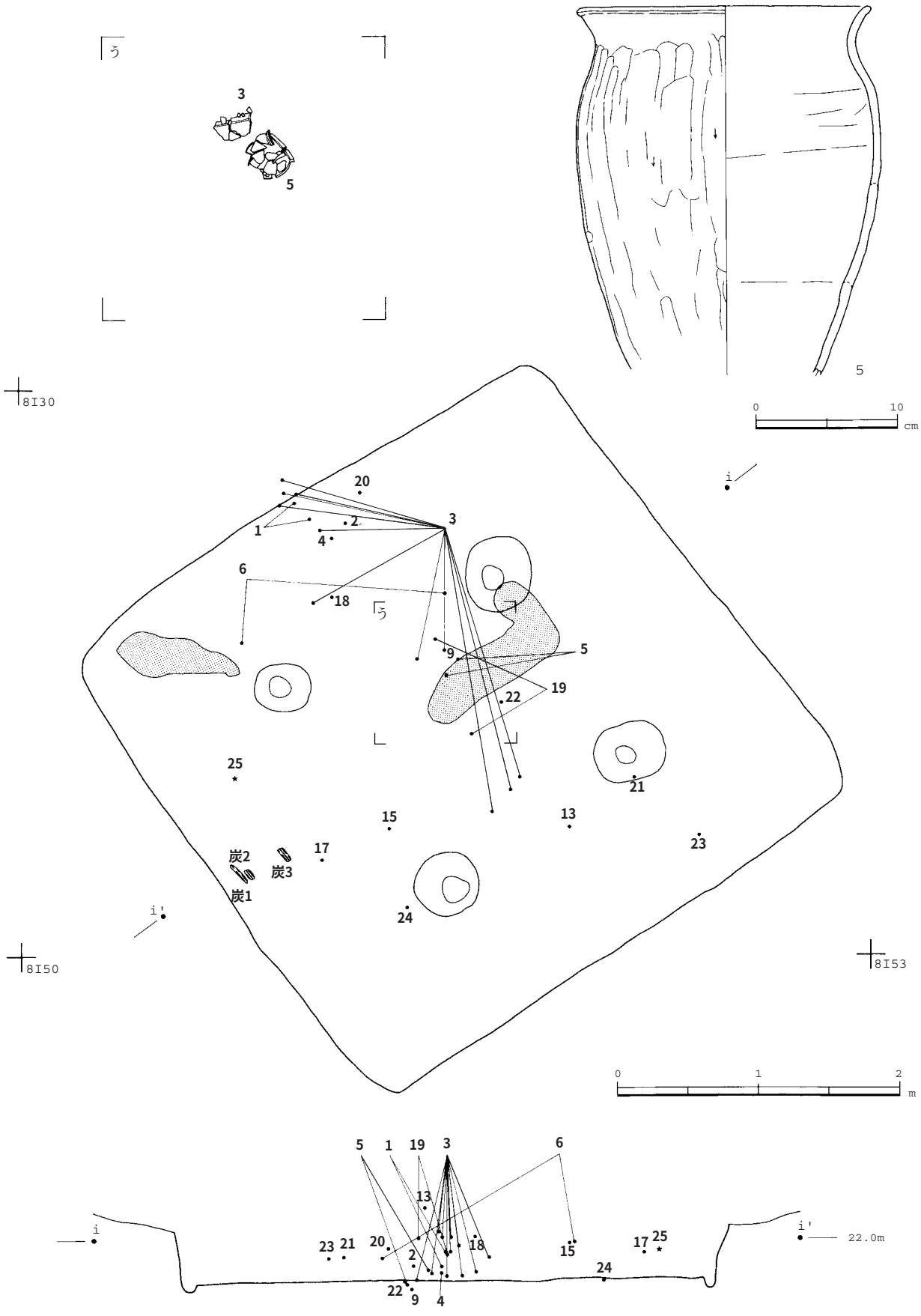


第114図 204号遺構

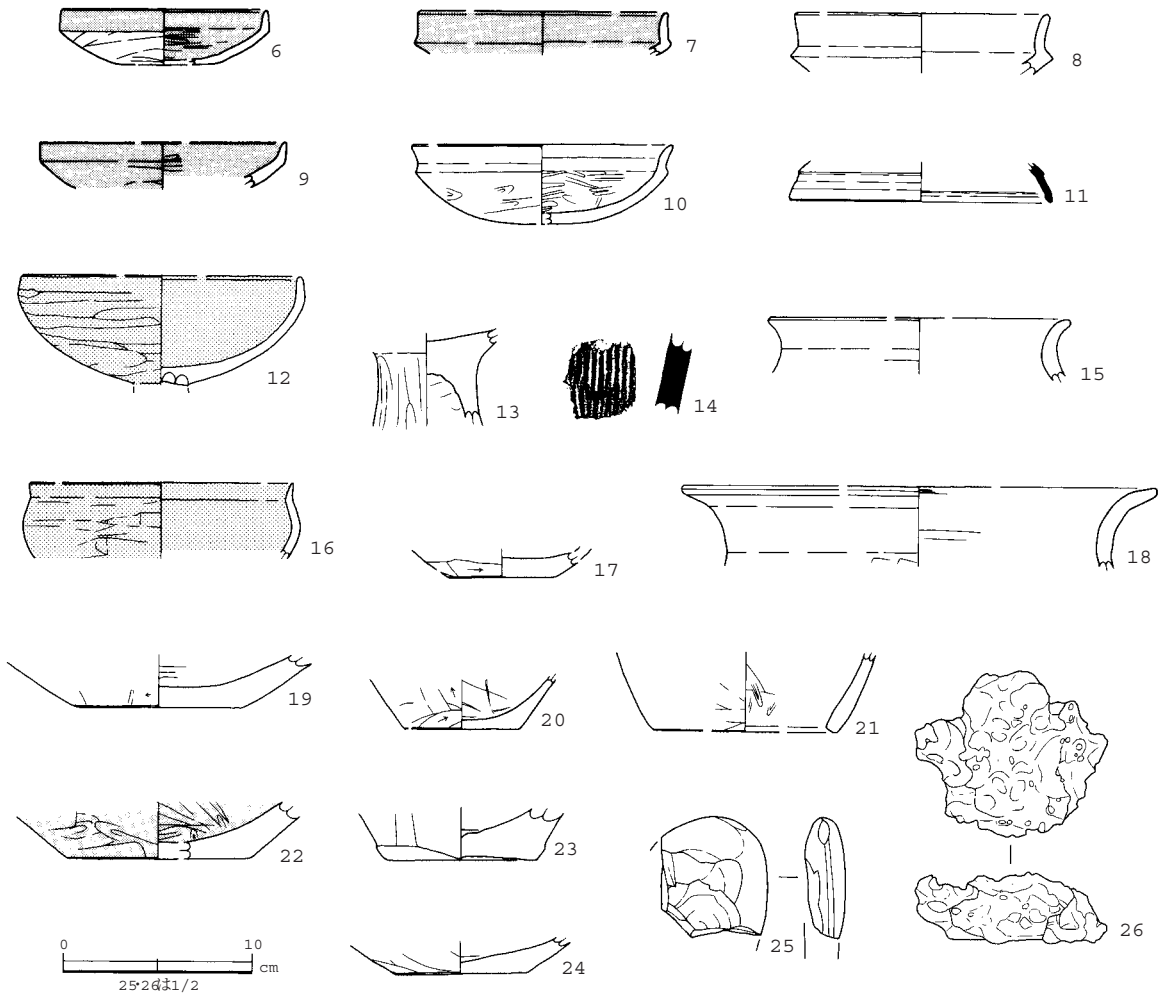


g-g' h-h'
1 2.5Y6/3にぶ黄 粘質土主体土 褐土混じる 若干しまる カマド天井部分崩落土?
1' 2.5Y7/4浅黄 粘質土主体土 黒褐土混じる しまる カマド袖部
2 3/1黒褐 土 焼土粒少混じる ゆるい
3 10R5/8赤 焼土主体土 黒褐土粘質土混じる しまる
4 1層と3層ブロックが混ざる層 若干しまる
5 2/1黒 土 焼土粒粘質土粒混じる 若干ゆるい
6 3/1黒褐 土 5層多混じる,粘質土・焼土粒少 ゆるい
7 10YR6/4にぶ黄橙 土 しまる 地山?
8 10YR6/6明黄褐 土 地山土ブロック しまる
9 粘土混じりの黒褐土
10 黒褐土

第115図　204号遺構　カマド周辺および出土遺物１／３



第116図　204号遺構　焼土・遺物検出状況および出土遺物２/３



第117図　204号遺構出土遺物３／３

32号竪穴住居跡（第121図）

規模（m）：6.0×6.0？　**柱間**：Ａ－Ｂ2.80　**主軸方位**：338°

貯蔵穴：北辺カマド東脇／円形／深さ0.6　**時期**：古墳時代後期後半

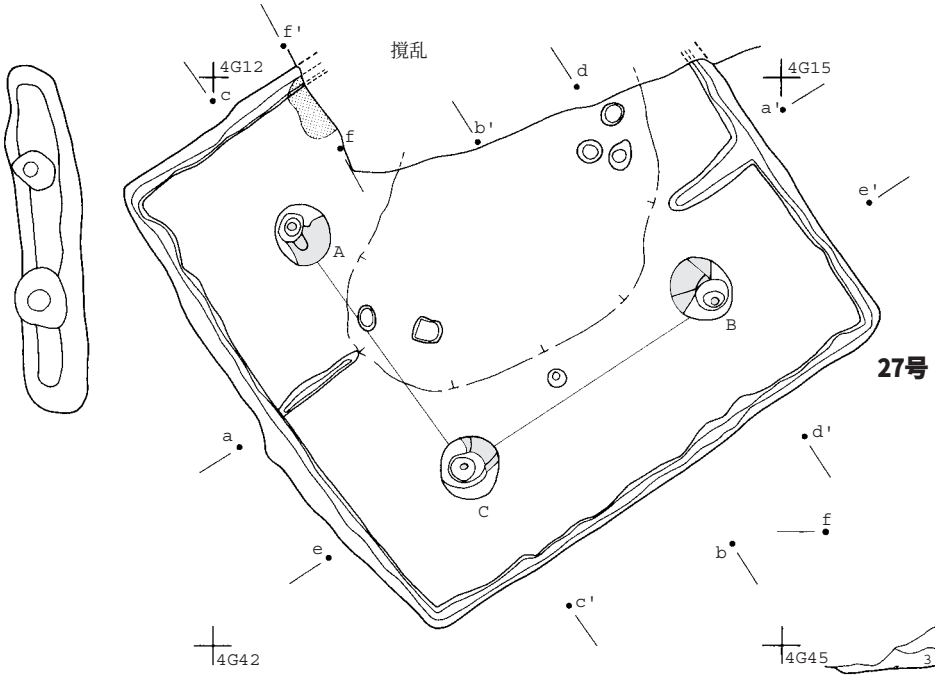
南半が調査区外にあり、北西部分を大きく撹乱される方形竪穴住居である。主柱穴はＡ・Ｂで、Ｃが貯蔵穴と思われる。Ｄは10㎝ほどの深さである。床面の硬化は不明瞭で周溝は検出されなかった。

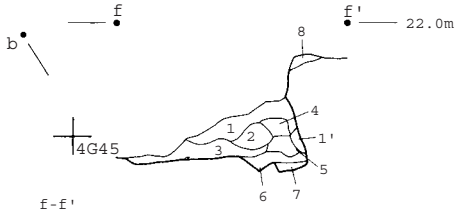
竪穴の覆土は、最下位と中位に焼土層・炭化物の多い黒色土が見られることから、廃絶時の焼却処分を想定できる。また、Ｂの覆土上層に焼土が床面から連続して堆積しており、下層も黄褐土ブロックが主体であるという所見から、柱抜き取り・一部埋め戻し後に焼却処分が行われた、という廃絶のプロセスが考えられる。

カマドは、確認調査時に北辺付近がトレンチにかかり、中心部分をサブトレンチで掘り抜いてしまったため、平面図記録時の遺存状況が非常に悪い。本来はもう少し遺存していたと思われる。このため、竪穴廃絶時にカマドに対してどのような処理が為されたかは不明である。ただ、支脚が撹乱から出土しており、廃絶時には元々カマド内に置かれていなかった様子なので、カマドに対して何らかの処置が施されていた可能性はある。

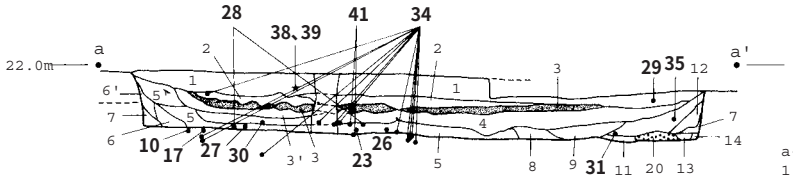
遺物は土師器が少量出土しており、黒色処理の施された杯（１）が床面近くで検出されている。

竪穴の形状と遺物から、本遺構は古墳後期後半に属すると思われる。

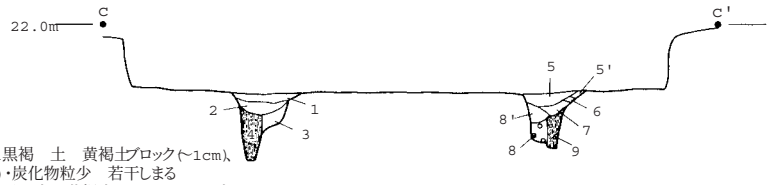




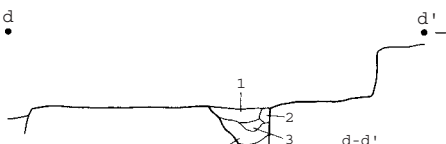
f-f'
1 3/2黒褐と3/1黒褐が混じる 土 黄褐土粒(～5mm)・焼土粒(～3mm)・粘土微粒 若干しまる
1' ～5の漸移層
2 2/1黒 土 黄褐土粒(～3mm)少、炭化物粒混じる 若干しまる
3 4/1褐灰と2.5Y7/4浅黄混じる 粘質土を多く含む土 焼土粒・黄褐土粒(～5mm)多 若干しまる
4 2.5Y7/4浅黄 粘質土主体土 黄褐土粒(～2mm) 若干しまる
5 3/2黒褐と2/1黒混じる 土 黄褐土粒(～3mm)多 若干しまる
6 4/2灰黄褐 粘質土混じりの土 黄褐土粒(～5mm)多 若干ゆるい
7 3/3暗褐 土 若干ゆるい
8 3/1黒褐 土 覆土～地山漸移層



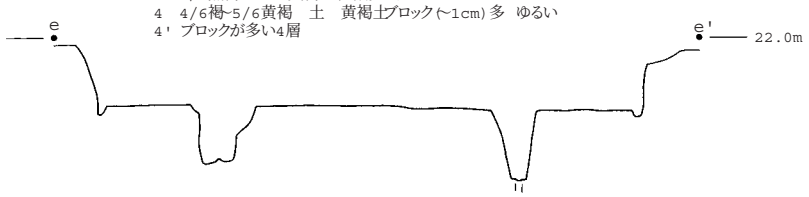
a-a' b-b'
1 3/1黒褐と3/2黒褐のぶち 土 黄褐土粒(～3mm)、焼土状赤褐粒(～1mm)・炭化物粒(～3mm)少 若干しまる
2 3/1黒褐～2/1黒 土 黄褐土粒(～3mm)、焼土状粒微少 若干しまる
2' 焼土が多く明瞭な2層、焼土ブロック(～5cm)、黄褐土ブロック少
3 1.7/1黒 土 焼土状粒微量黄褐土粒(～3mm)少
3' 3層-4層の漸移層
4 3/1黒褐～2/1黒 土 黄褐土粒(～5mm)多、焼土粒(～5mm)少 しまる
4' 2/1黒 土 黄褐土ブロック(～4cm)少 若干しまる
5 3/1黒褐～3/2黒褐 土 黄褐土粒(～5mm)多、黄褐土ブロック(～2cm)少 若干しまる
5' 3'層-5層漸移層
6 4/2灰黄褐～3/2黒褐 土 黄褐土粒ブロック(～4cm)多 しまる
6' 6層のブロックのない部分
7 4/2灰黄褐 土 黄褐土ブロック(～2cm)混じる 若干ゆるい
8 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(～1cm)、焼土状赤褐粒微少 若干ゆるい
9 3/1黒褐～2/1黒 土 黄褐土粒ブロック(～2cm)多焼土状赤褐粒(～5mm)少 若干ゆるい
10 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(～1.5cm)多焼土状赤褐粒(～5mm)多
11 2/1黒 土 黄褐土粒(～5mm)
12 3/2黒褐～4/2灰黄褐 土 黄褐土粒(～3mm)、焼土粒(～1mm)少 若干ゆるい
13 3/1黒褐～2/1黒 土 ゆるい
14 3/2黒褐 土 ゆるい
15 1.7/1黒黒 土 黄褐土粒(～1mm)少
15' 15層-17層の漸移層
16 2/1黒 土 黄褐土ブロック(～2cm)多
16' 16層-19層の漸移層
17 3/1黒褐～3/2黒褐 土 黄褐土粒(～3mm)多 若干しまる
18 3/2黒褐と3/1黒褐のぶち 土 黄褐土粒(～5mm)少 若干ゆるい
19 3/2黒褐～3/3暗褐 土 ゆるい
20 5YR5/8明赤褐 焼土 しまる

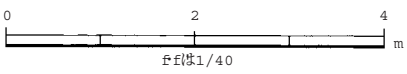


c-c'
1 3/2黒褐～3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(～1cm)、焼土粒(～5mm)・炭化物粒少 若干しまる
2 3/1黒褐～2/1黒 土 黄褐土ブロック(～1cm)・炭化物粒(～5mm)少、焼土粒微少 若干ゆるい
3 4/4褐 土 黄褐土ブロック(～1cm) 若干ゆるい
4 4/4褐～4/6褐 土 黄褐土ブロック(～1cm、まれに大)多 ゆるい 柱痕
5 3/2黒褐～3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(～2cm)・焼土ブロック(～1cm)・炭化物粒(～5mm) 若干しまる
5' 5層-床面土漸移層 しまる
6 4/4褐 ロームブロック しまる
7 3/1黒褐 土 焼土粒(～3mm)少 若干ゆるい
8 4/3にぶ黄褐～3/3暗褐 ロームブロック主体土 若干ゆるい
8' 暗褐土が主体の4層
9 3/3暗褐～4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック(～1cm)多 ゆるい 柱痕脇の土



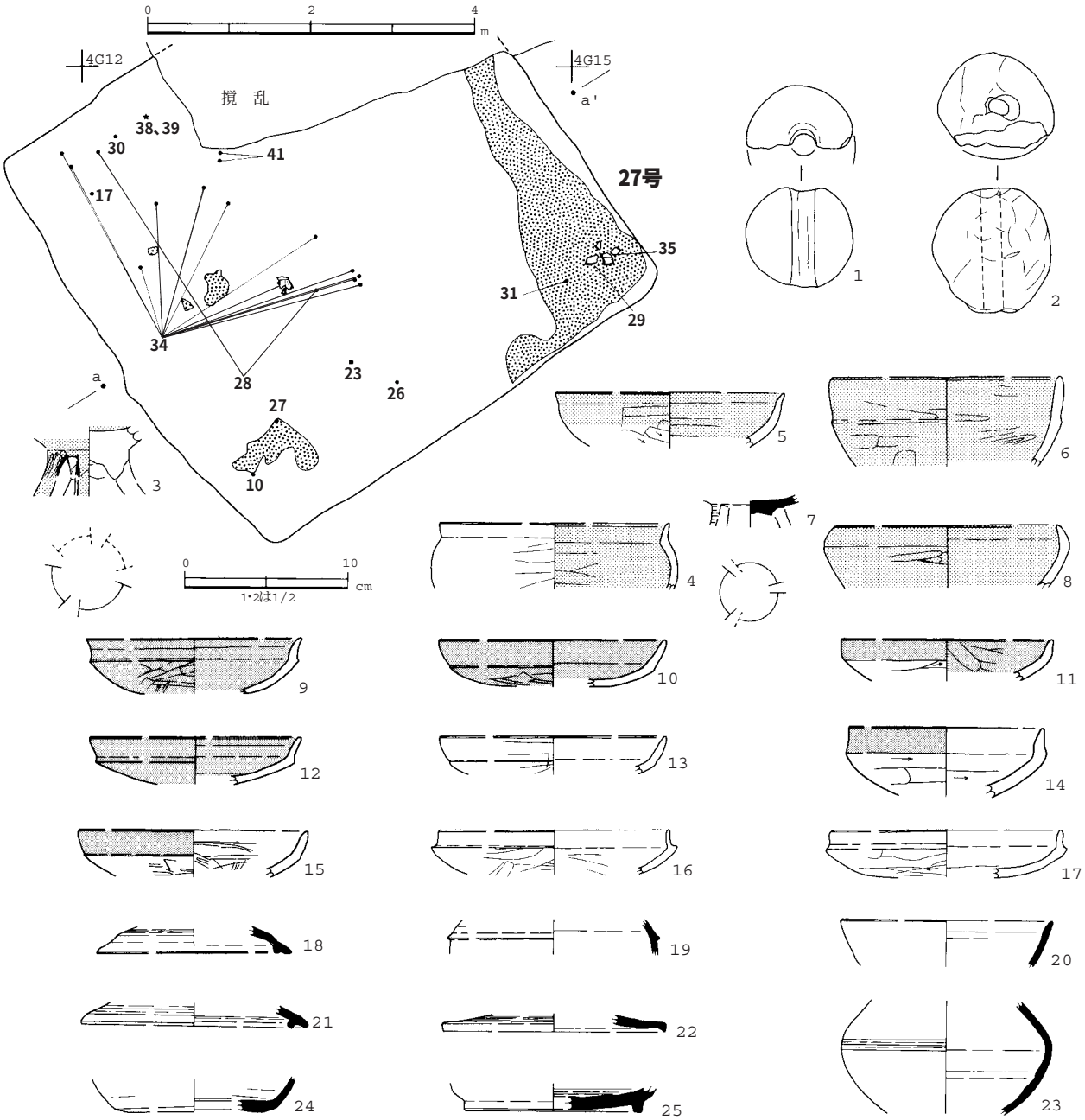
d-d'
1 3/1黒褐と2/1黒混じる 土 黄褐土ブロック(～1cm)・焼土粒(～2mm)・炭化物粒(～2mm) 若干ゆるい
2 5/6黄褐 ロームブロック主体土 若干しまる
3 3/2黒褐 土 黄褐土粒微少 ゆるい
4 4/6褐～5/6黄褐 土 黄褐土ブロック(～1cm)多 ゆるい
4' ブロックが多い4層





fは1/40

第118図 27号遺構



第119図　27号遺構　焼土・遺物検出状況および出土遺物１／２

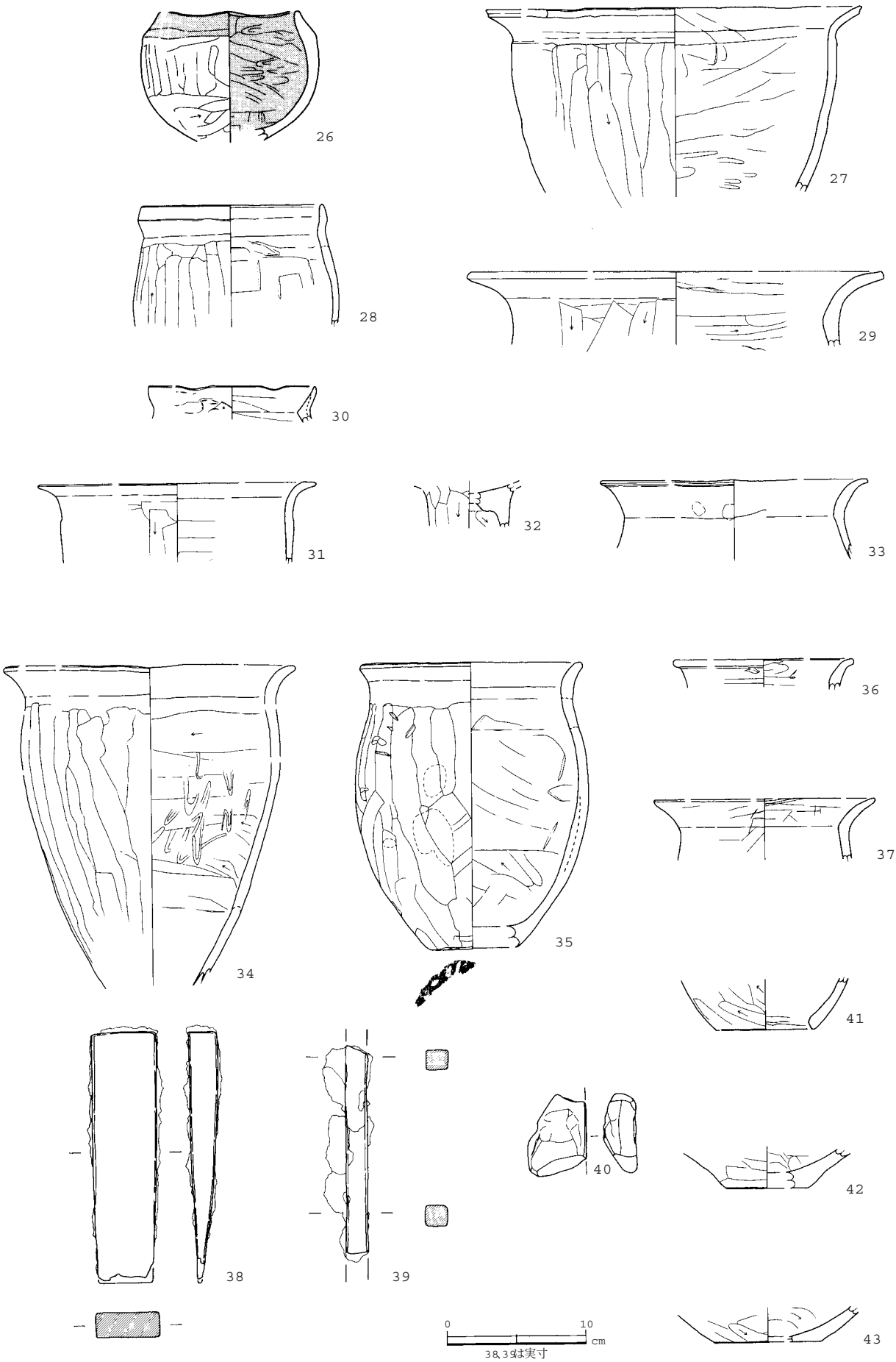
405号竪穴住居跡（第122～125図）

規模（m）：竪穴6.5四方／張り出し部1.2×2.6？

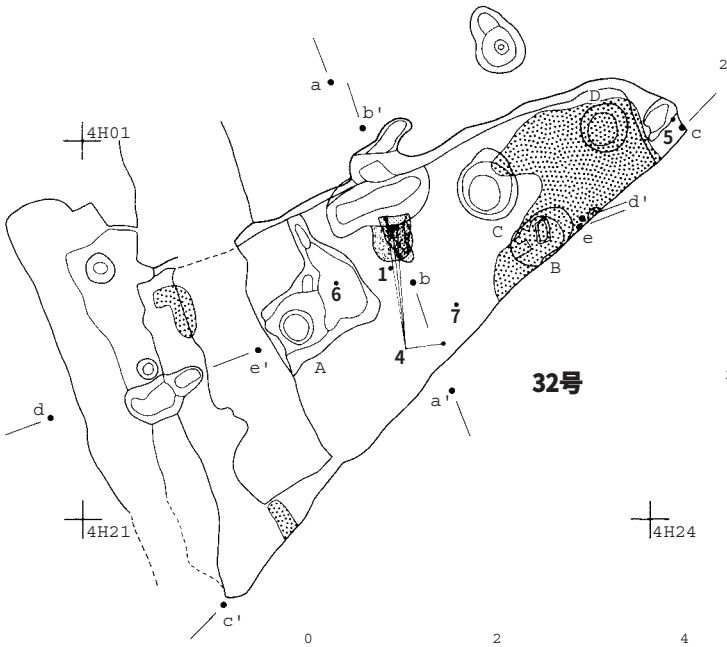
柱間：Ａ－Ｂ3.32　Ｂ－Ｃ3.34　Ｃ－Ｄ3.36　Ｄ－Ａ3.37

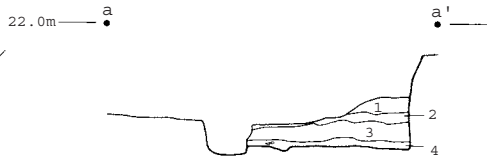
主軸方位：327°　**貯蔵穴**：北辺中央寄り／方形　**時期**：古墳時代後期後半

Ｄ３区の中ほど西寄りに位置する、張り出し部を持つ方形竪穴住居である。北辺の中央に、煙道が短く、その底面が床面と同じ高さで延びるタイプのカマドが構築され、そのすぐ脇に貯蔵穴Ｅがある。張り出し部分は、当初、半分近くを撹乱されていることから、別の方形竪穴住居と認識していたため、別の遺構番号を与えて調査していたが、405号の調査が床面構築土掘削に及んだ際に、対応する柱穴が検出されなかったことから、同一遺構として見直したという経緯がある。張り出し部分のレベルは竪穴部分と同じで、柱穴などは検出されなかった。なお、床面下からは用途不明の穴Ｆ（底面の標高20.668m）が検出された。

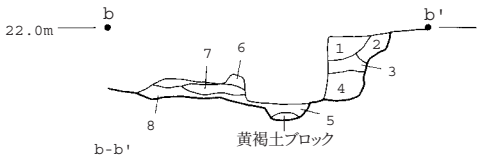


第120図　27号遺構出土遺物２／２



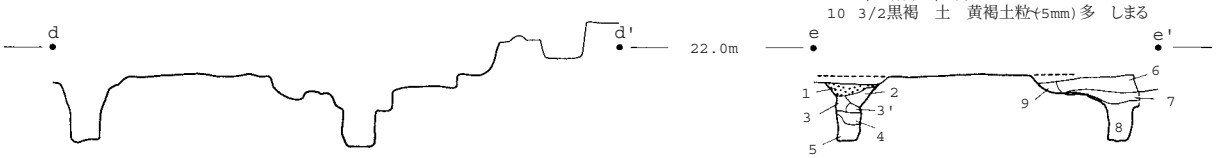


a-a'
1 暗褐 土 黄褐土粒(~5mm)少
2 黒褐 土 黄褐土粒(~5mm)・橙焼土粒少
3 暗褐 土 黄褐土粒・ブロック多
4 暗褐 土 黄褐土粒・ブロック多

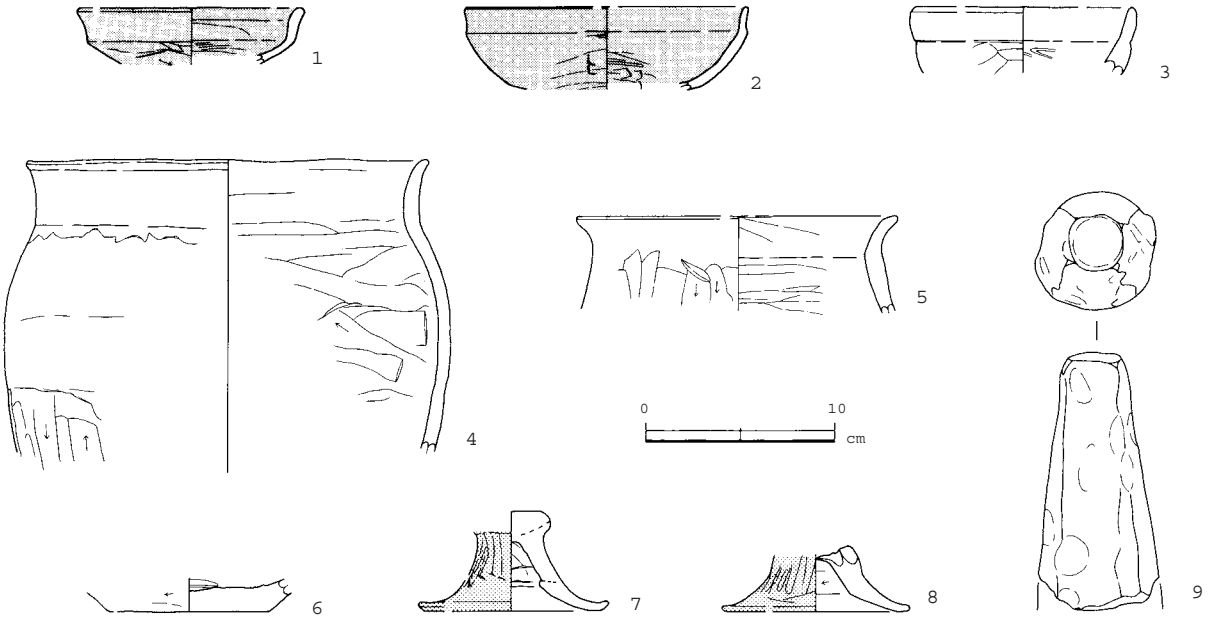


b-b'
1 3/1黒褐に黄灰が混じる 粘質土混じりの土 若干しまる
2 3/3暗褐 土 しまる 覆土~地山漸移層
3 3/1黒褐に2.5Y浅黄が混じる 粘質土混じりの土
2.5Y浅黄粘質土ブロックを多く含む しまる
4 3/1黒褐 土 炭化物粒(~5mm)・黄褐土ブロック(~2cm)少
2.5Y浅黄粘質土ブロックを多く含む
5 3/1黒褐~2/1黒 土 黄褐土ブロック(~3cm) 硬い
6 3/1黒褐 粘質土混じりの土 焼土粒多 若干しまる
7 5YR5/8明赤褐 焼土しまる
8 3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm) しまる

c-c'
1 3/1黒褐に3/2黒褐のぶち 土 7.5YR5/6明褐粒フラ?(~1mm)混じる
よくしまる 現代の造成によって硬化したよう
2 3/1黒褐に3/2黒褐のぶち 土 7.5YR5/6明褐粒5YR4/6赤褐粒フラ?
(~2mm)混じる よくしまる 現代の造成によって硬化したよう
3 2/1黒 土 7.5YR5/6明褐粒5YR4/6赤褐粒(~3mm)混じる しまる
4 3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)・炭化物粒・焼土粒(~3mm) しまる
5 3/3暗褐に3/2黒褐が混じる 土 黄褐土ブロック(~2cm)少 若干しまる
5' 焼土ブロック(~1cmを多く含む5層
6 2.5YR4/6赤褐 焼土ブロック しまる
7 4/4褐 土 ゆるい
8 5/6黄褐 ロームブロック主体土 ゆるい
9 3/3暗褐~4/4褐 土 しまる
10 3/2黒褐 土 黄褐土粒(~5mm)多 しまる



e-e'
1 3/2黒褐に5YR4/6赤褐が混じる 焼土混じりの土
焼土を大量に含む 若干ゆるい
2 3/1黒褐 土 5YR4/6赤褐焼土ブロック(~1cm)少
焼土微粒多 若干しまる
3 3/2黒褐 土 焼土微粒黄褐土粒(~5mm)少
若干しまる
3' 黄褐土ブロック・焼土粒の多い3層 しまる
4 4/1にぶ黄褐 土 炭化物ブロック(~1cm)少
若干ゆるい
5 4/4褐 ロームブロック主体土 しまる
6 3/1黒褐~3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~3cm、まれ
に5cm)多 若干しまる
7 3/1黒褐~3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)多
8 3/3暗褐 土 黄褐土ブロック(~5cm)多 ゆるい
9 2/1黒 土 黄褐土粒(~3mm)少 若干しまる



第121図 32号遺構 焼土・遺物出土状況および出土遺物

主柱穴はＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄで、ほぼ正方形に配置される。張り出し部分は、カマドの正反対に位置する。平面図では竪穴の中軸線を基準にして左右対称であったと仮定して復元したが、類例にこれほど幅が広いものが見られないようなので、もう少し幅の狭いものが西寄りに構築されていたという可能性も否定できない。

覆土には床面近くの壁際を中心に焼土が見られ、炭化物に由来すると思われる黒色土も多く見られた。柱穴の覆土は、南側の２つには柱痕跡と考えられる土が認められたが、他は不明瞭で、一律に抜き取りが行われたか、立ち腐れたかということは不明である。

カマドは、遺存状態が良好で、袖部分とその間に崩れて落ち込んだ天井部分が明瞭に認められた。また、特徴的な遺物ではないが、床面上に形状のまちまちな支脚が４個（31・38・39・44）と複数個体出土したことは注目に値する。本遺構のような張り出しを持つ形式の竪穴建物は、その規模と異質な形状から、「住居」としての機能とともに集落構成員の集会所のような機能を持っていた可能性が考えられるので、その廃絶にともなって１棟に大体１つあれば良いはずの支脚が遺棄されたということは、その廃絶に連動して集落規模の何かが行われたと想定でき、大変興味深い。ただ、単に、カマドの形状が複数の支脚を必要とするものであった可能性も否定できず、この事実だけでは、積極的に解釈することは困難であると言える。

貯蔵穴の覆土は、明瞭にカマド材起源と見られる微砂を多く含み、廃絶時には開口していた可能性が高い。また、後述の土器群の一部が落ち込んでいたのもそれを支持する事実である。

以上の様相から、本遺構は、廃絶に際しカマドの処置と儀礼活動が行われ、柱の抜き取りは不明ながら、上屋の解体後に不要な建材が焼却処分されたというプロセスをたどったと考えられる。

遺物はカマド近辺から北隅にかけてまとまって土師器・須恵器が出土した。もっとも特徴的なのは、土師器杯14・土師器椀１・須恵器杯蓋１・杯身３の計19個体が並べられるように出土した部分である。竪穴の廃絶過程を上記の通りとするならば、これらが、竪穴住居１棟の住人の食器が使用状態で偶然放置されたものとは考えにくい。むしろ、この建物の廃絶に際して、関係する集落成員が集まり、土器を遺棄するような儀礼活動を伴う廃絶作業を進めたと考える方が自然と思われる。

遺物は上述の通り、土師器・須恵器が中心で、他に弥生土器、支脚、土玉（32・33）が出土している。土師器は、黒色処理される小型器種が見られ、模倣杯の器高が低くなっているのが特徴である。須恵器はＴＫ43式並行期のものと思われる。

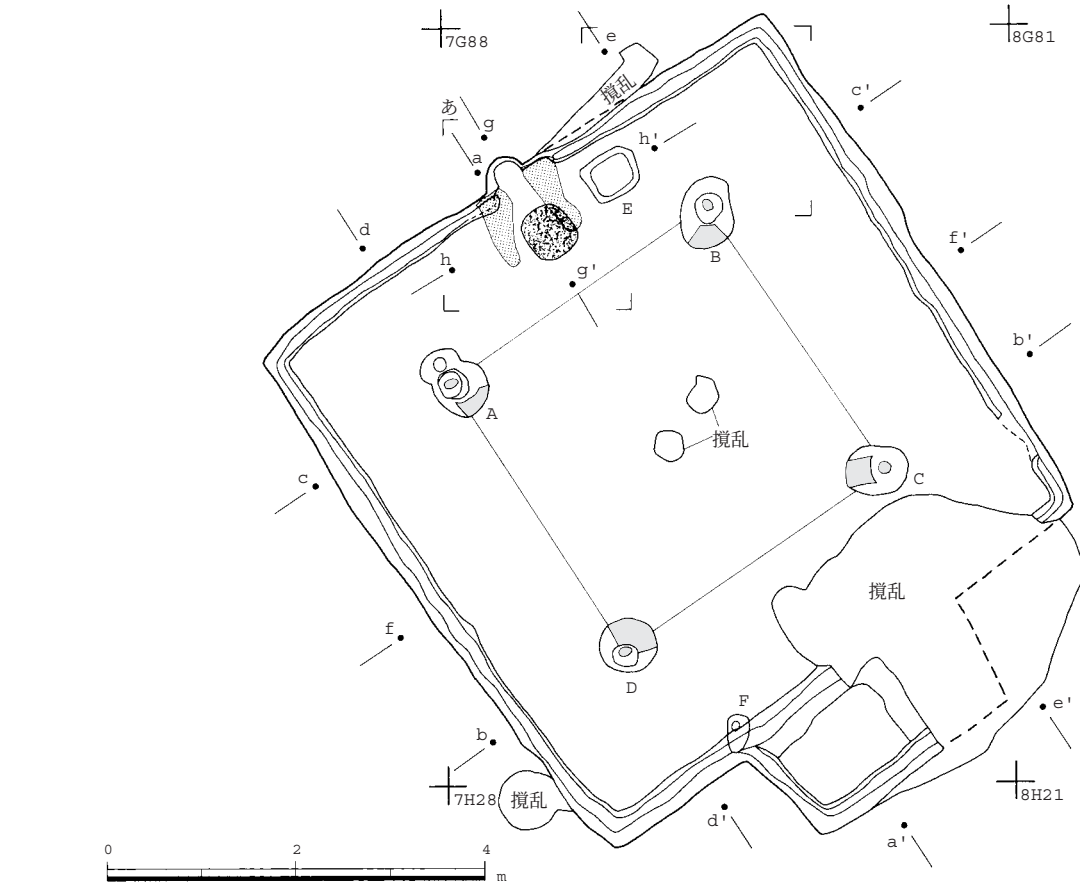
本遺構は竪穴の形状と遺物から古墳後期後半に属すると考えられる。

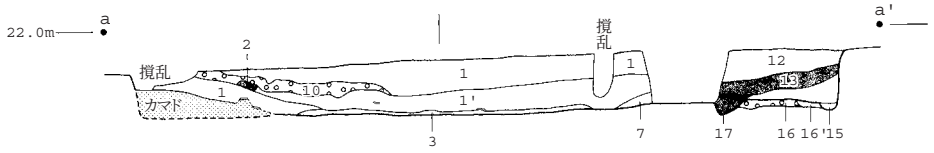
なお、覆土には旧石器時代末の尖頭器１点が混入していた。Ｄ２区の包含層から得られた有舌尖頭器の出土もあるので、旧石器時代末から縄文時代草創期の遺跡が近傍に存在したものと思われる。

207号竪穴住居跡（第126～129図）

規模（m）：6.0×5.8　**柱間**：Ａ－Ｂ3.10　Ａ－Ｃ3.20　**主軸方位**：315°　**貯蔵穴**：長円形？／北隅？　**時期**：古墳時代終末期前半

Ｄ２区中程に位置し、かなり大きく中央を撹乱される方形竪穴住居である。床面の壁際に周溝が巡る。カマドが北西辺ほぼ中央に検出され、その周辺から遺存の良好な土器群が検出された。主柱穴のうちＡ・Ｂ・Ｃの一部がかろうじて破壊を免れている。Ａは明瞭に柱痕と埋め土が確認できたことから、少なくとも、これだけは柱抜き取りがおこなわれなかったと考えることができる。さらにこの柱



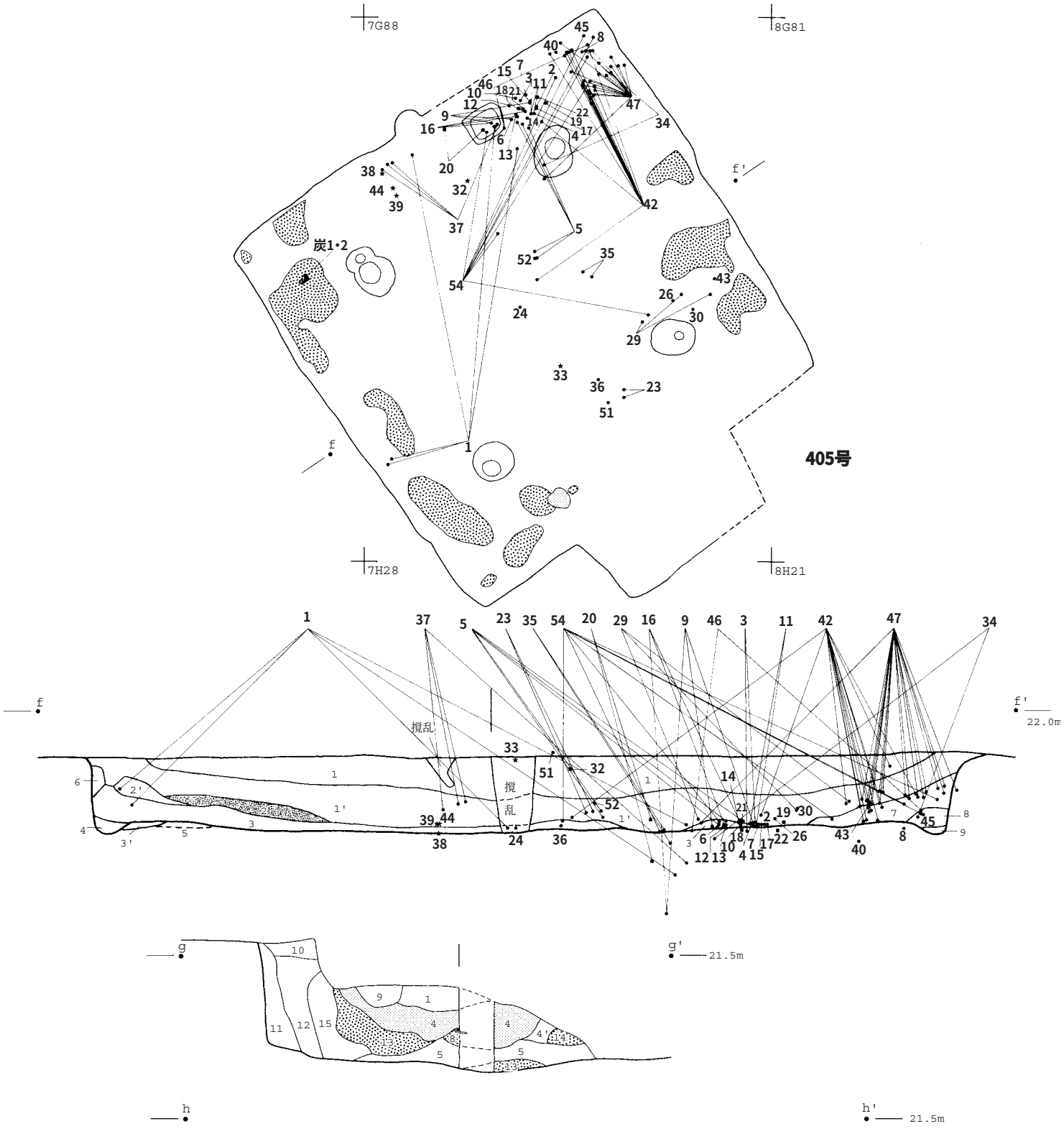


a-a' f-f'
1 3/1黒褐~2/1黒に3/2黒褐の小ぶち多 土 黄褐土粒(~3mm)・焼土状粒少 しまる
1' 2/1黒 土 若干薄い1層、ぶちも少ない、黄褐土ブロック(~1cm)多 しまる
2 1.7/1黒 土 黄褐土粒(~2mm)、炭化物粒(~3mm)・焼土粒少 若干しまる
2' 2層~3層の漸移層 若干しまる
3 3/1黒褐~3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~2cm)多 焼土粒(~3mm) 若干しまる
3' 3/2黒褐 土 床土~3層漸移層 しまる
4 3/1黒褐 土 3/2黒褐土混る、黄褐土粒(~5mm) 若干ゆるい
5 3/1黒褐に2.5YR赤褐混じる焼土混じりの土 若干しまる
6 4/3にぶ黄褐 土 若干しまる
7 4/3にぶ黄褐 土 黄褐土粒(~5mm)多 しまる
8 3/2黒褐~3/1黒褐 土 若干しまる
9 3/1黒褐 土 粘性あり 若干しまる
10 3/1黒褐~3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~5cm)多 地山土と同じ土混じる しまる 埋め戻し土
11 3/2黒褐 土 黄褐土粒ブロック(~1cm)少 焼土ブロック(~1cm)少 2.5Y浅黄粘質土粒・ブロックがまばらに混じる しまるカマド~覆土漸移層
12 3/2黒褐~3/3暗褐 土 黄褐土ブロック(~2cm)多 炭化物粒少 しまる
13 2/1黒~3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(~2cm)少 炭化物粒・焼土粒少 しまる
14 3/1黒褐~3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)多 炭化物・焼土粒・粘質土少 しまる
15 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)多 しまる 周溝?
16 5/6黄褐 ロームブロック主体 土隙間に3/2黒褐土 よくしまる 床面構築土
16' 3/1黒褐が多く混じる16層よくしまる 床面構築土
17 1.7/1黒 土 黄褐・焼土粒(~3mm)少 しまる 床?

b-b'
1 3/1黒褐~2/1黒 土 黄褐土ブロック(~1cm)多 焼土粒(~3mm)少 しまる
2 4/3にぶ黄褐 ロームブロック(~3cm)主体土 炭化物粒(~5mm)少 若干ゆるい
3 4/3にぶ黄褐に3/1黒褐混じる 土 黄褐土ブロック多 ゆるい 柱痕
4 3/2黒褐 土 黄褐土粒(~5mm)、焼土粒・炭化物粒少 しまる
5 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)多 若干しまる
6 5/6黄褐 ロームブロック主体土 隙間に4/3にぶ黄褐土 しまる
7 3/1黒褐~3/2黒褐 土 黄褐土ブロック多 ゆるい 柱痕

c-c'
1 3/1黒褐~2/1黒 土 黄褐土粒(~5mm)多、焼土・炭化物粒(~3mm)少 ゆるい
2 4/3にぶ黄褐 土 3/1黒褐土が斑に混じる、黄褐土ブロック(~5cm)多 かなりゆるい
3 3/1黒褐~3/2黒褐 土 黄褐土粒ブロック(~1cm)少 しまる
4 2/1黒 土 黄褐土粒ブロック多 しまる
5 4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック多 しまる
5' 黄褐土ブロック主体の3層 ゆるい

第122図 405号遺構

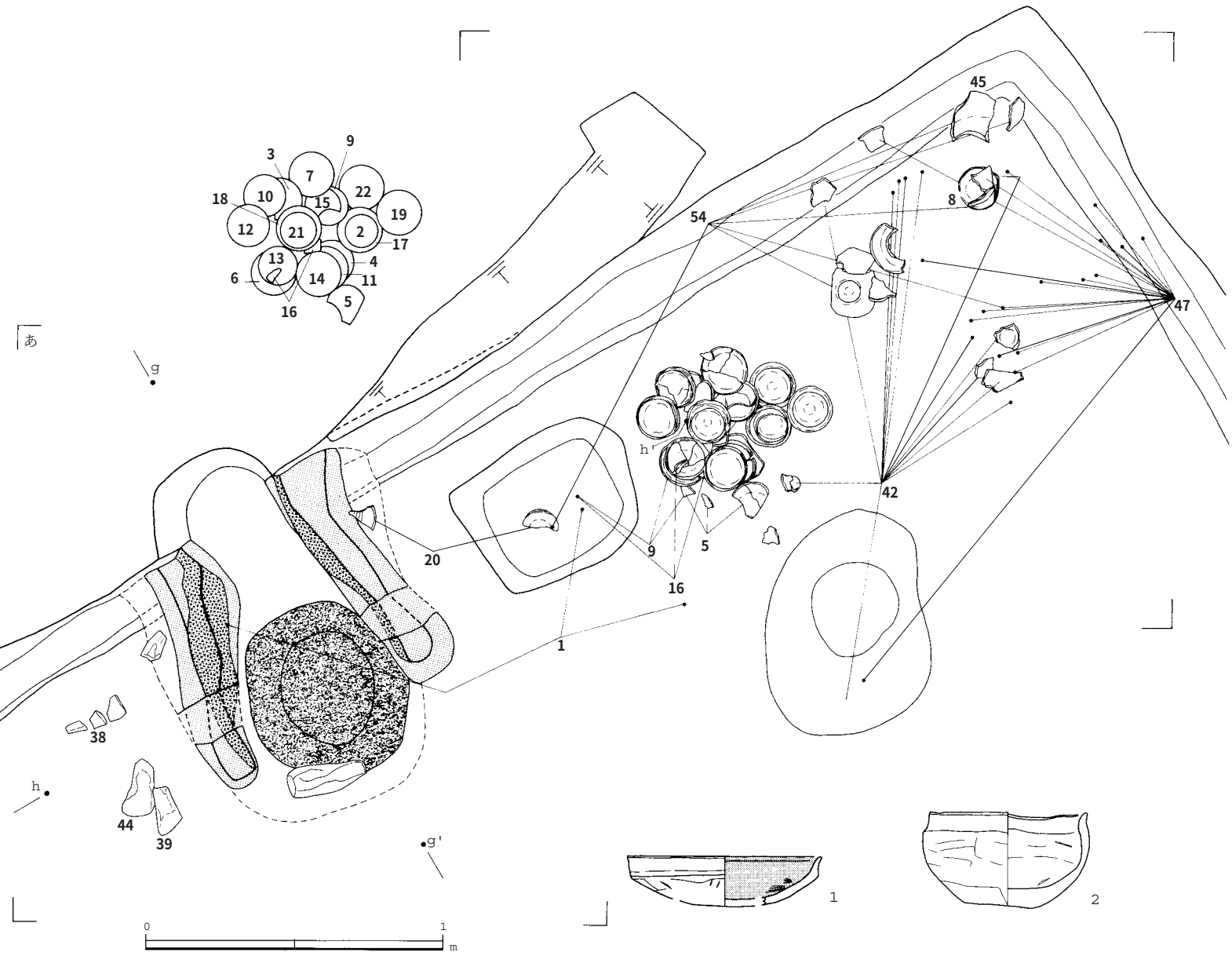


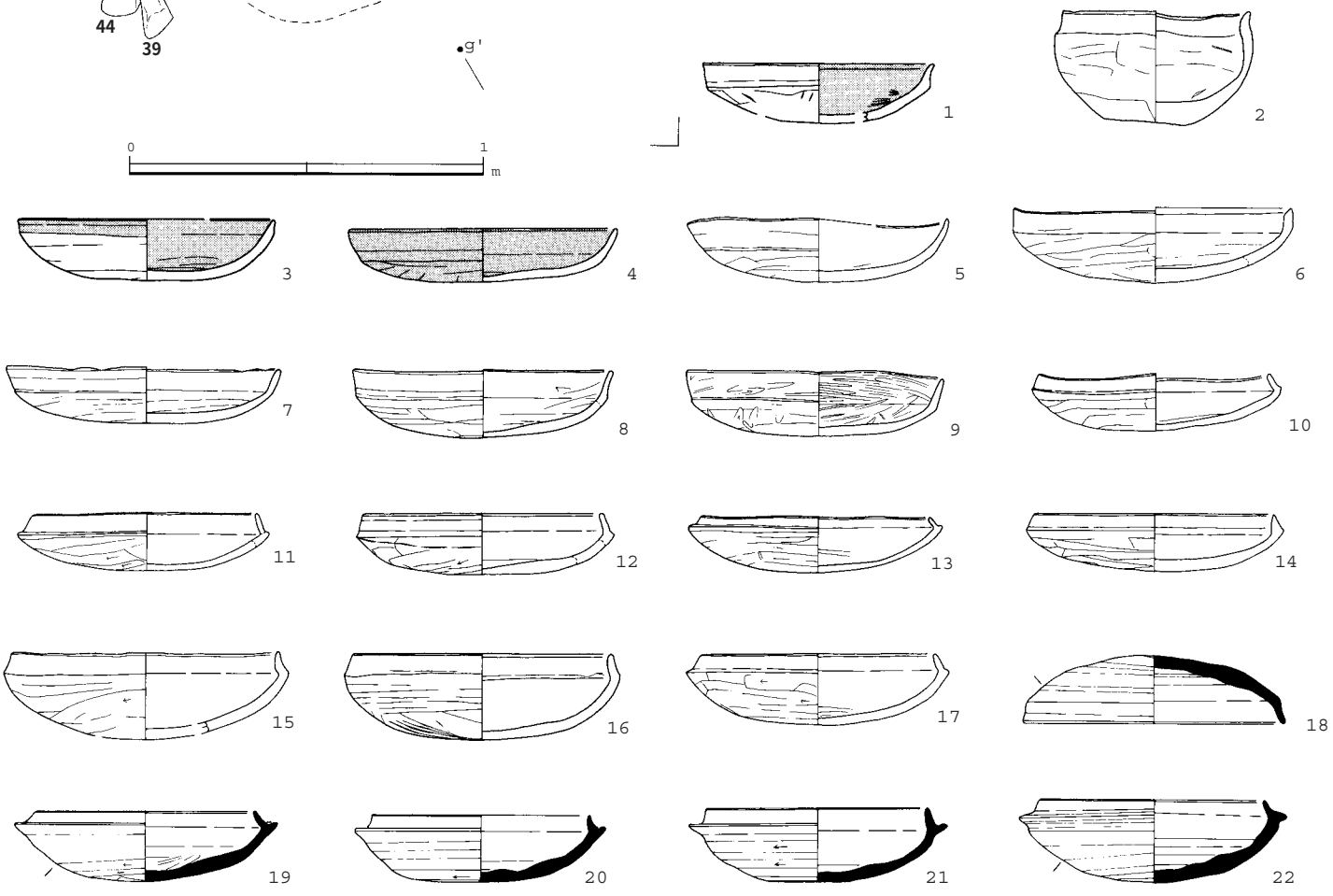
g-g' h-h'

1 3/1黒褐～4/2灰黄褐　微砂混じりの土　2.5Y浅黄粘質土ブロック(～1cm)多焼土粒(～5mm)・黄褐土粒(～3mm)・炭化物粒(～5mm)少　若干ゆるい
2 3/1黒褐～2/1黒　土　黄褐土粒少粘質土粒(～5mm)混じる　ゆるい
3 2/1黒　土　黄褐土粒粘質土粒(～5mm)少　ゆるい
4 2.5Y浅黄　粘質土主体土　焼けて赤化した部分や3/1黒褐土の混じるところがある　しまる
4' 4層～14層の漸移層
5 2/1黒　土　黄褐土粒(～5mm)、焼土粒(～5mm)・炭化物粒少　若干しまる
6 4/1にぶい黄褐～4/4褐　土　しまる　カマド～地山漸移層
7 3/1黒褐　土　黄褐土粒(～5mm)少、焼土粒(～5mm)多、粘質土粒混じる　若干ゆるい
8 2.5YR5/8明赤褐　焼土ブロック主体土　しまる
8' 若干暗い8層、粘質土が多い　しまる
9 2/1黒　土　粘質土粒(～5mm)多、黄褐土粒(～5mm)少　しまる
10 3/1黒褐　土　粘質土粒(～5mm)少、焼土混じる　しまる
11 3/2黒褐　土　粘質土焼土多、炭化物粒(～5mm)少　しまる　覆土が染みついたかんじ
12 3/2黒褐～3/1黒褐　土　焼土混じる　かなりゆるい
13 3/2黒褐～2.5YR明赤褐混じる　焼土ブロックが多く混じる土　粘質土粒・ブロック少　若干ゆるい
14 2.5YR赤褐　焼土ブロック主体土　隙間に3/2黒褐土若干しまる
15 3/2黒褐赤みあり　焼土が多く混じる土　しまる

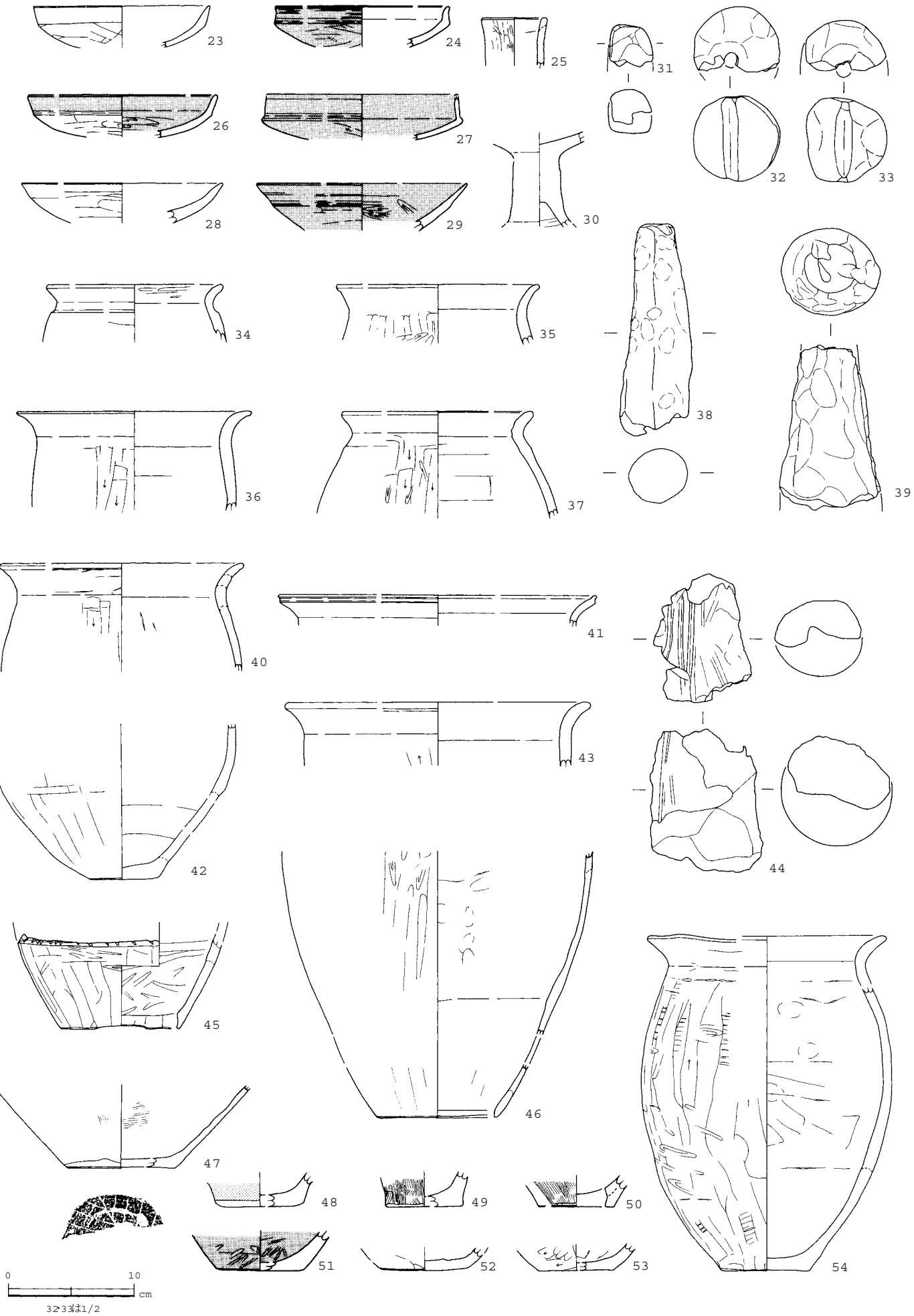
0　1　m

第123図　405号遺構　焼土・遺物検出状況





第124図　405号遺構　カマド周辺遺物出土状況および出土遺物１／２



第125図　405号遺構出土遺物２／２

痕と見られる層の直上に焼土が堆積していることから、根元で柱の切り取りが行われた可能性も想定できる。貯蔵穴はDである可能性があるが、底面にさらに掘り込みがあり、それが206号の主柱穴の一つであることがほぼ確実なことから、上層の穴自体もそれに伴うとも考えられるため、貯蔵穴は元々構築されず、たまたまその位置に206号の柱穴があったという場合と、貯蔵穴はDの上層部分であり、たまたまその場所に柱穴があったという場合の二通りの解釈が可能である。遺構の時期からすると、貯蔵穴が伴わなくても不思議ではないが、ここではどちらの可能性も排除しないこととする。

カマドは元の形状が判然とするほどの遺存状態ではなかった。断ち割りの観察から、袖部分の下層が残り、その間に天井部分が落ち込んだ、という堆積状況が推察できる。支脚はほぼ床面と同レベルでカマド燃焼部の中心より根元から折れた状態で検出された。カマドの東側にはほぼ完全に復元できた土師器甕・甑・椀・杯が床面直上から下層にかけて出土した。竪穴の廃絶に伴って、支脚を折りとり、完形の土器を結果として遺棄するような過程があったことが想定できる。

竪穴の覆土は、床面から下層にかけて焼土・炭化物が多く検出されたことから、廃絶直後は焼却処分が行われ、最初に人為的な埋積があったと考えられる。さらに上述の通り、その際に柱の切り取りが一カ所については行われた可能性が考えられる。検出された炭化物は建材の一部が炭化したものと考えられる。

遺物は土師器が主体で、弥生土器・鬼高式古相の土器が混入する。他に敲打痕のある石（6）、支脚（12・15）が出土している。

本遺構は、遺物の形状から古墳時代終末期前半に属すると考えられる。

403号竪穴住居跡（第130・131図）

規模（m）：5.2×5.1？　**主軸方位**：338°　**貯蔵穴**：なし　**時期**：古墳時代後期～終末期

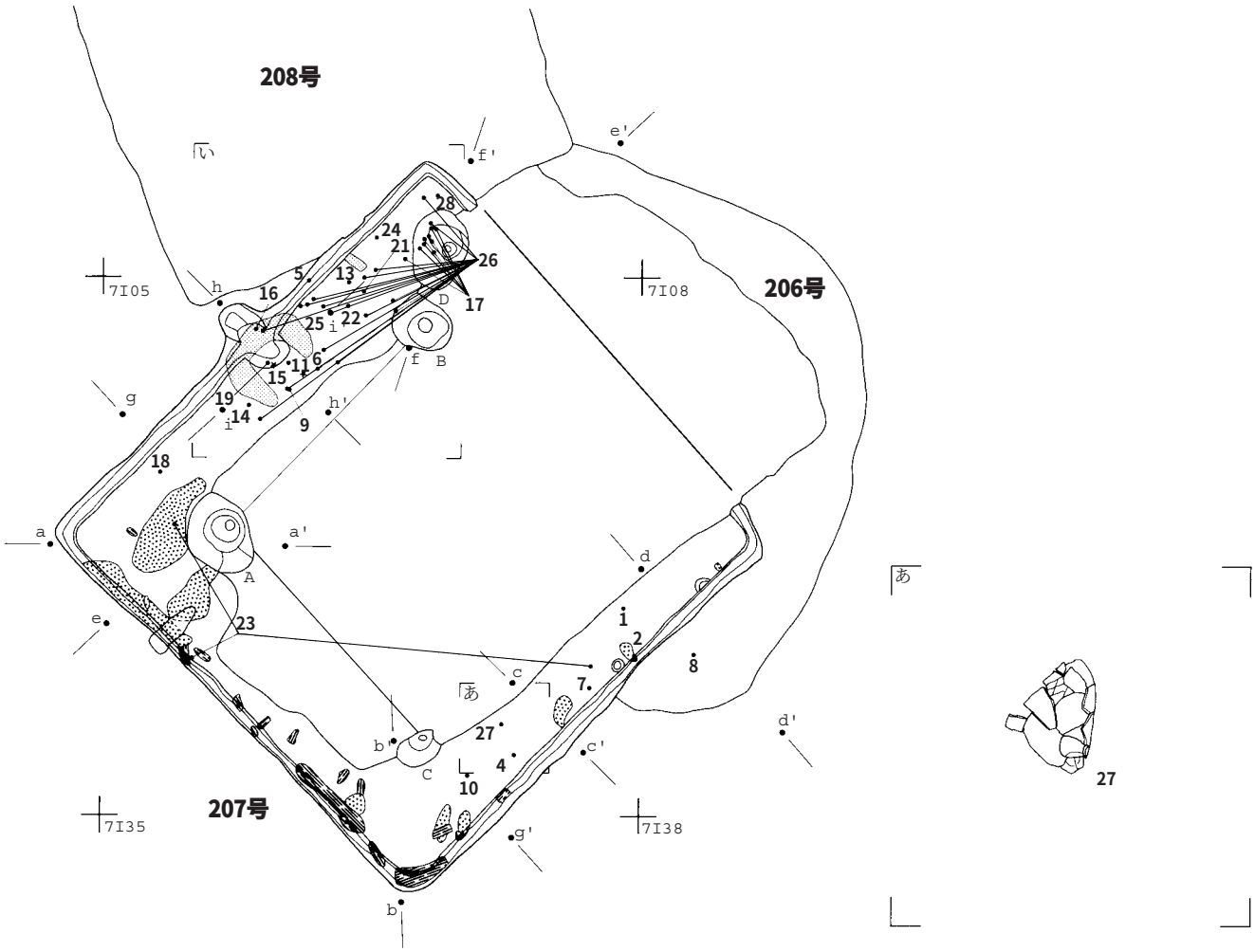
Ｄ３区の北端に位置する方形竪穴住居である。西辺を大きく撹乱される。北辺の中央に短い煙道を持つカマドが構築される。主柱穴は床面構築土掘削時に検出されたAが想定されるだけで、通有の４本柱形式の上屋構造ではなかった可能性が高い。竪穴の外に柱穴がある可能性も考え、付近を精査したが柱穴と考えられる穴は検出されなかった。Aが竪穴内の唯一の柱穴だとして、外には地表とともに後代に削平されてしまったような浅い掘り込みを持つ柱穴が存在したとも考えられる。Eは大きく上部を撹乱されるが貯蔵穴の可能性がある。Ｂ・Ｃ・Ｄ（標高20.91m・20.821m・20.818m）も床土下から検出されたものだが、柱穴とするにはプランの想定が難しい。

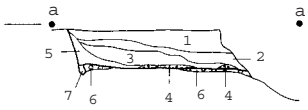
カマドは袖部分が若干遺存しており、その間に支脚（７）が寝た状態で検出された。また、完形に復元できた土師器甕（５）が向かって左側の少し離れた壁際に出土した。これらの出土状況とカマドの遺存状態、他の遺物がほとんど出土していないことからすると、カマドの検出状況は、竪穴廃絶時に意図的にととのえられたものである可能性が考えられる。

覆土にはまばらに焼土が混じるものの、積極的に焼却処分が行われたとは捉えられない。最下層に黄褐土ブロックが多く含まれることを積極的に評価すれば、埋め戻しも想定できるが、本遺構の廃絶の過程で明らかなのは、カマドへの処置が行われたことだけである。

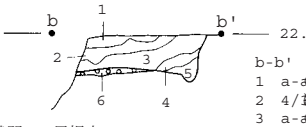
遺物は、カマド近辺から土師器・支脚（７）が出土した。土師器には黒色処理の施される杯（１）と長胴の甕（５・６）が存在する。

これらの遺物から、本遺構は古墳後期後半以降の所産と考えられる。

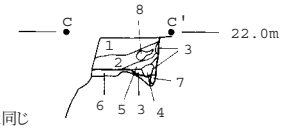




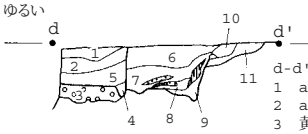
a-a'
1 3/1黒褐と4/2灰黄褐の小ぶち　土　黄褐土ブロック(～3cm)まれ、焼土粒(～2mm)・炭化物粒少　しまる
2 3/1黒褐と2/1黒が混じる　土　黄褐土ブロック(～1cm)多焼土粒(～3mm)・炭化物粒少　しまる
3 3/2黒褐　土　黄褐土ブロック(～1cm)多焼土粒まれにブロックで混じる、炭化物粒少　しまる
4 2.5YR4/6赤褐　焼土主体土　隙間3/2黒褐土しまる
5 3/1黒褐　土　黄褐土ブロック(～1cm)少　若干まる
6 5/6黄褐　ロームブロック主体土　よくしまる
7 3/2黒褐　土　黄褐土ブロック多　ゆるい



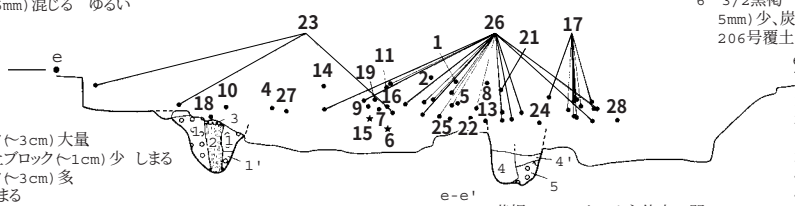
b-b'
1 a-a'の1層と同じ
2 4/3にぶ黄褐　土　黄褐土ブロック(～2cm)多　しまる
3 a-a'の3層と同じ
4 3/2黒褐　土　黄褐土ブロック(～2cm)少　若干まる
5 a-a'の5層と同じだが、若干ゆるい
6 a-a'の6層と同じ



c-c'
1 a-a'の1層と同じ
2 a-a'の2層と同じ
3 5/4にぶ黄褐　土　若干ゆるい　覆土～地山漸移層
4 3/1黒褐-2/1黒　土　黄褐土ブロック(～1cm)多焼土粒(～5mm)・炭化物粒(～5mm)混じる　ゆるい
5 a-a'の5層と同じ
6 3/2黒褐　土
7 4/2灰黄褐　土　ゆるい
8 黄褐土ブロック

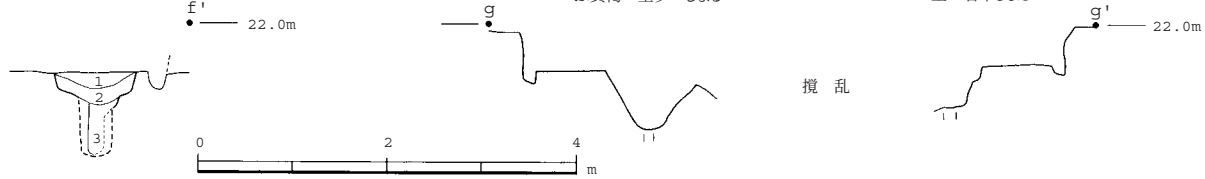


d-d'
1 a-a'の1層と同じ
2 a-a'の2層と同じ
3 黄褐　ロームブロック主体土　隙間に3/1黒褐土　しまる
4 3/1黒褐-2/1黒　土　黄褐土ブロック(～1cm)少　若干まる
5 a-a'の5層と同じ
6 3/2黒褐　土　黄褐土粒(～5mm)少、炭化物粒　若干しまる　206号覆土
7 3/1黒褐　土　黄褐土粒(～3mm)、炭化物粒(～5mm)、焼土粒　若干しまる　206号覆土
8 3/1黒褐-2/1黒　土　黄褐土粒(～3mm)少　若干ゆるい　206号覆土
9 4/3にぶ黄褐　土　黄褐土ブロック(～1cm)がまんべんなく混じる　若干ゆるい　206号覆土
10 3/2黒褐-2/1黒　土　しまる　覆土～地山漸移層、206号覆土
11 3/2黒褐-4/2灰黄褐　土　しまる　覆土～地山漸移層、206号覆土

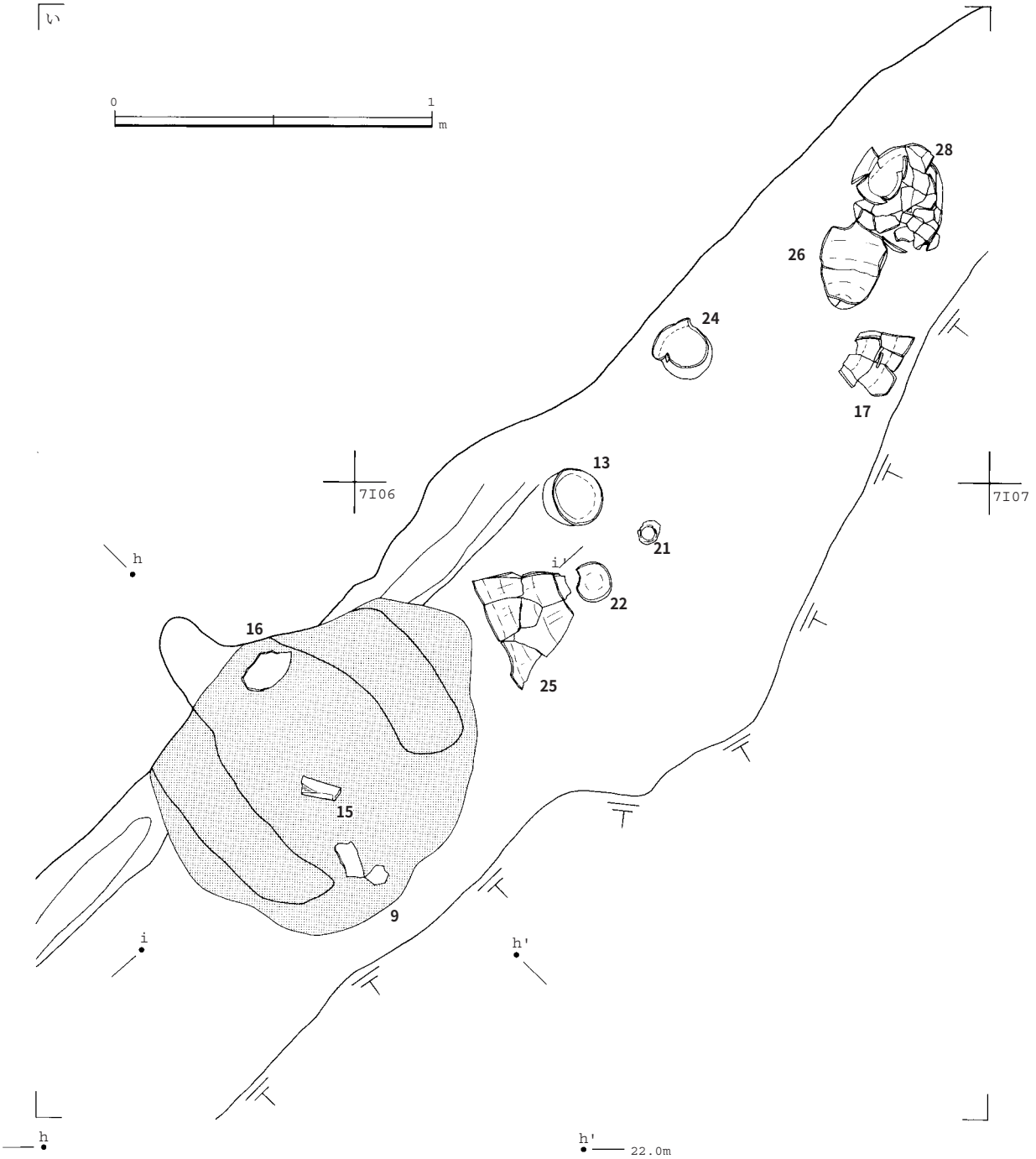


f-f'
1 3/2黒褐　土　黄褐土ブロック(～3cm)大量炭化物ブロック(～2cm)少焼土ブロック(～1cm)少　しまる
2 3/1黒褐　土　黄褐土ブロック(～3cm)多炭化物粒(～5mm)少　若干しまる
3 3/3暗褐　土　黄褐土ブロック(～1cm)　若干ゆるい　柱痕ではない

e-e'
1 5/6黄褐　ロームブロック主体土　間に4/3にぶ黄褐　土少　しまる
1' 4/3ぼぶ黄褐土が多い1層　ゆるい
2 3/2黒褐　土　黄褐土ブロック(～1cm)多ゆるい　柱痕
3 5YR5/8明赤褐　焼土　炭化物多　若干しまる
4 3/1黒褐　土　黄褐土ブロック(～2cm)多　若干しまる
4' ブロック主体の4層　若干しまる
5 4/4褐　ロームブロック(～5cm)主体土　若干しまる



第126図　207号遺構　焼土・遺物出土状況



h-h' i-i'

1 7.5YR3/2黒褐 土 山砂、ハードローム粒・焼土粒・炭化物粒少、粘性若干弱い しまる

2 3/4暗褐 土 山砂を斑状に多く含む、ハードローム粒混じる、粘性若干弱い しまる 崩落したカマド天井部

3 5YR3/4暗赤褐 土 焼けた砂を縞状に含む、粘性若干弱い 若干しまる

4 7.5YR3/2黒褐 土 山砂、焼土粒少、粘性若干あり 若干しまる

5 5YR3/4暗赤褐 土 山砂、粗い焼土粒が多く混じる、粘性若干あり 若干しまる

6 3/4暗褐 土 山砂がやや多く混じる、焼土粒混じる、粘性若干弱い 若干しまる

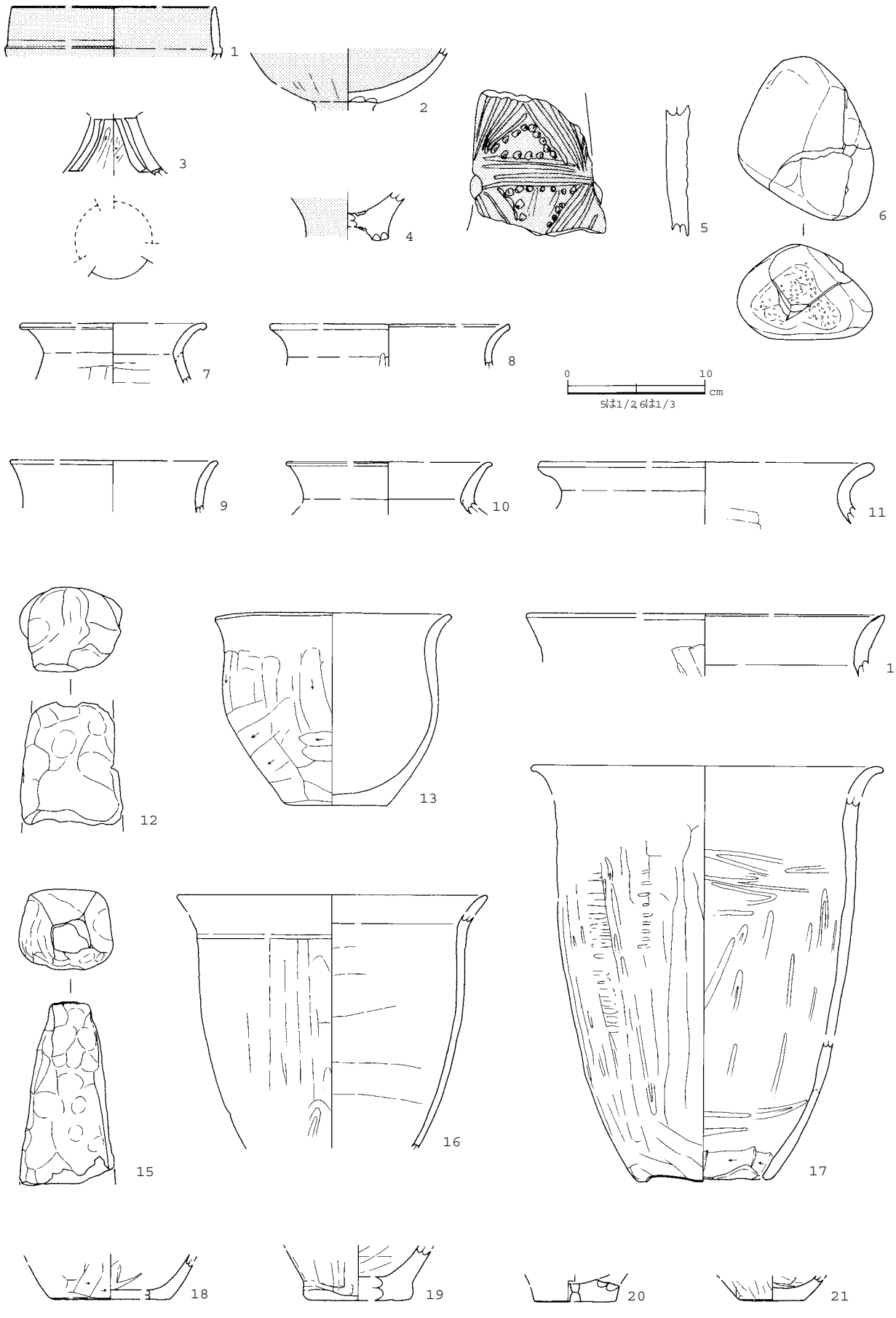
7 7.5YR3/3暗褐 土 粗ハードローム粒やや多く混じる、焼土粒混じる、粘性若干あり 若干しまる

8 3/4暗褐 土 硬質粘土ブロックやや多く混じる、粘性弱い しまる カマド袖部

9 4/3にぶ黄褐 土 山砂を斑状に大量に含む、粘性弱い しまる カマド袖部

10 7.5YR3/4暗褐 土 粗ハードローム粒多、粘性若干あり 若干ゆるい

第127図 207号遺構 カマド周辺遺物出土状況



第128図　207号遺構出土遺物１／２

21号竪穴住居跡（第132図）

規模（m）：長軸4.2／短軸4.0　**主軸方位**：349°　**貯蔵穴**：なし　**時期**：古墳時代後期後半

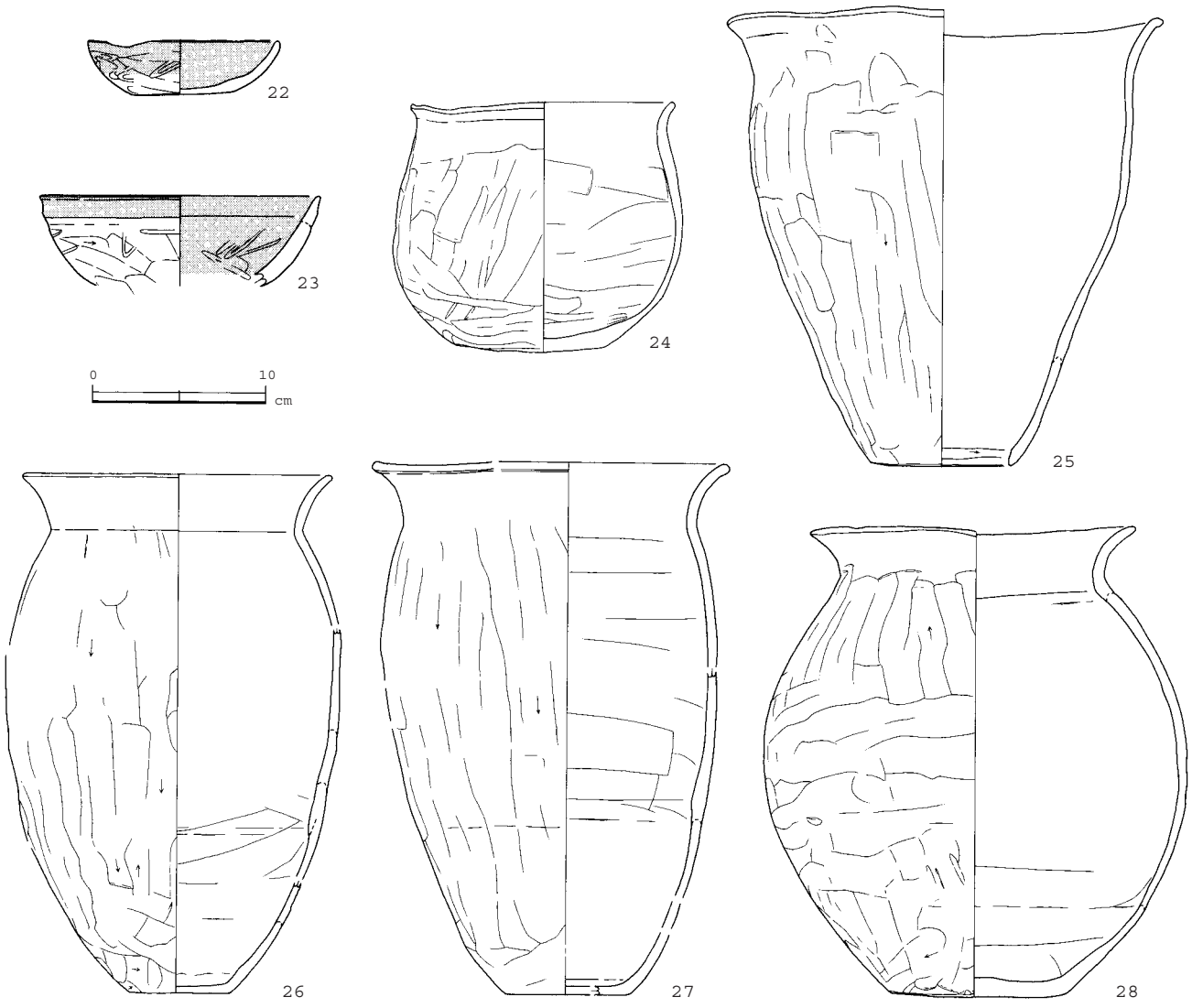
遺存状態の悪い方形竪穴住居である。竪穴自体が、深いところで10㎝、浅いところは数㎜の遺存状態である。カマドは、北辺中央に、構築粘質土のごく一部が平面的に遺存している。床面は、構築土と地山の境界が不明瞭である。主柱穴は確定できなかった。

遺構検出時より、カマドやその付近の土器が確認できていた。旧表土部分からの掘り込みを考えても、この遺構がこれほど遺存不良であることは、Ｄ１区に関しては、この時期以前には数十㎝以上高い位置に地表があったことを示している可能性がある。

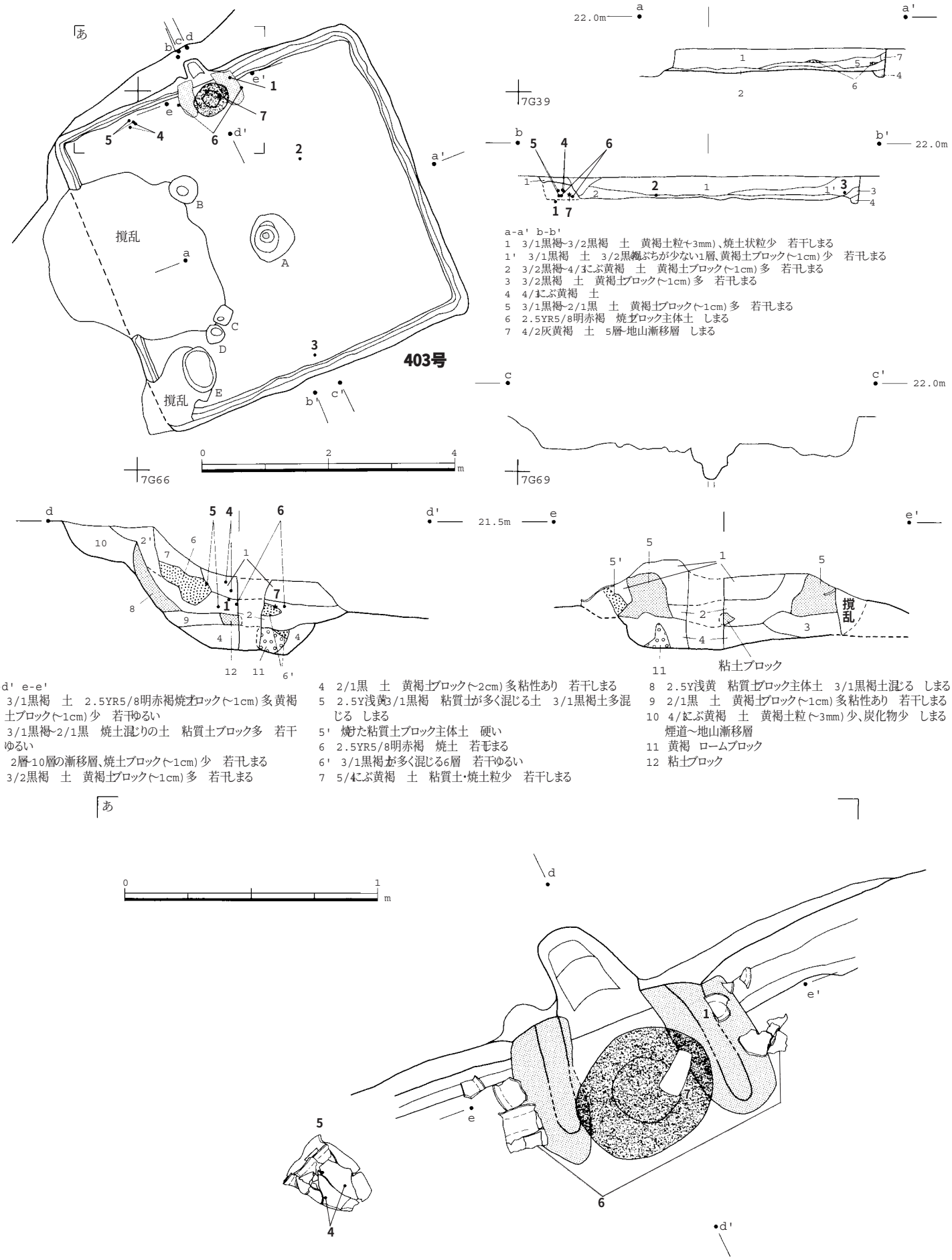
カマドは火床が不明瞭で、煙道も完全になくなっている。支脚も出土しなかった。

遺物はカマド付近と南東側に分かれて、土師器が数点出土している。

本遺構は、遺物の様相から古墳後期後半に属すると思われる。



第129図　207号遺構出土遺物２／２



a-a' b-b'
1 3/1黒褐~3/2黒褐 土 黄褐土粒(~3mm)、焼土状粒少 若干しまる
1' 3/1黒褐 土 3/2黒褐ぶちが少ない1層、黄褐土ブロック(~1cm)少 若干しまる
2 3/2黒褐~4/3にぶ黄褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)多 若干しまる
3 3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)多 若干しまる
4 4/3にぶ黄褐 土
5 3/1黒褐~2/1黒 土 黄褐土ブロック(~1cm)多 若干しまる
6 2.5YR5/8明赤褐 焼土ブロック主体土 しまる
7 4/2灰黄褐 土 5層~地山漸移層 しまる

d-d' e-e'
1 3/1黒褐 土 2.5YR5/8明赤褐焼土ブロック(~1cm)多黄褐土ブロック(~1cm)少 若干ゆるい
2 3/1黒褐~2/1黒 焼土混じりの土 粘質土ブロック多 若干ゆるい
2' 2層~10層の漸移層、焼土ブロック(~1cm)少 若干しまる
3 3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)多 若干しまる
4 2/1黒 土 黄褐土ブロック(~2cm)多粘性あり 若干しまる
5 2.5Y浅黄3/1黒褐 粘質土が多く混じる土 3/1黒褐土多混じる しまる
5' 焼けた粘質土ブロック主体土 硬い
6 2.5YR5/8明赤褐 焼土 若干しまる
6' 3/1黒褐土が多く混じる6層 若干ゆるい
7 5/4にぶ黄褐 土 粘質土・焼土粒少 若干しまる
8 2.5Y浅黄 粘質土ブロック主体土 3/1黒褐土混じる しまる
9 2/1黒 土 黄褐土ブロック(~1cm)多粘性あり 若干しまる
10 4/3にぶ黄褐 土 黄褐土粒(~3mm)少、炭化物少 しまる 煙道~地山漸移層
11 黄褐 ロームブロック
12 粘土ブロック

第130図 403号遺構 カマド周辺遺物出土状況

201号竪穴住居跡（第133～138図）

規模（m）：６～6.2×６～6.2

柱間：Ａ－Ｂ3.36　Ｂ－Ｃ2.99　Ｃ－Ｄ3.00　Ｄ－Ａ3.18
　　Ｅ－Ｆ2.67　Ｆ－Ｇ3.02　Ｇ－Ｈ2.39　Ｈ－Ｅ3.12
　　Ｉ－Ｊ2.43　Ｊ－Ｇ2.57　Ｇ－Ｈ2.40　Ｈ－Ｉ2.58

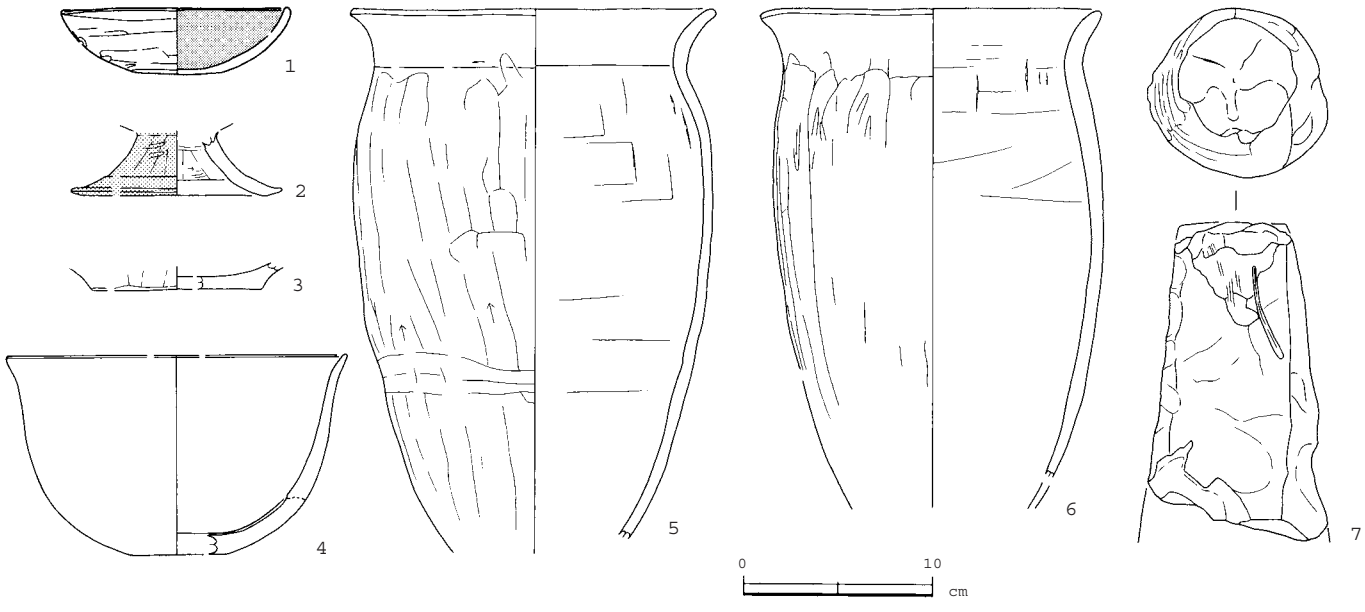
主軸方位：322°　**貯蔵穴**：なし　**時期**：古墳時代終末期

200号の北に位置し、それを切る。カマドを伴う方形竪穴住居で、数度の建て替えを経たようである。床面にはほぼ全周する周溝が壁際を巡り、カマドの反対側に出入り口ピットＫが検出された。貯蔵穴は認められない。廃絶直前の主柱穴はＡ－Ｂ－Ｃ－Ｄである。それぞれの柱穴の覆土は上層に焼土が堆積しており、必ずしもすべてに掘り込みが伴うわけではないが、覆土と遺物から示唆される焼却処分に先立って柱の抜き取り処理が行われた可能性が高い。

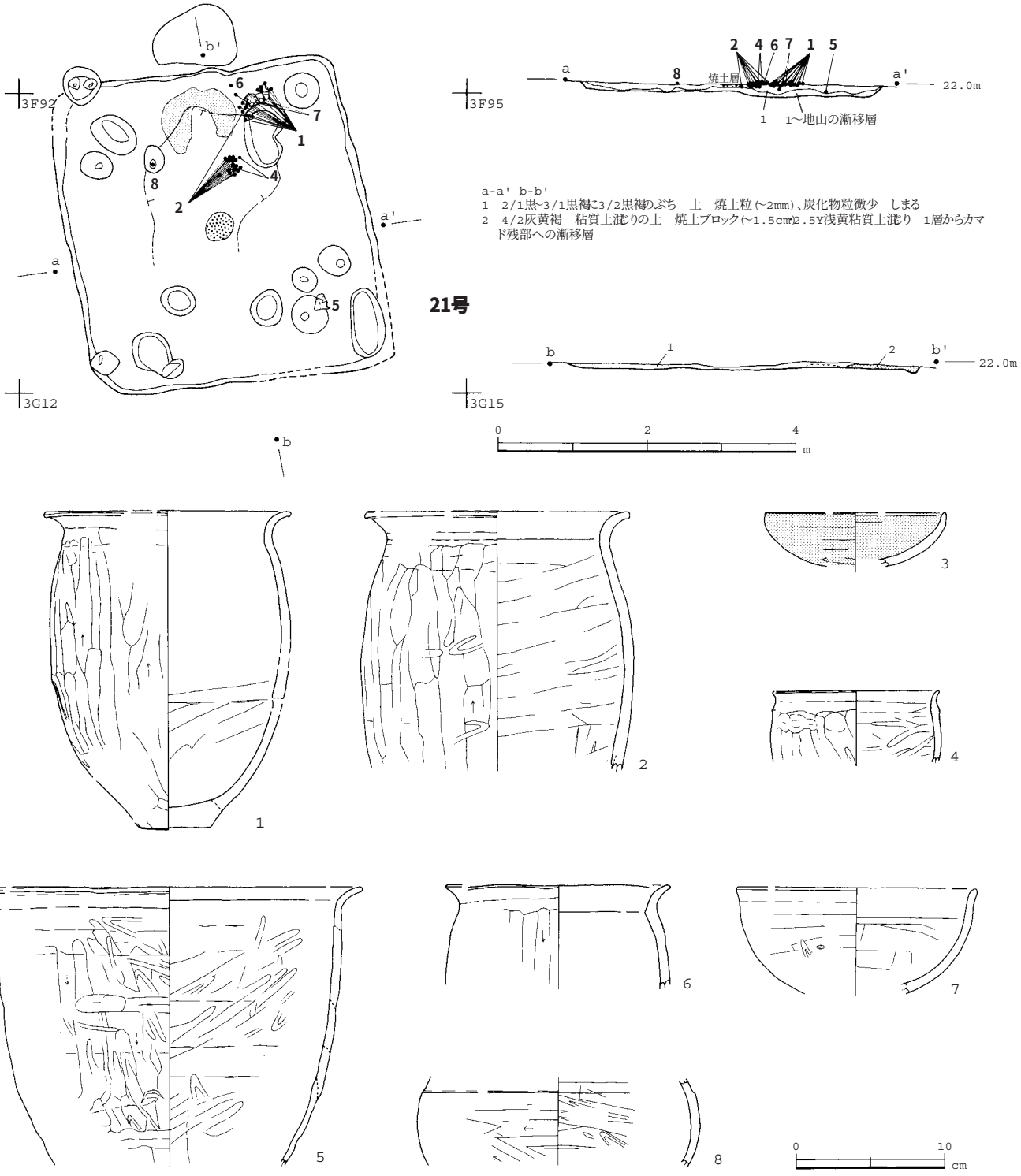
床面構築土を掘り下げたところ、一回り小さい約5.2m四方の竪穴の痕跡が見られた。柱穴Ｉも床面下ではじめて確認できたので、あきらかにＡ－Ｂ－Ｃ－Ｄより先行する建物の存在が考えられる。Ｉ－Ｊ－Ｇ－Ｈの組は南側の二柱穴をＥ－Ｆ－Ｇ－Ｈと共有するが、間の延びた後者が拡張後の姿を示すものと考えられるので、最小のＩ－Ｊ－Ｇ－Ｈ→Ｅ－Ｆ－Ｇ－Ｈ（北方向への拡張）→Ａ－Ｂ－Ｃ－Ｄ（東方向への拡張・竪穴の拡張）という順序が想定できる。

カマドは粘質土が広がった感じで検出され、原形ははっきりしなかった。粘質土ブロックが周囲に散らばった状況が認められる。断ち割りと上面の観察によると、袖材が部分的に残り、天井部分が崩落したように見受けられる。支脚は向かって左側の袖部分を中心に破片となって貼りつくかたちで検出された。また、須恵器模倣杯（４）が向かって右側上部から、他多数の土器がカマドから北隅にかけて検出された。建物廃絶に伴ってカマドも何らかの処理が為されたものと思われる。出入り口ピット近辺にも遺物の集中が見られた。

床面直上から下層にかけて大量の焼土と炭化材混じりの黒色土が検出された。焼土は、平面ではカマド付近をよけるかたちで太いU字状に、垂直方向では内側にゆるく傾斜するかたちで検出された。炭化物（材）もそこに多く混じり、明らかに廃絶時に焼却処分が行われたことを示している。また、



第131図　403号遺構出土遺物

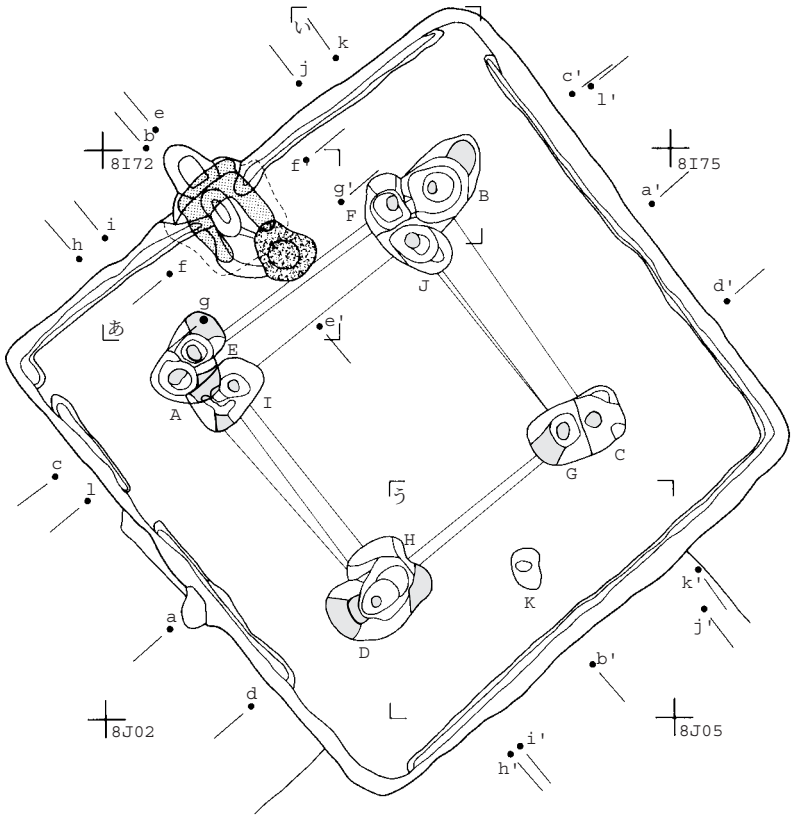


第132図　21号遺構および出土遺物

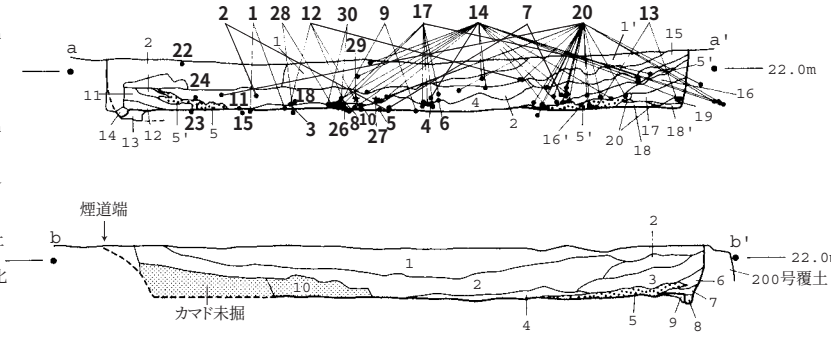
完形に近い土師器杯を主体とする土器群が、この焼土層にのみ込まれる、あるいは、乗るようなかたちで検出されており、焼却処分に伴っての儀礼活動が行われたことも示唆されている。

遺物は、土師器が主体で、他に、混入品である古相の土師器（18・19）・須恵器片（16)、土玉片（24)・炭化した梅あるいは桃の種（27)・支脚（25～30）が出土した。土師器には、黒色処理された杯、鉢・高杯・甕・甑がある。

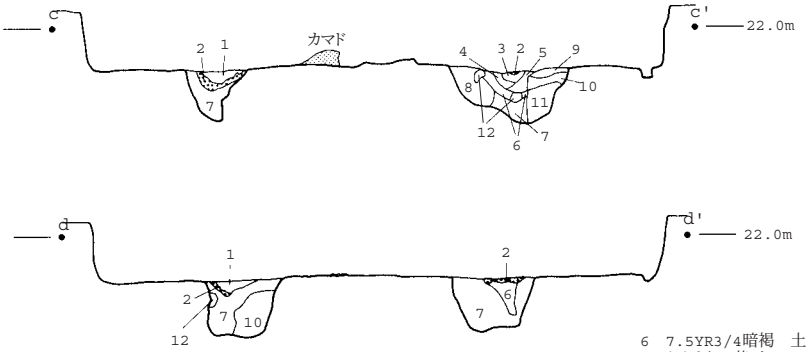
遺物の様相から、本遺構は古墳時代終末期に属すると思われる。

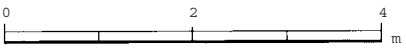


a-a' b-b'
1 3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(～5cm、大きさがそろわない)多炭化物粒(～3mm)、焼土粒(～3mm)少 しまる
1' 大きい黄褐土ブロックがほとんどない1層 しまる
2 3/1黒褐 土 黄褐土ブロック(～5cm、大きさがそろわない)多 しまる
2' 黄褐土ブロックが少ない2層 しまる
3 4/3にぶい黄褐 土 黄褐土ブロック(～3cm)多炭化物粒微少、焼土ブロック(～2cm)少
4 3/2黒褐～4/3にぶい黄褐 土 黄褐土ブロック(～2cm)多
5 2.5YR4/6赤褐 焼土主体土 炭化物粒(～5mm)少、2.5Y浅黄 粘質土粒(～5mm)少 若干しまる
5' 2.5YR4/6赤褐 焼土多く含む土 3/2黒褐土混じる、炭化物粒(～5mm)少 しまる
6 2/1黒 炭化物多く含む土 焼土粒(～3mm)多、黄褐土粒(～5mm)多 若干しまる
7 3/2黒褐 焼土混じりの土 赤みが強い、黄褐土ブロック(～1cm)少 若干しまる
8 3/1黒褐 土 黄褐土粒(～5mm)少 若干しまる



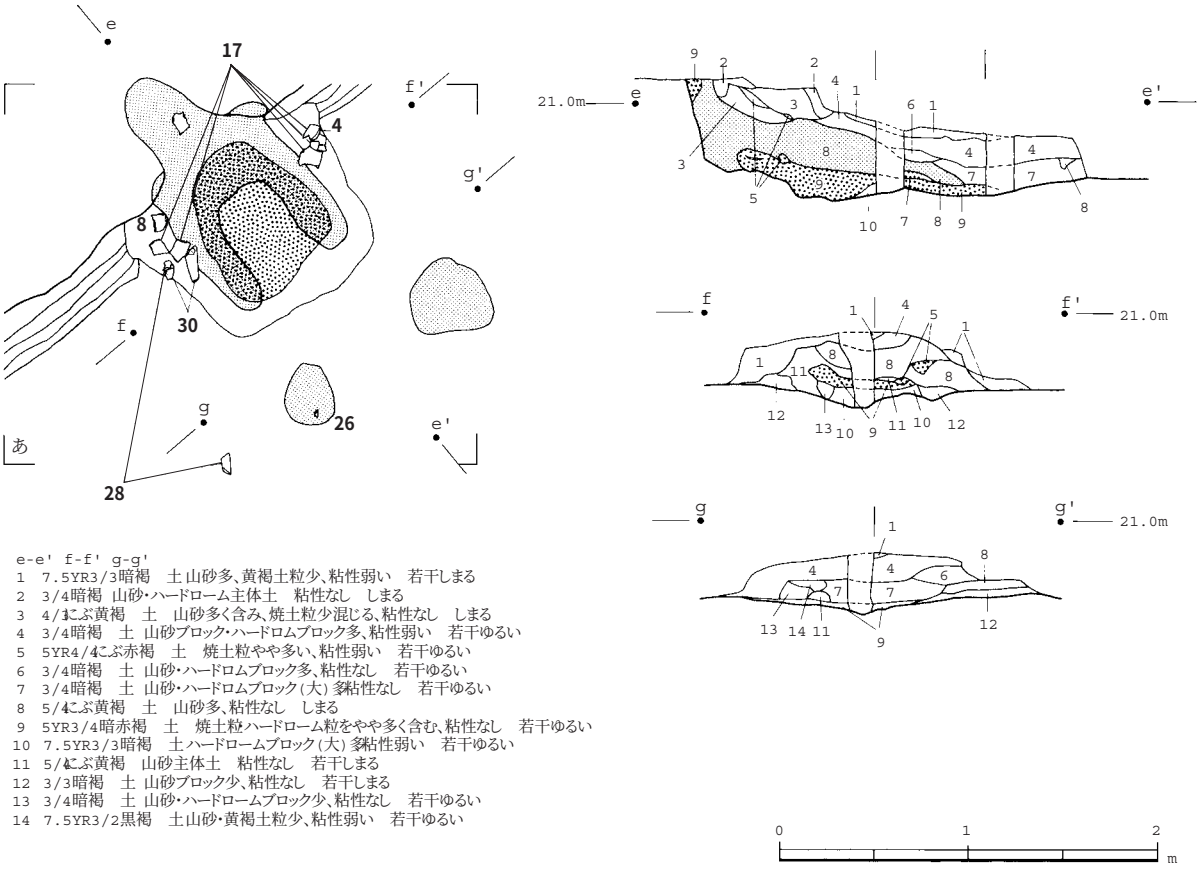
9 3/2黒褐 土 黄褐土粒ブロック多 しまる 床土
10 2.5Y浅黄～4/3にぶい黄褐が混じる 土混じりの粘質土 最下部に焼土多、黄褐土ブロック(～2cm)少 しまる
11 3/1黒褐～3/2黒褐がマーブル状に混じる 土 黄褐土粒(～3mm)多、焼土粒(～3mm)少 しまる
12 3/1黒褐～3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(～1cm)多 しまる
13 4/4褐 ロームブロック主体土 炭化物粒・焼土粒少 よくしまる
14 3/1黒褐 土 ゆるい
15 3/1黒褐～2/1黒 土 黄褐土ブロック(～1cm)多焼土粒(～3mm)多、炭化物粒(～3mm)少 しまる
16 3/2黒褐～4/3にぶい黄褐 土 黄褐土ブロック(～2cm)少焼土粒(～3mm)少
16' 炭化物焼土の多い16層 しまる
17 3/1黒褐～4/3にぶい黄褐 土 黄褐土ブロック(～2cm)少焼土粒(焼けたロームブロック含む)少炭化物粒微少 若干しまる
18 3/2黒褐～4/3にぶい黄褐 土 黄褐土粒(～5mm)多、炭化物ブロックが微少、焼土粒微少 若干しまる
18' 若干ゆるい17層
19 3/1黒褐 土 黄褐土がマーブル状に混じる 若干ゆるい
20 炭化物主体土



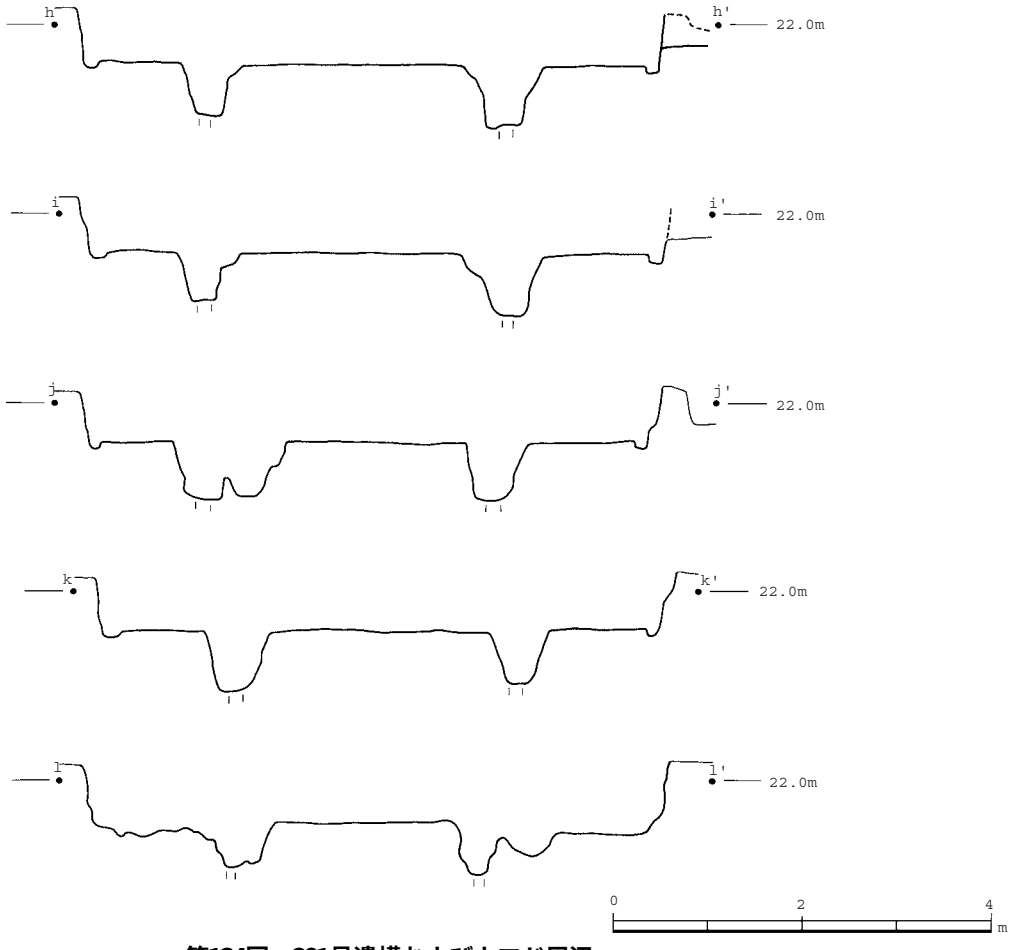


c-c' d-d'
1 7.5YR2/2黒褐 土 ハードローム粒・山砂少、粘性ややあり しまる
2 2.5YR4/6赤褐 焼土主体土 炭化物粒混る、粘性なし かなりゆるい
3 7.5YR3/2黒褐 土 山砂・ハードローム粒やや多く含む、粘性ややあり ゆるい
4 3/3暗褐 土 山砂・ハードローム粒多、粘性ややあり 若干しまる
5 7.5YR3/3暗褐 土 山砂・ハードローム粒少、粘性ややあり 若干ゆるい
6 7.5YR3/4暗褐 土 ハードローム粒少、山砂微少、粘性ややあり 若干ゆるい
7 7.5YR3/3暗褐 土 ハードロームブロックやや多く含む、粘性ややあり ゆるい
8 7.5YR3/3暗褐 土 ハードロームブロック(大やや多く含む、粘性ややあり 若干ゆるい
9 4/4褐 土 ハードロームブロック多、粘性ややあり しまる
10 3/2黒褐 土 ハードロームブロック(大やや多く含む、粘性ややあり しまる
11 3/3暗褐 土 ハードロームブロック(特大)多粘性ややあり 若干ゆるい
12 ハードロームブロック

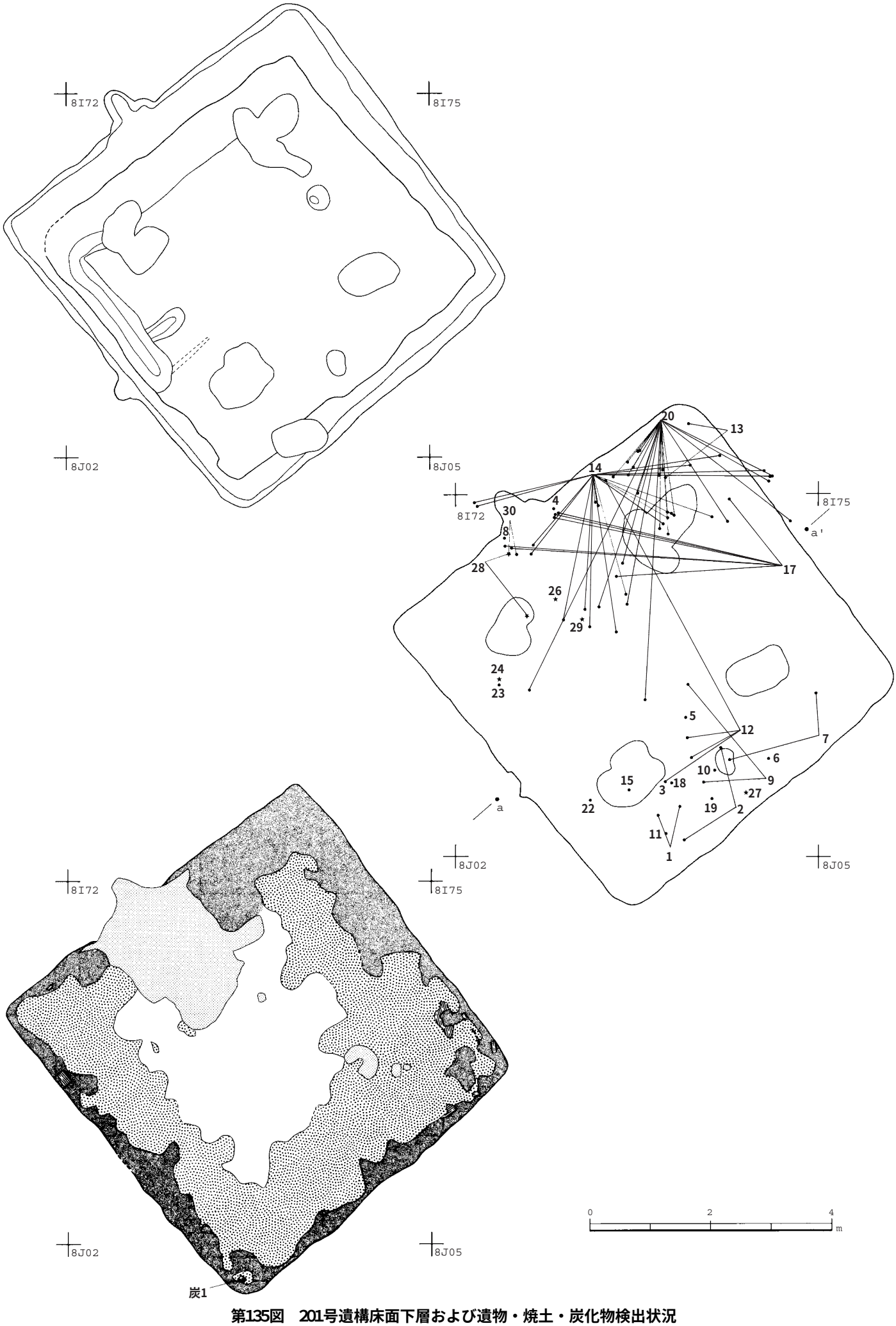
第133図 201号遺構



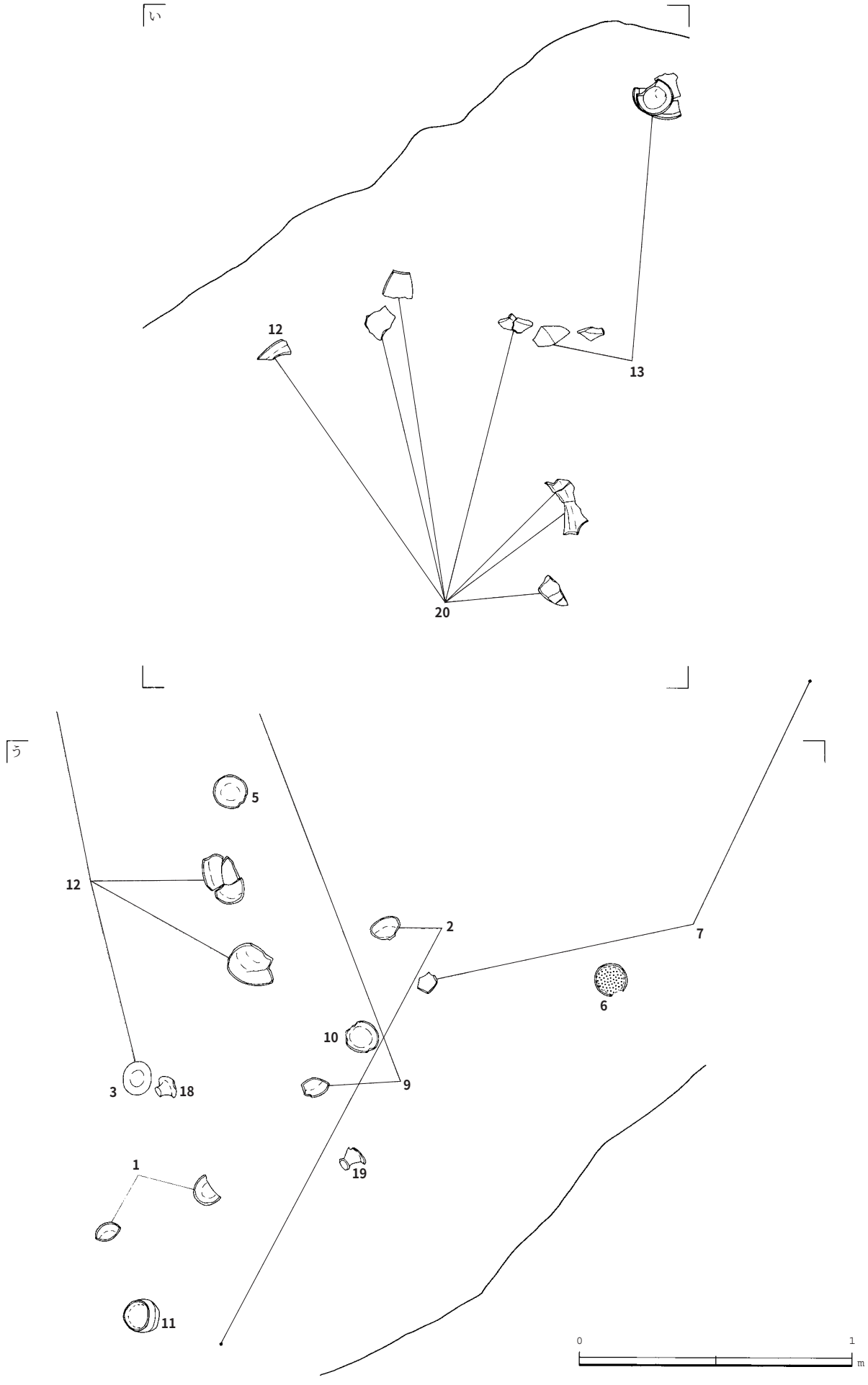
e-e' f-f' g-g'
1 7.5YR3/3暗褐 土 山砂多、黄褐土粒少、粘性弱い 若干しまる
2 3/4暗褐 山砂・ハードローム主体土 粘性なし しまる
3 4/3にぶい黄褐 土 山砂多く含み、焼土粒少混じる、粘性なし しまる
4 3/4暗褐 土 山砂ブロック・ハードロムブロック多、粘性弱い 若干ゆるい
5 5YR4/4にぶい赤褐 土 焼土粒やや多い、粘性弱い 若干ゆるい
6 3/4暗褐 土 山砂・ハードロムブロック多、粘性なし 若干ゆるい
7 3/4暗褐 土 山砂・ハードロムブロック(大)多粘性なし 若干ゆるい
8 5/4にぶい黄褐 土 山砂多、粘性なし しまる
9 5YR3/4暗赤褐 土 焼土粒ハードローム粒をやや多く含む、粘性なし 若干ゆるい
10 7.5YR3/3暗褐 土 ハードロームブロック(大)多粘性弱い 若干ゆるい
11 5/4にぶい黄褐 山砂主体土 粘性なし 若干しまる
12 3/3暗褐 土 山砂ブロック少、粘性なし 若干しまる
13 3/4暗褐 土 山砂・ハードロームブロック少、粘性なし 若干ゆるい
14 7.5YR3/2黒褐 土山砂・黄褐土粒少、粘性弱い 若干ゆるい



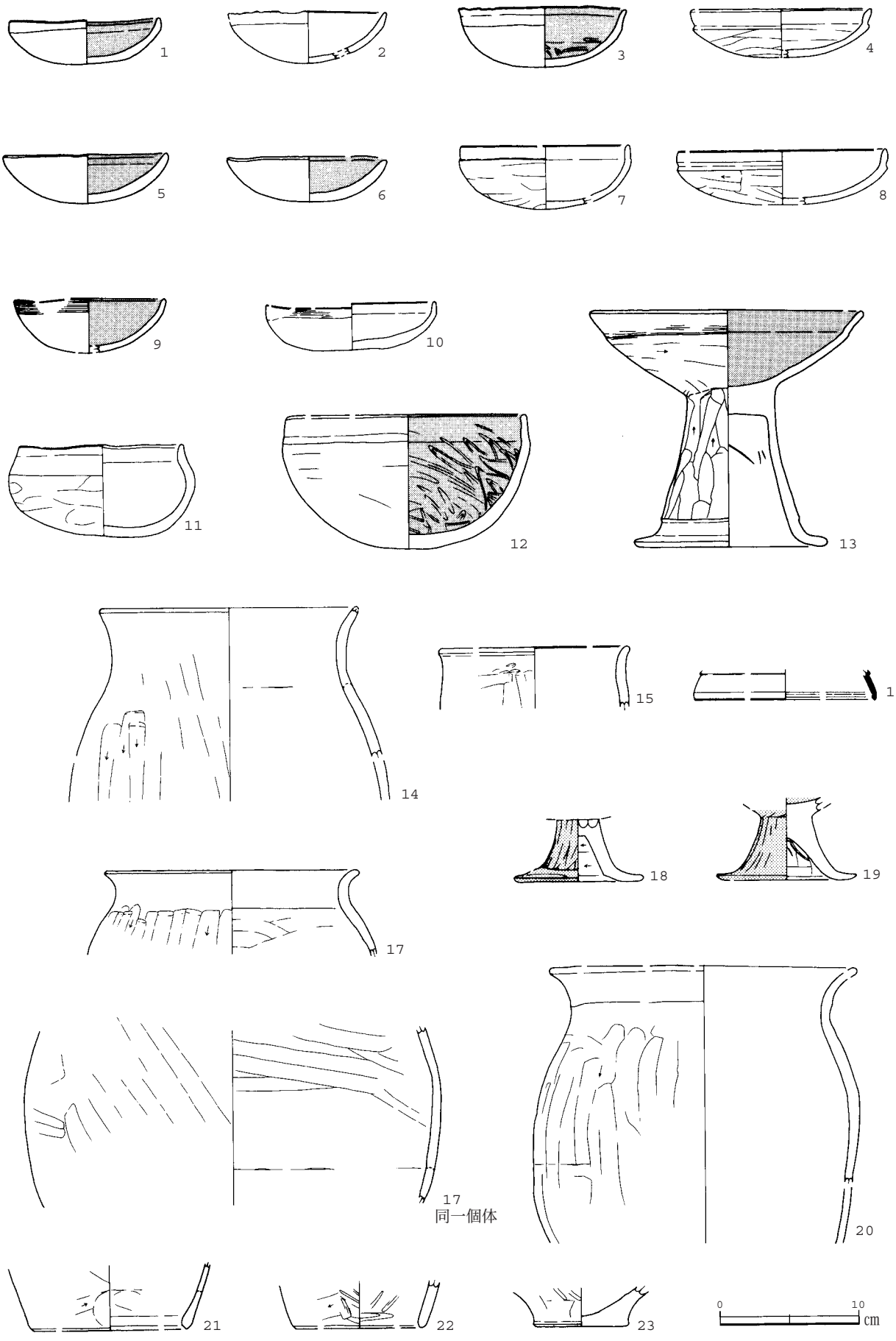
第134図　201号遺構およびカマド周辺



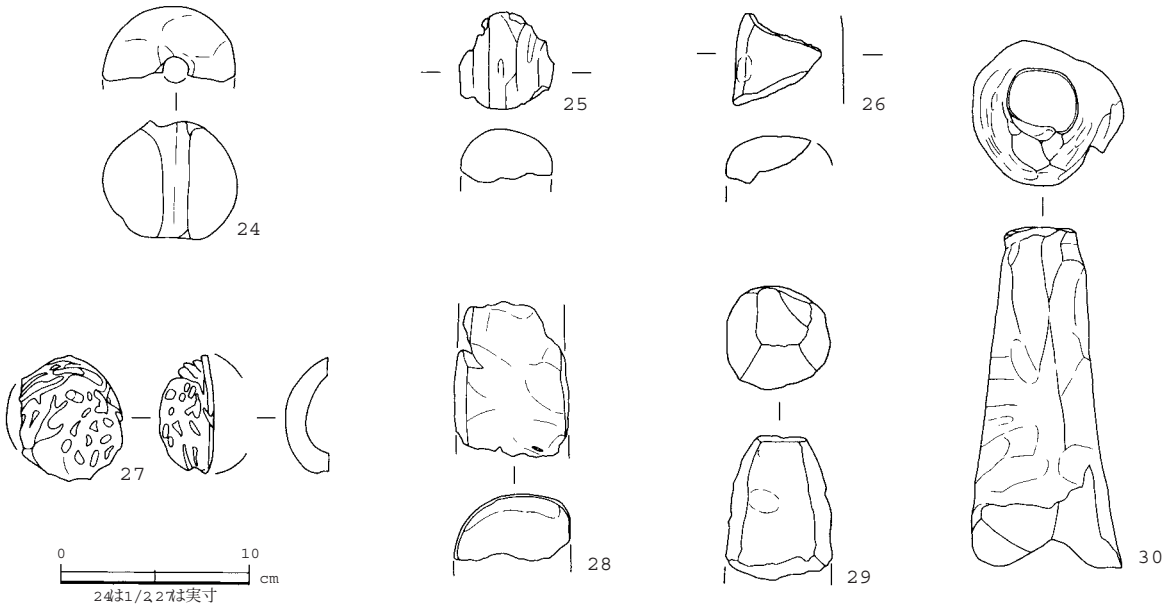
第135図　201号遺構床面下層および遺物・焼土・炭化物検出状況



第136図　201号遺構　遺物出土状況



第137図　201号遺構出土遺物１／２



第138図　201号遺構出土遺物２／２

35号竪穴住居跡（第139図上）

規模（m）：不明　**主軸方位**：327°　**貯蔵穴**：不明　**時期**：弥生中期後半？

大半が調査区外にある方形竪穴住居である。南東部のごく一部が調査できたにすぎない。遺物も少量の土器片が出土しただけである。床面には壁際に周溝が検出された。

覆土は、特に焼土・炭化物が集中する層があるわけではなく、また、黄褐土ブロックが卓越する層も見られなかった。廃絶過程は不明である。遺物は４を除き、一括取り上げ遺物であり、混入品の可能性が高い。

本遺構は、帰属時期の判別の参考になる遺物が皆無であったことから、覆土中のテフラの同定を依頼した（第７節参照）。その結果、２・３層から弥生時代初期、１層下位に古墳時代初期のテフラが確認されている。

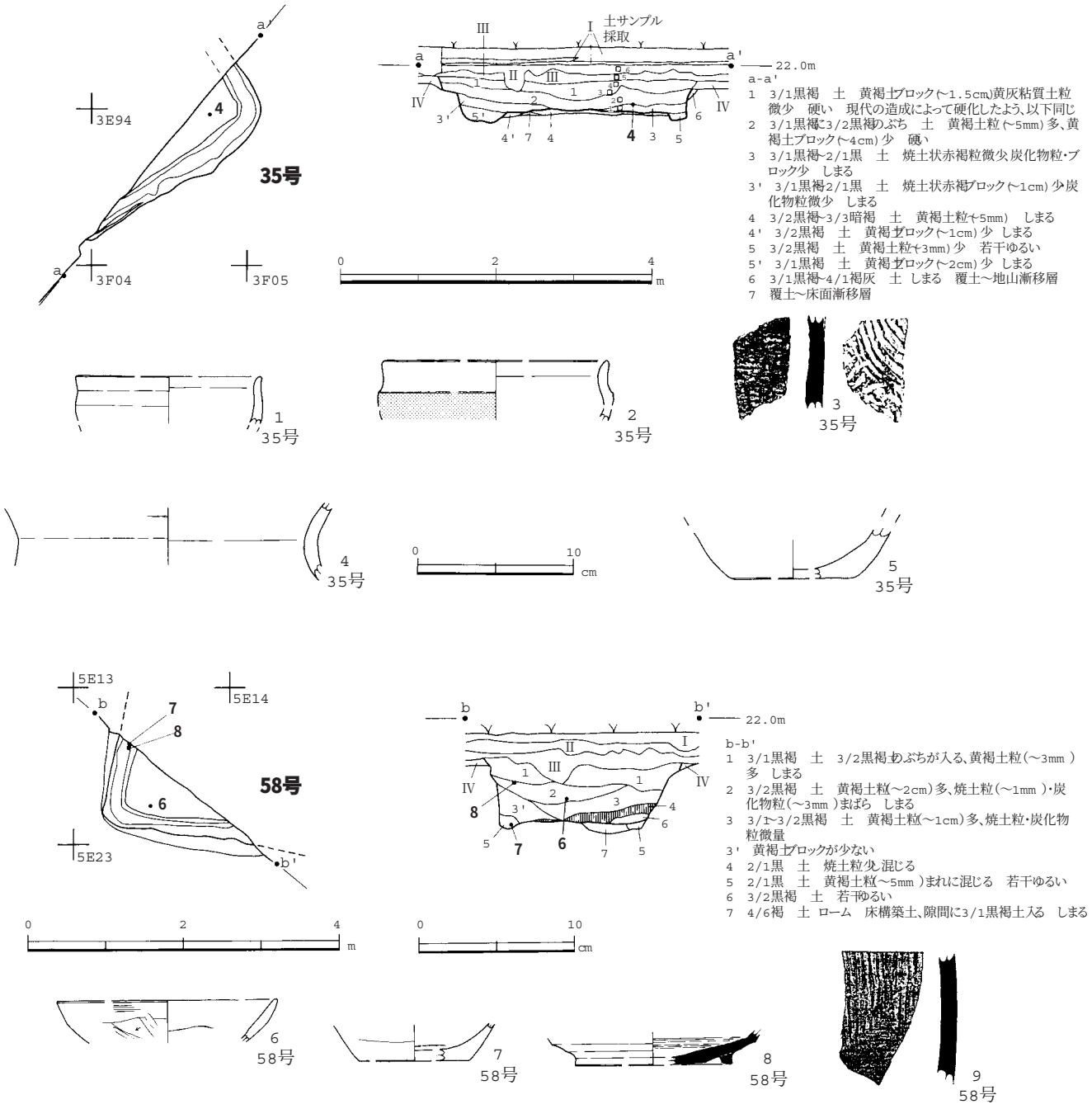
Ｄ１区の西部に弥生終末期の57号方形竪穴住居が１棟検出されていることから、竪穴の形状を根拠に、当該期の遺構であるとも考えられるが、テフラの様相では二次堆積土中にそれが見られるということなので、ここでは遺構数の多い宮ノ台式に属するものと考えておきたい。

58号竪穴住居跡（第139図下）

規模（m）：不明　**主軸方位**：９°／99°　**貯蔵穴**：不明　**時期**：古墳時代後期

Ｄ１区東端に位置し、ほとんどが調査区外にある方形竪穴住居である。床面直上から覆土下層にかけて炭化物を多く含むと思われる黒色土層が検出された。廃絶してすぐに堆積したようなので、廃絶時の焼却処分に関係するものと思われる。

遺物は土器が数片出土したが、時期の確定はできない。８は混入品である。本遺構は、竪穴の形状から、古墳後期から終末期に属すると思われる。



第139図　35号・58号遺構および出土遺物

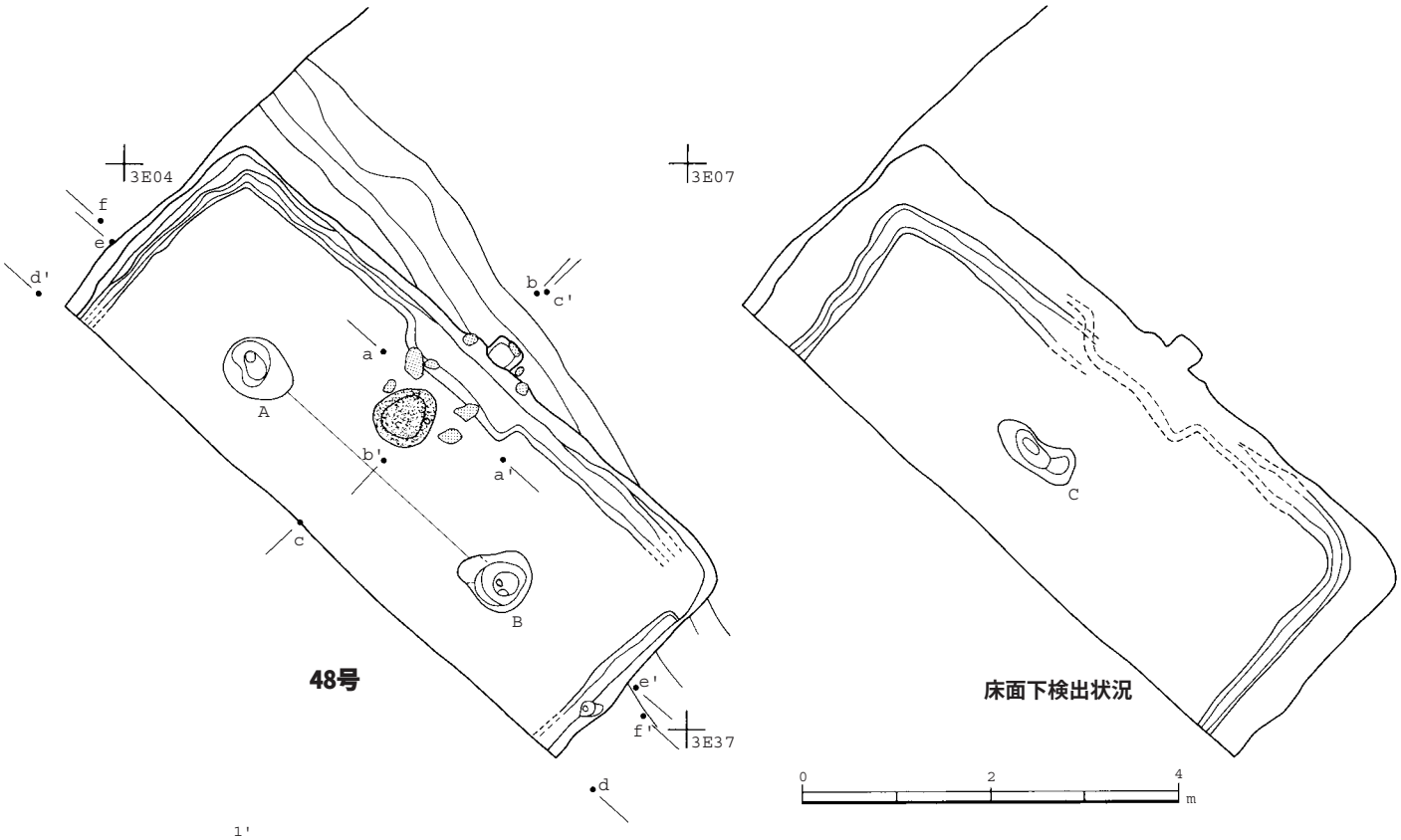
56号竪穴建物跡（第23図中）

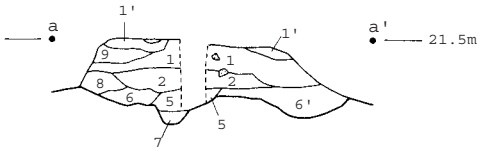
規模（m）：不明　**主軸方位**：357°　**時期**：古墳時代後期

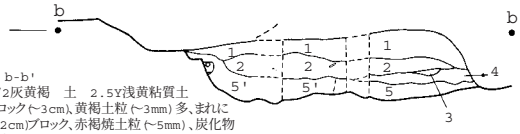
調査区北東隅に位置する方形竪穴建物で、南西隅を除く大部分が調査区外にある。床面は、ハードローム中に黄褐土の貼土で構築され、壁際に周溝があった。

覆土中には明瞭な焼土や大きい炭化物ブロックは少なかったが、西壁面が火を受けて赤変していたので、廃絶に焼却の過程が含まれていたことが示唆される。また、黄褐土ブロックが覆土の各層に少なからず認められたので、人為的な埋積が進んだことも同じく想定できる。

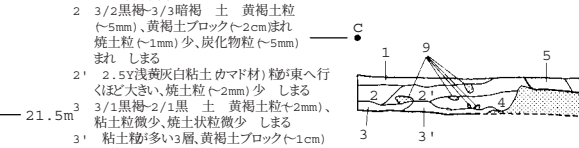
遺物は土器片が少量得られただけで、時期の確定が難しいが、平面形・主軸方位から古墳時代後半のものの可能性が高い。



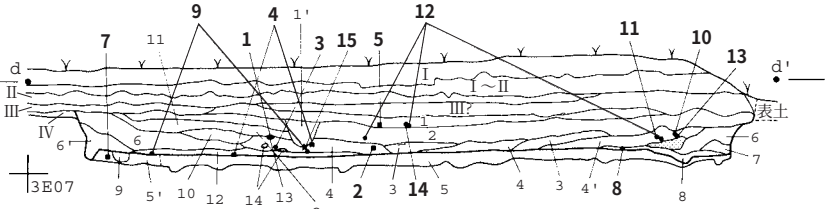




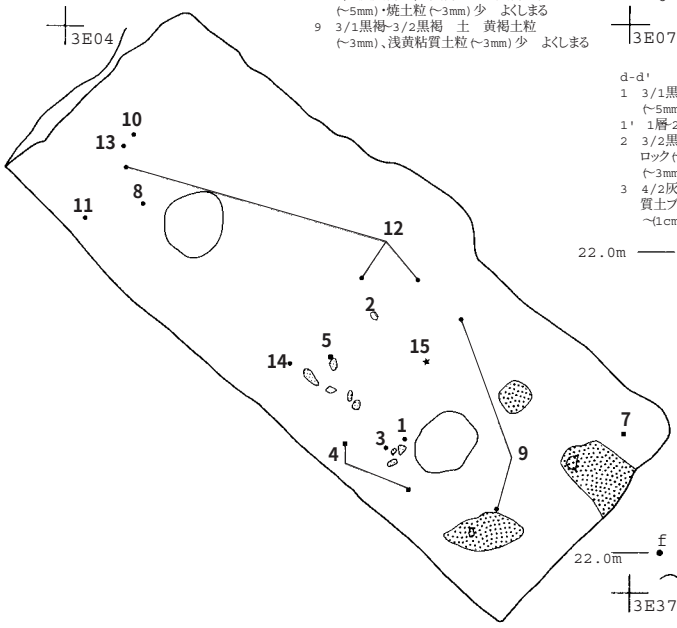
a-a' b-b'
1 4/2灰黄褐　土　2.5Y浅黄粘質土ブロック(～3cm)、黄褐土粒(～3mm)多、まれに(～2cm)ブロック、赤褐焼土粒(～5mm)、炭化物粒少　よくしまる
1' 粘質土ブロックの多い1層　よくしまる
2 3/2黒褐　土　2.5Y浅黄粘質土粒(～6mm)、黄褐土粒(～5mm)・赤褐焼土粒(～5mm)多、炭化物粒(～5mm)まれ　しまる
3 3/1黒褐～2/1黒　土　2.5Y浅黄粘質土粒(～2mm)、黄褐土粒(～2mm)多、赤褐焼土粒(～5mm)多　しまる
4 7.5YR3/2黒褐　焼土微粒混りの土　黄褐土粒(～2mm)、赤褐焼土粒(～2mm)　しまる
5 4/3にぶ黄褐～3/2黒褐　土　黄褐土粒(～5mm)　しまる
5' 漸移的に黒くなり焼土粒(～5mm)の量が増える5層　若干しまる
6 4/3にぶ黄褐　土　よくしまるカマド袖部の底
6' 4/6褐3/2黒褐が混じるロームブロック主体土　しまるカマド袖部の底
7 3/2黒褐　ロームブロック主体土若干ゆるい
8 4/2灰黄褐～3/2黒褐　土　黄褐土粒(～5mm)・焼土粒(～3mm)少　よくしまる
9 3/1黒褐～3/2黒褐　土　黄褐土粒(～3mm)、浅黄粘質土粒(～3mm)少　よくしまる



c-c'
1 3/1黒褐に3/2黒褐のぶち少　土　黄褐土粒(～2mm)、焼土粒(～1mm)少、炭化物粒微少　しまる　現代の造成によって硬化したよう、以下同じ
2 3/2黒褐～3/3暗褐　土　黄褐土粒(～5mm)、黄褐土ブロック(～2cm)まれ　焼土粒(～1mm)少、炭化物粒(～5mm)まれ　しまる
2' 2.5Y浅黄灰白粘土(カマド材)粒が東へ行くほど大きい、焼土粒(～2mm)少　しまる
3 3/1黒褐～2/1黒　土　黄褐土粒(～2mm)、粘土粒微少、焼土状粒微少　しまる
3' 粘土粒が多い3層、黄褐土ブロック(～1cm)が増える　しまる
4 2/1黒　土　黄褐土粒(～3mm)少、浅黄粘土粒(～5mm)多、焼土粒(～5mm)多　しまる
5 4/3にぶ黄褐　土　黄褐土粒(～3mm)・浅黄粘土粒(～2mm)・焼土粒(～5mm)少　しまる
6 3/1黒褐　土　黄褐土粒(～2mm)微少、焼土状粒微少　しまる
7 3/1黒褐～2/1黒　土　焼土粒(～1mm)、黄褐土粒(～1mm)、マーブル状に褐土混じる　しまる　12号硬化面
8 3/2黒褐　土　焼土粒(～1mm)少、黄褐土粒微少　しまる　硬化面～カマド漸移層
9 粘土ブロック

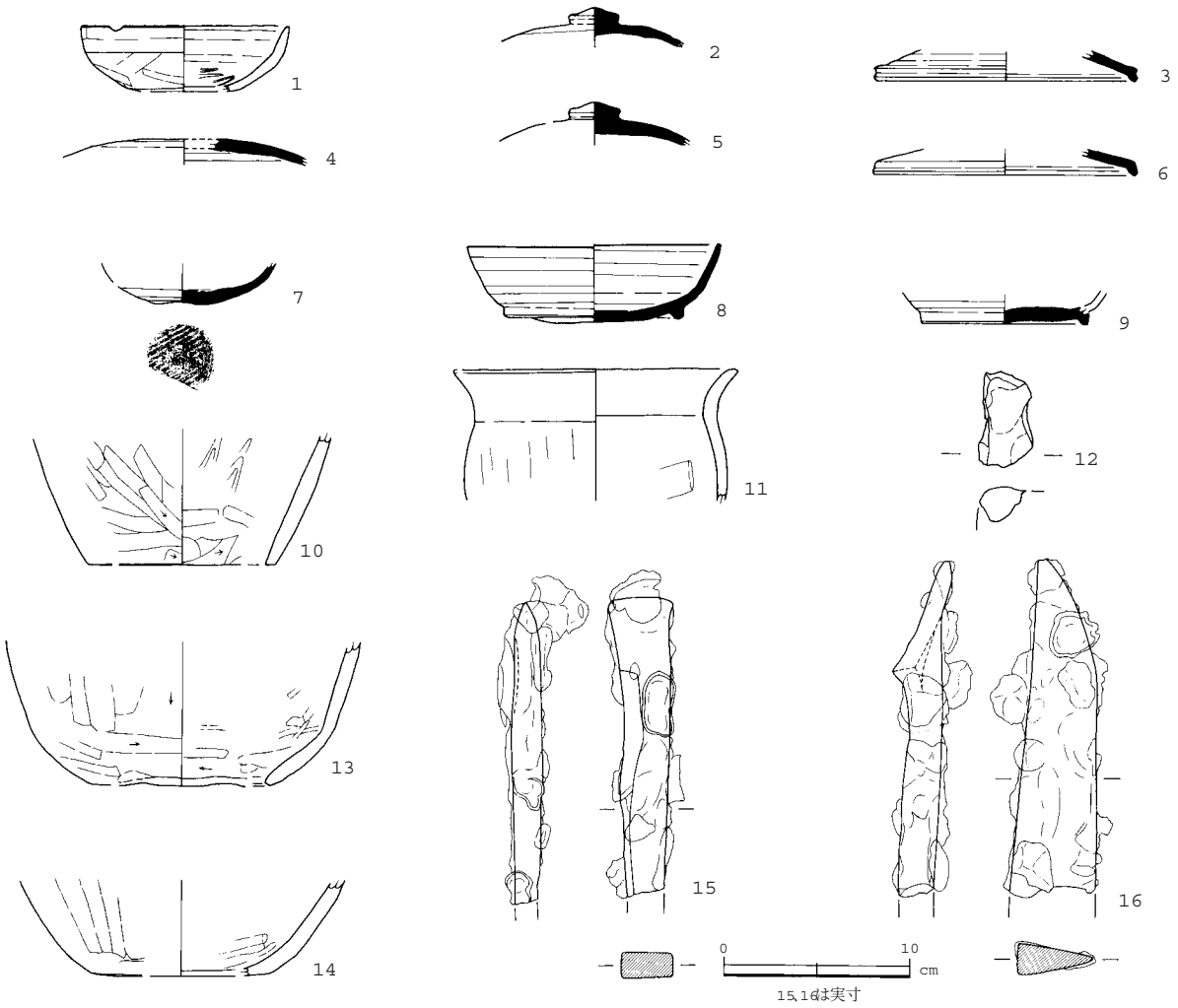


d-d'
1 3/1黒褐に4/2灰黄褐が混じる　土　黄褐土粒(～5mm)・焼土粒(～3mm)少　しまる
1' 1層-2層の漸移層
2 3/2黒褐に4/2灰黄褐が混じる　土　黄褐土ブロック(～1cm)少黄褐土粒(～3mm)多、焼土粒(～3mm)少、炭化物粒微少、　しまる
3 4/2灰黄褐　粘質土混りの土　2.5Y浅黄粘質土ブロック(～3cm)少黄褐・褐土ブロック(～1cm)多　しまる
4 3/2黒褐に3/1黒褐がマーブル状に混ざる　土　黄褐土粒(～2mm)多、焼土粒(～2mm)少、炭化物ブロック(～1cm)まれ
4' 粘土に近い4層
5 4/3にぶ黄褐～4/4褐に黒褐のぶち　土硬い地山土による貼床
5' 黒褐が強く、黄褐土ブロック(～5cm)少　しまる
6 3/1黒褐　土　黄褐土粒焼土粒微少　しまる
6' 黄褐土ブロックが大きい、炭化物ブロック少　しまる
7 4/6褐　土　地山に近い　よくしまる
8 4/2灰黄褐-4/3にぶ黄褐　粘質土混じりの土　5YR6/6橙焼けた粘質土粒(～5mm)少　しまる
9 4/3にぶ黄褐～4/4褐　土しまる
10 3/2黒褐-4/3にぶ黄褐　土　黄褐土粒(～5mm)少　しまる
11 3/1黒褐-3/2黒褐　土　黄褐土ブロック(～1cm)少炭化物粒微少　しまる
12 4/2灰黄褐　土しまる　床面直上
13 黄褐　ロームブロック
14 浅黄　粘質土主体土



e-e'
1 3/1黒褐～2/1黒　土　炭化物粒(～5mm)・焼土粒(～5mm)少、黄褐土粒(～5mm)混じる　若干ゆるい
2 4/3にぶ黄褐と2/2黒褐がマーブル状に混ざる　土
3 3/2黒褐～3/1黒褐　土　黄褐土ブロック(～2cm)少　ゆるい
4 3/2黒褐　土　黄褐土ブロック(～4cm)少　ゆるい
5 黄褐土粒・ブロックの多い1層　しまる
6 4/3にぶ黄褐　ロームブロック主体土　若干しまる
7 3/1黒褐に3/2黒褐の小ぶち　土　黄褐土粒(～3mm)少　若干しまる
7' 3/2黒褐強い7層、炭化物ブロック(～3cm)多　若干しまる　炭化物サンプル採取層
7'' 7層-9層の漸移層
8 3/1黒褐に4/3にぶ黄褐のぶち　土　黄褐土ブロック(～3cm)多　若干しまる
9 3/2黒褐　土　黄褐土ブロック(～5mm)多・炭化物ブロック(～1cm)少　若干しまる
10 3/2黒褐　土　黄褐土ブロック(～3cm)混じる　ゆるい

第140図　48号遺構および焼土・遺物検出状況



第141図　48号遺構出土遺物

第５節　掘立柱建物跡・奈良・平安時代・中世・近世

掘立柱建物跡は、調査区全体で12棟検出されている。時期の確定的なものは、古墳中～後期竪穴住居に近接した位置にある22号だけで、ほかは、古墳時代から奈良・平安時代の間に位置づけられると幅広く想定している。

なお、掘形の規模が小さく遺物が包含されにくいという掘立柱建物遺構は、反面、早く埋没するために限定されたテフラが含まれるのではないか、と予想して、竪穴建物遺構と同じくテフラの同定を試みている。詳細な結果は第７節のとおりである。

奈良・平安時代の遺構は、48号竪穴住居跡、11・12号道路跡、205号方形周溝墓の３つだけで、この時期に古墳時代ほどの密度は感じられない。11・12号道路跡は、ある程度埋没した48号を切ることから、奈良時代前半以降と考えられるものである。205号は９世紀前半の利用が確認されている。205号と北野原遺跡の方形周溝墓の存在は、平安時代に至っての墓域化を示すもので、当時の周辺の土地利用が示唆される興味深い資料である。

中世の遺構は、64号土坑と302号道路跡が検出されている。41号溝跡も、11・12号との切り合いが不明ながら、中世に属する可能性がある。302号は第２図のとおり、つい最近まで利用されていたものであるが、下層の遺物に中世以降のものが入らないので、開始時期は遅くとも中世期に遡ると考えた。近世の遺構は、寛永通寶の出土した土坑50号１基だけである。

48号竪穴住居跡（第140・141図）

規模（m）：7.0×7.0？　**柱間**：A－B3.62　**主軸方位**：313°　**貯蔵穴**：なし？　**時期**：奈良時代

調査区北東部に位置し、西半が調査区外にある、大型の方形竪穴住居である。東辺中央に煙道の短いカマドが伴う。主柱穴はA・Bの２つが検出されたのみである。東隅からカマドにかけての上層は11号道路側溝跡に切られている。

この竪穴は拡張が行われたらしく、床面構築土の下で、若干規模の小さい周溝とC（深さ40㎝）が検出された。調査された範囲ではA・Bのほかに柱穴が見られなかったので、立て替えの際、柱の位置は変えなかったのかもしれない。

カマドは、粘質土ブロックが集中することは明白だが、袖などの形状がうかがえない、遺存不良の状態であった。支脚は小片以外出土していない。

覆土は、現代の造成工事による加圧のために全体的にかなり締まっていたが、撹乱はそれほど受けておらず、遺存は良好であった。南壁付近の下層には焼土の集中が見られ、カマド付近では粘質土ブロック・粒が散っていた。柱穴の覆土は、抜き取り・立ち腐れなのかは、判然としなかった。ただ、柱痕跡がないことを積極的に考えれば、柱抜き取り後に埋め戻されず開口していたため、漸移的な堆積をしたという見方も可能である。覆土下層の焼土の存在と、カマドが原形をとどめていないという点からも、古墳時代の例と同じく、一連の廃絶活動が行われたと想定できる。

遺物は、土師器・須恵器を中心に、支脚片（12)、鉄製品（15・16）が出土した。刀子（16）は覆土一括取り上げ資料である。須恵器には、宝珠つまみを持つ蓋（２・５)、底が高台からはみ出す、丸みのある杯（８）がある。

本遺構は、湖西産と思われる須恵器高台付杯（８）の形状から、８世紀前葉、奈良時代前半に属すると考えられる。

213号掘立柱建物跡（第142図）

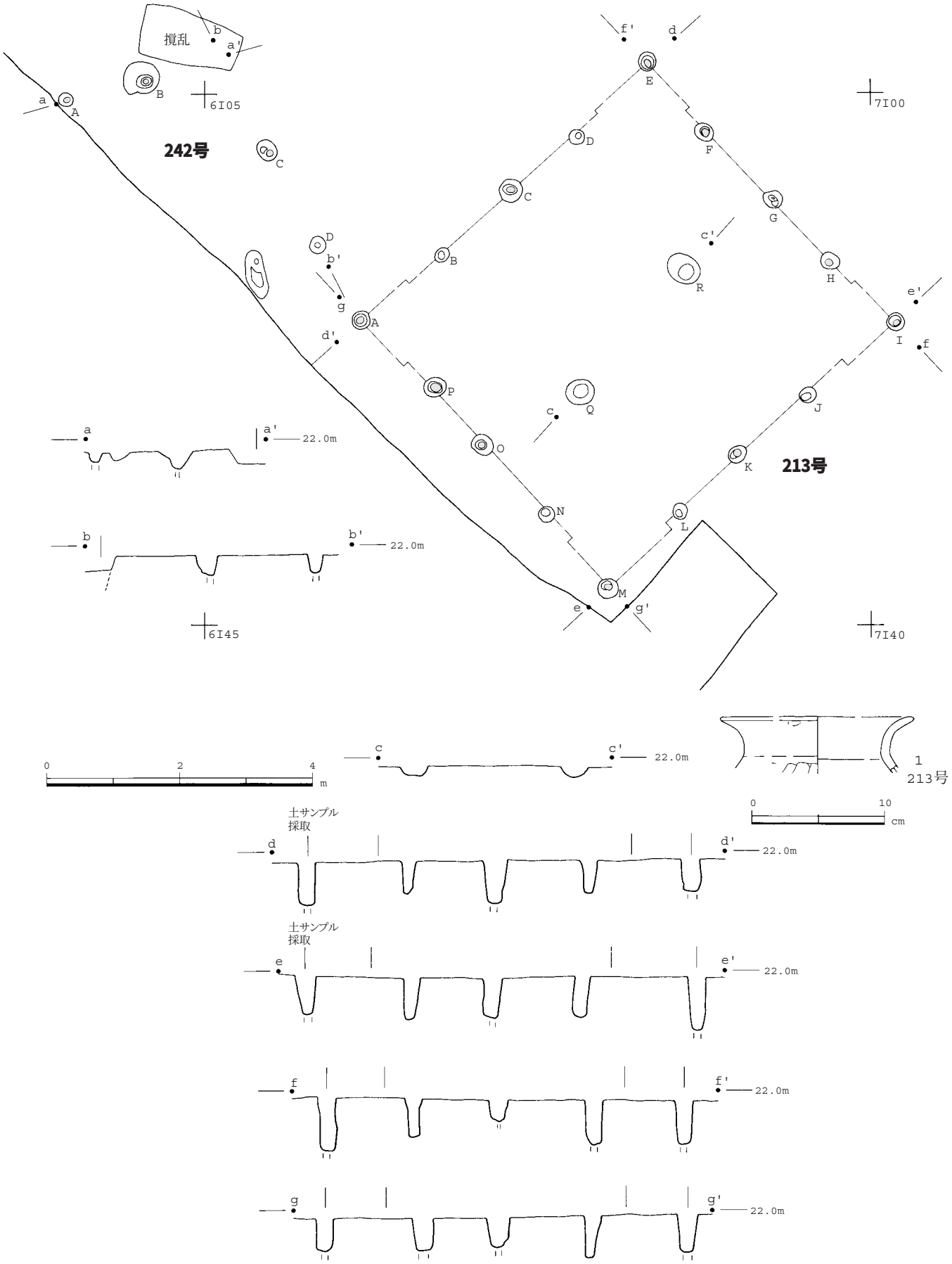
規模：４×４間　**主軸方位**：48°

柱間（m）：A－B1.57　B－C1.44　C－D1.30　D－E1.50　E－F1.36　F－G1.41　G－H1.28
H－I1.37　I－J1.76　J－K1.34　K－L1.26　L－M1.53　M－N1.49　N－O1.39
O－P1.11　P－A1.51　Q－R2.39　A－E5.79　E－I5.42　I－M5.88　M－A5.48

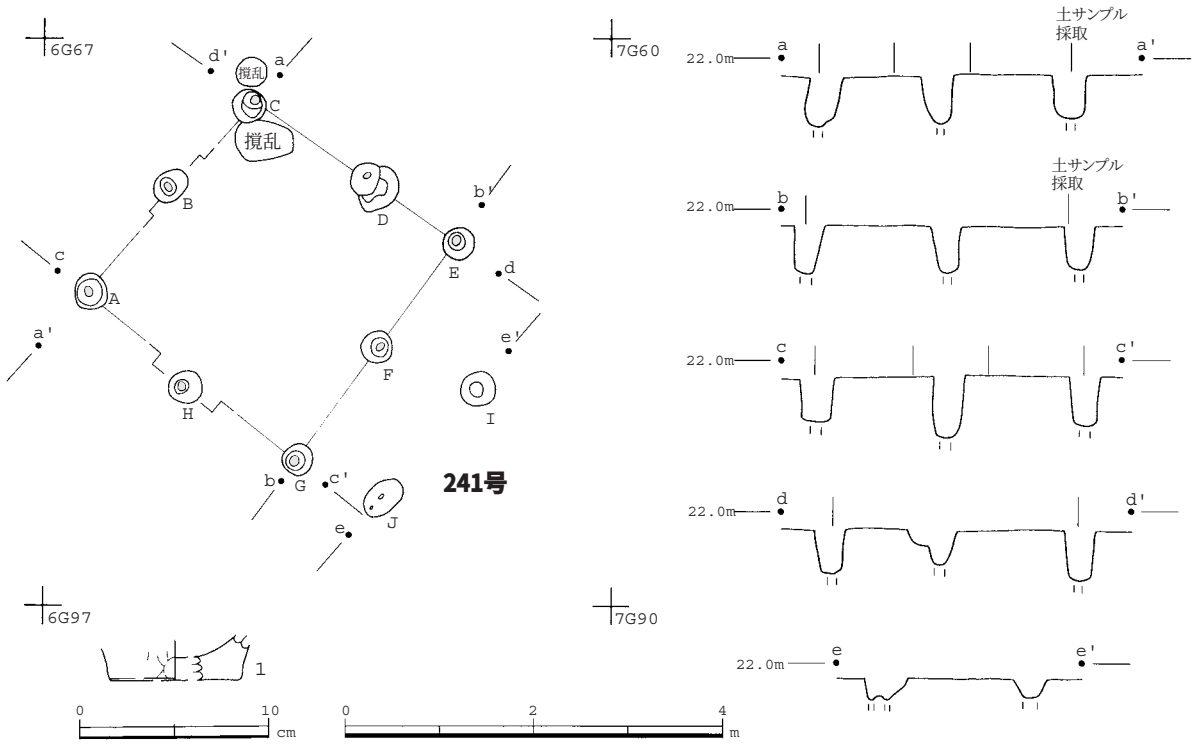
時期：古墳時代後半

Ｄ２区中ほどに位置する掘立柱建物である。北東・南西辺が北西・南東よりも若干狭いことから、前者が梁方向、後者が桁方向と想定できる。また、柱に囲まれた中に２つ浅い穴が建物の軸に揃って検出されたことから、屋内棟持柱あるいは束柱をともなう建物である可能性も考えられる。このＱＲ間が2.4mで、おおむね各辺の中３本の柱間に等しいこともこれを支持する。また、各辺の柱間はだいたい均等に近いが、内側から各辺を見た際の右から２本目と３本目の間の距離が各辺で最小になっていることが、特徴的である。各辺の柱穴は四隅を除き、若干内側に入っているが、これは、上屋の構造に関係した現象かもしれない。

遺物は、遺構の覆土の絶対量に規定されて、土師器片がごく少量出土しただけであったので、遺物のみからは時期を確定するのが困難である。そこで時期決定のために、柱穴Ｅ・Ｍ覆土の上・下層からサンプルを採取し、テフラの同定を行った。その結果、それぞれ下層から、推定降下年代が古墳時



第142図　213号・242号遺構および出土遺物



第143図　241号遺構および出土遺物

代後半～奈良時代前半期であるテフラ（Ｓ－24－６）が確認されている。

本遺構は、周囲の遺構分布とテフラから、古墳時代後半期の遺構と考えられる。

242号掘立柱建物跡（第142図）

規模：２間四方以上　**主軸方位**：63°？　**柱間（m）**：Ａ－Ｂ1.22　Ｃ－Ｄ1.56

時期：古墳時代後半

213号掘立柱建物の北西に隣接する、掘立柱建物の可能性のあるピット群である。北東隅に当たる部分が撹乱されており、遺構プランの確定ができなかった。覆土も黒褐色で判然とせず、遺物もまったく出土しなかった。

時期は不明とせざるを得ないが、付近の遺構がおおむね古墳時代に属することから古墳時代の遺構と考えておきたい。

241号掘立柱建物跡（第143図）

規模：２×２間　**主軸方位**：37°／127°

柱間（m）：Ａ－Ｂ1.38　Ｂ－Ｃ1.29　Ｃ－Ｄ1.43　Ｄ－Ｅ1.16　Ｅ－Ｆ1.37
Ｆ－Ｇ1.51　Ｇ－Ｈ1.44　Ｈ－Ａ1.40　Ｉ－Ｊ1.52
Ａ－Ｃ2.67　Ｃ－Ｅ2.59　Ｅ－Ｇ2.89　Ｇ－Ａ2.83

時期：古墳時代後半

Ｄ２区北寄りに位置する、２間四方の掘立柱建物である。遺物はごく少量の土器片が得られただけで、時期の確定はできない。柱穴Ａ・Ｅ覆土の分析の結果、213号と同様、古墳時代後半から奈良時代前半期のテフラが検出されているので、周辺の遺構の分布も合わせて、古墳時代後半に属する可能性が考えられる。なお、柱穴Ａ下層に被熱の痕跡が見られるという興味深い所見も出されている。

303号掘立柱建物跡（第144図上）

規模：２×３間　**主軸方位**：140°／320°

柱間（m）：A－B1.82　B－C1.46　C－D1.29　D－E0.97　E－F1.24　F－G1.51
G－H2.04　H－I1.28　I－J0.98　J－A1.24
A－C3.28　C－F3.47　F－H3.54　H－A3.50

時期：古墳時代後半

Ｄ２区北側に位置する掘立柱建物である。２×３間であるが、正方形である。梁行の中央の柱が東側に寄っているのが特徴的である。おそらくこの向かい合わせの柱は棟持柱であろう。また、各辺の平均は348㎝でよく揃っており、何らかの尺度に基づいて設定されたと考えられる。

遺物は土器片が少量出土したが、時期の判別はできない。

柱穴Ａ・Ｆ覆土の分析の結果、下層から上層にかけて、古墳後半期から平安前期のテフラが漸移的に確認されている。上面が平安前期まで窪んでいたという所見があるので、古墳時代後半の所産としても他のものより後出するのかもしれない。

305号掘立柱建物跡（第144図）

規模：１×３間　**主軸方位**：126°／306°

柱間（m）：A－B2.58　B－C1.58　C－D1.56　D－E1.38　E－F2.49　F－G1.61
G－H1.44　H－A1.62　I－J2.02　B－E4.53　F－A4.66

時期：古墳時代

Ｄ２区中ほど北寄りに位置する掘立柱建物である。表土掘削時に近辺を掘り下げすぎたため柱の遺存は不良である。柱の間の空間に、桁行に平行してＩ・Ｊの浅い穴が検出されたが、配置のみを見れば、屋内棟持柱の可能性が考えられる。遺物はまったく出土していない。

遺存した柱穴Ｂ・Ｆ覆土の分析では、213号などで見られた古墳後半期から平安前期のテフラの降下以前とされる。周囲の遺構の分布を加味すると、213号などよりは先行するものの古墳時代後半期におさまるものと考えたい。

304号掘立柱建物跡（第145図）

規模：３×４間　**主軸方位**：59°／239°

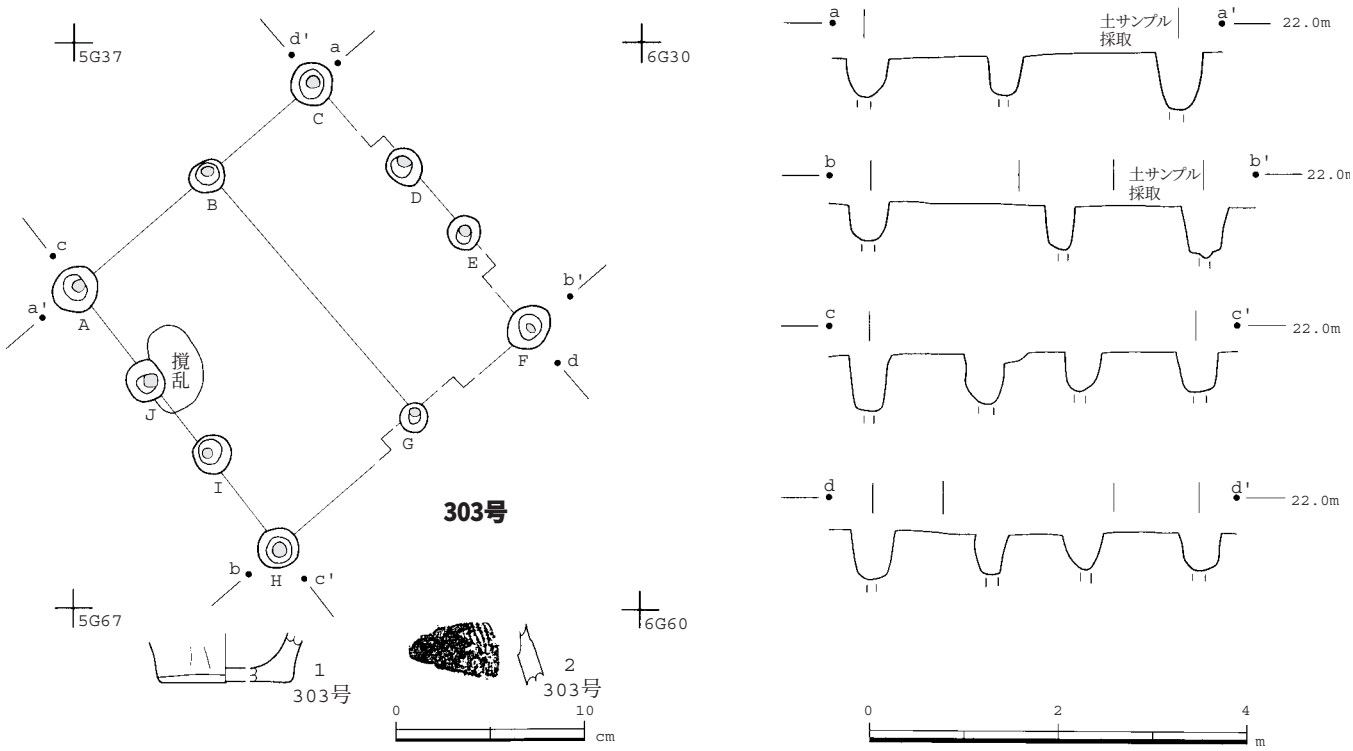
柱間（m）：A－B1.67　B－C1.17　C－D1.73　D－E1.76　E－F1.77　F－G1.63
G－H0.90　H－I1.70　I－J1.48　J－K1.65　K－L1.59　L－M1.54
M－N1.96　N－A1.77　A－E6.33　E－H5.20　H－L6.42　L－A5.30

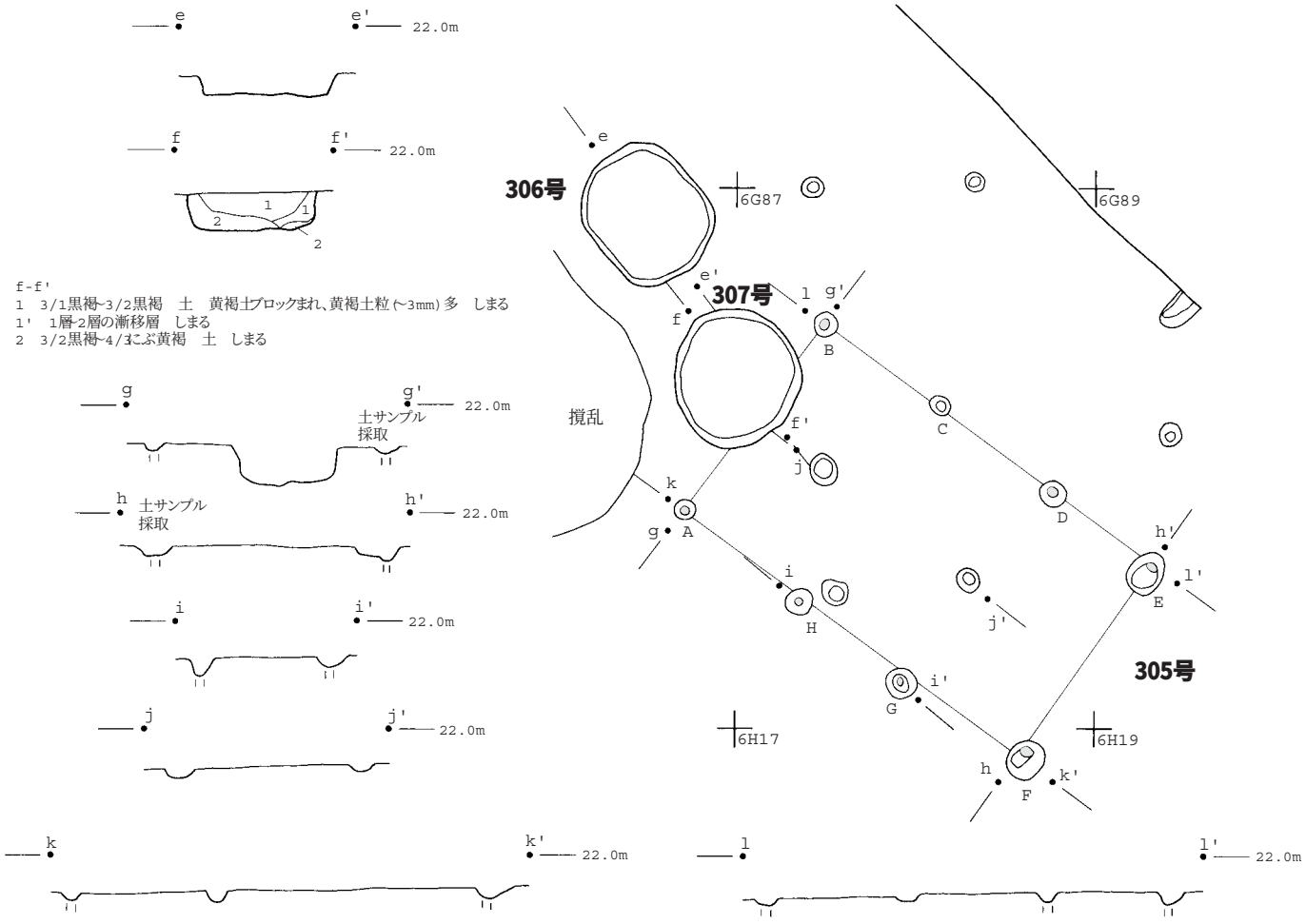
時期：古墳時代中～後期

Ｄ２区中ほど北寄りに位置する掘立柱建物である。３×４間の配置で、長方形である。303号と同程度の規模・プランを持つ。四隅の柱が大きく深いわりに、間の柱は貧弱である。

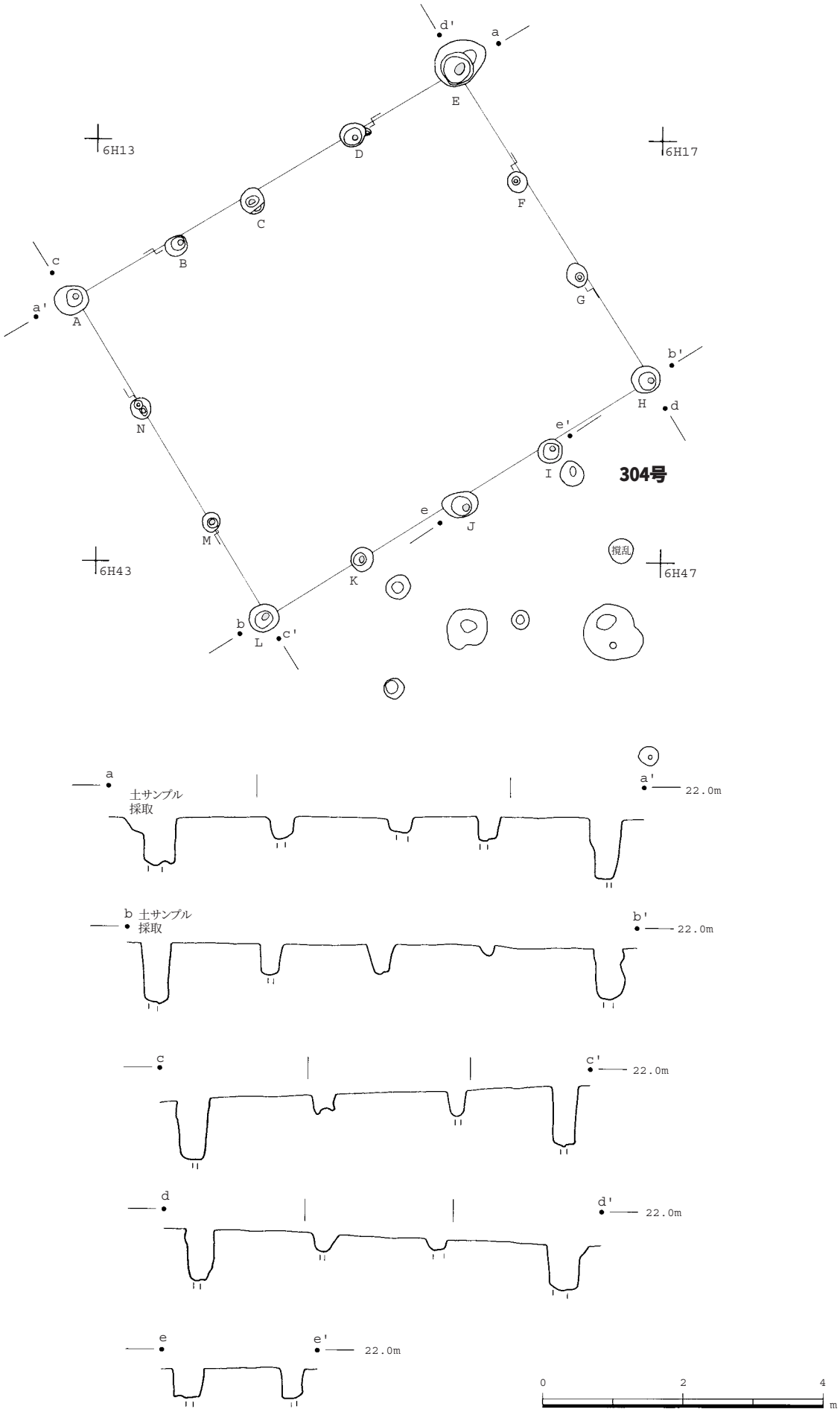
遺物は少量の土器片が出土したが、時期の確定には及ばなかった。

長短の比率は6.38×5.25mで約６：５になる。仮に35.5㎝という尺度を基準にしていたとすれば、18尺（35.5×18→6.39m）×15尺（35.5×15→5.33m）の設定が想定できるが、確定は困難である。柱間もすべてがきれいな比率で配置されているわけではない。





第144図　303号・305号・306号・307号遺構および出土遺物



第145図　304号遺構

柱穴Ｅ・Ｌ覆土の上・下層からは分析の結果、303号と同様、下層から上層に向けて、漸移的に古墳後半期から平安前期のテフラが確認された。本遺構と303号は絶対的な年代は不明ながら、古墳後半期頃の近い時期にそれぞれ存在したものと考えられる。

53号掘立柱建物跡（第146～148図）

規模：３×４間　**主軸方位**：322°／52°

柱間（m）：Ａ－Ｂ1.20　Ｂ－Ｃ2.22　Ｃ－Ｄ1.64　Ｄ－Ｅ1.66　Ｅ－Ｆ2.10　Ｆ－Ｇ1.48
Ｇ－Ｈ1.14　Ｈ－Ｉ1.50　Ｉ－Ｊ1.96　Ｊ－Ｋ1.64　Ｋ－Ｌ1.54
Ｂ－Ｆ7.61　Ｆ－Ｉ4.11　Ｉ－Ｌ5.13

時期：古墳時代後半～平安時代

比較的大きい掘立柱建物が集中するＤ１区北東部にあり、北西の柱穴二つが調査区外に出る。古代の道路11号に切られるので、それが帰属時期の下限である。似たプランの54号が隣接するが、直接、先後関係は確定できない。各柱間は均等でなく、桁行側の外側１間ずつが広くなっている。梁行の３間はいずれも狭い。いずれの柱穴にも抜き取りのための掘り込みは見られなかった。

遺物は、土師器の破片（８）・土玉（１・２）が出土している。土玉の出土を積極的に捉えれば、古墳時代に帰属する可能性もあるが、確定はできない。

覆土は、柱痕跡を示すと思われるものがいくつかあった。一部、他と比べて浅いものがあるが、建材の丈にあわせた結果と思われる。近辺は削平・浸食を受けた様子なので、本来の掘形はより深かったと考えてよいだろう。

遺物がごく少量しか出土していないため、切り合い関係から推定すると、本遺構は、古墳時代後半期から平安時代までの所産だと思われる。

54号掘立柱建物跡（第146～148図）

規模：３×４間　**主軸方位**：307°／37°

柱間（m）：Ａ′－Ｂ′1.36　Ｂ′－Ｃ′1.22　Ｃ′－Ｄ′1.20　Ｄ′－Ｅ′1.74　Ｅ’－Ｆ′1.66　Ｆ′－Ｇ′1.74
Ｇ′－Ｈ′1.96　Ｈ’－Ｉ′1.22？　Ｉ′－Ｊ′1.22？　Ｊ′－Ｋ′1.26　Ｋ′－Ｌ′1.88
Ｌ′－Ｍ′1.52　Ｍ′－Ｎ′2.07　Ａ′－Ｄ′3.77　Ｄ′－Ｈ′7.08　Ｈ′－Ｋ′3.72　Ｋ′－Ａ′7.26

時期：古墳時代後半～平安時代

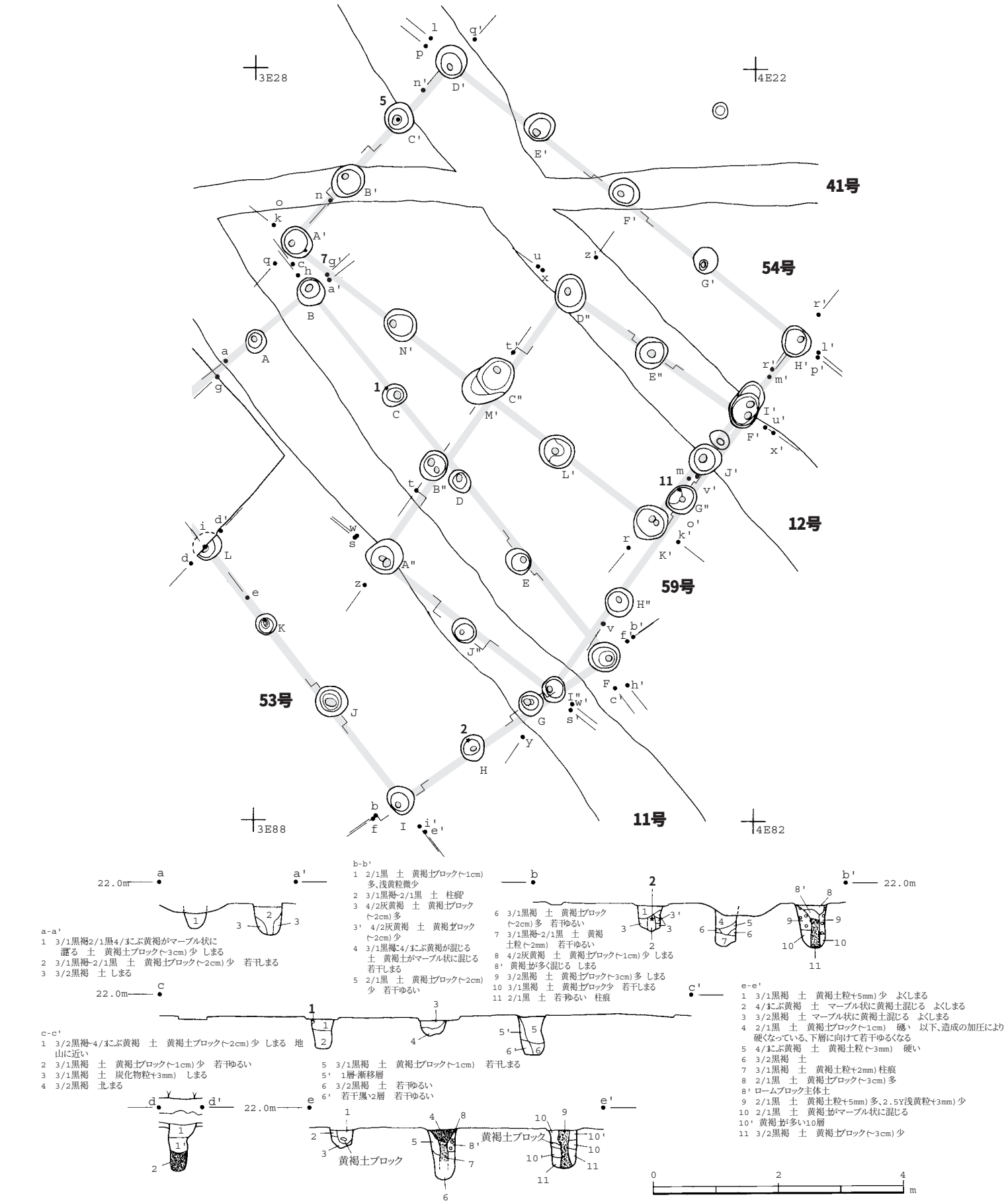
規模の似た53号に隣接する。53号と同じく、11号に切られる。また、２×３間の掘立柱建物59号にも切られる。各柱穴の掘形は53号と似た深さであるが、若干広いようである。遺物は土師器片が少量出土したのみである。抜き取りのための掘り込みは見られなかった。

時期は59号との切り合い関係と、53号が似たプランで隣接する事実から、後述の通り想定せざるを得ない。

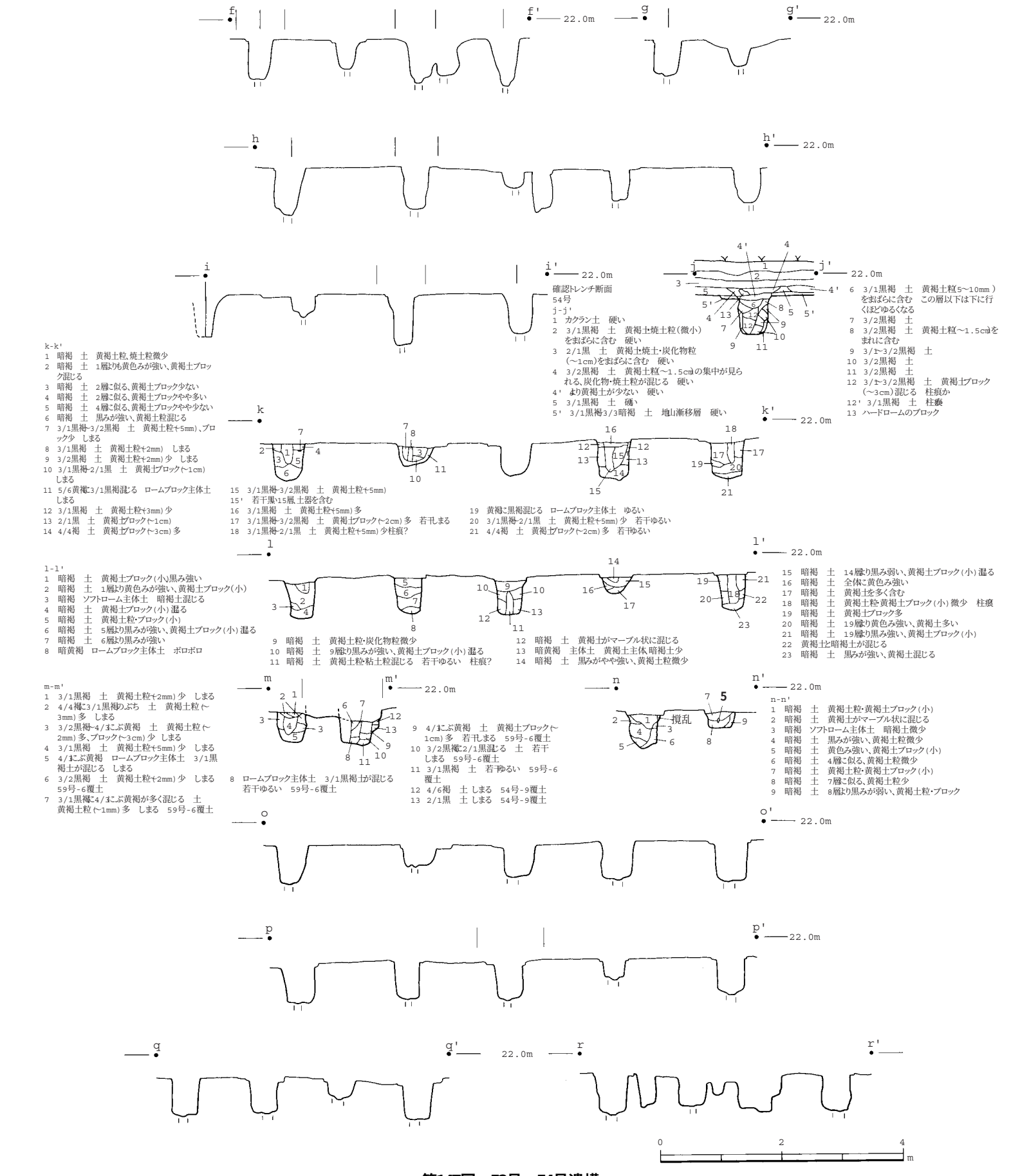
59号掘立柱建物跡（第146～148図）

規模：２×３間　**主軸方位**：35°／125°

柱間（m）：Ａ″－Ｂ′1.69　Ｂ″－Ｃ′1.66　Ｃ″－Ｄ′1.68　Ｄ″－Ｅ′1.65　Ｅ″－Ｆ′1.83
Ｆ″－Ｇ′1.70　Ｇ″－Ｈ’1.89　Ｈ″－Ｉ′1.82　Ｉ″－Ｊ′1.57　Ｊ″－Ａ′1.67



第146図　53号・54号・59号遺構



確認トレンチ断面
54号
j-j'
1 カクラン土　硬い
2 3/1黒褐　土　黄褐土焼土粒(微小)をまばらに含む　硬い
3 2/1黒　土　黄褐土焼土・炭化物粒(～1cm)をまばらに含む　硬い
4 3/2黒褐　土　黄褐土粒(～1.5cm)の集中が見られる、炭化物・焼土粒が混じる　硬い
4' より黄褐土が少ない　硬い
5 3/1黒褐　土　硬い
5' 3/1黒褐3/3暗褐　土　地山漸移層　硬い
6 3/1黒褐　土　黄褐土粒(5～10mm)をまばらに含む　この層以下は下に行くほどゆるくなる
7 3/2黒褐　土
8 3/2黒褐　土　黄褐土粒(～1.5cm)をまれに含む
9 3/1～3/2黒褐　土
10 3/2黒褐　土
11 3/2黒褐　土
12 3/1～3/2黒褐　土　黄褐土ブロック(～3cm)混じる　柱痕か
12' 3/1黒褐　土　柱痕
13 ハードロームのブロック

k-k'
1 暗褐　土　黄褐土粒,焼土粒微少
2 暗褐　土　1層よりも黄色みが強い、黄褐土ブロック混じる
3 暗褐　土　2層に似る、黄褐土ブロック少ない
4 暗褐　土　2層に似る、黄褐土ブロックやや多い
5 暗褐　土　4層に似る、黄褐土ブロックやや少ない
6 暗褐　土　黒みが強い、黄褐土粒混じる
7 3/1黒褐～3/2黒褐　土　黄褐土粒(～5mm)、ブロック少　しまる
8 3/1黒褐　土　黄褐土粒(～2mm)　しまる
9 3/2黒褐　土　黄褐土粒(～2mm)少　しまる
10 3/1黒褐～2/1黒　土　黄褐土ブロック(～1cm)　しまる
11 5/6黄褐～3/1黒褐混じる　ロームブロック主体土　しまる
12 3/1黒褐　土　黄褐土粒(～3mm)少
13 2/1黒　土　黄褐土ブロック(～1cm)
14 4/4褐　土　黄褐土ブロック(～3cm)多
15 3/1黒褐～3/2黒褐　土　黄褐土粒(～5mm)
15' 若干黒い15層土器を含む
16 3/1黒褐　土　黄褐土粒(～5mm)多
17 3/1黒褐～3/2黒褐　土　黄褐土ブロック(～2cm)多　若干まる
18 3/1黒褐～2/1黒　土　黄褐土粒(～5mm)少柱痕?
19 黄褐に黒褐混じる　ロームブロック主体土　ゆるい
20 3/1黒褐～2/1黒　土　黄褐土粒(～5mm)少　若干ゆるい
21 4/4褐　土　黄褐土ブロック(～2cm)多　若干ゆるい

l-l'
1 暗褐　土　黄褐土ブロック(小)黒み強い
2 暗褐　土　1層より黄色みが強い、黄褐土ブロック(小)
3 暗褐　ソフトローム主体土　暗褐土混じる
4 暗褐　土　黄褐土ブロック(小)混る
5 暗褐　土　黄褐土粒・ブロック(小)
6 暗褐　土　5層より黒みが強い、黄褐土ブロック(小)混る
7 暗褐　土　6層より黒みが強い
8 暗黄褐　ロームブロック主体土　ボロボロ
9 暗褐　土　黄褐土粒・炭化物粒微少
10 暗褐　土　9層より黒みが強い、黄褐土ブロック(小)混る
11 暗褐　土　黄褐土粒・粘土粒混じる　若干ゆるい　柱痕?
12 暗褐　土　黄褐土がマーブル状に混じる
13 暗黄褐　主体土　黄褐土主体、暗褐土少
14 暗褐　土　黒みがやや強い、黄褐土粒微少
15 暗褐　土　14層より黒み弱い、黄褐土ブロック(小)混る
16 暗褐　土　全体に黄色み強い
17 暗褐　土　黄褐土を多く含む
18 暗褐　土　黄褐土粒・黄褐土ブロック(小)微少　柱痕
19 暗褐　土　黄褐土ブロック多
20 暗褐　土　19層より黄色み強い、黄褐土多い
21 暗褐　土　19層より黒み強い、黄褐土ブロック(小)
22 黄褐土と暗褐土が混じる
23 暗褐　土　黒みが強い、黄褐土混じる

m-m'
1 3/1黒褐　土　黄褐土粒(～2mm)少　しまる
2 4/4褐に3/1黒褐のぶち　土　黄褐土粒(～3mm)多　しまる
3 3/2黒褐～4/3にぶ黄褐　土　黄褐土粒(～2mm)多、ブロック(～3cm)少　しまる
4 3/1黒褐　土　黄褐土粒(～5mm)少　しまる
5 4/3にぶ黄褐　ロームブロック主体土　3/1黒褐土が混じる　しまる
6 3/2黒褐　土　黄褐土粒(～2mm)少　しまる　59号-6覆土
7 3/1黒褐に4/3にぶ黄褐が多く混じる　土　黄褐土粒(～1mm)多　しまる　59号-6覆土
8 ロームブロック主体土　3/1黒褐土が混じる　若干ゆるい　59号-6覆土
9 4/3にぶ黄褐　土　黄褐土ブロック(～1cm)多　若干まる　59号-6覆土
10 3/2黒褐に2/1黒混じる　土　若干しまる　59号-6覆土
11 3/1黒褐　土　若干ゆるい　59号-6覆土
12 4/6褐　土　しまる　54号-9覆土
13 2/1黒　土　しまる　54号-9覆土

n-n'
1 暗褐　土　黄褐土粒・黄褐土ブロック(小)
2 暗褐　土　黄褐土がマーブル状に混じる
3 暗褐　ソフトローム主体土　暗褐土微少
4 暗褐　土　黒みが強い、黄褐土粒微少
5 暗褐　土　黄色み強い、黄褐土ブロック(小)
6 暗褐　土　4層に似る、黄褐土粒微少
7 暗褐　土　黄褐土粒・黄褐土ブロック(小)
8 暗褐　土　7層に似る、黄褐土粒少
9 暗褐　土　8層より黒みが弱い、黄褐土粒・ブロック

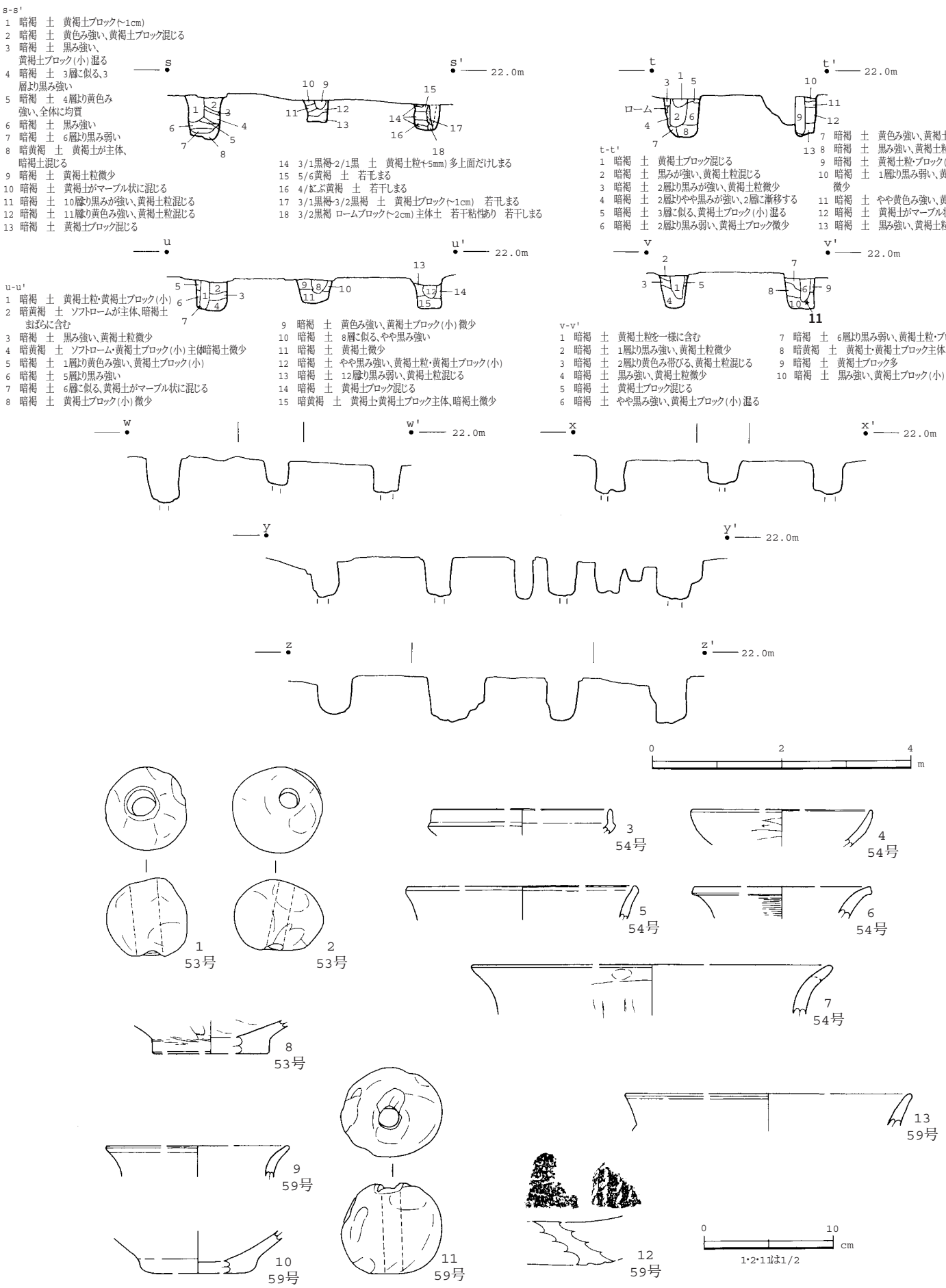
第147図　53号・54号遺構

s-s'
1 暗褐 土 黄褐土ブロック(~1cm)
2 暗褐 土 黄色み強い、黄褐土ブロック混じる
3 暗褐 土 黒み強い、黄褐土ブロック(小)混る
4 暗褐 土 3層に似る、3層より黒み強い
5 暗褐 土 4層より黄色み強い、全体に均質
6 暗褐 土 黒み強い
7 暗褐 土 6層より黒み弱い
8 暗黄褐 土 黄褐土が主体、暗褐土混じる
9 暗褐 土 黄褐土粒微少
10 暗褐 土 黄褐土がマーブル状に混じる
11 暗褐 土 10層り黒みが強い、黄褐土粒混じる
12 暗褐 土 11層り黄色み強い、黄褐土粒混じる
13 暗褐 土 黄褐土ブロック混じる
14 3/1黒褐~2/1黒 土 黄褐土粒(~5mm)多上面だけしまる
15 5/6黄褐 土 若干しまる
16 4/乏ぶ黄褐 土 若干しまる
17 3/1黒褐~3/2黒褐 土 黄褐土ブロック(~1cm) 若干しまる
18 3/2黒褐 ロームブロック(~2cm)主体土 若干粘性あり 若干しまる

t-t'
1 暗褐 土 黄褐土ブロック混じる
2 暗褐 土 黒みが強い、黄褐土粒混じる
3 暗褐 土 2層より黒みが強い、黄褐土粒微少
4 暗褐 土 2層よりやや黒みが強い、2層に漸移する
5 暗褐 土 3層に似る、黄褐土ブロック(小)混る
6 暗褐 土 2層より黒み弱い、黄褐土ブロック微少
7 暗褐 土 黄色み強い、黄褐土粒多 ゆるい
8 暗褐 土 黒み強い、黄褐土粒微少
9 暗褐 土 黄褐土粒・ブロック(小)混る
10 暗褐 土 1層より黒み弱い、黄褐土ブロック微少
11 暗褐 土 やや黄色み強い、黄褐土粒微少
12 暗褐 土 黄褐土がマーブル状に混じる
13 暗褐 土 黒み強い、黄褐土粒微少

u-u'
1 暗褐 土 黄褐土粒・黄褐土ブロック(小)
2 暗黄褐 土 ソフトロームが主体、暗褐土まばらに含む
3 暗褐 土 黒み強い、黄褐土粒微少
4 暗黄褐 土 ソフトローム・黄褐土ブロック(小)主体暗褐土微少
5 暗褐 土 1層より黄色み強い、黄褐土ブロック(小)
6 暗褐 土 5層より黒み強い
7 暗褐 土 6層に似る、黄褐土がマーブル状に混じる
8 暗褐 土 黄褐土ブロック(小)微少
9 暗褐 土 黄色み強い、黄褐土ブロック(小)微少
10 暗褐 土 8層に似る、やや黒み強い
11 暗褐 土 黄褐土微少
12 暗褐 土 やや黒み強い、黄褐土粒・黄褐土ブロック(小)
13 暗褐 土 12層り黒み弱い、黄褐土粒混じる
14 暗褐 土 黄褐土ブロック混じる
15 暗黄褐 土 黄褐土・黄褐土ブロック主体、暗褐土微少

v-v'
1 暗褐 土 黄褐土粒を一様に含む
2 暗褐 土 1層より黒み強い、黄褐土粒微少
3 暗褐 土 2層より黄色み帯びる、黄褐土粒混じる
4 暗褐 土 黒み強い、黄褐土粒微少
5 暗褐 土 黄褐土ブロック混じる
6 暗褐 土 やや黒み強い、黄褐土ブロック(小)混る
7 暗褐 土 6層より黒み弱い、黄褐土粒・ブロック(小)混る
8 暗黄褐 土 黄褐土・黄褐土ブロック主体、暗褐土微少
9 暗褐 土 黄褐土ブロック多
10 暗褐 土 黒み強い、黄褐土ブロック(小)



第148図　59号遺構および53号・54号・59号出土遺物

Ａ″－Ｄ′5.20　Ｄ″－Ｆ′3.50　Ｆ－Ｉ′5.40　Ｉ″－Ａ′3.36

時期：古墳時代後半～平安時代

11号溝に切られ、Ｃ″・Ｆ″がそれぞれ、54号のＩ・Ｍを切る。54号と軸の方位が似ることを根拠に、59号が54号と時期的に近接するとすれば、この建物群は53号→54号→59号の順で推移すると想定できる。覆土には、一部柱痕跡が認められた。抜き取りのための掘り込みは見られなかった。

数少ない遺物に、Ｇ″から出土した土玉（11）がある。土玉が早い段階の埋積土に伴う遺物だとすれば、この建物群の最初から最後までが古墳時代におさまることも考えられる。ただ、１個体だけの出土である点が問題であり、それが意図的なものか否かの判断は保留せざるを得ない。類例の増加を待ちたい。

切り合いと位置関係から、本遺構は、53号・54号と近接した時期の所産であると考えられる。

61号掘立柱建物跡（第149図下）

規模（m）：２×２間　**主軸方位**：64°／334°

柱間：Ｂ－Ｃ1.20　Ｃ－Ｄ1.48　Ｄ－Ｅ1.50　Ｅ－Ｆ1.14　Ｆ－Ａ1.11　Ｃ－Ｅ2.98　Ａ－Ｅ2.22

時期：奈良・平安時代？

Ｄ１区北東部に位置する。柱穴のうち、北東の二つを撹乱され失っている。Ｂ・Ｃ・Ｄはそれぞれ54・44・６㎝の深さである。37㎝で割ると、梁行：桁行がほぼ６：８になるので、この尺度でプランニングした可能性が考えられる。いずれも柱痕跡が見あたらなかった。

遺物は土器片が少量得られたにすぎず、時期の判別は困難である。

64号遺構（第149図上）

規模（m）：土坑　深さ0.44　竪穴部分　深さ0.54　**時期**：中世前期

調査区北東端で一部が調査できた竪穴状の遺構である。全体の形状・規模・主軸方位は不明である。西壁にかかる穴と竪穴部分とが別遺構の可能性もあるが、ここでは同一遺構とした。また、竪穴部分の覆土は、周囲にある竪穴住居の覆土とは違い、黄褐土ブロックが多く混じる撹乱に近い土層で、当初は調査区北東部を大きく撹乱する造成の一部とも考えたが、現代のゴミなどが全く認められなかったので遺構として捉えた。

竪穴部分の西壁上端に穴が付属、もしくは切り合っており、そこからカワラケ（１）が出土した。このカワラケは内面屈曲部に指頭によるナデが見られ、13世紀ごろのものと考えられる。遺物は全体でこの一点のみである。遺構の性格は不明である。

65号掘立柱建物跡（第149図上）

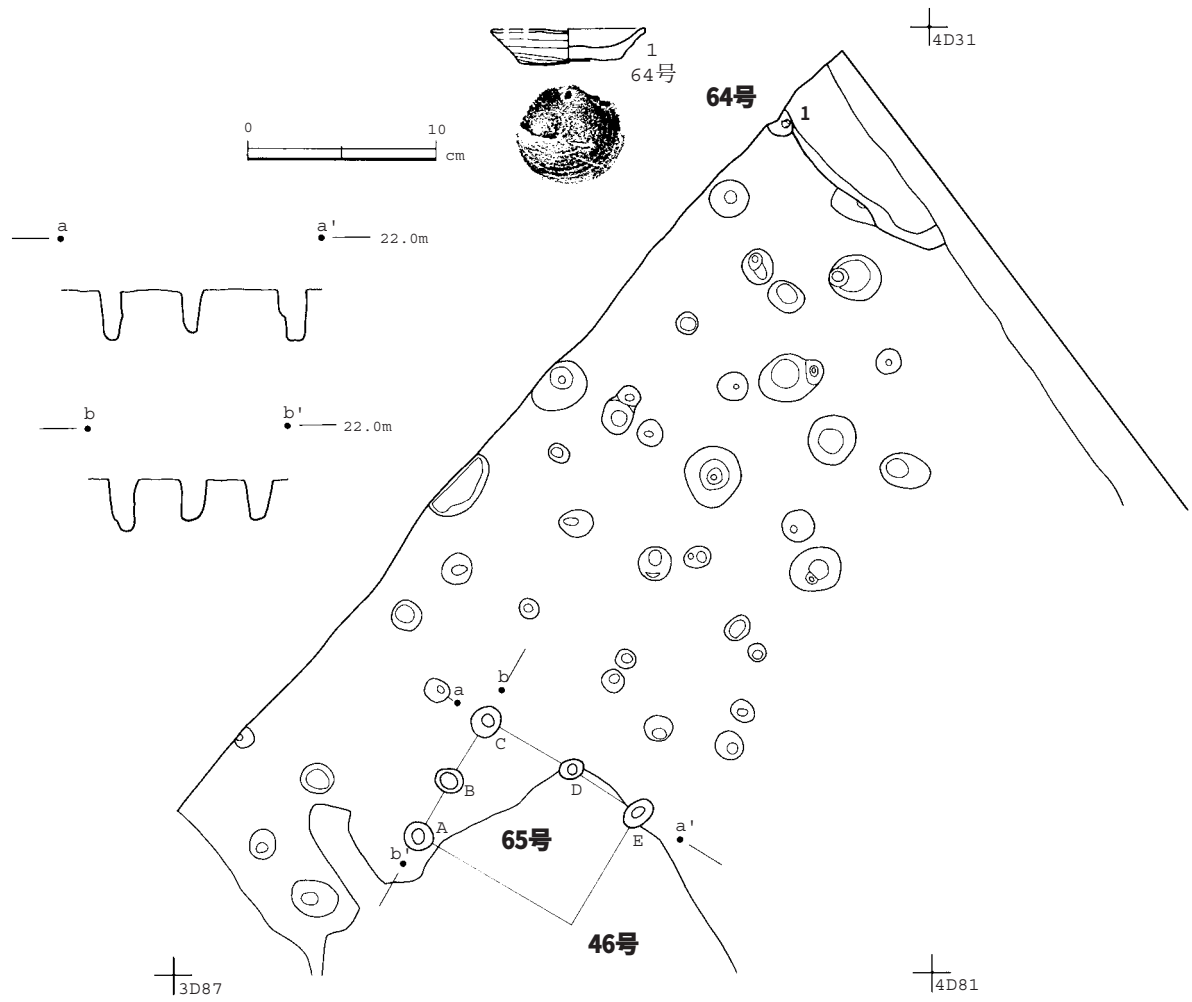
規模（m）：２×２？間　**主軸方位**：31°／121°

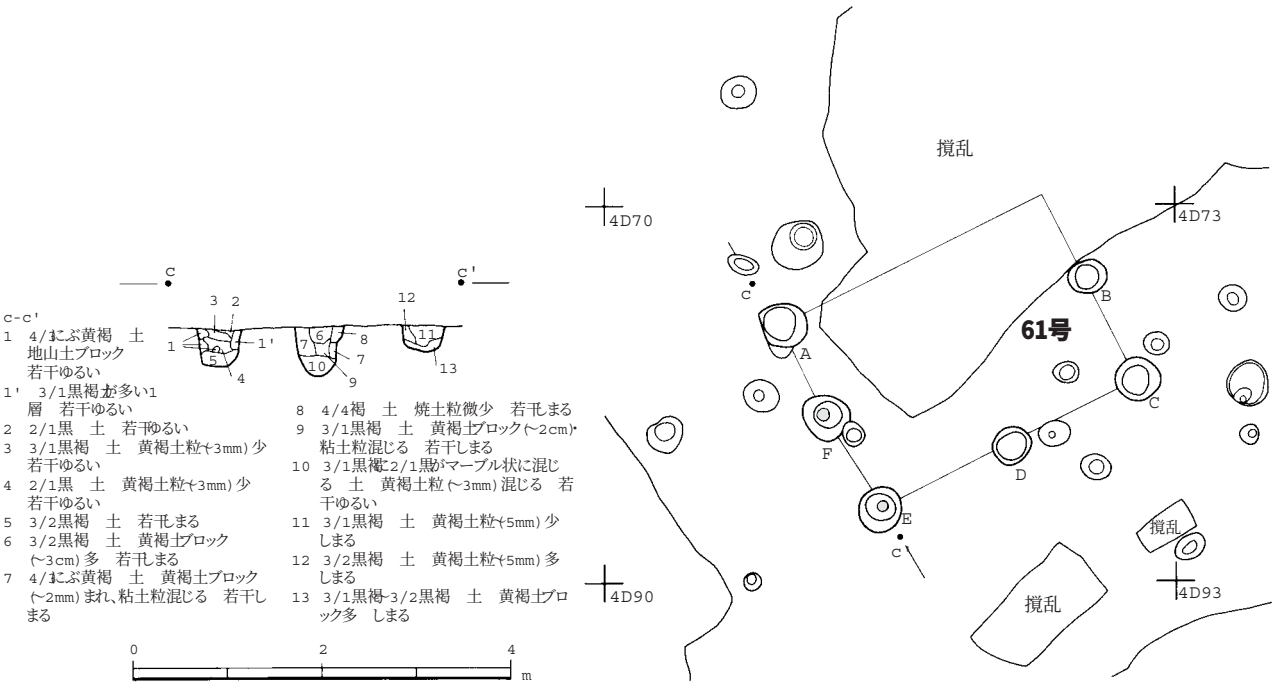
柱間：Ａ－Ｂ0.67　Ｂ－Ｃ0.76　Ｃ－Ｄ1.03　Ｄ－Ｅ0.83　Ａ－Ｃ1.43　Ｃ－Ｅ1.86

時期：奈良・平安時代？

調査区北東部に位置する、46号竪穴と切り合うが、先後関係は不明である。柱の間の距離はまちまちで規格性はあまりないようである。

遺物は実測不能の土器片が少量出土した程度である。





第149図　61号・64号・65号遺構および出土遺物

205号方形周溝墓（第150・151図）

規模（m）：周溝7.2四方　主体部3.4×1.56　**主軸方位**：７°　**時期**：平安時代前期

調査区南端に位置し、202号方形竪穴を切る。かなり浸食・削平されたらしく周溝部分は数㎝ほどしか遺存しない。確認調査時にトレンチ壁面に完形と思われる須恵器（後で確認された合口の蔵骨器の一方）の一部が露出していたため、同じトレンチにおいて、それ以前にプランが確認できていた竪穴住居覆土に伴う遺物と誤認して本調査に移行した。そのため、竪穴調査を先行させてしまい、蔵骨器の掘り込みがちょうど竪穴床面を底としていたこともあり、竪穴覆土をそこまで下げた時点ではじめて別時期の遺構として把握することになった。

周構内のほぼ中央に主体部があり、南から北に向かって階段を下りていくように掘り込まれている。階段部の最上段は周構につながっていたと想定できる。最奥にある主体部は狭く、火葬後の改葬を前提に設定されたものと考えられる。

遺構に確実に伴う遺物は、土師器甕（８）と須恵器甕（９）の合口で検出された蔵骨器と、主体部底面に正置されていた完形のロクロ土師器杯（１）である。他にも土師器・須恵器片・紡錘車などが出土したが、ほとんどは本来202号覆土にあったと思われるものである。蔵骨器中の土からは、炭化物粒と部位不明の小骨片少量が検出されている。

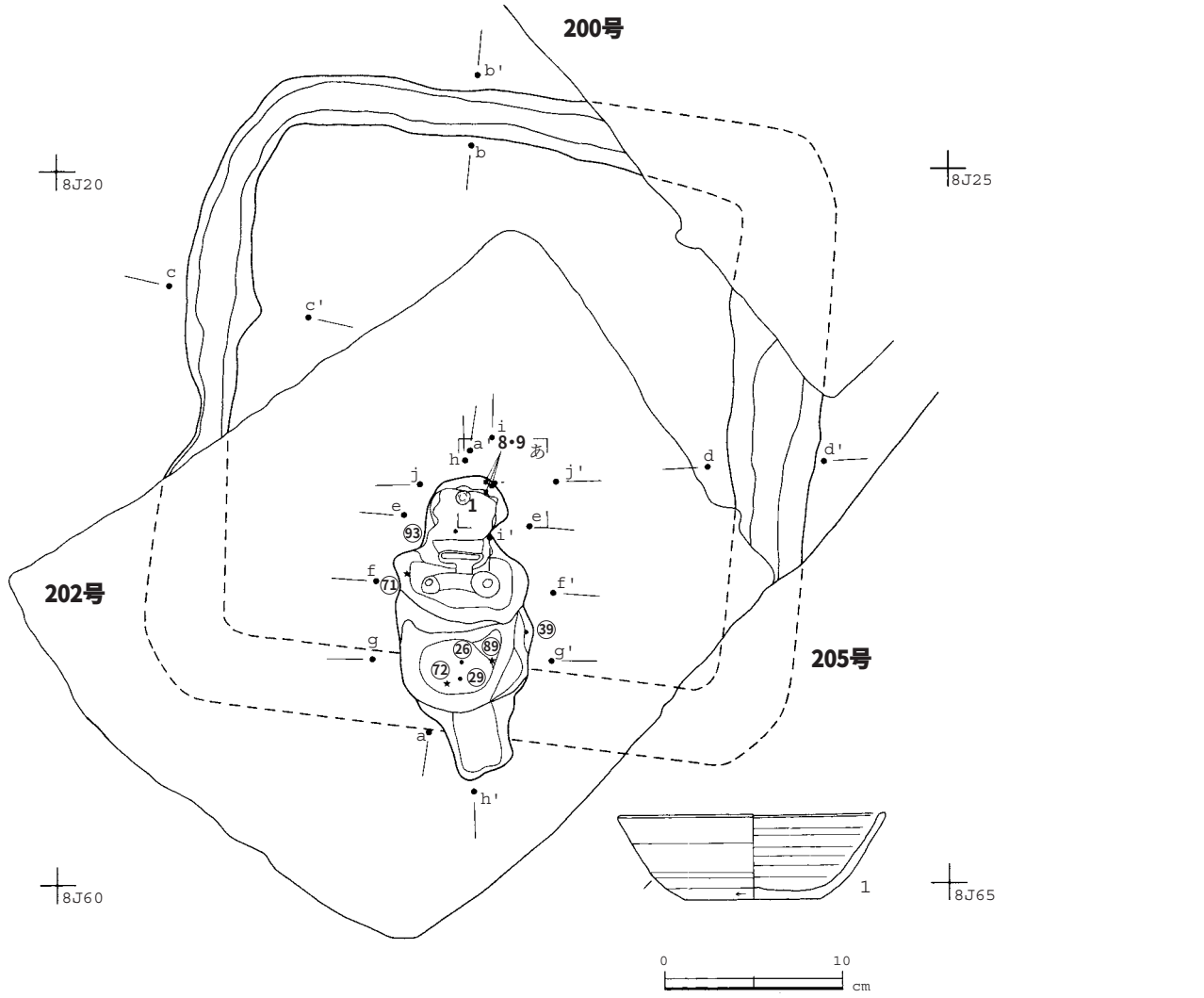
遺物の検出された位置はそれぞれ、蔵骨器は竪穴住居の床面レベルすなわちハードローム上面、ロクロ土師器は主体部の床面と離れており、葬送行為が２時期に分かれていたことが示唆される。遺物の様相は、蔵骨器の方が幾分古相を示すようなので、階段状の掘り込みを持たない形式の方形周溝墓の中央にまず蔵骨器が埋納され、後れて、掘り込みがなされロクロ土師器が置かれた、という利用のプロセスが推察される。つまり、葬送に関係する行為が違うかたちで２度行われた可能性が考えられるのである。２回目は、杯が検出されているだけなので追葬が行われたかは不明である。

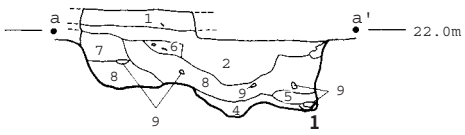
須恵器甕は、プロポーション・横位から斜位のタタキ・下位のヘラケズリが特徴的で、常陸新治窯のものに類似する。なお、合口をなしていた土師器甕の方が新相を示すうえ、この須恵器の方が摩滅や欠損が進んでいることから、こちらが相対的に長い使用・伝世期間を持ち、蔵骨器として転用されたものと考えることができる。これが新治産だとすれば、東城寺寄居前Ａの段階と思われ、製作時期は８世紀後葉に位置づけられる（赤井1997）（なお、本遺構と似た例が茨城県新治郡千代田町で発見されており、同様の須恵器甕と土師器杯の組み合わせで蔵骨器が構成されている（川井2001））。相手の土師器甕は９世紀台のものと思われる。

主体部床面から検出された土師器杯は９世紀中葉（坊作Ⅴ期：故小出紳夫氏の御教示による。（小出2002））のものと見られる。

本遺構のような古代の方形周溝墓は、近辺では北野原遺跡で発見されているが、本例の約２倍の規模を持ち、主体部も遺体をそのまま葬れる容積があるということで、両者の違いは大きいと言える（小川・蜂屋2000）。北野原例は蔵骨器が検出されていないので、この相違は、葬送方法の変化に対応した形状の変化にある可能性もある。また、被葬者・葬送主体者の階層差である場合も考えられよう。時期は遺物が検出されなかったためはっきりしないようであるが、類例からすると205号の方が後出するようである。なお、両者の存在から、東に下りる谷沿いが奈良・平安時代に墓域として利用されていた可能性が考えられる。

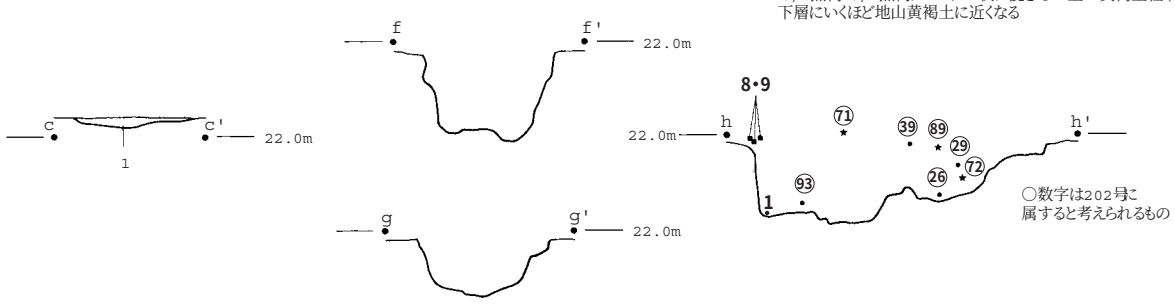
本遺構は、主体部の土器から平安時代前期９世紀前半から中葉に属すると考えられる。



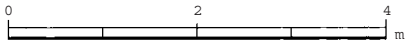


a-a'
1 3/2黒褐~3/1黒褐のぶち　土　黄褐土ブロック(~1cm)少 しまる
2 3/1黒褐~3/2黒褐のぶち　土　黄褐土粒(~5mm)多、黄褐土ブロック(~2cm)少 焼土粒(~2mm)まれ しまる
3 3/1黒褐~3/2黒褐　土　黄褐土ブロック(~1cm)少 焼土粒(~3mm)多
4 3/2黒褐~4/2灰黄褐　土　黄褐土多
5 3/1黒褐~2/1黒　土　黄褐土粒(~5mm)少、黄褐土ブロック(~2cm)少 ゆるい
6 4/1にぶ黄褐に3/1黒褐のぶち少　土　黄褐土ブロック(~3cm)多 黄褐土粒(~5mm)少
7 3/2黒褐に3/1黒褐のぶち　土　黄褐土粒(~3mm)多、ブロック(~2cm)まれ　若干しまる
8 3/2黒褐~3/1黒褐　土　黄褐土粒(~5mm)多、黄褐土ブロック(~3cm)少 焼土粒(~2mm)少　若干ゆるい
9 ハードロームブロック

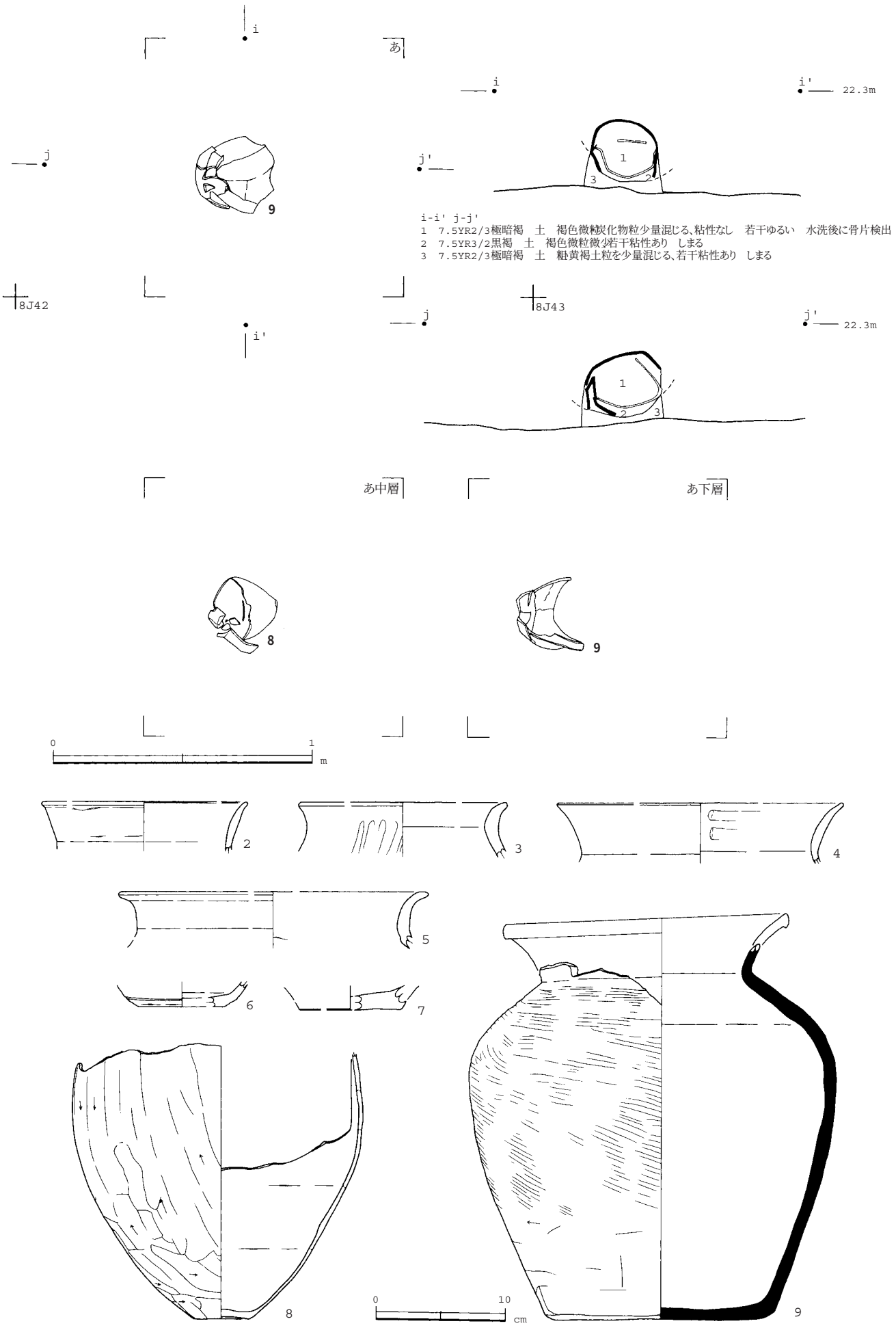
b-b' c-c' d-d'
1 3/2黒褐~3/1黒褐がマーブル状に混ざる　土　黄褐土粒(~5mm)少、下層にいくほど地山黄褐土に近くなる



○数字は202号に属すると考えられるもの



第150図　205号遺構および出土遺物1/2



第151図　205号遺構　遺物出土状況および出土遺物２／２

11号・12号道路跡（第２・152・153図）

規模（m）：幅（溝中央間）4.0～5.0　**時期**：奈良・平安時代

Ｄ１区を縦断するかたちで検出された道路跡である。11号・12号は側溝で、覆土最下層に硬化面が見られた。北端で12号が分岐しているほかは、ほぼ平行に延びている。後代の浸食・削平のため、溝に挟まれた空間に硬化部を伴うような路面は検出できなかった。また、路面は調査区北壁・南壁の断面においても捉えられなかった。

本遺構は、北側は谷に平行して北西に向かっており、南側は南の支谷をよけるように徐々に西に曲がっていくようである。おそらく、加茂Ｃ地点の東側を抜けるルートをとっていたと思われる。

遺物は、ごく浅く遺存した側溝覆土中、すなわち本来の覆土最下層から得られたものである。遺構の性格のため、周辺に分布する別時期の遺物が多く混入していたが、中世の遺物が見られないうえ、もっとも新相を示すものが奈良・平安時代の土師器・須恵器・瓦片であるので、本遺構の開始は、奈良・平安時代に近い時期だと考えられる。

ただ、奈良時代前半の48号竪穴住居跡がある程度埋没してから構築されているようなので、平安時代に入ったどこかの時点まで下る可能性が高い。

41号溝跡（第152図）

規模（m）：幅0.4～0.7／深さ0.1～0.15　**時期**：中世？

座標の軸に合う溝である。撹乱で北東コーナーが不明だが、おそらくＬ字形に連続していたものと考えられる。

遺物は土師器・須恵器片の他に、砥石片（２）、支脚片（３）、ミニチュア土器（４）が出土している。当初、現代の配管による撹乱かとも考えたが、ゴミが混ざらず、覆土の様子と掘形が機械的でなかったことから、遺構として捉えた。区画溝の性格を持つと考えられる。

切り合い関係の判断ができなかったため、時期は確定できないが、11・12号と重複しない時期の所産と思われるので、中世に帰属するものと思われる。

50号土坑（第152・153図）

規模（m）：長軸0.76／短軸0.6／深さ0.12　**時期**：近世以降

寛永通寶（１）が出土した土坑である。11号を切る。性格は不明である。

302号道路跡（第154・155図）

規模（m）：長さ／幅／深さ

Ｄ１：18.0／1.00～1.20／0.19～0.57

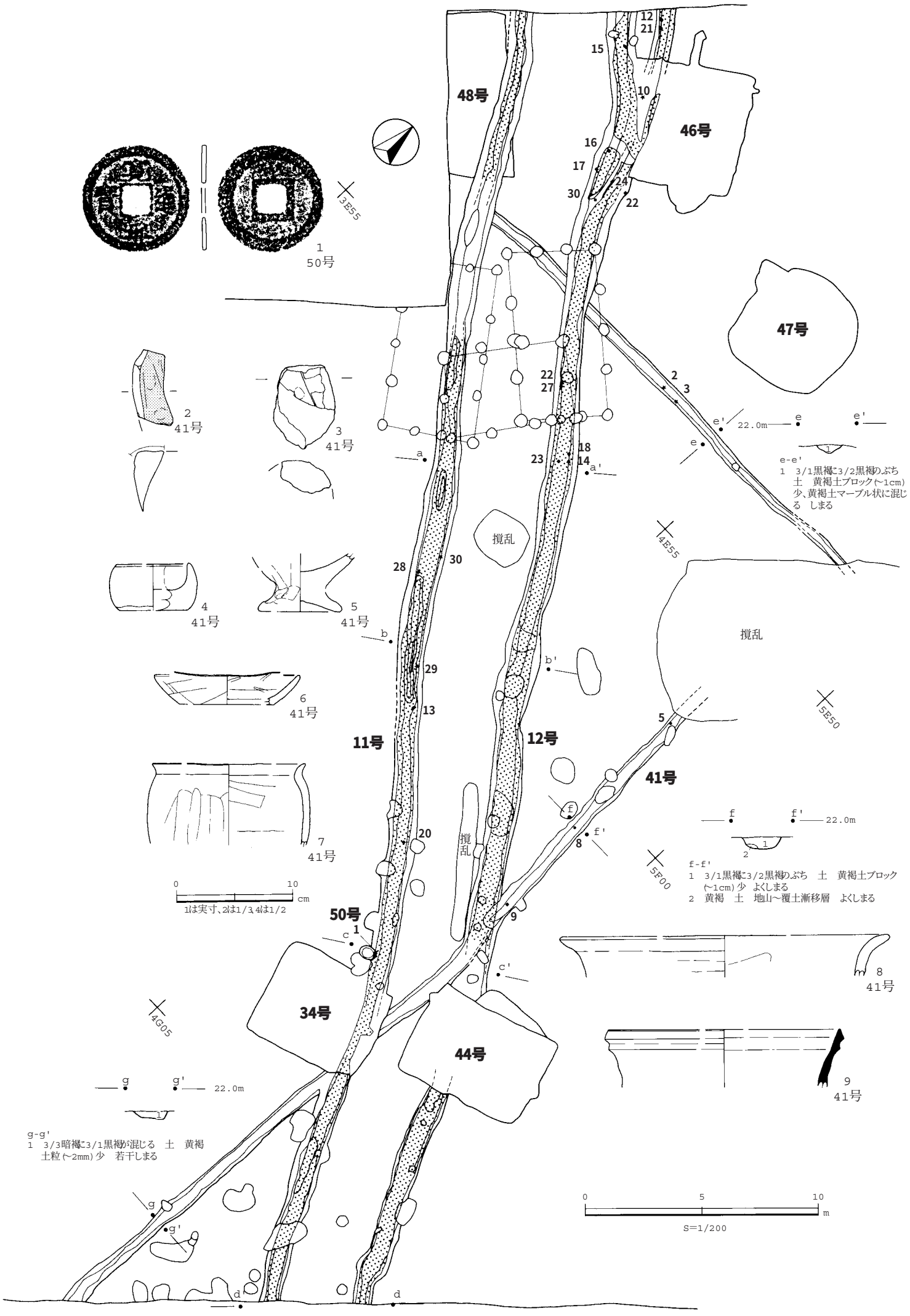
Ｄ２：30.7／0.64～2.80／0.01～0.33

Ｄ３：23.2／0.80～1.32／0.12～0.26

時期：中世～現代

Ｄ１・Ｄ２・Ｄ３区を北東から東北東に走る浅い溝状遺構である。Ｄ３区では溝底面にさらに狭い溝があり、断面は逆位の凸字状を呈する。そのほかの部分はおおむね浅鉢形である。

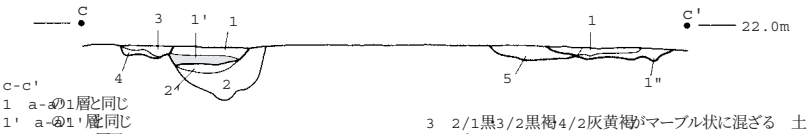
検出された全面ではないが、硬化面がその覆土上面・中位に認められたので、道路跡と考えられる。



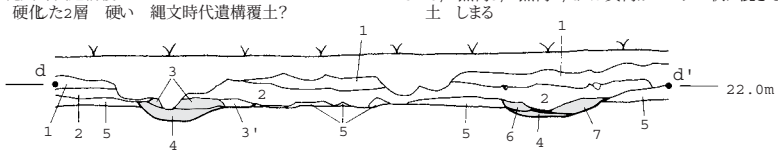
第152図　11号・12号・41号・50号遺構および41号・50号出土遺物

a-a'
1　3/1黒褐～3/2黒褐がマーブル状に混ざる　土　黄褐土粒(～5mm)少　よくしまる
1'　2/1黒　土　黄褐土粒(1mm)多、1層にラミナ状の黄褐土の層理が見られるもの　硬い　11号硬化面
1''　1'と同じだが、ラミナ状の部分よりブロックが卓越する　硬い　12号硬化面

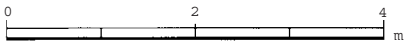
b-b'
1　a-a'の1層と同じ
1'　a-a'の1'層と同じ
1''　a-a'の1''層と同じ
2　4/4褐　土　地山～覆土漸移層　掘形の地山面も硬化している

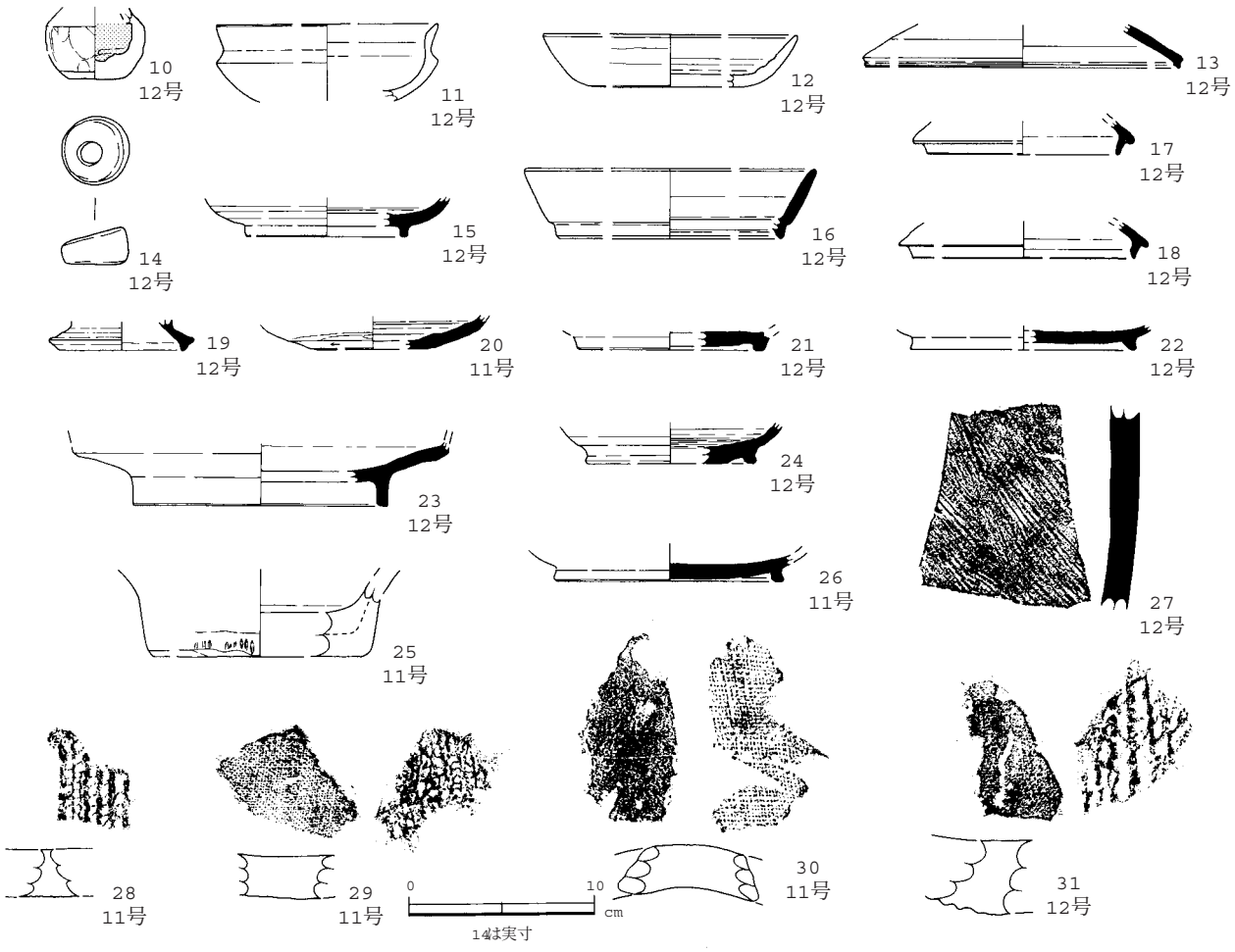


c-c'
1　a-a'の1層と同じ
1'　a-a'の1'層と同じ
1''　a-a'の1''層と同じ
2　4/4にぶい黄褐　土　黄褐土粒(～5mm)少
縄文時代遺構覆土?
2'　硬化した2層　硬い　縄文時代遺構覆土?
3　2/1黒3/2黒褐4/2灰黄褐がマーブル状に混ざる　土　しまる
4　2/1黒　土　黄褐土粒(～5mm)少　しまる
5　3/1黒褐3/2黒褐4/3にぶい黄褐がマーブル状に混ざる　土　しまる



d-d'
1　3/1黒褐～3/2黒褐　土　表土～包含層漸移層
2　3/1黒褐　土　包含層
3　3/1黒褐　土　黄褐土粒(～5mm)　硬い　12号硬化面
3'　3層から5層への漸移層
4　4/6褐　土　硬い
5　3/3暗褐　土　包含層～地山漸移層
6　2/1黒　土　硬い　11号硬化面
7　3/1黒褐～3/2黒褐　土　硬い　11号硬化面





14は実寸

第153図　11号・12号遺構および出土遺物

Ｄ３区だけはほぼ全面に硬化面があった。遺構底面は地形の通りに、ゆるく西から東へ傾斜している。宅地造成前の周辺地形（第２図）を見ると、台地上と東側の谷を連絡する小道であった可能性が考えられる。

時期については、遺構の性格上明確に限定することが難しいが、はじまりは、出土した遺物の大半を占める奈良・平安時代から中世の範疇にあると想定できる。下限については、この遺構には、平行・重複するかたちで、２号・３号・５号・308号・310号・311号・414号の長方形土坑、いわゆる「イモ穴」が見られ、また、第２図の通り最近の道と連絡しているようなので、現代まで利用されていた可能性が高い。

もう一つの道路跡である11号・12号との先後関係は、本遺構内に軸をそろえて掘り込まれる308号土坑が11号のＤ２区への延長・残存部分を切るという所見と、本遺構内に11・12号の硬化面が認められなかったことから、本遺構の新しいことが確実である。ただ、併存したかは不明である。

本遺構は、自然発生的な小径という性格上、確定はできないものの、遺物の様相から、遅くとも中世には機能していたと考えられる。

遺物は、土師器・須恵器・瓦片の他に、熙寧元寶（１）、滑石製有孔円板（２）、支脚片（３）、磨面のある石（輝緑岩）片（４）が出土した。

２号土坑（第154図）

規模（m）：長軸1.28／短軸0.48／深さ0.32　**時期**：中近世以降

出土遺物はなく、時期が不明。302号道路に平行する位置である。

３号土坑（第154図）

規模（m）：長軸6.56／短軸0.72～1.20　**時期**：中近世以降

302号道路・５号土坑に隣接する。出土遺物は実測不可能な土師器数片（鬼高式？）だけである。覆土は粗大なロームブロック主体で、人為的に埋め戻されたことが明らかであった。掘形には西端が幅55㎝ほど階段状に掘り残されていた。

５号土坑（第154図）

規模（m）：長軸1.88／短軸0.50／深さ0.53　**時期**：中近世以降

３号土坑の南側に接する。先後関係は不明である。これも遺物は皆無で、覆土はロームブロックが主体の埋め戻し土であった。

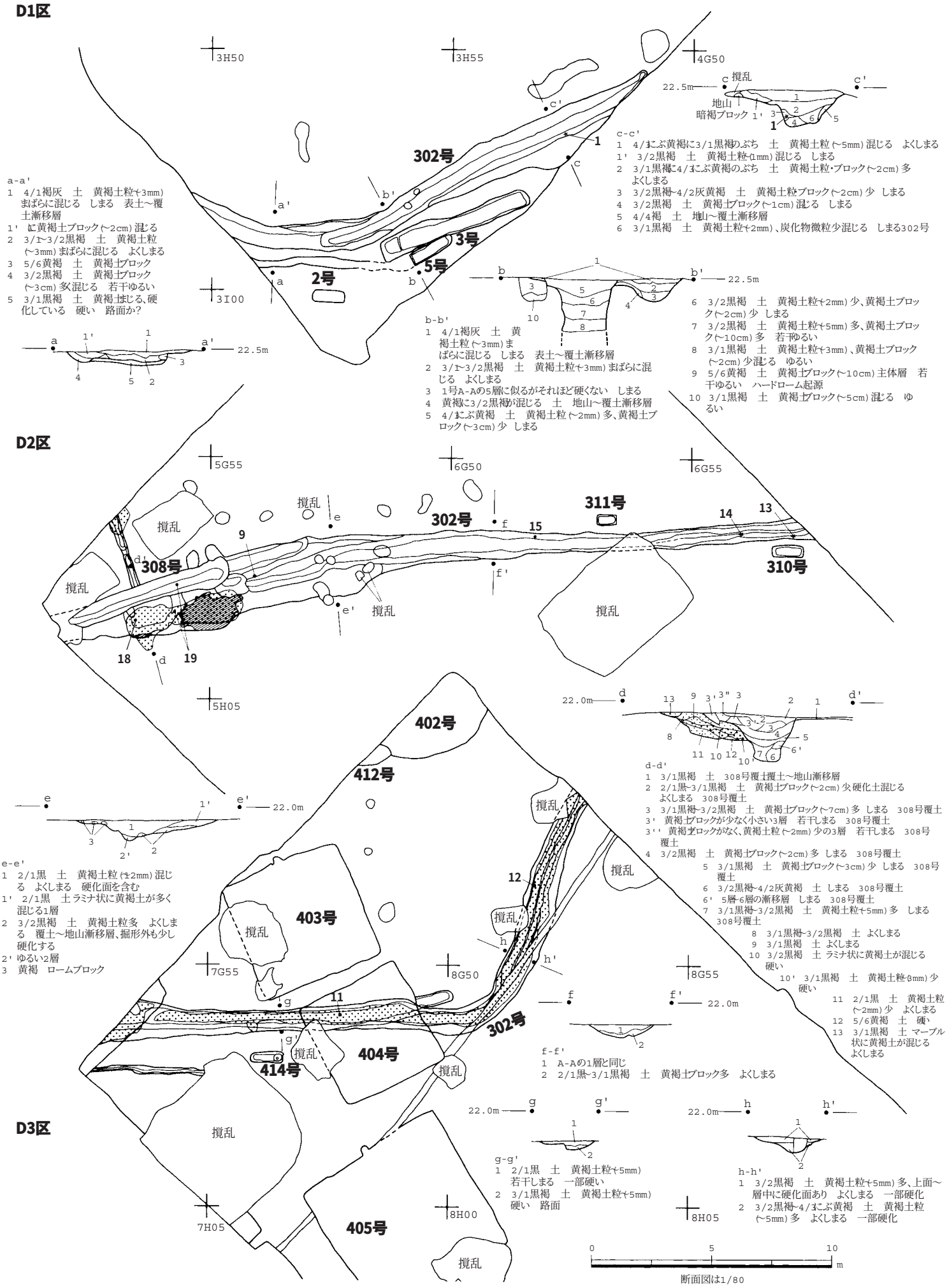
308号土坑（第154図）

規模（m）：長軸6.96／短軸0.80～1.12／深さ0.51～0.68　**時期**：中近世以降

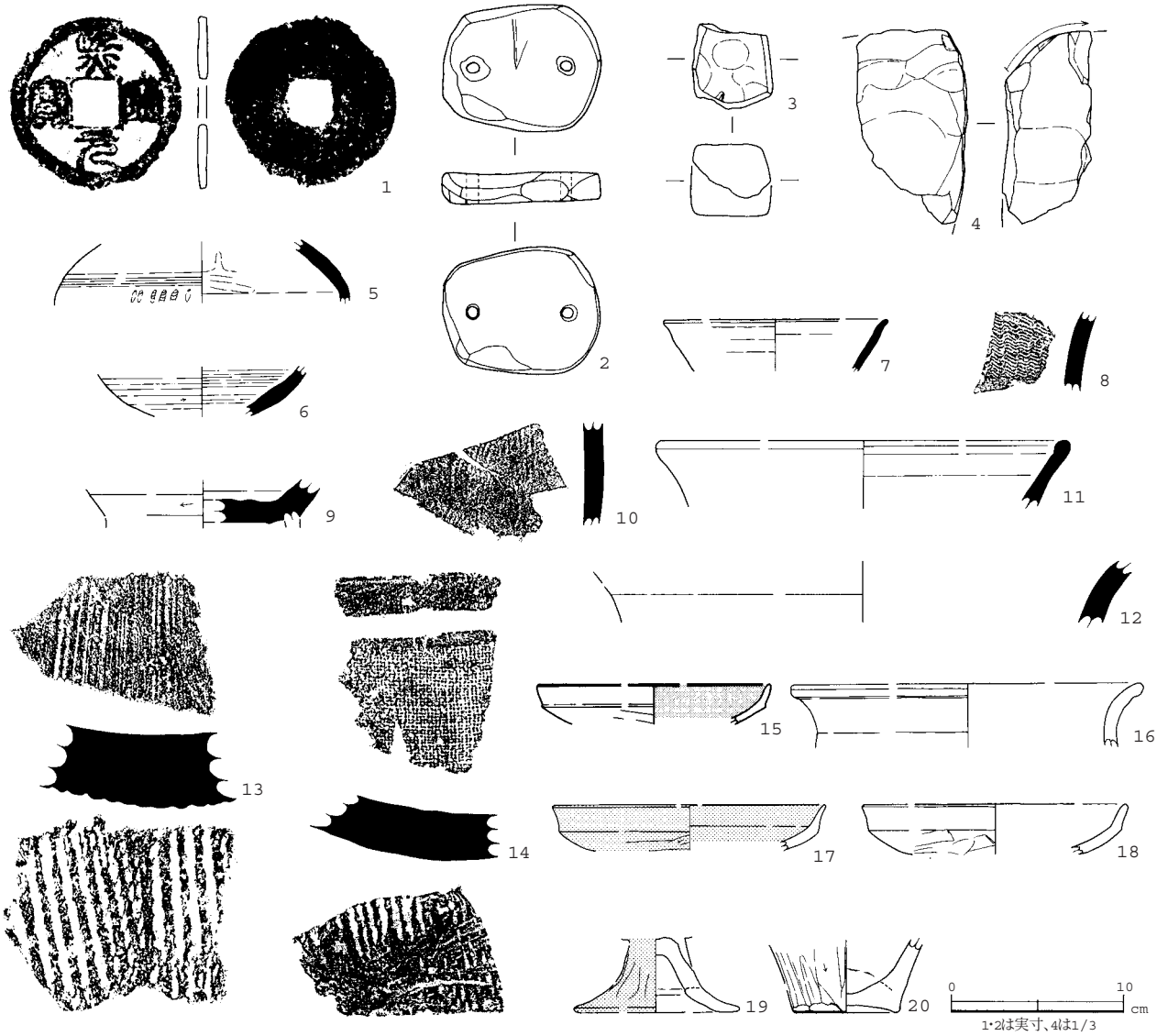
Ｄ２区の302号道路中にある。302号より後に掘り込まれており、11号をも切る。遺物は、実測に及ばない程度の土師器片が若干出土した。

310号土坑（第154図）

規模（m）：長軸1.32／短軸0.50／深さ0.24　**時期**：中近世以降



第154図　302号遺構および周辺遺構



第155図　302号遺構および周辺遺構出土遺物

302号道路に平行し、南側に隣接する。遺物は土師器数片である。

311号土坑（第154図）

規模（m）：長軸0.80／短軸0.44／深さ0.01～0.05　**時期**：中近世以降

302号道路に平行し、北側に隣接する。出土遺物はない。

414号土坑（第154図）

規模（m）：長軸1.36／短軸0.44／深さ0.35　**時期**：中近世以降

Ｄ３区の302号道路跡南側に接して位置する。底面にさらに穴がある。遺物は土師器片が少量出土している。

第６節　407号遺構検出貝層

第３節のとおり、407号古墳中期竪穴住居跡からは、覆土中より貝層が検出されている（第82～90図・図版105)。これは他の時代も含めて、今回の調査で唯一の事例である。

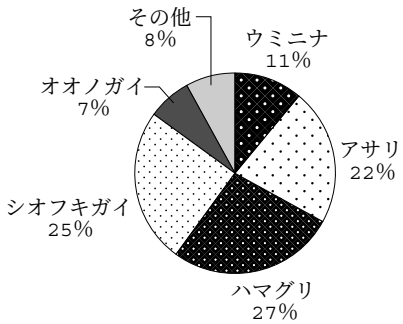
検出位置は貯蔵穴の直上で、土器が集中している部分にあった。遺構検出の際に、上面を調査しているときには確認できなかったので、覆土上層が堆積する以前のものと思われる。

性格は、出土状況から、機能時の竪穴住居とは無関係で、ある程度竪穴住居跡が埋没してできた窪地をめがけて廃棄された食物残滓だと考えられる。ただ、貯蔵穴直上での土坑状の検出が偶然かどうかは考える余地があるものと思われる。というのも、貯蔵穴に木製蓋があり、それが腐朽したために、後から土坑状に貝層が落ち込んだ可能性も考えられるからである。土器群に近接した時期にその上に廃棄された貝が落ち込んだのか、埋土が締まって、あるいは蓋が腐朽して深いくぼみができたから都合の良い捨て場にしたのかは、層位的検討ができなかったため不明である。

近い時期の類例には、市原市椎津茶ノ木遺跡136号遺構（木對1992）・千葉市大森第２遺跡第17号（Ｂ）住居址（栗本他1973）・木更津市マミヤク遺跡97号住居址（小沢1989）などがあり、いずれもカマド・貯蔵穴近辺に貝層が検出され、土器類も同時に少なからず検出されている。本例も含むこのような類例については、貝層と他の遺物、出土位置が相関する可能性を留保すべきだと思われる。

貝の組成は、下表の通り、アサリ・ハマグリ・シオフキ・オオノガイの二枚貝が主体である。サザエは無棘のもので、東京湾で採取されたと考えられる。フタ（長軸30.5／短軸28.0／厚さ8.2㎜／重さ7.4ｇ）も検出されており、生きたまま持ち込まれた可能性が高い。また、アサリ・ハマグリ・シオフキの殻高・殻長を計測したところ、数的ピークがそれぞれ、34㎜・44㎜、48㎜・54㎜、42㎜・50㎜に見られた（第156図)。微小貝は、陸産種47（ホソオカチョウジ22・ハリマキビ属１・ヒメベッコウ属類似種20・ヒメコハクの１種４）・海産種１（ツボミ）が確認されている。陸産種の数量の少なさは、本貝層の露出期間の短さを反映しているようである。

今回、確認された貝は、カワニナ等ごく一部を除いて東京湾で採取可能なものなので、加茂遺跡から直接、主体的に採集に出向いた結果だと考えられる。



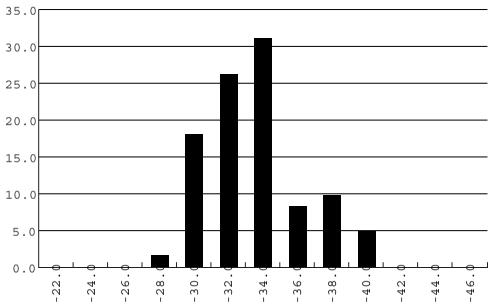
なお、組成で特徴的なのは、オオノガイが高い比率で見られることである。オオノガイは、アサリなどよりも泥中の深いところに生息しており、意図的に狙わなければ得にくいと考えられるので（黒住1998)、今回の貝層が１回の採集行為にほぼ対応するのなら、この種を目的に採取していた可能性も想定できる。

	クボガイ	イボキサゴ	サザエ	スガイ	カワニナ	ウミニナ	ツメタガイ	アカニシ	サルボウガイ		アサリ		ハマグリ		シオフキガイ		オオノガイ		備考
									L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	
個数	1	3	5	1	2	41	8	7	3	1	75	82	103	74	94	75	26	19	合計重量4201.6ｇ

第２表　407号検出貝層　貝種組成

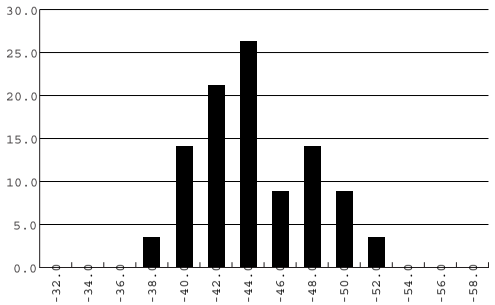
アサリ（R）　度数分布

殻高mm	個	%	総和	2乗和
−22.0		0.0	0	0
−24.0		0.0	0	0
−26.0		0.0	0	0
−28.0	1	1.6	27	729
−30.0	11	18.0	319	9251
−32.0	16	26.2	496	15376
−34.0	19	31.1	627	20691
−36.0	5	8.2	175	6125
−38.0	6	9.8	222	8214
−40.0	3	4.9	117	4563
−42.0		0.0	0	0
−44.0		0.0	0	0
−46.0		0.0	0	0
試料数	61	100.0	1983	64949
平均	32.51			
標準偏差	2.82			



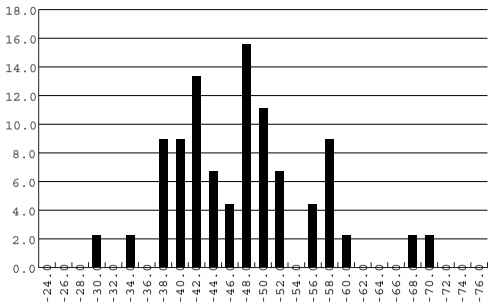
アサリ（R）　度数分布

殻長mm	個	%	総和	2乗和
−32.0		0.0	0	0
−34.0		0.0	0	0
−36.0		0.0	0	0
−38.0	2	3.5	74	2738
−40.0	8	14.0	312	12168
−42.0	12	21.1	492	20172
−44.0	15	26.3	645	27735
−46.0	5	8.8	225	10125
−48.0	8	14.0	376	17672
−50.0	5	8.8	245	12005
−52.0	2	3.5	102	5202
−54.0		0.0	0	0
−56.0		0.0	0	0
−58.0		0.0	0	0
試料数	57	100.0	2471	107817
平均	43.35			
標準偏差	3.50			



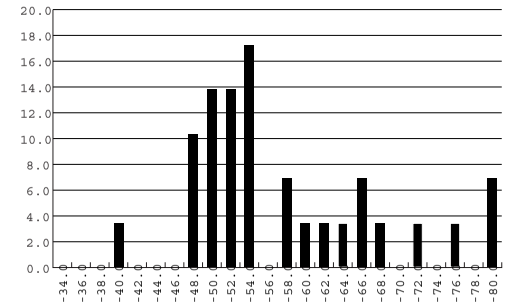
ハマグリ（L）　度数分布

殻高mm	個	%	総和	2乗和
−24.0		0.0	0	0
−26.0		0.0	0	0
−28.0		0.0	0	0
−30.0	1	2.2	29	841
−32.0		0.0	0	0
−34.0	1	2.2	33	1089
−36.0		0.0	0	0
−38.0	4	8.9	148	5476
−40.0	4	8.9	156	6084
−42.0	6	13.3	246	10086
−44.0	3	6.7	129	5547
−46.0	2	4.4	90	4050
−48.0	7	15.6	329	15463
−50.0	5	11.1	245	12005
−52.0	3	6.7	153	7803
−54.0		0.0	0	0
−56.0	2	4.4	110	6050
−58.0	4	8.9	228	12996
−60.0	1	2.2	59	3481
−62.0		0.0	0	0
−64.0		0.0	0	0
−66.0		0.0	0	0
−68.0	1	2.2	67	4489
−70.0	1	2.2	69	4761
−72.0		0.0	0	0
−74.0		0.0	0	0
−76.0		0.0	0	0
試料数	45	100.0	2091	100221
平均	46.47			
標準偏差	8.25			



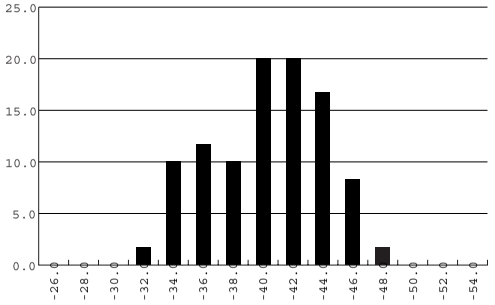
ハマグリ（L）　度数分布

殻長mm	個	%	総和	2乗和
−34.0		0.0	0	0
−36.0		0.0	0	0
−38.0		0.0	0	0
−40.0	1	3.4	39	1521
−42.0		0.0	0	0
−44.0		0.0	0	0
−46.0		0.0	0	0
−48.0	3	10.3	141	6627
−50.0	4	13.8	196	9604
−52.0	4	13.8	204	10404
−54.0	5	17.2	265	14045
−56.0		0.0	0	0
−58.0	2	6.9	114	6498
−60.0	1	3.4	59	3481
−62.0	1	3.4	61	3721
−64.0	1	3.4	63	3969
−66.0	2	6.9	130	8450
−68.0	1	3.4	67	4489
−70.0		0.0	0	0
−72.0	1	3.4	71	5041
−74.0		0.0	0	0
−76.0	1	3.4	75	5625
−78.0		0.0	0	0
−80.0	2	6.9	158	12482
−82.0				
−84.0				
−86.0				
−88.0				
−90.0	1			
−92.0				
試料数	29	100.0	1643	95957
平均	56.66			
標準偏差	9.95			



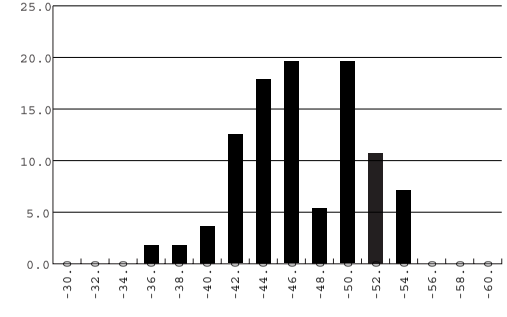
シオフキ（L）　度数分布

殻高mm	個	%	総和	2乗和
−26.0		0.0	0	0
−28.0		0.0	0	0
−30.0		0.0	0	0
−32.0	1	1.7	31	961
−34.0	6	10.0	198	6534
−36.0	7	11.7	245	8575
−38.0	6	10.0	222	8214
−40.0	12	20.0	468	18252
−42.0	12	20.0	492	20172
−44.0	10	16.7	430	18490
−46.0	5	8.3	225	10125
−48.0	1	1.7	47	2209
−50.0		0.0	0	0
−52.0		0.0	0	0
−54.0		0.0	0	0
試料数	60	100.0	2358	93532
平均	39.30			
標準偏差	3.79			



シオフキ（L）　度数分布

殻長mm	個	%	総和	2乗和
−30.0		0.0	0	0
−32.0		0.0	0	0
−34.0		0.0	0	0
−36.0	1	1.8	35	1225
−38.0	1	1.8	37	1369
−40.0	2	3.6	78	3042
−42.0	7	12.5	287	11767
−44.0	10	17.9	430	18490
−46.0	11	19.6	495	22275
−48.0	3	5.4	141	6627
−50.0	11	19.6	539	26411
−52.0	6	10.7	306	15606
−54.0	4	7.1	212	11236
−56.0		0.0	0	0
−58.0		0.0	0	0
−60.0		0.0	0	0
試料数	56	100.0	2560	118048
平均	45.71			
標準偏差	4.27			



第156図　407号貝層　殻高・殻長度数分布

第７節　加茂遺跡Ｄ地点におけるテフラの分析結果

上本進二（神奈川県災害史研究所）

１．はじめに

市原市加茂遺跡は富士山頂から約125㎞、富士山の真東から約６度45分北にずれた位置にある。富士系テフラの等層厚線の尾根は富士山の真東よりもやや北に偏って相模野台地を通っているので、本遺跡の富士系テフラ層厚は同距離の地域の中では最も厚く堆積している地域に当たる。

本遺跡から採取したテフラ分析試料は、Ｄ１区では４ヶ所で考古層位毎に、Ｄ３区の１遺構では、下位から上位にむかって10㎝おきに採集した。Ｄ２区とＤ３区では上位から下位に向かって５㎝おきに、また、掘立柱建物跡については上下・上中下に大別した層位毎に採集した。採集したテフラ試料を分析し、上杉ほか（1995）に基づいて同定した。

テフラ試料の分析方法は、①腐植物と風化物質が完全に無くなるまで洗浄し、②自然乾燥させた後、③実体顕微鏡で観察し、④富士系スコリア礫や岩片の諸特徴、挟在する箱根系その他の軽石質火山灰や火山ガラス片を根拠にしたテフラ層序学的区分（上杉ほか,1995；上本・上杉,1996）に基づいて分析と同定をおこなった。テフラ試料の採取位置は各遺構の図に、テフラ分析結果は右表に示した。

洗浄後のテフラには全般的に高温石英や円磨砂が含まれており、富士系テフラの鉱物に比べて大粒のため区別は容易であった。また、他火山起源と思われる輝石や軽石が含まれているが、分析結果表には富士系テフラ以外のテフラ物質については同定できたもののみ記載した。

２．Ｄ１区

17号遺構（竪穴住居跡）覆土

試料１～10は弥生後半期の住居址覆土である。試料１～４を採集した土層にはロームブロックが混入している。

試料１・２は弥生時代初期のテフラで、試料３は不明鉱物が多く北関東系または伊豆七島系のテフラの可能性がある。試料４には浅間Ｃ軽石が入っているので富士系テフラのＳ－24－４～５であろう。試料５・６は橄欖石巨晶が特徴的なＳ－24－６であるが、伊豆七島系のテフラが多く混入している。試料７・８はスコリアが多く、Ｓ－24－７であろう。試料９は二次堆積のテフラと思われ、Ｓ－24－７～10が含まれている。試料10は宝永スコリアの純層に近い。

14号遺構（竪穴住居跡）覆土

試料１～７は５世紀中頃の古墳時代の竪穴住居跡覆土である。

試料１を採集した土層には焼土が混じっており変色した橄欖石が目立つＳ－24－６である。試料２～４はＳ－24－６～７で、試料５・６は海綿発泡スコリアが特徴的なＳ－24－７～８である。試料８は宝永スコリア主体である。

32号遺構（竪穴住居跡）覆土

試料１～６は６世紀頃の古墳時代の竪穴住居跡覆土である。

試料１・２を採集した土層にはロームブロックが含まれており、試料２からは榛名山の軽石（ＦＡ）と思われる輝石付白色軽石が含まれている。試料３～６は牛糞状スコリアが特徴的なＳ－24－７～８であり、最上位の試料６にも宝永スコリアは含まれていなかった。

35号遺構（竪穴住居跡：第139図）覆土

試料１～６は弥生時代の住居址覆土である。

試料1･2は弥生時代初期のテフラで､試料3は浅間Ｃ軽石と思われる軽石を含んでいるので富士系テフラのＳ－24－4～5であろう｡試料4は橄欖石巨晶が特徴的なＳ－24－6であるが､鉄鉱物･黒雲母などＳ－24－4～5のテフラも含んでいる｡試料5は橄欖石や海綿発泡スコリアが多い点からＳ－24－6～8であろう｡試料6は宝永スコリアおよび二次堆積のＳ－24－7～10を含んでいる。

山砂と考えられている試料は円磨された砂や鉱物が主体で細粒物質より成る。一次堆積のテフラは含まれておらず、海岸砂丘または河畔砂丘からの飛砂と考えられる。また、石英が少ないのでレスの可能性も少ない。

３．Ｄ２区

211号遺構（竪穴住居跡：第13図）覆土

試料は弥生中期宮ノ台式期の土器を出土する竪穴住居址の覆土である。全試料に伊豆七島系や浅間・北関東系のテフラが入っていると思われる。試料１～３は宝永スコリアと他のテフラが二次堆積したもの、試料の４～９は多種のテフラが混ざり合った二次堆積のテフラである。試料10には浅間Ｃ軽石と思われる軽石が入っているので富士系テフラのＳ－24－４～５であろう。試料11は灰色安山岩片が見られる点からＳ－24－３と思われるが、海綿発泡スコリアを含むことからＳ－24－４も混ざっていると思われる。試料12は灰色安山岩が特徴的なＳ－24－３であろう。

17号竪穴住居跡覆土テフラ分析結果

試料№	テフラの構成物質と特徴	テフラ番号	推定降下年代
1	橄欖石多量　斜長石付黒色溶岩片　ファイバーガラス 海綿発泡スコリア　球形気孔玄武岩質溶岩片	S-23	弥生時代前期～中期前半？
2	橄欖石破片多量　橄欖石巨晶　単斜輝石　ファイバーガラス 翼状バブルウォールガラス　赤黄色鉱物　海綿発泡スコリア	S-24-1	ＡＤ０？
3	Ｘ形バブルウォールガラス　ゼリー状ガラス　斜方輝石 黒斑晶軽石巨晶橄欖石　紅ショウガ色風化鉱物	？	？
4	スコリア急増　橄欖石多量　輝石チタン鉄鉱物 翼状バブルウォールガラス　ねじれファイバーガラス バブルウォールガラス　斜長石付玄武岩溶岩　浅間Ｃ軽石 赤色溶岩片斜長石	S-24-4～5	ＡＤ500～750
5	橄欖石多量　橄欖石巨晶　輝石バブルウォールガラス 球形気孔玄武岩質溶岩片　赤色溶岩片 石英付玄武石黒色斑晶付凝灰岩	S-24-6	ＡＤ500～750
6	橄欖石多量　橄欖石巨晶　牛糞状スコリア多量 微細気孔スコリア	S-24-6	ＡＤ500～750
7	海綿発泡スコリア　橄欖石多量　赤色溶岩片 ファイバーガラス　ゼリー状ガラス	S-24-7	ＡＤ781～848
8	赤色溶岩片　巨大橄欖石　海綿発泡スコリア ファイバーガラス　橄欖石多量	S-24-7	ＡＤ781～848
9	高温石英　赤色溶岩片　スポンジガラス　トゲトゲスコリア 白色石英　橙色海綿発泡スコリア　ファイバーガラス	S-24-7～10	ＡＤ781～1560
10	宝永スコリア多量　海綿発泡スコリア	S-25	ＡＤ1707

14号竪穴住居跡覆土テフラ分析結果

試料№	テフラの構成物質と特徴	テフラ番号	推定降下年代
1	橄欖石多量　巨晶橄欖石　ファイバーガラス 斜長石付牛糞状スコリア　球形気孔玄武岩質溶岩片　黒色溶岩片	S-24-6 S-24-7混入	ＡＤ500～750 ＡＤ781～848
2	橄欖石破片多量　単斜輝石　球形気孔玄武岩質溶岩片 ファイバーガラス　海綿発泡スコリア	S-24-6～7	ＡＤ500～848
3	橄欖石破片多量　単斜輝石　球形気孔玄武岩質溶岩片 ファイバーガラス　海綿発泡スコリア	S-24-6～7	ＡＤ500～848
4	橄欖石破片多量　単斜輝石　球形気孔玄武岩質溶岩片高温石英　ファイバーガラス　海綿発泡スコリア	S-24-6～7	ＡＤ500～848
5	角閃石　球形気孔玄武岩質溶岩片　橄欖石バブルウォールガラス　斜長石橙色ファイバー状スコリア	S-24-7～8	ＡＤ781～1083
6	ファイバーガラス角閃石　球形気孔玄武岩質溶岩片橄欖石 バブルウォールガラス　斜長石橙色ファイバー状スコリア	S-24-8 S-24-7混入	ＡＤ864～1083 ＡＤ781～848
7	宝永スコリア多量　海綿発泡スコリア　S-24-7～8混入	S-25	ＡＤ1707

32号竪穴住居跡覆土テフラ分析結果

試料№	テフラの構成物質と特徴	テフラ番号	推定降下年代
1	土器片多量　斜長石付牛糞状スコリア　橄欖石多量 球形気孔玄武岩質溶岩片	S-24-6	ＡＤ500～750
2	土器片多量　斜長石付牛糞状スコリア　橄欖石多量 輝石付鉱物付白色軽石（ＦＡ？）	S-24-6 ＦＡ？	ＡＤ500～750 ＡＤ500？
3	石英礫　橙色ファイバー状スコリア骸骨状軽石	S-24-7～8	ＡＤ781～1083
4	石英礫　黄色石英　橙色ファイバー状スコリア	S-24-7～8	ＡＤ781～1083
5	チャート礫　白色軽石（神津島886年） 玄武岩質溶岩片　海綿発泡牛糞状ファイバー状スコリア	S-24-8 神津島886	ＡＤ864～1083 ＡＤ886
6	円礫　黄色石英　橙色ファイバー状スコリア ファイバーガラス　バブルウォールガラス　宝永スコリア無し	S-24-7～8	ＡＤ781～1083

35号竪穴住居跡覆土テフラ分析結果

試料№	テフラの構成物質と特徴	テフラ番号	推定降下年代
1	無色斑晶白色軽石　ラグビーボール形小粒橄欖石多量 斜長石　単斜輝石　バブルウォールガラス　海綿発泡スコリア	S-23	弥生時代前期～中期前半？
2	無色斑晶白色軽石　ラグビーボール形小粒橄欖石多量 斜長石　単斜輝石　バブルウォールガラス　海綿発泡スコリア	S-23	弥生時代前期～中期前半？
3	浅間Ｃ軽石？　白色軽石　バブルウォールガラス ファイバー状スコリア　海綿発泡スコリア玄武岩溶岩	S-24-4～5 浅間Ｃ	ＡＤ250～500？ 古墳時代初期
4	黒雲母　ねじれファイバーガラス　橄欖石巨晶　鉄鉱物 粟粒気孔黄土色スコリア　厚皮膜球形スコリア	S-24-6主体 S-24-4～5	ＡＤ500～750
5	スコリア急増　植物種子　海綿発泡スコリア ねじれファイバーガラス　橄欖石　鉄鉱物　バブルウォールガラス	S-24-6～8	ＡＤ500～1083
6	宝永スコリア多量　海綿発泡スコリア	S-25主体 S-24-7～10	ＡＤ1707
砂	円磨鉱物砂　円磨砂　バブルウォールガラス　ファイバーガラス　円磨海綿発泡スコリア円磨玄武岩溶岩	飛砂	？

Ｄ２区211号竪穴住居跡覆土テフラ分析結果

試料№	テフラの構成物質と特徴	テフラ番号	推定降下年代
1	宝永スコリア　玄武岩質クレーター気孔溶岩片　頁岩礫 海綿発泡スコリア	S-25 二次堆積	ＡＤ1707
2	宝永スコリア　風化橄欖石　輝石　海綿発泡スコリア	S-25 二次堆積	ＡＤ1707
3	宝永スコリア　薄片状ゼリーガラス　トゲトゲ玄武岩質スコリア　橙色海綿発泡スコリア自形橄欖石	S-24-10 ～S-25	ＡＤ1560～1707
4	テフラ少ない　赤色溶岩片　円磨スコリア　風化橄欖石 板状石英　輝石	？	？
5	テフラ僅少　円磨スコリア　板状石英　輝石	？	？
6	テフラ僅少　円磨スコリア　板状石英　輝石　風化橄欖石	？	
7	玄武岩質溶岩片　石英付黒色スコリア　鉄鉱物	？	？
8	テフラ僅少　トゲトゲスコリア　輝石　風化橄欖石黒色溶岩片	？	？
9	テフラ僅少　輝石　風化橄欖石	？	？
10	円磨スコリア急増　微細孔スコリア　輝石板状石英鉄 角閃石　翼状バブルウォールガラス　浅間Ｃ軽石？ 赤色溶岩片海綿発泡スコリア	S-24-4～5 浅間Ｃ軽石？	ＡＤ250～500？ 古墳時代初期
11	テフラ僅少　輝石	？	？
12	円磨スコリア　鉄鉱物　輝石　橄欖石	？	？

Ｄ２区211号竪穴住居跡ピット西覆土テフラ分析結果

試料№	テフラの構成物質と特徴	テフラ番号	推定降下年代
上層	微細孔赤色スコリア　翼状ファイバーガラス　ゼリー状ガラス　剥片ガラス牛糞状スコリア　玄武岩質溶岩片赤色溶岩片	S-24-6 二次堆積	ＡＤ500～750
下層	微細孔赤色スコリア　翼状ファイバーガラス　ゼリー状ガラス　剥片ガラス牛糞状スコリア玄武岩質溶岩片　風化橄欖石	S-24-6	ＡＤ500～750

Ｄ２区213号掘建柱建物跡ピットＥ・Ｍ覆土テフラ分析結果

試料№	テフラの構成物質と特徴	テフラ番号	推定降下年代
ピットＥ 上層	自形橄欖石　石英付玄武岩質溶岩片　赤色溶岩片 海綿発泡赤色スコリア　微細気孔スコリア	S-24-6 S-24-7含む	ＡＤ500～750 ＡＤ781～848
ピットＥ 下層	スコリア多い　赤色溶岩片　微細孔スコリア　巨大橄欖石 平板石英　ゼリー状ガラス	S-24-6	ＡＤ500～750
ピットＭ 上層	微細気孔スコリア　海綿発泡赤色スコリア　黒灰色岩片 自形橄欖石	S-24-6	ＡＤ500～750
ピットＭ 下層	赤色溶岩片　黒色溶岩片　石英付微細孔スコリア 巨大橄欖石	S-24-6	ＡＤ500～750

第３表　テフラ分析結果１／２

211号遺構（竪穴住居跡）西側柱穴覆土

上層は二次堆積と思われる。上下層ともＳ－24－６を主体としている。古墳時代中後期に埋没したと思われる。

213号遺構（掘建柱建物跡：第142図）ピットＥ・Ｍ覆土

ピットＥ上層にＳ－24－７を含むが、それ以外はＳ－24－６を主体としている。古墳時代中後期に埋没したと思われる。ピットＥ上層は平安時代初頭まで凹地になっていたと思われる。

241号遺構（掘建柱建物跡：第143図）ピットＡ・Ｅ覆土

この建物址のピットは平安時代初期まで凹地であったようで、Ｓ－24－７がピット上部を埋めている。また、ピットＡ下層は被熱を受けており、柱材が燃えた可能性がある。

303号遺構（掘建柱建物跡：第144図）ピットＡ・Ｆ覆土

この建物址のピットには他のピットよりもテフラが多く堆積している。平安時代初期まで凹地であったようで、Ｓ－24－７がピット上部を埋めている。建物址自体が他の建物址よりも新しいのではないか。

304号遺構（掘建柱建物跡：第145図）ピットＥ・Ｌ覆土

この建物址のピットには303号同様他のピットよりもテフラが多く堆積している。平安時代初期まで凹地であったようで、Ｓ－24－７がピット下部まで入っている。ピットＥ下層にはＳ－24－５が混入している形跡も認められる。303号同様建物址自体が他の建物址よりも新しいのではないか。

305号遺構（掘立柱建物跡：第144図）ピットＢ・Ｆ覆土

スコリアがほとんど検出されず、Ｓ－24－６降下以前の覆土らしい。鉄鉱物が多いのでＳ－24－５の可能性がある。Ｓ－24－５であれば、掘立建物址の中では最も古いと考えられる。

4. Ｄ３区

402号遺構（竪穴住居跡：第11図）覆土

試料は弥生中期宮ノ台式期と思われる土器を出土する竪穴住居址の覆土である。全試料に伊豆七島系や浅間・北関東系のテフラが入っていると思われる。試料１～６は宝永スコリアと他のテフラが二次堆積したもの、試料の９～13はＳ－24－７・８のスコリアに富む層でいわゆる延暦貞観スコリアに相当する。

試料15～17はＳ－24－６、試料18～19はＳ－24－４～５であろう。試料20は地山から剥離したと思われる砂粒が目立った。

402号遺構（竪穴住居跡）東ピット覆土

上層にはテフラがほとんど無く、下層にテフラが多く含まれている。鉄鉱物が豊富な点からＳ－24－５と思われる。

５．まとめ

Ｄ１区の17号および35号弥生時代住居址は、出土遺物から弥生時代後半期の住居と考えられているが、床面直上のテフラは弥生時代前期から中期のテフラと思われる。すでに降下堆積していたテフラが流れ込んできたものと思われる。いずれの住居址もＳ－24－６からＳ－24－８によって大半が埋められているので、古墳時代から平安時代前期までに埋没したものと思われる。

Ｄ２区の掘建柱建物址の覆土や柱穴覆土のテフラ分析の結果から、最も古いテフラとしてＳ－24－５と思われるテフラが検出されている。柱穴覆土で最も新しいテフラはＳ－24－７であった。柱穴から柱が抜かれた場合と、地下部分を残して折れたかまたは焼けた場合では覆土の堆積時期にずれが生ずる。この差を無視して柱穴覆土に入っているテフラの降下時期だけで判断すれば、最も古い住居は305号であり、211号、213号、241号、304号、303号の順に新しくなる。

Ｄ３区の402号竪穴住居址床面直上からは、Ｓ－24－４～５と思われるテフラが検出されている。ピット覆土からもＳ－24－５が検出されていることから、西暦350～500年頃に埋没したと考えられる。

Ｄ２区241号掘建柱建物址ピットＡ・Ｆ覆土テフラ分析結果

試料№	テフラの構成物質と特徴	テフラ番号	推定降下年代
ピットＡ上層	テフラ少ない　黒色溶岩片　バブルウォールガラス 自形橄欖石海綿発泡橙色スコリア	Ｓ-24-７？	ＡＤ781～848
ピットＡ下層	変色橄欖石多量（被熱）　平板石英　微細気孔スコリア ゼリー状ガラス　黒色溶岩片	Ｓ-24-６ 二次堆積？	ＡＤ500～750
ピットＥ上層	微細気孔スコリア　海綿発泡赤色スコリア　黒・赤色溶岩片 自形橄欖石　バブルウォールガラス　ゼリーガラス　板状ガラス	Ｓ-24-６・７	ＡＤ500～848
ピットＥ下層	赤色溶岩片　橄欖石多量　黒色鉱物付白色軽石 薄皮膜海綿発泡橙色スコリアテフラ少ない	Ｓ-24-６？	ＡＤ500～750？

Ｄ２区303号掘建柱建物址ピットＡ・Ｆ覆土テフラ分析結果

試料№	テフラの構成物質と特徴	テフラ番号	推定降下年代
ピットＡ上層	テフラ多い　海綿発泡橙色スコリア　赤・黒色溶岩片 ゼリーガラス　橄欖石多量	Ｓ-24-７	ＡＤ781～848
ピットＡ中層	スコリア多量　黒灰色岩片　赤・黒色溶岩片バブルウォールガラス　海綿発泡橙色スコリア　ゼリーガラス 橄欖石多量　微細気孔スコリア	Ｓ-24-７主体 Ｓ-24-６混入	ＡＤ781～848 ＡＤ500～750
ピットＡ下層	巨大橄欖石　微細気孔スコリア　ゼリー状ガラス 黒・赤色溶岩片　橄欖石多量	Ｓ-24-６主体 Ｓ-24-７混入	ＡＤ500～750 ＡＤ781～848
ピットＦ上層	テフラ多い　海綿発泡橙色スコリア　赤・黒色溶岩片 ゼリーガラス　橄欖石多量	Ｓ-24-７	ＡＤ781～848
ピットＦ中層	スコリア多量　黒灰色岩片　赤・黒色溶岩片バブウォ-ルガス 海綿発泡橙色スコリア　ゼリーガラス　橄欖石多量　微孔スコリア	Ｓ-24-７主体 Ｓ-24-６混入	ＡＤ781～848 ＡＤ500～750
ピットＦ下層	ファイバーガラス　黒灰色スコリア　微細気孔スコリア ゼリー状ガラス　黒・赤色溶岩片　橄欖石多量	Ｓ-24-６主体 Ｓ-24-７混入	ＡＤ500～750 ＡＤ781～848

Ｄ２区304号掘建柱建物址ピットＥ・Ｌ覆土テフラ分析結果

試料№	テフラの構成物質と特徴	テフラ番号	推定降下年代
ピットＥ上層	厚皮膜微細気孔スコリア　赤・黒色溶岩片板状石英 灰色岩片　ゼリーガラス　橄欖石	Ｓ-24-６	ＡＤ500～750
ピットＥ下層	橄欖石　赤色溶岩片　微細気孔スコリア　玄武岩質溶岩片 銀色スコリア	Ｓ-24-６主体 Ｓ-24-5混入？	ＡＤ500～750 ＡＤ350～500？
ピットＬ上層	風化橄欖石多量　赤・黒色溶岩片　海綿発泡橙色スコリア 微細気孔スコリア	Ｓ-24-７ Ｓ-24-６混入	ＡＤ781～848
ピットＬ中層	風化橄欖石多量　赤・黒色溶岩片　海綿発泡橙色スコリア 微細気孔スコリア	Ｓ-24-７ Ｓ-24-６混入	ＡＤ781～848
ピットＬ下層	平板石英　微細気孔スコリア　黒灰色岩片　黒・赤色溶岩片　橄欖石多量	Ｓ-24-６・７	ＡＤ500～848

Ｄ２区305号掘建柱建物址ピットＢ・Ｆ覆土テフラ分析結果

試料№	テフラの構成物質と特徴	テフラ番号	推定降下年代
ピットＢ	スコリア無し　橄欖石多量　微細鉄鉱物多量 玄武岩質溶岩片　ファイバーガラス	Ｓ-24-５？	ＡＤ350～500？
ピットＦ	スコリア僅少　橄欖石多量　微細鉄鉱物多量 玄武岩質溶岩片　ファイバーガラス　赤色スコリア砕片	Ｓ-24-５？	ＡＤ350～500？

Ｄ３区402号竪穴住居址覆土テフラ分析結果

試料№	テフラの構成物質と特徴	テフラ番号	推定降下年代
1	宝永スコリア　玄武岩質クレーター気孔溶岩片　頁岩礫 海綿発泡スコリア	Ｓ-25 二次堆積	ＡＤ1707
2	宝永スコリア　風化橄欖石　輝石　海綿発泡スコリア	Ｓ-25 二次堆積	ＡＤ1707
3	宝永スコリア　風化橄欖石　輝石　海綿発泡スコリア	Ｓ-25 二次堆積	ＡＤ1707
4	宝永スコリア少量　トゲトゲ玄武岩質スコリア　赤色溶岩片　粟粒牛糞状スコリア	Ｓ-24-10 ～Ｓ-25	ＡＤ1560～1707
5	宝永スコリア　トゲトゲ玄武岩質スコリア　ゼリーガラス 赤色溶岩片　粟粒牛糞状スコリア	Ｓ-24-10 ～Ｓ-25	ＡＤ1560～1707
6	宝永スコリア少量　橄欖石　鉄　トゲトゲ玄武岩質スコリア　赤色溶岩片　粟粒牛糞状スコリア	Ｓ-24-10 ～Ｓ-25	ＡＤ1560～1707
7	赤色鉄鉱物　ピンク色石英　自形橄欖石　橙色風化橄欖石 海綿発泡スコリア	Ｓ-24-９？	ＡＤ1511？
8	微細気孔スコリア　二次堆積円磨スコリア片	？	？
9	赤色溶岩片　海綿発泡牛糞状ファイバー状スコリア　グレー岩片　自形橄欖石	Ｓ-24-８	ＡＤ864～1083
11	海綿発泡牛糞状ファイバー状スコリア　グレー岩片　自形橄欖石 赤色溶岩片　翼状バブルウォールガラス黒灰色スコリア	Ｓ-24-８	ＡＤ864～1083
12	海綿発泡牛糞状ファイバー状スコリア　グレー岩片　自形橄欖石　赤色溶岩片　スポンジガラス板状石英	Ｓ-24-８	ＡＤ864～1083
13	粟粒発泡牛糞スコリア　黒鉱物付板状石英　バブルウォールガラス 玄武岩質溶岩片　赤色溶岩片　気泡ガラス	Ｓ-24-７	781～848
14	橄欖石　ファイバーガラス微細気孔スコリア	？	？
15	円磨スコリア　黒灰色スコリア　微細孔スコリア　板状石英	Ｓ-24-６？	ＡＤ500～750？
16	巨晶橄欖石　ローム団子状スコリア　微細孔スコリア 板状石英　白色軽石（ＦＡ）	Ｓ-24-６ ＦＡ	ＡＤ500～750 ＡＤ500？
17	テフラ僅少	？	？
18	橄欖石　球形玄武岩質溶岩片　黒灰色スコリア	Ｓ-24-４～５	ＡＤ250～500？
19	円磨スコリア赤色石英　鉄鉱物　赤色溶岩片 橄欖石微細孔スコリア海綿発泡スコリア	Ｓ-24-４～５	ＡＤ250～500？
20	円磨スコリア赤色石英　鉄鉱物　赤色溶岩片 橄欖石微細孔スコリア海綿発泡スコリア	地山？	？

Ｄ３区402号竪穴住居東側ピット覆土テフラ分析結果

試料№	テフラの構成物質と特徴	テフラ番号	推定降下年代
上層	テフラ僅少　二次堆積	？	？
下層	長柱状橄欖石　鉄鉱物　微細孔赤色スコリア	Ｓ-24-５？	ＡＤ350～500？

第４表　テフラ分析結果２/２

引用文献

上杉　陽・池田京子・須田明子・柳沢唯佳・岡本真砂夫・鈴木　聡（1995）富士山北東麓の鷹丸尾溶岩類．関東の四紀,19, ｐ３－21.

上本進二・上杉　陽（1996）神奈川県のテフラ層と遺跡層序－考古学のためのＹ－Ｎｏ．・Ｓ－Ｎｏ．－分層マニュアル．関東の四紀20, ｐ３－24.

第８節　加茂遺跡Ｄ地点竪穴住居跡出土炭化材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

１．はじめに

当遺跡は養老川右岸に位置し、下総台地南部の標高約25m前後の台地上から縁辺部に立地している。ここでは、弥生時代中期（４件63試料）と古墳時代中期～後期（12件21試料）の竪穴住居跡から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。これらの炭化材のほとんどは、出土産状から建築材であったと推定される試料である。

台地上の集落では、どのような樹種が住居建築材として利用されていたのかを明らかにする事により、その樹種構成などから木材を調達したであろう遺跡周辺の森林景観と木材利用に関する情報を得る事ができ、資料の蓄積にもなる。

２．炭化材樹種同定の方法

先ず、炭化材の横断面（木口）を手で割り実体顕微鏡で分類群のおおよその目安をつける。アカガシ亜属・コナラ節・クヌギ節・クリなどは横断面の管孔配列が特徴的である。これらの典型的な試料は、実体顕微鏡下の観察で同定した。それ以外の分類群については３方向の破断面（横断面・接線断面・放射断面）を走査電子顕微鏡で拡大して材組織の特徴をもとに同定を決定した。走査電子顕微鏡用の試料は、３断面を５㎜角以下の大きさに整え、直径１㎝の真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　ＪＳＭ－Ｔ100型）で観察と写真撮影を行った。

３．結果

同定結果の一覧を、第５表に示した。第６表では、各住居と時期別に利用樹種を比較した。第６表の樹種の配列は、両時期に共通して検出された分類群、次に弥生時代中期、そして古墳時代中期～後期に検出された分類群を配置した。

検出樹種

検出された樹木は、カヤ・イヌガヤ・マツ属複維管束亜属の針葉樹３分類群、オニグルミ・アサダ・クヌギ節・ケヤキ・ヤマグワ・モクレン属・サクラ属・イヌエンジュの落葉広葉樹８分類群、アカガシ亜属・シキミ・クスノキ科の常緑広葉樹３分類であった。このほかに、タケ亜科（タケ・ササ類）とススキ属も検出された。なお、セ297Ｄ３区408号炭６は材部が抜けた樹皮であった。

最も多かった木本樹種はクヌギ節で、５件の38試料から検出された。次にケヤキ（２件から17試料）、アカガシ亜属（３件から６試料）、イヌガヤ（２件から６試料）、カヤ（１件から４試料）、オニグルミ（１件から３試料）、イヌエンジュ（２件から２試料）の順に多く、そのほかの樹種は異なる竪穴住居からそれぞれ１試料が検出された。

各住居跡の検出樹種の構成は、針葉樹や落葉性および常緑性の広葉樹の樹種が、様々な組み合せで検出された。

405号から検出された２試料は樹木では無く、タケ亜科（いわゆるタケ・ササ類）とススキ属類似であった。ススキ属類似の稈は単独のほかに集積して潰れたものもあった。

時期別の利用樹種

弥生時代中期と古墳時代中期～後期の竪穴住居跡から共通して検出された樹種は、針葉樹のイヌガヤと落葉広葉樹のイヌエンジュ・クヌギ節の３分類群であった。ケヤキ・オニグルミ・クスノキ科は弥生時代中期から検出されたが、古墳時代中期～後期からは検出されなかった。逆に、カヤ・マツ属複維管束亜属・アカガシ亜属・アサダ・ヤマグワ・モクレン属・シキミ・サクラ属は、古墳時代中期～後期から検出されたが弥生時代中期からは検出されなかった。

クヌギ節は両時期から検出されているが、古墳時代中期～後期は１試料だけであり、弥生時代中期に圧倒的に多い。

弥生時代中期は落葉広葉樹のクヌギ節・ケヤキが多く、古墳時代中期～後期では常緑広葉樹のアカガシ亜属の利用が多い傾向が見られた。

同定した分類群の組織記載

分類配列順に記載する。

（１）カヤ　*Torreya nucifera Sieb.et Zucc.*　イチイ科　図版100　１ａ－１ｃ（14号炭１）

仮道管・放射柔細胞からなり樹脂細胞をもたない針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやか。仮道管に２本が対になるらせん肥厚がある。分野壁孔は小さなヒノキ型が１～２個ある。

カヤは宮城県以南の暖帯から温帯下部の山地に生育する常緑高木で、材は水湿に強く加工しやすい。

（２）イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia*（*Knight*）*K. koch* イヌガヤ科　図版100 2ａ－2ｃ（209号－炭3）

仮道管・放射柔細胞からなり樹脂細胞が散在する針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やか。仮道管に水平や斜状に走るらせん肥厚がある。分野壁孔は小さく、１分野に１～２個ある。

イヌガヤは岩手県以南の暖帯から温帯下部の山林の下に生育する常緑小高木である。材は緻密で固い。

（３）マツ属複維管束亜属　*Pinussubgen. Diploxylon*　マツ科　図版100　３ａ－３ｃ（40号一括）

垂直・水平の樹脂道がある針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかで晩材の量は多く、垂直樹脂道はおもに晩材部にある。分野壁孔は窓状、放射組織の上下端には有縁壁孔を持つ放射仮道管がありその内壁には突起が見られる。

アカマツまたはクロマツで、暖帯から温帯下部の乾燥した陽光地に生育し、二次林の主要樹でもある。

（４）オニグルミ　*Juglans mandshurica Maxim. subsp. sieboldiana*（*Maxim.*）*Kitamura*　クルミ科　図版101　４ａ－４ｃ（211号－炭３）

単独あるいは２～３個が複合した中型で楕円形の管孔が除々に径を減じながら散在し、接線状柔組織が顕著な散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、膜状のチロースがある。放射組織はほぼ同性で上下端部に方形細胞があり、主に３～４細胞幅である。

オニグルミは暖帯から温帯のやや湿った所に生育する落葉高木である。材は加工しやすく狂いが少ない。

（５）アサダ　*Ostryajaponica Sarg.*カバノキ科　図版101　５ａ－５ｃ（６号－炭１）

小型の管孔が単独または2～数個が放射方向に複合して散在し、年輪界では径を減じる散孔材。道管の壁孔は小型で交互状に密在、穿孔は単一、内腔には細いらせん肥厚が密にある。放射組織は方形細胞が混じるがほぼ同性、1～3細胞幅、道管との壁孔はやや大きくて交互状である。集合放射組織が見られない。

アサダは温帯の山地に生育する落葉高木で、材は硬く丈夫である。

（６）コナラ属アカガシ亜属 *Quercussubgen. Cyclobalanopsis* ブナ科図版101 6ａ－6ｃ（401号-炭1）

幅の広い集合放射組織を挟み小型～中型の単独管孔が放射方向に配列する放射孔材。道管の壁孔は

交互状、穿孔は単一である。放射組織は同性、単列のものと集合状や複合状があり、道管との壁孔は孔口が大きく柵状・交互状である。

アカガシ亜属は常緑性の高木で、暖温帯の自然植生では優占種となる。山野に普通なアラカシ・アカガシ・シラカシ、関東以南に多いイチイガシ・ツクバネガシなどがある。材は丈夫で弾性や耐湿性がある。

（７）コナラ属コナラ亜属クヌギ節　*Quercussubgen. Quercussect. Cerris*　ブナ科　図版102　７ａ－7ｃ（206号－炭2）

年輪の始めに大型の管孔が１層配列し、急または徐々に径を減じて小型で厚壁の管孔が単独で放射方向に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、チロースがある。放射組織は同性、単列のものと幅の広い複合状があり、道管との壁孔は柵状である。

クヌギ節は落葉性の高木で、クヌギとアベマキが属する。暖帯の山林に普通で二次林にも多い。材は重厚で割裂性が良い。

（８）ケヤキ　*Zelkovaserrata*（*Thunb.*）*Makino*　ニレ科　図版102　８ａ－８ｃ（408号－炭３）

年輪の始めに中型の管孔が１層配列し、急に径を減じて多数の小型の管孔が集合して接線状・斜状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は異性、１～６細胞幅、上下端や縁に大型の結晶細胞がある。

ケヤキは暖帯下部から温帯の山地や川岸に生育する落葉高木である。材質は堅い。

（９）ヤマグワ　*Morusaustoralis Poiret*　クワ科　図版102　９ａ－９ｃ（407号－炭４）

年輪の始めに中型の管孔が配列し除々に径を減じ、晩材部では小型の管孔が２～数個集合して斜状・波状に分布する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、小道管にらせん肥厚があり、内腔にはチロースがある。放射組織は異性、１～５細胞幅の紡錘形で上下端に方形細胞があり、道管との壁孔は大きて交互状に配列している。

ヤマグワは落葉高木または低木で、温帯から亜熱帯の山中に広く分布し、材は重硬・強靭で心材は特に保存性が高い有用材である。

（10）モクレン属　*Magnolia*　モクレン属　図版103　10ａ－10ｃ（201号－炭１）

小型の管孔が単独または２～数個が複合して均一に分布している散孔材。道管の壁孔は交互状から階段状、穿孔は主に単一である。放射組織は異性、１～２細胞幅、上下端に方形細胞があり、道管との壁孔は大きく階段状または対列状である。

モクレン属は暖帯または温帯に分布する落葉性の高木または小高木で、ホオノキ・コブシ・タムシバなどがある。材質はやや軽軟で割裂性は大であり、割れや狂いが少なく加工し安い。

（11）シキミ　*Illiciumanisatum L.*　シキミ科　図版103　11ａ－11ｃ（46号－炭１）

非常に小型の管孔がおもに単独で散在し、年輪始めの管孔は縦長でやや大きく接線状に密に１層並ぶ傾向が強い散孔材。道管の壁孔は交互状から階段状、穿孔は横棒数が多い階段穿孔である。放射組織は異性、１～２細胞幅、接線断面で直立細胞は非常に背が高いレンズ状、放射柔細胞は大型でその細胞壁は厚く放射断面で数珠状に肥厚している。木繊維にらせん肥厚がある。

シキミは宮城県・石川県以西の暖帯の山地に生育する常緑小高木である。材はやや重硬で粘りがある。

（12）クスノキ科　*Lauraceae*　図版103　12ａ－12ｃ（408号－炭19）

中型の管孔が単独または２個が放射方向に複合し均一に分布する散孔材。年輪界で管孔の径は小さくなる。道管の穿孔は、主に単一である。放射組織は異性、１～３細胞幅、上下端に大きく膨らんだ

地区	グリッド遺構	出土層位	番号	樹種	破片の形状など	時期
Ｄ３	402号	下層	図11-炭１	クヌギ節		弥生時代中期
		下層	図11-炭２	ケヤキ		
		下層	図11-炭３	クヌギ節		
		下層	図11-炭４	イヌガヤ		
		中層	図11-炭５	イヌガヤ	推定直径３㎝破片	
		上層	図11-炭６	イヌガヤ		
		中層	図11-炭７	クヌギ節		
		床直	図11-炭８	イヌガヤ	樹芯部に近い破片	
		下層	図11-炭９	クヌギ節とケヤキ	クヌギ節は小破片複数	
		下層	図11-炭10	ケヤキ		
		下層	図11-炭11	クヌギ節		
Ｄ２	211号	床面直上	図14-炭１	オニグルミ		弥生時代中期
		床面直上	図14-炭２	クヌギ節	直径７㎝半割れ	
		床面直上	図14-炭３	オニグルミ		
		床面直上	図14-炭４	クヌギ節	みかん割りｒ:6.5㎝	
		床面直上	図14-炭５	クヌギ節	みかん割りｒ:6.5㎝	
		床面直上	図14-炭６	クヌギ節		
		床面直上	図14-炭７	クヌギ節		
		床面直上	図14-炭７	オニグルミ		
		南柱穴覆土		クヌギ節		
Ｄ２	206号	床面直上	図18-炭１	クヌギ節		弥生時代中期
		床面直上	図18-炭２	クヌギ節		
		床面直上	図18-炭３	イヌエンジュ		
		下層	図18-炭４	クヌギ節		
		床面直上	図18-炭５	クヌギ節		
		床面直上	図18-炭６	クヌギ節		
		床面直上	図18-炭７	クヌギ節		
		床面直上	図18-炭８	クヌギ節		
		床面直上	図18-炭９	クヌギ節	薄い板状	
		床面直上	図18-炭10	クヌギ節		
		床面直上	図18-炭11	クヌギ節		
		床面直上	図18-炭12	クヌギ節	板状破片	
		床面直上	図18-炭13	クヌギ節		
		床面直上	図18-炭14	クヌギ節		
		床面直上	図18-炭15	クヌギ節		
		床面直上	図18-炭16	クヌギ節	板状破片	
		床面直上	図18-炭17	クヌギ節		
		床面直上	図18-炭18	クヌギ節		
		床面直上	図18-炭19	クヌギ節		

第５表　竪穴住居跡出土炭化材樹種一覧

地区	グリッド遺構	出土層位	番号	樹種	破片の形状など	時期
Ｄ３	408号	下層～床直	図21-炭１	ケヤキ		弥生時代中期
		下層～床直	図21-炭２	クヌギ節		
		下層～床直	図21-炭３	ケヤキ		
		下層～床直	図21-炭４	クヌギ節		
		下層～床直	図21-炭５	クヌギ節		
		下層～床直	図21-炭６	樹皮	直径1.2㎝材部は抜けて無し	
		下層～床直	図21-炭７	ケヤキ	板状厚み１㎝	
		下層～床直	図21-炭８	ケヤキ		
		下層～床直	図21-炭９	クヌギ節		
		下層～床直	図21-炭10	クヌギ節		
		下層～床直	図21-炭11	ケヤキとクヌギ節		
		下層～床直	図21-炭12	ケヤキ		
		下層～床直	図21-炭13	ケヤキ	板状破片斜め切断痕？	
		下層～床直	図21-炭14	クヌギ節		
		下層～床直	図21-炭15	ケヤキ		
		下層～床直	図21-炭16	ケヤキ		
		下層～床直	図21-炭17	ケヤキ		
		下層～床直	図21-炭18	クスノキ科		
		下層～床直	図21-炭19	クスノキ科		
		下層～床直	図21-炭20	ケヤキ		
		下層～床直	図21-炭21	ケヤキ		
		下層～床直	図21-炭22	ケヤキ		
		下層～床直	図21-炭23	ケヤキ		
Ｄ１	14号	下層	図50-炭１	カヤ	丸木状芯持ち	古墳時代中期
		覆土中		カヤ	節部破片分枝痕あり	
		覆土中		カヤ		
		覆土中		カヤ		
Ｄ３	405号	床面直上	図65-炭１	アカガシ亜属	みかん割り	古墳時代中期
Ｄ３	407号	下層	図87-炭１	アカガシ亜属		古墳時代中期
		下層	図87-炭２	アカガシ亜属	直径６㎝丸木状	
		下層	図87-炭３	アカガシ亜属		
		床直	図87-炭４	ヤマグワ	直径４㎝半割れ破片	
		床直	図87-炭５	アカガシ亜属		
Ｄ２	200号	中層	図92-炭１	イヌエンジュ	板状厚み1.5㎝	古墳時代中期
Ｄ２	203号	下層	図98-炭１	クヌギ節	板状破片	古墳時代中期~後期
Ｄ１	６号	床面直上	図35-炭１	アサダ		古墳時代後期
Ｄ１	40号	６号覆土		マツ属複維管束亜属		古墳時代後期？
Ｄ１	46号	下層	図99-炭１	シキミ		古墳時代後期
Ｄ２	209号	中層	図107-炭１	サクラ属		古墳時代後期
		床面直上	図107-炭２	イヌガヤ		
		床面直上	図107-炭３	イヌガヤ		
Ｄ２	204号	中層	図116-炭１	ススキ属類似	直径５～７㎜の稈	古墳時代後期
		中層	図116-炭２	ススキ属類似	直径５～７㎜の稈	
		下層	図116-炭３	アカガシ亜属		
Ｄ３	50号	床直	図123-炭１	タケ亜科	直径1.2㎝の稈	古墳時代後期
		床直	図123-炭２	ススキ属類似	直径５㎜集積あり	
Ｄ２	201号	中層	図135-炭１	モクレン属		古墳時代終末期

油細胞があり、道管との壁孔は交互状である。

管孔と油細胞が大型のクスノキや小型管孔であるクロモジ属以外の樹種であるが、材組織の類似性が高いので属や種類は特定できなかった。

クスノキ科は暖帯から温帯に生育し、多くは常緑性の高木または低木である。

（13）サクラ属　*Prunus*　バラ科　図版104　13ａ－13ｃ（209号－炭１）

小型の管孔が単独や放射状・斜状など様々に複合して分布している散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は平伏細胞と方形細胞からなる異性、主に３～５細胞幅、道管との壁孔は小型で密在する。

サクラ属は暖帯から温帯の山地に生育する中木や高木の落葉樹で、ヤマザクラ・マメザクラ・オオシマザクラなど多くの種があり、材は粘り気があり強く保存性も高い。

（14）イヌエンジュ　*Maackia amurensis Rupr. et Maxim. subsp.　buergeri*（*Maxim.*）*Kitamura*　マメ科　図版104　15ａ－15ｃ（206号－炭３）

年輪の始めに大型の管孔が２～３層配列し、晩材部では非常に小型から極めて小型の管孔が塊状や集合帯となり、特に年輪界では波状の集合帯となる環孔材。周囲状・帯状の柔組織が顕著で、接線断面では層階状を示す。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、主に４細胞幅、輪郭は歪である。

イヌエンジュは北海道から中部地方の温帯の川原や山地の林縁に生育する落葉高木で、材はやや重硬で強度もあり芯材は特に耐朽性が高い。

（15）タケ亜科　*Gramineae subfam. Bambusoideae*　イネ科　図版104　15ａ－15ｃ（405号－炭１）

直径約1.2㎜のやや硬質の稈で、明瞭な節が見られた。節は、葉鞘の付け根が隆起し、一個所で少し突出していて、軸方向に一筋の浅い溝がある。維管束は不整中心柱で多数が同心円状に均質に配置している。維管束は向軸側に原生木部、その左右に後生木部の２個の管孔、背軸側に篩部があり、全体は４～３個の穴の集合に見える。維管束の周囲には維管束鞘が非常に発達し、稈の外周部では特に向軸側に厚く発達している。

いわゆるタケ・ササの仲間で12属が含まれるが稈の破片や組織のみからは属や種を識別することは難しい。

（16）ススキ属類似　*Miscanthuscf.* イネ科　図版105　16ａ－16ｂ（204号－炭１）

直径５㎜のやや軟質の草本性の稈で、細かい縦筋がある。節部は葉鞘の基部で広かっている。維管束はスポンジ状の基本組織中に散在し、稈の外周では厚い維管束鞘に囲まれた維管束が１～２層並び、維管束鞘は稈の中心部側（向軸側）は厚く、隣接した維管束鞘が連続する。内側に散在する維管束の維管束鞘は薄い。

ススキ属は大型になる多年草で稈は太さ８㎜ほどになり、約７種ある。日本全土の平地から山地の陽地に普通に見られ刈って屋根を覆く材料とされてきたススキ、北海道から九州の湿地に生育するオギ、東北南部から近畿北部の山中の陽地に生育するカリヤス、関東南部以西の堤防の草地に生育するトキワススキなどがある。現時点では稈の組織から種を識別することはできていない。

４．考察

弥生時代中期の竪穴住居跡４件62試料と古墳時代中期～後期の12件24試料の炭化材からは、針葉樹３分類（カヤ・イヌガヤ・マツ属複維管束亜属)、落葉広葉樹８分類群（オニグルミ・アサダ・クヌギ節・ケヤキ・ヤマグワ・モクレン属・サクラ属・イヌエンジュ)、常緑広葉樹３分類（アカガシ亜属・シキミ・クスノキ科)、合計14分類群が検出された。樹木以外では、タケ亜科とススキ属類似の稈が検出された。多種多様な樹種が、建築材として利用されていた事が判った。ススキ属類似は、単独のほかに集積して潰れた状態のものもあり屋根材や壁材であった可能性がある。

全体的には針葉樹と落葉広葉樹および常緑広葉樹の各分類群が利用されていた事は、弥生時代中期と古墳時代中期～後期の２時期に共通して見られた。しかし、２時期から共通して検出された分類群は、イヌガヤとイヌエンジュおよびクヌギ節の３分類群だけであった。そして、弥生時代中期では落葉広葉樹のクヌギ節とケヤキが多く、古墳時代中期～後期では常緑広葉樹のアカガシ亜属の出土が目立った。このように２時期では樹種利用に変化が見られた（第６表)。また、検出されたいずれの分類群も建築材への利用が知れているものではあったが、建築材として周知のスギやヒノキそしてクリは、検出されなかった。

このようないくつかの特徴は、関東南部の同時期の今までに知られている情報と類似性が見られる。千野（1991）や山田（1993）の資料を見ると、関東地方南部の遺跡から報告されている建築材樹種は、縄文時代ではクリが圧倒的に多いが、弥生時代や古墳時代はコナラ亜属（コナラ節とクヌギ節が含まれる）が多くなり、ただし温暖地の三浦半島や房総半島ではカシ類（アカガシ亜属と同義）やクスノキ科・シイノキ属などの常緑広葉樹が主体でコナラ亜属が検出されない遺跡もあり、針葉樹材はカヤ・イヌガヤ・モミ属が多い。当遺跡においても、縄文時代の建築材として周知のクリは検出されず、針葉樹はモミ属は検出されなかったがカヤとイヌガヤが多く利用されていた。千野（1991）は、遺跡の発達と二次林の成立や拡大との関連性をさぐる目的で遺跡出土の建築材樹種を時期ごとにまとめ、

樹種	弥生時代中期				古墳時代中期～後期						合計
	206号	211号	402号	408号	204号	209号	407号	405号	14号	その他	
ケヤキ（落）			3	14							17
オニグルミ（落）		3									3
クスノキ科（常）				2							2
樹皮				1							1
クヌギ節（落）	18	6	5	7						1	37
イヌエンジュ（落）	1									1	2
イヌガヤ（針）			4			2					6
カヤ（針）									4		4
マツ属複維管束亜属(針)										1	1
アカガシ亜属（常）					1		4			1	6
アサダ（落）										1	1
ヤマグワ（落）							1				1
モクレン属（落）										1	1
シキミ（常）										1	1
サクラ属（落）						1					1
タケ亜科								1			1
ススキ属類似					2			1			3
合計	19	9	12	24	3	3	5	2	4	7	88

２分類群が検出された試料がふたつあるため、合計数は試料数より２点多い。
(針)：針葉樹　(落)：落葉広葉樹　(常)：常緑広葉樹

第６表　竪穴住居跡出土炭化材の樹種および時期の比較

コナラ亜属（コナラ節とクヌギ節を含む）などの二次林要素の出土に着目した。

そして弥生時代から古墳時代は常緑広葉樹を利用した遺跡もあるので照葉樹林も存在していたが、コナラ亜属などの二次林要素の樹種が集落周囲には拡大したと推測した。なお、当遺跡の北方を流れる村田川流域の調査では、弥生時代には照葉樹林が成立していた事が知られている（辻ほか、1983）。同じく村田川河口に近い村田服部遺跡では古墳時代前期の出土自然木436点の樹種調査が行われ、その樹種構成や出土頻度から、流水域には原植生としての照葉樹林があったが、二次林化した植生も成立していたと考えられた（鈴木・能城、1985）。当遺跡の住居建築材樹種同定結果は、弥生時代中期ではクヌギ節が多用され、古墳時代中期～後期になるとアカガシ亜属が多くなりクヌギ節はほとんど検出されなくなる。これは、照葉樹林の利用が進行して、その結果次の時代には二次林化した森林を利用したとする解釈では理解できない。当遺跡周辺は弥生時代にはすでに二次林化が進行しており、古墳時代にはさらに遠方へ建築材を求めていたのかも知れないが、現時点では周辺地の詳細な環境に関わる資料が多いとは言えないので、今後の調査結果の蓄積を待ち再考する必要があると思われる。

引用文献

千野裕道、1991、縄文時代に二次林はあったか－遺跡出土の植物性遺物からの検討－、214－249、研究論集Ⅹ、東京都埋蔵文化財センター。

山田昌久、1993、日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－、１－242、植生史研究特別第１号。

辻誠一郎・南木睦彦・小池裕子、1983、縄文時代以降の植生変化と農耕－村田川流域を例として－、251－266、第四紀研究、第22巻、第３号。

鈴木三男・能城修一、1985、千葉市村田服部遺跡（古墳時代前期）出土木材の樹種、11－69、Ann.Sci. Kanazawa Univ.

第3章　ま　と　め

遺跡の変遷

縄文時代草創期の尖頭器が、今回の調査区における人間活動の最古の痕跡である。その後は、土器の散布が見られる縄文中期後半に至るまで、ごく少量の早期土器片が確認されているのみである。中期と考えられる遺構で確実なものはなく、続く後期にはじめて60号埋設土器が見られる。なお、中期の土器片と似たような範囲で焼割礫が認められるので、これらも縄文中期ごろの遺物であると思われる。遺存状態や元々の性格のために遺構が不明瞭なだけで、この時期にも考古学的記録が存在していた可能性は十分にある。浸食・削平の事実は他の時期の遺構も示しているからである。

縄文後期から晩期の遺構・遺物は未発見で、弥生時代中期に集落が展開するまで、当地にふたたび定着的な生活の跡は見られなくなる。

つづいて、長い空白期間を経たのち、弥生時代中期後半宮ノ台式期に集落が営まれる。検出された遺構はすべて竪穴住居跡で、近い時期の切り合い関係にあるのは１組しか確認されていない。数量的には、旧地形で谷に近い側、Ｄ２・Ｄ３区に分布の重心があるように見受けられる。谷底平野はおそらく容易に谷水田として利用され、当時の集落は、この固定的な生産域の周りを、特に密度を高めることなく、少しずつ距離をおき、あるいは移動しながら占地していたと思われる。移動の要因は、水田稲作以外の生業の都合や、居住単位内・間の緊張関係などの社会的制約による可能性もあるだろう。

今回は墓域が検出されていないが、谷の反対側、平坦地に広がっていた可能性、谷に下りるまでの緩斜面に造営された可能性、どちらとも考えられる。最近、養老川左岸中流域にある南岩崎遺跡では、沖積地を臨む台地上に宮ノ台式期の環濠集落が確認されたが（田中2002）、ここでは、環濠を挟んで台地側調査区北西端に方形周溝墓が検出されている。墓域は一方向に一群だけが展開するのではないと思われるが、規模を無視してこの例を積極的に評価するならば、前者の可能性が高いと言える。

なお、この時期の竪穴住居跡から検出された、建材と見られる炭化材の樹種同定を行ったところ、人の手が入った二次林的要素が見られることが分かっている（第２章第８節）。「費用対効果」的発想によれば、不都合がないかぎり、近傍のキャッチメントエリア内の森林から伐採して建材に利用したと思われるので、このことは、当時の居住好適地として谷を臨む立地が選ばれて、植生に対し継続的に人為的作用が及ぼされていたことを反映しているのかもしれない。そう考えれば、上記の集落イメージと合致すると言え、想定に整合性が出てくるだろう。

以後の弥生時代の遺構は減少の一途をたどり、近畿地方風のタタキ成形甕の出土した弥生終末期の竪穴住居１棟を最後に、調査範囲内からは定着的な生活の跡が消えてしまう。

古墳時代中期後半になると、ふたたび居住域が構成されるようになる。先立つ空白期間は沖積地を志向していたためであろうか。中期後半には、近接した時期の所産と考えられる竪穴住居跡・掘立柱建物跡・鉄器製作址（202号）が広がって検出されている。Ａ・Ｂ地点側から一挙に拡大が起きたかのようである。後期以降は、後期前半に空白があり、遺構数は漸減していく。

奈良・平安時代の景観については、近辺では、国分寺・尼寺および関連遺跡に遺構分布が引きつけられた構造を示すと考えられるため、確認された密度の低さ・遺構の種類（平安時代の墓）は周辺的な様相の現れと見ることができる。また、自然発生的な小径とはあきらかに質を異にする、規格性の

高い道路跡（11・12号側溝）の検出は、近辺の計画的な土地利用の一環と想定でき、律令国家の時代の雰囲気をよくあらわした興味深い資料と言える。谷と平行する両側溝のこの道路跡はＤ２区で西へとカーブしはじめるので、南の谷を迂回して、国分僧寺に連絡していた可能性も考えられる。

空白期を挟んでの中世以降は、302号道路跡が最近まで使われていたこと（第２図参照）を考えれば、遺構検出面に残らない耕作地等としての土地利用が続いたものと思われる。

弥生時代宮ノ台式期の竪穴住居跡について

宮ノ台式期には、沖積平野を主な生産域とするタイプとともに、谷水田を営むタイプ（いずれも他の生業活動が伴うはずだが仮におく）の集落が存在したと考えられる。

本遺跡を含む近隣の遺構群（第１章第３節）は立地から後者と見なせるが、上述の通り、これらは切り合い関係が少なく、密度・数量ともに、沖積地に面して立地する環濠の検出された調査地を下回る様相で、大規模・固定的な集落ではなかったようである。これらは谷底平野を固定的な生産域とし、長期的に見れば、その周りを散漫にエリアとして占地していた結果の姿だと思われる（大村1993）。

カビと培養地のイメージに近いが、集落遺跡は、生活の条件に合致する、移動可能な範囲が広い場合、他に制約がなければルーズな広がり方を示すと予想される。仮にどこに広がっても良いとするなら、はじめの足がかりの地点で密度が高まり個々の利益が逓減しはじめる前に拡散するのが構成員の「良い戦略」とも思われる。つまり、継続的かつ拠点的な集落が環境収容量の相対的に高いことを前提に存在するとしたら、それらは、結果として移動の結節点に立地するはずなのである。

加茂遺跡が面する谷底平野は、宮ノ台式後半期に二次的に利用の手が広がった場所と考えられる。谷の開口部に近い台遺跡（米田・半田1976）のような継続的な集落は沖積平野に係留されて継続したと思われるが、谷沿いの集落はそこから見かけ上増殖していった一部だと言えよう。

時系列でおおまかに並べてしまえば、宮ノ台式期前半から存在する環濠集落（台・根田代（浅利1981））→開析谷沿いにある見た目の密度の低い遺跡（加茂・祇園原）→久ヶ原式期以降の遺跡と、漸移的に開析谷をさかのぼるかたちでつながると言える。ただ、空間的には、環濠集落とその後続の集落遺跡は各期の結節点であるためにいずれの時期も継続するように見えるが、谷沿いの集落は、エリアとしての占地が本質と考えられるので、各時期ごとに低密度・少数量の遺跡が散らばって分布していたと想定することができるのである。

別の谷筋だが、山田橋大山台遺跡群に展開する弥生後期後半主体の大規模な集落は谷の奥まったところに立地し（近藤2000）、それ以後の集落の広がり方も示唆されている。この集落跡は切り合いの少ないありようが注目され、宮ノ台式期前半の環濠集落とは性質が異なった、谷底平野を中心的な生産域とした場合における集落遺跡の展開の仕方をあらわしているものと思われる。

以上、宮ノ台式期の遺跡の広がり方に関して、概観してみた。調査地の詳細と土器についてまったく触れなかったので、加茂遺跡Ａ・Ｂ地点の内容が明らかになったときに改めて検討を試みたい。

鬼高式古相の須恵器模倣精製土師器について

今回の調査では、４・34・210号などの竪穴住居跡から、須恵器を模倣し精製された土師器の出土が見られた。これらは、通例の器種と異なる、にぶい黄橙の精緻な胎土を持ち、ヘラミガキによって光沢を放つほどに仕上げられる特徴的な土器である。器種は、高杯・甕・甑が確認されており、高杯

がもっとも多い（巻頭図版参照）。

高杯は遺存の良い４号例（第31図13）が代表である。脚部に長方形の透孔をほぼ均等の３方向に持ち、杯部は、丸い下半部にゆるい段状の屈曲を経て、若干内傾する口縁部がつくられる。杯部の形状は、無蓋にしては開かず、有蓋とするには受け部が足りないというように、ストレートに須恵器型式と対比できるものではない。器面は、内外面とも緻密なヘラミガキで仕上げられ、さらに赤彩が施されている。本例のように赤彩が施されているのは少数で、大多数は52号例（第74図２）のようにヘラミガキのままである。ただし、平滑化された器面のために赤彩が遺存しにくいだけとも考えられるので、断定はできない。

甕は34号・407号例（第77図14・第89図54）などである。高杯と同じく丁寧なヘラミガキで仕上げられる。口縁部には沈線状のくぼみが巡り、須恵器甕の口縁部を模していると思われる。34号例は、筒状に立ち上がる口縁と丸く張る胴部を持つ点が、鬼高式古相に通有の甕と共通する。須恵器模倣の甕には、ほかに赤彩の施されたものが401号（第67図16）など、いくつか見られる。これまで、複合口縁壺の退化した形式とみなされ、壺とされたものの中には、精製の意図からの赤彩を受けた須恵器模倣の甕が混在していると思われる。

甑で確実なのは、210号例（第64図50）一つだけである。高杯・甕と同様の胎土で、同じく丁寧なヘラミガキで仕上げられる。プロポーションは口縁部にくびれを持たない砲弾型である。

以上の土器は、伴出する他の器種からおおまかには、和泉式以後かつ、赤彩された模倣杯が盛行する時期以前に位置づけられる。距離が若干離れており、それぞれ地域性もあると思われるが、草刈六之台遺跡でいうⅧ期の前半段階（白井他1994）、椎津茶ノ木遺跡でいう２ｂ～３ａ期（木對1993）にあたると考えられる。類例には、上述した加茂遺跡Ａ地点110号の他に、東間部多１号墳周溝出土の赤彩高杯がある（宮本・田中他1974：p.63第15図７）。本例は、杯部のみの模倣でヘラミガキはなく、透孔のない低脚が想定できる。この古墳は土器と副葬品からＴＫ23式期のものと見られている。

今回出土した土器で注目すべき点は、須恵器模倣といってもまったくそのまま写しているわけではない、ということである。胎土の精選で他の器種と差別化し、緻密なヘラミガキで硬質さを演出する。焼き上がりも堅緻で、さらに赤彩されるものもある。これらの手法の背景には、いずれも明瞭な「精製の意図」が想定できるのだが、櫛描文様・突帯などは捨象されているのである。製作者に可能な技術に当然規定されてはいるだろうが、この取捨選択は「写し」の際の判断を反映しているはずで、彼らが須恵器をどのようなものと見ていたかを示唆している。つまり、ここで、模倣する際に焦点が合わされたのは、専門工人の手になる須恵器の本質的に持つ「精製」の性質・雰囲気だったと思われるのである。

この仮定は、反照として、密なヘラミガキ・赤彩が精製の意図を持ったときに用いられる手法であるという、常識的な我々の判断と合致することを導く。すなわち、精製品は赤彩されたものであるが、逆に、赤彩されれば精製品になるのである。精製品にしたい場合に赤彩するとも言える。まったく須恵器の形状を持ち、還元炎焼成でない草刈型土器（赤焼き須恵器）（高橋1985・白井他1994）が赤彩されることは、精製品としての完成を赤彩によってはかったと見ることもできよう。

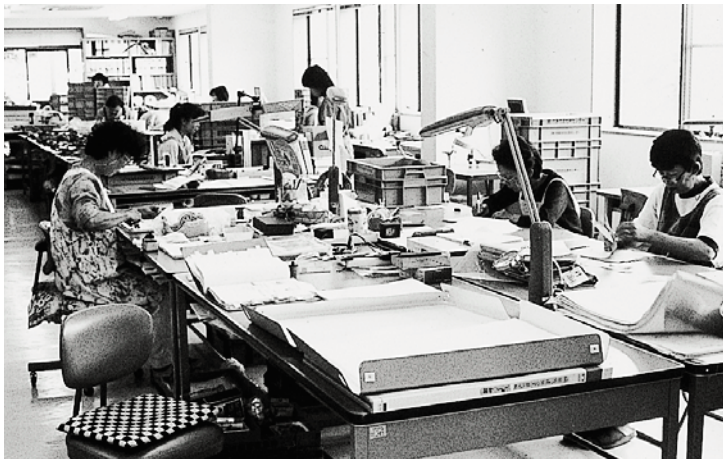
以上に触れた須恵器模倣精製土師器は、須恵器の流通量が増えつつあった時期に、在地の土器生産に生じた地域的な変化の一例として、特筆すべきものである。限られた期間に見られる、このような異質な事例の認定によって、杯における横のヘラケズリ・赤彩の意味合いなど、この時期の土師器全体の様式的傾向をあらためて検討することも可能になると思われる。

引用・参考文献

栗本佳弘他 1973 「８　大森第２遺跡」『京葉』㈶千葉県土地公社
宮本敬一・田中新史他 1974 「第３章　東間部多古墳群」『東間部多古墳群』上総国分寺台遺跡調査団
対馬郁夫・谷島一馬・柿沼　広 1976 『千葉県市原市加茂Ｃ地点発掘調査報告書』上総国分寺台遺跡調査団
田中新史 1976 「南向原古墳群の調査」『南向原』上総国分寺台遺跡調査団
米田耕之助・半田堅三 1976 「台遺跡Ｂ地点の調査」『上総国分寺調査概報Ⅱ』上総国分寺台遺跡調査団
半田堅三 1976 「台遺跡Ｂ地点の調査」『上総国分寺調査概報Ⅲ』上総国分寺台遺跡調査団
半田堅三 1977 「台遺跡Ｂ地点の調査」『上総国分寺調査概報』上総国分寺台遺跡調査団
須田　勉・新田栄治他 『蛇谷遺跡』上総国分寺台遺跡調査団
半田堅三 1977 「台遺跡Ａ地点の調査」『上総国分寺調査概報』上総国分寺台遺跡調査団
半田堅三 1978 「台遺跡Ａ地点の調査」『上総国分寺調査概報』上総国分寺台遺跡調査団
浅利幸一 1981 「根田遺跡の調査」『上総国分寺調査概報』上総国分寺台遺跡調査団
半田堅三・白井久美子 1982 「長平台遺跡の調査」『上総国分寺台発掘調査概報』上総国分寺台遺跡調査団
高橋康男 1985 『－千葉県市原市－　草刈遺跡』㈶市原市文化財センター
鈴木英啓 1986 『－千葉県市原市－　潤井戸西山遺跡』㈶市原市文化財センター
小沢　洋他 1989 『マミヤク遺跡』㈶君津郡市文化財センター
安藤広道 1990 「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分（上）　－遺跡群研究のためのタイムスケールの整理－」『古代文化』第42巻第６号
安藤広道 1991ａ 「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分（下）　－遺跡群研究のためのタイムスケールの整理－」『古代文化』第42巻第７号
安藤広道 1991ｂ 「弥生時代集落群の動態　－横浜市鶴見川・早渕川流域の弥生時代中期集落遺跡群を対象に－」『調査研究集録』第８冊　横浜市埋蔵文化財センター
菊池健一 1990 「一つの甕から　－弥生時代後期から古墳時代はじめにかけての叩き甕について－」『史館』第二十二号　史館同人
坂口　一 1991 「土師器型式変化の要因 －群馬県における出現期の須恵器模倣土師器の様相－」『研究紀要』８　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
白井久美子他 1991 『千原台ニュータウンⅣ　－中永谷遺跡－』㈶千葉県文化財センター
田中新史 1991ａ「コラム5　神門三･四･五号墳と古墳の出現」『歴博フォーラム邪馬台国時代の東日本』六興出版
田中新史 1991ｂ 『上総国分寺台遺跡群　基礎整理成果』
小沢　洋 1992 「上総地域の鬼高式土器」『考古学ジャーナル』342　ニューサイエンス社
木對和紀 1992 『市原市椎津茶ノ木遺跡』㈶市原市文化財センター
大村　直 1993 「ムラの廃絶・断絶・継続」『市原市文化財センター研究紀要Ⅱ』㈶市原市文化財センター
上守秀明・出口雅人他 『千葉県東南部ニュータウン18　－鎌取遺跡－』㈶千葉県文化財センター
木對和紀 1993 「竪穴住居の耐久年数からみた房総における古墳時代須恵器の出現と終焉　－椎津茶ノ木遺跡を中心として－」『市原市文化財センター研究紀要Ⅱ』㈶市原市文化財センター
白井久美子他 1994 『千原台ニュータウンⅥ　－草刈六之台遺跡－』㈶千葉県文化財センター
赤井博之 1997 「茨城県　律令制変質期の須恵器の系譜」『東国の須恵器　－関東地方における歴史時代須恵器の系譜－』古代生産史研究会
黒住耐二 1998 「ニナルカ遺跡出土の貝類遺存体」『柏原27・ニナルカ・静川５・６遺跡』苫小牧市埋蔵文化財調査センター
忍澤成視他 1999 『祇園原貝塚』㈶市原市文化財センター
田中新史 2000「Ｑ南向原古墳群」『上総市原台の光芒　市原古墳群調査と上総国分寺台調査団』市原古墳群刊行会
小川浩一・蜂屋孝之 2000 『市原市北野原遺跡』㈶市原市文化財センター
近藤　敏 2000 「8. 山田橋大山台遺跡」『市原市文化財センター年報　平成９年度』㈶市原市文化財センター
川井正一 2001 「コラム　千代田町中佐谷出土の蔵骨器」『研究ノート』10号　㈶茨城県教育財団
千葉県教育庁生涯学習部文化課 2001 『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報　－平成11年度－』
田村　隆・島立　桂・落合章雄・永塚俊司 2001 『千葉県文化財センター研究紀要』22　㈶千葉県文化財センター
小出紳夫他 2002 『坊作遺跡』㈶市原市文化財センター
小橋健司 2002 「16. 加茂遺跡（Ｄ地点）」『市原市文化財センター年報　平成11年度』㈶市原市文化財センター
高橋康男 2002 『市原市向原台遺跡・東向原遺跡』㈶市原市文化財センター
田中大介 2002 「南岩崎遺跡」『第17回　市原市文化財センター　遺跡発表会要旨』㈶市原市文化財センター

加茂遺跡Ｄ地点

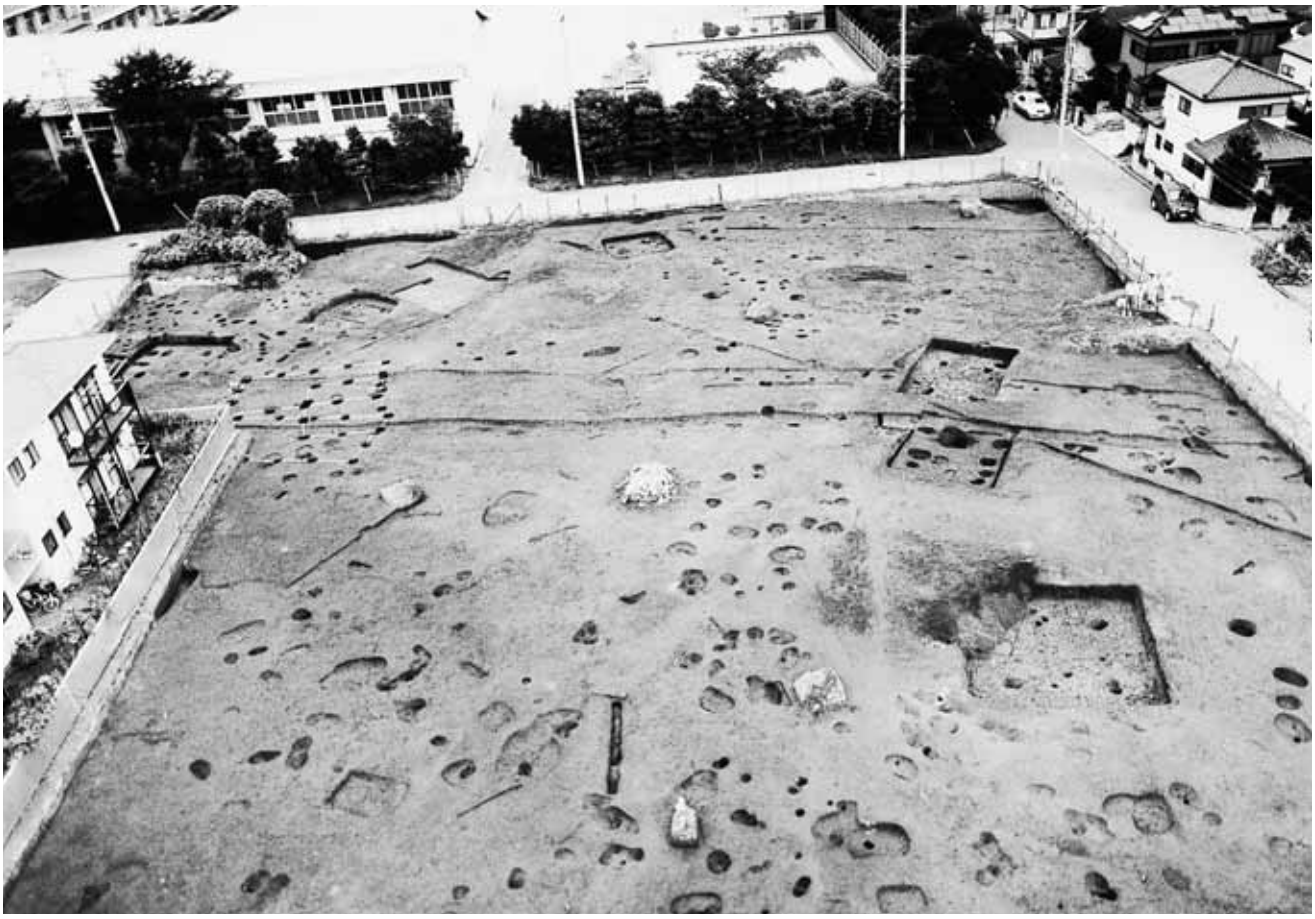
写　真　図　版



遺跡の周辺
（1961年）

図版 2

D１区西側



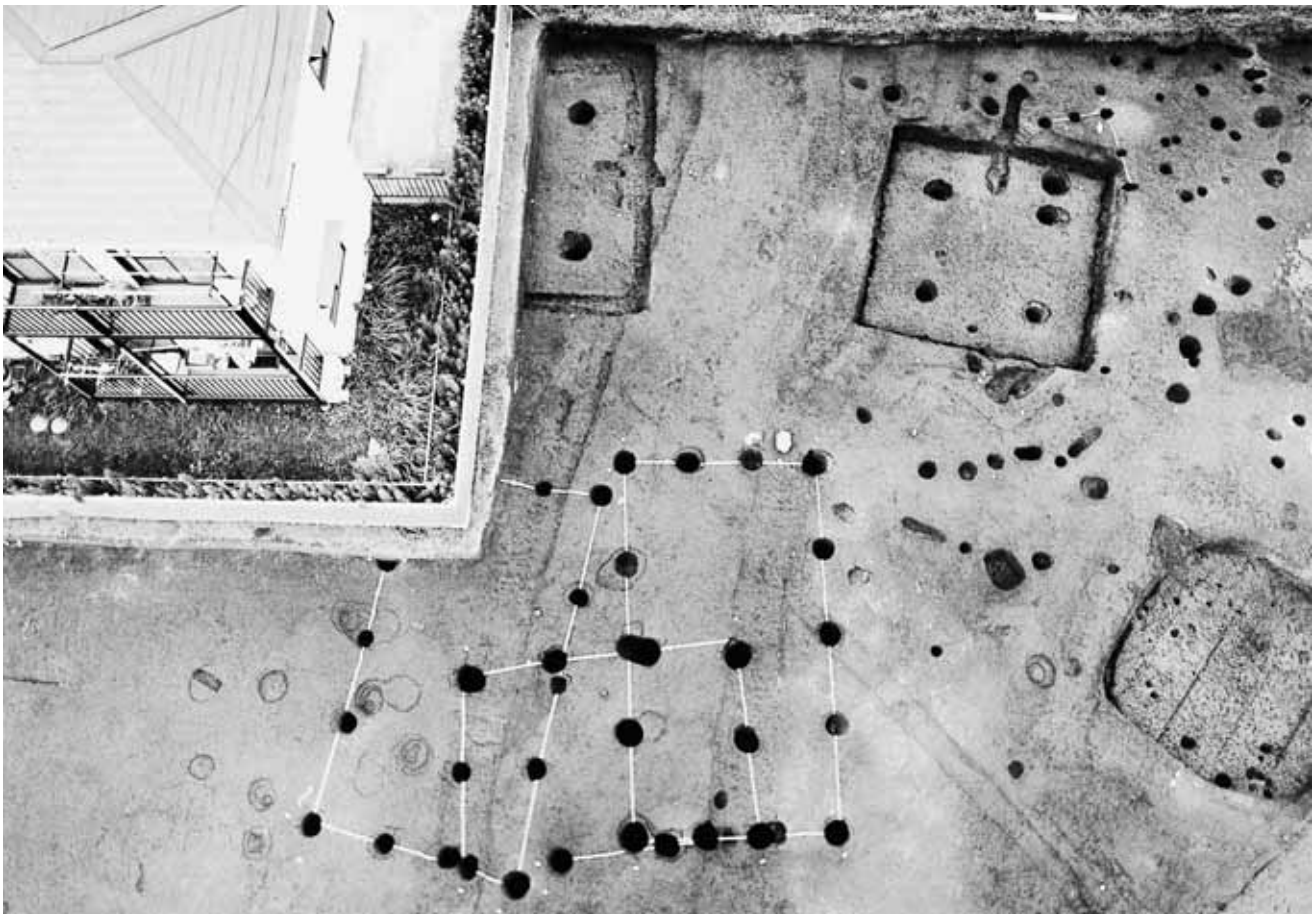
D１区東側

Ｄ１区から南東を望む（右上のビルは市役所）

11・12号道路跡

図版 4

4・6・9・13・22号遺構



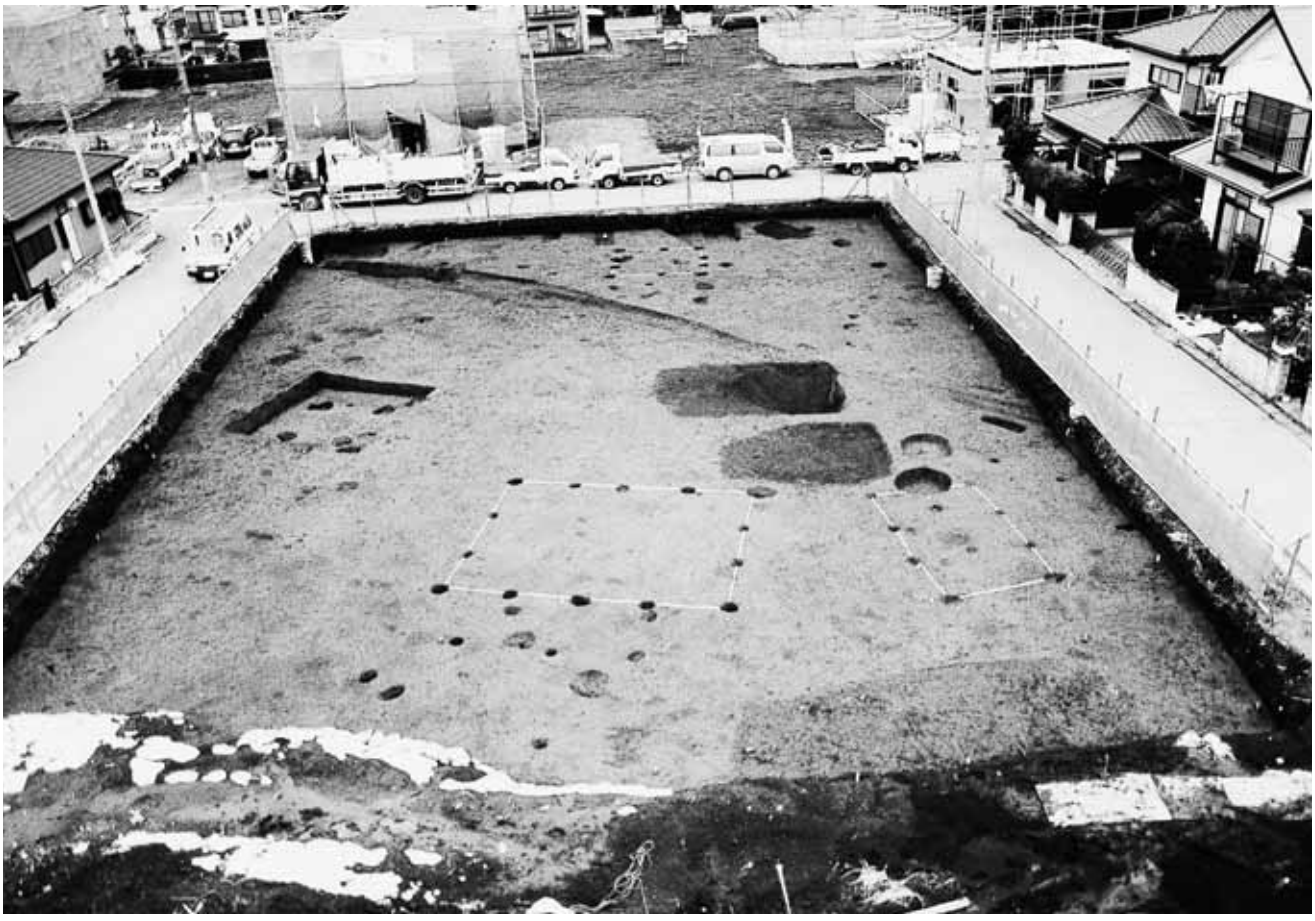
53・54・59号周辺

D２区南側

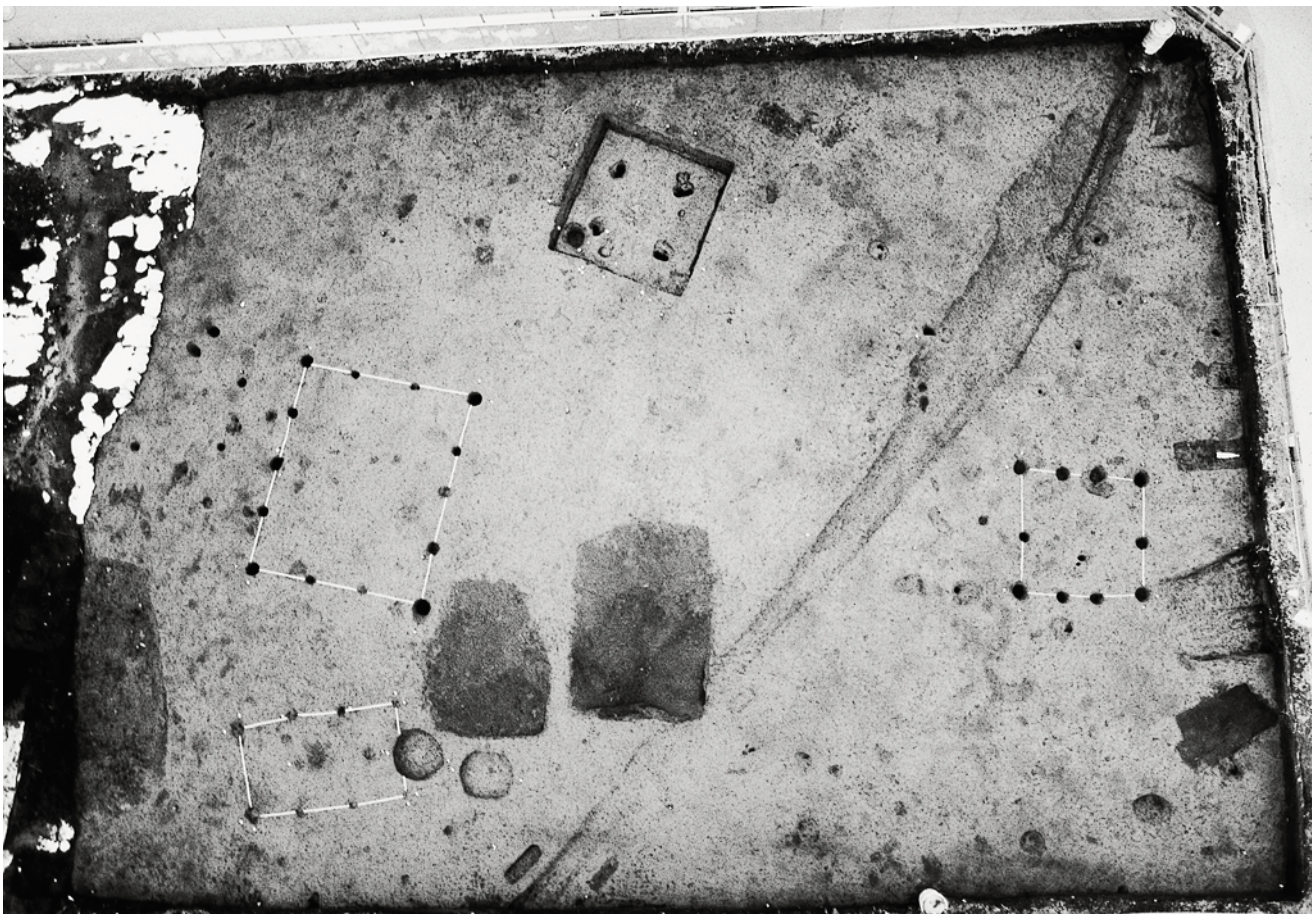
D２区南側

図版 6

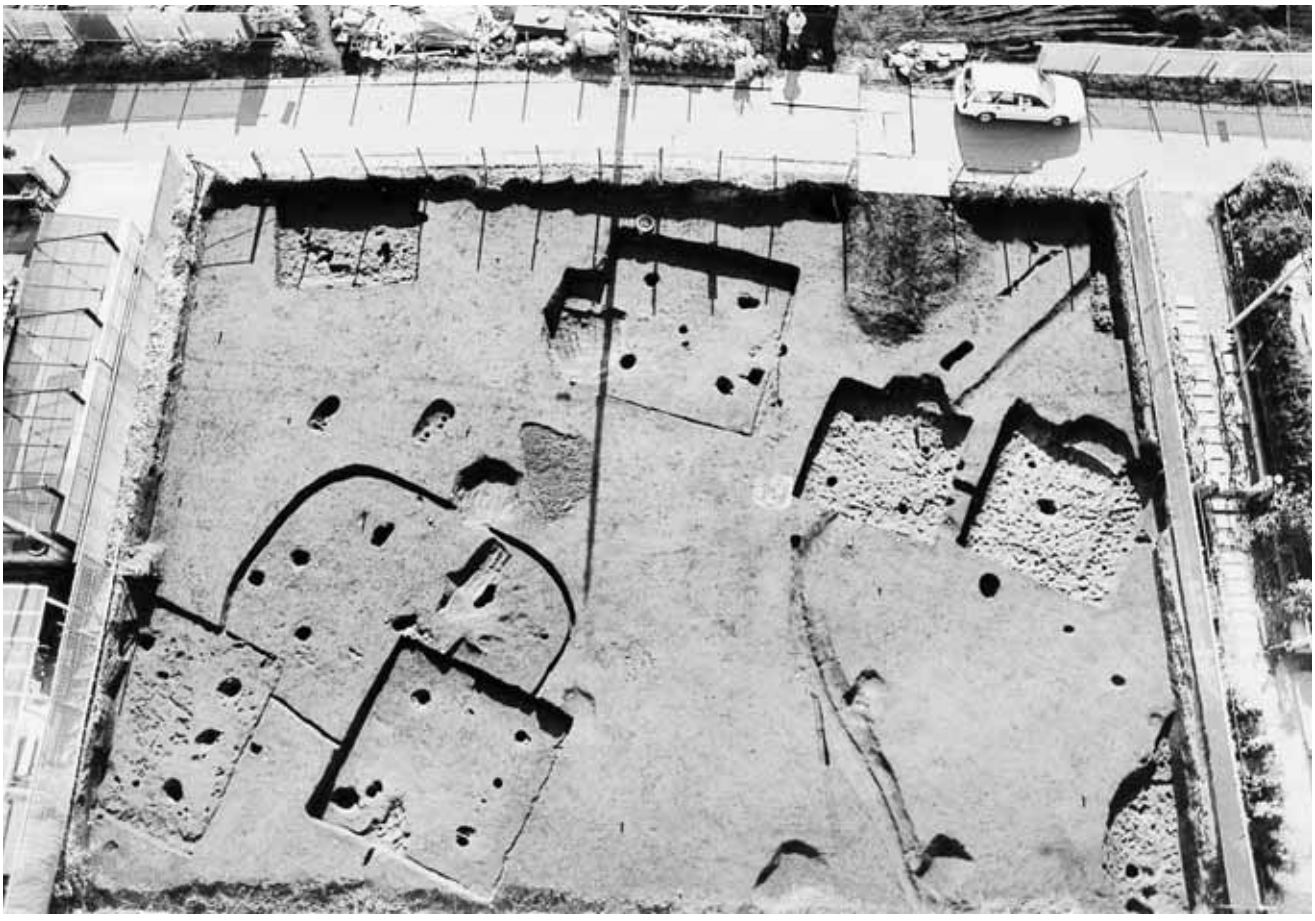
213号周辺



D 2 区北側

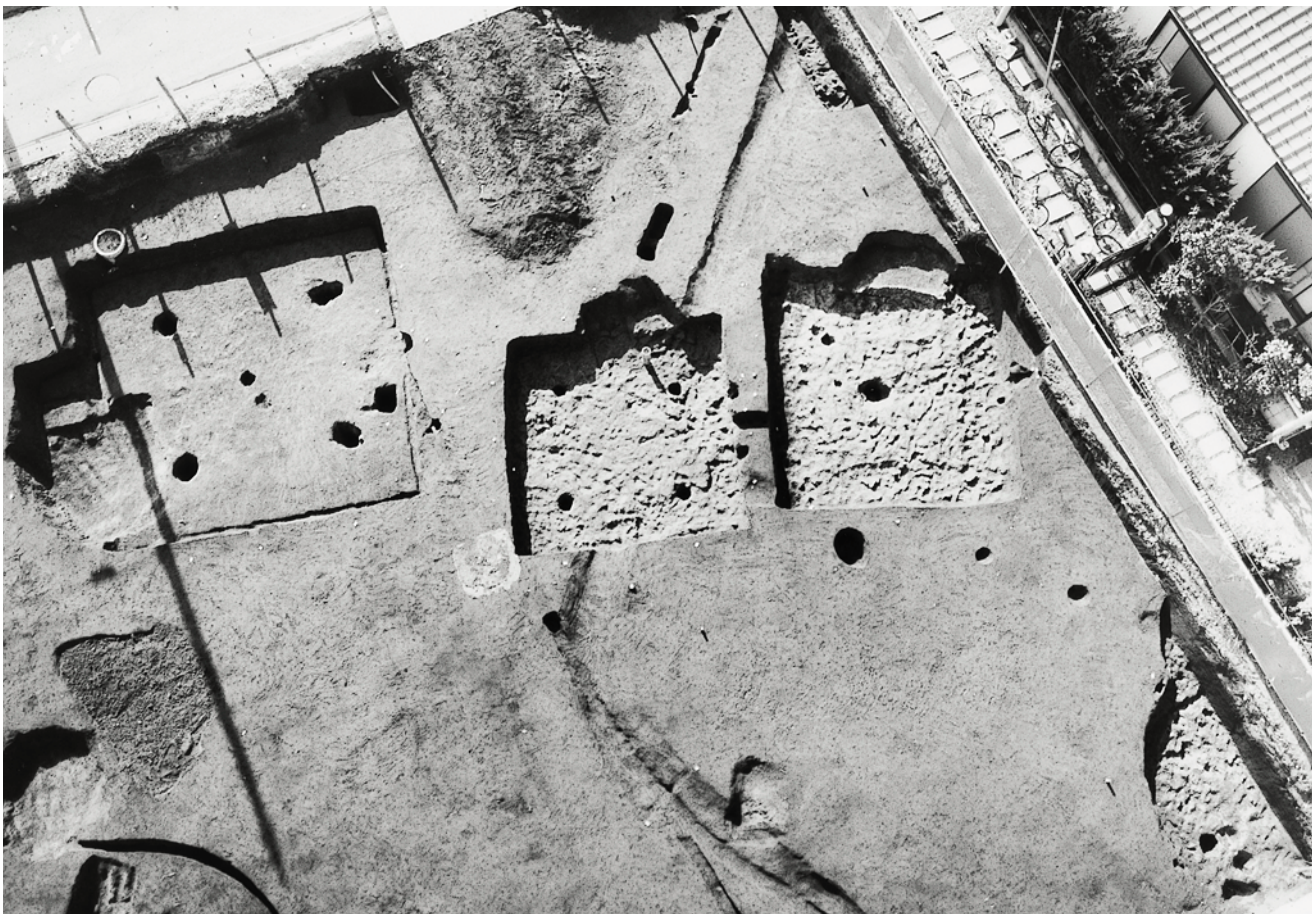


D２区北側

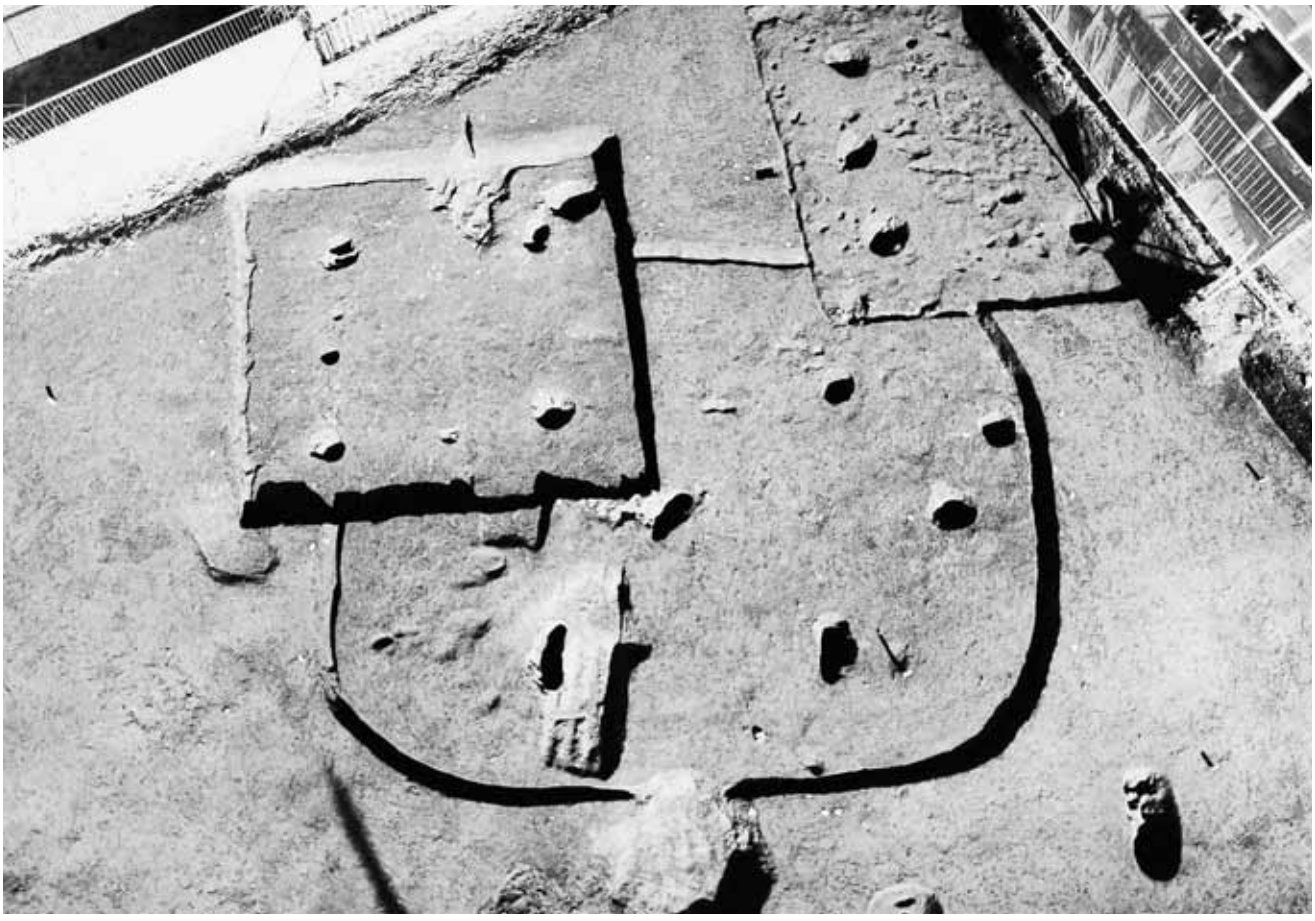


D３区

図版 8



404号周辺



408号周辺

60号検出状況

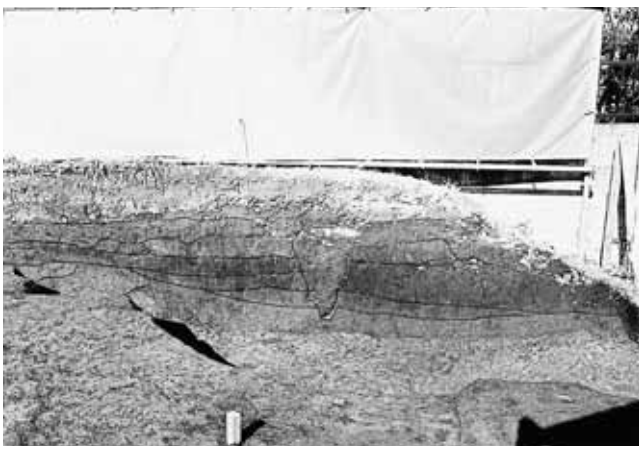
60号土器

247号

417号

418号

419号

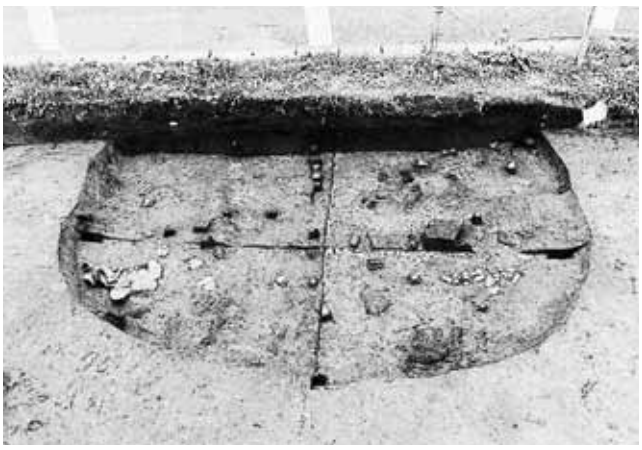


402・412号堆積状況

402号焼土・遺物検出状況

図版 10

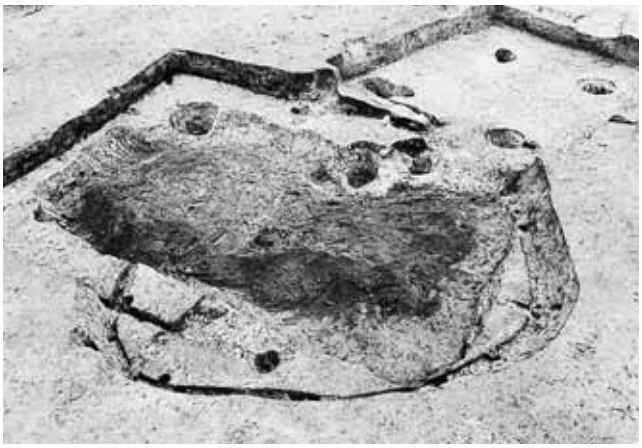
211号



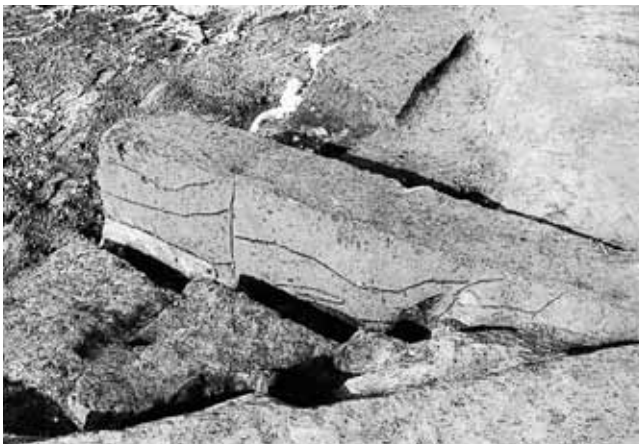
211号遺物・焼土・炭化材検出状況

211号遺物出土状況

211号炭化材遺存状況



206号

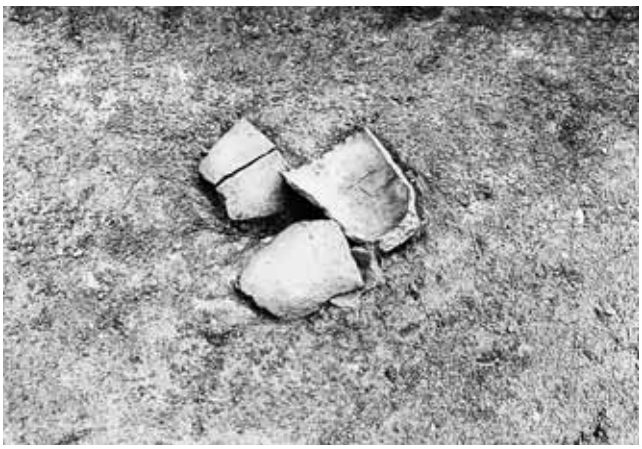


206・207号堆積状況

206号遺物・炭化材検出状況

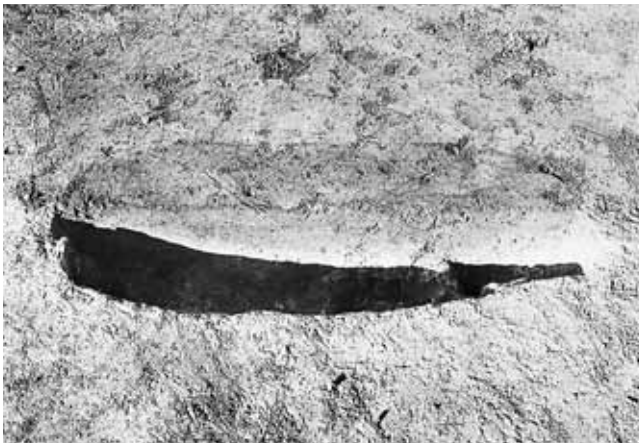
206号炭化材検出状況

408号遺物検出状況



408号遺物出土状況

409号



410号

17号

55号

47号

47号遺物出土状況

図版 12

47号遺物出土状況（図25- 4）

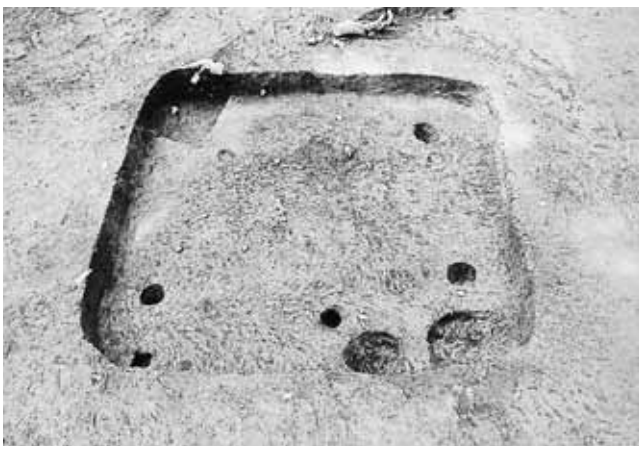
47号遺物出土状況（図25- 5）

47号遺物出土状況（図25- 3）

47号遺物出土状況（図24- 2）

20号

20号遺物出土状況（図26- 1）



57号

57号堆積状況

4号

4号カマド周辺遺物出土状況

4号堆積状況（西）

4号堆積状況（東）

4号北柱穴（図31-19）

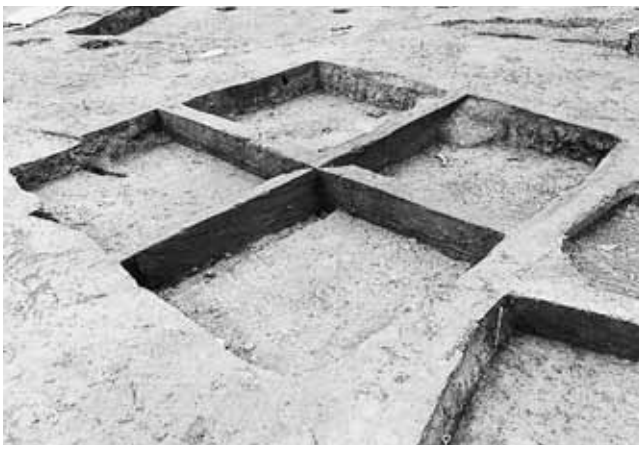
4号遺物出土状況

4号遺物出土状況（図30-２）

4号遺物出土状況（図30-１）

図版 14

4号遺物出土状況（図30-３）



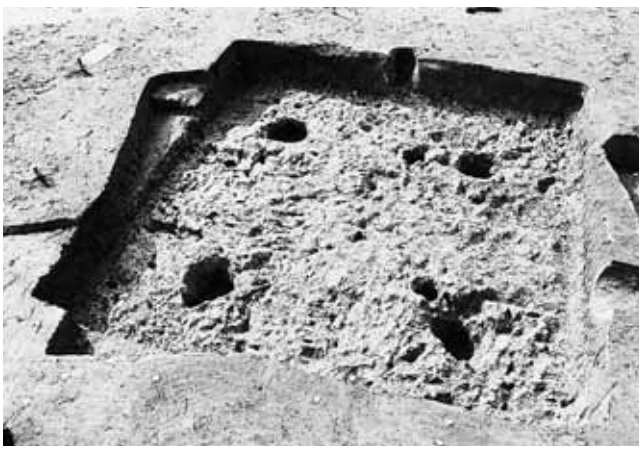
6号堆積状況

6号南部遺物出土状況

6号カマド

6号遺物出土状況（図37-46）

6号遺物出土状況（図36-18）



9号柱穴検出状況

6号・9号切り合い部

9号南側残存部

13号

13号上層硬化面遺物出土状況

13号カマド

13号貯蔵穴（図47-55）

13号床面遺物出土状況

13号床面遺物出土状況

D１区調査風景

図版 16

14号北壁

14号遺物出土状況

14号遺物出土

14号カマド

14号遺物出土状況（図51-２）

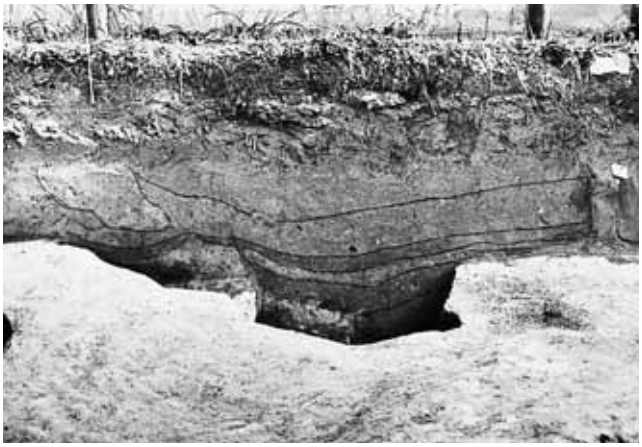
14号南隅遺物出土状況

202号

202号床面下柱穴検出状況

202号カマド

202号貯蔵穴（図57-８、図58-58）



202号床面下貯蔵穴

202号北柱穴遺物出土状況（図57-35）

210号

210号遺物出土状況

210号カマド

210号貯蔵穴

図版 18

401号

401号カマド

401号北東柱穴遺物出土状況

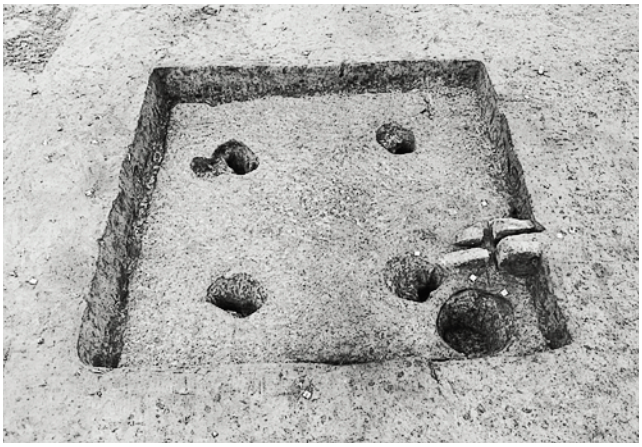
401号南西柱穴

51号

51号遺物出土状況

51号遺物出土状況

51号遺物出土状況（図69- 1 ）



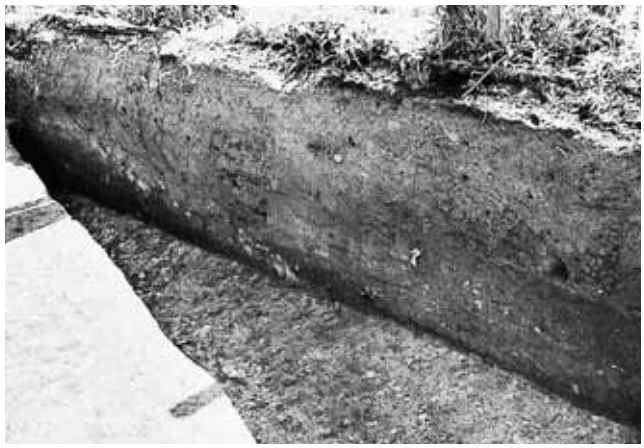
301号

301号カマド

301号貯蔵穴

301号南東柱穴

52号



52号堆積状況

34号

34号遺物出土状況

34号遺物出土状況（図77-14）

34号土杭 B 遺物出土状況

34号土杭 A 遺物出土状況（図77-15）

34号遺物出土状況

44号

44号調査風景

44号遺物出土状況

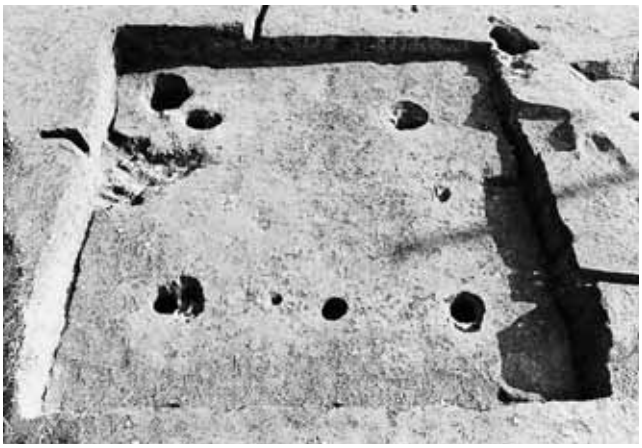
44号カマド付近遺物出土状況

44号カマド

44号支脚

44号北東柱穴

44号南東柱穴



407号

407号堆積状況

407号遺物出土状況

407号貯蔵穴付近遺物出土状況

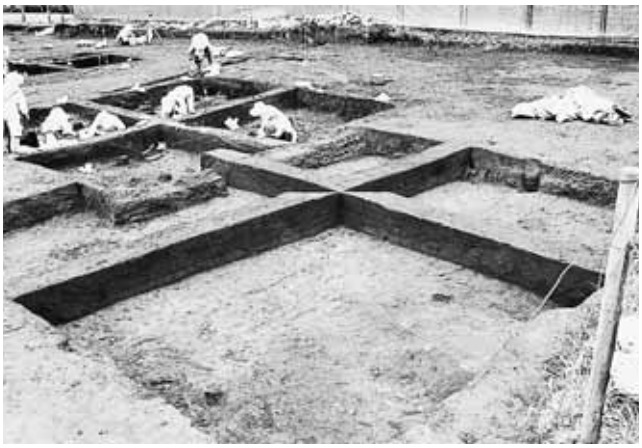
図版 22

407号カマド

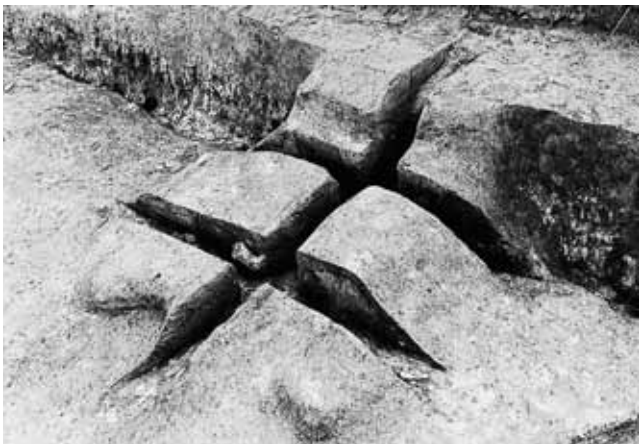
407号貯蔵穴

407号遺物出土状況

200号床面下検出状況

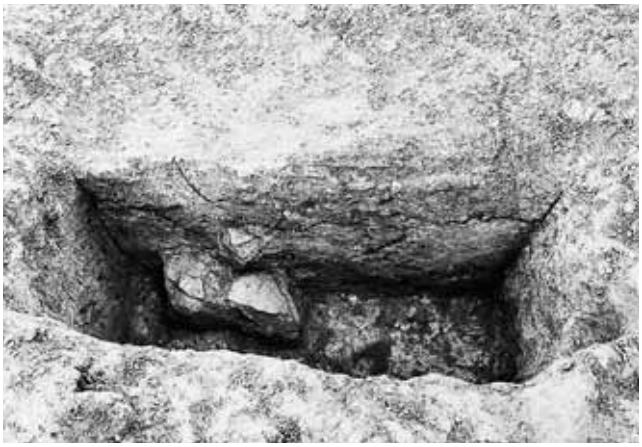


200号堆積状況



200号カマド

200号貯蔵穴



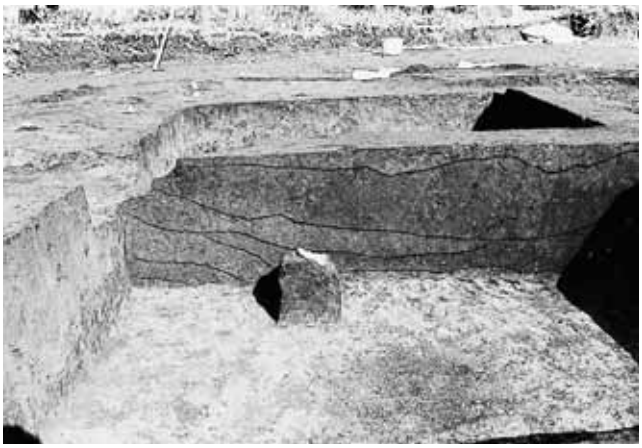
200号床面下検出貯蔵穴

200・201号切り合い部

200号北柱穴

208号

208号堆積状況



208号堆積状況

208号遺物出土状況（図96-４）

208号カマド

208号貯蔵穴

図版 24

208号北西柱穴

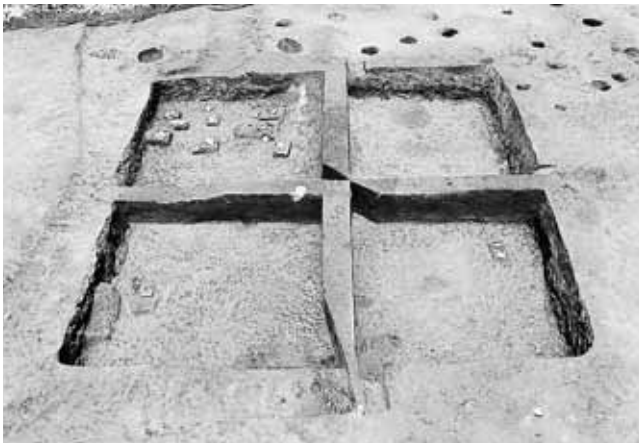
208号土玉検出状況

203号

203号外土杭

56号

46号



46号遺物出土状況

46号カマド

46号カマド煙道

46号北西柱穴

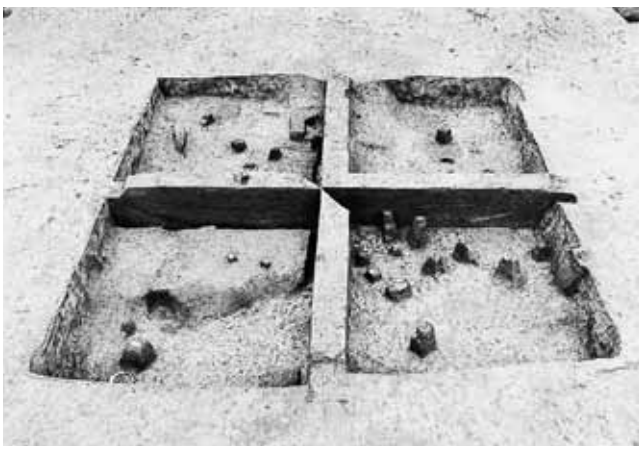
411号

411号堆積状況（302号に切られる）

415号堆積状況

415号

209号

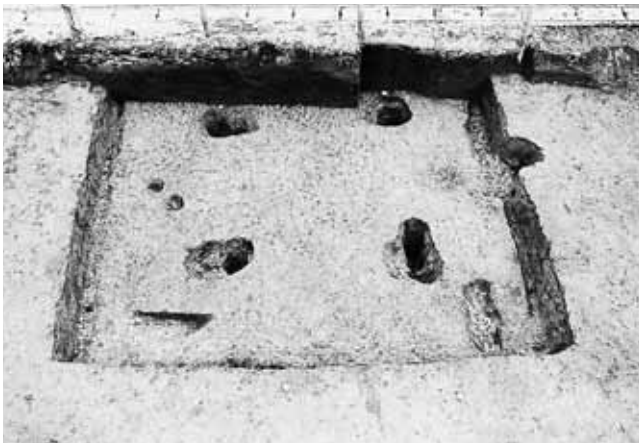


209号遺物出土状況

図版 26

209号カマド

209号貯蔵穴



406号

406号堆積状況

406号堆積状況および遺物出土状況

406号カマド検出状況

406号遺物出土状況（図111-12）

406号カマド

404号

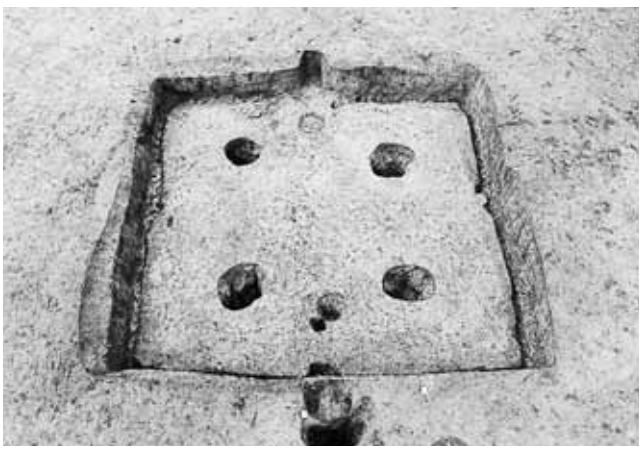
404号カマド

404号遺物出土状況

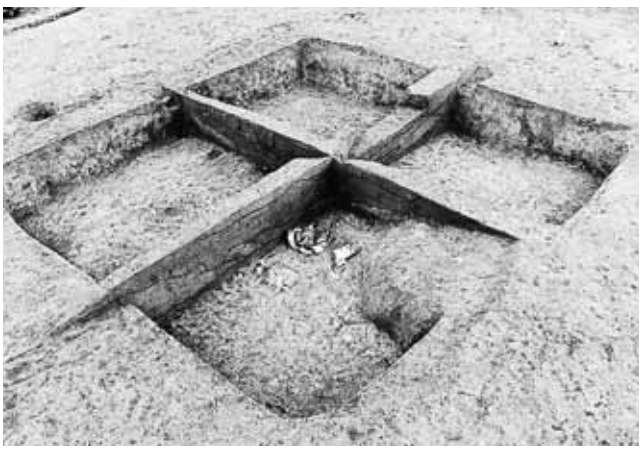
404号北柱穴遺物出土状況（図112-12）

404号東柱穴

404号北柱穴下層遺物出土状況（図112-１）



204号



204号堆積状況および遺物出土状況

図版 28

204号カマド

204号遺物出土状況（図115- 3、図116- 5）

204号北柱穴

204号東柱穴

27号

27号カマド残存部

27号堆積状況（西）

27号堆積状況（東）

32号

32号東柱穴

32号西柱穴

405号堆積状況

405号カマド検出状況

405号北東部遺物出土状況

405号貯蔵穴

405号カマド付近

図版 30

405号突出部

405号突出部堆積状況

207号

207号遺物出土状況

207号カマド

207号遺物出土状況

207号遺物出土状況

207号遺物出土状況

207号西隅堆積状況

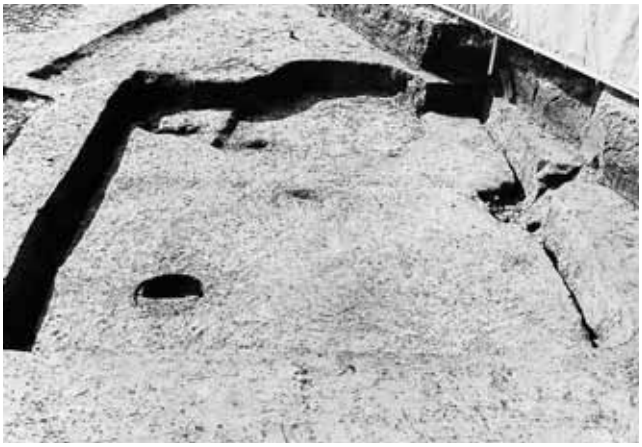
207号南東辺堆積状況

207号南隅堆積状況

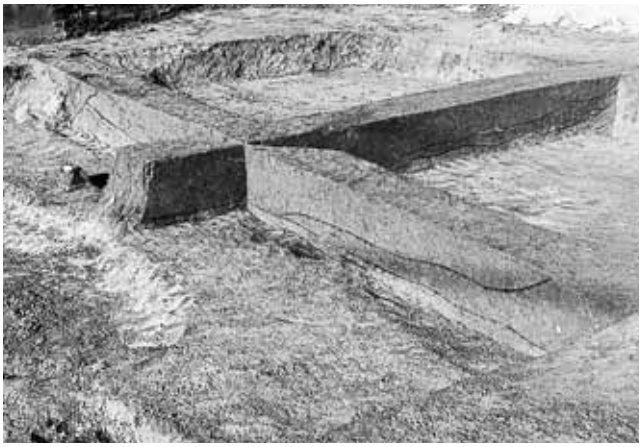
207号貯蔵穴および206号柱穴

207号西柱穴

207号東柱穴



403号



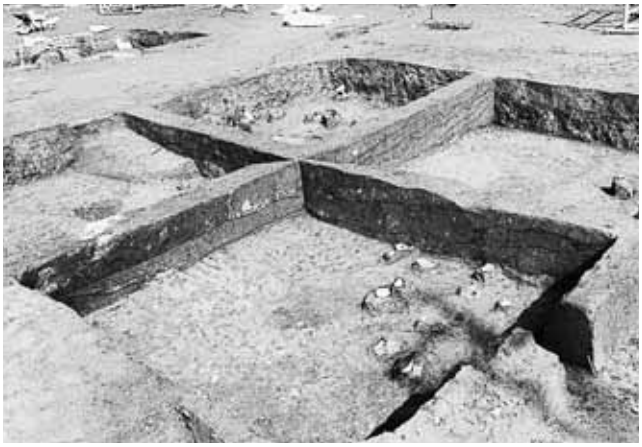
403号堆積状況

図版 32

403号カマド

21号

201号



201号堆積状況

201号床面下

201号カマド

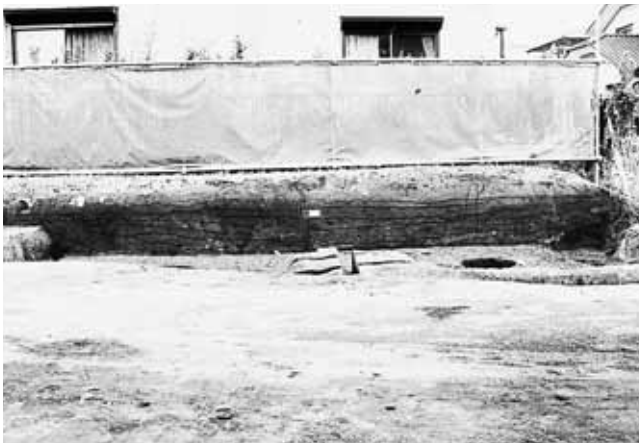
201号遺物出土状況

201号南柱穴

48号

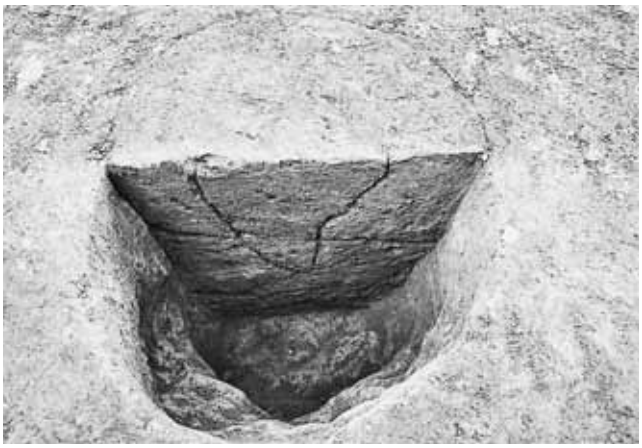
48号堆積状況

48号遺物出土状況



48号堆積状況

48号北柱穴



48号南柱穴

213号

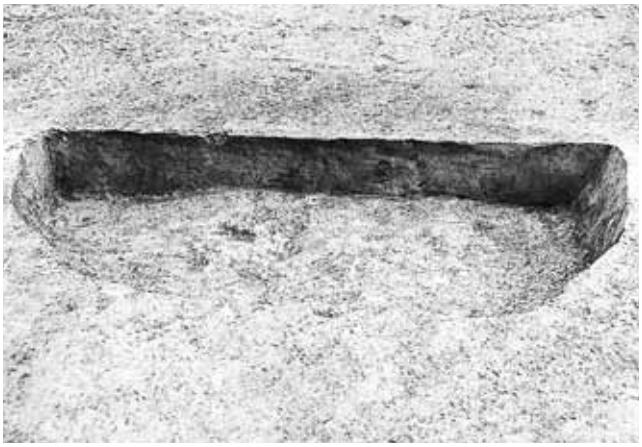
241号

図版 34

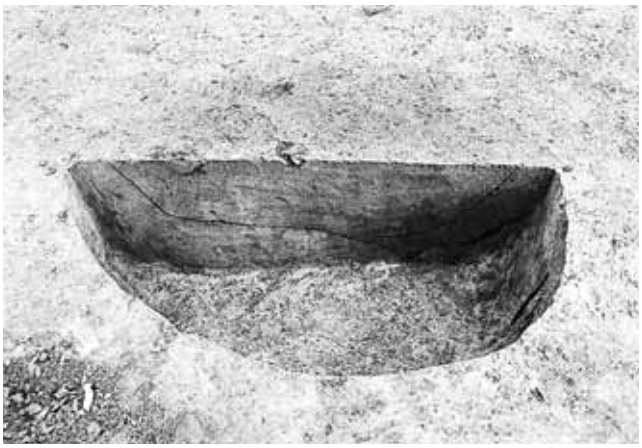
303号

304号

305号

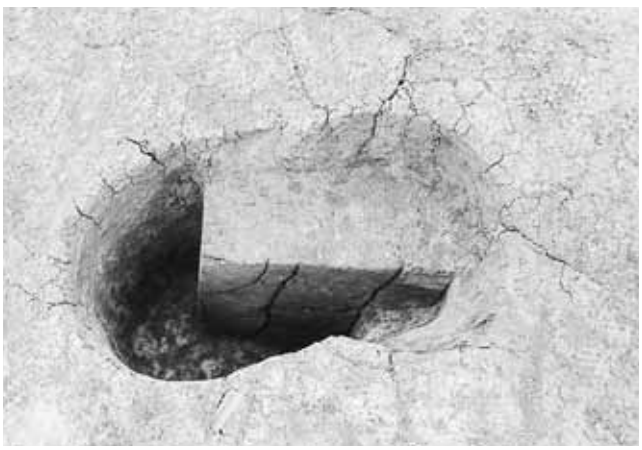


306号



307号

53号柱穴C



54号柱穴Ⅰ'

54号柱穴M'

59号柱穴Ⅰ”

61号柱穴A

61号柱穴F

61号柱穴 E

205号蔵骨器検出状況

205号蔵骨器検出状況

205号主体部遺物出土状況

205号主体部

205号最下層（図150-１）

205号周溝北辺西から

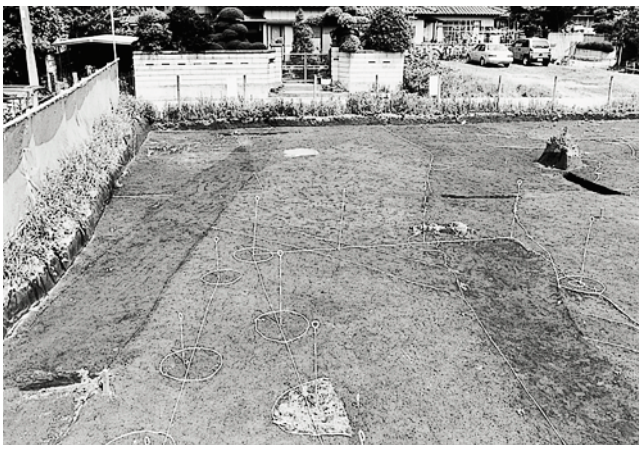
205号周溝西辺北から

205号周溝東辺北から

41号ｅ-ｅ’

41号ｆ-ｆ’

11・12号道路跡北から



11・12号検出状況

12号北端

11号ＳＰ　ｂ-ｂ’

12号ＳＰ　ｂ-ｂ’

302号西端

3・5・302号Ｄ１区

302号Ｄ２区

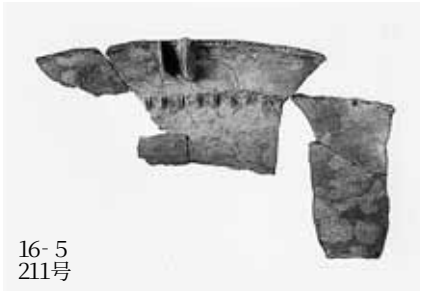
308号

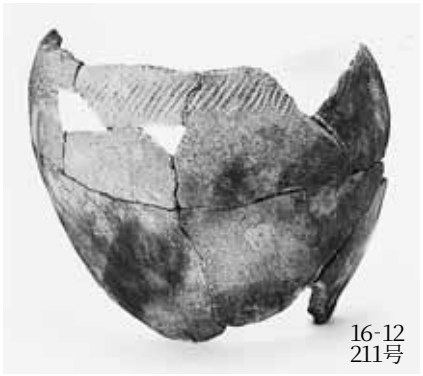
図版 38

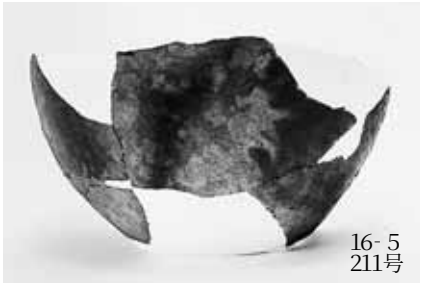
15-1
211号

15-1　211号

15-2
211号


16-5
211号


16-12
211号


16-5
211号

17-23
211号

17-24
211号

19-36
206号

19-37
206号

21-1
408号

21-15
408号

21-16
408号

24-2
47号

25-3
47号

25-4
47号

25-5
47号

25-6
47号

26-1
20号

30-1
4号

30-2
4号

30-3
4号

30-4
4号

31-13
4号

31-15
4号

31-18
4号

31-19
4号

図版 40

31-24
4号

33-1
9号

33-2
9号

35-11
6号

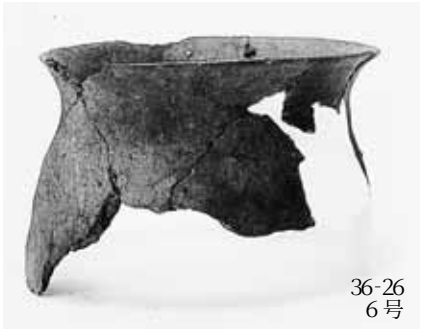
36-20
6号

36-31
6号

32-32
4号

35-3
6号

36-17
6号


36-26
6号

36-35
6号

31-26　4号

32-34
4号

35-1
6号

36-18
6号

36-28
6号

37-42
6号

37-44
6 号

42-13
13号

44-41
13号

45-43
13号

45-47
13号

45-49
13号

37-45
6 号

43-32
13号

45-44
13号

45-45
13号

46-52
13号

37-46
6 号

43-33
13号

47-55
13号

47-57
13号

図版 42

47-56
13号

52- 6
14号

52- 9
14号

52-17
14号

52-17
14号

51- 1
14号

52- 7
14号

52-10
14号

53-18
14号

52- 4
14号

52- 5
14号

52- 8
14号

52-14
14号

53-20
14号

53-21
14号

53-22
14号

53-24
14号

57-16
202号

57-8
202号

57-23
202号

57-25
202号

57-21
202号

57-35
202号

58-55
202号

57-32
202号

59-77
202号

58-58
202号

59-79
202号

59-80
202号

59-81
202号

図版 44

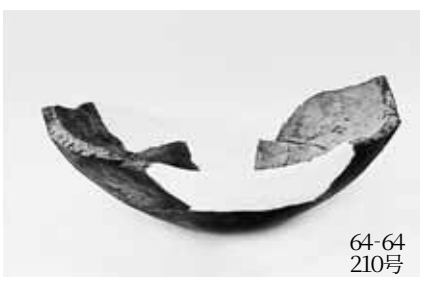
63- 5
210号

63- 8
210号

63-13
210号

63-31
210号

64-48
210号


64-64
210号

63- 6
210号

63- 9
210号

63-21
210号

64-45
210号

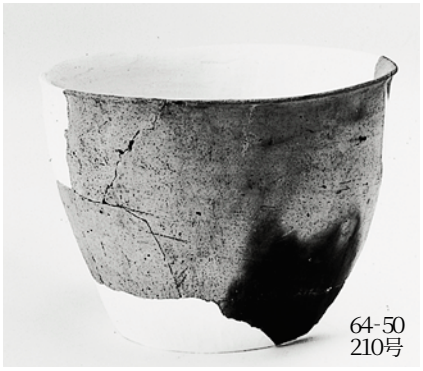
63-
210号

63- 7
210号

63-11
210号

63-28
210号

64-47
210号


64-50
210号

67-11
401号

67-21
401号

70-17
51号

70-23
51号

67- 1
401号

67- 6
401号

67-16
401号

69- 1
51号

70-22
51号

67- 8
401号

67-17
401号

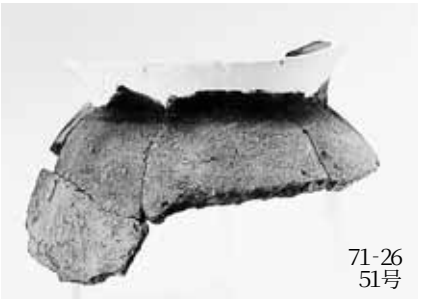
70- 2
51号

70-15
51号

71-24
51号

図版 46

71-25
51号


71-26
51号

73- 5
301号

73-13
301号

73-14
301号

74- 2
52号

75- 6
34号

76-11
34号

74- 3
52号

77-14
34号

77-12
34号

79- 1
44号

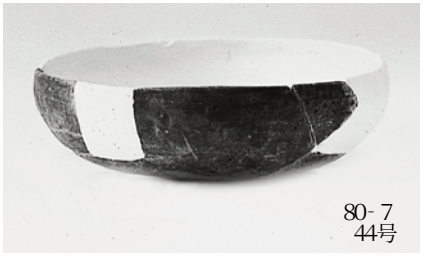
79- 2
44号

77-15
34号

80- 3
44号

80- 5
44号

80- 6
44号


80-7
44号

80-12
44号

80-13
44号

80-21
44号

80-22
44号

80-26
44号

88-13
407号

88-14
407号

87-2
407号

88-22
407号

88-27
407号

88-28
407号

88-29
407号

88-30
407号

88-31
407号

88-32
407号

図版 48

88-34
407号

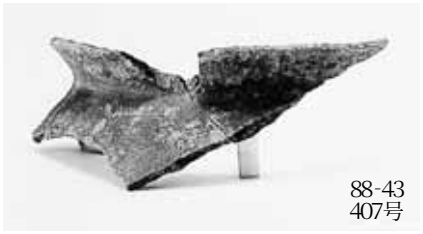
88-47
407号

89-56 407号

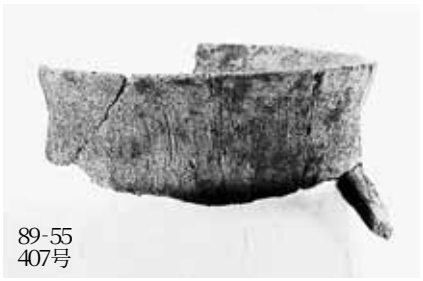
89-59 407号

89-63
407号

89-64
407号

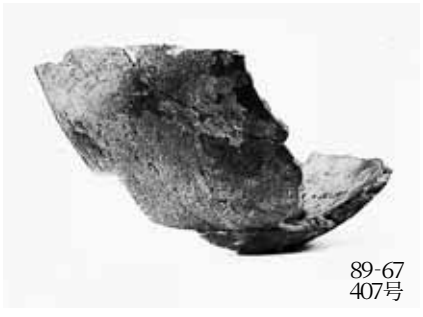

88-43
407号

89-52
407号


89-55
407号

89-57
407号

89-60
407号


89-67
407号

88-46
407号

89-34
407号

89-58
407号

89-61
407号

89-66
407号

90-85
407号

90-86
407号

90-87
407号

90-88
407号

90-94
407号

93-13
200号

93-30
200号

93-15
200号

93-16
200号

96- 3
208号

96- 4
208号

96- 5
208号

96- 6
208号

101- 3
46号

101- 4
46号

102-10
46号

図版 50

102-12
46号

103- 7
411号

107- 5
209号

107-12
209号

108-20
209号

103- 1
411号

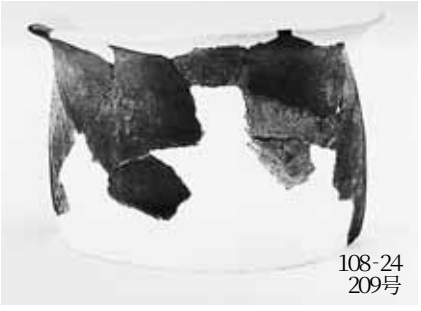
103- 3
411号

103- 8
411号

107- 7
209号

107-16
209号

108-22
209号


108-24
209号

103- 6
411号

103- 9
411号

103-12
411号

107-15
209号

108-26
209号

108-28
209号

108-30
209号

112-1
404号

112-5
404号

112-9
404号

108-33
209号

111-10
406号

112-6
404号

112-12
404号

108-35
209号

111-12
406号

112-13
404号

図版 52

115- 1
204号

115- 2
204号

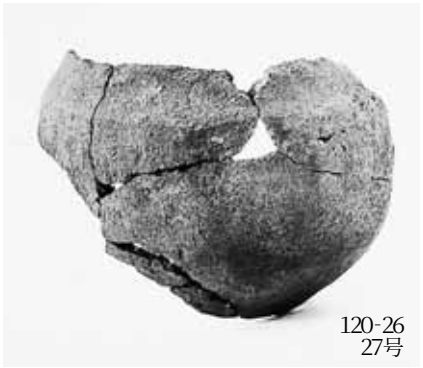
116- 5
204号

124- 1
405号

124- 2
405号

124- 3
405号

115- 3
204号


120-26
27号

120-34
27号

124- 4
405号

124- 5
405号

115- 4
204号

120-28
27号

120-35
27号

124- 6
405号

124- 7
405号

124- 8
405号

124-9
405号

124-10
405号

124-11
405号

124-12
405号

124-13
405号

124-14
405号

124-15
405号

124-16
405号

124-17
405号

124-18
405号

124-19
405号

124-20
405号

124-21
405号

124-22
405号

125-54
405号

125-42
405号

125-45
405号

128-5
207号

128-13
207号

128-17
207号

図版 54

129-22
207号

129-24
207号

132-1
21号

132-2
21号

129-25
207号

129-27
207号

131-5
403号

129-26
207号

129-28
207号

131-1
403号

131-6
403号

137- 1
201号

137- 5
201号

137- 9
201号

137-11
201号

137-20
201号

149- 1
64号

150- 1
205号

137- 2
201号

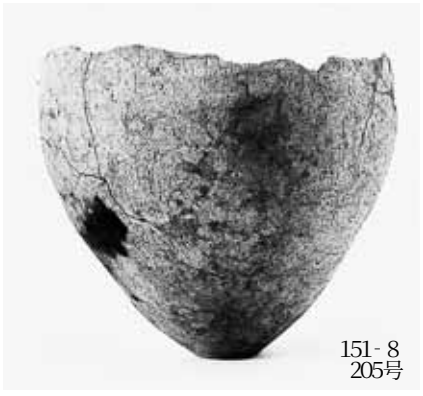
137- 6
201号

137-10
201号

137-12
201号

141- 1
48号

141- 5
48号


151- 8
205号

137- 3
201号

137- 7
201号

137-13
201号

141- 2
48号

141- 8
48号

151- 9
205号

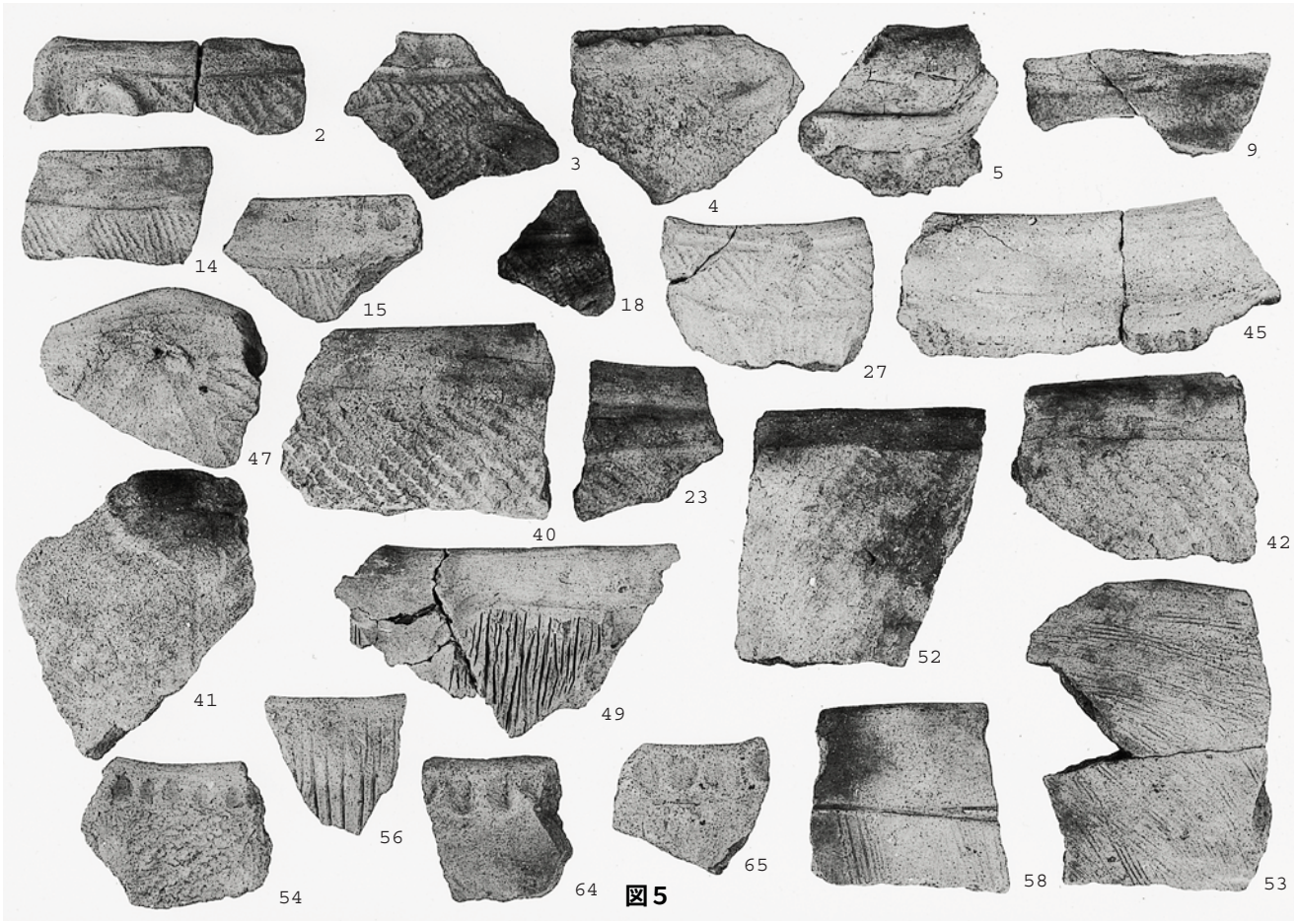


図5

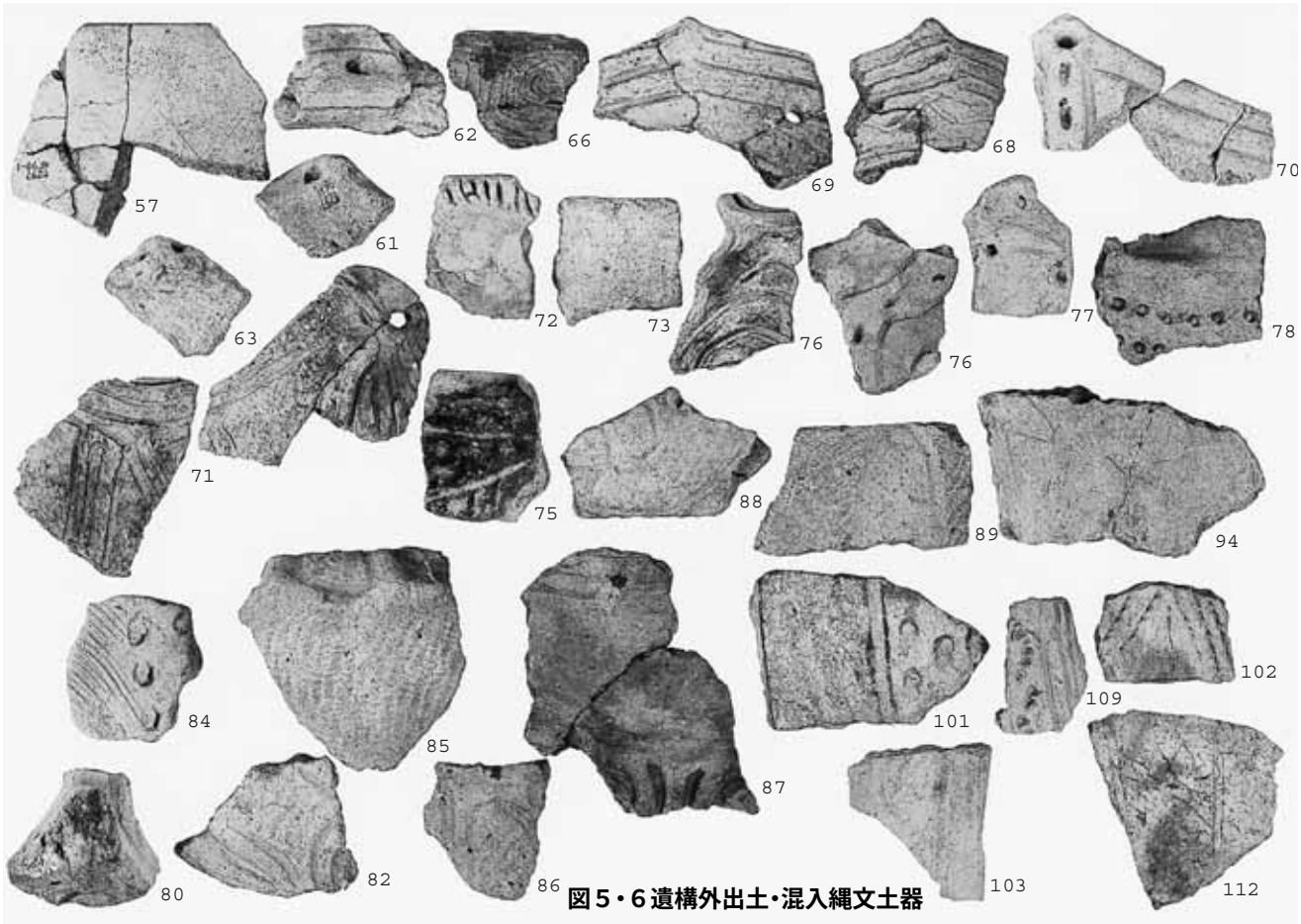
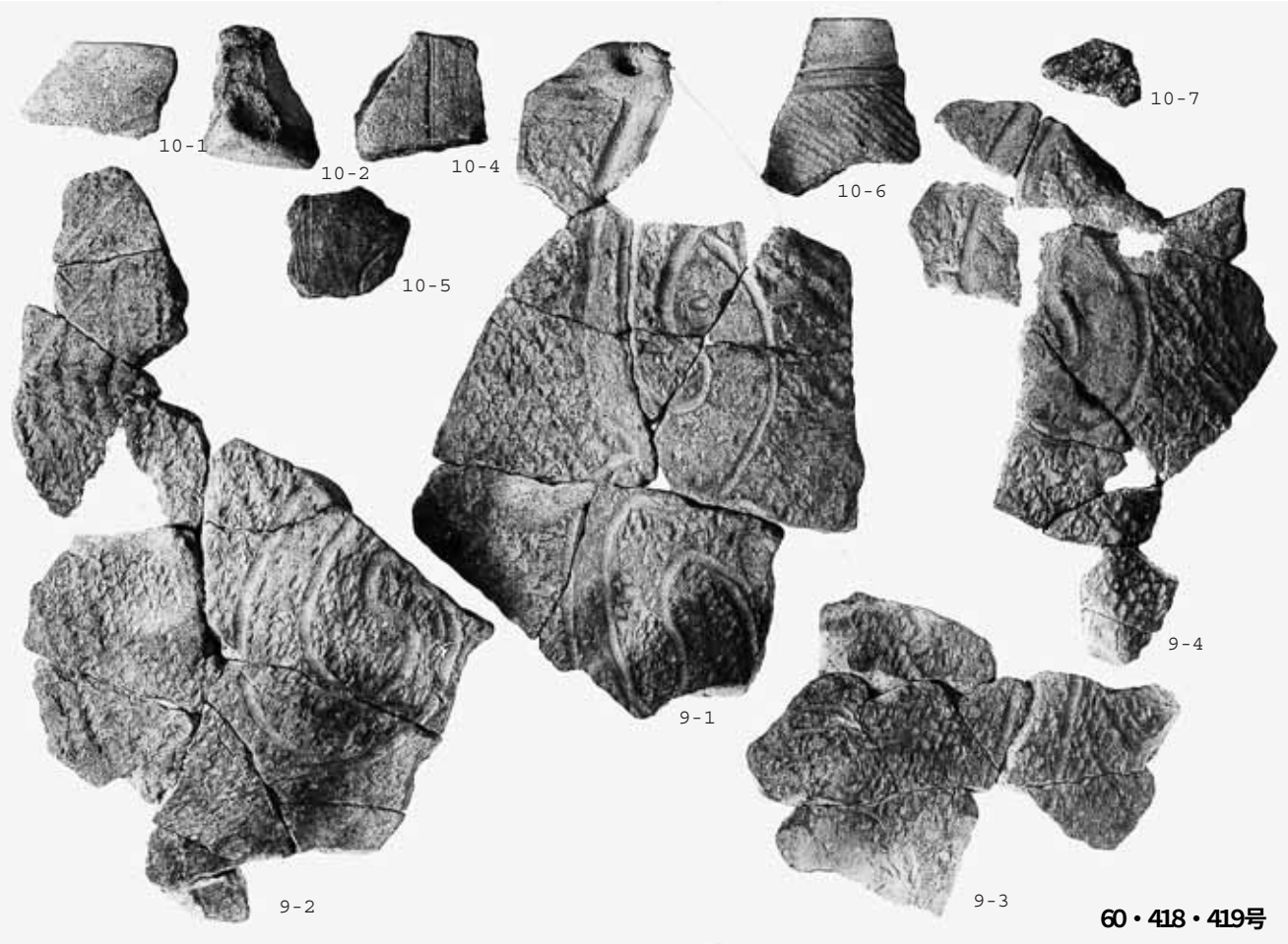


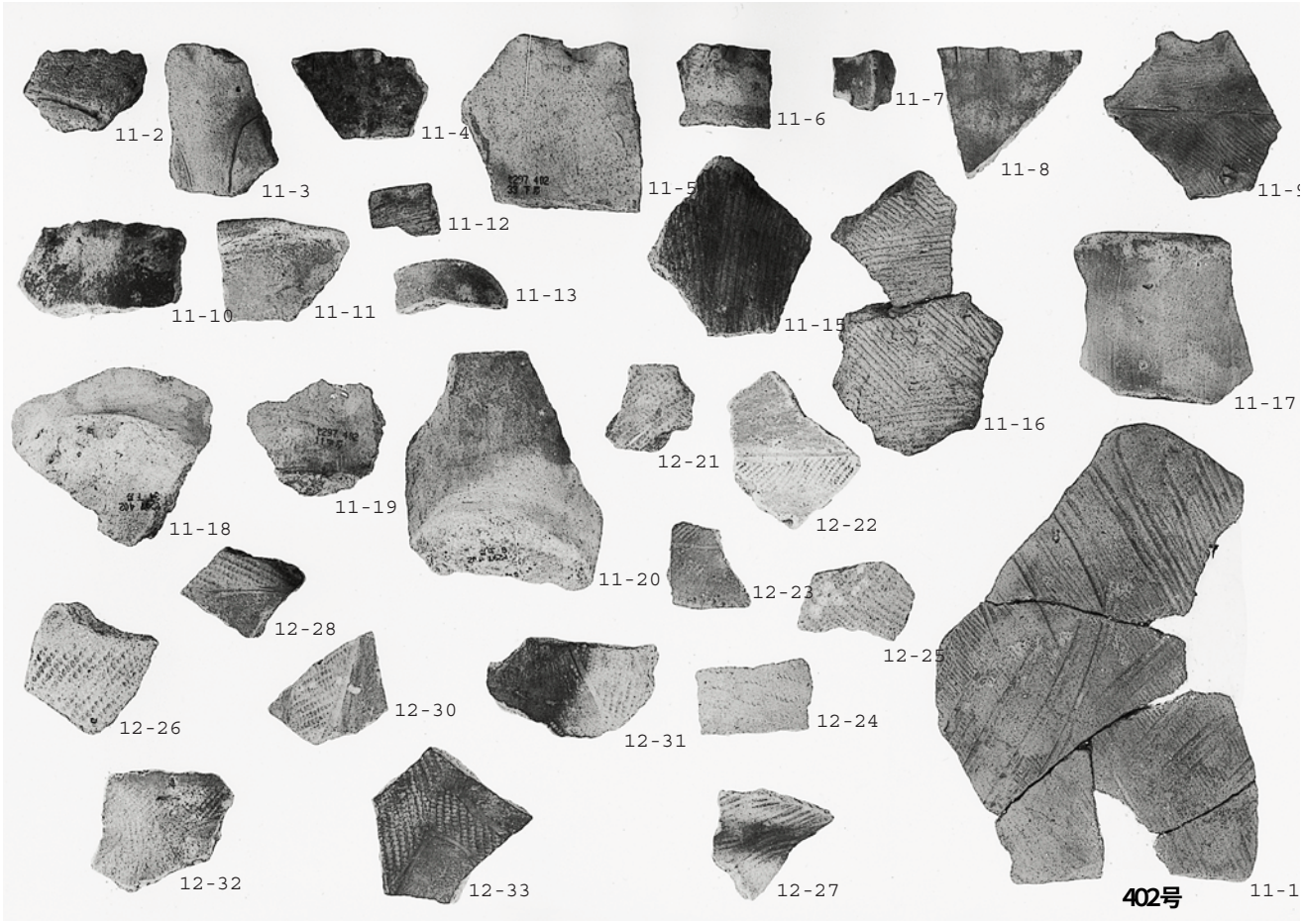
図5・6遺構外出土・混入縄文土器

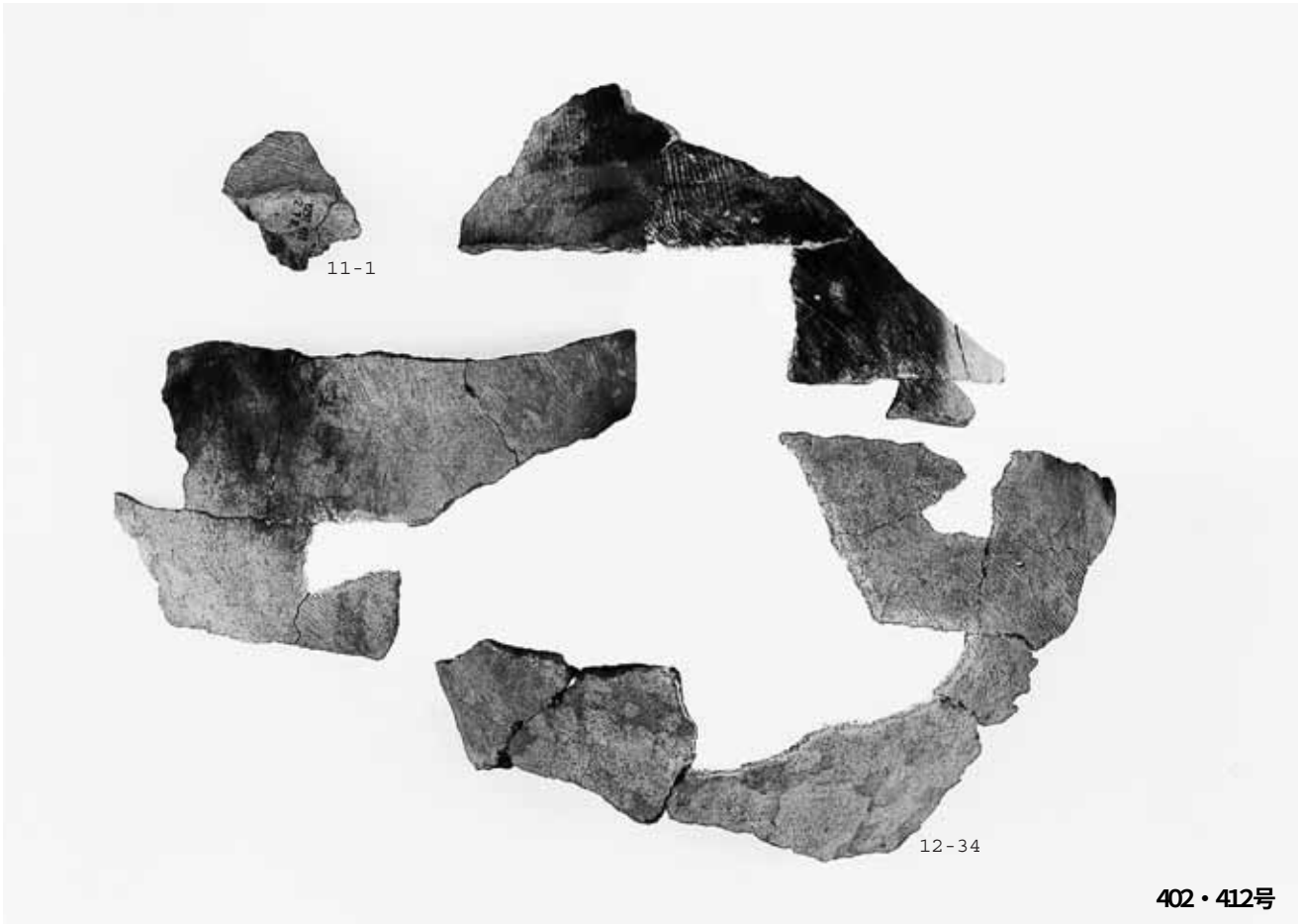
図７　遺構外出土・混入弥生土器



60・418・419号

図版 58


11-2
11-3
11-4
11-5
11-6
11-7
11-8
11-12
11-10
11-11
11-13
11-15
11-16
11-17
11-18
11-19
12-21
12-22
11-20
12-23
12-25
12-28
12-26
12-30
12-31
12-24
12-32
12-33
12-27
11-1
402号


11-1
12-34
402・412号

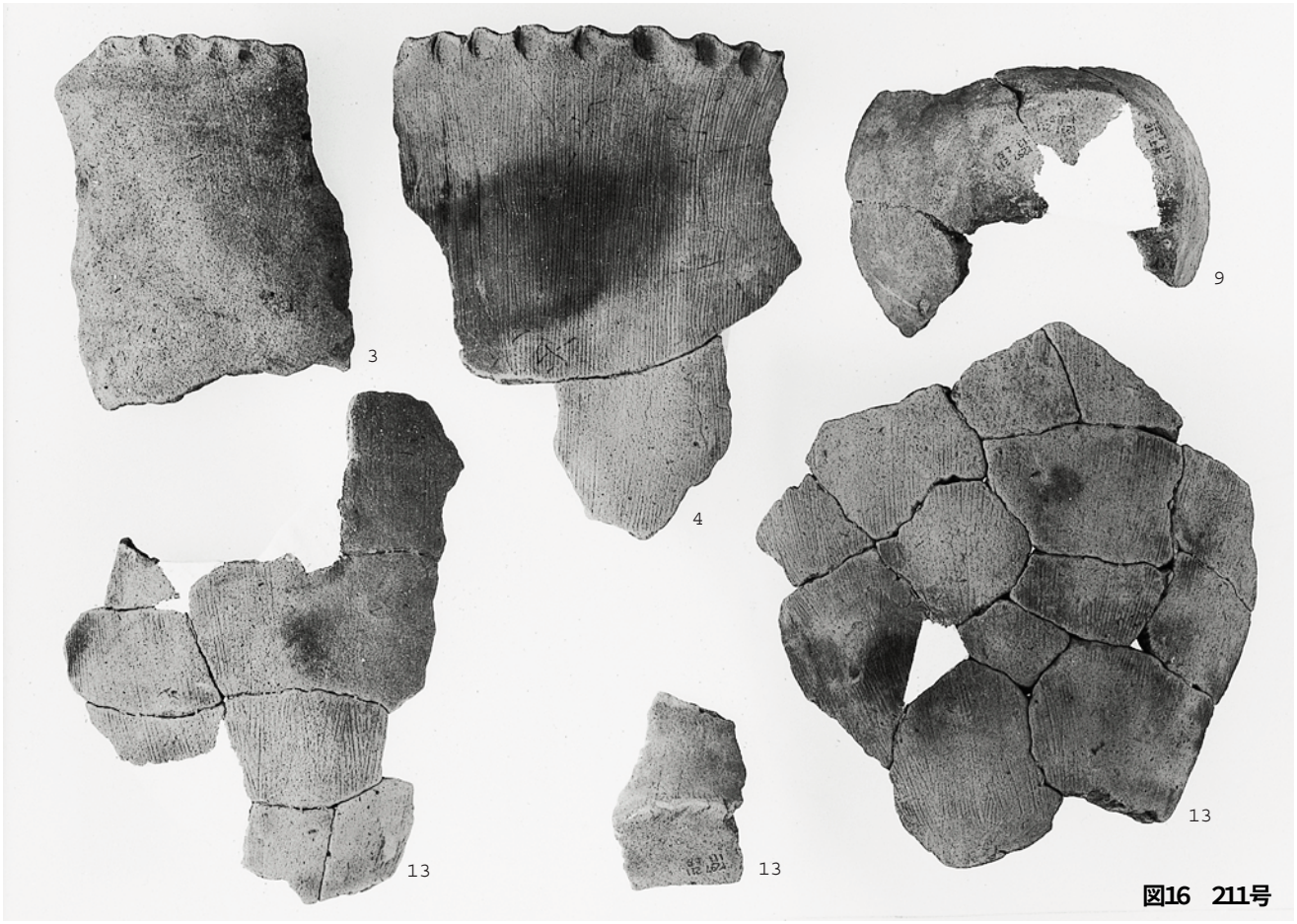


図16　211号

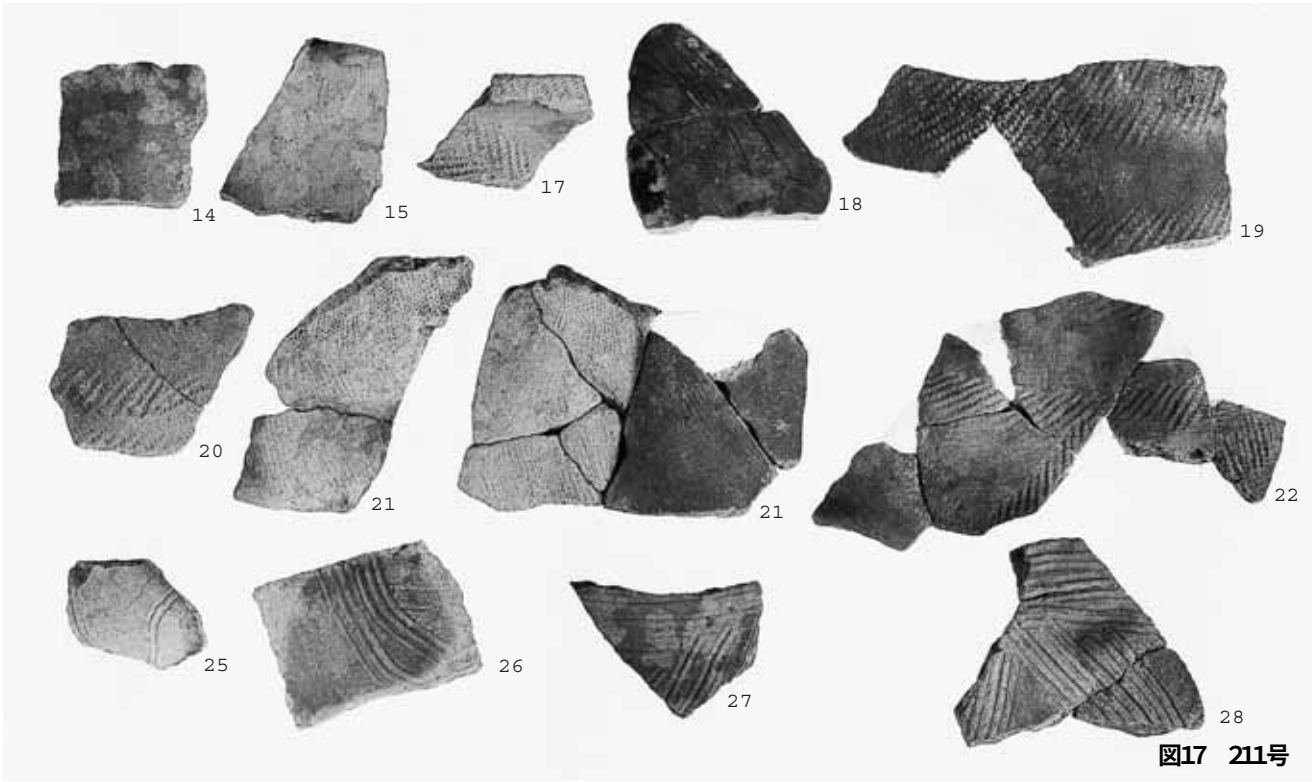


図17　211号

図版 60

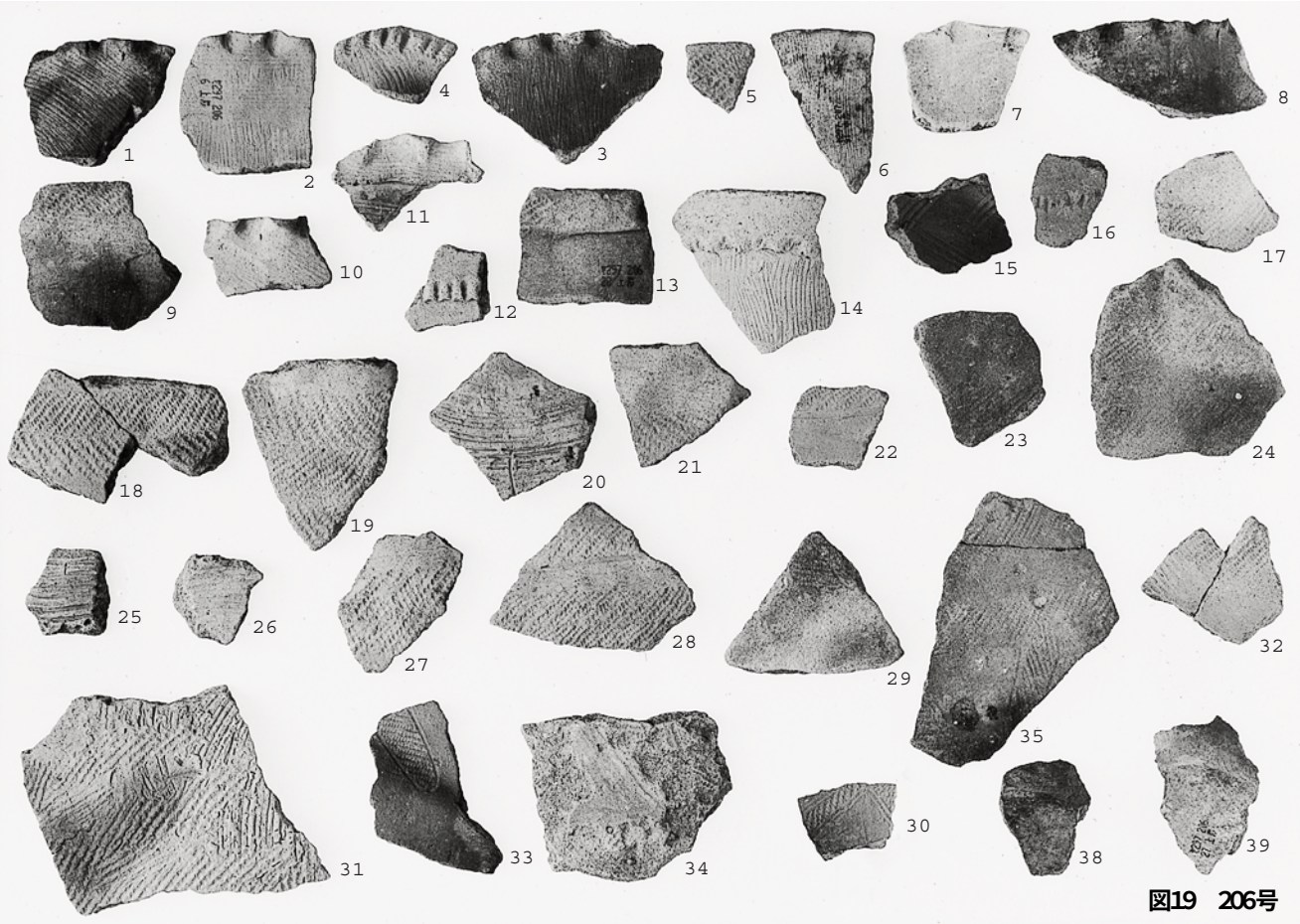


図19　206号

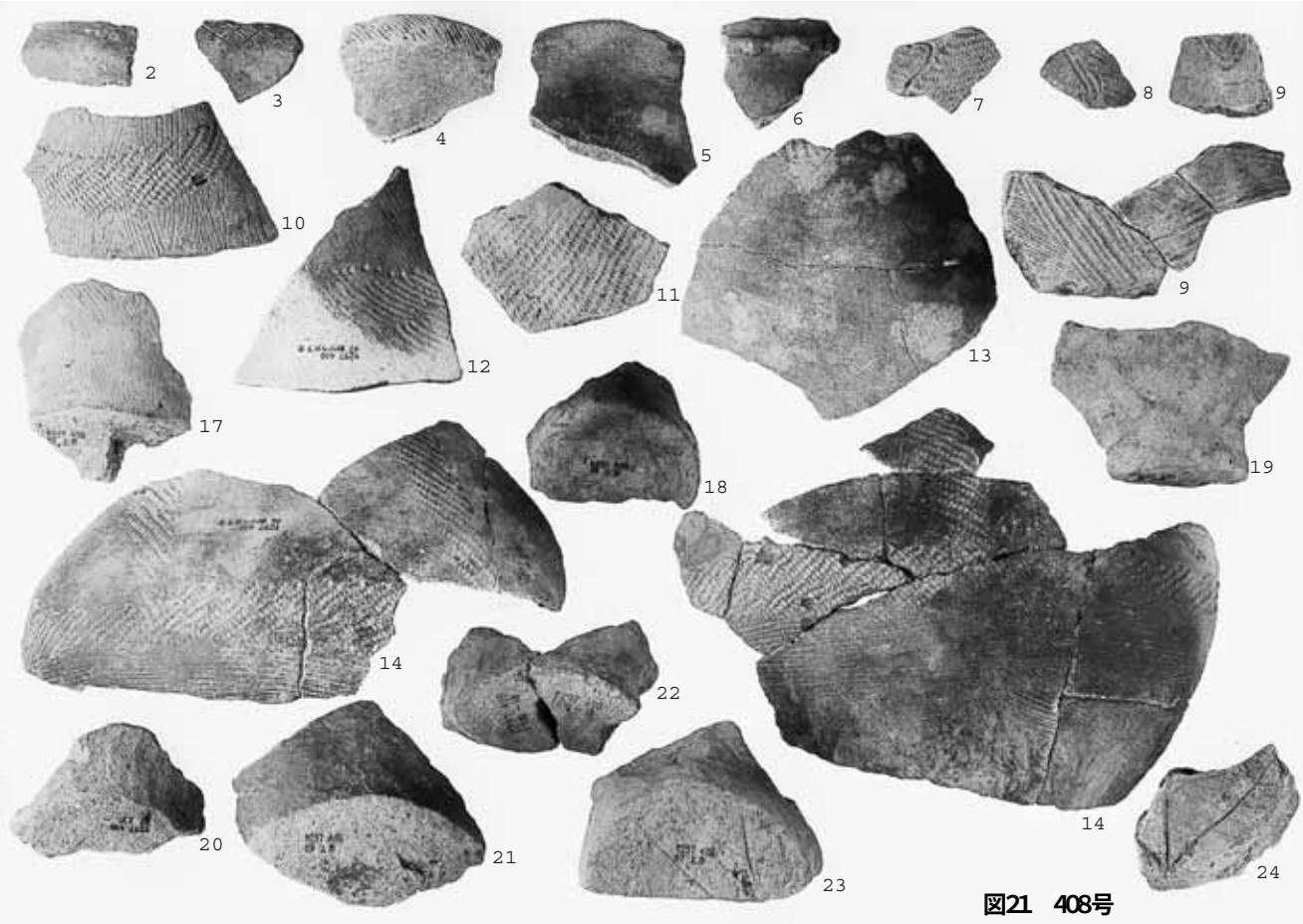


図21　408号

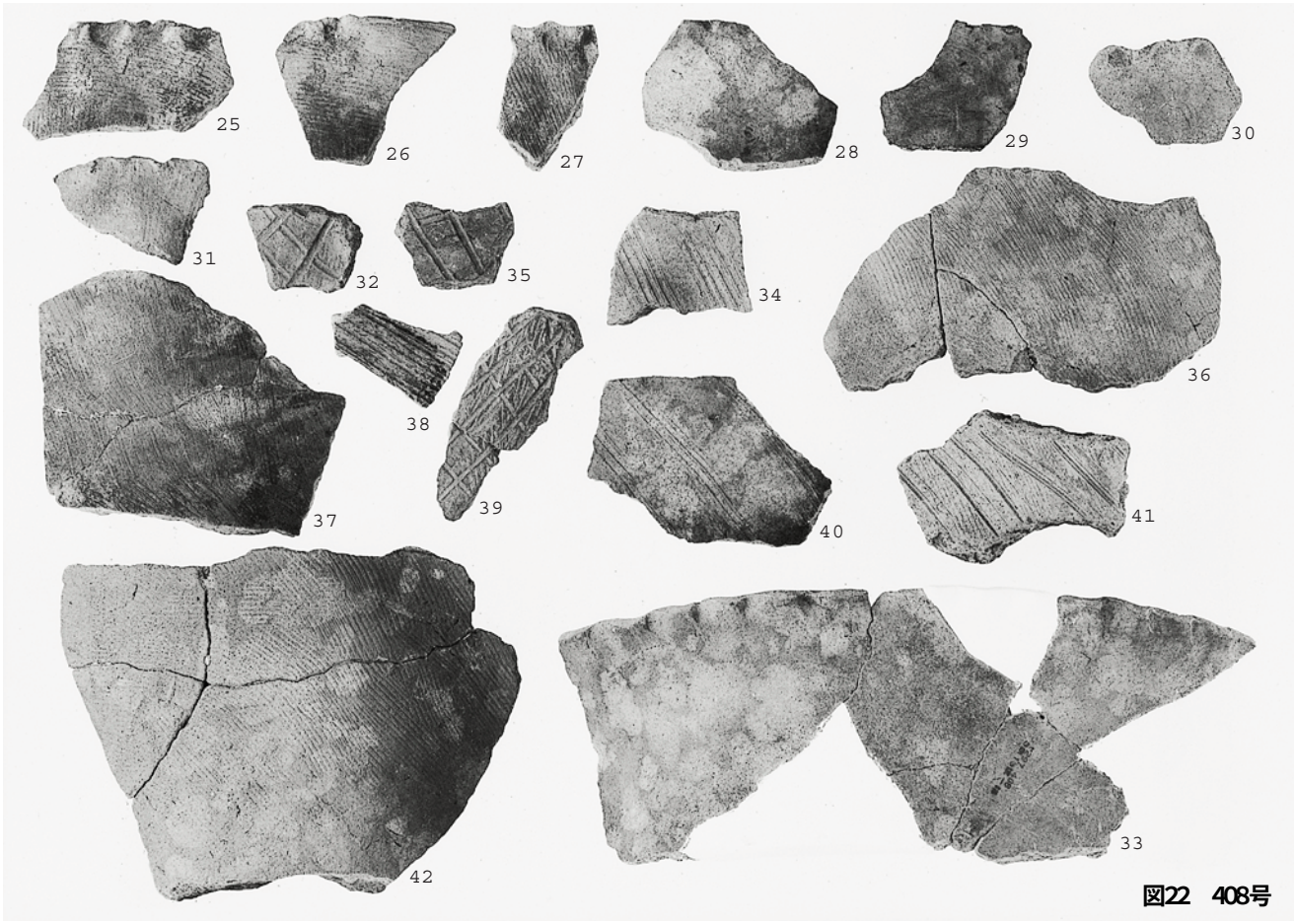


図22　408号

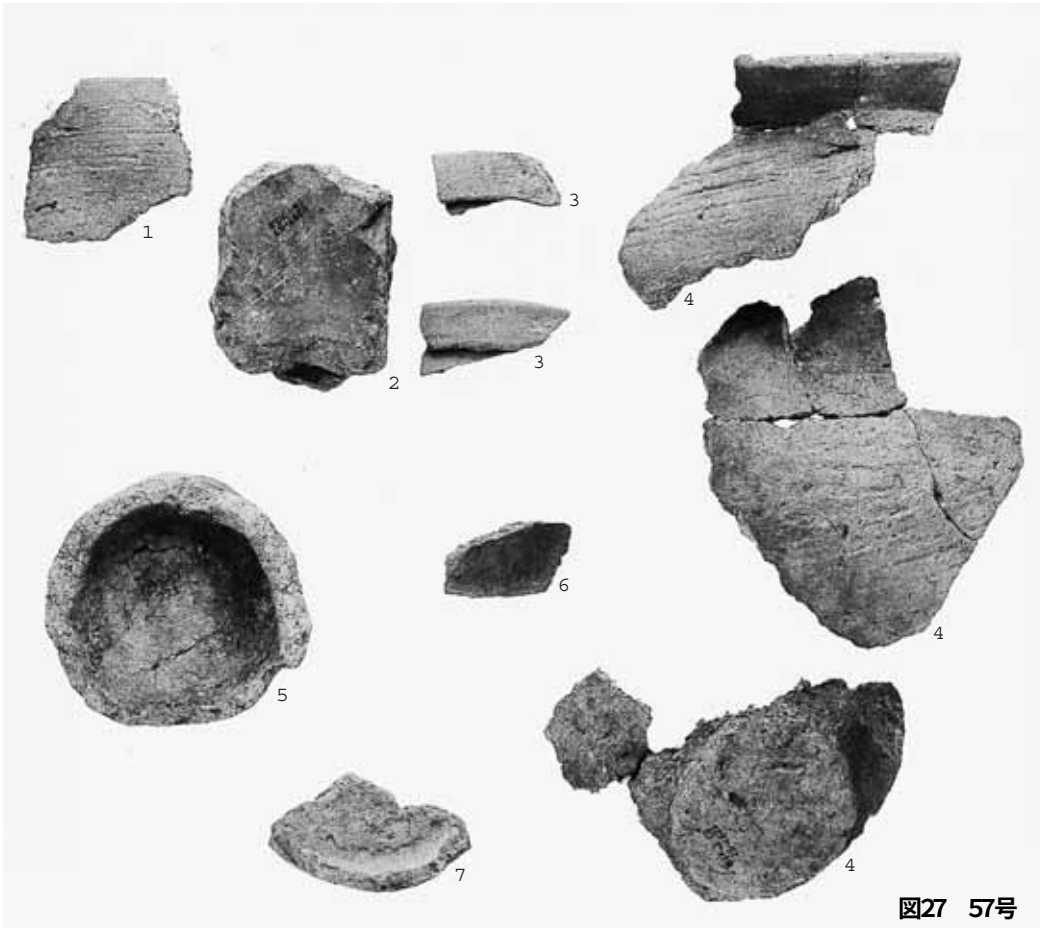


図27　57号

図版 62

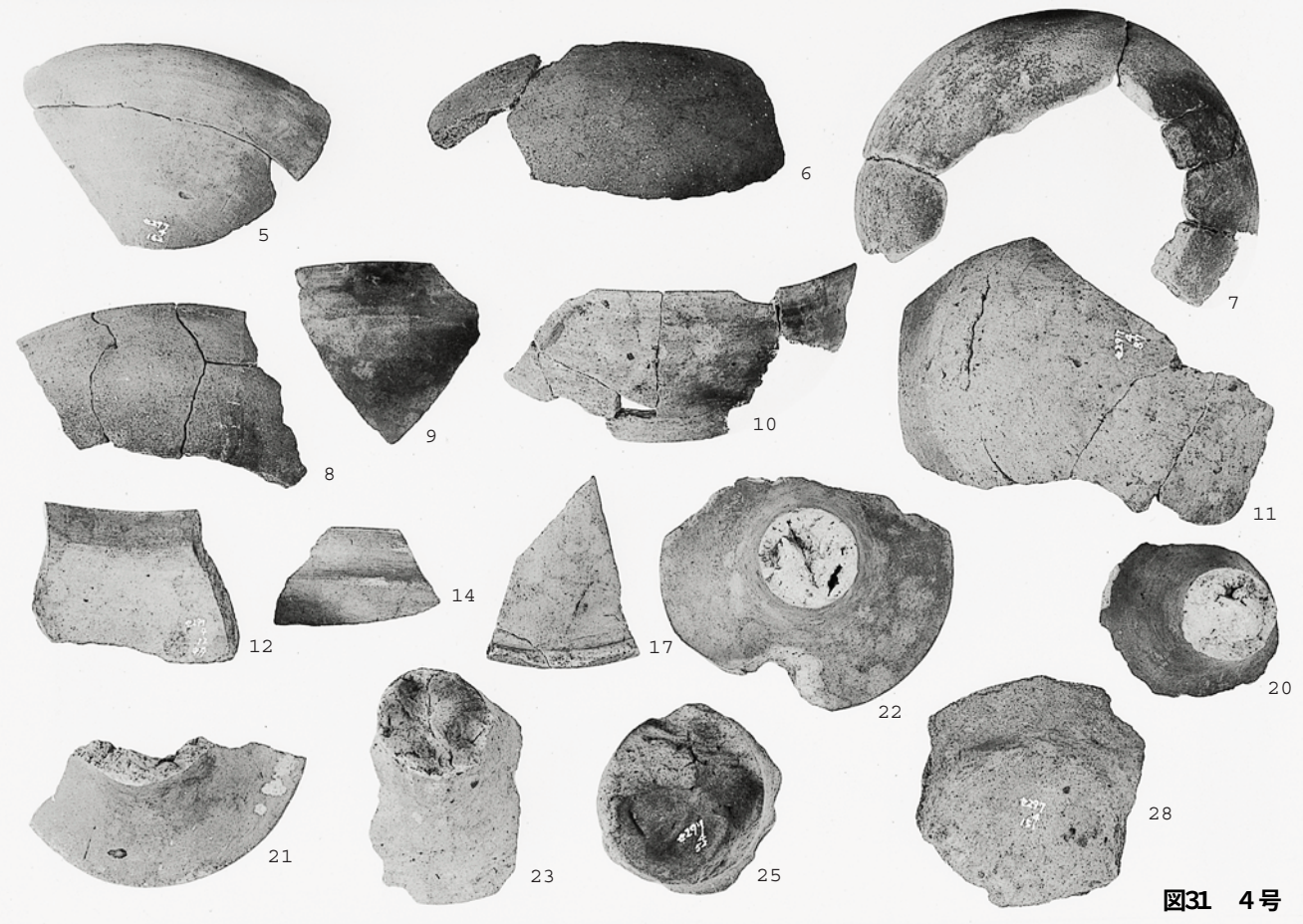


図31　4号

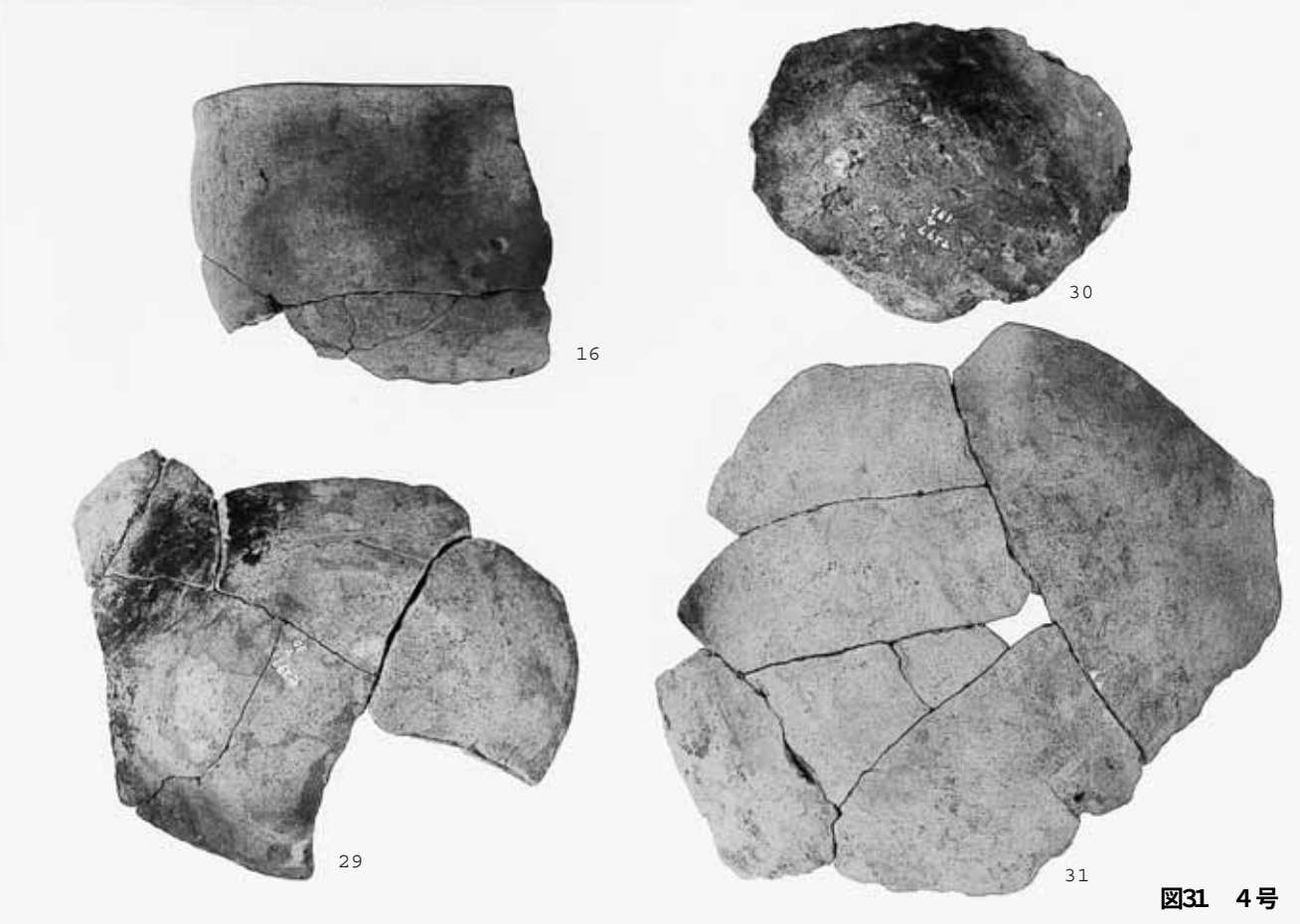
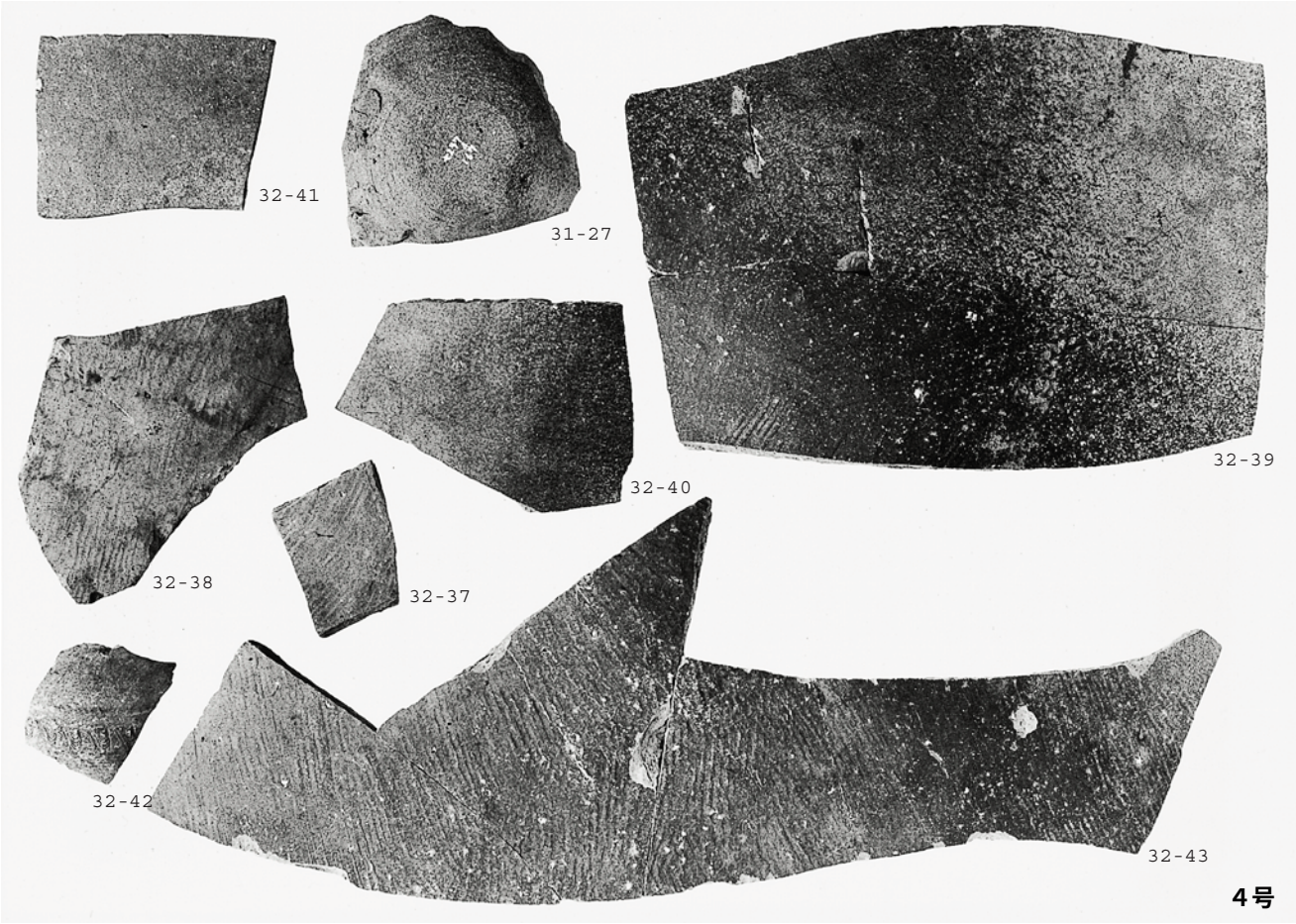
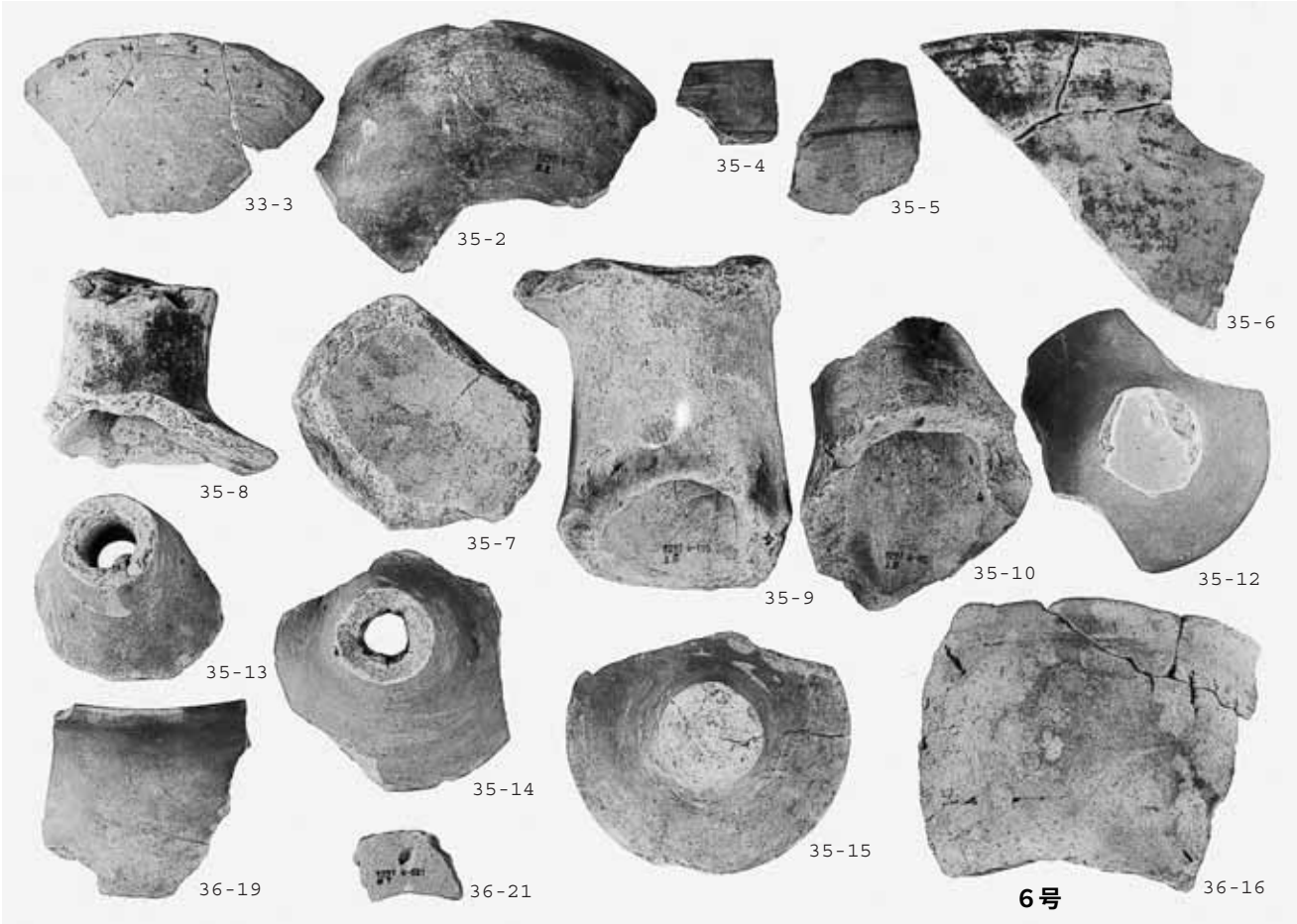


図31　4号


32-41
31-27
32-39
32-40
32-38
32-37
32-42
32-43
4号


33-3
35-2
35-4
35-5
35-6
35-8
35-7
35-9
35-10
35-12
35-13
35-14
35-15
36-19
36-21
36-16
6号

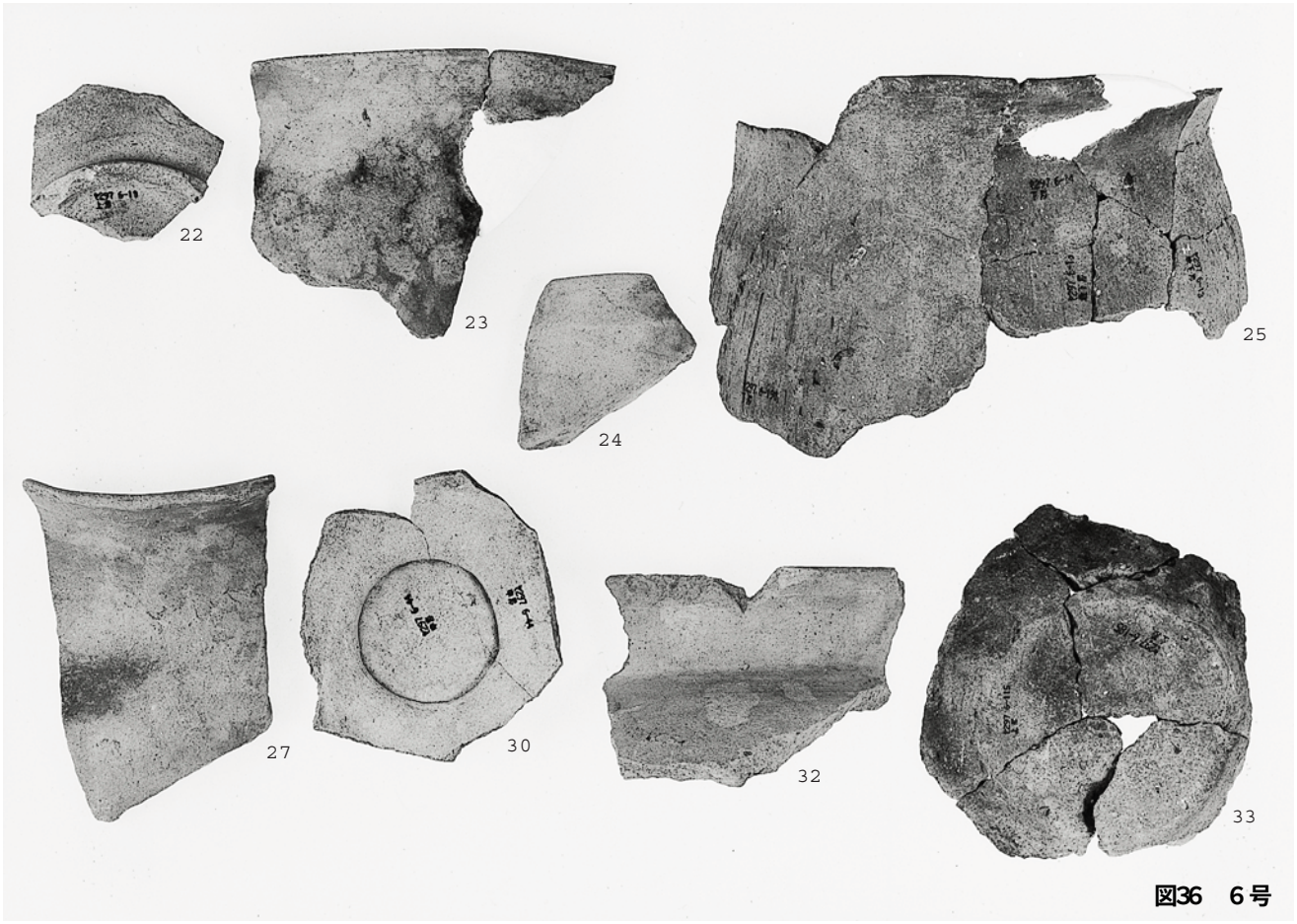
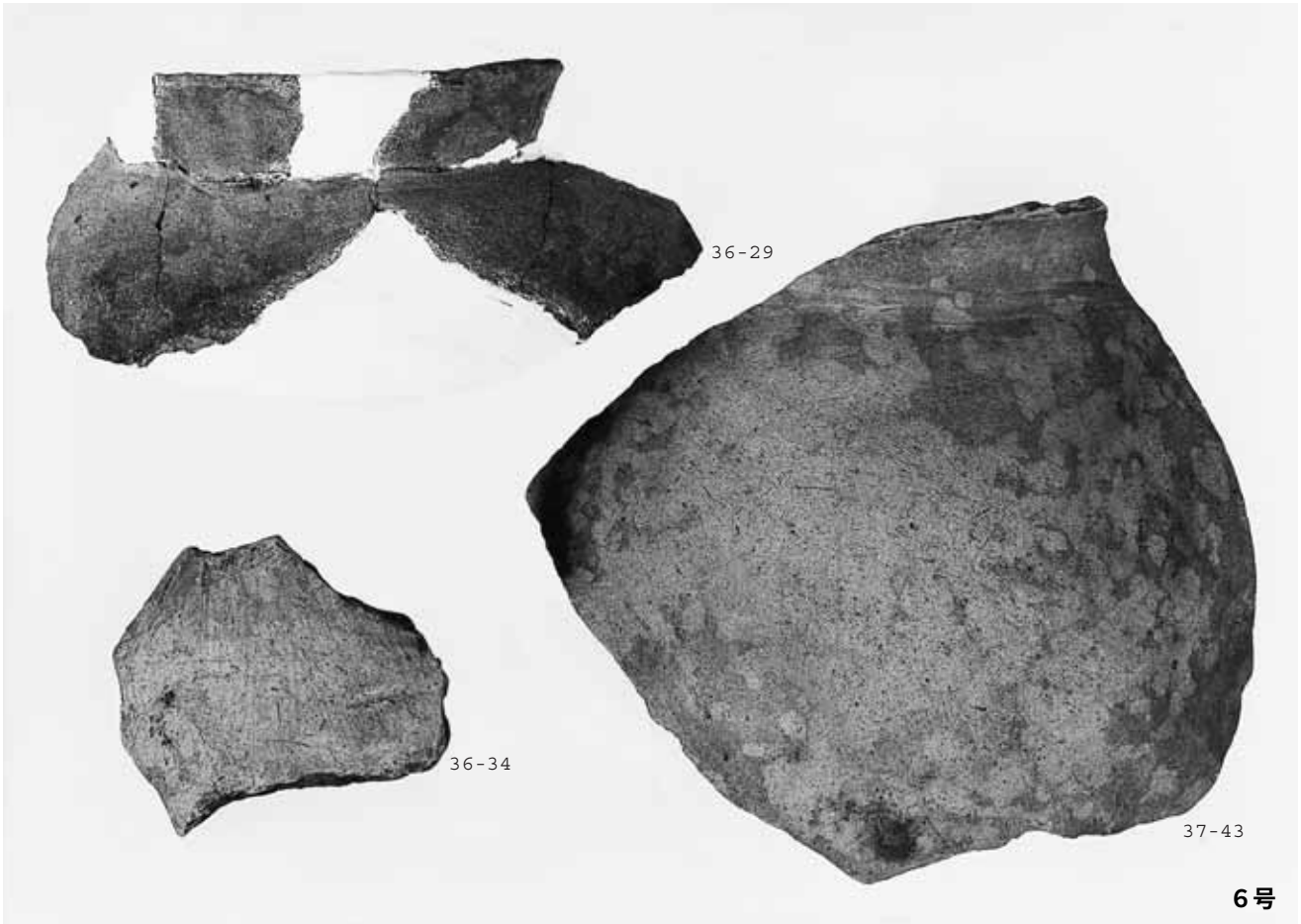


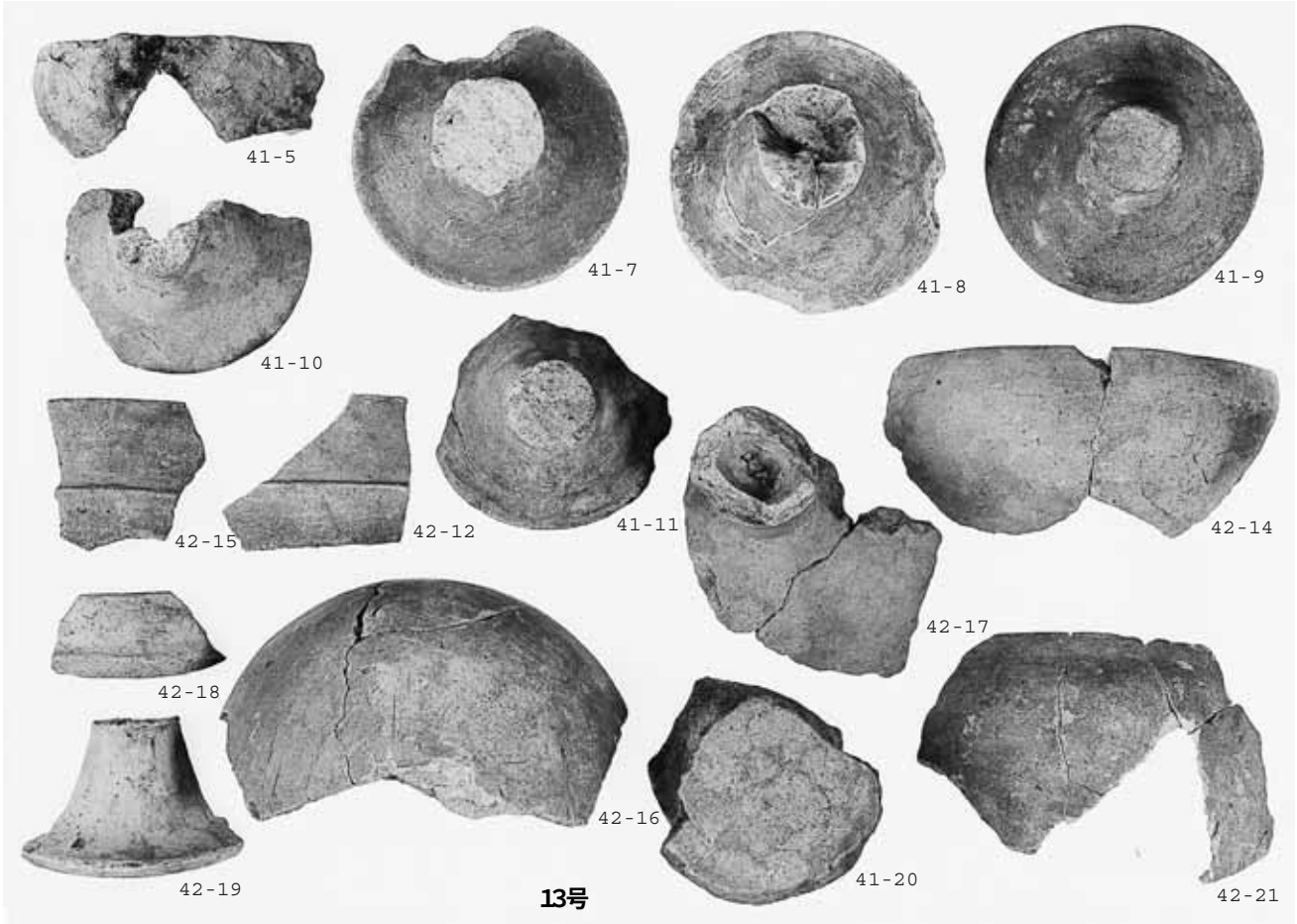
図36　6号



6号

41

図37　6号


41-5
41-7
41-8
41-9
41-10
41-11
42-12
42-14
42-15
42-16
42-17
42-18
41-20
42-21
42-19

13号

図版 66

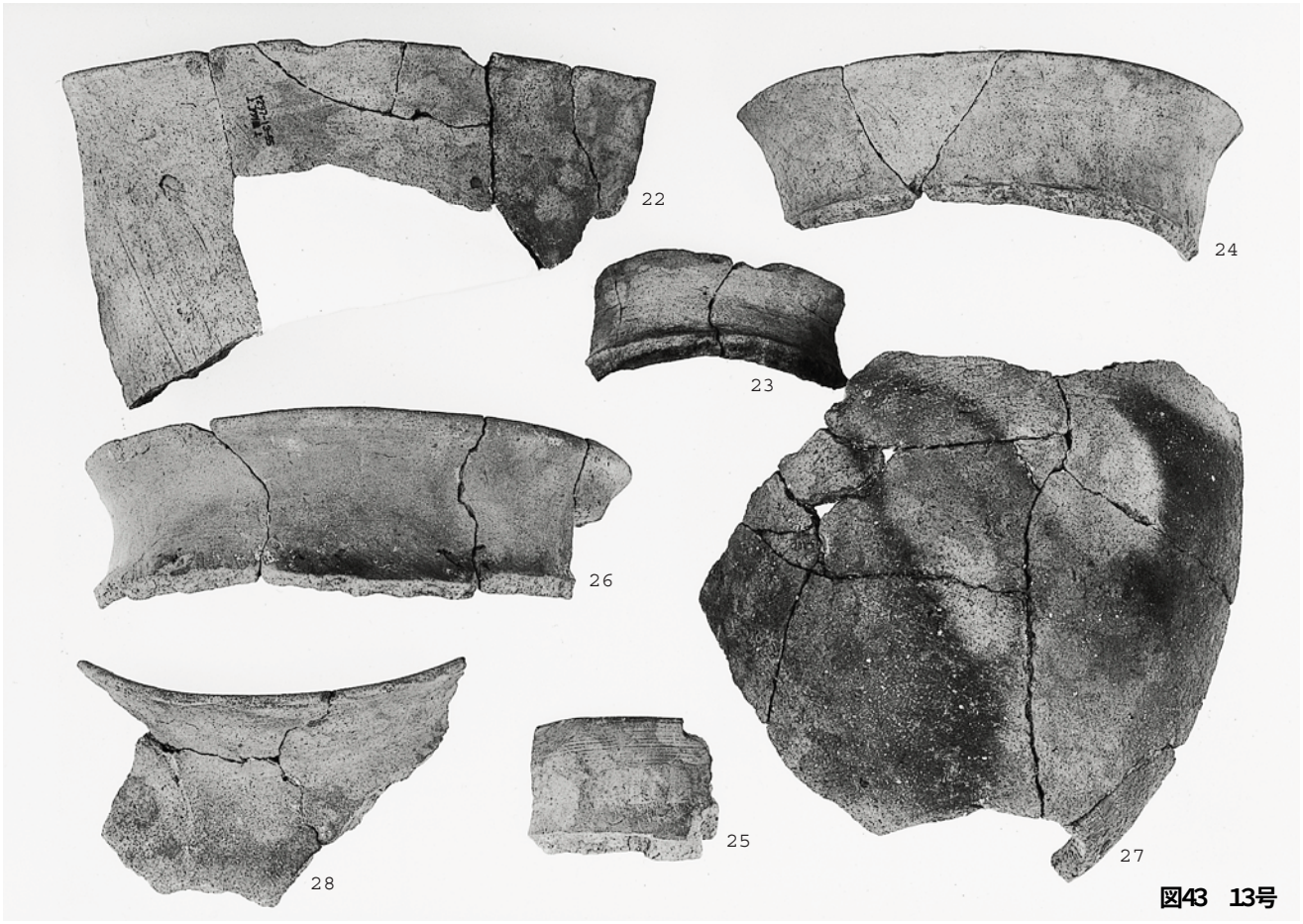
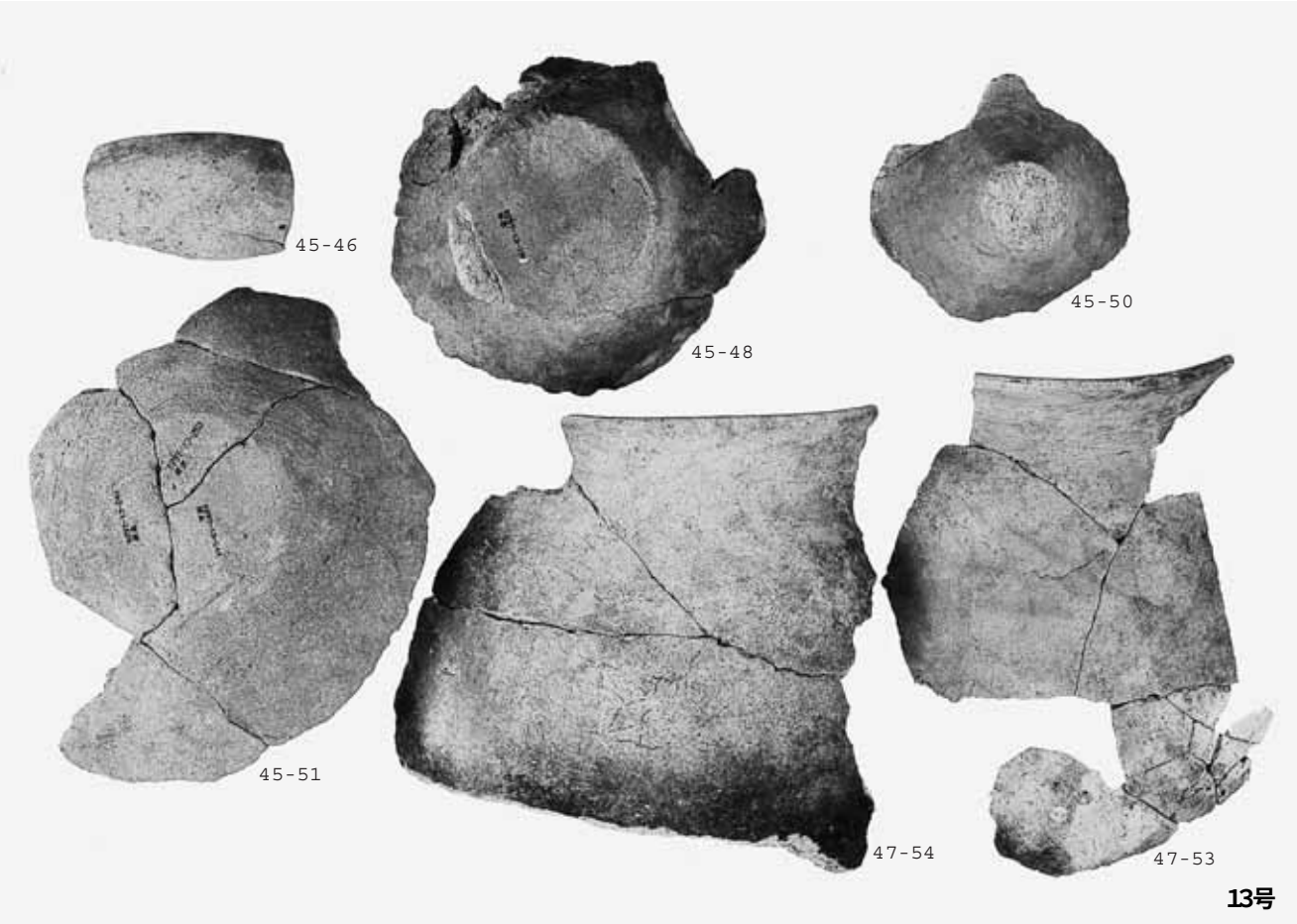


図43　13号

図43　13号

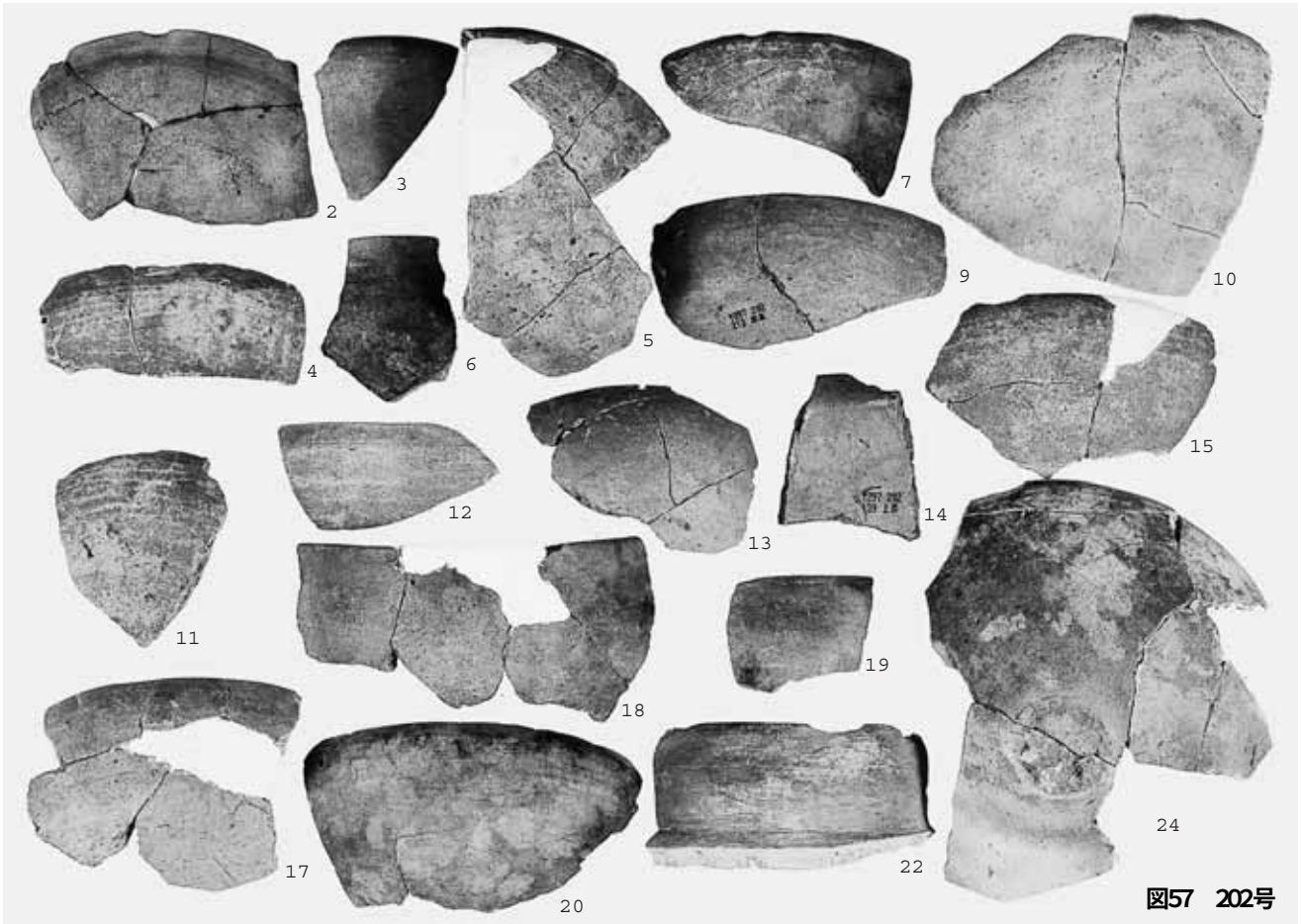
図44　13号

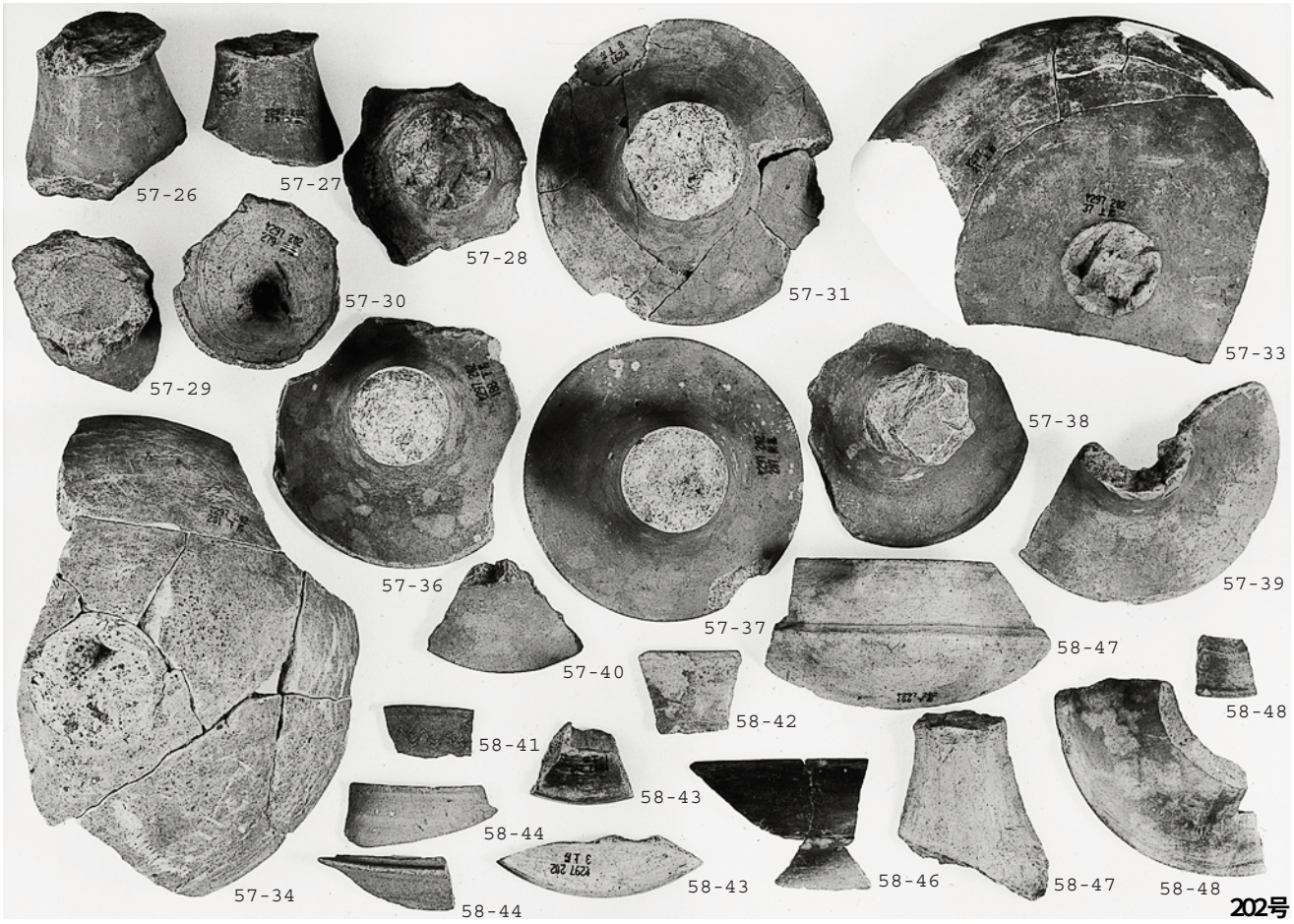


13号

図版 68

52-3
52-11
52-12
52-13
52-16
51-15
53-19
14号


2
3
4
5
6
7
9
10
11
12
13
14
15
17
18
19
20
22
24
図57　202号



202号

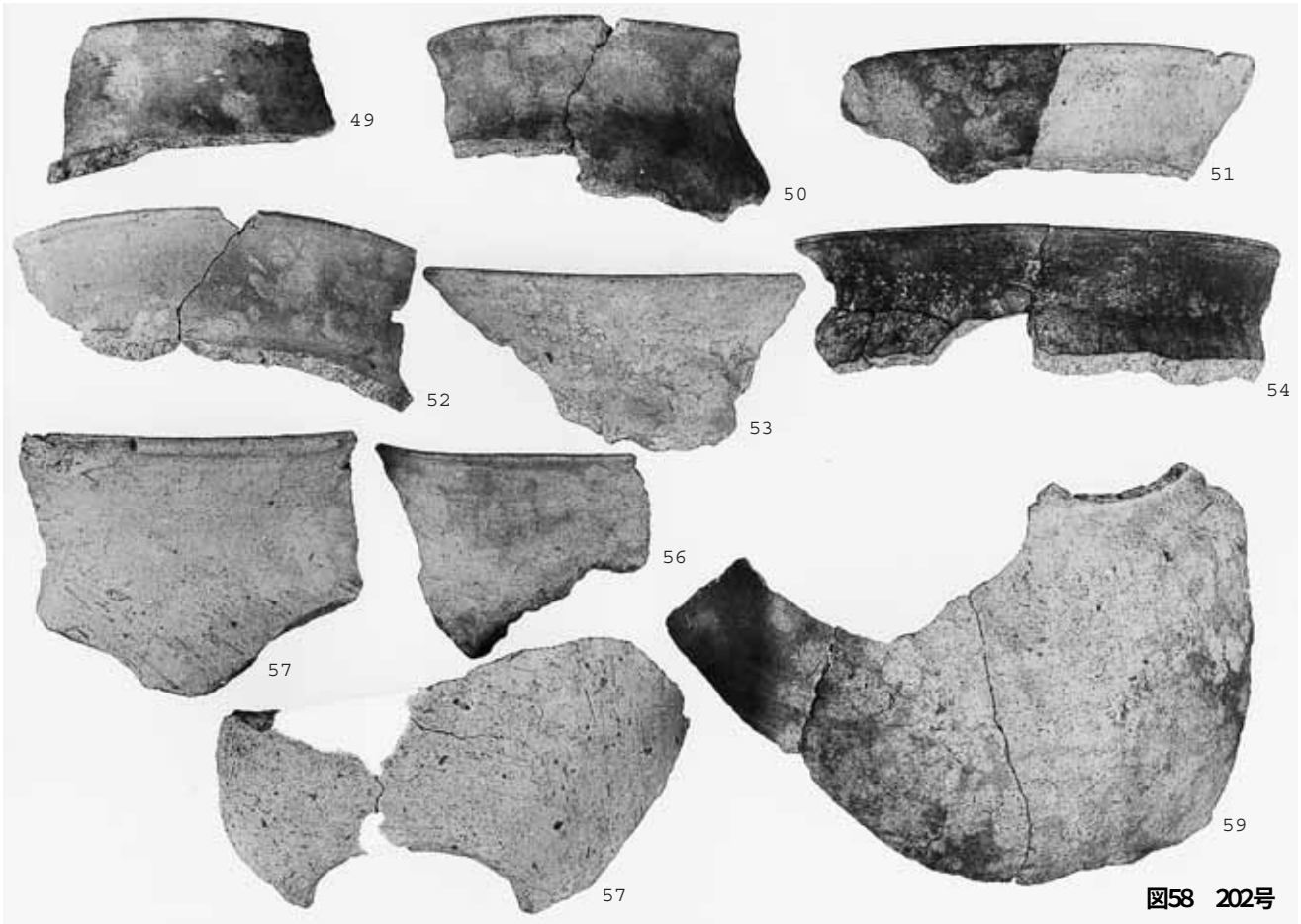
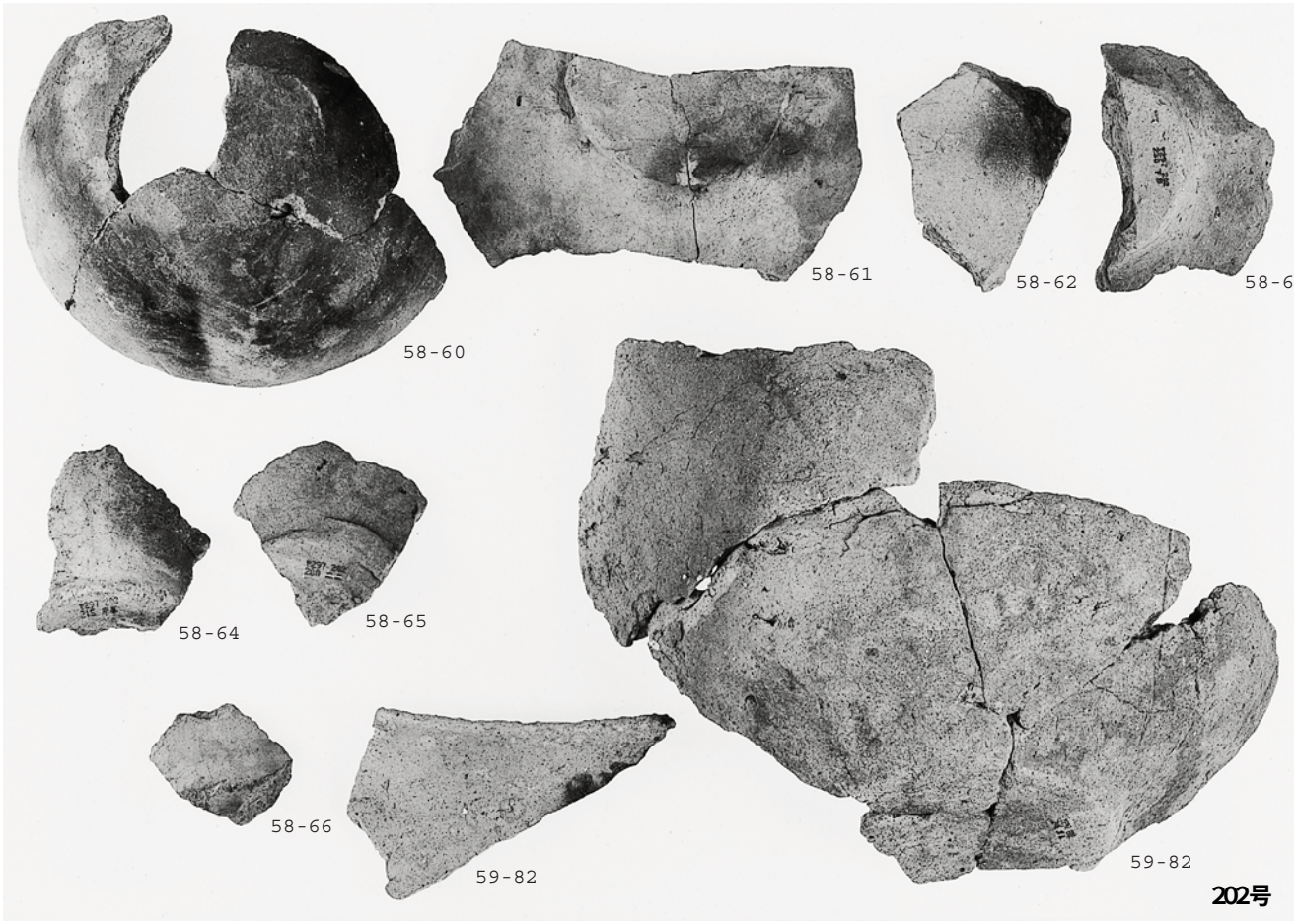


図58　202号



202号

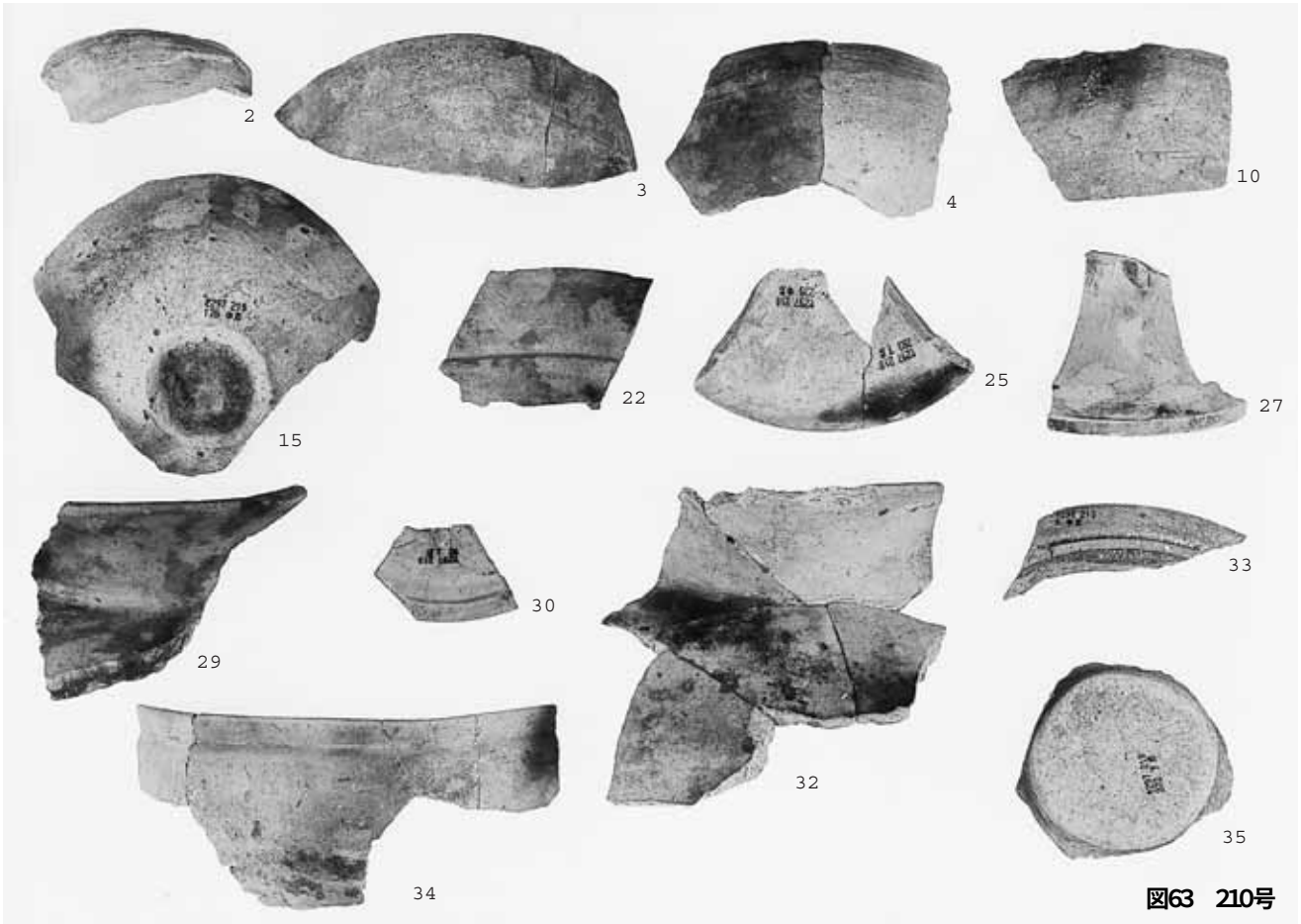


図63　210号

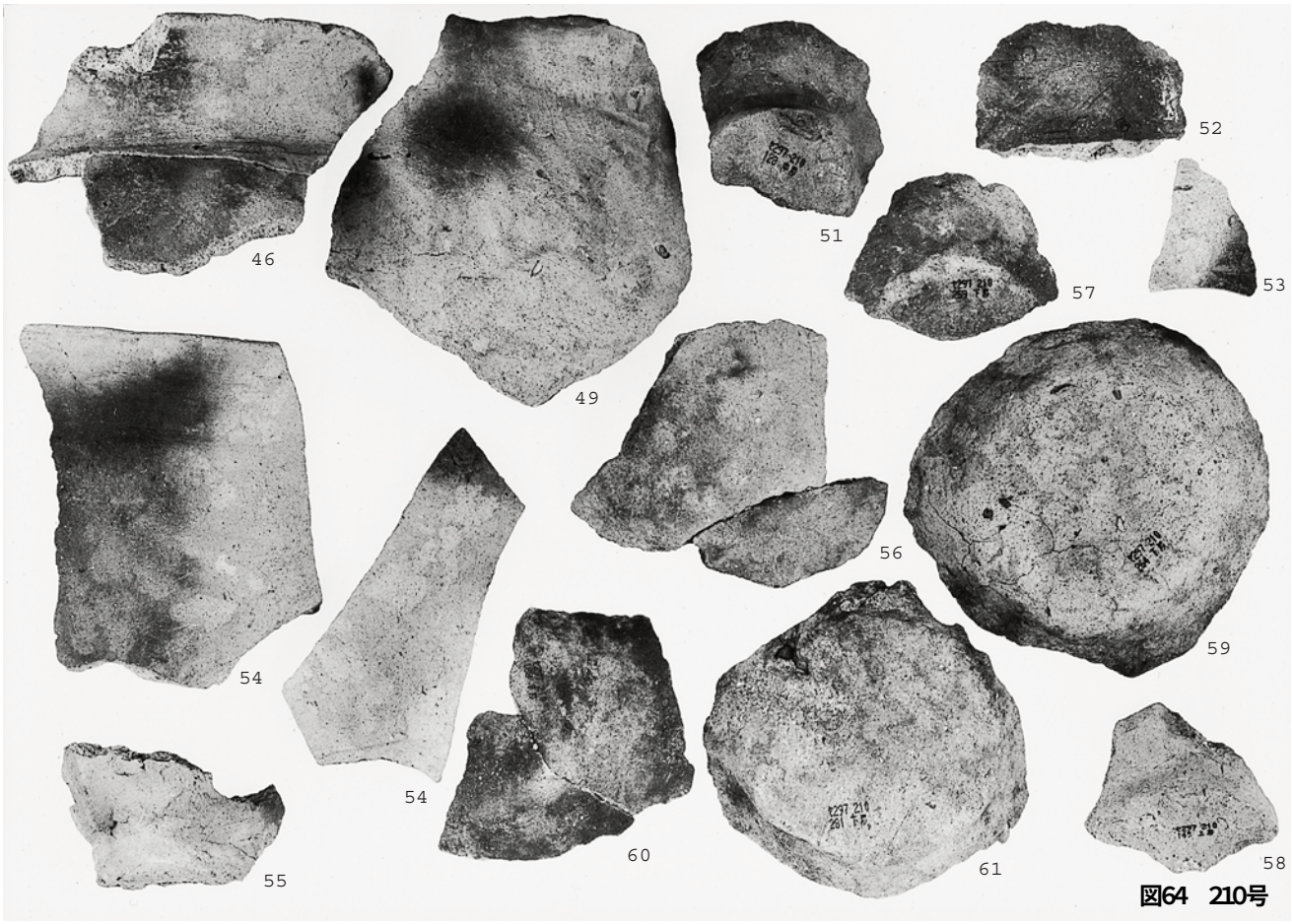
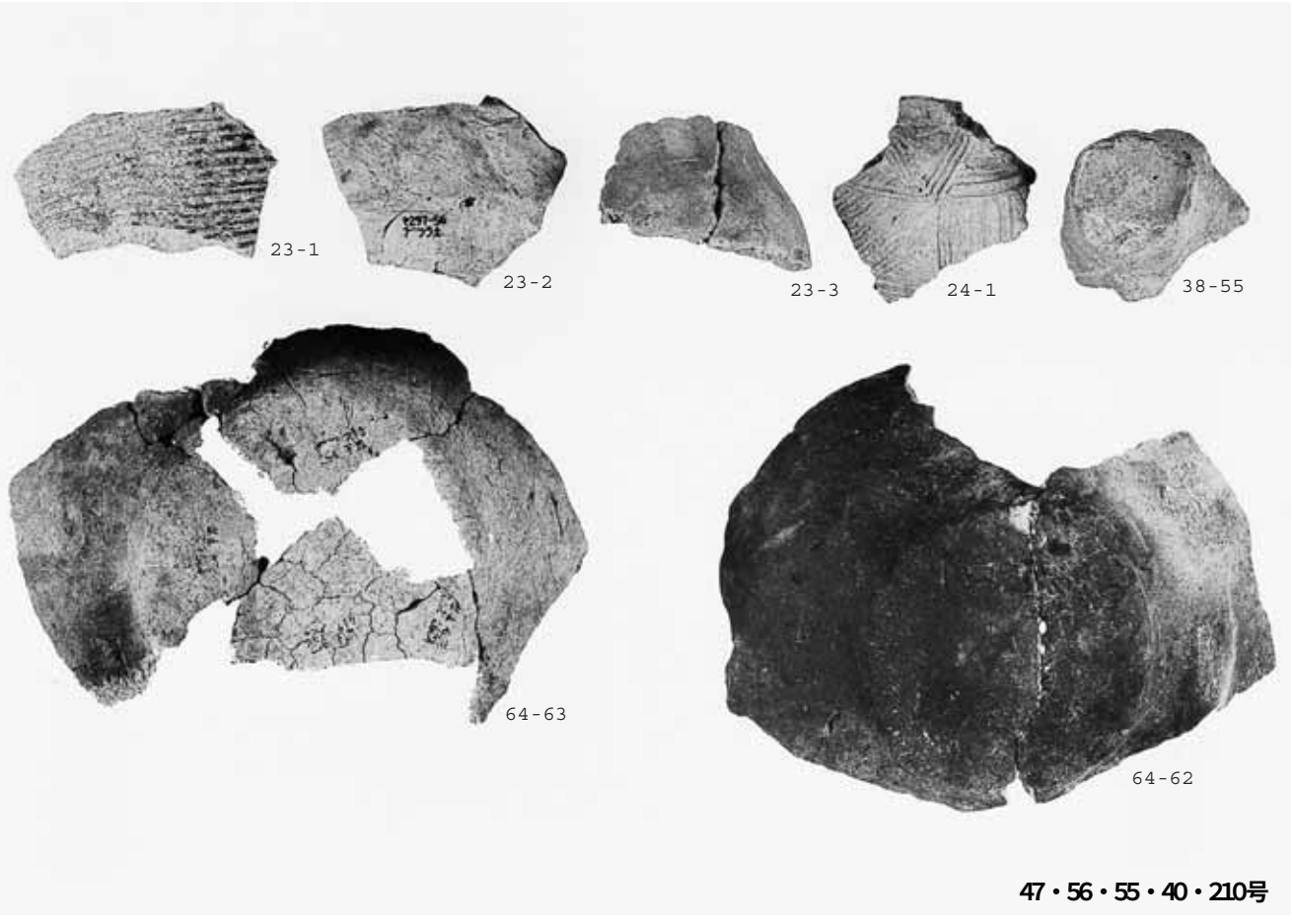


図64　210号



47・56・55・40・210号

図版 72

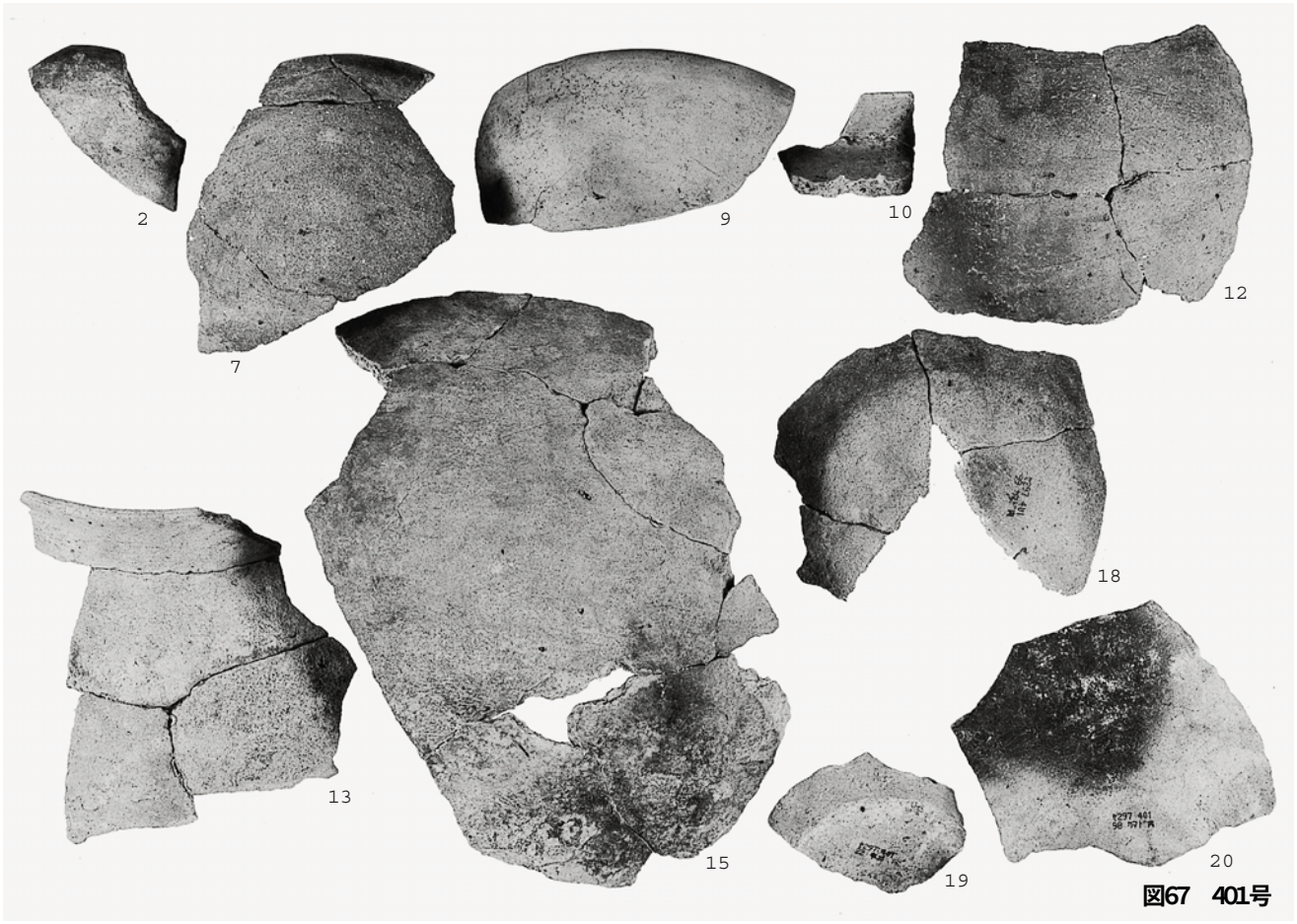


図67　401号

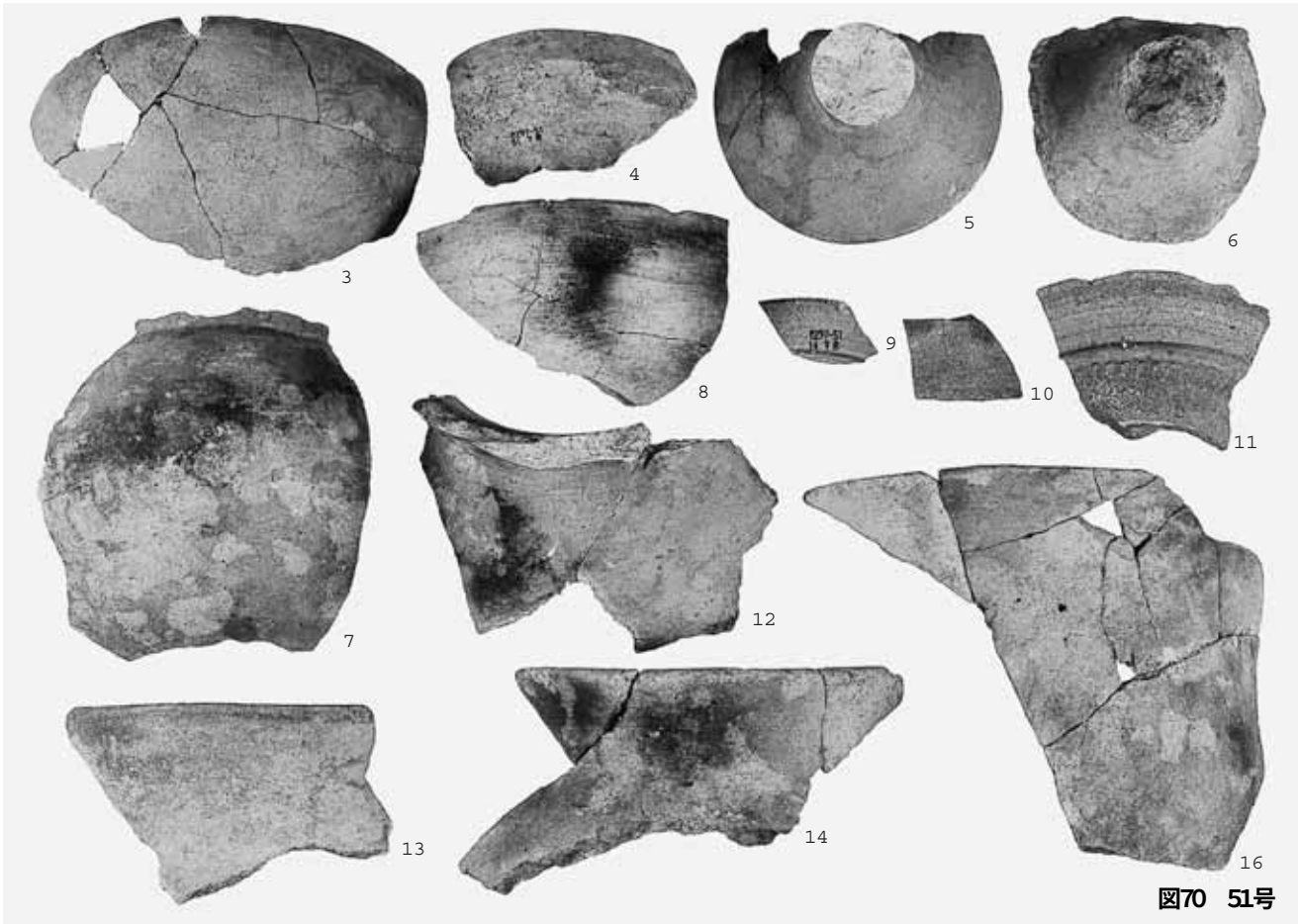
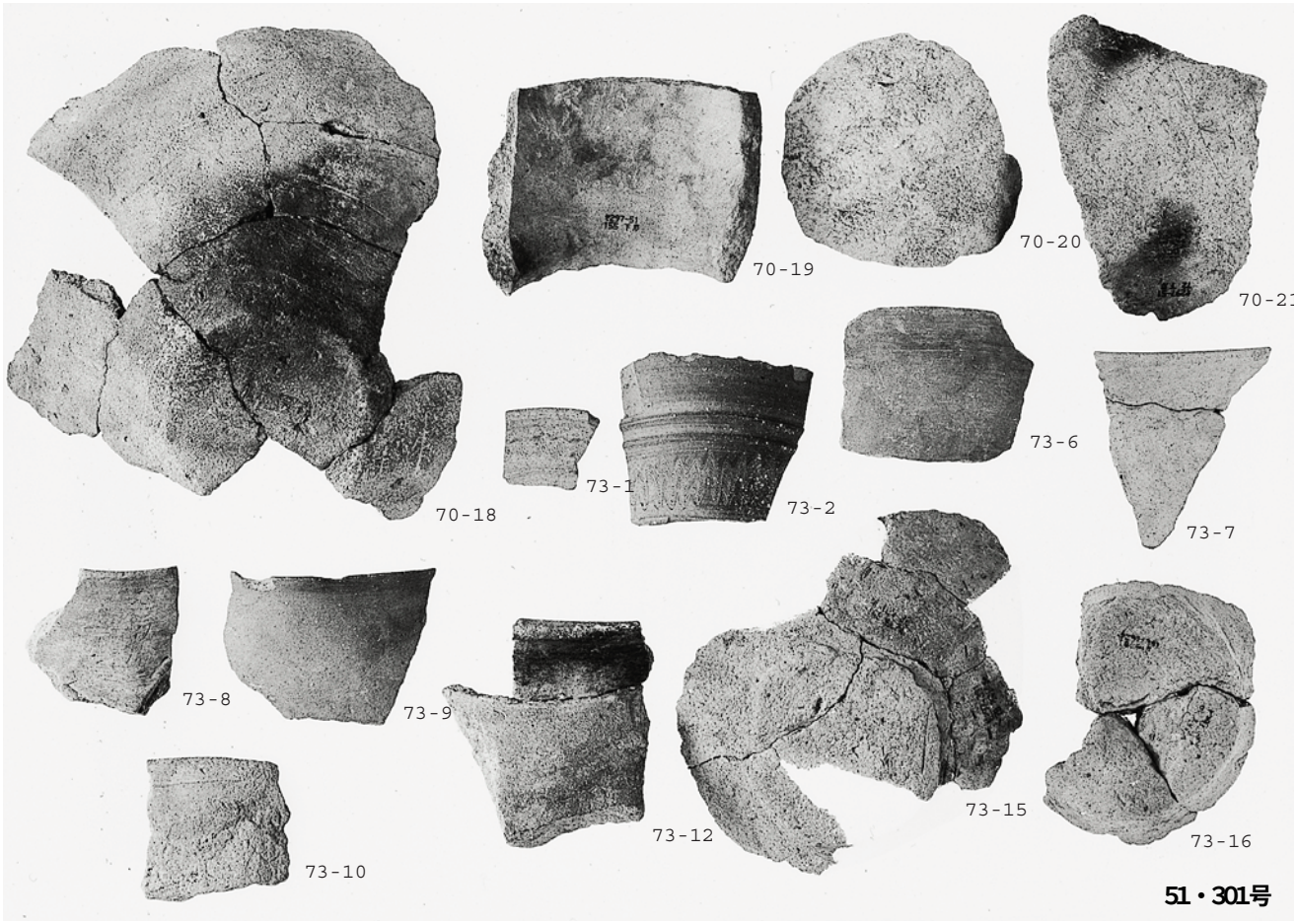


図70　51号



51・301号

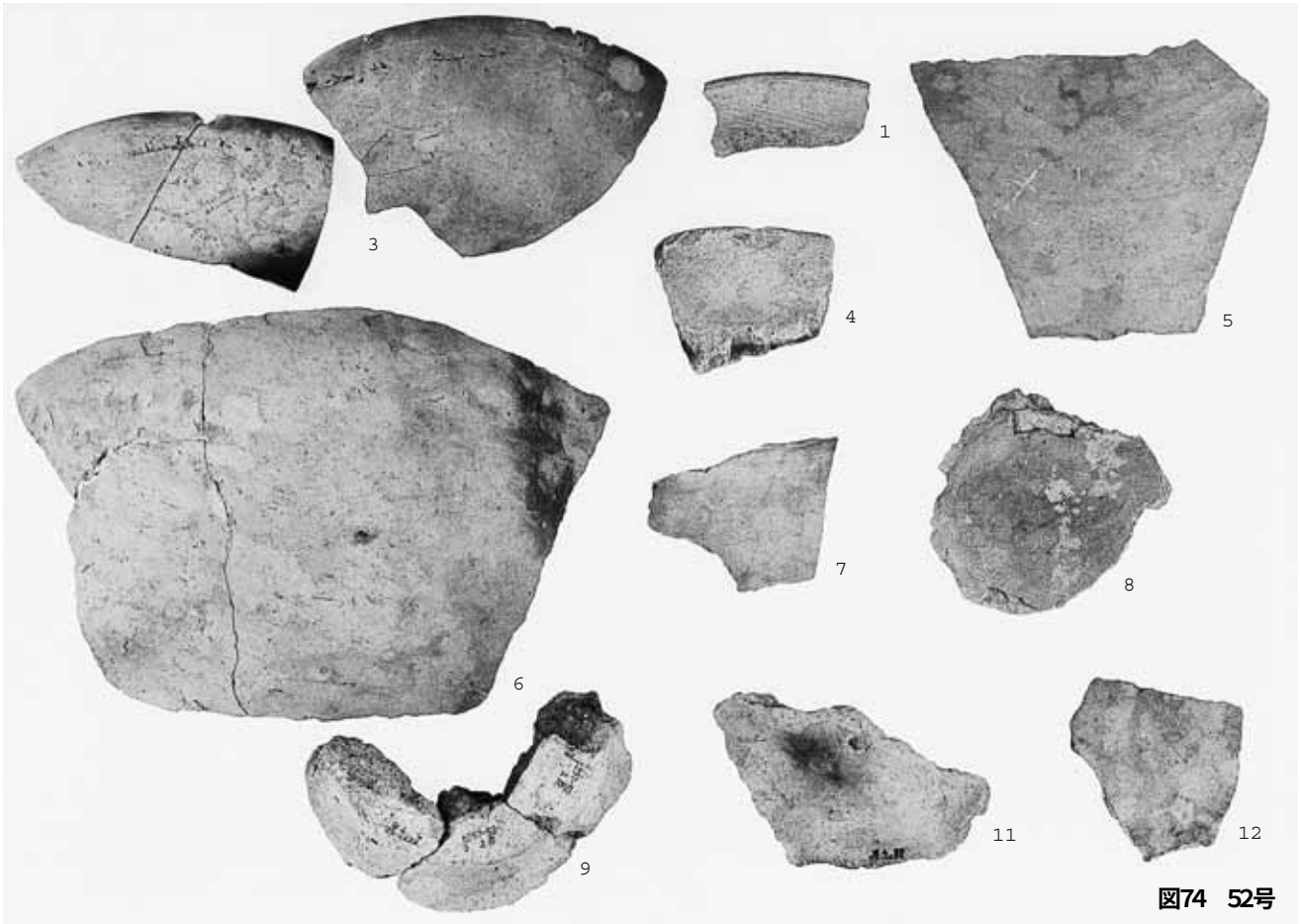
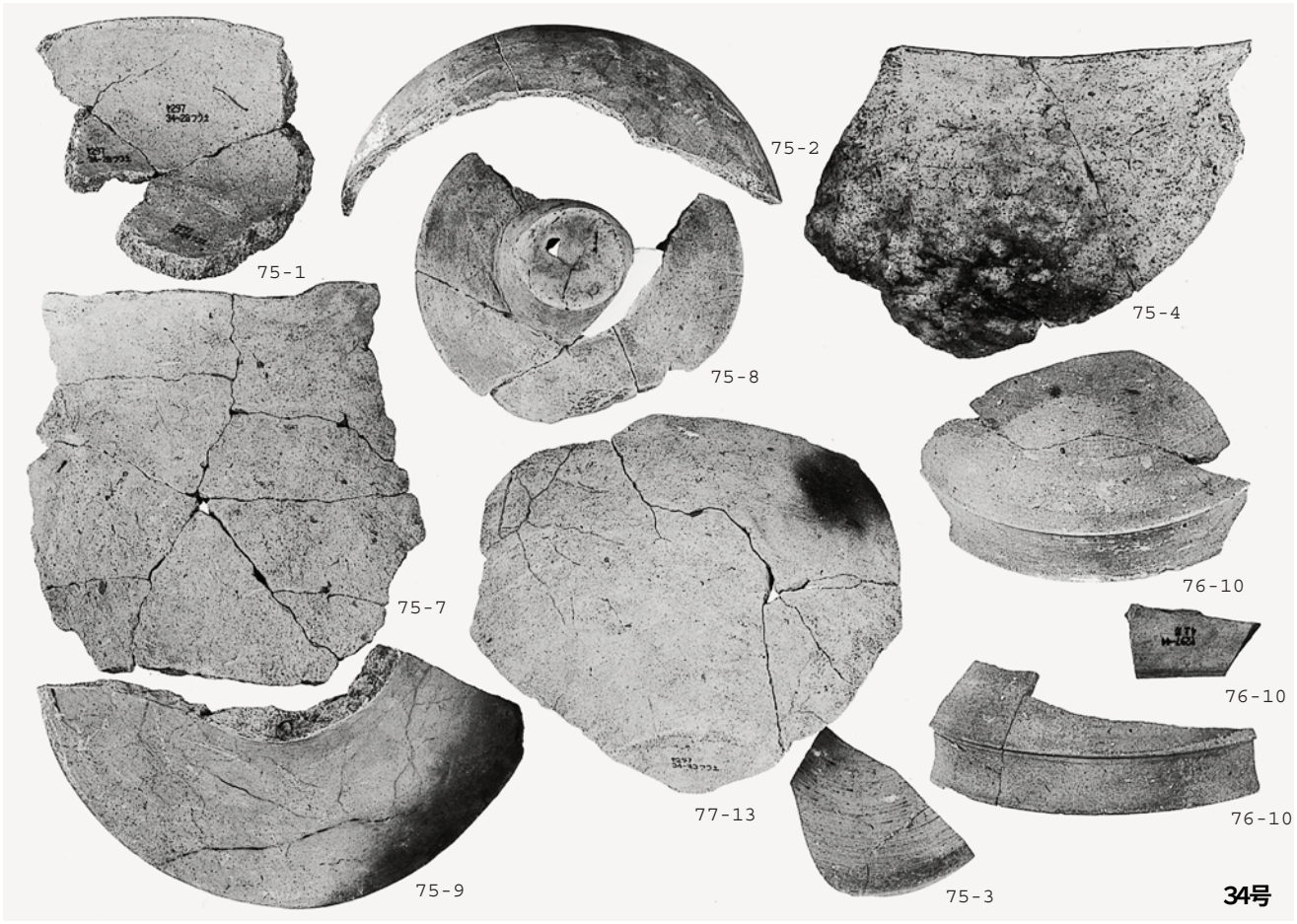
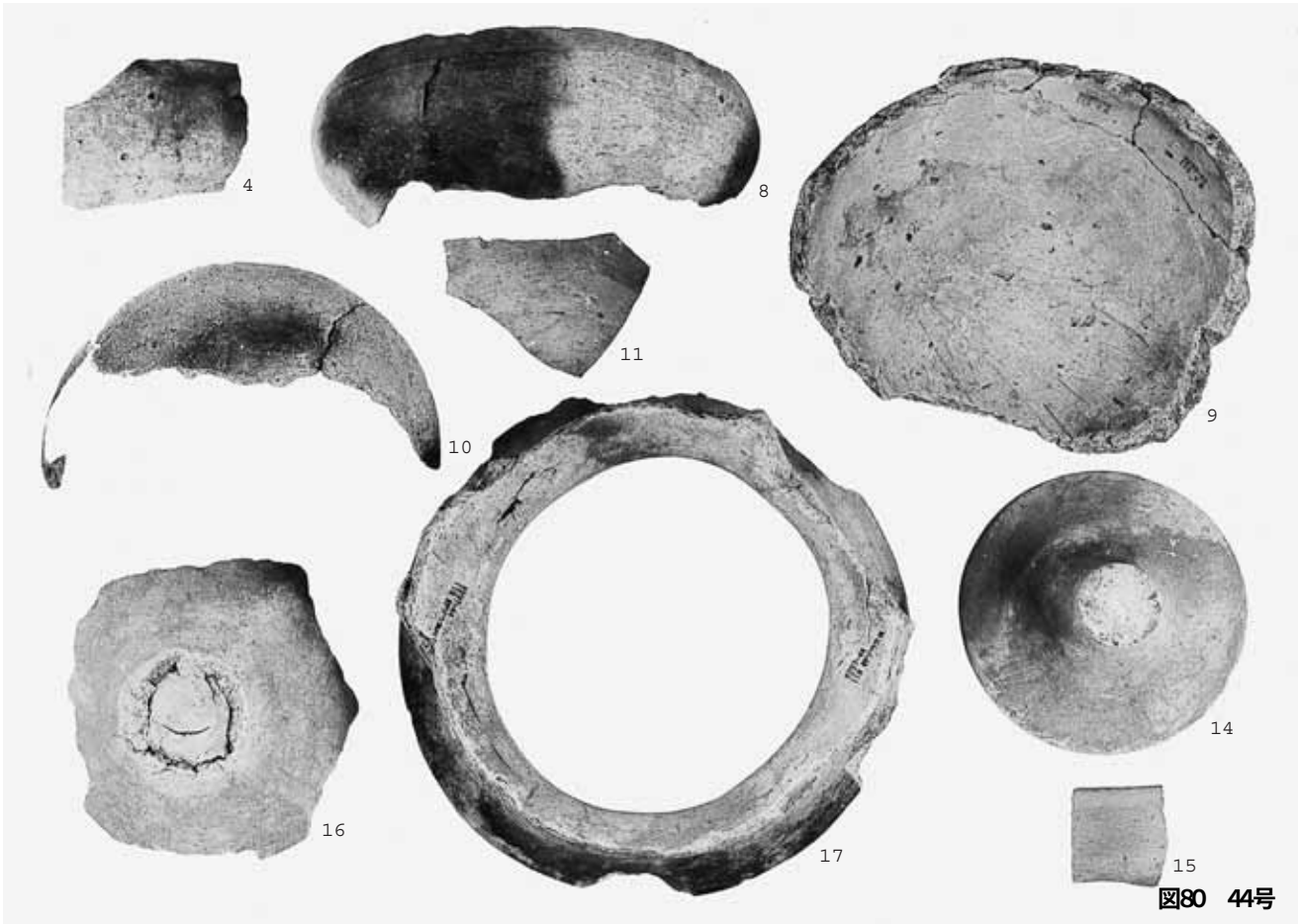


図74　52号

図版 74


75-1
75-2
75-4
75-8
75-7
76-10
76-10
76-10
77-13
75-9
75-3
34号


4
8
11
9
10
14
16
17
15
図80 44号

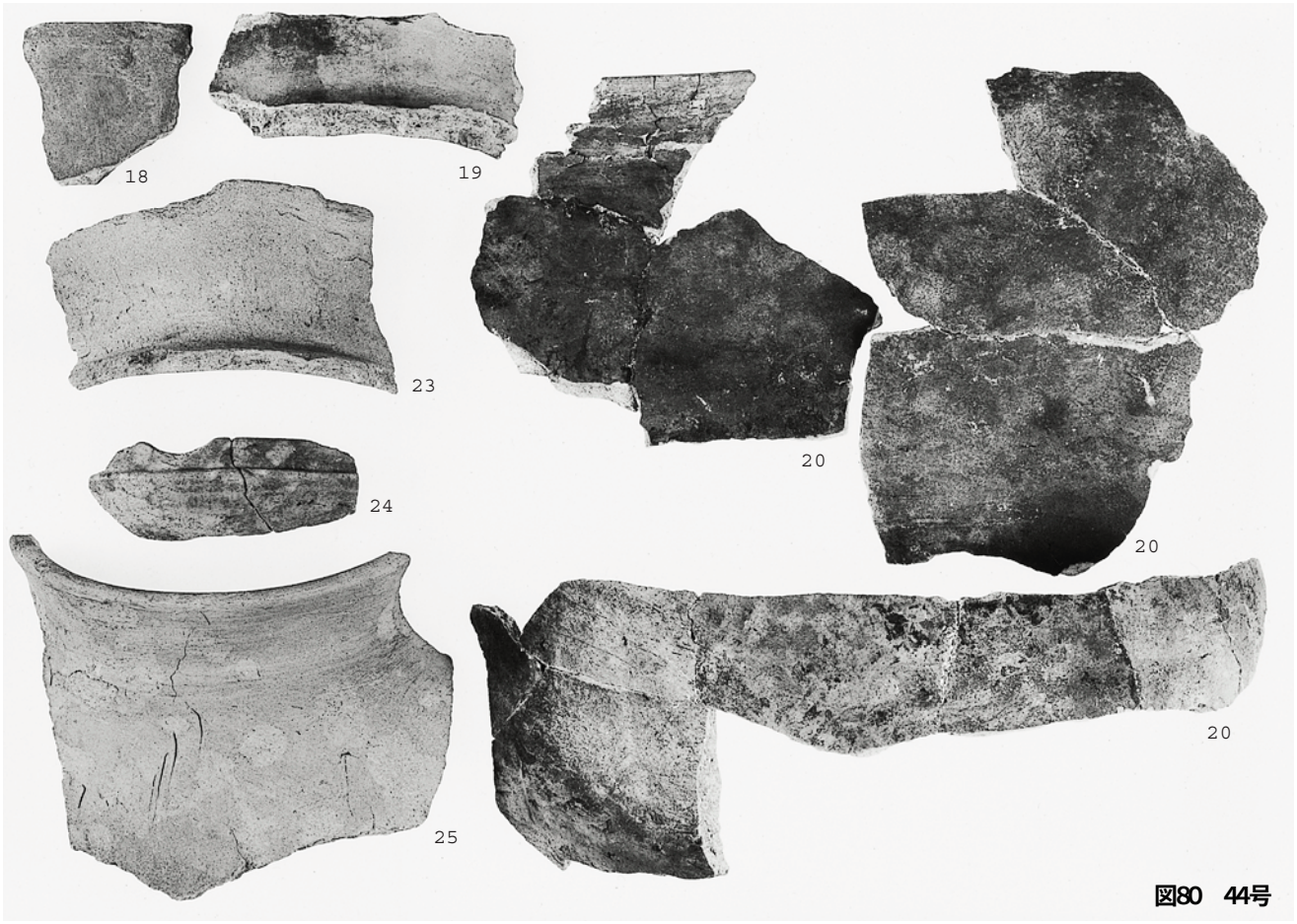


図80　44号

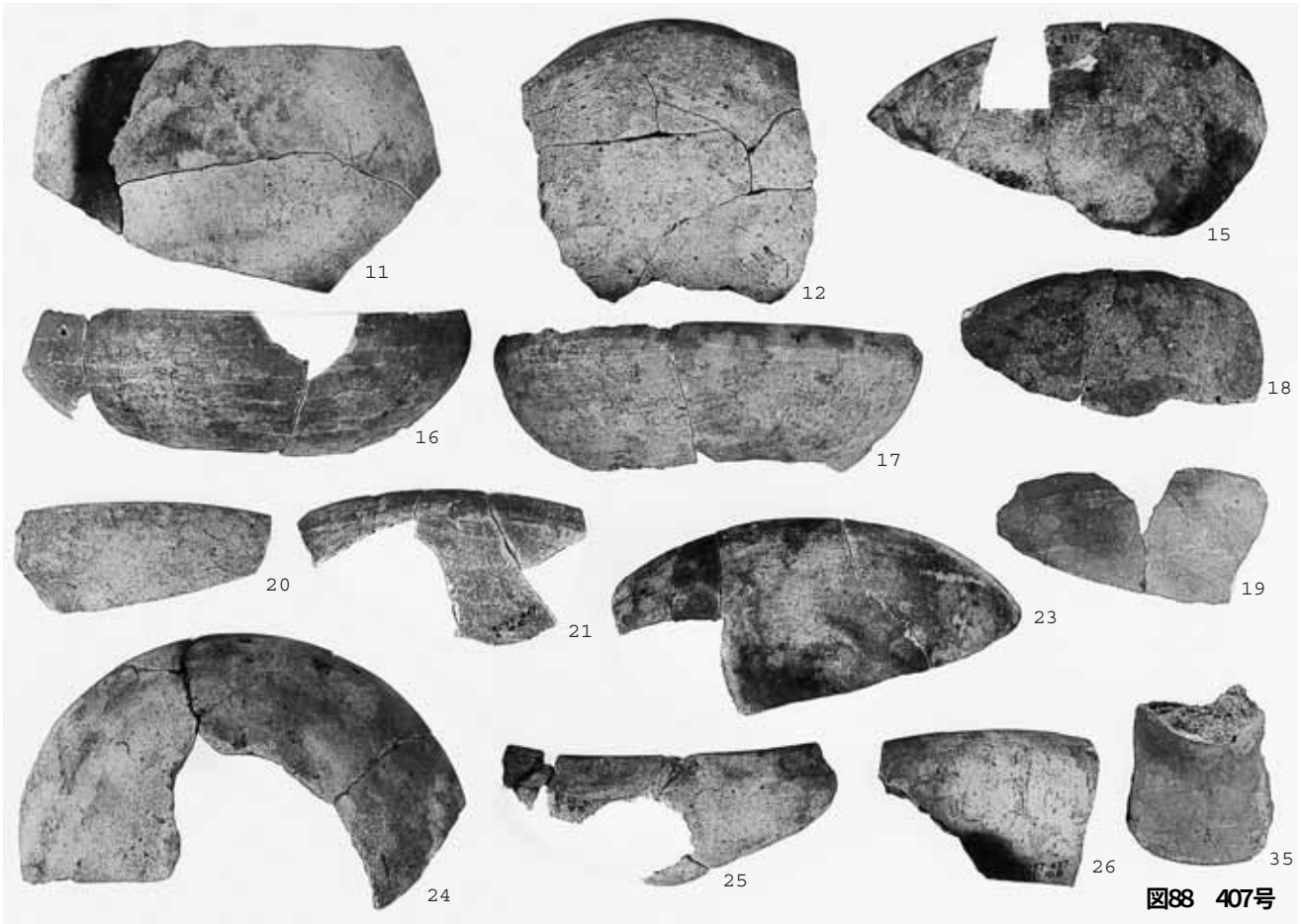
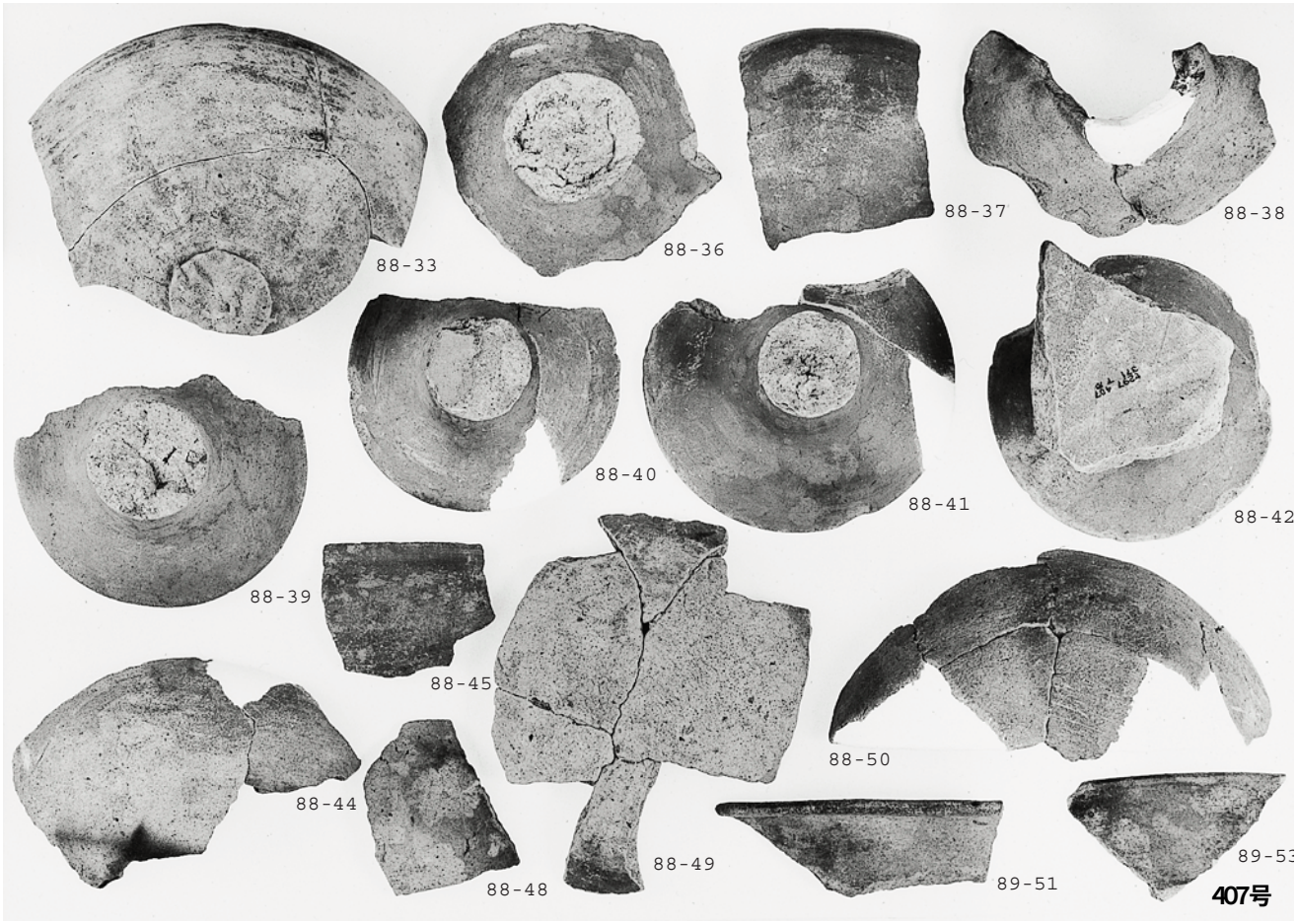
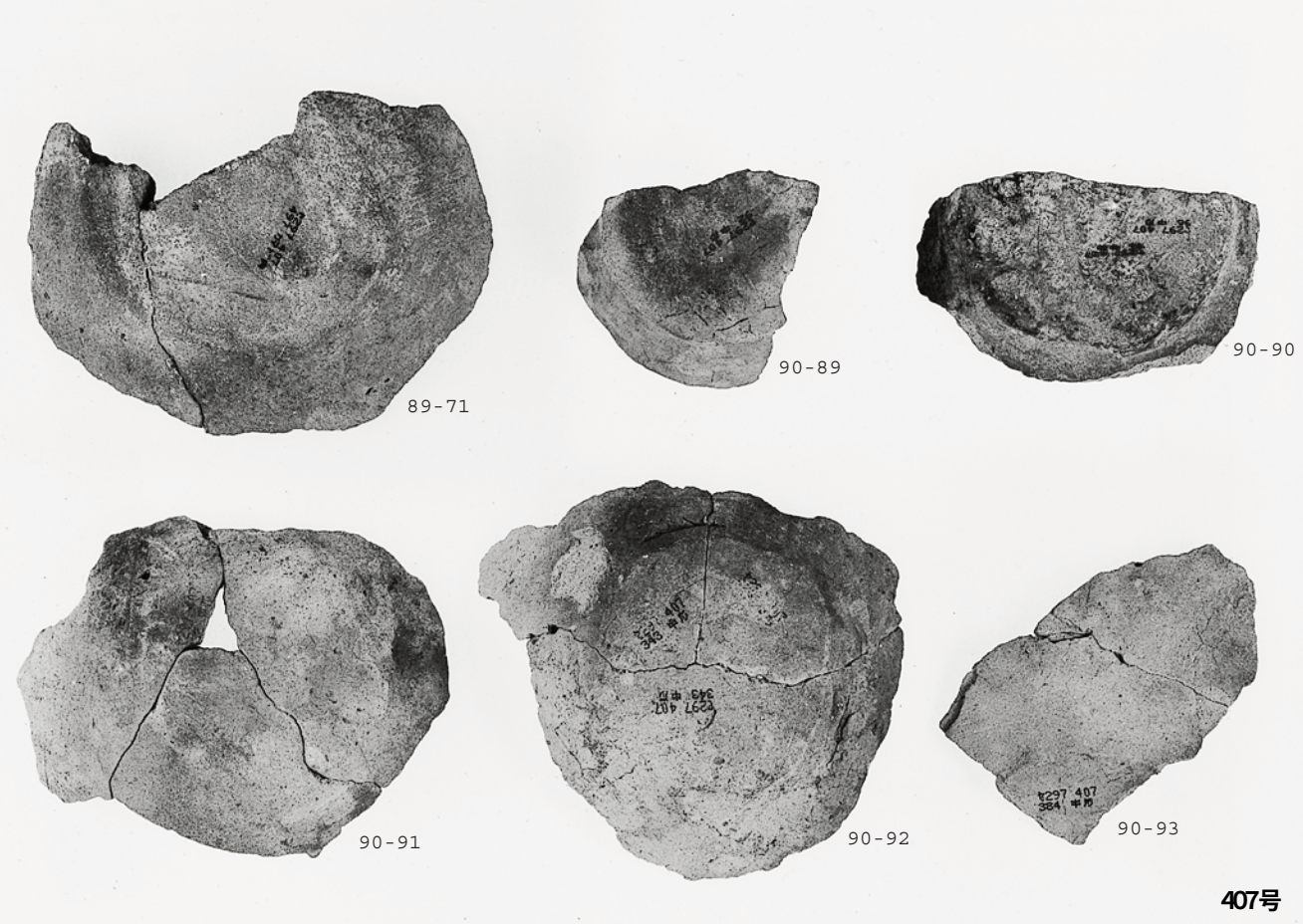


図88　407号



407号

図89　407号



407号

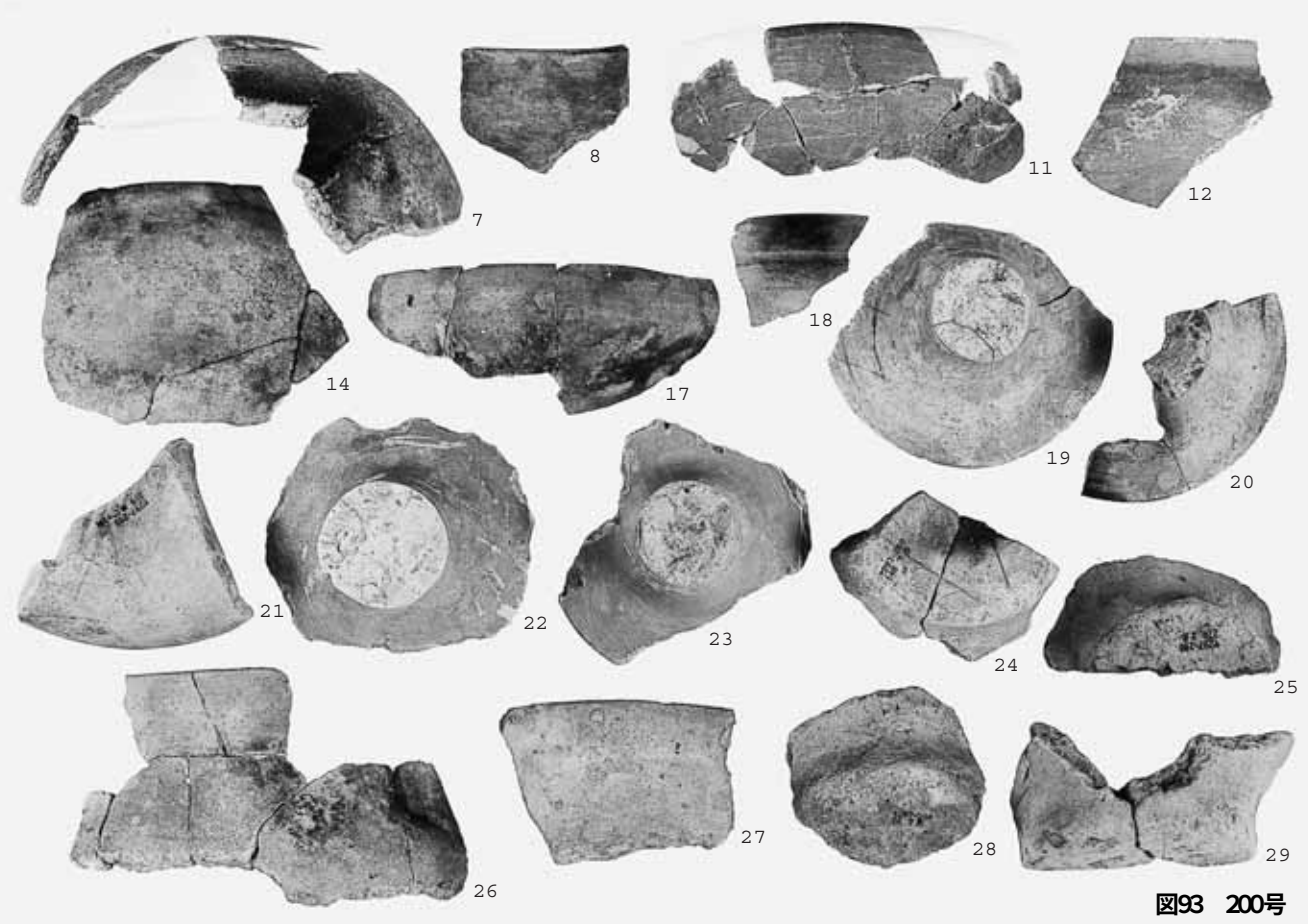
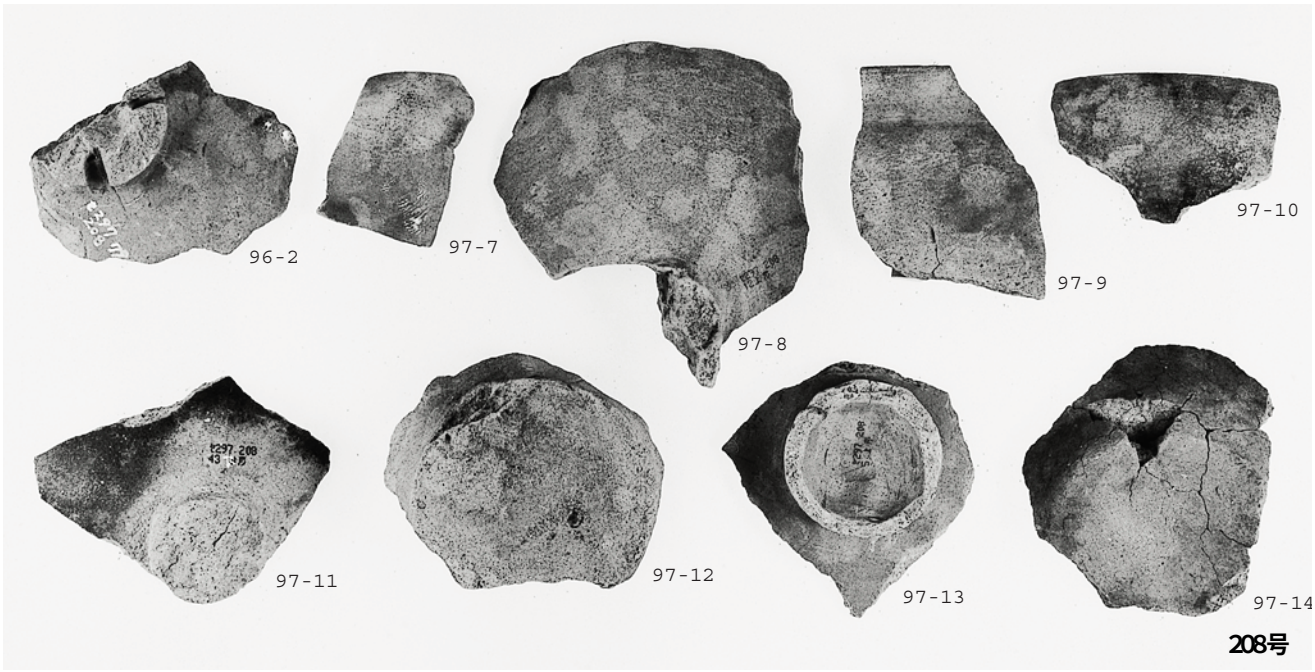


図93　200号

図版 78



208号

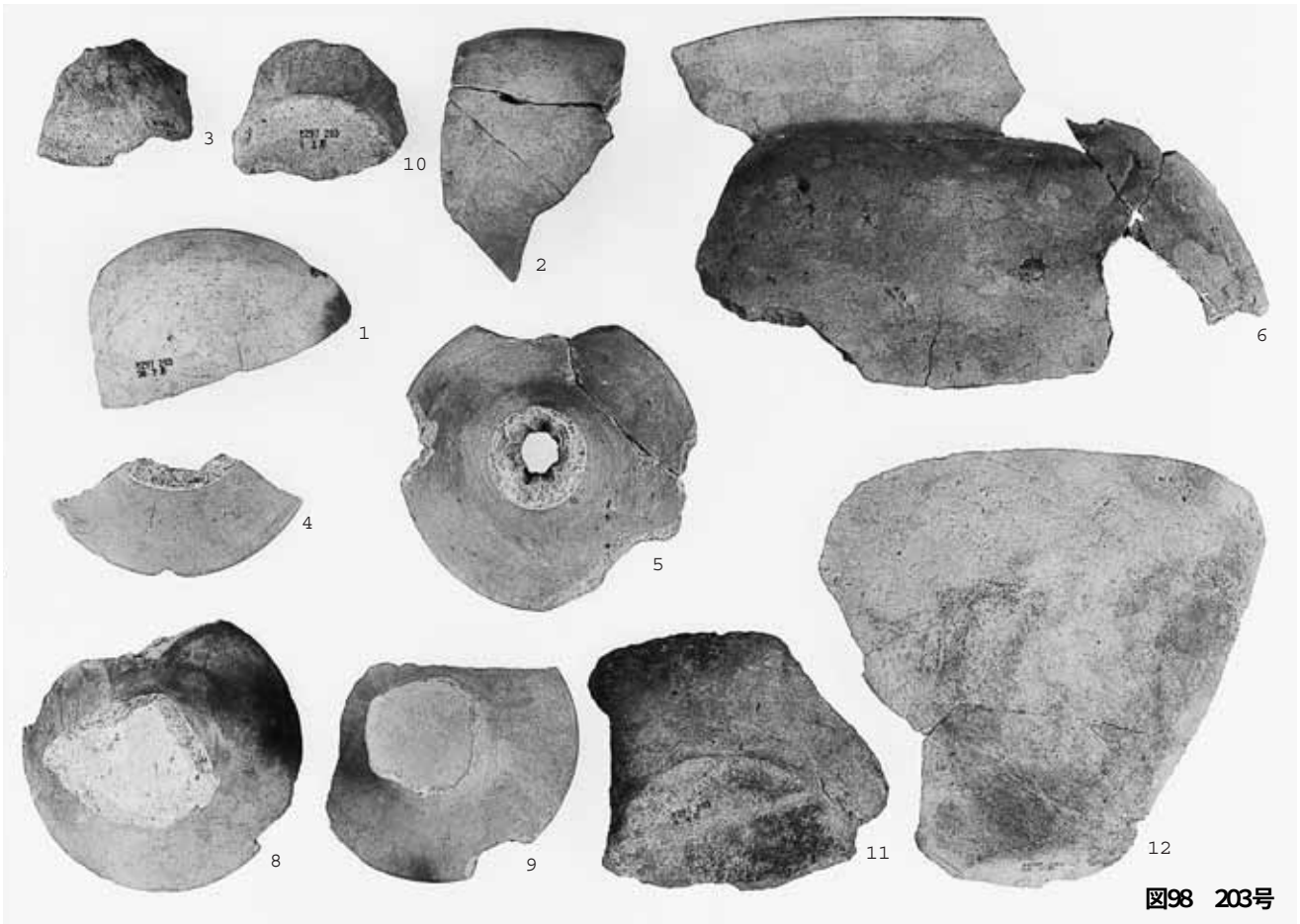


図98　203号

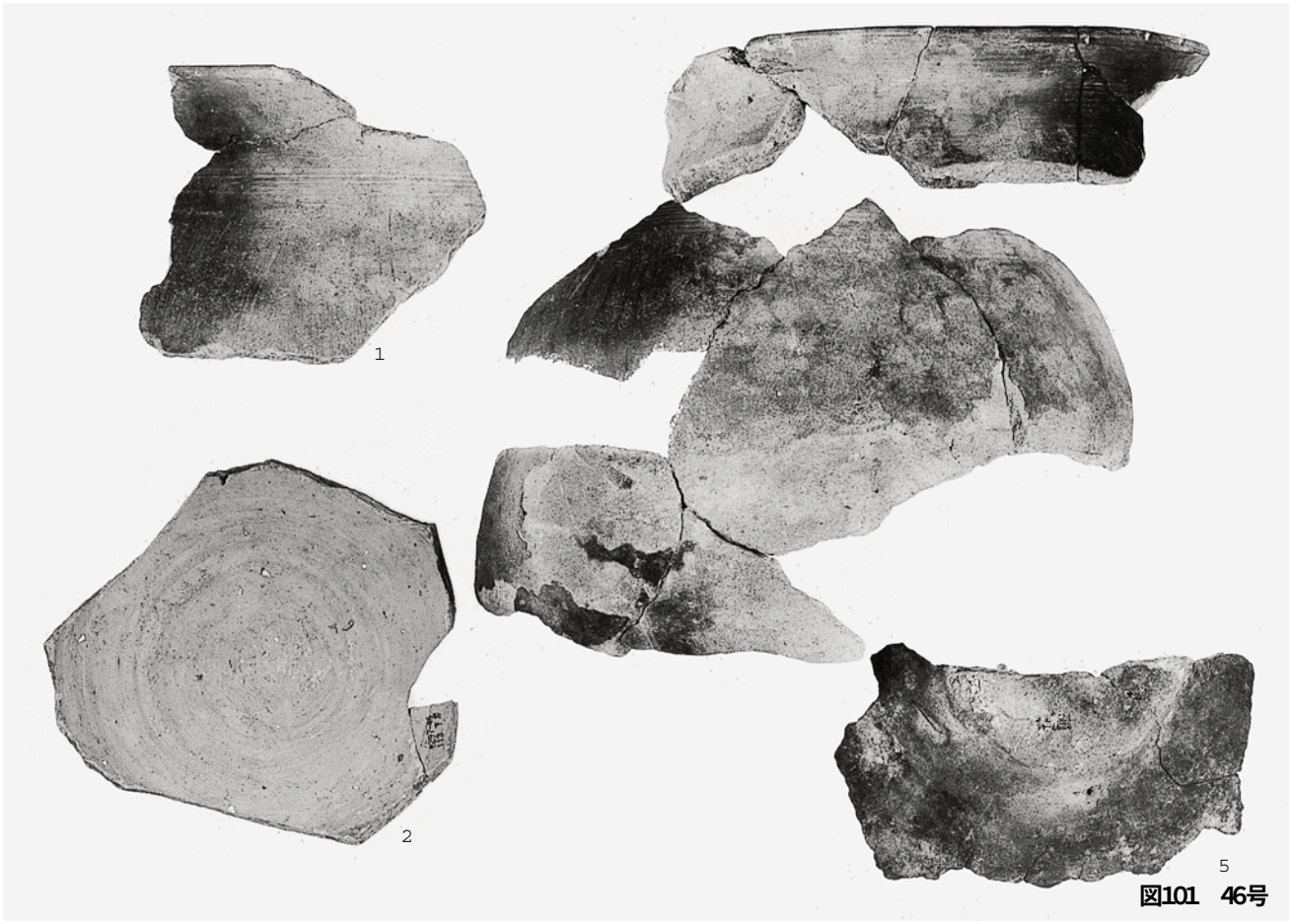


図101　46号

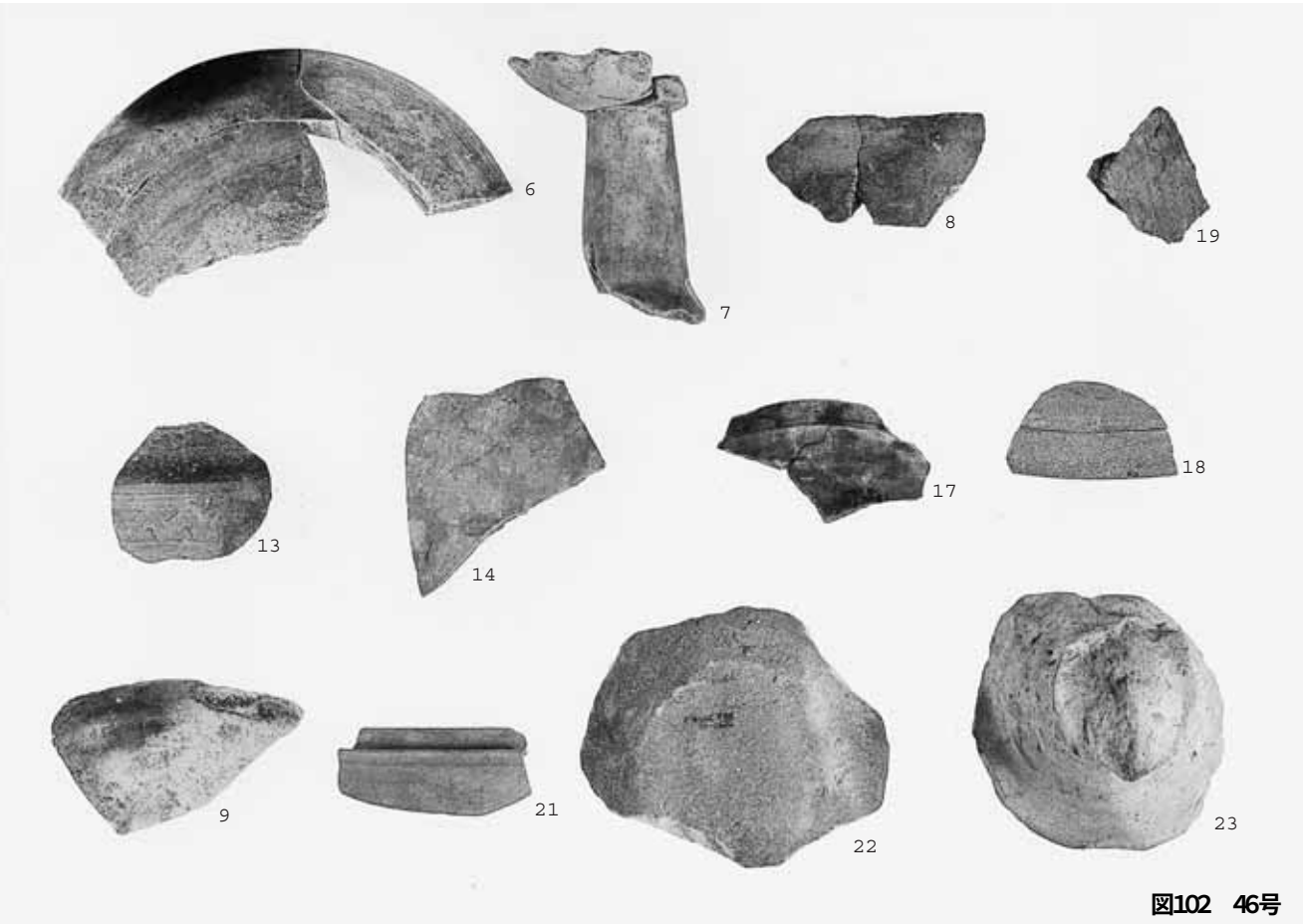
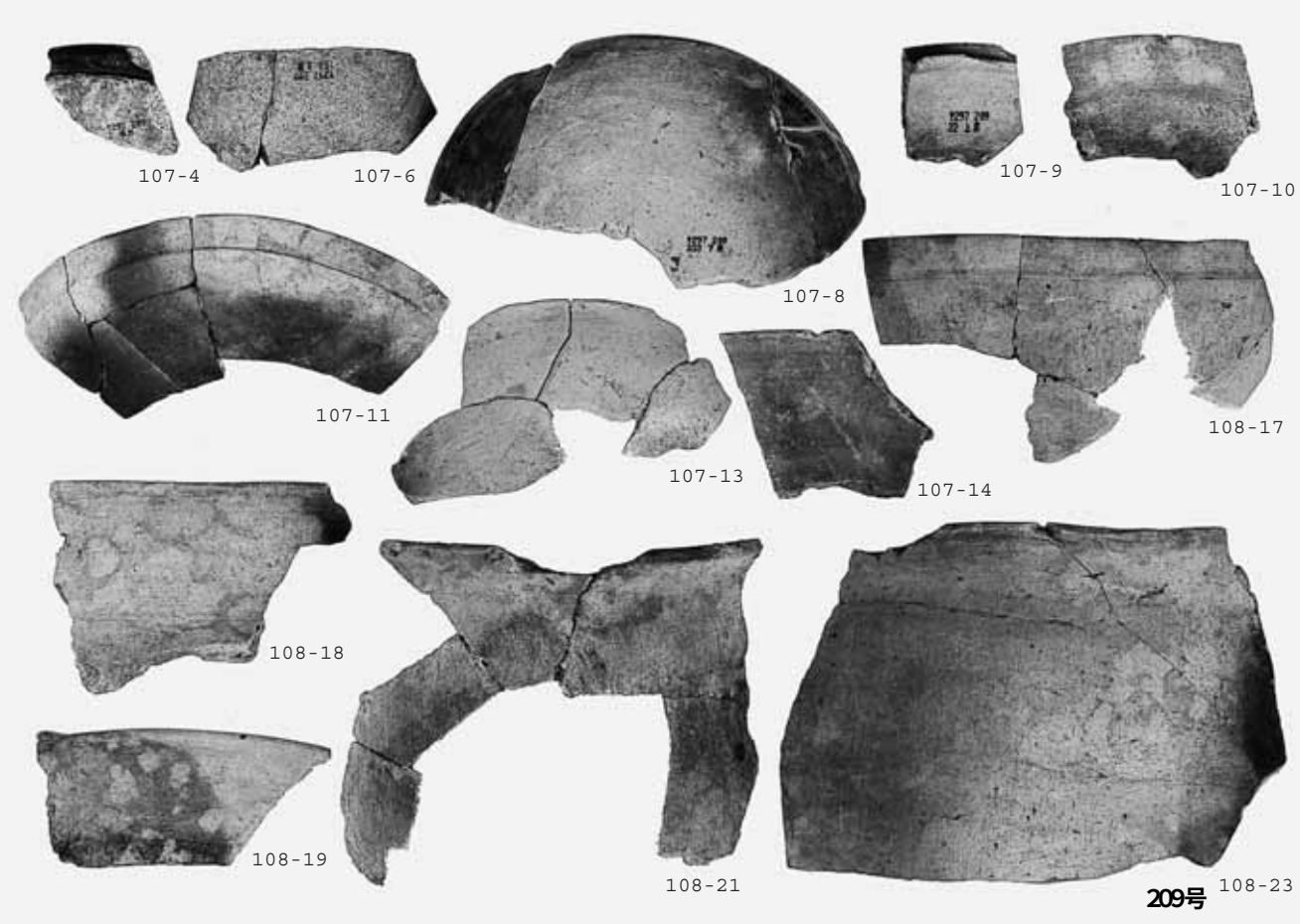


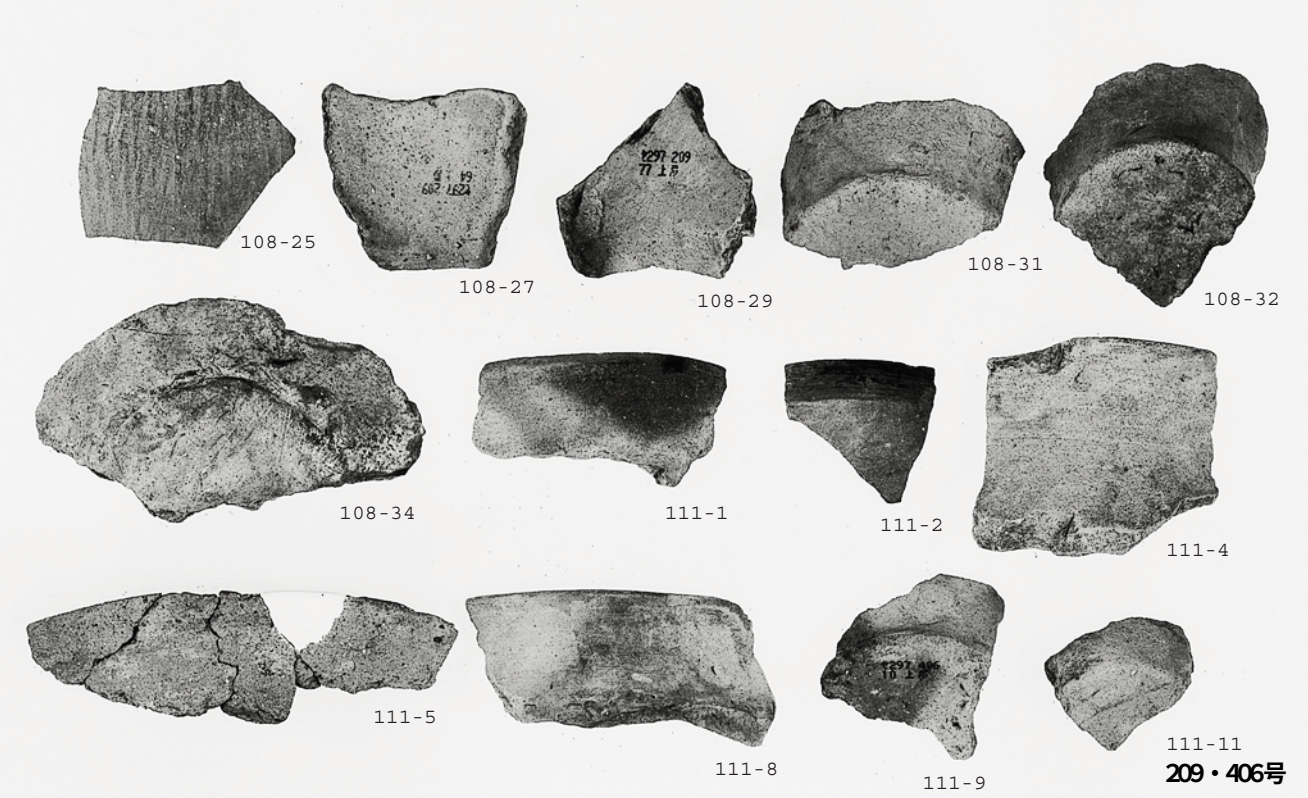
図102　46号

図版 80

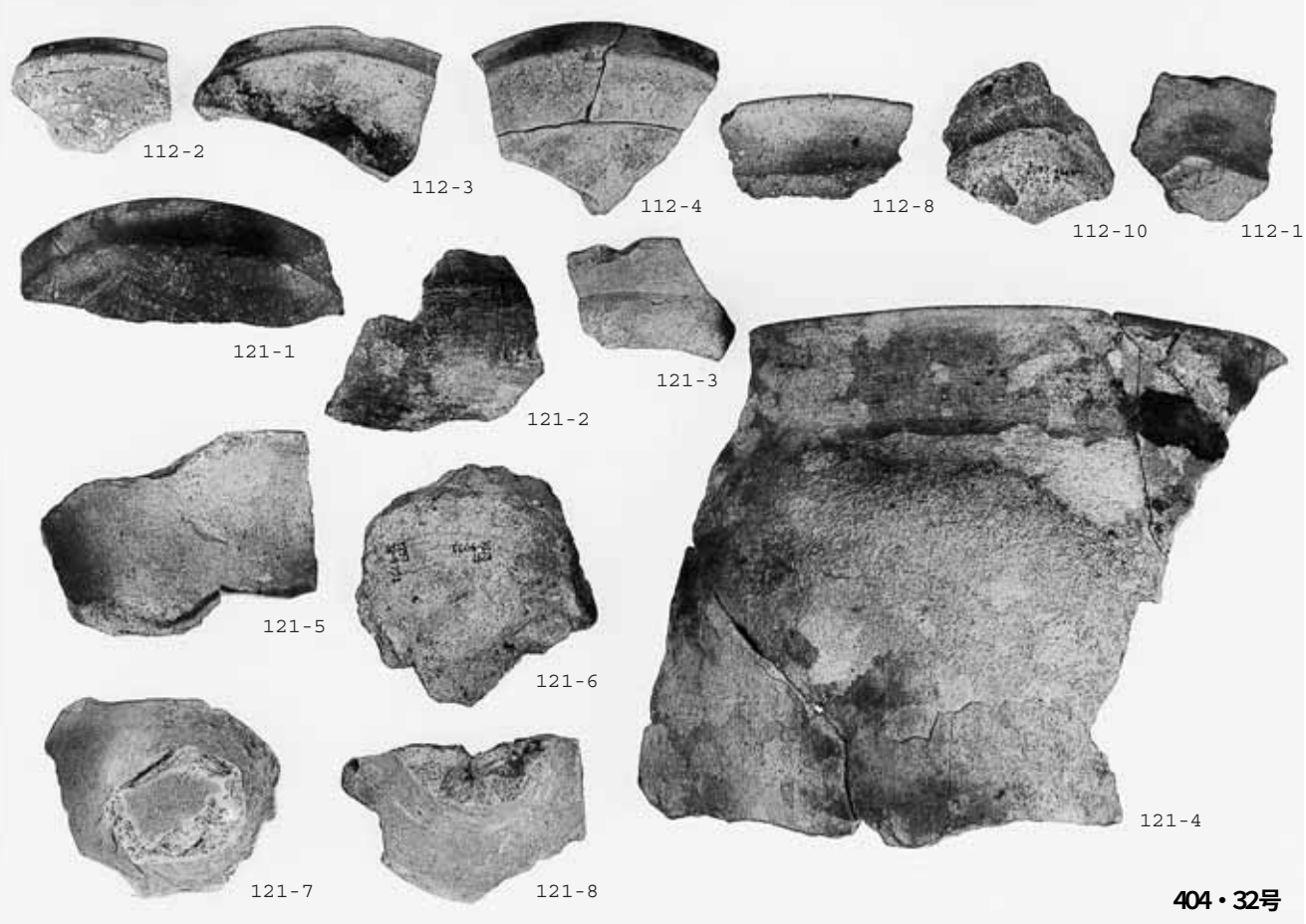
図103　411・415号



209号



209・406号



404・32号

図版 82

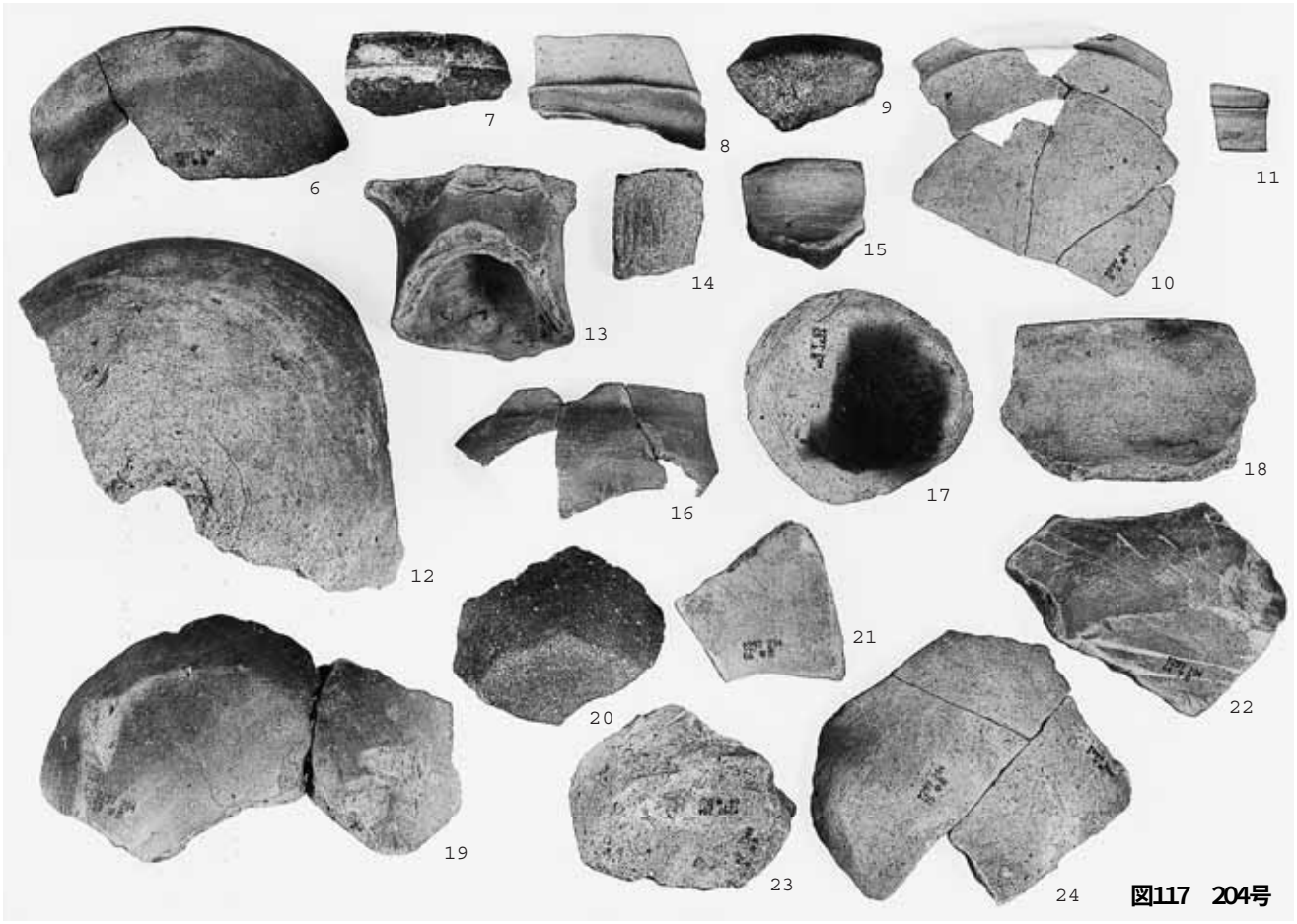
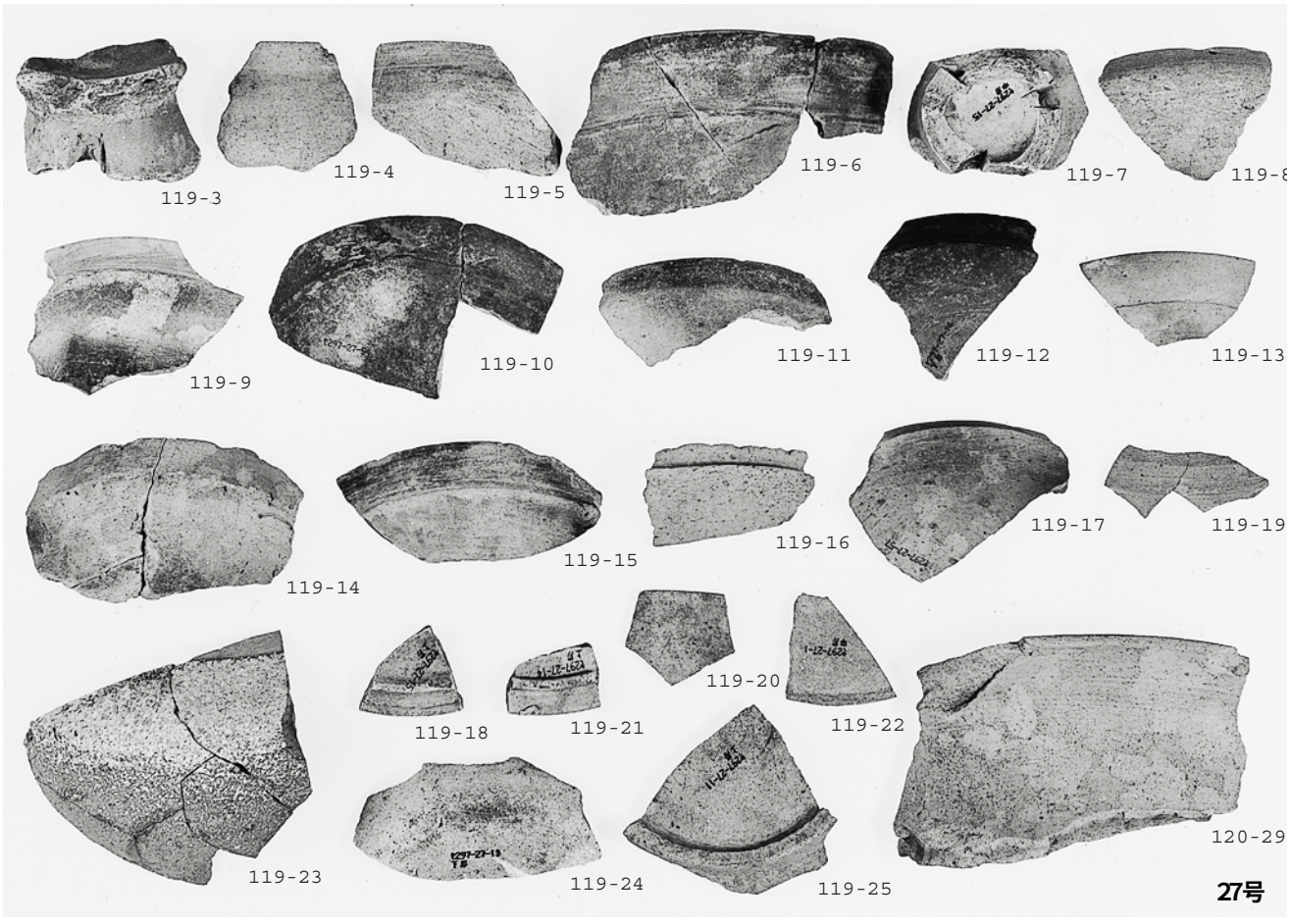
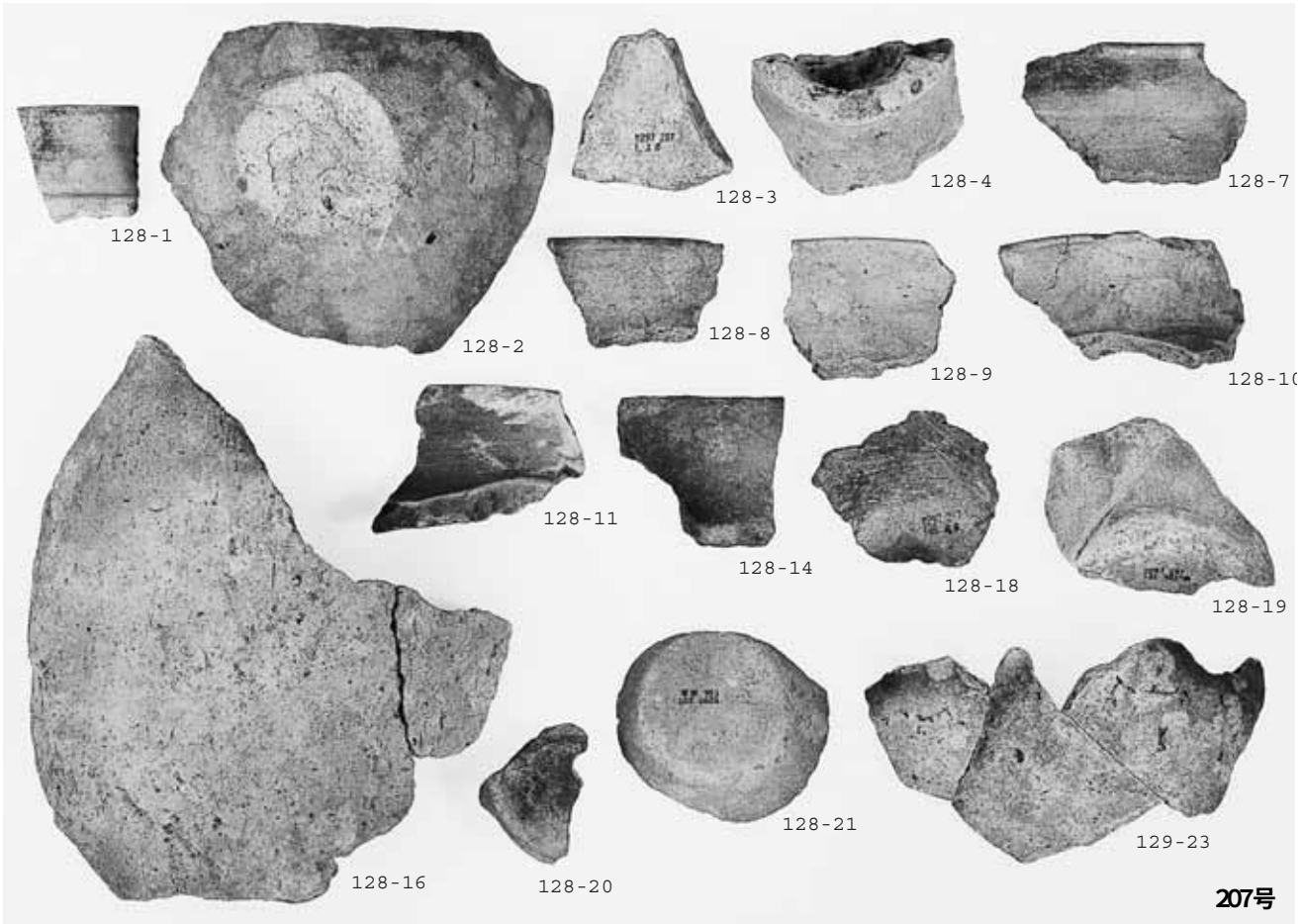


図117　204号



27号

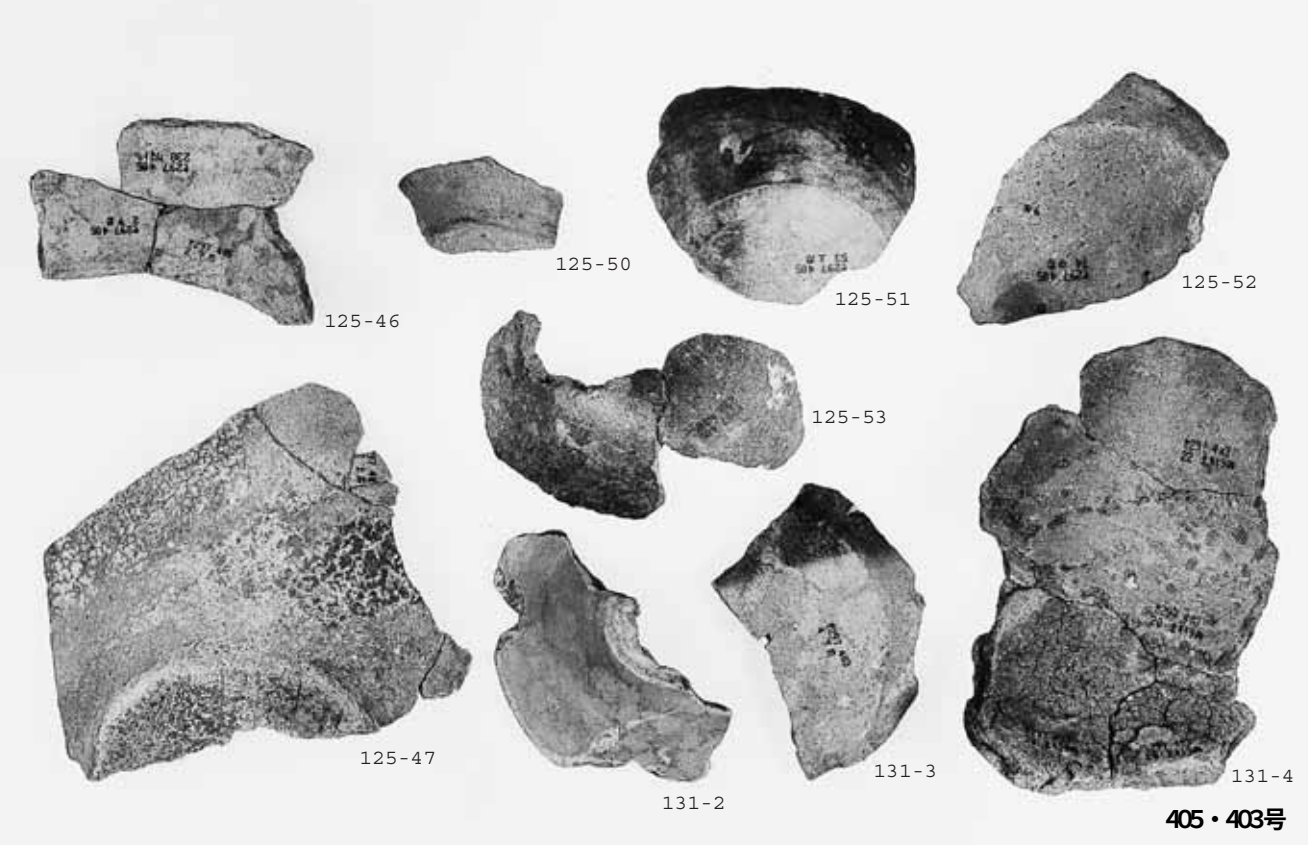
図120　27号



207号

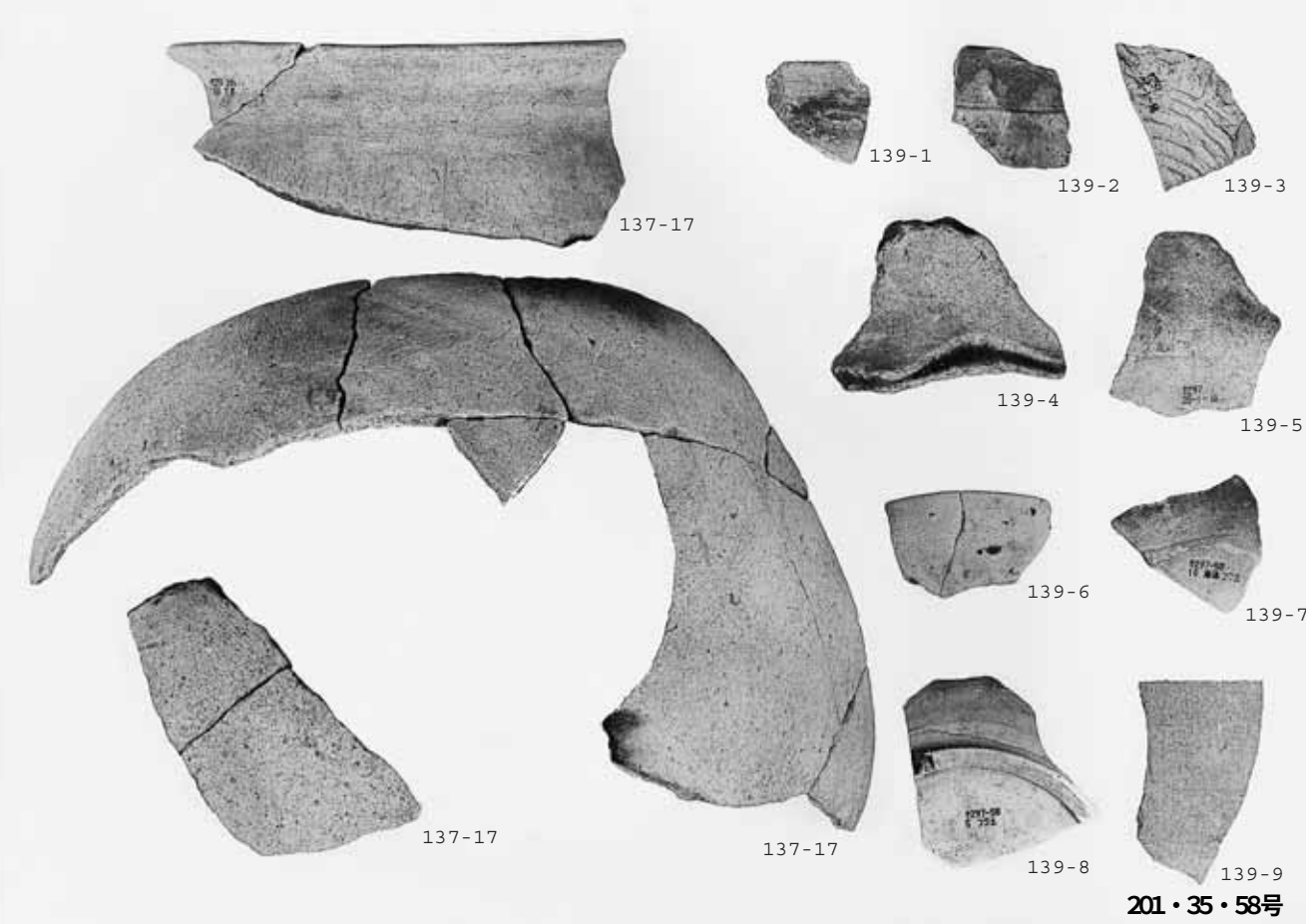
図版 84

図125　405号



405・403号

図132　21号



201・35・58号

図版 86

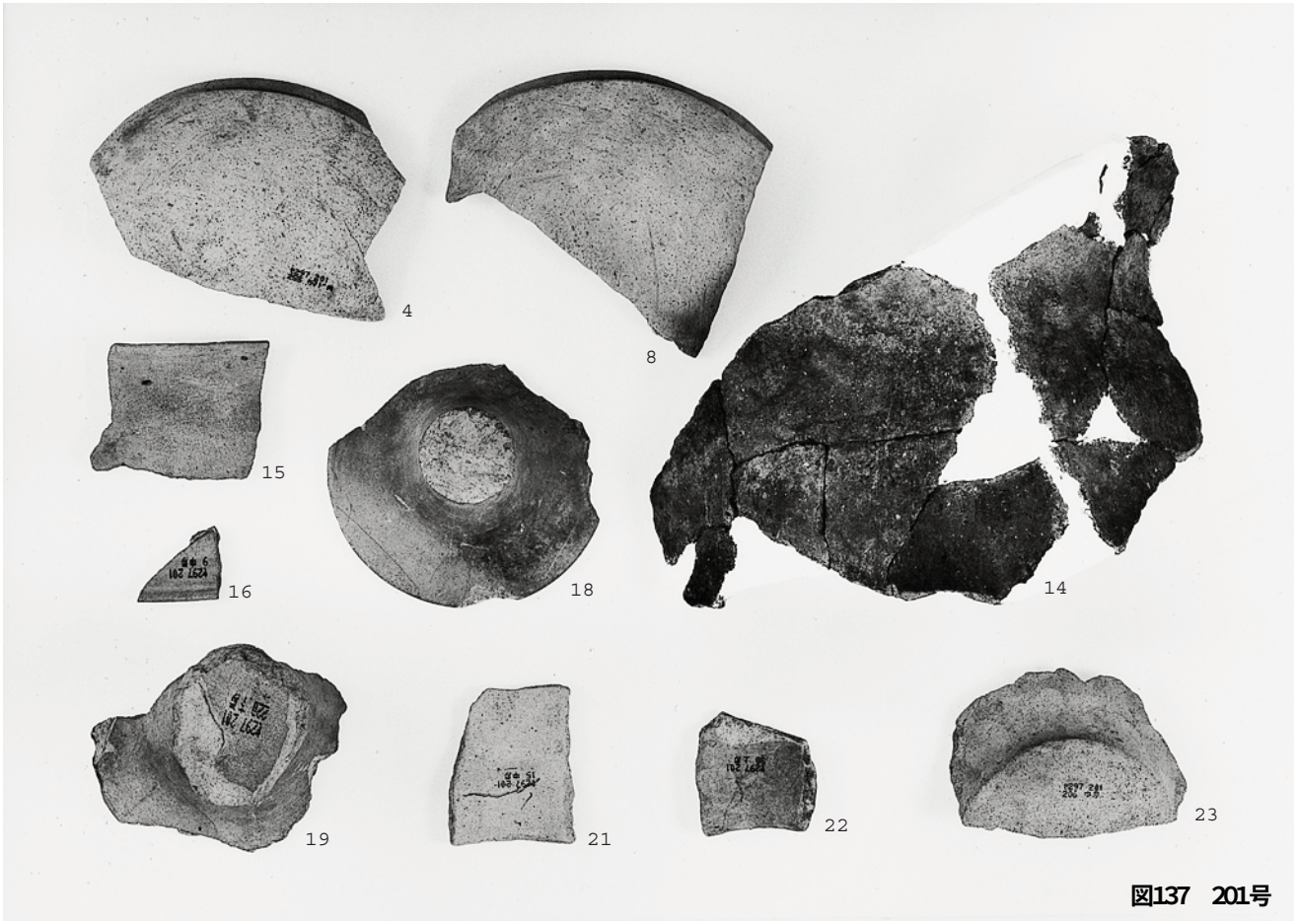


図137　201号

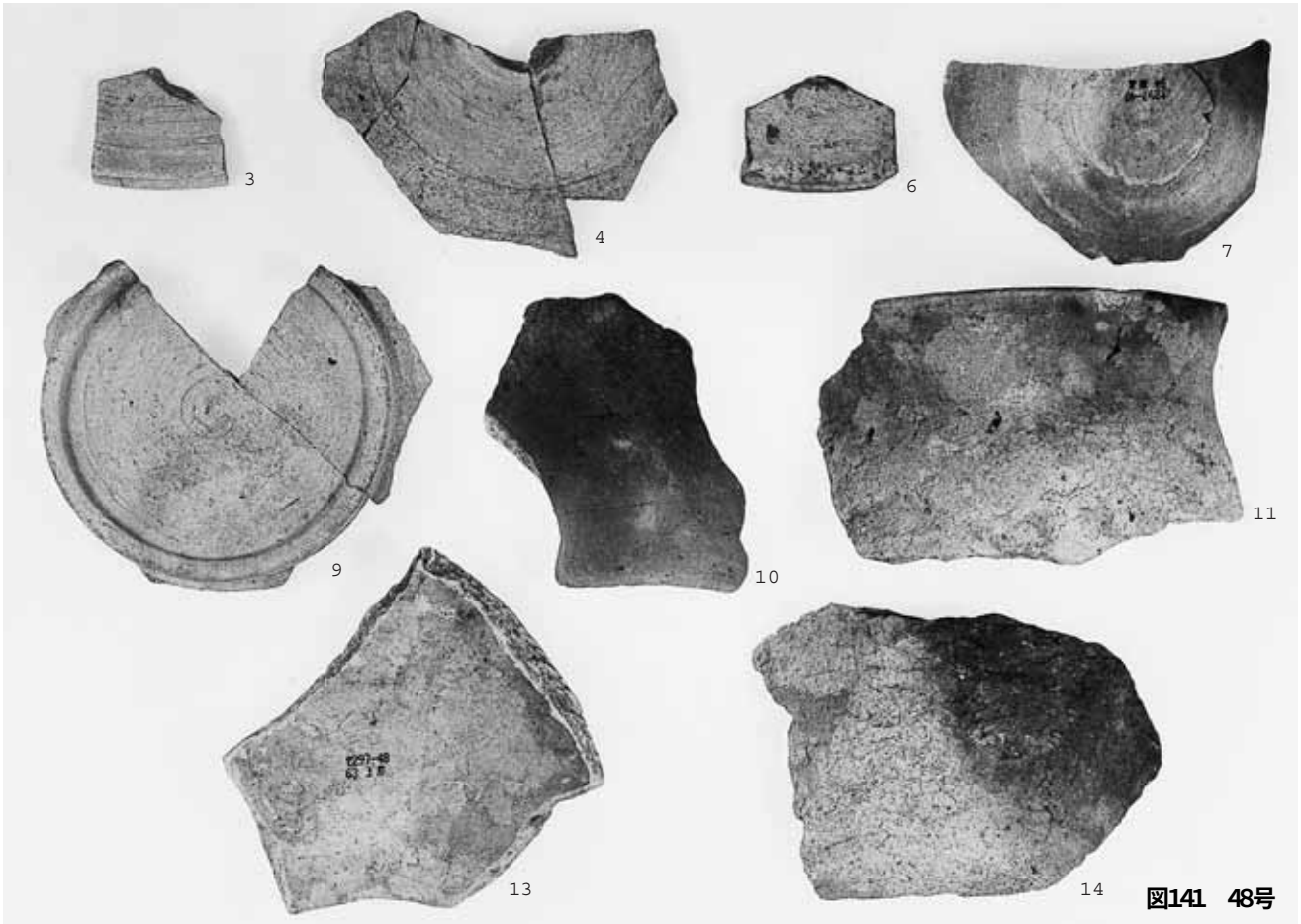
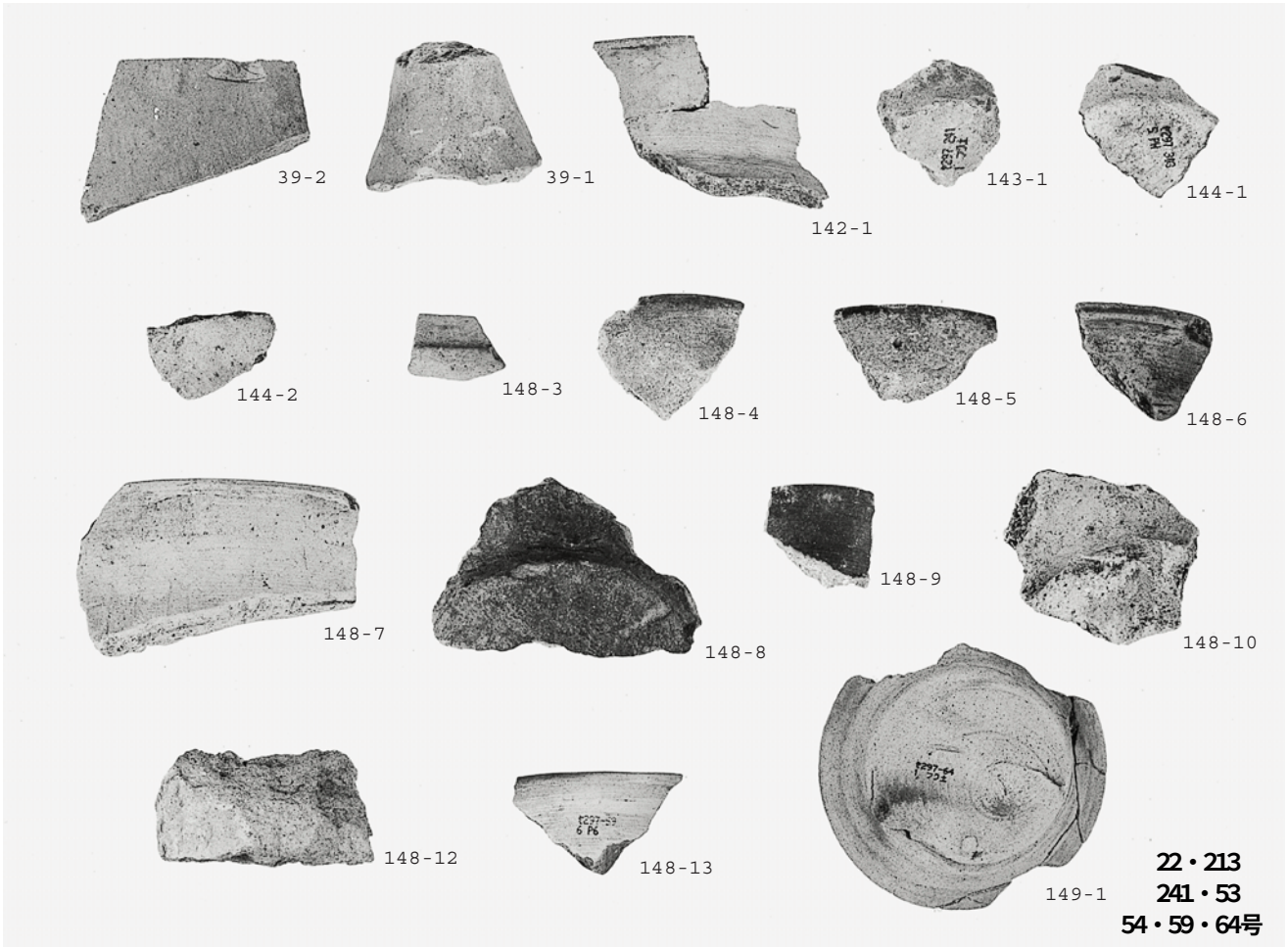
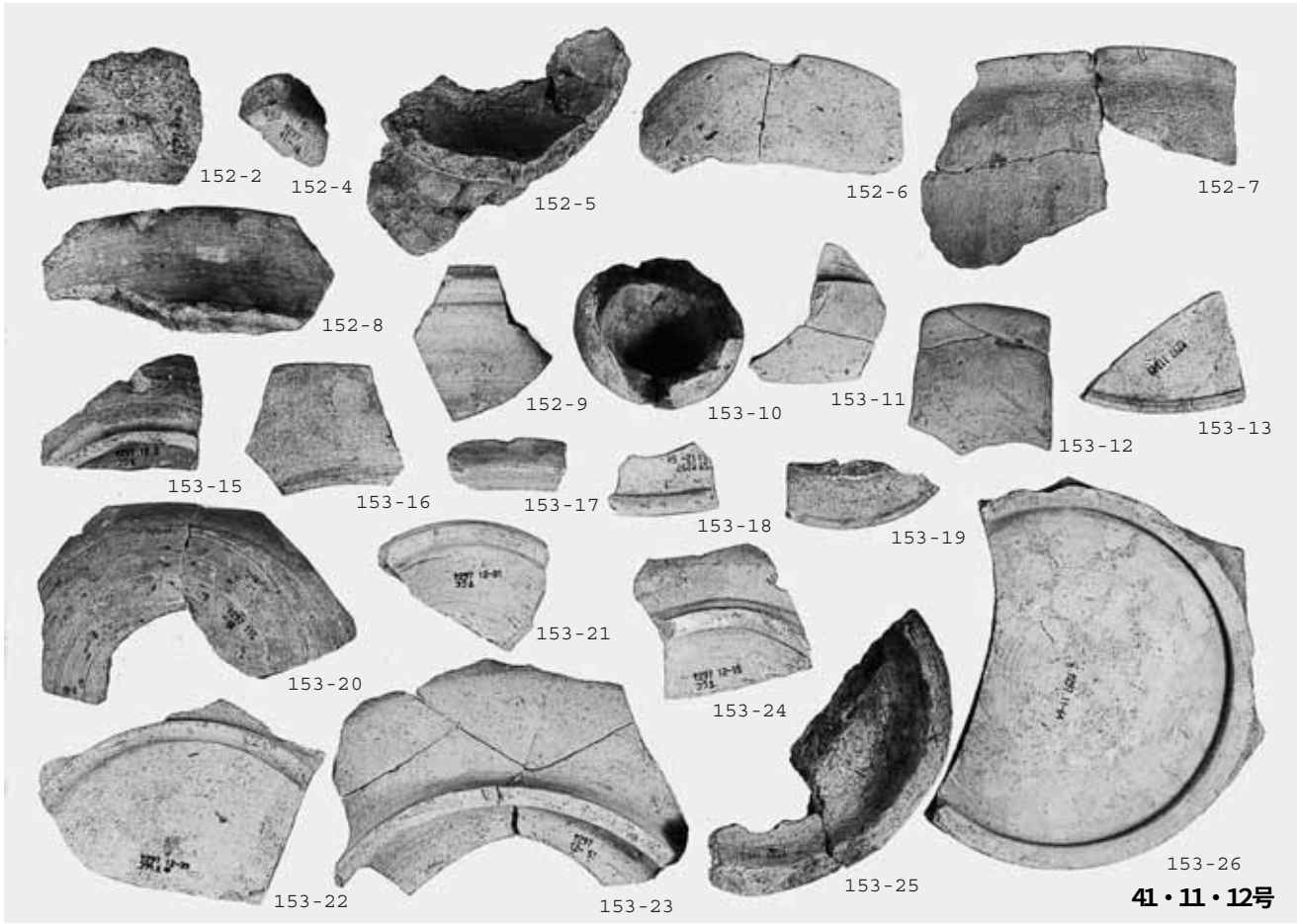


図141　48号

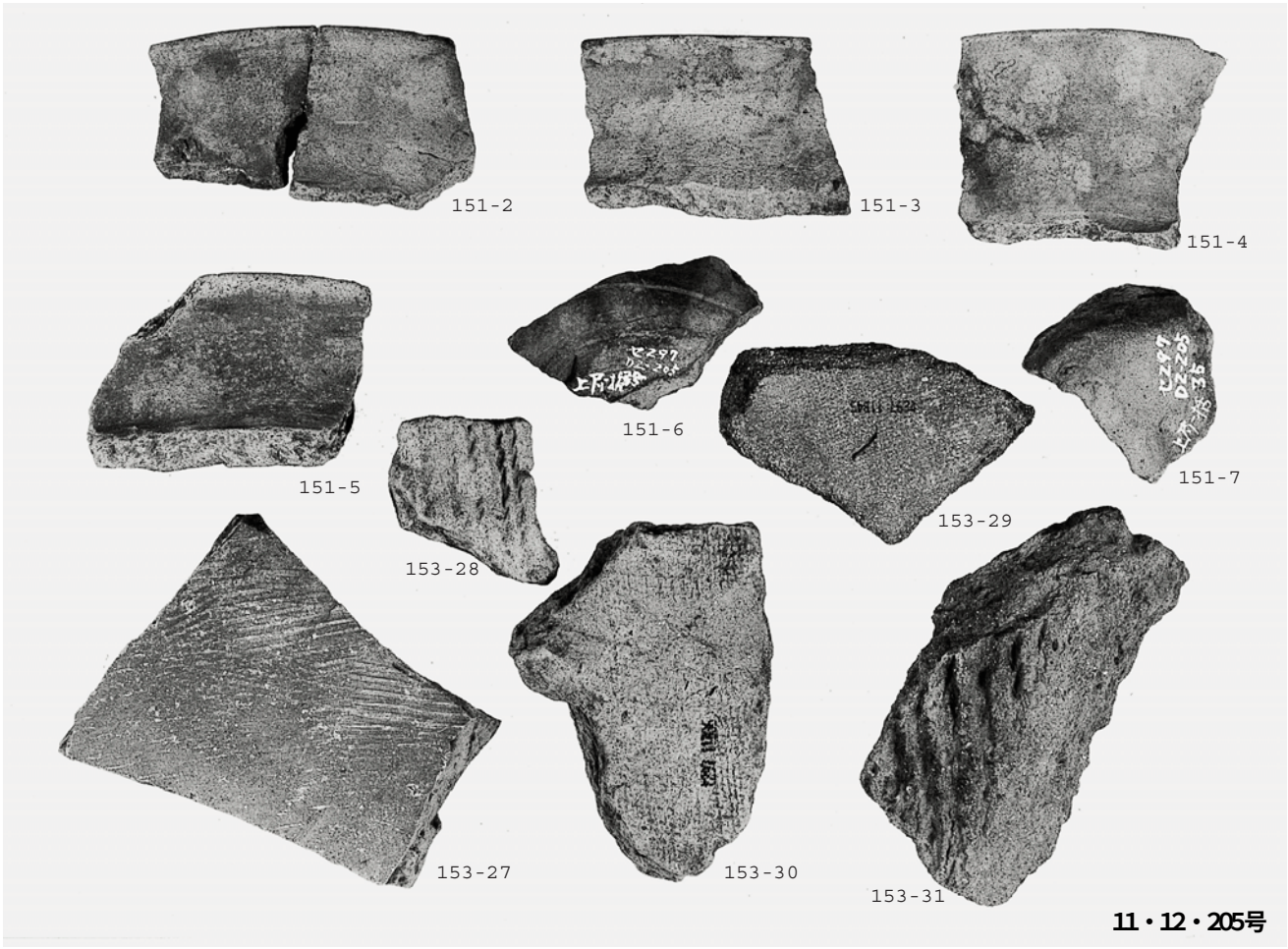


22・213
241・53
54・59・64号



41・11・12号

図版 88



11・12・205号

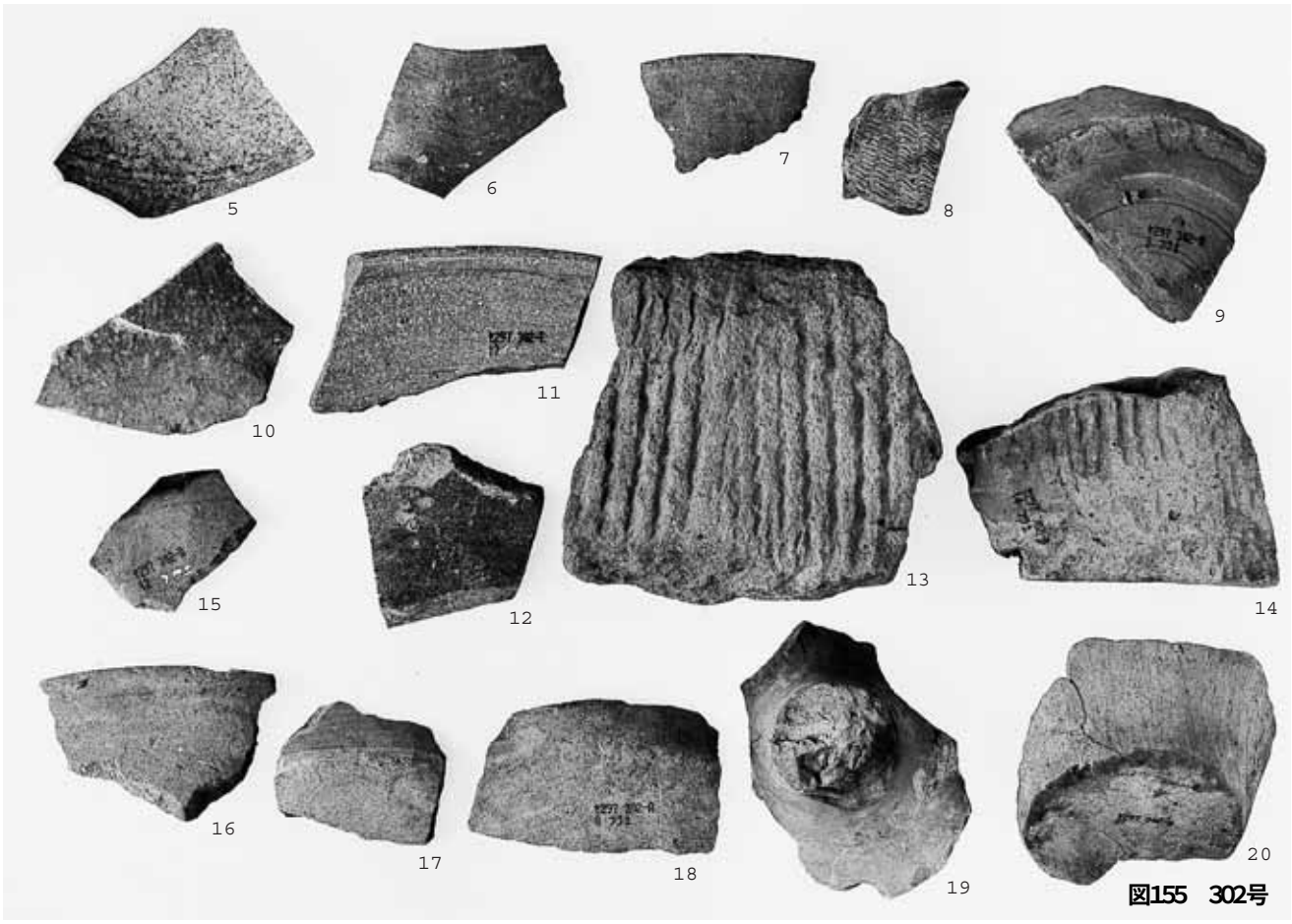
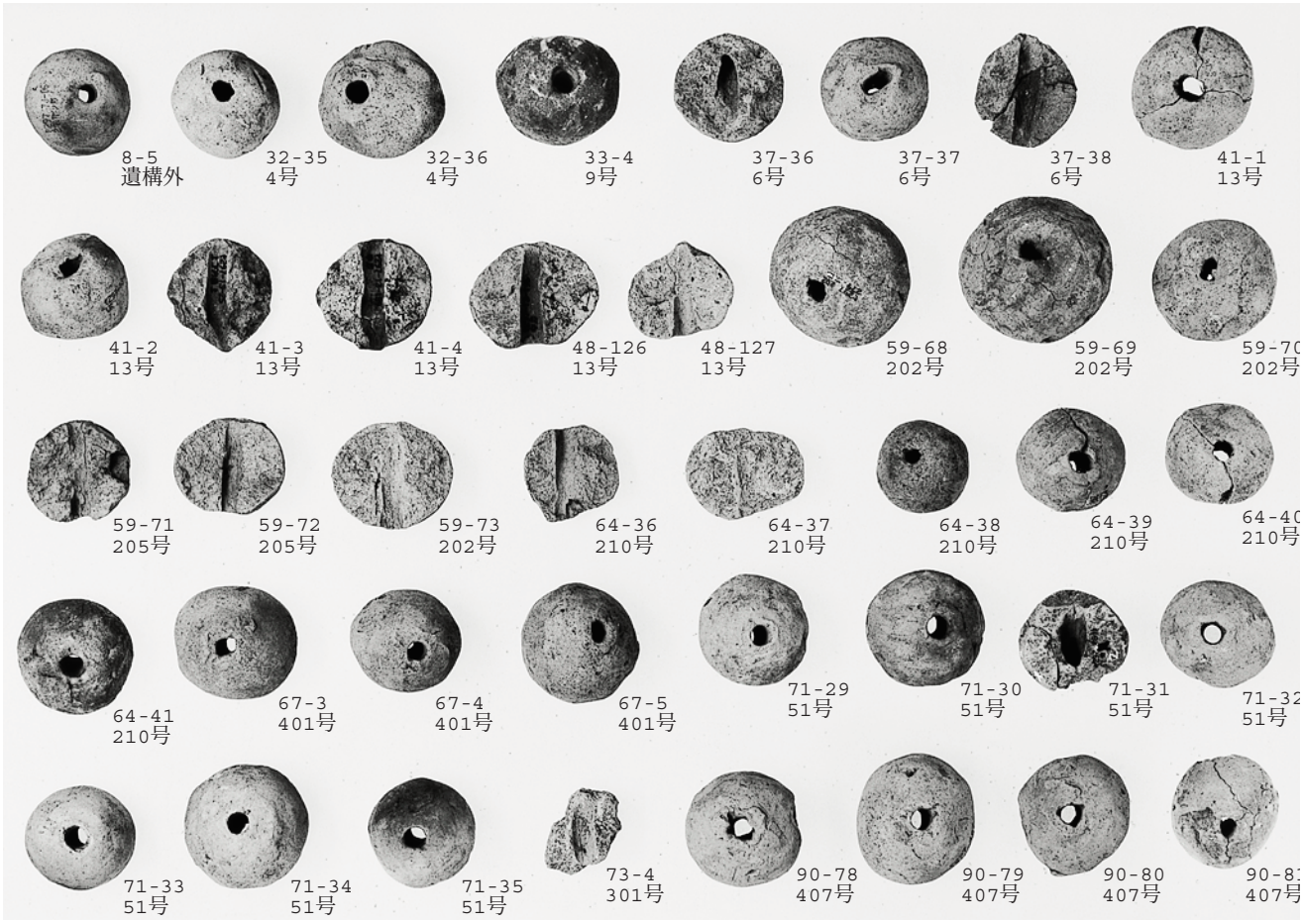
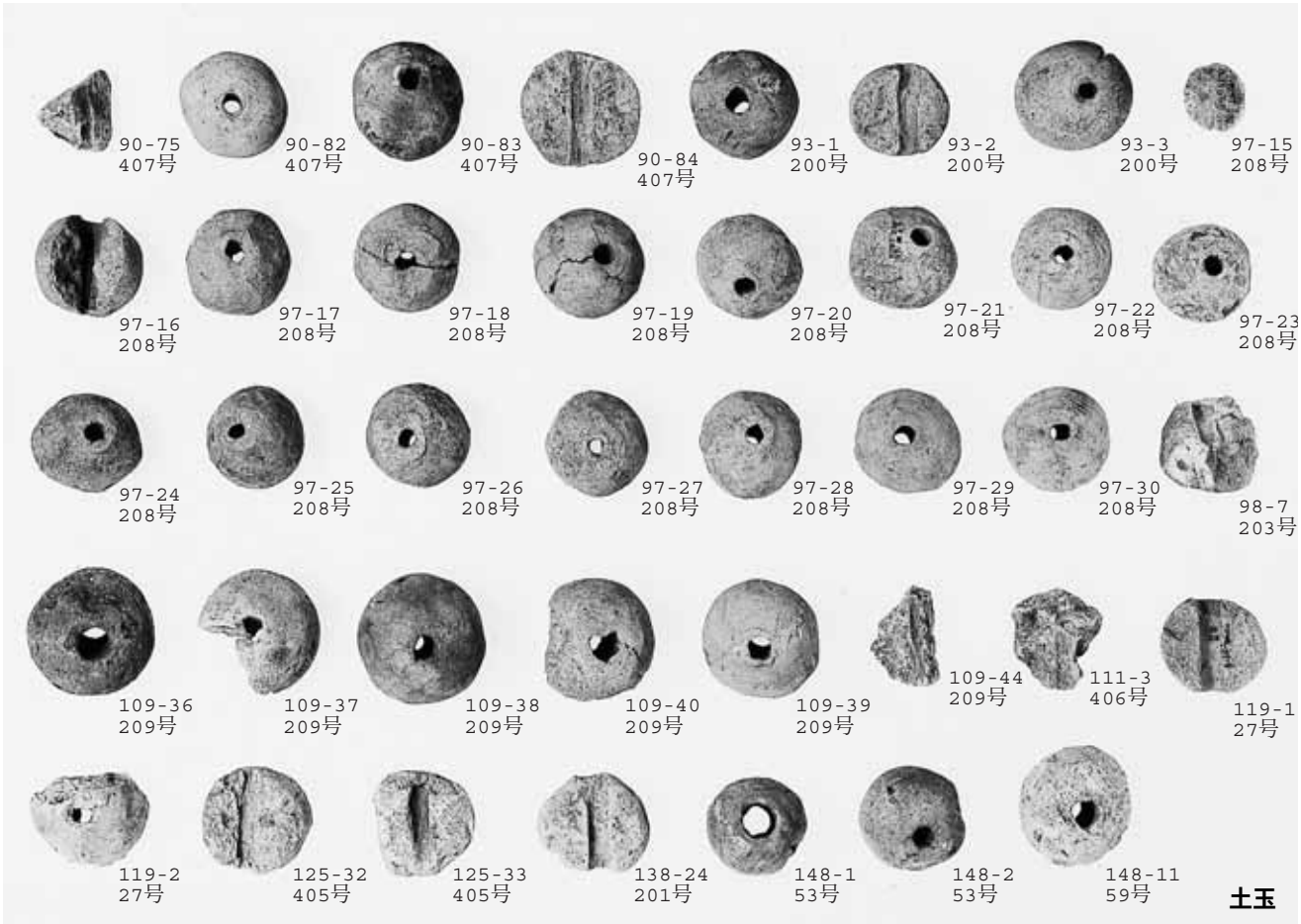


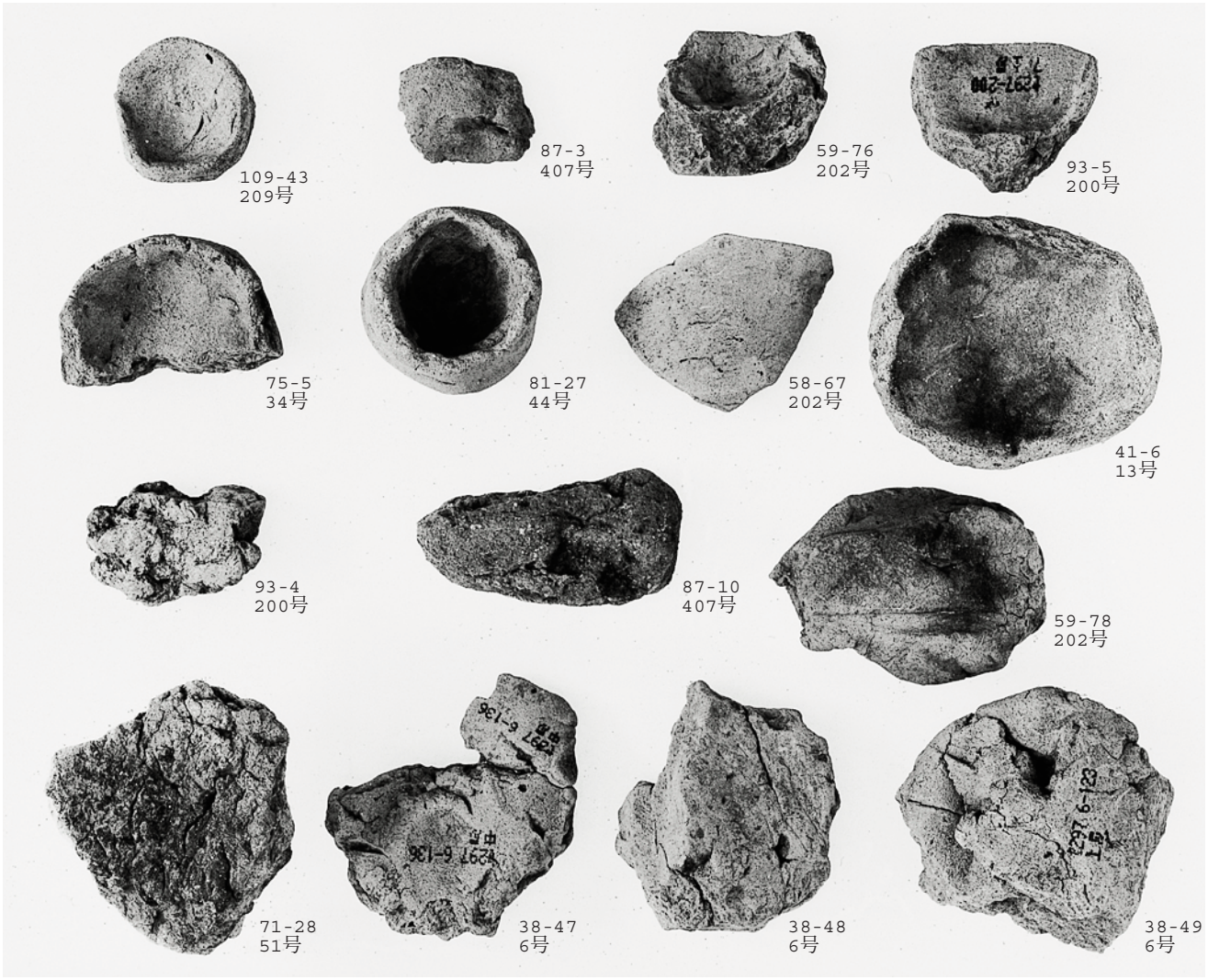
図155　302号

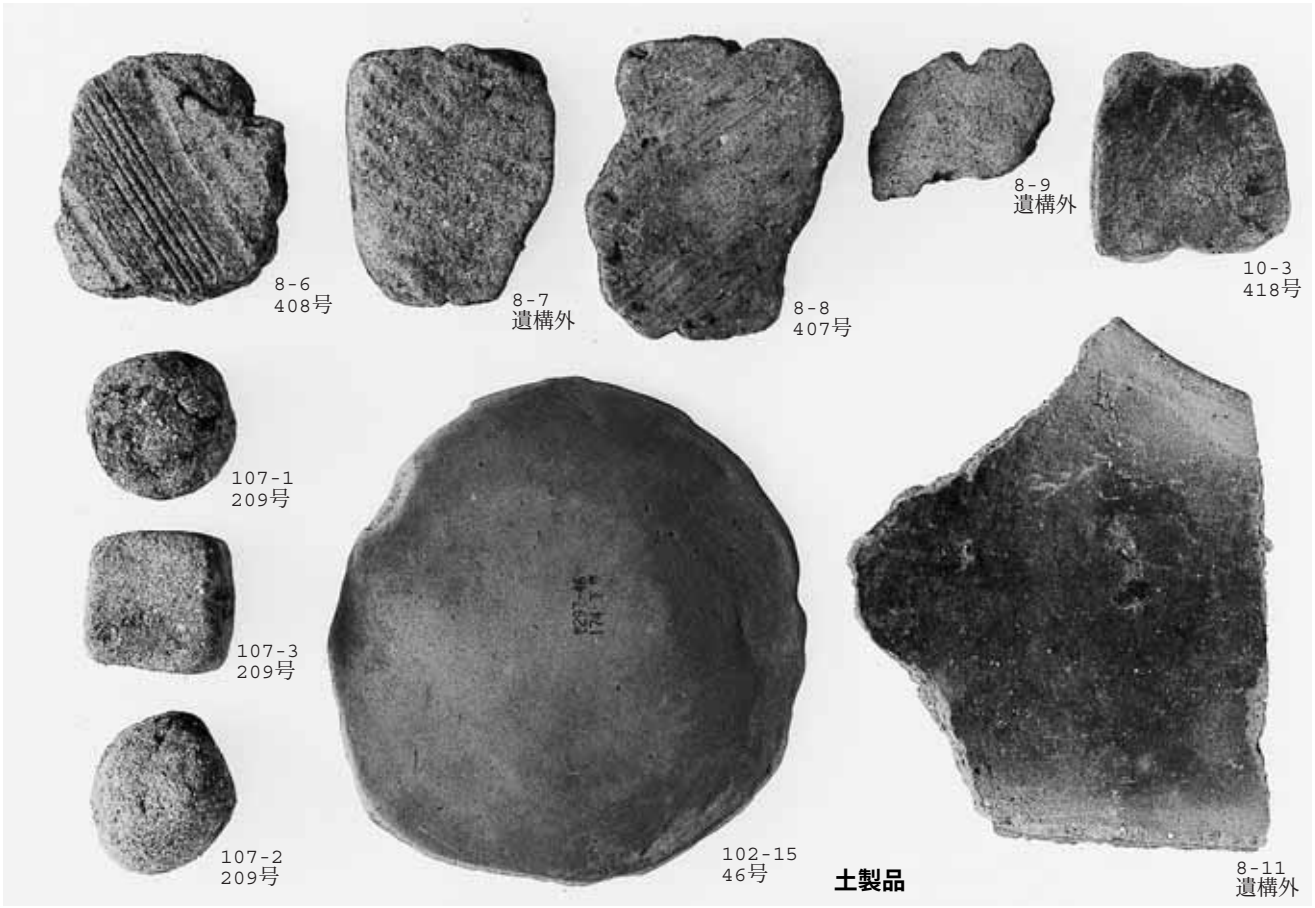

8-5 遺構外
32-35 4号
32-36 4号
33-4 9号
37-36 6号
37-37 6号
37-38 6号
41-1 13号
41-2 13号
41-3 13号
41-4 13号
48-126 13号
48-127 13号
59-68 202号
59-69 202号
59-70 202号
59-71 205号
59-72 205号
59-73 202号
64-36 210号
64-37 210号
64-38 210号
64-39 210号
64-40 210号
64-41 210号
67-3 401号
67-4 401号
67-5 401号
71-29 51号
71-30 51号
71-31 51号
71-32 51号
71-33 51号
71-34 51号
71-35 51号
73-4 301号
90-78 407号
90-79 407号
90-80 407号
90-81 407号


90-75 407号
90-82 407号
90-83 407号
90-84 407号
93-1 200号
93-2 200号
93-3 200号
97-15 208号
97-16 208号
97-17 208号
97-18 208号
97-19 208号
97-20 208号
97-21 208号
97-22 208号
97-23 208号
97-24 208号
97-25 208号
97-26 208号
97-27 208号
97-28 208号
97-29 208号
97-30 208号
98-7 203号
109-36 209号
109-37 209号
109-38 209号
109-40 209号
109-39 209号
109-44 209号
111-3 406号
119-1 27号
119-2 27号
125-32 405号
125-33 405号
138-24 201号
148-1 53号
148-2 53号
148-11 59号

土玉

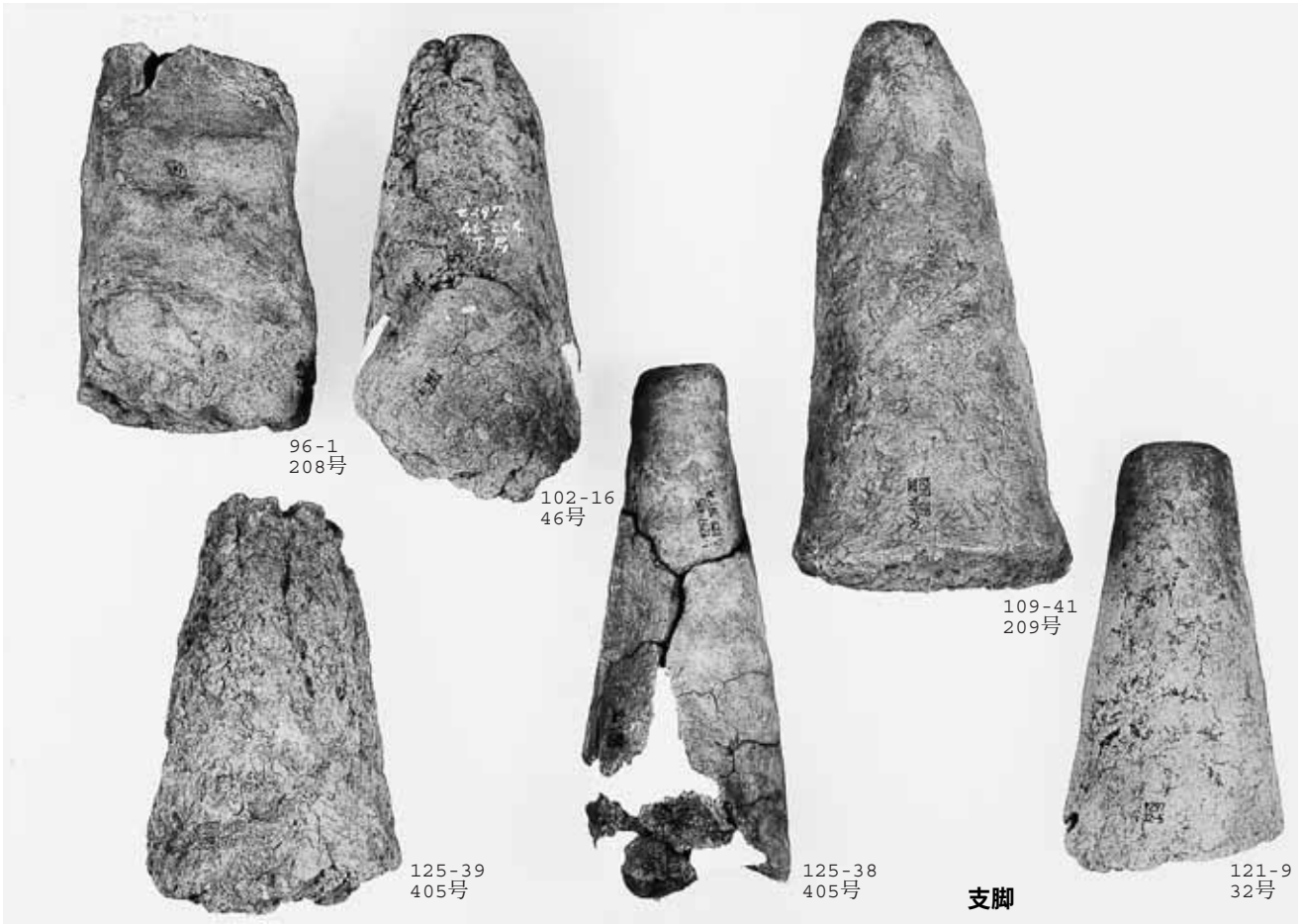
図版 90


109-43
209号
87-3
407号
59-76
202号
93-5
200号
75-5
34号
81-27
44号
58-67
202号
41-6
13号
93-4
200号
87-10
407号
59-78
202号
71-28
51号
38-47
6号
38-48
6号
38-49
6号


8-6
408号
8-7
遺構外
8-8
407号
8-9
遺構外
10-3
418号
107-1
209号
107-3
209号
107-2
209号
102-15
46号
8-11
遺構外

土製品

37-40
6号
55-1
202号
87-5
407号
87-5
407号
67-22
401号


96-1
208号
102-16
46号
125-39
405号
125-38
405号
109-41
209号
121-9
32号

支脚

図版 92

128-15
207号
131-7
403号
138-30
201号

53-23
14号

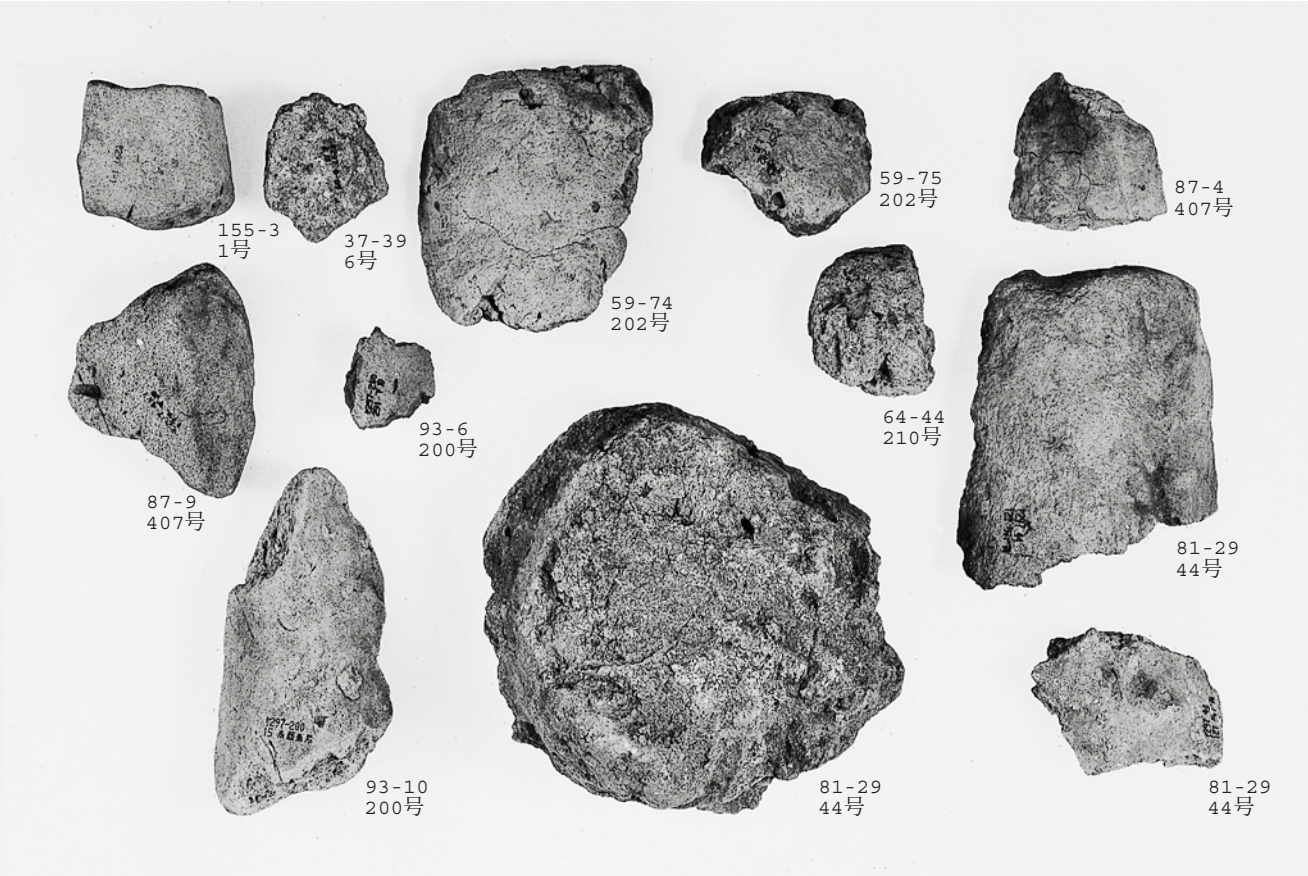
62-1
210号

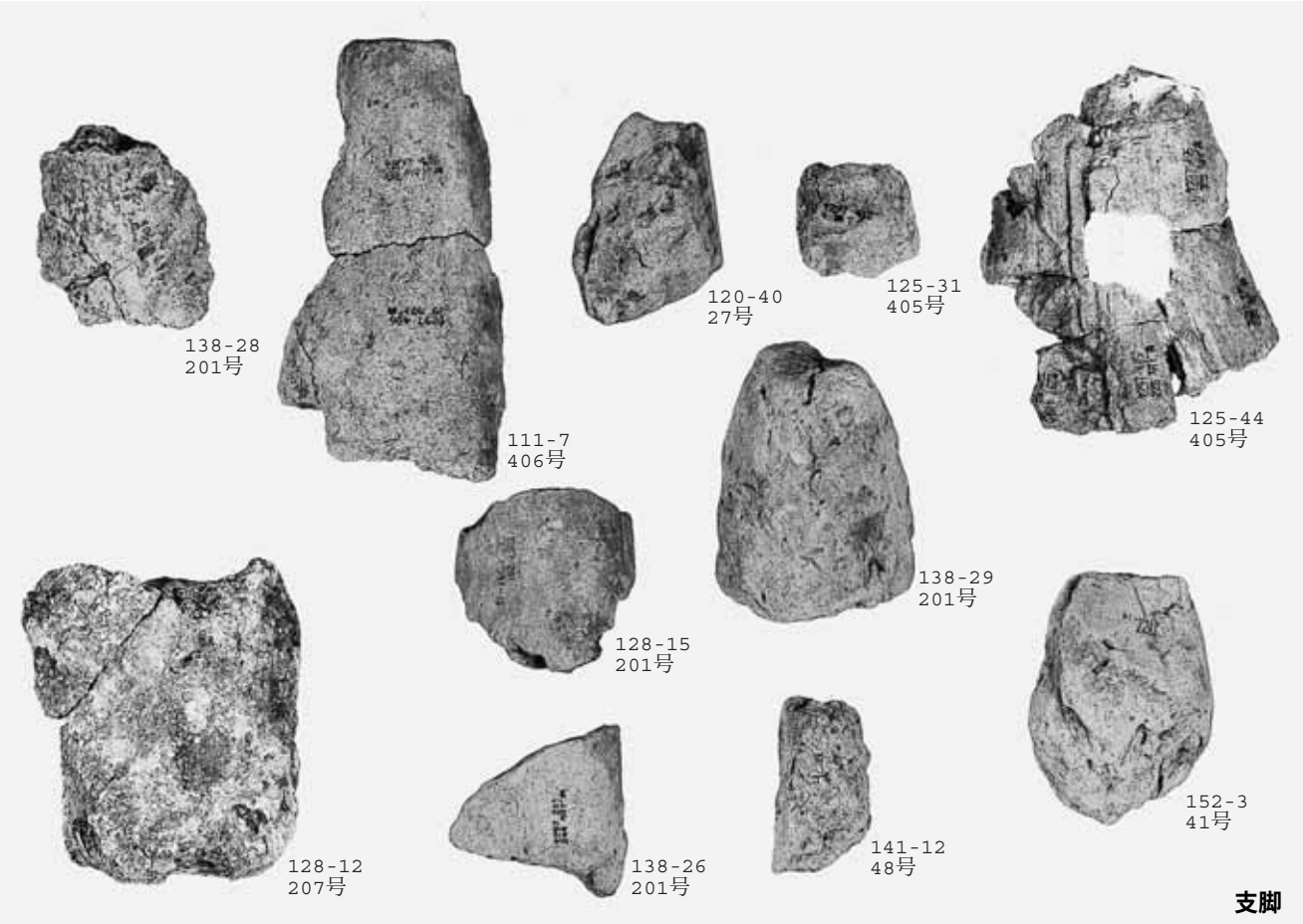
67-14
401号

支脚

83-1
407号

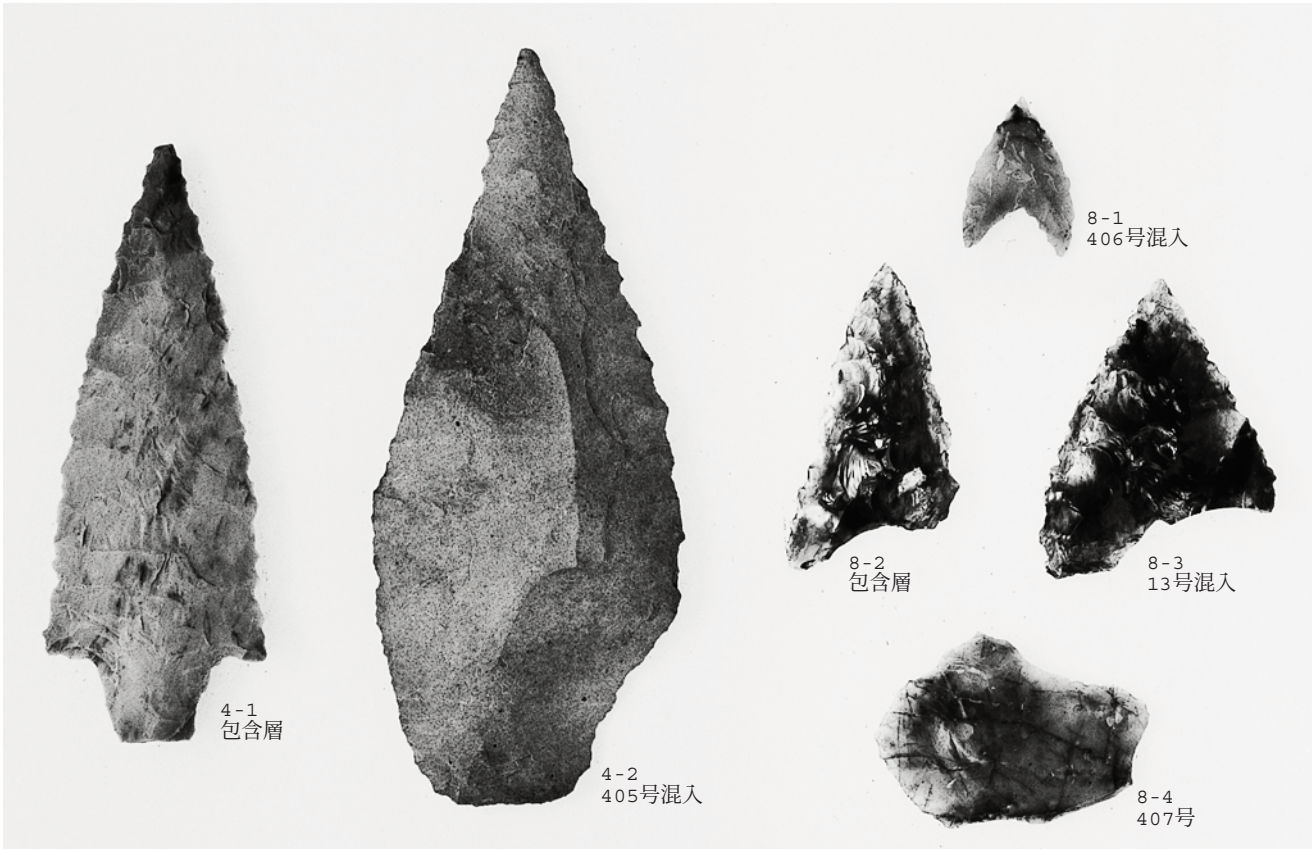
22-43
211号

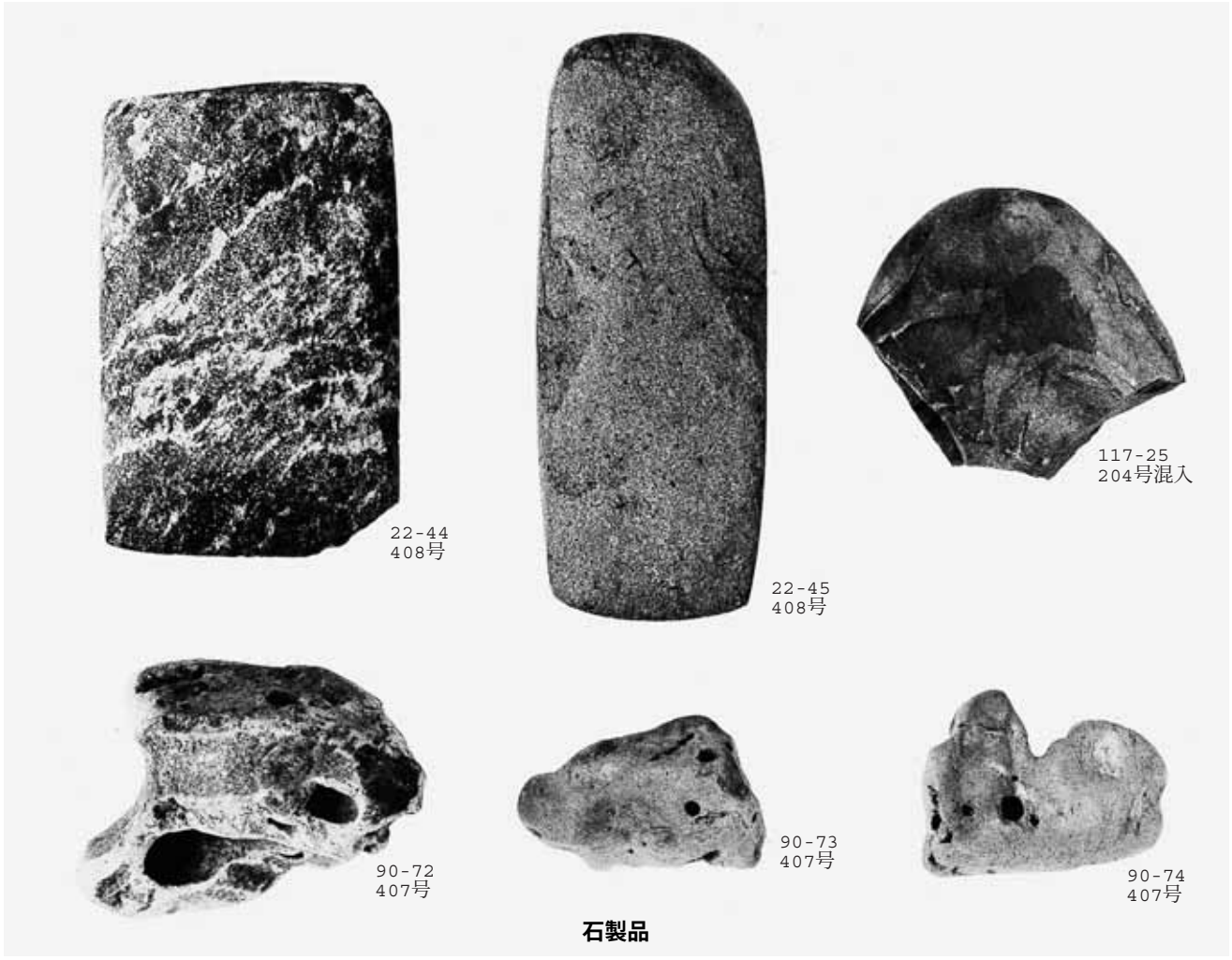

155-3
1号
37-39
6号
59-74
202号
59-75
202号
87-4
407号
64-44
210号
93-6
200号
87-9
407号
81-29
44号
93-10
200号
81-29
44号
81-29
44号


138-28
201号
111-7
406号
120-40
27号
125-31
405号
125-44
405号
138-29
201号
128-15
201号
128-12
207号
138-26
201号
141-12
48号
152-3
41号

支脚

図版 94

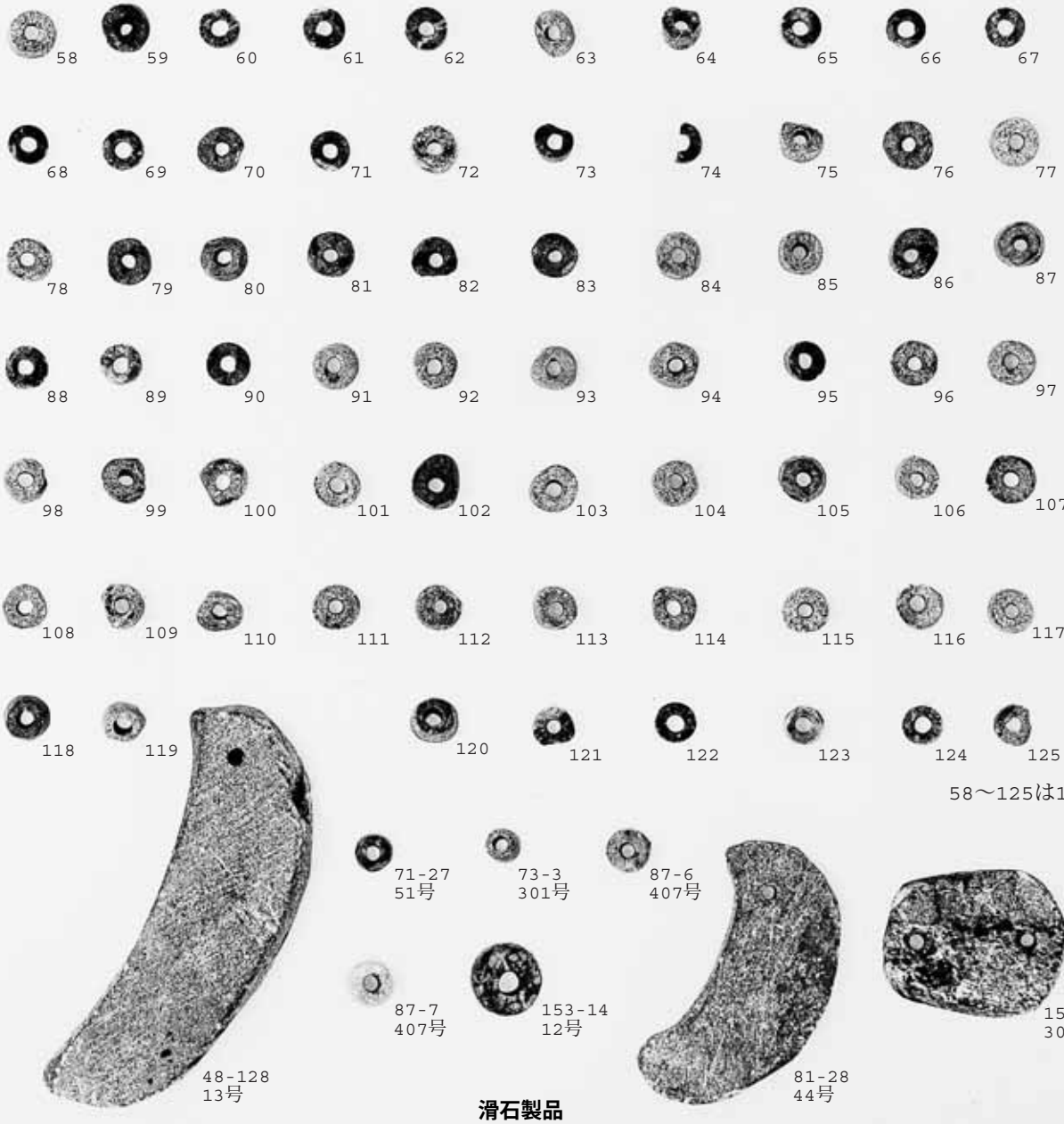

4-1
包含層
4-2
405号混入
8-1
406号混入
8-2
包含層
8-3
13号混入
8-4
407号


22-44
408号
22-45
408号
117-25
204号混入
90-72
407号
90-73
407号
90-74
407号

石製品

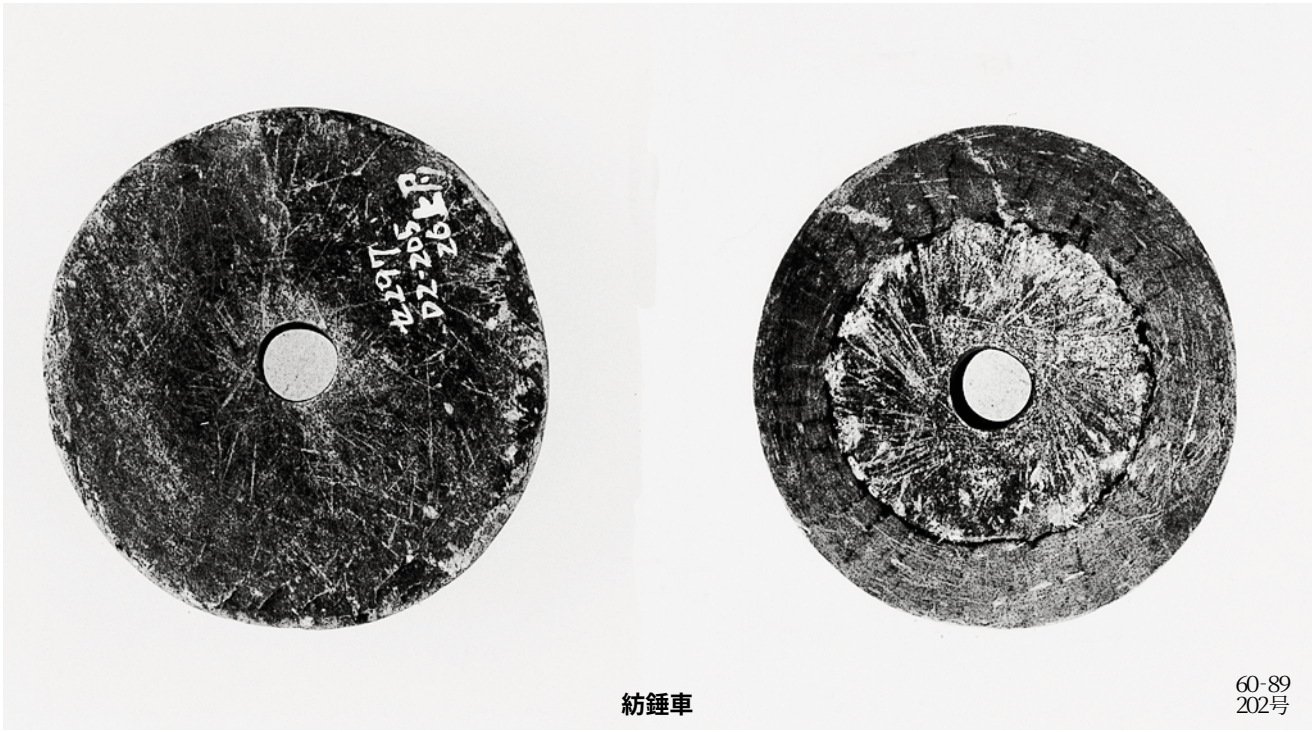
紡錘車

51-2
14号



滑石製品

図版 96



紡錘車

60-89
202号

8-12

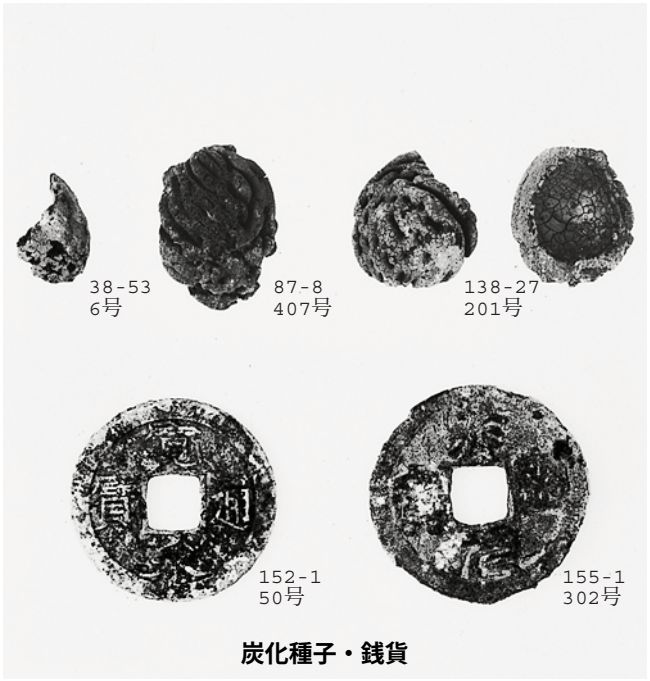
8-13

8-14
51号混入

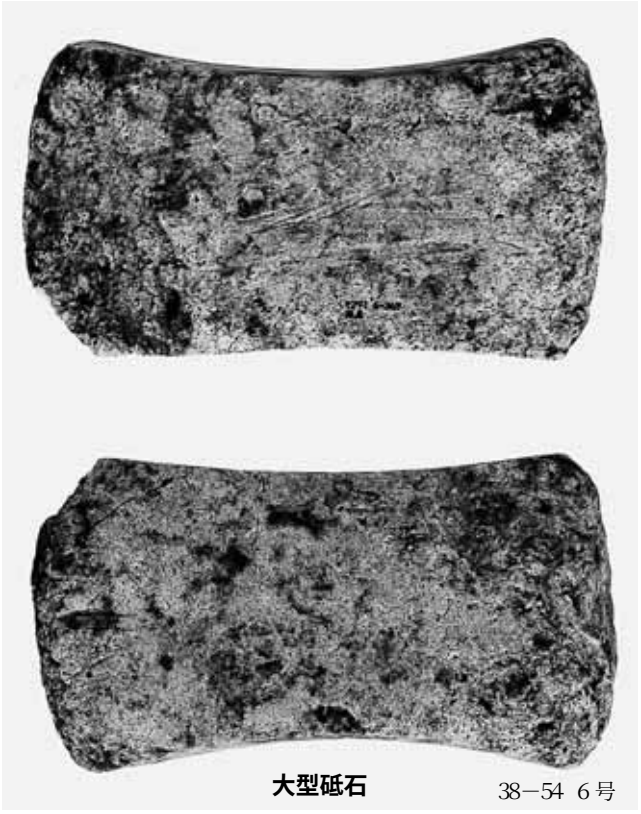
102-20
46号混入

102-24
46号混入

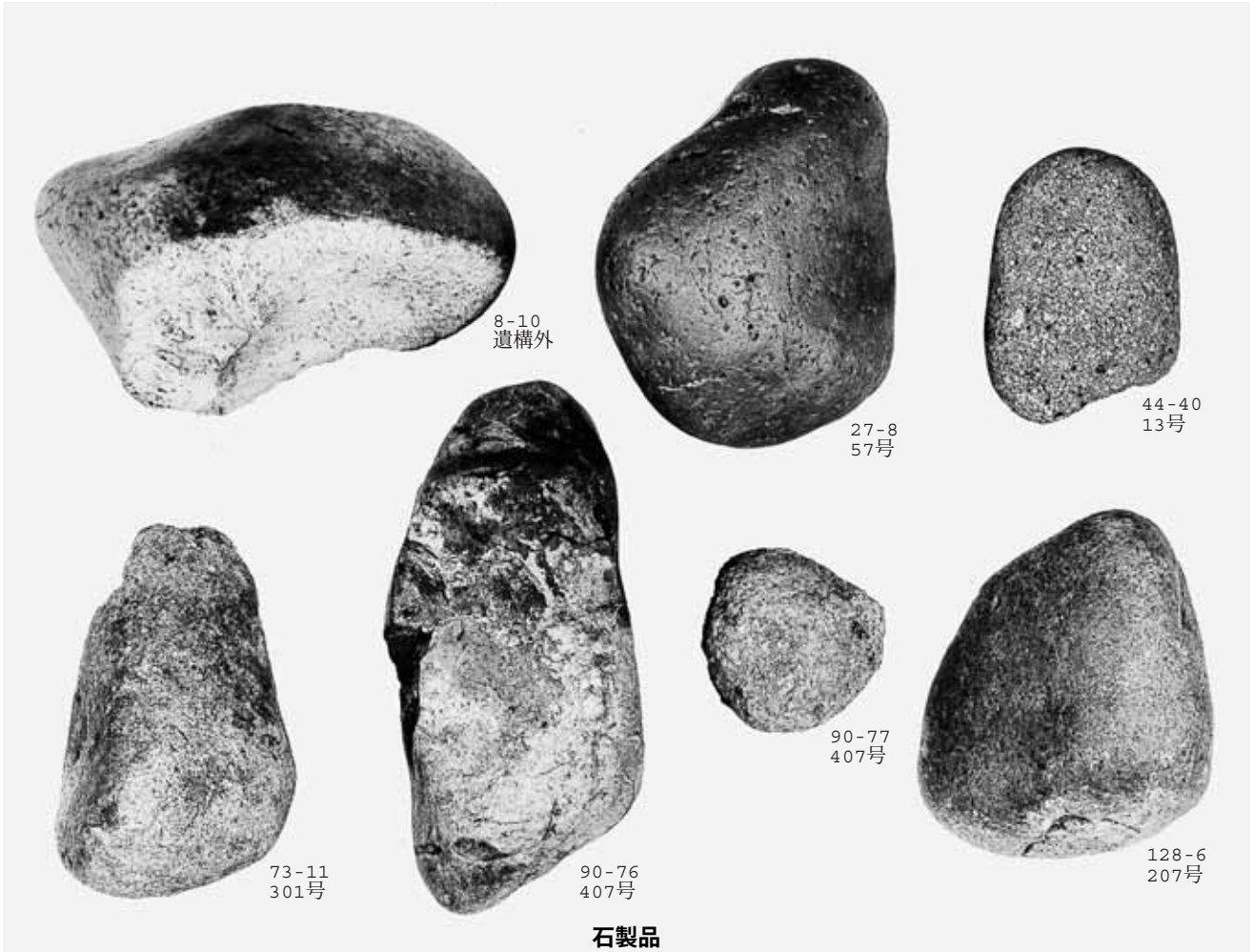
遺構外出土・混入　瓦・須恵器



炭化種子・銭貨

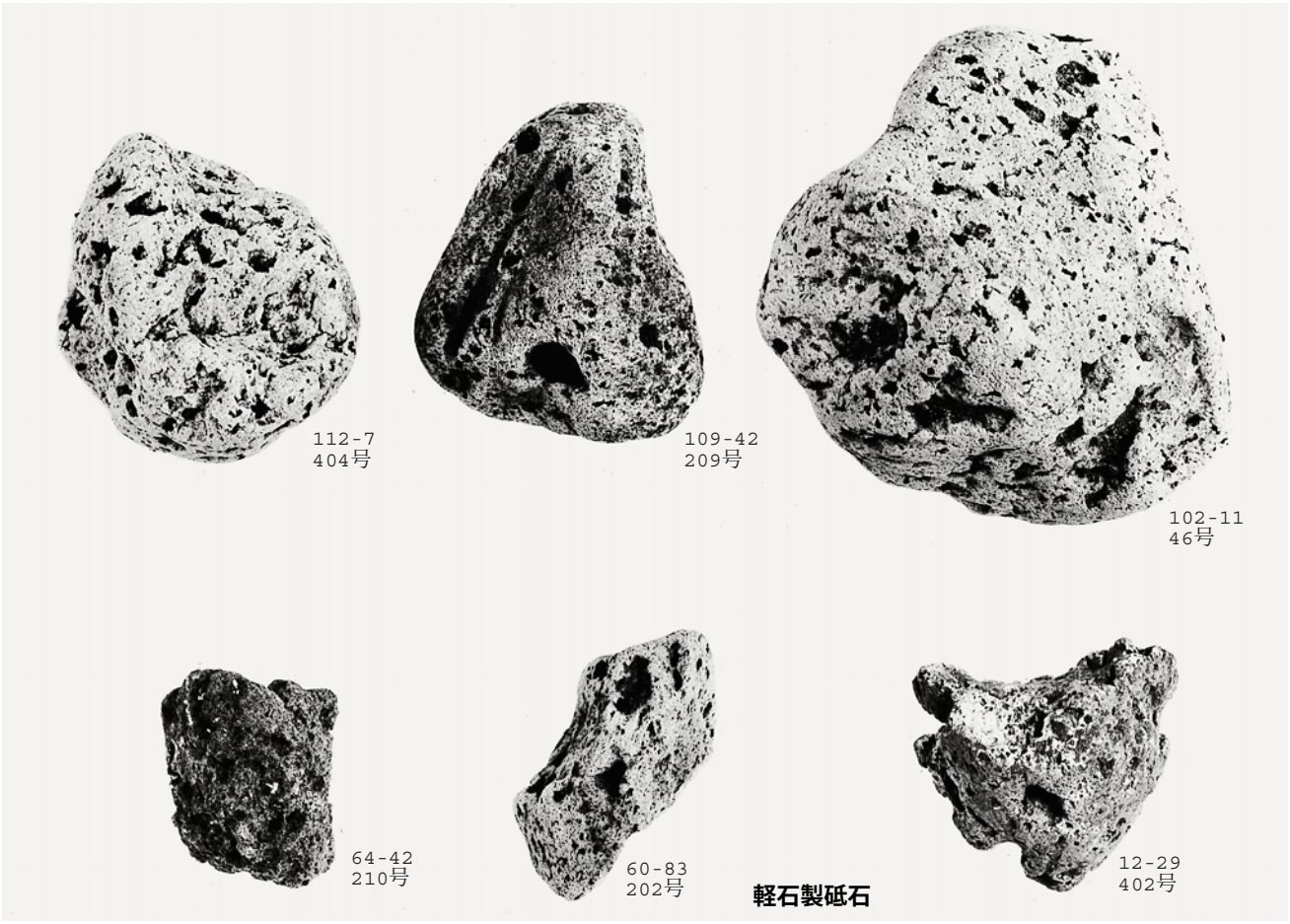


大型砥石　38－54　6号

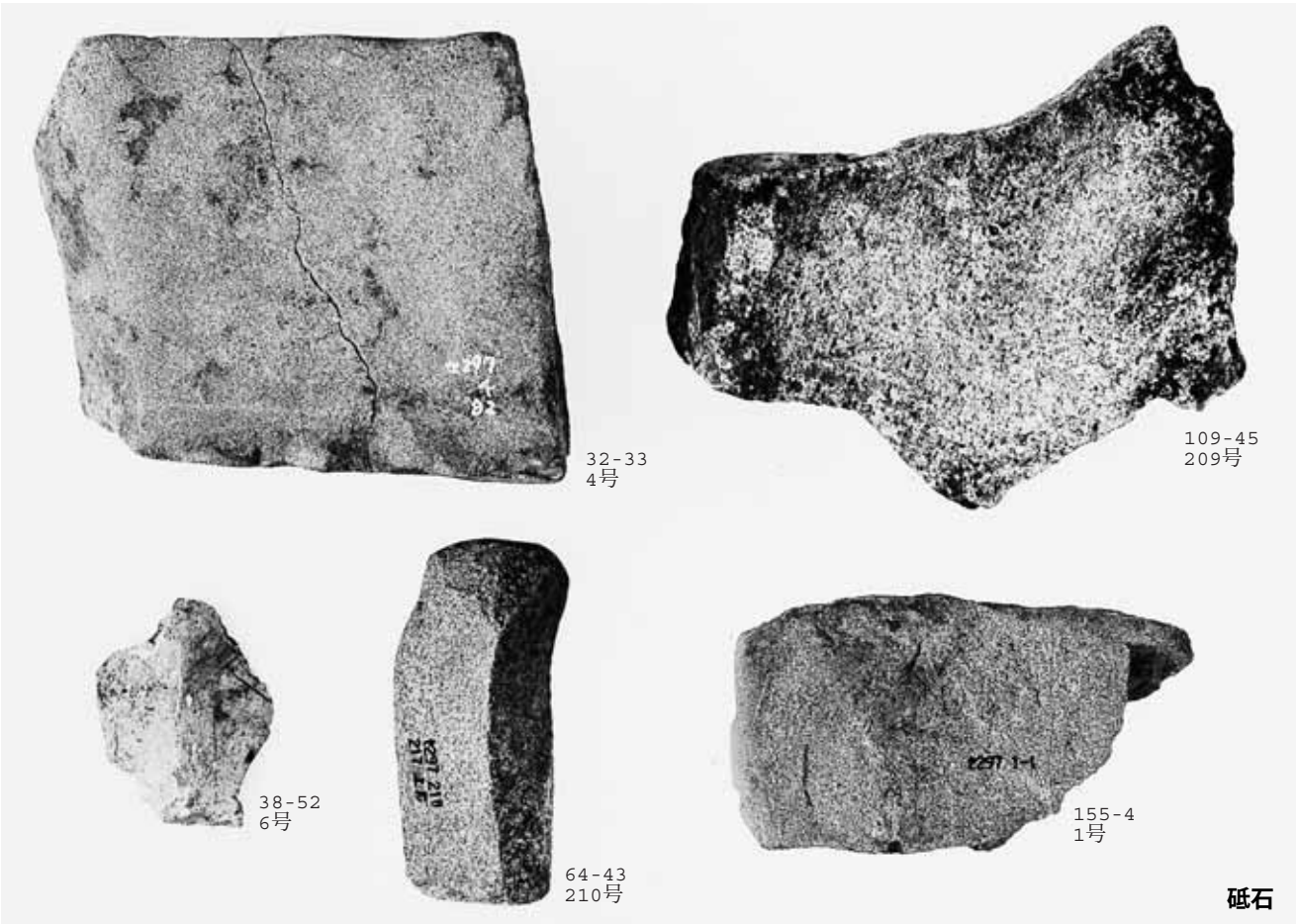


石製品

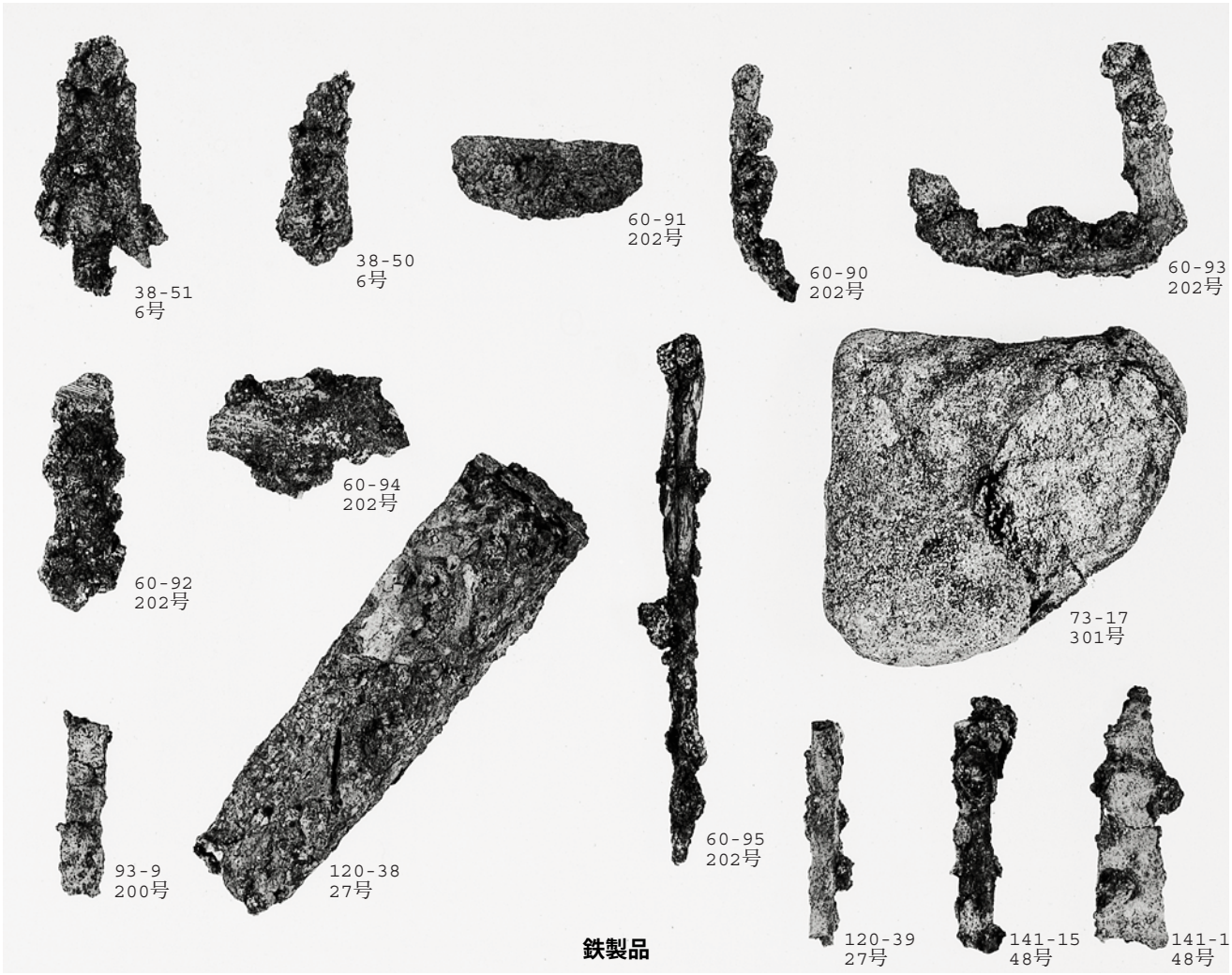
図版 98



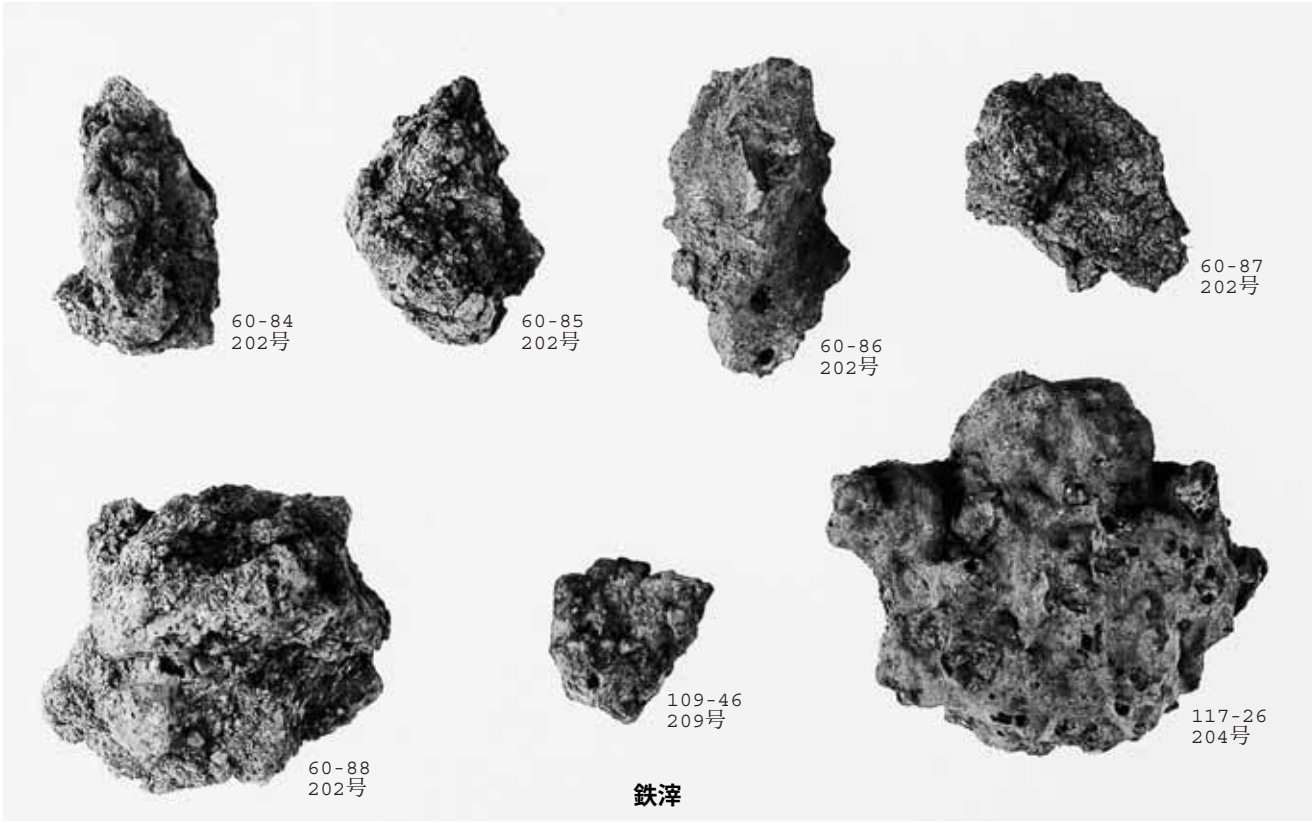
軽石製砥石



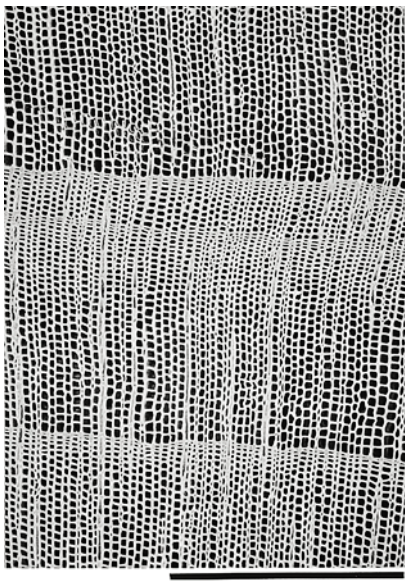
砥石


38-51
6号
38-50
6号
60-91
202号
60-90
202号
60-93
202号
60-92
202号
60-94
202号
60-95
202号
73-17
301号
93-9
200号
120-38
27号
120-39
27号
141-15
48号
141-1
48号

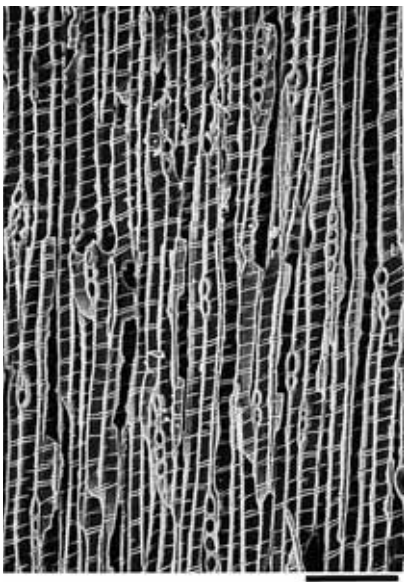
鉄製品


60-84
202号
60-85
202号
60-86
202号
60-87
202号
60-88
202号
109-46
209号
117-26
204号

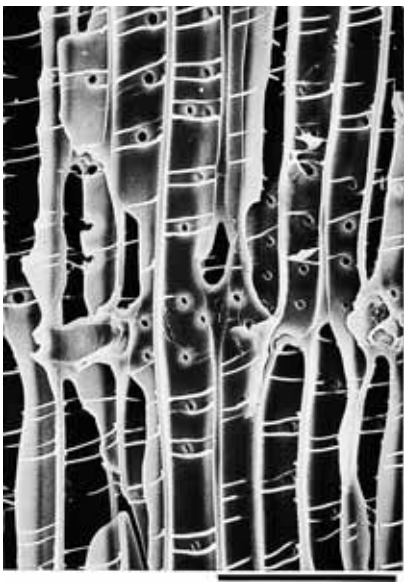
鉄滓



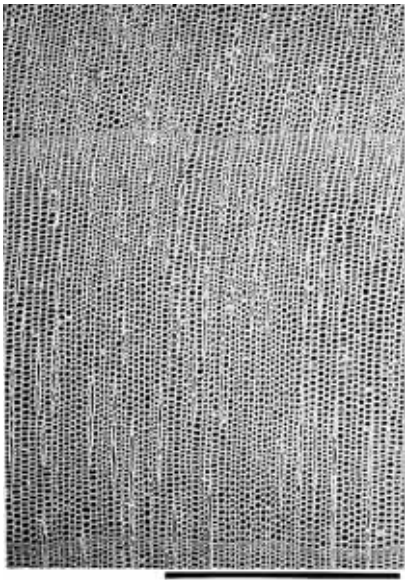
1a　カヤ（横断面）
14号－炭１　bar：0.5㎜



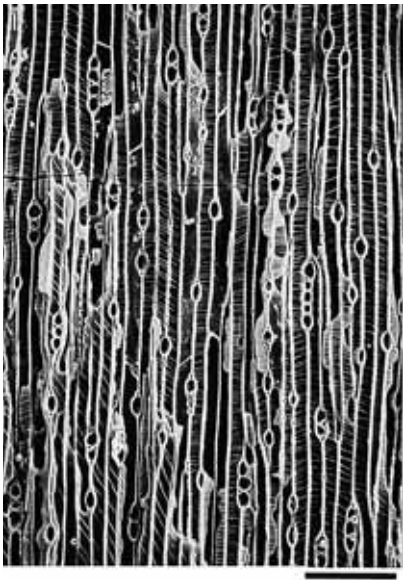
1b　カヤ（接線断面）
14号－炭１　bar：0.1㎜



1c　カヤ（放射断面）
14号－炭１　bar：0.05㎜

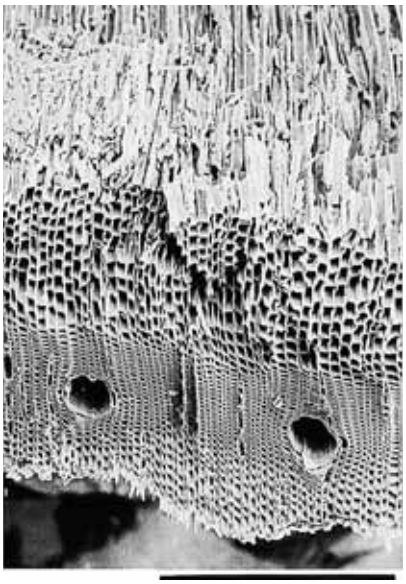


2a　イヌガヤ（横断面）
209号－炭３　bar：0.5㎜



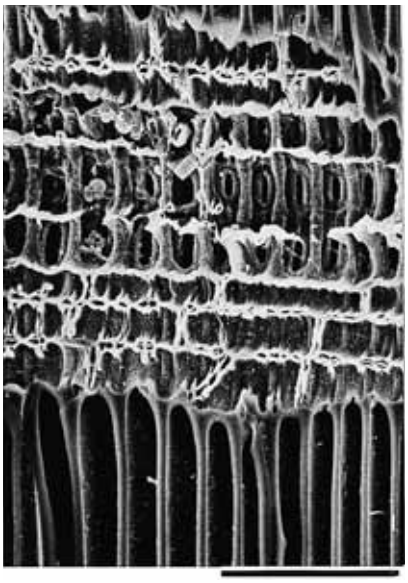
2b　イヌガヤ（接線断面）
209号－炭３　bar：0.1㎜

2c　イヌガヤ（放射断面）
209号－炭３　bar：0.1㎜



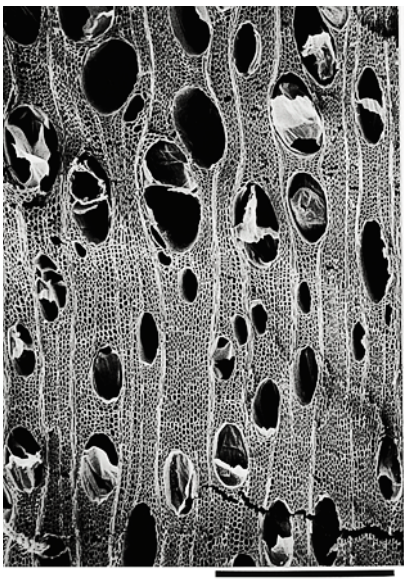
3a　マツ属複維管束亜属（横断面）
40号一括　bar：0.5㎜

3b　マツ属複維管束亜属(接線断面)
40号一括　bar：0.5㎜



3c　マツ属複維管束亜属(放射断面)
40号一括　bar：0.05㎜

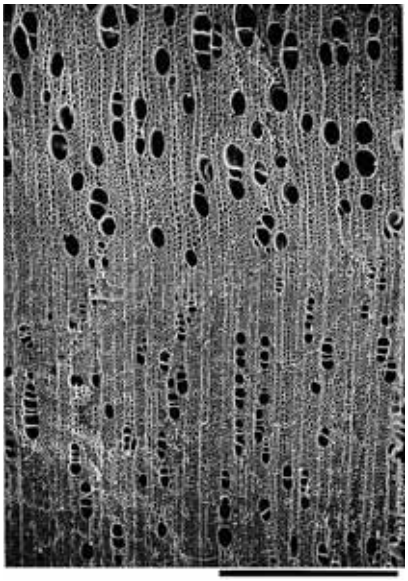
加茂遺跡 D 地点の竪穴住居跡出土炭化材樹種



4a　オニグルミ（横断面）
211号－炭３　bar：0.5㎜

4b　オニグルミ（接線断面）
211号－炭３　bar：0.5㎜

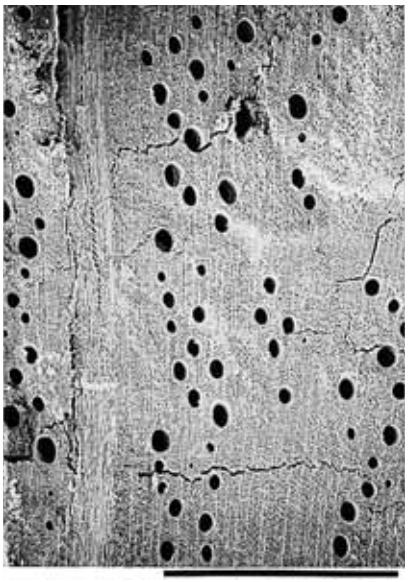
4c　オニグルミ（放射断面）
211号－炭３　bar：0.1㎜



5a　アサダ（横断面）
６号－炭１　bar：0.5㎜

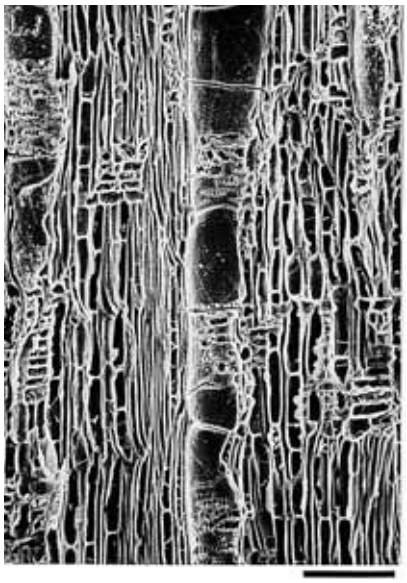
5b　アサダ（接線断面）
６号－炭１　bar：0.1㎜

5c　アサダ（放射断面）
６号－炭１　bar：0.5㎜



6a　アカガシ亜属（横断面）
401号－炭１　bar：1.0㎜

6b　アカガシ亜属（接線断面）
401号－炭１　bar：0.1㎜



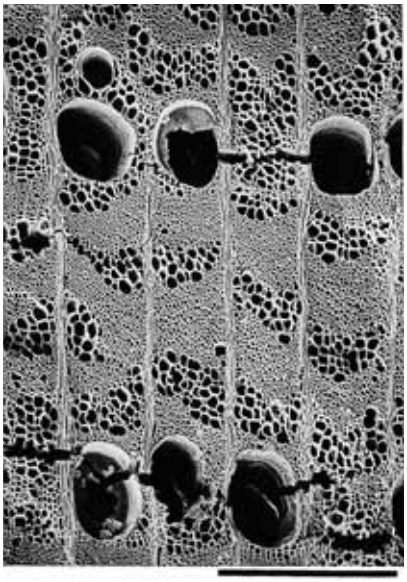
6c　アカガシ亜属（放射断面）
401号－炭１　bar：0.1㎜

加茂遺跡 D 地点の竪穴住居跡出土炭化材樹種

7a　クヌギ節（横断面）
206号－炭２　bar：0.1㎜

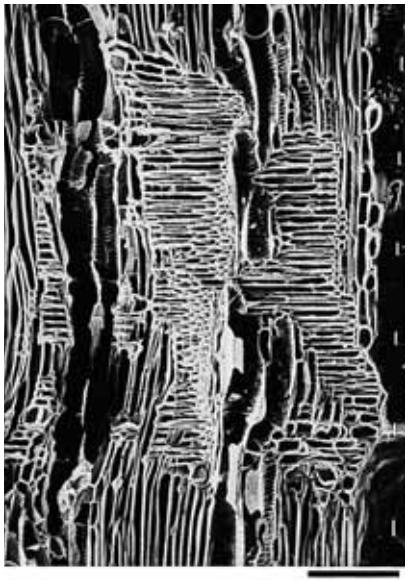
7b　クヌギ節（接線断面）
206号－炭２　bar：0.5㎜

7c　クヌギ節（放射断面）
206号－炭２　bar：0.5㎜

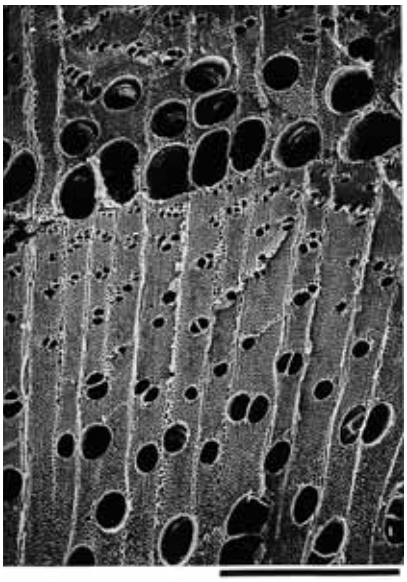


8a　ケヤキ（横断面）
408号－炭３　bar：0.5㎜

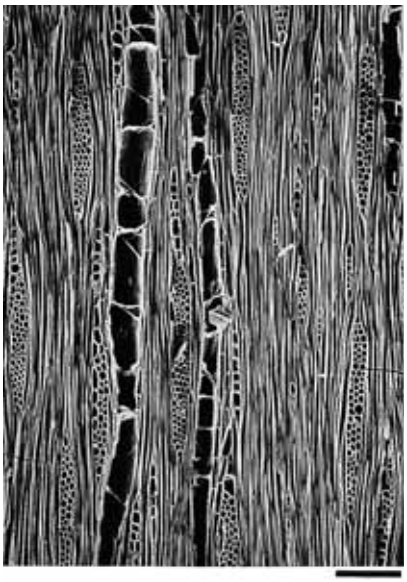
8b　ケヤキ（接線断面）
408号－炭３　bar：0.5㎜



8c　ケヤキ（放射断面）
408号－炭３　bar：0.1㎜



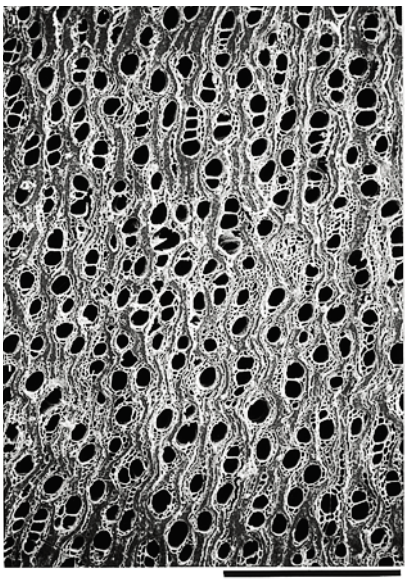
9a　ヤマグワ（横断面）
407号－炭４　bar：0.5㎜



9b　ヤマグワ（接線断面）
407号－炭４　bar：0.5㎜

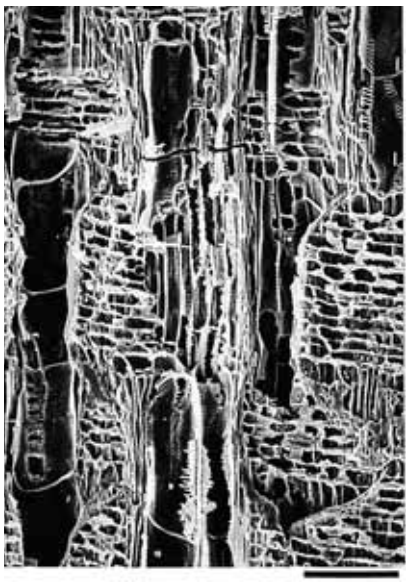
9c　ヤマグワ（放射断面）
407号－炭４　bar：0.1㎜

加茂遺跡 D 地点の竪穴住居跡出土炭化材樹種

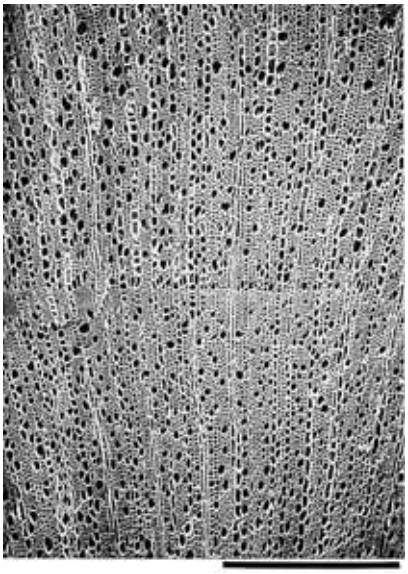


10a　モクレン属（横断面）
201号－炭１　bar：0.5㎜

10b　モクレン属（接線断面）
201号－炭１　bar：0.1㎜

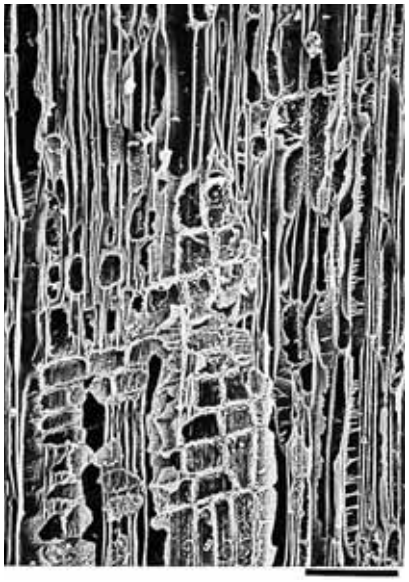


10c　モクレン属（放射断面）
201号－炭１　bar：0.1㎜

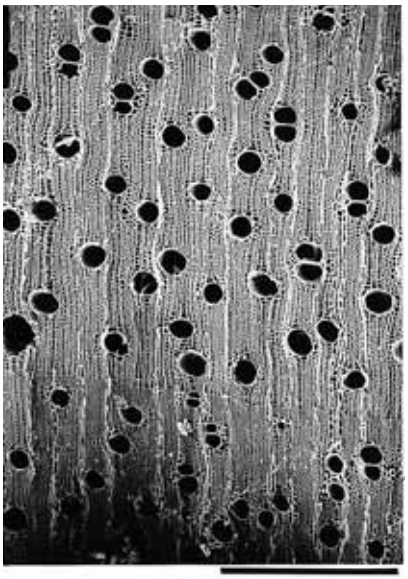


11a　シキミ（横断面）
46号－炭１　bar：0.5㎜

11b　シキミ（接線断面）
46号－炭１　bar：0.5㎜

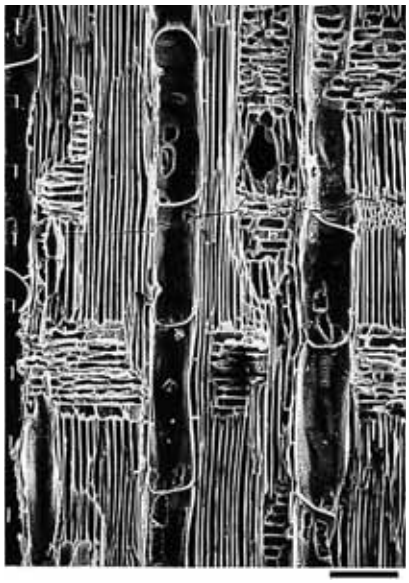


11c　シキミ（放射断面）
46号－炭１　bar：0.1㎜



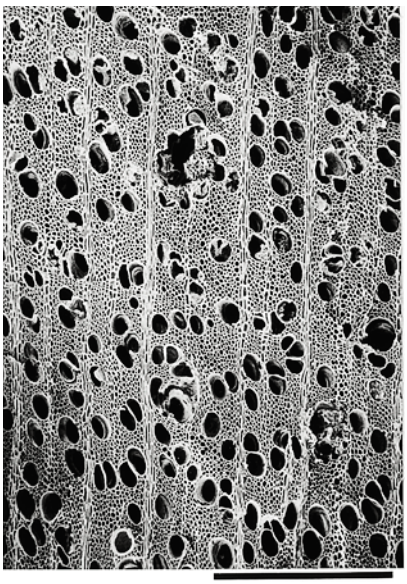
12a　クスノキ科（横断面）
408号－炭19　bar：0.5㎜

12b　クスノキ科（接線断面）
408号－炭19　bar：0.5㎜

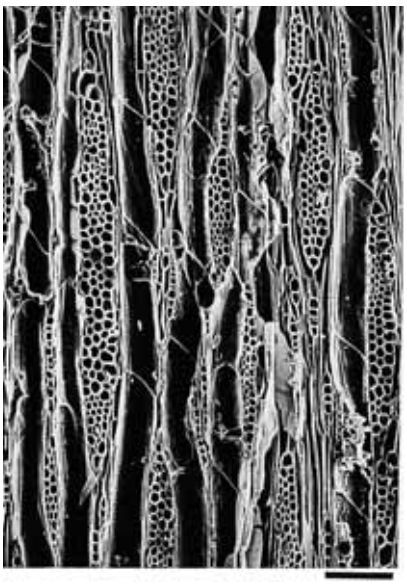


12c　クスノキ科（放射断面）
408号－炭19　bar：0.5㎜

加茂遺跡 D 地点の竪穴住居跡出土炭化材樹種

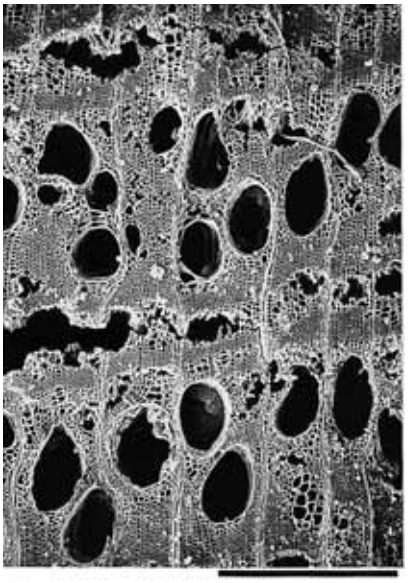


13a　サクラ属（横断面）
209号－炭１　bar：0.5㎜



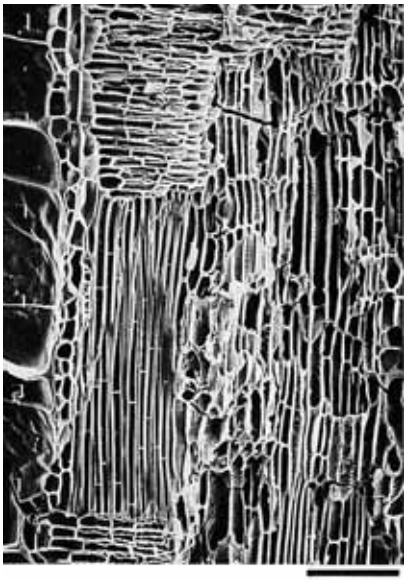
13b　サクラ属（接線断面）
209号－炭１　bar：0.5㎜

13c　サクラ属（放射断面）
209号－炭１　bar：0.1㎜

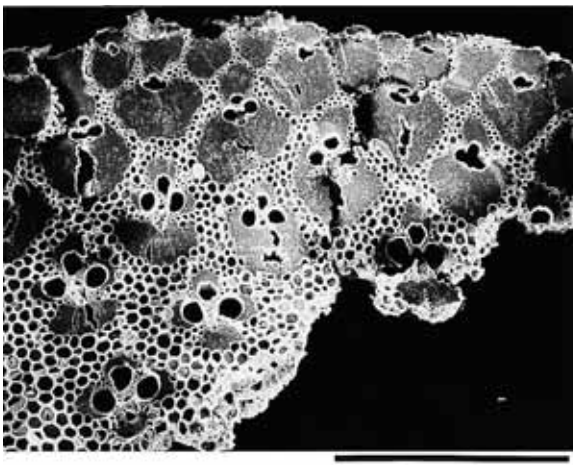


14a　イヌエンジュ（横断面）
206号－炭３　bar：0.5㎜

14b　イヌエンジュ（接線断面）
206号－炭３　bar：0.5㎜



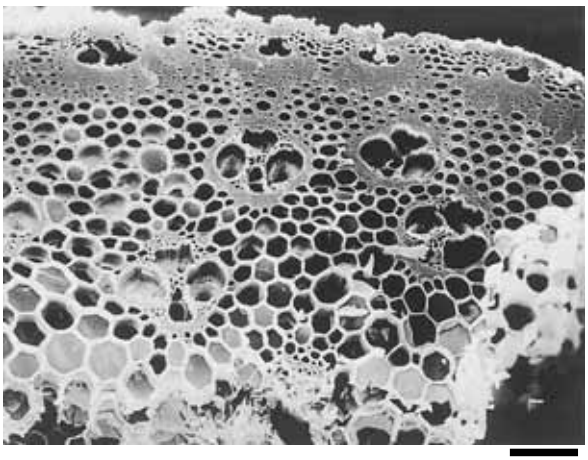
14c　イヌエンジュ（放射断面）
206号－炭３　bar：0.1㎜



15a　タケ亜科（横断面）
405号－炭１　bar：0.5㎜

15b　タケ亜科（節部外形）
405号－炭１　bar：５㎜

15c　タケ亜科(15b の反対側)
405号－炭１　bar：５㎜



16a　ススキ属類似（横断面）
204号－炭１　bar：0.5㎜

16b　ススキ属類似(節部外形)
204号－炭１　bar：５㎜

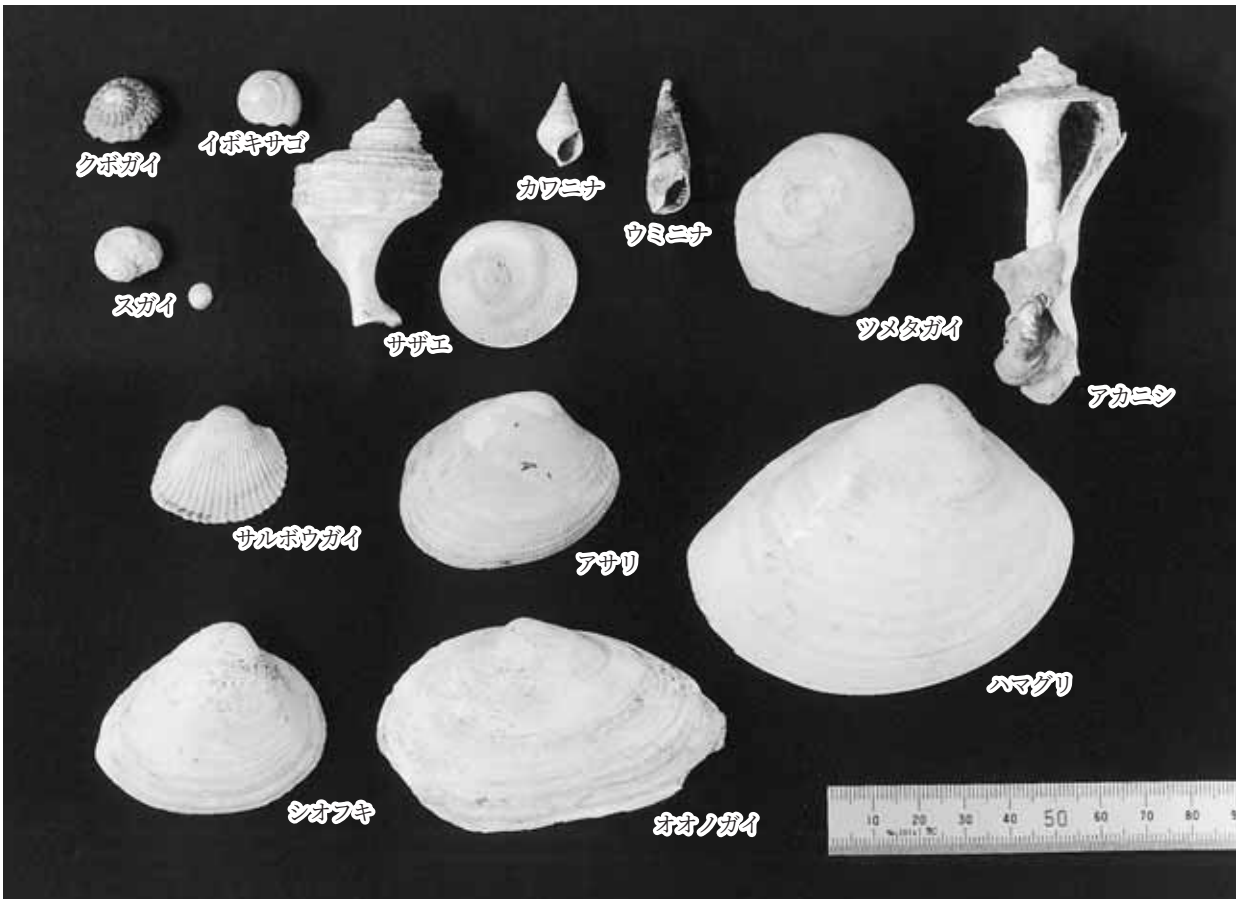
ホソオカチョウジ
（約６倍）

ハリマキビ
（約15倍）

ヒメベッコウ
（約12.5倍）

ヒメコハク
（約13倍）

ツボミ
（約5.9倍）



加茂遺跡 D 地点の竪穴住居跡出土炭化材樹種・407号遺構検出貝類

報 告 書 抄 録

ふ り が な	いちはらしかもいせきでぃーちてん
書 名	市原市加茂遺跡 D 地点
副 書 名	
巻 次	
シ リ ー ズ 名	財団法人市原市文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第82集
編 著 者 名	小橋健司
編 集 機 関	財団法人　市原市文化財センター
所 在 地	〒290－0011　千葉県市原市能満1489
発 行 年 月 日	2002年９月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
加茂遺跡 D 地点	千葉県市原市 西国分寺台２丁目７番地17号他	12219	297	35° 30′ 03″	140° 07′ 00″	確認調査 19990706 ～ 19990726 本調査 20000417 ～ 20010226	7220.96 ㎡	宅地開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
加茂遺跡 D 地点	集落	縄文中～後期	中期　土坑４基・炉２基 後期　埋設土器１	尖頭器２・縄文土器	開析谷を見下ろす立地に、弥生中期と古墳中期後半・後期の集落が確認された。また、南北方向に延びる古代の道路跡、平安時代の蔵骨器を伴う方形周溝墓も検出された。
		弥生中期	竪穴住居８棟	弥生土器・小型磨製石斧２	
		弥生後期	竪穴住居２棟	弥生土器	
		弥生終末期	竪穴住居１棟	タタキ成形甕	
		古墳中期	竪穴住居16棟	土師器・須恵器・土製品・石製品・滑石製品・鉄製品・鉄滓	
		古墳後期	竪穴住居14棟（他に不明２）・掘立柱建物１棟	土師器・須恵器・土製品・石製品・鉄製品	
		古墳～古代	掘立柱建物10棟		
		奈良	竪穴住居１棟	土師器・須恵器・鉄製品	
		平安	方形周溝墓１基・道路１条	ロクロ土師器・蔵骨器（土師器１・須恵器１）	
		中世	溝１条・道路１条・土坑	陶器・銭貨・カワラケ	

財団法人　市原市文化財センター調査報告書　第82集

市 原 市 加 茂 遺 跡 D 地 点

平成14年９月18日　印刷
平成14年９月25日　発行

編　集　　財団法人　市原市文化財センター
発　行　　旭硝子株式会社
　　財団法人　市原市文化財センター
　　〒290－0011　市原市能満1489
　　TEL　：0436－41－7300
　　e－mail：ihbc@hkg.odn.ne.jp

印　刷　　株式会社　ぎょうせい
　　東京都杉並区荻窪４丁目30番16号